

授 業 科 目 の 概 要			
(人文社会ビジネス科学学術院 人文社会科学研究群 博士前期課程)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学 院 共 通 科 目	生命・環境・研究倫理科目群 応用倫理	<p>Situational ethical principles such as research ethics for research laboratories and medical ethics for hospitals do not always correspond well each other in giving us a clear direction in pursuing the best quality of life in modern society. Rather than taking individual principles for granted, this course attempts to understand how we may disentangle somewhat conflicting ethical principles. In so doing, this course provides unique perspectives to ethical principles by incorporating cultural and historical contexts of human rights and environmental concerns.</p> <p>研究倫理や医療倫理など状況に特化した倫理原理は、必ずしも相互に補完する関係にないため、現代社会の中で最善の質を求めるための明確な指針とはなっていない。こうした絡まった倫理原理を解きほぐすことを試みる。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(223 松井健一/7回) Provides perspectives to ethical principles by incorporating cultural and historical contexts of human rights and environmental concerns. 文化や歴史的な文脈から人権や環境に関する問題も含め、応用倫理のための視点を醸成する。 (254 大神明/1回) Provides perspectives of industrial doctors and considers ethics related to risks. 産業医の視点からリスクに関わる倫理的な問題を提起する。</p>	集中 オムニバス方式
	環境倫理学概論	<p>Environmental ethics helps us not only think about interpersonal relations in society but also the ones between people and the natural environment. This expansive scope helps us see our daily activities, ethical or not, within ecosystems or biotic communities. This course invites students to think about a need to establish a universally applicable ethical principle/ law for global citizens to tackle with environmental problems. To answer this question, it introduces many environmental ethical ideas related to biodiversity, bioethics, animal rights/ welfare, and household activities.</p> <p>環境倫理は、社会における対人関係だけでなく、人と自然環境の関係について考える助けとなる。こうした広い視野を持つことで、我々は生態系の一部として日々の活動が倫理的かどうかを考えることができる。この授業では、学生に対し世界市民として、環境問題を解決するため、ユニバーサルな倫理大綱や法律を構築する必要性について考えてもらう。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(223 松井健一/7回) Introduces many environmental ethical ideas related to biodiversity, bioethics, animal rights/ welfare, and household activities. 生物多様性や生命倫理、動物の権利・福祉、生活者のための環境倫理を紹介する。 (200 渡邊和男/1回) Introduces ethical principles related to international environmental law. 国際法に関する環境倫理原理を紹介する。</p>	集中 オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	研究倫理	<p>研究活動に従事する上で踏まえるべき研究倫理の基礎を、具体的事例を交えて講義する。研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスなどを取り上げる。また、これらを理解するための前提となる、科学技術政策、研究助成のしくみ、申請や審査のしくみなどについても触れる。</p> <p>本科目は講義を主体としつつ、講義の間に演習（個別演習・グループ演習）を交互に挟む構成とする。講義においては、研究倫理と研究公正に関連する基本概念を整理すると共に、研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスに関わる問題などを取り上げる。また、これらを理解するための前提となる、学術研究活動を取りまく環境の変化や、科学研究費の申請や審査のしくみなどについても触れる。特に特定不正行為に関しては具体的事例を元にその原因や背景を解説し、受講者が研究活動を行う上で必要な対策について具体的に考える機会を与える。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（232 岡林浩嗣／9回）上記の講義を行う。演習においては、ワークシートを用いて自らの研究活動の構造を分析した上で、研究倫理上の問題点とその背景について討議する。さらに、研究不正を防止するために必要な施策について討議を行い、グループ単位での発表とその指導を行う。</p> <p>（255 大須賀壮／1回）理化学研究所における研究管理状況をふまえて、適切な実験ノートの取り方について講義を行う。また、演習の際に岡林と合同でグループ討議の指導を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 9時間 演習 6時間
	生命倫理学	<p>遺伝子治療、臓器移植、人工臓器、生殖医療、遺伝子診療、薬物やその他の治療法の治験などの現代の医療や医学研究には、インフォームドコンセント、個人の尊厳やプライバシー、脳死判定やリスクマネージメント、治療停止の選択など生命倫理にかかわる多くの問題を含んでいる。現代医療が抱える生命倫理諸問題の基礎知識、基本的考え方を習得するとともに、実例により学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式/全10回）</p> <p>（244 菅野幸子／1回）テーマとして「生命倫理とその歴史」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（226 柳久子／1回）テーマとして「予防医学における生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（215 西村健／1回）テーマとして「再生医学と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（206 川崎彰子／1回）テーマとして「生殖医療と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（178 杉山文博／1回）テーマとして「動物実験と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（257 木澤義之／1回）テーマとして「緩和医療と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（234 高橋一広／1回）テーマとして「臓器移植と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（260 宗田聡／1回）テーマとして「遺伝学と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（199 我妻ゆき子／1回）テーマとして「国際保健における生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（186 野口恵美子／1回）テーマとして「医学・医療の倫理」について取り上げ、講義を行う。</p>	オムニバス方式
	企業と技術者の倫理	<p>多くの技術者は企業に属し、その中で社会とビジネス的な関わりを持ちながら仕事を行っている。本講義では、具体的事例や現場の声を取り上げながら、企業における技術者の倫理について議論する。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（203 掛谷英紀／7回）技術の社会的役割の変遷について講義を行う。併せて、「東日本大震災と今後の防災・エネルギー」、「企業不正のグレーゾーン（Facebook、NHK受信料等）」の2つのグループ・ディスカッションを行い、21世紀の「人に役立つ技術」を考える。</p> <p>（264 西澤真理子／3回）実際の企業現場の事例を取り上げながら、「企業のリスクコミュニケーション」について講義を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 9時間 演習 6時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
情報伝達力・コミュニケーション力養成科目群	テクニカルコミュニケーション	事実やデータに基づいて行われる情報発信であるテクニカルコミュニケーションを円滑に行うための基本を、講義と演習で修得する。講義では、発信する内容を組み立てるための発想法の活用法、誰にでも一通りに伝えるための文法、レイアウトデザインの基礎理論、文字と絵の役割の違いなどをあつかう。さらに、語彙を豊富にするための演習、物事を数多くの視点から説明するための演習、専門用語に頼らずに内容の本質を伝える演習などを通して、テクニカルコミュニケーションを実践的に学ぶ。	集中 講義10時間 演習 5時間
	英語発表	This course provides an overview of basic techniques for public speaking and presentations in English. Students are then given ample opportunity to practice these techniques in front of the class. 本講義ではコミュニケーションの基礎理論、英語でのパブリック・スピーキング、プレゼンテーションの技術の修得を目標とする。また、学んだ理論・技術を応用活用する経験として、実際に聴衆を前にしたプレゼンテーションをおこなう。	集中 講義10時間 演習 5時間
	異分野コミュニケーションのためのプレゼンテーションバトル	プレゼンテーションの初歩から中級までを対象とし、異分野学生それぞれによるプレゼンテーションをベースに現代に必要なアカデミックスキルを磨くことを目的とする。参加者が異分野の学生との協働によってアイデアを出し合い、新しいコンテンツの作成に向かって協働することで、異なる領域の知識や技術を互いに理解しコミュニケーション能力を高める。演習トラック毎によって設定する目標を決め、それに従ってコンテンツを実際に作成する。時にドラマレッスンを盛り込む。	集中
	Global Communication Skills Training	Precise communication with people having diverse perspectives and personalities is the key to building relationships, and success. Through practices of communication, including effective listening, effective presentation, assertive communication, we help you learn and practice communication methods. You should be prepared to have open and active class participation and require a certain level of English skill. 対面でのコミュニケーションのスタイルには、人それぞれに個性があります。どのようなコミュニケーションスタイルを持つ相手とも正確に情報を伝達しあうことが、信頼を得て成功するための鍵になります。この授業では、情報を効率よく受け取ったり、正確に話すための練習を通して、コミュニケーション力を高めます。受講するためには、ある程度の英語力が必要です。また、受身ではなく発言や議論を通して積極的に授業に参加することが求められます。	集中 講義 7時間 演習 8時間
	サイエンスコミュニケーション概論	サイエンスコミュニケーション (SC) とは「難しく敬遠されがちなサイエンスをわかりやすく説明することである」という理解はきわめて一面的である。SCの対象は科学技術分野の専門家、非専門家を問わないため、「サイエンスの専門家と非専門家との対話促進」がSCであるとも言いきれない。広い意味でのSCとは、個人ひいては社会全体が、サイエンスを活用することで豊かな生活を送るための知恵、関心、意欲、意見、理解、楽しみを身につけ、サイエンスリテラシーを高め合うことに寄与するコミュニケーションである。そのために必要なこと、理念、スキルなどについて概観する。	集中
	サイエンスコミュニケーション特論	現代社会は科学技術の恩恵なくして成り立たない。科学技術はわれわれの生活に深く根ざしており、よりよい社会を築いていくためには一人でも多くの人々が科学技術との付き合い方に関心を向けることで、社会全体として科学技術をうまく活用していく必要がある。そのためには様々な立場から科学技術についてのコミュニケーションをし合うことで科学技術を身近な文化として定着させ、社会全体の意識を高める必要がある。このような問題意識から登場したのがサイエンスコミュニケーションという理念である。この理念が登場した背景を知ると同時に、方法論としてはどのようなものがあるのかを議論しつつ、コミュニケーションスキルの向上も目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	サイエンスコミュニケーター養成実践講座	<p>主として、自分の専門の科学を一般の人々にわかりやすく伝えられるコミュニケーション能力の養成を中心に、国立科学博物館の資源や環境を活用した理論と実践を組み合わせた対話型学習を進める。</p> <p>理論面では、サイエンスコミュニケーションとは？サイエンスとは？といった考え方をはじめ、メディア・研究機関・大学・博物館など、各機関・領域で活躍しているサイエンスコミュニケーターの実践を踏まえた理論を学習する。また、様々な人々に科学を伝える際に効果的なプレゼンテーションの方法について学修する。</p> <p>実践面では、ライティングに関する課題を通じた文章の書き方や表現方法の学習、国立科学博物館の展示室における来館者との双方向的な対話を目指し、自らの専門分野についてのトークを作成・改善・実施・考察する。</p>	集中
	人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える	<p>哲学、歴史、文学、言語学、社会科学、地域研究などの人文社会分野における学術研究の成果をどのように社会に伝え、人々の知的好奇心を呼び起こし、当該学問分野の社会的認知度を如何に向上させるか、その考え方、方法、それらを担う人材に求められる必要なスキルなどについて学ぶ機会を提供する。人文社会分野における「学問と社会を結ぶ」ためのスキルを磨くための内容を含む。加えて、現在発展が著しい人文社会分野における最先端機器を駆使して行う研究は多くの学術的成果を生み出しており、その魅力は計り知れない。このような最先端研究に基づく解析法は自然科学分野の最先端技術を活用したものでもあり、ここに人文社会科学と自然科学の接点があり、分野融合の意義、有用性、重要性を含めた科学の現状を多くの大学院生に紹介するための科目とする意図も企画者側にある。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(7 池田潤／4回) 「文芸・言語学、世界と地域の文化・歴史、世界と地域の社会科学に関する人文社会科学知見に関して、自然科学と最先端科学技術を駆使する成果がどのように活かされているかについて、その相関を俯瞰しつつ解説し、人文社会科学と自然科学・工学的技術の融合の重要性」について講義を行うことで人文社会科学における自然科学基礎的・応用的知的基盤の重要性について学習する。</p> <p>(161 大澤 良／4回) 「生物多様性、生物の地理的拡散、有用植物や作物の地理的分布などに関する自然科学的研究成果をベースに、それらが人間及び人間の生活とどのようなかかわりを有してきたかなどの人文社会科学知見を加えて分析し、自然科学と人文社会科学の要素がどのように融合・連関をなしているか、その相関を俯瞰しつつ解説し、自然科学と人文社会科学の融合の重要性」について講義を行うことで自然科学の視点から自然科学の基礎的・応用的知的基盤がいかに人文社会科学に重要な役割を果たしているかについて学習する。</p> <p>(259 白岩善博／2回) 「自然科学研究の成果を基盤に、最先端研究成果を如何に社会に広報、拡散、応用するかなどに関して、サイエンスコミュニケーションやトランスフェラブルスキルを駆使して、自然科学的研究成果が人間及び人間の生活とどのようなかかわりを有してきたかを解説し、自然科学の科学的・技術的成果をどのように社会に導入するかの方法論」について講義を行い、さらにそのスキルアップをどう図るかを学ばせることで、大学院修了後のキャリアパスにそれをどう生かすかに関して学習する。</p>	集中 オムニバス方式
国際性養成科目群	21世紀的中国 ―現代中国的多相―	<p>巨大な隣国である中国は、1976年の文化大革命の終結以降、経済の改革開放政策の成果により、大きな変貌をとげた。21世紀初頭の今、ますます存在感を増した中華人民共和国の現在の諸相を、学生にとって身近な目線で講じる。中国と日本の関わりを実際の動きの中で捉えていくことを目論む。</p> <p>現在中国との関わりの深い筑波大学OBを講師とし、現代中国の文化、社会、経済、環境、日中翻訳など、様々な観点から、現場に立つ講師ならではの姿を描き出す。既成の学問の枠で説明されたものを理解して満足するのではなく、実社会の動きの中で課題を捉え、みずから解決していくために何が必要か、講義中から受講者自身で考えだすことを望みたい。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際研究プロジェクト	<p>学生自らが海外の大学・研究機関における専門および関連分野の研究計画を企画し実現することで、自身の能力涵養を図る科目である。海外における受け入れ先の開拓、海外渡航の手続き、海外での研究・実習、受入先でのコミュニケーション、海外での生活等を経験することで、英語によるコミュニケーション能力・国際性・研究マネジメント能力の向上を実現する。学習成果をより効果的なものとするため、海外において研究活動を行うだけでなく、実施計画書を基にした事前指導及び帰国後の成果報告書の作成とフィードバックを受けることを必要とする。</p>	
	国際インターンシップ	<p>学生自らが国際的な職業体験（海外の大学におけるPFF体験を含む）や海外の大学・研究機関で主催される各種トレーニングコースを開拓し参加することで、自身の能力涵養を図る科目である。海外における受入先との調整、海外渡航の手続き、海外での職業体験、受入先でのコミュニケーション、海外生活経験を通して、コミュニケーション能力、国際性、キャリアマネジメント能力の向上を実現する。学習成果をより効果的なものとするため、海外において研究活動を行うだけでなく、実施計画書を基にした事前指導及び帰国後の成果報告書の作成とフィードバックを受けることを必要とする。</p>	
	地球規模課題と国際社会:食料問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」の中でGoal 2 & 12に関連した、国際社会が直面する「食料問題」について取り扱う。世界の人口動態と食料生産・消費動向、植物育種新技術、食料生産新技術、植物防除新技術などについての講義を通して国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会:海洋環境変動と生命	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 13 & 14に関連した、国際社会が直面する「海洋環境変動と生命」について取り扱う。CO2濃度上昇に関わる地球規模環境課題、海洋酸性化、地球温暖化による生物影響、北極・南極の海氷融解などの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（159 稲葉一男／5回）「海洋生物、特に海洋動物に関する形態学、生理学、生化学、分子生物学的手法を駆使した最先端の科学的知見を基盤に、地球規模かつローカルな海洋環境の変化を海洋動物がどのような仕組みで感知するか、さらにその環境変化によってどのような生物学的変化を引き起こすか」について講義を行うことで地球規模の海洋環境変動が生命に与える影響について学習する。</p> <p>（259 白岩善博／5回）「海洋生物、特に海洋植物・藻類の光合成生物や光合成機能を有する微生物に関する形態学、生理学、生化学、分子生物学的手法を駆使した最先端の科学的知見を基盤に、地球規模かつローカルな海洋環境の変化を海洋動物がどのような仕組みで感知するか、さらにその環境変化によってどのような生物学的変化を引き起こすか」について講義を行うことで地球規模の海洋環境変動が生命に与える影響について学習する。</p>	集中 オムニバス方式
	地球規模課題と国際社会:社会脳	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」の中で、主として、Goal 3 & 4に関連するが、社会性や共生という観点から現代に生きる人類に共通する課題とそれに対する取り組みの方向性を提起する先端的な講義を展開する。</p> <p>国際社会が直面する「社会性の変容」に起因する様々な問題を「社会脳」として新たな分野を創成しそれを取り扱う。</p> <p>個別課題として、社会性の発達と環境、社会認知の脳内基盤、高齢者の認知機能などについて講義する。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地球規模課題と国際社会：感染症・保健医療問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 3に関連した、国際社会が直面する「感染症・保健医療問題」について取り扱う。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(246 福重瑞徳/全5回) 「持続可能な開発目標（SDGs）」、「感染症」、「プロジェクト・サイクル・マネージメント（PCM）手法」をテーマに講義を行い、また、学生はPCMを用いた国際保健に関するプロジェクト形成・発表を行う。</p> <p>(199 我妻ゆき子/全3回) 「国際保健とその歴史」、「人口・リプロダクティブヘルス・栄養」、「慢性疾患とリスク」をテーマに講義を行う。</p> <p>(172 近藤正英/全2回) 「途上国における保健医療問題と優先付け」、「途上国における保健医療制度・医療経済」をテーマに講義を行う。</p>	集中 オムニバス方式
	地球規模課題と国際社会：社会問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」を地域自立と振興の観点から全て網羅する課題である「社会問題」について取り扱う。</p> <p>発展と持続性に関し、天然資源、環境保全、及び経済発展を軸として、国家としてのガバナンス、国家間の懸案事項、ボーダーレス社会での“歪み”、非政府組織や先住民族の存在によるグラスルートでの課題対応をグローバルに概論する。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会：環境汚染と健康影響	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 3に関連した、国際社会が直面する「環境汚染と健康影響」について取り扱う。</p> <p>国際的汚染問題の概要、ナノ粒子、外因性内分泌攪乱化学物質、環境中親電子物質、エクスポソーム、カドミウム、ヒ素、有機ハロゲン化合物、メチル水銀、トリブチルスズなどの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会：環境・エネルギー	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 7, 9 & 13に関連した、国際社会が直面する「環境・エネルギー」について取り扱う。</p> <p>太陽電池、燃料電池、人工光合成、ナノエレクトロニクスによる省エネルギー、パワーエレクトロニクスによる電力制御、核融合発電などの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
キャリア ア マ ネ ジ メ ン ト 科 目 群	JAPICアドバンストディスカッションコースI-流動化する世界とこれからの日本	<p>最新の社会問題、国際問題、ビジネス上の課題を対象に議論を行うため、産業界のトップリーダーを講師として招聘する。</p> <p>世界が益々流動化する中で日本の現状と課題を再確認すると共に、今後の変化に対応する為になにが必要か検証・議論することで、社会人基礎力として重要なさまざまな能力を身に付けることを目的とする。</p> <p>事前学習を通じて情報収集力を、授業時間中の議論を通じてディベート力を、レポート作成を通じてまとめる能力を身につける。</p>	集中
	JAPICアドバンストディスカッションコースIII-テクノロジーとグローバルで拓く未来	<p>最新の社会問題、国際問題、ビジネス上の課題を対象に議論を行うため、産業界のトップリーダーを講師として招聘する。</p> <p>グローバルとテクノロジーについて、実ビジネスの観点から議論し学習することで、社会人基礎力として重要なさまざまな能力を身に付けることを目的とする。</p> <p>事前学習を通じて情報収集力を、授業時間中の議論を通じてディベート力を、レポート作成を通じてまとめる能力を身につける。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ダイバーシティとSOGI/LGBT+	<p>産業化、技術革新、国際化による変化にともない、人々の生活や働き方、人間関係にもさまざまな変化が生まれています。本科目では、さまざまな属性や特徴を有する個人がどのように「仕事と生活の両立（ワークライフバランス）」を図りながら人生を生きるのか、なぜ男女共同参画やダイバーシティ（多様性）を推進する必要があるのか、その方法と意味を理解することを目指します。特に近年のダイバーシティ推進の重要なトピックである「SOGI」「LGBT+」に代表されるセクシュアル・マイノリティについて集中的に授業を行います。</p> <p>くわえて、授業ではダイバーシティ推進に欠かせない実践力（グループワークにより聴く力、伝える力、情報収集力、マネジメント力等）を身につけることも目標とします。</p>	集中 講義7.5時間 演習7.5時間
	ワークライフミックス – モーハウスに学ぶパラダイムシフト	<p>仕事と私生活を調和した新たなビジネススタイルである、「ワークライフミックス」を講義の基本テーマとして取り上げることで、新たな価値創造の基礎となるアントレプレナーシップや、多面的思考からワークライフを捉え、受講者のキャリアマネジメント能力の向上を図る。</p> <p>また、「ワークライフミックス」を実践している企業である「モーハウス」を事例として取り上げることで、ワークライフに関わる物の見方と考え方を習得し、受講生が自分の仕事や今後のライフプランについて、多様な角度から思考できるようにする。</p>	集中
	魅力ある理科教員になるための生物・地学実験	<p>気象、地質、岩石、昆虫、植物、菌、微生物、内燃機関といった、「生物」と「地学」を合体した内容をフィールドワーク重視の実習形式で実施することにより、受講者が将来理科教員になった場合に役立つ実践的な実習・実験の高度専門知識を身につけることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全6回)</p> <p>(201 上松佐知子/1回) フィールドでの化石探索を通し、地球の歴史に関する実習を行う。 (182 田島淳史/1回) 「食べものを作る動物たち」をテーマに実習を行う。 (216 野口良造/1回) 「内燃機関の原理と組み立て」をテーマに実習を行う。 (166 戒能洋一・47 澤村京一・51 中山剛・236 八畑謙介/1回) (共同) 「生物に関するフィールドワーク」をテーマに実習を行う。 (192 久田健一郎/1回) 「地質調査入門」をテーマに実習を行う。 (197 山岡裕一/1回) 「微生物（菌類）に関するフィールドワーク」をテーマに実習を行う。</p>	集中 オムニバス方式 共同（一部）
	アクセシビリティリーダー特論	<p>障害のある人々が包摂された社会を実現するために、身体障害や発達障害といった様々な障害の理解や支援に関する幅広い講義を行う。また、障害のある人への災害時支援や、障害のある人に役立つ支援技術、諸外国と日本における支援の比較や展開といったマクロな視点や今日的な話題を通して、多様な背景をもつ人々が共生することのできる社会とはどのような社会なのかについて考える力を身につけることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(180 竹田一則/1回) 「障害児・者支援の理念と背景」について講義を行うことで、障害者支援の現状や歴史的背景、今日的課題について学習する。 (245 野口代/2回) 「障害児・者の現状および支援の流れ、支援体制」について講義を行うことで、支援領域（就学、生活、就職ほか）ごとの支援方法や支援体制について学ぶ。 (208 小林秀之/3回) 「視覚障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、視覚障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (191 原島恒夫/4回) 「聴覚障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、聴覚障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (235 名川勝/5回) 「運動・内部障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、運動・内部障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (202 岡崎慎治/6回) 「発達障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、発達障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。</p>	オムニバス方式 共同（一部）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(245 野口代/7回) 「障害のある人への災害時支援」について講義を行うことで、障害種別に災害時に留意すべき事項について学習する。</p> <p>(210 佐々木銀河/8回) 「障害のある人に役立つ支援技術」について講義を行うことで、最新の支援機器や支援技術について学習する。</p> <p>(210 佐々木銀河/9回) 「諸外国と日本における支援の比較と展開」について講義を行うことで、国際的な動向を踏まえた障害者のある人へのアクセシビリティについて学習する。</p> <p>(180 竹田一則・189 野呂文行/10回) (共同) 講義のまとめと討論を行うことで、これまでに学んだ障害の特性や、障害のある人のアクセシビリティを支援するための知識を表現できるようにする。</p>	
	脳の多様性とセルフマネジメント	<p>本学大学院生が産業界や地域社会で自身の能力を十分に発揮できるよう、自己および他者における脳の多様性を適切に理解することを通して、自身の特性に合ったセルフマネジメントスキルを身に付けることを目標とする。</p> <p>講義としては、発達障害から定型発達との連続体として捉えられる「脳の多様性(ニューロダイバーシティ)」について概説する。加えて学業や日常生活において有効なセルフマネジメントテクニック・ツールを紹介する。</p> <p>演習としては、自身にはどのような特性があるかを客観視する個人ワークを行う。また自身の特性に合ったマネジメント方法を身に付ける。さらに社会で活躍する発達障害当事者をゲストスピーカーとして招き、自己および他者における脳の多様性を深く理解するための事例を提供する。</p>	集中 講義 9時間 演習 6時間
知的基盤形成科目群	生物多様性と地球環境	<p>本科目では、筑波大学と科学博物館筑波植物園のコラボレーションにより、生物多様性と地球環境についての理解を促進するための講義と展示・フィールドを利用した現場型の生物多様性・地球環境教育についてのフィールド実習を行う。</p> <p>有用植物の進化を実物で見ながら、植物の進化とは異なる人間の手が加わった栽培化シンドロームを実感してもらうことで、生物多様性の実体と生物遺伝資源について、自然科学的・社会的にとらえられるようにすることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全4回)</p> <p>(161 大澤 良/1回) 「栽培植物の起源」についての講義と植物園見学を行うことで、多様性研究の意味について学習する。</p> <p>(253 海老原淳/1回) 「生物多様性ホットスポットとしての日本列島」をテーマとする講義と絶滅危惧であるシダ植物園見学・管理実習を行う。</p> <p>(258 國府方吾郎/1回) 「絶滅危惧植物と生物多様性」をテーマに植物園における社会発信と保全の見学、植物登録管理の実習を行う。</p> <p>(190 林久喜/1回) 「作物の多様性」をテーマに講義と実習を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 7.5時間 実習 15時間
	内部共生と生物進化	<p>非常に多くの生物が、恒常的もしくは半恒常的に他の生物(ほとんどの場合は微生物)を体内にすまわせている。</p> <p>このような「内部共生」という現象から、しばしば新しい生物機能が創出される。共生微生物と宿主生物がほとんど一体化して、あたかも一つの生物のような複合体を構築する場合も少なくない。</p> <p>共生関係からどのような新しい生物機能や現象があらわれるのか? 共生することにより、いかにして異なる生物のゲノムや機能が統合されて一つの生命システムを構築するまでに至るのか? 共に生きることの意義と代償はどのようなものなのか? 個と個、自己と非自己が融け合うときになにが起こるのか? 共生と生物進化の関わりについて、その多様性、相互作用の本質、生物学的意義、進化過程など、基本的な概念から最新の知見にいたるまでを概観することで、そのおもしろさと重要性についての認識を共有することをめざす。</p>	集中
	海洋生物の世界と海洋環境講座	<p>海は地球上の生命の源であり、生物の多様性を生みだしてきた。地球と我々人間を理解するためには、海洋生物に関する知識が不可欠である。</p> <p>本科目では魚類をはじめ、さまざまな海洋生物の体制、生殖、寄生種に関する観察や実験、講義を行うことにより、海洋生物の多様性および海洋環境についての理解を深めることを目的とする。</p> <p>下田臨海実験センターにて実施することで、研究調査船による採集や磯採集など野外でのより実践的な実習も行う。</p>	集中 講義 4.5時間 実習 21時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	科学的発見と創造性	科学的発見がおこなわれる現場の歴史的状況を再現し、行為者の創造性がどのような形で発揮されたのか、「ハンソンの理論的負荷性」、「ニュートンの林檎と万有引力の理論」、「ゼメルヴェイスによる産褥熱の予防」、「ジョン・ドルトンと化学的原子論」等様々な事例研究を通じて解明する。 科学的発見が単なる偶然でも、幸運でもなく、周到に企図された創造性によるものであることを理解することを目的とする。	集中
	自然災害にどう向き合うか	国土交通省で活躍する有識者を講師として招聘し、災害列島とも言われる我が国の現状及び温暖化等により今後益々増加する災害リスクに対して、社会としてどのように対応するべきかを考える。 「総合的な津波対策」、「大規模土砂災害への対応」、「地震対策」等のテーマを通じて、防災施設の整備の状況、リスク等を踏まえた今後の社会資本整備のあり方について考え方が整理されること、個人や地域の核としての防災対応力を身につけることを目的とする。	
	「考える」動物としての人間-東西哲学からの考察	「考える」のは人間の特性である。人間は言葉を使って知性によって「考える」。だが「考える」とはどのような営為なのか、東西の哲学がどのように「考え」てきたのかを参照しながら「考える」ことについて「考える」。 (オムニバス方式/全10回) (64 吉水千鶴子/2回) 仏教の思想を参照して「考える」ことについて考える。 (6 井川義次/2回) 中国の思想を参照して「考える」ことについて考える。 (138 千葉建/2回) ドイツ哲学思想を参照して「考える」ことについて考える。 (101 津崎良典/2回) フランス哲学思想を参照して「考える」ことについて考える。 (88 志田泰盛/2回) インド思想を紹介しながら「考える」ことについて考える。	集中 オムニバス方式
	21世紀と宗教	21世紀の現代社会の情勢は宗教と深く関わっており、複雑な国際情勢、テロなどの暴力と対峙せねばならない現代社会において、それを解く鍵ともなる宗教について正しい知識と理解を得ることは重要である。 当科目では、21世紀の現代社会の情勢と宗教とのかかわりについて、いくつかの事例を取り上げながら考察する。 宗教による対立や政治への介入は紀元前の昔から続いてきた人類の課題とも言え、その歴史や背景を正しく知り、現在のグローバルな社会において正しく対応するための知識と理解を身につけることを目的とする。 (オムニバス方式/全10回) (22 木村武史/5回) 「先住民族の宗教の関り」について講義を行うことで現代グローバル社会における先住民族宗教の意義について学習する。 (64 吉水千鶴子/5回) 「アジアの民族と宗教の関り」について講義を行うことで現代グローバル社会における伝統宗教の意義について学習する。	集中 オムニバス方式
身心基盤形成科目群	塑造実習	当科目は豊かな心、逞しい精神、豊かな人間力を涵養する大学院生のための塑造の実践講座である。作品鑑賞と、人物モデルを使用した粘土による頭像制作を行う。「デッサン」、「心棒組み」、「大掴みな土付け」、「量塊の構成」、「面と量塊」、「量感豊かな表現、比例・均衡・動勢について」といった制作に関する内容の学習を通して、立体的な形態把握と、これを表現する能力を養うことを目的とする。	隔年
	コミュニケーションアート&デザインA	授業の到達目標及びテーマ：現代アート全般、ビジュアルデザイン全般、陶磁、木工、構成学について概説し各諸分野の位置付けを明らかにする。 (オムニバス方式/全10回) (239 上浦佑太/1回) (1) ガイダンス (170 國安孝昌/2回) (2) 総合造形の研究、(3) 総合造形の教育 (209 齋藤敏寿/1回) (4) 現代の実材主義的な造形	隔年 オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(183 田中佐代子/1回) (5) ビジュアル・コミュニケーション・デザイン (218 原忠信/1回) (6) ブランディングデザイン (225 宮原克人/1回) (7) 木工・漆芸 (238 小野裕子/1回) (8) 特殊造形、環境とアート (247 Gary Roderick MCLEOD/1回) (9) 写真 (239 上浦佑太/1回) (10) 構成学	
	コミュニケーションアート&デザインB	授業の到達目標及びテーマ：環境デザイン全般、ガラス工芸、メディアアート、絵本や漫画について概説し各諸分野の位置付けを明らかにする。 (オムニバス方式/全10回) (250 山本美希) (1) ガイダンス (187 野中勝利/1回) (2) 市民参加によるまちづくり (194 藤田直子/1回) (3) ランドスケープデザイン (228 渡和由/2回) (4) サイトプランニング、(5) 住環境の総合的デザイン (217 橋本剛/2回) (6) 快適な環境、(7) 伝統民家のデザイン (243 鄭然ギョン/1回) (8) ガラス (249 村上史明/1回) (9) メディアアート、テクノロジーと芸術 (250 山本美希/1回) (10) 絵本、マンガ、イラストレーション	隔年 オムニバス方式
	日本画実習	日本の芸術を理解し、生涯において楽しむことのできる豊かな人間性を涵養することを目的とする授業。日本画用の筆・和紙・絵具を用いた作品制作を通して、長い歴史に育まれた日本画への理解を深め、豊かなところを養う。必要に応じて、日本画の鑑賞について、材料や技法についての講義も織り交ぜる。グローバル化の中においては、世界を意識すると同時に日本の芸術文化に改めて注目し理解することが必要で、当科目はそのきっかけとなる。	隔年
	ヨーガコース	当科目は「ヨーガ行法の体系、歴史、思想（ヨーガの日本文化への貢献）」、「ヨーガの効果」、「社会的意義（環境思想への影響、自然科学思想への貢献）」といったヨーガ思想と技法の講義、「予備体操」、「アーサナ」、「呼吸法」、「冥想」の実習を行うことで、インドが生み出したヨーガを通じて、深く自己を掘り下げる東洋の実践的な身心思想を学び実践する。 健康でかつ不安や絶望に対処できる柔軟な身心と強い意志をもって、よりよい人生を築ける自己を養うことを目的とする。	集中 講義10時間 実習20時間
	絵画実習A	全人的な教養教育として、知識のみならず、自分自身の「手仕事」として「絵を描く」という体験は、作る楽しさや喜びを感じつつ、まさに芸術的感性を磨くことが可能である。 当科目は、芸術を楽しむ豊かな人間性を涵養するため、特に油絵具を使用し、制作・実習をおこなうものである。 様々なモチーフの写生などを通して、絵画表現に対する理解を深め、造形感覚を養うことも目的とする。	隔年
	現代アート入門	なぜこれが芸術なのか、現代アートは一見、普通の生活者に無縁のように感じられることが多い。しかし、難しい現代アートも勉強をすれば、誰にでもわかるものなのだ。そうした基礎的芸術教養を身に付ければ、「無用の用」である芸術は、一人ひとりの人生を豊かにしてくれるものになる。 この授業では、現代アートについて、作家としての体験的視点から、多くのヴィジュアル資料を見せながら、現代芸術の考え方（コンセプト）や大きな流れ（芸術運動史や主要な芸術家や作品）を知り芸術への理解を深めることを目的とする。対象は19世紀末から21世紀の現在までとする。	隔年
	大学院体育Ia	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレー、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	大学院体育Ib	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Ic	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIa	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIb	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIc	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIa	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	大学院体育IVa	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IVb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IVc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Va	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Vb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Vc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学術院共通専門基盤科目	法文献学	<p>本講義では、法令・判例・文献のリサーチ方法およびリサーチに必要な基本的な知識を正確に身に付けることができるよう、各ツールを比較・評価しながら例題を混ぜて講義する。リサーチのほか、先行研究の引用作法についても解説する。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(164 岡本裕樹・207 小林和子/1回 民法) (共同) 民法の体系書や教科書を紹介し、判例などの文献のリサーチ方法を講義する。 (195 本田光宏/1回 税法) 租税法の学習に必要な法令、判例、文献等に関する基本的なリサーチ方法等について講義を行う。 (241 川村藍/1回 イスラム金融・経済法) イスラム金融の概説および経済法の学習に必要な基本的文献をもとに、文献研究に必要なリサーチ方法について講義する。 (163 大淵真喜子・221 藤澤尚江/1回 民事訴訟法・国際私法) (共同) 民事訴訟法のほか民事執行法、民事保全法、破産法・民事再生法等の概要について講義するとともに、基本的文献の説明や各法律に関する論点のリサーチ方法を講義する。国際私法の概要について解説し、基本的な文献を紹介するとともに、必要リサーチ方法について講義する。 (167 川田琢之・229 渡邊絹子/1回 社会保障法・労働法) (共同) 社会保障法及び労働法のそれぞれにつき、当該法分野の概要、本プログラムにおける当該分野の開設科目、当該法分野における代表的参考文献や文献調査を行う際の留意点等を講義形式で説明す (177 潮海久雄・193 平嶋竜太/1回 知的財産法) (共同) 主に判例分析や立法趣旨にさかのぼる研究手法を主に用いて、学生の関心のある研究課題について、研究指導を行う。 (196 弥永真生/3回 リーガルリサーチの基礎) 日本法の法令・判例・文献のリサーチ方法およびリサーチに必要な基本的な知識を紹介する。とりわけ、各種データベース、判例集の特徴と利用方法、レポート及び論文に必要な注の付し方、国会議事録など立法の経緯の検索方法などを取り上げる。 (196 弥永真生・168 木村真生子/1回 商法) (共同) 商法各分野の体系書や教科書を紹介し、商法特有の判例集・雑誌などの文献のリサーチ方法を紹介する。</p>	オムニバス方式 共同 (一部)
	ビジネス法入門	<p>ビジネスをはじめとした多様な社会現象から解決されるべき法的課題を発見・設定して、自らの視点で研究を遂行する基礎となる、法的専門知識と思考方法の基本及び研究作法を体得する。</p> <p>(オムニバス方式/全6回 各回1.7コマ)</p> <p>(163 大淵真喜子/1回 民事手続法) 民事手続法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (164 岡本裕樹/1回 民法) 民法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (177 潮海久雄/1回 知的財産法) 知的財産法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (193 平嶋竜太/1回 知的財産法) 知的財産法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (207 小林和子/1回 民法) 民法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (221 藤澤尚江/1回 国際私法) 国際私法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。</p>	オムニバス方式
	トップレクチャーⅠ	<p>民間企業、教育・研究機関、官公庁、国際機関等のトップ・マネジャーを講師に迎えて、現実の企業や社会システムにおける諸問題の解決方法やトップマネジメント戦略の構築並びに実践方法などについての講義を行う。</p> <p>他授業や研究活動において修得した学術的な知識や知見と、本講義で提示されるトップ・マネジャーの現場からの知識や経験を高度に融合させることで、自らの多角的な思考能力や問題発見・解決能力を涵養することが期待される。</p>	隔年, 集中
	トップレクチャーⅡ	<p>トップレクチャーⅠに続いて、民間企業、教育・研究機関、官公庁、国際機関等のトップ・マネジャーを講師に迎えて、現実の企業や社会システムにおける諸問題の解決方法やトップマネジメント戦略の構築並びに実践方法などについての講義を行う。</p> <p>他授業や研究活動において修得した学術的な知識や知見と、本講義で提示されるトップ・マネジャーの現場からの知識や経験を高度に融合させることで、自らの多角的な思考能力や問題発見・解決能力を涵養することが期待される。</p>	隔年, 集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	哲学プラクティスA	ワールドカフェやオープン・スペース・テクノロジー（OST）などの手法を用いつつ、毎回、現代社会のさまざまな問題や各人が抱えている実存的な問題などをテーマにして、哲学カフェの形式で哲学的な対話を実践する。これを通して、哲学カフェの作り方やファシリテーションの方法の基礎を学び、自らそれを実践する力を身につけるとともに、開かれた態度で他者の話を聞く態度、自らの考えのもつ限界や偏見に気づき、他者との対話を通して考えを深めていく態度といった哲学の実践にとって本質的な姿勢を身につけるよう努める。特にこのAの授業では、心を開き、自ら率直に語り、他者の言葉を謙虚に聞く、対話の基本的態度を身につけるよう努める。	
	哲学プラクティスB	ワールドカフェやオープン・スペース・テクノロジー（OST）などの手法を用いつつ、毎回、現代社会のさまざまな問題や各人が抱えている実存的な問題などをテーマにして、哲学カフェの形式で哲学的な対話を実践する。これを通して、哲学カフェの作り方やファシリテーションの方法の基礎を学び、自らそれを実践する力を身につけるとともに、開かれた態度で他者の話を聞く態度、自らの考えのもつ限界や偏見に気づき、他者との対話を通して考えを深めていく態度といった哲学の実践にとって本質的な姿勢を身につけるよう努める。特にこのBの授業では、実際の哲学カフェにおいてファシリテーターを務め、対話をリードする経験を積む。	
	言語対照論	多様性と普遍性の観点から言語を対照することによって、言語間の違い、個別言語の深層を探る手法を考える。 (オムニバス方式/全10回) (15 大矢俊明/5回) ヨーロッパの言語の対照に関わる問題を概観する。 (85 佐々木勲人/5回) 日本語、アジアの言語の対照に関わる問題を概観する。	隔年 オムニバス方式
	言語資料論	史料、コーパスなどの言語資料について学ぶことによって、それらによって実証的な研究を行う手法を考える。 (オムニバス方式/全10回) (14 大倉浩/5回) 日本語古典史料には、どのようなものがあり、それぞれどのような性格を有し、どのような研究が行えるのか概観する。 (25 杉本武/5回) 日本語や英語のコーパスには、どのようなものがあり、それぞれどのような性格を有し、どのような研究が行えるのか概観する。	隔年 オムニバス方式
	文献資料学	文学作品を研究するさいの基礎となる文献資料の扱い方について講義を行う。 (オムニバス方式/全10回) (4 秋山学/3回) 第1回：西洋古典文献の伝承史と関連事項について講義を行う。第2回：聖書原典の西洋語への翻訳伝承について講義を行う。第3回：仏教関係原典の漢訳による伝承について講義を行う。(79 稀代麻也子/2回) 中国古典作品通読の基本となる総集と別集について講義を行う。 (24 佐野隆弥/3回) シェイクスピア戯曲の印刷版本について講義を行う。 (111 馬場美佳/1回) 日本近代文学と出版の関係について講義す (133 吉森佳奈子/1回) 日本文学史の教養の基盤について講義を行う。	オムニバス方式
	比較文学	地域や言語を横断するかたちで文学研究をおこなうための方法について学ぶ。 (オムニバス形式/全10回) (2 青柳悦子/3回) 環地中海地域を中心に異文化交流と文学の発展について多角的に論じるとともに、物語叙述法の言語間比較についても講義する。 (21 加藤百合/3回) 翻訳研究が比較文学のひとつの柱である所以を考察しつつ、ロシア文学を中心として明治期以降の西欧文学の翻訳/受容について講義する。 (54 増尾弘美/2回) フランスの作家（ゴンクール兄弟、ピエール・ロチ、ブルースト等）が作品中で日本文化をどのように扱っているかについて講義する。 (32 谷口孝介/2回) 日本文学における中国文学の受容の様相をたどったうえで、中日の文学の異同について講義を行う。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	表象文化論	<p>文学作品のみならず広く文化事象をテキストとして解析する方法について講義を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(75 小川美登里/3回) ときにはテキストの外にあり、ときにはテキストに内包されるイメージのあり方について、絵画、写真、映画の分析を通じて考える。</p> <p>(84 齋藤一/3回) 主にポストコロニアル批評の成果について具体例を用いて講義を行う。</p> <p>(116 Heselhaus Geva Herrad/2回) Lecture topics will be selected from the following: Discourse Analysis, Deconstruction, Psychoanalysis, Gender/Queer Studies, Postcolonialism and Film Analysis.</p> <p>講義のトピックは、談話分析、脱構築、精神分析、ジェンダー/クィア研究、ポストコロニアル、映画分析から選択される。</p> <p>(157 Lafontaine Andree/2回) Using key texts and concepts from Cultural Studies and Psychoanalysis, this seminar will focus on the representation of Otherness and abjection in American and Japanese visual culture.</p> <p>このセミナーでは、文化研究と精神分析の主要なテキストと概念を使用して、アメリカと日本の視覚文化における他者性とアブジェクションの表現に焦点を当てる。</p>	オムニバス方式
	現代文化学基礎 I	<p>この授業は現代文化研究に不可避の「トピック」を設定し、旧来の方法論を総合人間学の視点から批判的に問い直し、新たな研究領域と価値を切り開く能力を養成することを目的としている。授業は現代文化学コース担当教員によるオムニバス形式(全10回)で実施する。受講者には全授業の最後にレポートの提出が求められる。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(49 廣瀬浩司/2回) 今日の現代文化研究において、ふたたび先端的な学問として研究されている身体思想について、具体的な例の分析を検討しながら講義する。</p> <p>(42 濱田真/2回) 文化記憶論、文化イメージ・形象論といった現代ドイツ文化学の一つの研究を取り上げて、現代における文化の伝達と変容の問題について演習形式で考察する。</p> <p>(61 山口恵里子/2回) 現代文化をとりまく「イメージ」についての研究および調査の方法を具体例に即して検討しながら、「イメージ」をめぐる様々な問題を考察する。</p> <p>(102 対馬美千子/1回) 現代文化における想像力やイメージに関わる理論、文化現象について考察する。</p> <p>(73 江藤光紀/2回) 劇場大国といわれるドイツの劇場、歌劇場の現状を分析し、それを日本の現状と比較することで、ポストモダン社会における芸術・文化活動の課題とこれからの方向性を検討す</p> <p>(5 畔上泰治/1回) 現代のドイツにおける異文化圏出身者との摩擦の現状を概観し、移民問題など社会的マイノリティをめぐる諸問題を考察する。</p>	オムニバス方式
	現代文化学基礎 II	<p>この授業は現代文化研究に不可避の「トピック」を設定し、具体例を多様な角度から分析し、そこに生じる問題の創造的解決の能力と新たな知・価値を創造する力を養成することを目的としている。授業は現代文化学コース担当教員によるオムニバス形式(全10回)で実施する。受講者には全授業の最後にレポートの提出が求められる。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(28 竹谷悦子/1回) 地図から読みとくアメリカ文化・文学。間大西洋や環太平洋、半球あるいは島嶼などの解釈のパラダイムへと転回していったアメリカ文化・文学研究史を検証する。</p> <p>(117 馬籠清子/1回) 現代アメリカ文学作品(特に短編)に反映されている社会的な問題に注目し、作者やその他様々な立場・視点から柔軟に分析する。</p> <p>(36 中田元子/1回) 19世紀イギリスにおける、階級間、ジェンダー間の葛藤・交渉の様態を考察する。</p> <p>(92 清水知子/1回) 現代の多文化主義、ポスト世俗社会におけるデモクラシーの(不)可能性について理論的に考察する。</p> <p>(86 佐藤吉幸/2回) 構造主義以後のフランス思想における権力理論を概観し、現代社会の権力メカニズムの諸特性について考察する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(131 吉野修/2回) 20世紀のフランス文化がいかにフランス外部の文化を内に取り込んで発展してきたかを、いくつかのテキストを参照しながら検証する。</p> <p>(125 宮崎和夫/2回) 国民国家に先行する時代の世界帝国であったスペイン帝国における政治的・文化的統合と対立や交流のあり方を概観し、グローバル化について考察する。</p>	
	国際公共政策論	<p>国際的価値の実現と国内的価値の保護との葛藤という現実的な課題に社会科学の立場から深く取り組み、国際社会における普遍的価値の理解を踏まえ、国際的な公共の利益に資するための最適な処方や有意義な提言を行うための思考力や研究能力を養成する。特に、政治学、社会学、国際関係論、政治経済学の分析視角から公共政策の実践と参画について深く考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(67 五十嵐泰正/2回) 本講義の導入、および地域社会学の観点から公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(137 鈴木創/2回) 政治学や比較政治の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(3 赤根谷達雄/1回) 安全保障の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(112 東野篤子/1回) ヨーロッパ政治や地域統合の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(72 URANO EDSON IOSHIAQUI/1回) 国際的な公共政策の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(26 関根久雄/1回) 開発人類学の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(78 柏木健一/2回) 政治経済学の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p>	オムニバス方式
	日本政治と市民社会 1	<p>日本の政治や市民社会に関する日本語の文献を広く講読し、その内容を深く理解するとともに、社会科学における研究の方法等を修得する。とりわけ、比較という視座から日本の市民社会を相対化して捉えられるようになることを目指す。この授業では、市民社会に関する幅広い題材を取り扱う。</p>	隔年
	Japan's Politics and Civil Society 1	<p>In this class, we aim to understand Japanese politics and civil society and to master methodology of social sciences through reading some basic literatures in English. In particular, we make much account of comparative methods. We discuss a variety of themes concerning civil society in this class.</p> <p>日本の政治や市民社会に関する英語の文献を広く講読し、その内容を深く理解するとともに、社会科学における研究の方法等を修得する。とりわけ、比較という視座から日本の市民社会を相対化して捉えられるようになることを目指す。この授業では、市民社会に関する幅広い題材を取り扱う。</p>	隔年
	環境とマクロ経済学1	<p>本講義では持続可能な開発・経済成長の分析に必要な基礎的な経済成長理論であるソロー・スワンモデルを習得する。主に物的・人的資本蓄積、人口、生産性、技術進歩に焦点を当てて経済成長の決定要因を学び、生産要素としての自然資源の重要性を理解する。さらに経済成長が環境に影響を与え、環境の質が生産性に大きく影響するメカニズムを学ぶことにより、持続可能な開発・経済成長において人的資本蓄積と技術進歩の重要性についての理解を深めることを目標とする。</p>	隔年
	The Environment and Macroeconomics 1	<p>This course offers an introduction to the theory of economic growth to analyze the interaction between the environment/natural resources and economic growth. The course covers the neoclassical growth model considering capital accumulation, population growth, technological progress, and natural resources. The goal is to give the students skills to apply the basic theory and competences to discuss various environmental issues and environmental policy.</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>本講義では持続可能な開発・経済成長の分析に必要な基礎的な経済成長理論であるソロー・スワンモデルを習得する。主に物的・人的資本蓄積、人口、生産性、技術進歩に焦点を当てて経済成長の決定要因を学び、生産要素としての自然資源の重要性を理解する。習得した経済成長理論をもとに様々な環境問題と持続可能な成長のための環境政策を分析・議論する能力を身につけることを目標とする。</p>	
	地域研究論	<p>世界の諸地域の特質とともに地域を解明する枠組み等について、人文・社会科学の視点からアプローチし、地域研究の在り方をオムニバス講義を通して学ぶ。また、ラテンアメリカ、東アジア、東南アジア・オセアニア、ロシア・ユーラシア、中東・北アフリカを含む世界各地域を、政治学、経済学、歴史学、地理学、言語学の分析視角から総合的・学際的に理解することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(57 箕輪真理／2回) 地域研究の総論とラテンアメリカ経済の発展についての講義を行う。 (72 URANO EDSON IOSHIAQUI／1回) ラテンアメリカの社会についての講義を行う。 (154 毛利亜樹／1回) 東アジアの政治についての講義を行う。 (213 堤純／1回) 東南アジア・オセアニアの地理についての講義を行う。 (143 茅根由佳／1回) 東南アジア・オセアニアの政治についての講義を行う。 (144 塩谷哲史／1回) 中央ユーラシアの歴史についての講義を行う。 (30 DADABAEV Timur／1回) 中央ユーラシアの社会についての講義を行う。 (13 白山利信／1回) ロシア語圏地域の社会についての講義を行う。 (78 柏木健一／1回) 中東・北アフリカ諸国の経済発展についての講義を行う。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目 (研究群共通)	修士論文合同演習	研究群1年次生を対象に、各学位プログラムから推薦された、優れた修士論文を提出した2年次生が研究発表を行い、質疑、意見交換を行い、実施後、課題を提出させる。	集中
	研究法入門	<p>人文社会科学に共通する研究倫理や情報倫理について修得するとともに、特に哲学・思想分野の研究者に求められる基本的態度や情報リテラシー、論文作成法についても学ぶ。また研究者のキャリアについても考える。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(266 宮本陽一郎/1回) 人文社会科学における研究倫理について講義を行い、不正行為を避けるということだけでなく、プロフェッショナルとしてのキャリアを開発する武器としての研究倫理について概説する。</p> <p>(52 保呂篤彦/1回) 研究を行うときに、研究対象となる人をどのように考えたらよいかを概説する。</p> <p>(256 岡上雅美/1回) プライバシーやハラスメントなど、研究において人権をどのように守るかについて概説する。</p> <p>(231 和氣愛仁/2回) 人文社会科学にとっても重要になってきている情報倫理について概説する。</p> <p>(25 杉本武/2回) コンピュータ、ネットワークの基礎知識を概説するとともに、人文社会科学系における情報技術の利用について事例紹介する。</p> <p><人文学学位プログラム> ※各サブプログラムごとに3回</p> <p>(52 保呂篤彦/3回) [研究者の履歴]: 哲学・思想分野における研究者としての心得やキャリア意識等を学ぶ。</p> <p>(128 山澤学/1回) 歴史学を中心に大学院生として身につけるべき研究倫理と知識・方法について概説する。</p> <p>(99 谷口陽子/1回) 先史学・考古学を中心に大学院生として身につけるべき研究倫理と知識・方法について概説する。</p> <p>(82 木村周平/1回) 民俗学・文化人類学を中心に大学院生として身につけるべき研究倫理と知識・方法について概説する。</p> <p>(32 谷口孝介/3回) 論文作成法について修得するとともに、研究者のキャリアについても考える。</p> <p>(25 杉本武/3回) 論文作成法について修得するとともに、研究者のキャリアについても考える。</p> <p>(5 畔上泰治/3回) 現代文化分野における研究者としての心得やキャリア意識等を学ぶ。</p> <p>(12 卯城祐司/1回) 英語教育学研究における実証研究の指導。</p> <p>(11 磐崎弘貞/1回) 英語教育学論文執筆における指導。</p> <p>(46 平井明代・76 小野雄一/1回) 英語教育学研究上の評価・統計処理、およびICT等機器の利用</p> <p><国際公共政策学位プログラム></p> <p>(29 竹中佳彦/3回) 研究倫理及びどのように研究を進めていくのかについて講義する。</p> <p><国際日本研究学位プログラム></p> <p>(33 津城寛文/3回) 研究者の履歴</p>	<p>オムニバス方式 (7回は研究群合同で実施。3回は各学位プログラム(又はサブプログラム)ごとに実施)</p> <p>(共通)</p> <p>(哲学・思想サブプログラム) (歴史・人類学サブプログラム)</p> <p>(文学サブプログラム) (言語学サブプログラム) (現代文化学サブプログラム) (英語教育学サブプログラム)</p>
	Academic Writing and Research Ethics	<p>This is an introductory course in academic writing and research ethics for postgraduate students, and is particularly aimed at first-year M.A. students. Through a series of readings and discussions, students will learn the fundamental aspects of ethically conscious research design. The course will also cover how to structure research projects (mainly M.A. theses), create work-able research questions, undertake appropriate methodological approaches, as well as objectively assess and present the findings.</p> <p>本科目は、大学院生を対象とした学術論文および研究倫理の入門コースであり、特に初年次修士課程の学生を対象とする。講読と議論を通し、受講生は高い倫理意識に基づく研究デザインの基礎を学ぶ。本科目では、研究計画(主に修士論文)の構築方法、実行可能な研究課題の設定、適切な研究手法の選択、および研究結果の客観的評価と発表方法についても学ぶ。</p>	
	人文社会科学のためのグラントライティング入門	これからの研究者には、自分の研究の意義を社会に分かりやすく伝え、研究資金を獲得する能力(grant writing)が要求される。この授業では、人文社会科学分野の競争的外部資金にどのようなものがあり、どのような点に注意して申請書を書くべきかについて学ぶ。日本学術振興会特別研究員等の申請書の書き方も指導する。	集中

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	人文社会科学のためのインターンシップ（1）	官公庁・図書館・研究所・非営利団体などで40時間程度の研修を行い、就業体験を通して自らの専門分野を実社会の中で捉え直すとともに、自らの進路に関する視野を広げ、実践的な問題発見・解決能力を身につけた者に対して、事前事後の指導を含めて単位を認定する。	
	人文社会科学のためのインターンシップ（2）	官公庁・図書館・非営利団体・一般企業などで80時間を越える研修を行い、就業体験を通して自らの専門分野を実社会の中で捉え直すとともに、自らの進路に関する視野を広げ、実践的な問題発見・解決能力を身につけた者に対して、事前事後の指導を含めて単位を認定する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
人文学 関連科目	専門基礎科目 日本史学基礎演習 IA	大学院学生として身につけるべき史料の解釈とその歴史的意味についての考察を深化させる。大学院学生として求められるレベルの基礎的な研究方法を身につけつつ、修士論文へのアプローチを計画する。文献その他の調査結果に基づく研究の構想を提示し、論文作成に向けての具体的な過程を認識していく。学期を通じて、受講者が順次、自らの研究の方法と内容を中間報告する。	
	日本史学基礎演習 IB	調査によって収集した史料の解釈とその歴史的意味について、研究史の上に位置づけながら、考察をより深化させる。大学院学生各自の史料調査の結果を整理し、基礎的な研究方法のうえに、修士論文作成に必要な実証の方法と分析結果について提示し、修士論文作成に向けての具体的な過程を認識していくことになる。学期を通じて、受講者が順次、自らの研究の方法と内容を報告する。	
	日本史学基礎演習 IIA	日本史学研究の方法論を確認しつつ、実証、すなわち史料解釈の深化を目指し、修士論文の作成に向け、具体的な構想を提示する。日本史学研究のための基礎的な方法論と視角の体得を図り、修士論文作成のための研究計画を具体化させる。学期を通じて、受講者が順次、自らの研究の方法と内容を報告する。	
	日本史学基礎演習 IIB	人文学の広い視野に立ちつつ、日本史学を研究する基盤となる能力を高め、修士論文の作成を目指す。先行研究をふまえながら、新たな問題視角に基づき、実証性の深化の上に、自らの研究を理論化して提示する能力を錬成し、先進的な修士論文の完成を図っていく。学期を通じて、受講者が順次、自らの研究の方法と内容を報告し、最終的には修士論文を完成させていく。	
	東洋史学基礎演習 IA	1年次生を対象とする春学期の研究演習。研究テーマに関する先行研究の整理、基本的史料の利用方法等について、基礎的演習を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて研究を進め、本演習において1回ないし複数回の研究報告を行い、東洋史学領域全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	東洋史学基礎演習 IB	1年次生を対象とする秋学期の研究演習。研究テーマに関する先行研究の整理、基本的史料の利用方法等について、春学期の内容を踏まえたより実践的な演習を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて研究を進め、本演習において1回ないし複数回の研究報告を行い、東洋史学領域全教員から修士論文の作成を見据えて指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	東洋史学基礎演習 IIA	2年次生を対象とする春学期の研究演習。修士論文作成にむけて総括的指導を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて研究を進め、本演習において1回ないし複数回の研究報告を行い、東洋史学領域全教員から修士論文の執筆に着手するための指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	東洋史学基礎演習 IIB	2年次生を対象とする秋学期の研究演習。修士論文完成にむけて総括的指導を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて修士論文の執筆を進めながら、本演習において1回ないし複数回の研究報告を行い、東洋史学領域全教員から修士論文の完成を見据えて指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	西洋史学基礎演習 IA	本授業では研究活動の基本的能力を涵養するために、先行研究の調査・吟味並びに自己の研究テーマに沿って整理するノウハウを習得することを目的としつつ、西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表を行う。	
	西洋史学基礎演習 IB	本授業では研究活動の基礎的能力を培うため、一次史料の調査・読解・批判の方法を習得することを目的としつつ、西洋史学全教員の出席のもと、受講生による研究発表を行う。その際、受講生同士の質疑応答に評価の重点を置くことで、研究に必要な批判的能力を涵養する。	
	西洋史学基礎演習 IIA	本授業では中間評価論文に向けての研究の事前準備を主たる目的としつつ、西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表と、それに関するディスカッションでもって進められる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	西洋史学基礎演習 IIB	本授業では中間評価論文の完成に向けて、これまでの研究成果の総括を行うことを目的としながら、西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表を行う。その際、先行研究を踏まえた考察を行っているか、一次史料に則った議論をしているか、研究のオリジナリティを説得的な形で提示できているか等の基準に照らし、その到達度を測定する。	
	歴史地理学基礎演習 IA	歴史地理学の修士論文作成に必要な基礎的な知識と研究方法を身につけるとともに、修士論文への構想を立てることができるようになる。主として日本国内ならびに英語圏諸国の地理学関係の学術雑誌に掲載された論文の紹介と討議を通して、従来の研究の到達水準と問題点を把握し、論点の提示の仕方や史資料やデータの解釈・分析の手法などを学ぶ。それらによって、修士論文作成に向けての具体的な過程について認識する。授業の進め方は、受講生による発表を中心にして行う。	
	歴史地理学基礎演習 IB	大学院生各自が修士論文作成を意識して収集した史資料やデータをもとに、その活用方法について、研究史上に位置づけながら考察する。同時に関連する研究文献を読み、史資料やデータの意味と活用方法についての理解を深める。これらを通じて、修士論文作成に向けての具体的な過程を認識する。授業の進め方は、受講生による発表を中心にして行う。	
	歴史地理学基礎演習 IIA	歴史地理学研究の目的と方法を確認しつつ、研究水準の深化と向上を目指し、修士論文の作成に向け、具体的な構想を提示する。修士論文に関わる従来の研究成果を改めて確認し、問題の所在を明確化する。同時に、研究に活用する史資料やデータと研究目的・方法との整合性についても検討を進める。それらによって、修士論文作成のための研究計画を具体化させる。授業の進め方は、受講生による発表を中心にして行う。	
	歴史地理学基礎演習 IIB	歴史地理学を研究する基盤となる能力を高め、修士論文の作成を目指す。従来の研究成果をふまえて、論点の提示の仕方、論旨の進め方と結論のまとめ方、図表の作成方法など、具体的な歴史地理学の論文作成法を確認しながら、研究水準を向上させる論文を作成できる能力を養い、修士論文の完成を図る。授業の進め方は、受講生が自らの研究内容を報告し、最終的には修士論文を完成させる。	
	先史学・考古学基礎演習 IA	1年次生段階に応じた先史学・考古学分野の修士論文作成のための内容の指導を行うことを目的とする。主として受講生が興味を持っているテーマに即して、受講生による研究発表と討議を通して行う。資料やデータの収集方法とその分析の手法、レビューの方法、論点の提示の仕方、論旨の進め方と結論のまとめ方など、先行研究の批判的検討にもとづく問題点の整理と、その解決に向けたあらたな方法及び資料の提示を求める。毎回の授業では、受講生1～2名がそれぞれの研究テーマに即した研究報告をおこなう。その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	先史学・考古学基礎演習 IB	次年度の修士論文作成に向けて具体的な研究テーマを設定することを目標とする。受講生には、先行研究の批判的検討にもとづく問題点の整理と、その解決に向けたあらたな方法及び資料の提示を求める。毎回の授業では、受講生1～2名がそれぞれの研究テーマに即した研究報告をおこなう。その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	先史学・考古学基礎演習 IIA	修士論文の作成に向けて研究テーマの深化を図ることを目標とする。受講生には、具体的な資料の分析結果について報告を求める。毎回の授業では、受講生1～2名がそれぞれの研究テーマに即した研究報告をおこなう。その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	先史学・考古学基礎演習 IIB	修士論文の作成に向けた最終的な研究成果の取りまとめを目標とする。受講生には、最終的な考察の結果について報告を求める。毎回の授業では、受講生1～2名がそれぞれの研究テーマに即した研究報告をおこなう。その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	民俗学・文化人類学基礎演習 IA	修士論文の完成を目標として、論文執筆に関わる指導を行う、1年次生を対象とする基礎的セミナー。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、研究テーマについての発表に基づき、参加者による討論を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	民俗学・文化人類学基礎演習IB	修士論文の完成を目標として、論文執筆に関わる指導を行う、1年次生を対象とする基礎的セミナー。修士論文で扱う研究テーマについて資料収集を進め、整理を成し得た資料に基づいて研究発表を行う。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、参加者による討論を行う。	
	民俗学・文化人類学基礎演習IIA	修士論文の完成を目標として、論文の構想に関わる指導を行う、2年次生を対象とするセミナー。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、研究テーマについての発表に基づき、参加者による討論を行う。今後の研究課題を明確化し、修士論文の作成を進める。	
	民俗学・文化人類学基礎演習IIB	修士論文の完成を目標として、論文の構想、資料提示と、論旨の展開方法など論文執筆に関わる指導を行う、2年次生を対象とするセミナー。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、参加者各人が自己の修士論文テーマに関する研究発表を行い、修士論文を完成させる。	
	言語理論	生成文法、認知言語学等の現代の言語理論を概観する。それによって、それぞれの言語理論の目標、特色、そして、理論がどのように発展し、どのような言語事実が明らかにされてきたか、理解を深め、言語研究における言語理論の役割について考える。	隔年
	言語学史	言語研究の歴史を概観する。それによって、言語研究の目標、対象、手法の変遷を考える。西欧においては、比較言語学から構造言語学、生成文法などの、現代までの言語研究の歴史、日本においては、明治期以降を中心に日本語研究の歴史を概観する。	隔年
	現代文化学基礎 I	<p>この授業は現代文化研究に不可避の「トピック」を設定し、旧来の方法論を総合人間学の視点から批判的に問い直し、新たな研究領域と価値を切り開く能力を養成することを目的としている。授業は現代文化学コース担当教員によるオムニバス形式（全10回）で実施する。諸条件が複雑に絡み合う現代文化を深く研究するために不可欠となっている協働研究の状況にも触れる。受講者には全授業の最後にレポートの提出が求められる。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（49 廣瀬浩司／2回）今日の現代文化研究において、ふたたび先端的な学問として研究されている身体思想について、具体的な例の分析を検討しながら講義する。</p> <p>（42 濱田真／2回）文化記憶論、文化イメージ・形象論といった現代ドイツ文化学の一つの研究を取り上げて、現代における文化の伝達と変容の問題について演習形式で考察する。</p> <p>（61 山口恵里子／2回）現代文化をとりまく「イメージ」についての研究および調査の方法を具体例に即して検討しながら、「イメージ」をめぐる様々な問題を考察する。</p> <p>（102 対馬美千子／1回）現代文化における想像力やイメージに関わる理論、文化現象について考察する。</p> <p>（73 江藤光紀／2回）劇場大国といわれるドイツの劇場、歌劇場の現状を分析し、それを日本の現状と比較することで、ポストモダン社会における芸術・文化活動の課題とこれからの方向性を検討する。</p> <p>（5 畔上泰治／1回）現代のドイツにおける異文化圏出身者との摩擦の現状を概観し、移民問題など社会的マイノリティをめぐる諸問題を考察する。</p>	オムニバス方式
	現代文化学基礎 II	<p>この授業は現代文化研究に不可避の「トピック」を設定し、具体例を多様な角度から分析し、そこに生じる問題の創造的解決の能力と新たな知・価値を創造する力を養成することを目的としている。授業は現代文化学コース担当教員によるオムニバス形式（全10回）で実施する。諸条件が複雑に絡み合う現代文化を深く研究するために不可欠となっている協働研究の状況にも触れる。受講者には全授業の最後にレポートの提出が求められる。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（28 竹谷悦子／1回）地図から読みとくアメリカ文化・文学。間大西洋や環太平洋、半球あるいは島嶼などの解釈のパラダイムへと転回していったアメリカ文化・文学研究史を検証する。</p> <p>（117 馬籠清子／1回）現代アメリカ文学作品（特に短編）に反映されている社会的な問題に注目し、作者やその他様々な立場・視点から柔軟に分析する。</p> <p>（36 中田元子／1回）19世紀イギリスにおける、階級間、ジェンダー間の葛藤・交渉の様態を考察する。</p> <p>（92 清水知子／1回）現代の多文化主義、ポスト世俗社会におけるデモクラシーの（不）可能性について理論的に考察する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(86 佐藤吉幸/2回) 構造主義以後のフランス思想における権力理論を概観し、現代社会の権力メカニズムの諸特性について考察す (131 吉野修/2回) 20世紀のフランス文化がいかにフランス外部の文化を内に取り込んで発展してきたかを、いくつかのテキストを参照しながら検証する。 (125 宮崎和夫/2回) 国民国家に先行する時代の世界帝国であったスペイン帝国における政治的・文化的統合と対立や交流のあり方を概観し、グローバル化について考察する。	
専門科目 哲学・思想	哲学原論演習(1)A	大学院生の研究能力の向上と自己の研究テーマの明確化を目的として、各受講生の研究発表とそれをめぐるディスカッションをセミナー方式で行う。毎回の授業では、1名の受講生が自分の長期的研究プランの中に位置付けられる研究テーマを設定し、ハンドアウトを準備して配布し、1時間程度の発表を行う。その内容を受けて、担当教員と全受講生によるディスカッションをおこなう。	隔年
	哲学原論演習(1)B	大学院生の研究能力の向上と自己の研究テーマの明確化を目的として、各受講生の研究発表とそれをめぐるディスカッションをセミナー方式で行う。毎回の授業では、1名の受講生が自分の長期的研究プランの中に位置付けられる研究テーマを設定し、ハンドアウトを準備して配布し、1時間程度の発表を行う(哲学原論演習(1)Aで発表した履修者は別内容で発表しなければならない)。その内容を受けて、担当教員と全受講生によるディスカッションをおこなう。	隔年
	哲学原論演習(2)A	大学院生の研究能力の向上と自己の研究テーマの明確化を目的として、各受講生の研究発表とそれをめぐるディスカッションをセミナー方式で行う。毎回の授業では、1名の受講生が自分の長期的研究プランの中に位置付けられる研究テーマを設定し、ハンドアウトを準備して配布し、1時間程度の発表を行う(哲学原論演習(1)A、哲学原論演習(1)Bで発表した履修者は別内容で発表しなければならない)。その内容を受けて、担当教員と全受講生によるディスカッションをおこなう。	隔年
	哲学原論演習(2)B	大学院生の研究能力の向上と自己の研究テーマの明確化を目的として、各受講生の研究発表とそれをめぐるディスカッションをセミナー方式で行う。毎回の授業では、1名の受講生が自分の長期的研究プランの中に位置付けられる研究テーマを設定し、ハンドアウトを準備して配布し、1時間程度の発表を行う(哲学原論演習(1)A、哲学原論演習(1)B、哲学原論演習(2)Aで発表した履修者は別内容で発表しなければならない)。その内容を受けて、担当教員と全受講生によるディスカッションをおこなう。	隔年
	現代哲学Ⅰ演習(1)A	英米系の現代哲学(分析哲学)の代表的な著作・論文を読みながら、現代哲学の諸問題を検討する。取り上げる著作・論文は年度によって異なる。2020年度は、バートランド・ラッセル『哲学の諸問題』(1912)を読む。特に第12章「真理と虚偽」を集中的に検討する。この章ではいわゆる「信念の多重関係理論」が展開されているが、そこで扱われている信念は単純な信念に限定されている。この理論をどのように拡張すれば否定的信念や選言的信念を扱うことができるようになるのかを考える。	隔年
	現代哲学Ⅰ演習(2)A	英米系の現代哲学(分析哲学)の代表的な著作・論文を読みながら、現代哲学の諸問題を検討する。取り上げる著作・論文は年度によって異なる。2021年度は、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』(1922)を読む。この本では様々な問題が論じられているが、授業では真理関数的結合子とそれを構成要素として含む複合文の問題を取り上げる。『論理哲学論考』では文一般は「像」と考えられているが、複合文は何の像であるのか、いかなる意味で像であるのかを授業では考察する。	隔年
	現代哲学Ⅱ演習(1)A	本授業科目は演習科目であり、「知覚の問題」をテーマとし、その問題を概観しうる諸論文を、分析哲学における手法で検討することにより、その問題の全体的な理解と諸解決策の検討を目標とするものである。そしてその目標のために、本授業では、「知覚の問題」とは何か、「知覚の問題」と呼ばれるものに対して提案されている解決策にはどのようなものがあるか、等を、英語文献の輪読により確認する。そして、それらを理解した上で、それぞれの解決策の問題点について議論する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	現代哲学Ⅱ演習(1)B	本授業科目は演習科目であり、「知覚の問題」をテーマとし、その問題を検討している個別例としてのフィッシュの著作を検討することによって、その問題の理解と諸解決策の検討を目標とするものである。そしてその目標のために、本授業では、「知覚の問題」についての考察が多数あるフィッシュの著作の中でも「知覚の問題」の全体像を明らかにする意図で書かれた『知覚の哲学入門』を、分析哲学における手法を念頭に置きながら輪読する。そして、そのことによって、フィッシュが「知覚の問題」についてどのように理解しているのかを確認し、「知覚の問題」についてのフィッシュの見解について議論する。	隔年
	現代哲学Ⅱ演習(2)A	本授業科目は演習科目であり、「知覚の問題」をテーマとし、その問題に対する解決策の一つである「選言説」に焦点を当て、その問題の理解と諸解決策の検討を目標とするものである。そしてその目標のために、本授業では、分析哲学における手法踏まえたうえで、関係する英語文献を輪読することによって、「知覚の問題」に対して提案されている解決策の中の一つである「選言説」の内容を詳細に理解する。また、その問題に対するパトナムの見解の変化も確認する。そして、それらを理解したうえで、解決策としての「選言説」の妥当性について議論する。	隔年
	現代哲学Ⅱ演習(2)B	本授業科目は演習科目であり、「知覚の問題」をテーマとし、「知覚の問題」を解決するために生じる個々の問題に焦点を当て、分析哲学的な手法でその問題の理解と諸解決策の検討を目標とするものである。そしてその目標のために、「知覚の問題」を検討しているフィッシュの文献の中でも、個々の問題（たとえば、スクーリングオフ問題）について詳説している著作を取り上げ、輪読する。そして、そのことによって、フィッシュが「知覚の問題」をめぐる個別的な問題にどう対処しようとしているのかを確認し、「知覚の問題」についてのフィッシュの見解について議論する。	隔年
	東洋哲学(1)A	講義形式で東アジア文化圏に決定的な影響を与えた中国哲学のうち儒教の体系化を方向づけた宋学の経書解釈について教授する。とりわけ朱熹による「四書」解釈について関連文献を深く読解することを通じて解明する。本講義では朱熹の『論語』理解を『朱子語類』の『論語』泰伯①に対する言説を取り上げ、一言一句おろそかにすることなく、各種文献との関係のうちから理解することを目標とする。	隔年
	東洋哲学(1)B	講義形式で東アジア文化圏に決定的な影響を与えた中国哲学のうち儒教の体系化を方向づけた宋学の経書解釈について教授する。とりわけ朱熹による「四書」解釈について関連文献を深く読解することを通じて解明する。本講義では朱熹の『論語』理解を『朱子語類』の『論語』泰伯②に対する言説を取り上げ、一言一句おろそかにすることなく、各種文献との関係のうちから理解することを目標とする。	隔年
	東洋哲学(2)A	講義形式で東アジア文化圏に決定的な影響を与えた中国哲学のうち儒教の体系化を方向づけた宋学の経書解釈について教授する。とりわけ朱熹による「四書」解釈について関連文献を深く読解することを通じて解明する。本講義では朱熹の『論語』理解を『朱子語類』の『論語』泰伯③に対する言説を取り上げ、一言一句おろそかにすることなく、各種文献との関係のうちから理解することを目標とする。	隔年
	東洋哲学(2)B	講義形式で東アジア文化圏に決定的な影響を与えた中国哲学のうち儒教の体系化を方向づけた宋学の経書解釈について教授する。とりわけ朱熹による「四書」解釈について関連文献を深く読解することを通じて解明する。本講義では朱熹の『論語』理解を『朱子語類』の『論語』泰伯④に対する言説を取り上げ、一言一句おろそかにすることなく、各種文献との関係のうちから理解することを目標とする。	隔年
	東洋哲学演習(1)A	演習形式で東アジア文化圏に決定的な影響を与えた中国哲学のうち儒教の体系化を方向づけた宋学の経書解釈について解明する。とりわけ朱熹による「四書」解釈について関連文献を深く読解することを通じて解明する。本講義では朱熹の『論語』理解を『朱子語類』の『論語』泰伯①に対する言説を取り上げ、一言一句おろそかにすることなく、各種文献との関係のうちから理解することを目標とする。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	東洋哲学演習(1)B	演習形式で東アジア文化圏に決定的な影響を与えた中国哲学のうち儒教の体系化を方向づけた宋学の経書解釈について解明する。とりわけ朱熹による「四書」解釈について関連文献を深く読解することを通じて解明する。本講義では朱熹の『論語』理解を『朱子語類』の『論語』泰伯②に対する言説を取り上げ、一言一句おろそかにすることなく、各種文献との関係のうちから理解することを目標とする。	隔年
	東洋哲学演習(2)A	演習形式で東アジア文化圏に決定的な影響を与えた中国哲学のうち儒教の体系化を方向づけた宋学の経書解釈について解明する。とりわけ朱熹による「四書」解釈について関連文献を深く読解することを通じて解明する。本講義では朱熹の『論語』理解を『朱子語類』の『論語』泰伯③に対する言説を取り上げ、一言一句おろそかにすることなく、各種文献との関係のうちから理解することを目標とする。	隔年
	東洋哲学演習(2)B	演習形式で東アジア文化圏に決定的な影響を与えた中国哲学のうち儒教の体系化を方向づけた宋学の経書解釈について教授する。とりわけ朱熹による「四書」解釈について関連文献を深く読解することを通じて解明する。本講義では朱熹の『論語』理解を『朱子語類』の『論語』泰伯④に対する言説を取り上げ、一言一句おろそかにすることなく、各種文献との関係のうちから理解することを目標とする。	隔年
	西洋哲学 I (1)A	西洋近代哲学の古典を読みながら、西洋理論哲学についての知識と哲学のテキストを読む力および問題を検討する力を修得することを目指す。そのために、カントの『純粋理性の批判』周辺のテキストを読み、理性と経験についての理解を深めることを通して理論哲学の諸問題と対決する。	隔年
	西洋哲学 I (1)B	西洋近代哲学の古典を読みながら、西洋理論哲学についての知識と哲学のテキストを読む力および問題を検討する力を修得することを目指す。そのために、カントの『純粋理性の批判』周辺のテキストを読み、物自体と現象についての理解を深めることを通して理論哲学の諸問題と対決する。	隔年
	西洋哲学 I (2)A	西洋近代哲学の古典を読みながら、西洋理論哲学についての知識と哲学のテキストを読む力および問題を検討する力を修得することを目指す。そのために、カントの『純粋理性の批判』周辺のテキストを読み、感性的直観と純粋知性概念についての理解を深めることを通して理論哲学の諸問題と対決する。	隔年
	西洋哲学 I (2)B	西洋近代哲学の古典を読みながら、西洋理論哲学についての知識と哲学のテキストを読む力および問題を検討する力を修得することを目指す。そのために、カントの『純粋理性の批判』周辺のテキストを読み、純粋理性のアンチノミーと超越論的哲学についての理解を深めることを通して理論哲学の諸問題と対決する。	隔年
	西洋哲学 I 演習(1)A	演習形態で西洋の実践哲学についての知識と哲学のテキストを読む力および問題を検討する力を修得するために、西洋哲学の最重要古典の一つであるカントの『道徳形而上学の基礎づけ』を読み、認識能力と欲求能力との区別についての理解を深めるとともに実践哲学の諸問題を検討する。	隔年
	西洋哲学 I 演習(1)B	演習形態で西洋の実践哲学についての知識と哲学のテキストを読む力および問題を検討する力を修得するために、西洋哲学の最重要古典の一つであるカントの『道徳形而上学の基礎づけ』を読み、傾向性と純粋理性との区別についての理解を深めるとともに実践哲学の諸問題を検討する。	隔年
	西洋哲学 I 演習(2)A	演習形態で西洋の実践哲学についての知識と哲学のテキストを読む力および問題を検討する力を修得するために、西洋哲学の最重要古典の一つであるカントの『道徳形而上学の基礎づけ』を読み、仮言的命法と定言的命法との区別についての理解を深めるとともに実践哲学の諸問題を検討する。	隔年
	西洋哲学 I 演習(2)B	演習形態で西洋の実践哲学についての知識と哲学のテキストを読む力および問題を検討する力を修得するために、西洋哲学の最重要古典の一つであるカントの『道徳形而上学の基礎づけ』を読み、他律と自律との区別についての理解を深めるとともに実践哲学の諸問題を検討する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	西洋哲学Ⅱ演習(1)A	フランス古典主義時代の哲学書を読解するうえで必要となる1) 語学力、2) 哲学・哲学史にかかわる知識、3) 読解を通じて考察したことを文章にする技法の習得を目指す。そのために、近世フランス哲学の基本文献のうち、デカルトの『方法序説』をフランス語原典で講読する。本授業は演習形式で進められるため、受講生は、事前の一次文献と二次文献の徹底した予習が求められ、かつ、授業中には積極的な発言が求められる。	隔年
	西洋哲学Ⅱ演習(2)A	フランス古典主義時代の哲学書を読解するうえで必要となる1) 語学力、2) 哲学・哲学史にかかわる知識、3) 読解を通じて考察したことを文章にする技法の習得を目指す。そのために、近世フランス哲学の基本文献のうち、デカルトの『情念論』をフランス語原典で講読する。本授業は演習形式で進められるため、受講生は、事前の一次文献と二次文献の徹底した予習が求められ、かつ、授業中には積極的な発言が求められる。	隔年
	倫理学原論(1)A	大学院生の研究能力の向上および研究テーマの明確化を目的として、大学院生による研究発表とそれをめぐるディスカッションを行う。受講者がそれぞれ行った発表を、自分の長期的な研究計画のなかに位置づけて、討論の成果も含めて効果的に活用できるようにする。	隔年
	倫理学原論(1)B	大学院生の研究能力の向上および研究テーマの明確化を目的として、大学院生による研究発表とそれをめぐるディスカッションを行う。受講者がそれぞれ行った発表を、自分の長期的な研究計画のなかに位置づけて、討論の成果も含めて効果的に活用できるようにする。倫理学原論(1)Aで発表した履修者は別内容で発表すること。	隔年
	倫理学原論(2)A	大学院生の研究能力の向上および研究テーマの明確化を目的として、大学院生による研究発表とそれをめぐるディスカッションを行う。受講者がそれぞれ行った発表を、自分の長期的な研究計画のなかに位置づけて、討論の成果も含めて効果的に活用できるようにする。倫理学原論(1)A、倫理学原論(1)Bで発表した履修者は別内容で発表すること。	隔年
	倫理学原論(2)B	大学院生の研究能力の向上および研究テーマの明確化を目的として、大学院生による研究発表とそれをめぐるディスカッションを行う。受講者がそれぞれ行った発表を、自分の長期的な研究計画のなかに位置づけて、討論の成果も含めて効果的に活用できるようにする。倫理学原論(1)A、倫理学原論(1)B、倫理学原論(2)Aで発表した履修者は別内容で発表すること。	隔年
	現代倫理学演習(1)A	現代倫理学の古典を取り上げ、今日的課題を解決するための手がかりになるような考え方について議論し展開させる。授業を受け身になって聞くのではなく、自ら積極的に思考を展開し、意見を公表し、それを吟味にかける態度が求められる。テキストとしてはハイデガー『存在と時間』の前半部のなかからいくつかの箇所を取り上げる予定である。	隔年
	現代倫理学演習(1)B	現代倫理学の古典を取り上げ、今日的課題を解決するための手がかりになるような考え方について議論し展開させる。授業を受け身になって聞くのではなく、自ら積極的に思考を展開し、意見を公表し、それを吟味にかける態度が求められる。テキストとしてはハイデガー『存在と時間』の後半部のなかからいくつかの箇所を取り上げる予定である。	隔年
	現代倫理学演習(2)A	現代倫理学の古典を取り上げ、今日的課題を解決するための手がかりになるような考え方について議論し展開させる。授業を受け身になって聞くのではなく、自ら積極的に思考を展開し、意見を公表し、それを吟味にかける態度が求められる。テキストとしてはハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』の前半部のなかからいくつかの箇所を取り上げる予定である。	隔年
	現代倫理学演習(2)B	現代倫理学の古典を取り上げ、今日的課題を解決するための手がかりになるような考え方について議論し展開させる。授業を受け身になって聞くのではなく、自ら積極的に思考を展開し、意見を公表し、それを吟味にかける態度が求められる。テキストとしてはハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』の後半部のなかからいくつかの箇所を取り上げる予定である。	隔年
	西洋倫理思想史演習(1)A	倫理学の根本問題を扱った西洋近現代の著作を読解する。テキスト理解に必要な基本的概念、思想史的背景知識、語学力の習得を目指す。テキストとしてはカント『道徳の形而上学』の「徳論への序論」の前半を取り上げる予定である。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	西洋倫理思想史演習(1)B	倫理学の根本問題を扱った西洋近現代の著作を読解する。テキスト理解に必要な基本的概念、思想史的な背景知識、語学力の習得を目ざす。テキストとしてはカント『道徳の形而上学』の「徳論への序論」の後半を取り上げる予定である。	隔年
	西洋倫理思想史演習(2)A	倫理学の根本問題を扱った西洋近現代の著作を読解する。テキスト理解に必要な基本的概念、思想史的な背景知識、語学力の習得を目ざす。テキストとしてはカント『道徳の形而上学』「倫理学的原理論」の第一部を取り上げる予定である。	隔年
	西洋倫理思想史演習(2)B	倫理学の根本問題を扱った西洋近現代の著作を読解する。テキスト理解に必要な基本的概念、思想史的な背景知識、語学力の習得を目ざす。テキストとしてはカント『道徳の形而上学』「倫理学的原理論」の第二部を取り上げる予定である。	隔年
	宗教学 I (1)A	宗教現象を多角的に取り上げる視点を身に付け、多様な宗教現象に関わる資料の読解力を身に付ける。宗教現象学に関連する古典的著作を読み解く。オットー、エリアーデなどの著作を読解する。	隔年
	宗教学 I (1)B	宗教現象を多角的に取り上げる視点を身に付け、多様な宗教現象に関わる資料の読解力を身に付ける。宗教社会学に関連する古典的著作を読み解く。デュルケム、ウェーバーなどの著作を取り上げる。	隔年
	宗教学 I (2)A	宗教現象を多角的に取り上げる視点を身に付け、多様な宗教現象に関わる資料の読解力を身に付ける。宗教心理学に関連する古典的著作を読み解く。ジェイムズ、フロイト、ユングなどの著作を取り上げる。	隔年
	宗教学 I (2)B	宗教現象を多角的に取り上げる視点を身に付け、多様な宗教現象に関わる資料の読解力を身に付ける。宗教人類学に関連する古典的著作を読み解く。ボアズ、ギアツなどの著作を取り上げる。	隔年
	宗教学 I 演習(1)A	宗教学の中における神話研究の問題を取り上げる。特に、歴史と神話の関係に関わる諸問題を考察する。継承される神話形式と生成する神話との相互関係、現代社会における文字化された神話と口承伝承の神話との相互関係などを取り上げる。	隔年
	宗教学 I 演習(1)B	宗教学における神話研究の問題を取り上げる。特に、政治・権力と神話の関係に関わる諸問題を考察する。神話と象徴は政治権力に権威を与えるとともに、その権力の行使に正当性を付与する。また、社会における諸問題を隠蔽することもある。これらの諸問題を取り上げる。	隔年
	宗教学 I 演習(2)A	宗教学における自然環境と技術の問題を取り上げる。特に近代技術以前の社会における宗教・自然・技術との関係を取り上げる。特に農耕技術と狩猟技術との相違は人間と自然の関係、ひいては人間と神々の世界との関係の差異をも生み出していたといえる。これらの問題を取り上げる。	隔年
	宗教学 I 演習(2)B	宗教学における自然環境と技術の問題を取り上げる。特に近代技術が隆盛した以降の社会における宗教・自然・技術との関係を取り上げる。近代技術を通して人間社会が自然の意味を変容させたとともに、技術の進化に人間社会が従属するという新しい歴史的状況が生まれてきている。これらの問題を取り上げる。	隔年
	宗教学 II (1)A	西洋古代の宗教思想を起点にして、哲学・思想の諸領域に通底した思考力と発想力を養う。そのために、この学期は新プラトン主義と呼ばれる西洋古代の思想を一つの題材として、哲学と宗教が交錯したその内容と様相を捉えながら、後世への多様な影響について検討する。	隔年
	宗教学 II (1)B	西洋古代の宗教思想を起点にして、哲学・思想の諸領域に通底した思考力と発想力を養う。この学期は、新プラトン主義と呼ばれる西洋古代の思想から、魂や身体、それらをめぐる儀礼といったテーマに特に着目して、哲学と宗教の交錯について具体的な考察を行う。	隔年
	宗教学 II (2)A	哲学・思想の研究を新しい領域にも広げるため、人文情報学（デジタル・ヒューマニティーズ）の新手法について、最新の動向も取り上げながら学ぶ。この学期は、確立された手法やシステムを主に取り上げる。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	宗教学Ⅱ(2)B	哲学・思想の研究を新しい領域にも広げるため、人文情報学(デジタル・ヒューマニティーズ)の新技术法について、最新の動向も取り上げながら学ぶ。この学期は、新たに提案されつつある手法を含めて取り上げる。	隔年
	宗教学実習(1)	現代日本社会における伝統宗教の現状を現地調査を通して、宗教現象の実情に触れる。下記の一連の流れを通して、現地調査をする。(事前学習 現地調査 報告会 報告書作成)	隔年 集中
	宗教学実習(2)	現代社会における新宗教の現状を現地調査を通して学ぶ。宗教現象の実情に触れる。下記の一連の流れを通して、現地調査をする。(事前学習 現地調査 報告会 報告書作成)	隔年 集中
	宗教思想史Ⅰ(1)A	11～12世紀に書かれたインド仏教知識論の綱要書を原典講読し、その基本概念を理解するとともに、サンスクリットで書かれた哲学書の解読方法を学ぶ。モークシャーカラグプタ著『論理のことば』(第1章)を読みながら、仏教知識論における認識論の基本概念を解説する。	隔年
	宗教思想史Ⅰ(1)B	11～12世紀に書かれたインド仏教知識論の綱要書を原典講読し、その基本概念を理解するとともに、サンスクリットで書かれた哲学書の解読方法を学ぶ。モークシャーカラグプタ著『論理のことば』(第2章)を読みながら、仏教知識論における推理論の基本概念を解説する。	隔年
	宗教思想史Ⅰ(2)A	ディグナーガ及び彼以前の仏教論理学の思想史をサンスクリット語と漢訳による基本文献および関連する論文を講読しながら解説する。主に『如実論反質難品』(漢文)および『論軌』(サンスクリット)を扱う。	隔年
	宗教思想史Ⅰ(2)B	ディグナーガ及び彼以前の仏教論理学の思想史をサンスクリット語と漢訳による基本文献および関連する論文を講読しながら解説する。主に『因明正理門論』(漢文とサンスクリット断片)を扱う。	隔年
	宗教思想史Ⅰ演習(1)A	サンスクリット語で書かれたインド仏教知識論の基本文献を原典講読し、研究の方法論を習得するとともに、その内容を深い次元で理解することを目指す。ブラジュニャーカラグプタ著『量評釈荘嚴』(第2章「知覚」章)の講読演習。	隔年
	宗教思想史Ⅰ演習(1)B	サンスクリット語で書かれたインド仏教知識論の基本文献を原典講読し、研究の方法論を習得するとともに、その内容を深い次元で理解することを目指す。ブラジュニャーカラグプタ著『量評釈荘嚴』(第1章「認識根拠の証明」章)と、それに対するヤマールの註釈書の講読演習。	隔年
	宗教思想史Ⅰ演習(2)A	ディグナーガ及び彼以前の仏教論理学の基本文献を原典講読し、研究の方法論を習得するとともに、その内容を深い次元で理解することを目指す。サンスクリット語と漢訳による諸文献の講読演習。	隔年
	宗教思想史Ⅰ演習(2)B	ディグナーガ及び彼以前の仏教論理学の基本文献を原典講読し、研究の方法論を習得するとともに、その内容を深い次元で理解することを目指す。漢文による註釈書の講読演習。	隔年
	宗教思想史Ⅱ(1)A	インドの仏教思想について原典によって学び、考察する。サンスクリット語、パーリ語で書かれたインドの仏教論書のテキストを講読し、語学力を養うと同時に、哲学的考察力、議論する力を磨く。とくに存在論、認識論を中心とした哲学的主題を議論する。	隔年
	宗教思想史Ⅱ(1)B	チベットの仏教思想について原典によって学び、考察する。チベット語で書かれた仏教論書のテキストを講読し、語学力を養うと同時に、哲学的考察力、議論する力を磨く。とくに中観思想の帰謬論証に焦点をあてて議論する。	隔年
	宗教思想史Ⅱ(2)A	インドの仏教思想について原典によって学び、考察する。サンスクリット語、パーリ語で書かれたインドの仏教論書のテキストを講読し、語学力を養うと同時に、哲学的考察力、議論する力を磨く。とくに論理的推論の構造と方法について議論する。	隔年
	宗教思想史Ⅱ(2)B	チベット語で書かれた仏教論書のテキストを講読し、語学力を養うと同時に、哲学的考察力、議論する力を磨く。とくに中観思想と論理学の融合について議論する。	隔年
	宗教思想史Ⅱ演習(1)A	インドの仏教思想についてサンスクリット語、パーリ語の原典によって学び、内容を英語で解説する能力を養う。とくに時間論をテーマとする。テキストの英訳と英語の要約を作成する。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	宗教思想史Ⅱ演習(1)B	チベットの仏教思想についてチベット語の原典によって学び、内容を英語で解説する能力を養う。とくにチベットへの仏教の伝承過程をテーマとする。テキストの英訳と英語の要約を作成する。	隔年
	宗教思想史Ⅱ演習(2)A	インドの仏教思想についてサンスクリット語、パーリ語の原典によって学び、内容を英語で解説する能力を養う。とくに中観思想の伝統における推論式のあり方について考察する。テキストの英訳と英語の要約を作成する。	隔年
	宗教思想史Ⅱ演習(2)B	チベットの仏教思想についてチベット語の原典によって学び、内容を英語で解説する能力を養う。とくに中観思想とそのテキスト伝承について考察する。テキストの英訳と英語の要約を作成する。	隔年
	宗教思想史Ⅲ(1)A	インド古典におけるバラモン教の思想について、主にサンスクリット語原典の哲学文献のテキストの読解を通じて考察する。テキスト校訂の方法論も学びながら、文献実証的な精読を心がける。サンスクリット語の語学力を養うと同時に、哲学的考察力、議論する力を磨く。	隔年
	宗教思想史Ⅲ(1)B	引き続き、インド古典におけるバラモン教の思想を、サンスクリット語原典の哲学文献のテキストの精読を通じて考察する。原典講読については、論敵の原典も参照し、可能な限り写本等の一次資料も参照する。サンスクリット語の語学力を養うと同時に、テキスト校訂の手法、議論する力を磨く。	隔年
	宗教思想史Ⅲ(2)A	インド古典のサンスクリット語原典の哲学文献を講読する。原典については、可能な限り写本等の一次資料も参照し、文献実証的な精読を心がける。サンスクリット語の語学力を養うと同時に、哲学的考察力、議論する力を磨く。	隔年
	宗教思想史Ⅲ(2)B	引き続き、インド古典のサンスクリット語原典の哲学文献を講読する。古典テキストの批判校訂の方法論についてはインド学以外の方法論も吟味する。サンスクリット語の語学力を養うと同時に、テキスト校訂の手法、議論する力を磨く。	隔年
	宗教哲学演習(1)A	古典的な宗教哲学の一例であるカントの宗教哲学に関するテキスト(オリジナルおよび翻訳)を精読しつつ、現代のドイツ語圏・英語圏の研究者、さらには日本の研究者によるコメントリーや論攷にも目を通して、そこで取り扱われている問題について受講者全員で議論しつつ検討する。このことを通して、カントの生きた時代にキリスト教という宗教がどのように理解されていたか考察するとともに、現代人はそこから何を学ぶのかとも考える。特にこのAの授業では、カントが宗教的信仰をどのように理解し、当時のキリスト教信仰をどのように批判していたかに注目する。	隔年
	宗教哲学演習(1)B	古典的な宗教哲学の一例であるカントの宗教哲学に関するテキスト(オリジナルおよび翻訳)を精読しつつ、現代のドイツ語圏・英語圏の研究者、さらには日本の研究者によるコメントリーや論攷にも目を通して、そこで取り扱われている問題について受講者全員で議論しつつ検討する。このことを通して、カントの生きた時代にキリスト教という宗教がどのように理解されていたか考察するとともに、現代人はそこから何を学ぶのかとも考える。特にこのBの授業では、カントがキリスト教の教義である原罪論と人間の悪をいかに理解していたかに注目する。	隔年
	宗教哲学演習(2)A	20世紀の英語圏を代表するキリスト教神学者・宗教哲学者の一人であるJ・ヒックの宗教哲学的テキスト(オリジナル)の精読を通して、現代の英語圏の宗教哲学で議論されている主要な問題のうちのいくつかに関する基本的な知識を習得する。また、そのうち、特に、宗教批判の諸理論への応答と宗教認識論をめぐる諸問題について、受講者全員で各人がもつ宗教と哲学に関する知識を基に議論・検討することによって宗教哲学の問題を考察し議論する力を身につける。	隔年
	宗教哲学演習(2)B	20世紀の英語圏を代表するキリスト教神学者・宗教哲学者の一人であるJ・ヒックの宗教哲学的テキスト(オリジナル)の精読を通して、現代の英語圏の宗教哲学で議論されている主要な問題のうちのいくつかに関する基本的な知識を習得する。また、そのうち、特に「宗教多元主義」をめぐる諸問題について、受講者全員で各人がもつ宗教と哲学に関する知識を基に議論・検討することによって宗教哲学の問題を考察し議論する力を身につける。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	哲学・思想修士論文執筆演習A	哲学研究、倫理学研究、宗教研究の諸領域のいずれかにおいて修士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から研究指導を行い、それぞれの論文の計画から執筆の初期段階までを指導する。	
	哲学・思想修士論文執筆演習B	哲学研究、倫理学研究、宗教研究の諸領域のいずれかにおいて修士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から研究指導を行い、それぞれの論文の完成に向けて指導する。	
	(研究指導：哲学・思想)	(6 井川義次) 文献学的実証研究の手法を用いて、儒教思想の発展・展開の解明に関する課題の研究指導を行う。 (18 小野基) インド古典文学および仏教文献学の方法論を用いて、インド古典および仏教文献の文献学的、思想史的研究に関する研究指導を行う。 (22 木村武史) 宗教学・宗教史学・宗教社会学・宗教人類学の手法を用いて、宗教現象の解釈の課題の研究指導を行う。 (44 檜垣良成) 主に西洋哲学史を踏まえた概念史的手法を用いて、西洋哲学の課題の研究指導を行う。 (52 保呂篤彦) 近代以降のキリスト教思想とキリスト教を中心にした宗教哲学的研究、キリスト教と仏教の邂逅に基づく日本の哲学や神学、現代の宗教多元主義をめぐる諸議論など宗教哲学的問題を中心に研究指導と論文執筆指導を行う (64 吉水千鶴子) 文献学的手法を用いてインド・チベット仏教思想の課題について研究指導を行う。 (66 五十嵐沙千子) 哲学的ディスカッションおよび哲学カフェの手法を用いて、現代倫理学について研究指導を行う。 (88 志田泰盛) 宗教学と古典文学の手法を用いて、宗教哲学の課題の研究指導を行う。 (101 津崎良典) 文献学の手法を用いて、(フランス) 近世哲学史に関する研究指導を行う。 (110 橋本康二) 分析哲学の手法を用いて、哲学の課題の研究指導を行う。 (138 千葉建) 文献学的概念史およびメタ倫理学的方法を用いて、西洋近現代の倫理思想について研究指導を行う。	
	歴史・人類学	日本史特講IA	古代の法制史料を輪読し、律令制研究に必要な史料の活用方法を習得する。令の注釈書である『令集解』のテキスト読解と、それを踏まえた制度の展開過程の追究などを行う。具体的には、律令国家の人民支配にかかわる戸令の条文を読み進めていく。戸令全体の解説のあと、戸令17絶貫条(浮浪人・逃亡人・解放奴隷の登録、本籍地への帰還など)、戸令18造計帳条(計帳の作成主体・作成方法、戸籍の転写など)、戸令19造戸籍条(戸籍の作成部数・記載事項・提出先・勘査・訂正など)の各条を読解していき、最後に戸籍・計帳制度について全体的な考察を行う。
	日本史特講IB	古代の法制史料を輪読し、律令制研究に必要な史料の活用方法を習得する。令の注釈書である『令集解』のテキスト読解と、それを踏まえた制度の展開過程の追究などを行う。具体的には、律令国家の人民支配にかかわる戸令の条文を読み進めていく。戸令全体の解説のあと、戸令20造帳籍条(国司による人の実検、人の区分の決定・訂正)、戸令21籍送条(調使・専使による戸籍提出)、戸令22戸籍条(戸籍の保存期間、庚午年籍の永久保存)、戸令23応分条(家人・奴婢の相続、氏賤の除外、田宅・資財・功田・功封の相続、嫡母・継母・嫡子・庶子の相続割合)の各条を読解していき、最後にその成果を総括する。	隔年
	日本史特講IIA	本特講では、神社の祭祀・組織を中心とした日本宗教社会史研究における基礎的知識と研究方法を修得する。また、文献史料を読解する能力の向上にも努める。具体的には、京都の北野天満宮(北野神社)の祭祀・組織を事例として、先行研究の検討をふまえ、未公刊であり、くずし字で記されている神社史料(筑波大学所蔵北野神社文書「明和度遷宮記」)の写真版を読解し、日本宗教社会史研究における基礎的知識と研究方法を講ずる。必要に応じて履修者には史料読解に基づく報告も求める。	隔年
	日本史特講IIB	本特講では、神社の祭祀・組織を中心とした日本宗教社会史研究における基礎的知識と研究方法を修得する。文献史料を読解する能力の向上に努めつつ、論文作成に向けての視点を考察する。具体的には、京都の北野天満宮(北野神社)遷宮に参加する諸身分とその組織を事例として、先行研究の検討をふまえ、未公刊であり、くずし字で記されている神社史料(筑波大学所蔵北野神社文書「就仮遷宮潔斎中雜録」)の写真版を読解し、日本宗教社会史研究における基礎的知識と研究方法を講じつつ、論文作成に向けての視点を検討する。必要に応じて履修者には史料読解に基づく報告も求める。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本史特講IIIA	日本史学研究の基礎領域である史料学の研究動向を理解するとともに、各自の今後の研究への応用の視点を獲得する。日本近現代史料学について講義する。日本近現代史研究の基礎となる史料学について、古文書学やアーカイブズ学の成果を援用しながら独自の史料学の領域を構築することを目指す。春学期は史料学の研究史や法制度を中心に取り上げる。	隔年
	日本史特講IIIB	日本史学研究の基礎領域である史料学の研究動向を理解すると共に各自の今後の研究への応用の視点を獲得する。日本近現代史料学の具体的問題について講義する。日本近現代史研究の基礎となる史料学について、古文書学やアーカイブズ学の成果を援用しながら独自の史料学の領域を構築することを目指す。秋学期は史料保存の現状と史料学の研究課題について講義する。	隔年
	日本史特講IVA	近代日本における女子高等教育の発展、近代的なジェンダー意識の形成と変容などについて考察する。社会文化史・ジェンダー史を考察する視点の習得を目標とする。	隔年
	日本史特講IVB	朝鮮における女子高等教育の発展、近代的なジェンダー意識の形成と変容などについて考察する。特に近代日本との比較を行い、近現代東アジアにおける社会文化史・ジェンダー史を考察する比較の視点の習得を目標とする。	隔年
	日本史特講VA	昭和戦前期の満州移民について、先行研究の検討、関連文献の精読、関連資料の所蔵調査、およびフィールドワークを行う。春学期は、試験移民（武装移民）・満蒙開拓青少年義勇軍について講義する。あわせて満蒙開拓青少年義勇軍関連施設の巡検を行う。	隔年
	日本史特講VB	昭和戦前期の満州移民について、先行研究の検討、関連文献の精読、関連資料の所蔵調査、およびフィールドワークを行う。秋学期は、分村移民・分郷移民について講義する。あわせてわが国で最初に分村移民を行った長野県大日向村の巡検を行う。	隔年
	日本史演習IA	古代の法制史料を精読し、律令制研究に必要な史料読解の方法を習得する。令の注釈書である『令集解』のテキスト読解と、それを踏まえた日中の制度比較などを行う。具体的には、律令国家の人民支配にかかわる戸令の条文を読み進めていく。戸令全体の解説のあと、戸令9五家条（家の相互検察や人の移動の把握）、戸令10戸逃走条（逃亡戸の追跡や租税の代納）、戸令11給侍条（子孫・近親による高齢者介護）、戸令12聴養条（養子の範囲・登録）の各条を読解していき、最後にその成果を総括する。	隔年
	日本史演習IB	古代の法制史料を精読し、律令制研究に必要な史料読解の方法を習得する。令の注釈書である『令集解』のテキスト読解と、それを踏まえた日中の制度比較などを行う。具体的には、律令国家の人民支配にかかわる戸令の条文を読み進めていく。戸令全体の解説のあと、戸令13為戸条（戸の分割など）、戸令14新附条（戸への加入承認や本籍地の選択・確定、戸の合体など）、戸令15居狭条（国内外での移住手続）、戸令16没落外蕃条（外国からの渡来者・帰国者の扱い）の各条を読解していき、最後にその成果を総括する。	隔年
	日本史演習IIA	本演習では、近世史料を講読しつつ、神社の祭祀・組織を中心とした日本宗教社会史研究における基礎的知識と研究方法を修得する。具体的には、京都の北野天満宮（北野神社）における祭祀・組織を事例とし、先行研究の検討をふまえ、未公開であり、くずし字で記されている神社史料（筑波大学所蔵北野神社文書「就仮遷宮潔斎中雜録」）の写真版を読解し、日本宗教社会史研究における基礎的知識を修得しつつ、その研究方法を検討する。	隔年
	日本史演習IIB	本演習では、近世史料を講読し、神社の祭祀・組織を中心とした日本宗教社会史研究における基礎的知識と研究方法を修得しつつ、論文作成能力を錬成する。具体的には、京都の北野天満宮（北野神社）遷宮に参加する祭祀・組織に注目し、先行研究の検討をふまえ、未公開であり、くずし字で記されている神社史料（筑波大学所蔵北野神社文書の享保19～20年仮遷宮記）を読解し、日本宗教社会史研究における基礎的知識を学びつつ研究方法を検討し、論文作成に向けての視点を考察する。	隔年
	日本史演習IIIA	日本近代思想史に関する文献を講読する演習授業。春学期は明治～昭和期に活動した思想家・ジャーナリストである三宅雪嶺（1860～1945）の自伝『自分を語る』を精読する。日本近現代史におけるジャーナリズムと思想の関係を、三宅雪嶺を中心に徳富蘇峰との比較において検討する。自伝史料の詳細な分析を行なう。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本史演習IIIIB	日本近代思想史に関する文献を講読する演習授業。秋学期は、前期に引き続き三宅雪嶺のもう一つの自伝である『大学今昔譚』を精読する。その際、自伝が連載された雑誌『婦人之友』と、それに掲載された他の回想的論説にも注意を払いながら進めていく。三宅とは同時代に活動した徳富蘇峰との比較に留意する。	隔年
	日本史演習IVA	近代日本における「他者認識」・アジア認識に関する先行研究への「テキスト批判」を行う。日本の研究を中心に取り上げつつ、ほかのアジアにおける研究との比較を行う。このテーマに対する研究的考察ができることを目標とする。	隔年
	日本史演習IVB	近代東アジアにおける「他者認識」・アジア認識に関する先行研究への「テキスト批判」を行う。韓国を中心に、日本における先行研究との比較を視野に入れながら、先行研究の問題意識や論点、研究的な位置づけなどを明らかにすることを目標とする。	隔年
	日本史基礎実習	日本史研究の基礎的な方法論を修得するため、実地に調査・観察するフィールドワークを行う。受講者は、日本史学領域全教員による通史的視野に立った指導を受けつつ、具体的な調査地を設定し、事前に調査地および日本史学研究者として身につけるべき調査の技能を学んだ上で、集中形式で調査地におけるフィールドワークを実施していく。これらを通じて、研究倫理をふまえ、協同して行う史料閲覧・撮影、聞き取り調査、景観観察等の技術を修得する。	隔年, 集中
	日本史研究法実習	日本史学研究の専門的な方法論を修得するため、実地に調査・観察するフィールドワークを行い、日本史学研究の専門的素養である実地調査の方法と問題点を検討する。受講者は、日本史学領域全教員による通史的視野に立った指導を受けつつ、事前に調査地に関する学修およびその成果の報告を行った後に、集中形式で調査地におけるフィールドワークを協同して行う。その上で、史料閲覧・撮影、聞き取り調査、景観観察など、専門的調査における方法・問題点を考察し、研究倫理を含む日本史学研究者として必要な姿勢を体得していく。	隔年, 集中
	東洋社会文化史IA	中国明清時代の少数民族社会における道教の受容の歴史について、写本資料を講読しながら理解を深めその意義を講義する。清末広西のランテン系ヤオ族社会で使用された『大齋秘語』を講読し、道教写本の研究方法、明清道教史、道教の多元性、漢族と少数民族の道教の異同を論じる方法を検討する。特に死者儀礼における身体の再生の部分をあつかい、儀礼的枠組みの大きな共通性と生命論の解釈の民族的・地域的独自性を検討する。	隔年
	東洋社会文化史IB	中国南宋時代の社会において行われた道教儀礼を取り上げ、儀礼文献の解説と分析を交えながら講義する。この授業では13世紀の金允中『上清靈宝大宝法』巻16黄籙次序品、巻22臨壇符法品により、道教儀礼の構造と主要な儀礼項目内容を検討し、文献資料に現れる語彙、構文、意味について習熟し、宋代を軸とする中国社会における道教儀礼の理解を深める。	隔年
	東洋社会文化史IIA	中国南宋時代の社会において行われた道教儀礼を取り上げ、儀礼文献の解説と分析を交えながら講義する。この授業では13世紀の金允中『上清靈宝大宝法』巻37水火鍊度品、巻44鍊度により、道教の死者儀礼に見られる死者への働きかけ、特に鍊度について考察を加える。同時代の王契真『上清靈宝大法』、蔣叔輿『無上黄籙大齋立成儀』などとの比較も行い、宋代を軸とする中国社会における道教儀礼の理解を深める。	隔年
	東洋社会文化史IIB	中国清時代の18世紀後半から19世紀前半における道教の実態について、『道藏輯要』所収の呂祖經典である『玉清贊化九天演政心印集経』、『玉清贊化九天演政心印宝懺』、『九皇新経註解』を取り上げ、部分的に講読しながら、清朝道教史をその独自の発展や活力の視点から捉え直すことを試みる。儒教、道教の典籍を当時の道教界に属した知識人と同次元で理解することにより、民間社会における宗教の力量について考察する。	隔年
	東洋政治経済史IA	1～2年次生を対象とする。中国の近代史について、特に政治史の重要な先行研究を履修者とともに講読する。テキストでは中国語、日本語、英語の文献を採用する。受講者は輪番でレジュメを作成し、それに基づき参加者全員で議論を行いたい。	隔年
	東洋政治経済史IB	1～2年次生を対象とする。中国の現代史について、特に政治史の重要な先行研究を履修者とともに講読する。テキストでは中国語、日本語、英語の文献を採用する。受講者は輪番でレジュメを作成し、それに基づき参加者全員で議論を行いたい。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	東洋政治経済史IIA	1～2年次生を対象とする。中国の近代史について、特に社会経済史の重要な先行研究を履修者とともに講読する。テキストでは中国語、日本語、英語の文献を採用する。受講者は輪番でレジュメを作成し、それに基づき参加者全員で議論を行いたい。	隔年
	東洋政治経済史IIB	1～2年次生を対象とする。中国の現代史について、特に社会経済史の重要な先行研究を履修者とともに講読する。テキストでは中国語、日本語、英語の文献を採用する。受講者は輪番でレジュメを作成し、それに基づき参加者全員で議論を行いたい。	隔年
	東洋史史料研究IA	清代雍正年間から乾隆20年までの銭法について解説した上で、当該時期の銭法に関する檔案史料を受講生全員で講読し、官撰書の記載内容と比較しながら、檔案史料から読み取れる事実関係について議論する。講読する史料は、『雍正朝内閣六科史書戸科』『内閣題本戸科貨幣類』『明清檔案』『宮中檔硃批奏摺財政類』『宮中檔雍正朝奏摺』『宮中檔乾隆朝奏摺』『議覆檔』『大清歷朝実録』『皇朝文献通考』『欽定大清会典事例』など。	隔年
	東洋史史料研究IB	清代雍正年間から乾隆20年までの銅政について解説した上で、当該時期の銅政に関する檔案史料を受講生全員で講読し、官撰書の記載内容と比較しながら、檔案史料から読み取れる事実関係について議論する。講読する史料は、『雍正朝内閣六科史書戸科』『内閣題本戸科貨幣類』『明清檔案』『宮中檔硃批奏摺財政類』『宮中檔雍正朝奏摺』『宮中檔乾隆朝奏摺』『議覆檔』『大清歷朝実録』『皇朝文献通考』『欽定大清会典事例』など。	隔年
	東洋史史料研究IIA	清代乾隆21～60年の銭法について解説した上で、当該時期の銭法に関する檔案史料を受講生全員で講読し、官撰書の記載内容と比較しながら、檔案史料から読み取れる事実関係について議論する。講読する史料は、『雍正朝内閣六科史書戸科』『内閣題本戸科貨幣類』『明清檔案』『宮中檔硃批奏摺財政類』『宮中檔雍正朝奏摺』『宮中檔乾隆朝奏摺』『議覆檔』『大清歷朝実録』『皇朝文献通考』『欽定大清会典事例』など。	隔年
	東洋史史料研究IIB	清代乾隆21～60年の銅政について解説した上で、当該時期の銅政に関する檔案史料を受講生全員で講読し、官撰書の記載内容と比較しながら、檔案史料から読み取れる事実関係について議論する。講読する史料は、『雍正朝内閣六科史書戸科』『内閣題本戸科貨幣類』『明清檔案』『宮中檔硃批奏摺財政類』『宮中檔雍正朝奏摺』『宮中檔乾隆朝奏摺』『議覆檔』『大清歷朝実録』『皇朝文献通考』『欽定大清会典事例』など。	隔年
	古代西アジア史研究特講IA	古代メソポタミアの歴史記述について体系的に学び、古代メソポタミアの人々の歴史観の変遷を考察する。楔形文字の原典から古代メソポタミアの種々の歴史文書を文献学的に正確に読み、その内容について考察する。この授業では特にシュメルとバビロニアの碑文を講読する。	
	古代西アジア史研究特講IB	古代メソポタミアの歴史記述について体系的に学び、古代メソポタミアの人々の歴史観の変遷を考察する。楔形文字の原典から古代メソポタミアの種々の歴史文書を文献学的に正確に読み、その内容について考察する。この授業では特にアッシリアの碑文を講読する。	
	古代西アジア史研究特講IIA	シュメル語初級文法の概要を学ぶ。紀元前22～20世紀（グデア王朝時代・ウル第三王朝時代・イシン王朝時代）におけるいわゆる「古典シュメル語」の特性に焦点を絞り、文法概要の説明と練習問題の実施を交互させながら、音韻論、正字法、名詞句、動詞語幹と名詞形、格、代名詞、定動詞の活用、動詞と名詞の関わり方、法性・否定・接続の順番で学習する。	
	古代西アジア史研究特講IIB	シュメル語の読解能力を習得するとともに、紀元前三千年紀の楔形文字書体を学習し、原史料の読解に基づく古代西アジア史研究についての理解を深める。ウル第三王朝期の碑文、グデア王朝期の碑文、ウル第三王朝期の法文書の中から、言語の習得に適切な平易なサンプルを選び、講読する。	
	ヨーロッパ・アメリカ史研究特講IA	第2次世界大戦前のイギリスおよび旧イギリス帝国圏の歴史について、主として海外植民地を対象とするイギリス帝国史の分野の英語文献を講読する。授業の各回において、テキストとなる論文についての発表を受講生に課すことによって、イギリス本国のみならず帝国諸地域を含めた、広い意味での「イギリス」という地域への歴史学的視点を養う。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ヨーロッパ・アメリカ史研究特講IB	第2次世界大戦後のイギリスおよび旧イギリス帝国圏の歴史について、主として海外植民地を対象とするイギリス帝国史の分野の英語文献を講読する。授業の各回において、テキストとなる論文についての発表を受講生に課すことによって、イギリス本国のみならず帝国諸地域を含めた、広い意味での「イギリス」という地域への歴史学的視点を養う。	
	ヨーロッパ・アメリカ史研究特講IIIA	20世紀のアメリカ合衆国における、貧困と失業、社会保障・社会福祉の歴史について考察する。授業の前半では、世紀転換期の革新主義の時代から、1930年代のニューディール、第二次世界大戦期を経て1960年代の「偉大な社会」に至るまで、社会政策が拡充していった歴史的過程を検討する。その後、1970年代以降、アメリカ経済が停滞する中で社会政策が後退を余儀なくされ、新たな社会福祉モデルが追及されていくようになった状況を見ていく。毎回、それぞれのテーマに応じた英語の文献を読みながら、授業を進めていく。	
	ヨーロッパ・アメリカ史研究特講IIB	20世紀のアメリカ合衆国における、医療の歴史について考察する。授業の前半では、アメリカ史において医療がどのように研究されてきたのかを理解するために、主要な研究を概観する。その後、世紀転換期の革新主義の時代の医療を取り上げた論文を講読する。授業の後半では、アメリカの医療史の中で、人種・エスニシティ、ジェンダーの視点がどのように取り入れられてきたのかを学び、関連する論文を講読する。さらに、医療制度や医療保険をめぐる現代的な問題について理解を深めるために、医療政策を扱った論文を講読する。	
	ヨーロッパ・アメリカ史研究特講IIIA	ヨーロッパ史研究に関連する文献・テーマを紹介しながら、歴史学研究の基礎的方法論を習得することを目的とする。歴史学の方法論は隣接諸分野から多くを借用しているため、本授業で取り上げられる文献やテーマも社会学や哲学、人類学など、歴史学以外のものも含まれる。なお授業は指定のテキストを参照しながらディスカッション形式で行われる。毎回テキストの該当箇所を指示しておく。この授業では特に哲学のテキストを参照する。	
	ヨーロッパ・アメリカ史研究特講IIIB	ヨーロッパ史研究に関連する文献・テーマを紹介しながら、歴史学研究の基礎的方法論を習得することを目的とする。歴史学の方法論は隣接諸分野から多くを借用しているため、本授業で取り上げられる文献やテーマも社会学や哲学、人類学など、歴史学以外のものも含まれる。なお授業は指定のテキストを参照しながらディスカッション形式で行われる。毎回テキストの該当箇所を指示しておく。この授業では特に社会学・人類学のテキストを参照する。	
	歴史地理学特講A	日本の絵図・地図ならびに文書史料と統計資料に関して、近年の研究動向を把握するとともに、それらの歴史地理学における活用方法を身に付けることが目的である。授業の前半では日本の絵図・地図、後半では文書・統計に関して、従来の歴史地理学の研究を紹介したのち、それらの活用方法について検討する。具体的には、前半では古代・中世の絵図、近世の国絵図、城下絵図、町絵図、街道絵図、村絵図、近代の地籍図、絵地図を取り上げ、後半では近世の町方文書、村方文書、近代の役場文書、私文書などを取り上げる。	隔年
	歴史地理学特講B	日本の近代の地域形成に関わる歴史地理学的諸問題について、従来の研究成果の到達点について理解するとともに、様々な史資料の活用方法を身に付けることが目的である。授業の前半では従来の研究論文を受講生とともに講読する。具体的には、大都市形成、地方都市形成、農業地域形成、交通網の形成、工業地域形成に関する論文を取り上げる。授業の後半では日本の近代の地誌、旅行記録、案内記を具体的に取り上げて、その活用方法を学習する。	隔年
	歴史地理学演習A	日本の農山漁村の歴史地理学的諸問題に関して、従来の研究の到達点について理解するとともに、今後の研究課題を見出す能力を身に付けることが目的である。日本の農山漁村の歴史地理学的諸問題に関して、従来の研究論文を受講生とともに講読することによって授業を進める。具体的には、古代・中世の農村・農業、山村・林業、漁村・漁業、近世の農村（村落構造・家族構造）・農法、農業経営、山村・林業、漁村・漁業、近代の農村（土地利用・村落構造・家族構造）、農法、農業経営、山村・林業、漁村・漁業などに関する論文の講読を行う。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	歴史地理学演習B	日本および中国の近代の地域形成に関わる歴史地理学的諸問題について、従来の研究成果の到達点について理解するとともに、様々な史資料の活用方法を身に付けることが目的である。授業の前半では従来の研究論文を受講生とともに講読する。具体的には、大都市形成、地方都市形成、農業地域形成、交通網の形成、工業地域形成に関する論文を取り上げる。授業の後半では日本および中国の近代の地誌、旅行記録、案内記を具体的にに取り上げて、その活用方法を学習する。	隔年
	歴史地理学実習IA	歴史地理学分野での学術論文・学術報告を作成できる調査能力を養うことを目的とする。特定地域をフィールドに選び、野外での観察や調査の方法を実地で指導する。具体的には、調査の計画立案から、自然景観および人文景観の観察、土地利用の調査、石造物の調査、建築物の調査、公文書ならびに私蔵文書史料の調査、聞き取り調査などの方法を実地で指導する。受講生の積極的・主体的な取り組みを重視し、フィールドでの学習の過程で、自ら問題を見出すこともねらいとする。	隔年，集中
	歴史地理学実習IB	歴史地理学における野外実習結果の分析方法とまとめ方を指導し、歴史地理学分野での学術論文・学術報告を作成できる能力を養うことを目的とする。具体的には、歴史地理学実習IAにおける自然景観・人文景観の観察、土地利用の調査、石造物の調査、建築物の調査、公文書ならびに私蔵文書史料の調査、聞き取り調査などの結果を、どのように分析・表現して、学術論文・学術報告としてまとめることができるのかを指導する。授業の最後に受講生は調査結果のレポートを作成して提出する。	隔年，集中
	歴史地理学実習IIA	歴史地理学分野での学術論文・学術報告を作成できる調査能力を養うことを目的とする。歴史地理学実習IAとは異なる地域をフィールドに選び、野外での観察や調査の方法を実地で指導する。具体的には、調査の計画立案から、自然景観および人文景観の観察、土地利用の調査、石造物の調査、建築物の調査、公文書ならびに私蔵文書史料の調査、聞き取り調査などの方法を実地で指導する。受講生の積極的・主体的な取り組みを重視し、フィールドでの学習の過程で、自ら問題を見出すこともねらいとする。	隔年，集中
	歴史地理学実習IIB	歴史地理学における野外実習結果の分析方法とまとめ方を指導し、歴史地理学分野での学術論文・学術報告を作成できる能力を養うことを目的とする。具体的には、歴史地理学実習IIAにおける自然景観・人文景観の観察、土地利用の調査、石造物の調査、建築物の調査、公文書ならびに私蔵文書史料の調査、聞き取り調査などの結果を、どのように分析・表現して、学術論文・学術報告としてまとめることができるのかを指導する。授業の最後に受講生は調査結果のレポートを作成して提出する。	隔年，集中
	先史学・考古学研究IA	狩猟採集民社会では、食料の分配など平等主義的な社会原理が強く働いていることが指摘されている。そこからどのように社会的な不平等が生まれ、階層化社会が形成されるようになるのか、先史時代における社会的な不平等の発生をテーマとしたFlannery, K. and J. Marcus 2012 “The Creation of Inequality”をテキストとして、特に狩猟採集や農耕との関係、儀礼関係する建物や威信財について扱った章を読みながら理解を深める。さらに、各章の内容を題材にして、関連する文献にも触れながら幅広い観点から議論をおこなう。	隔年
	先史学・考古学研究IB	平等主義的原理が強く働く狩猟採集民社会からどのようにして社会的な不平等が発生していくのか、そのメカニズムについて先史時代の考古学的資料を基に考察を深めていく。特に、洞窟壁画や動産美術などの旧石器時代の芸術、シンボリズムや血縁的集団の形成と深い関係にある儀礼祭祀、狩猟採集民社会における定住化の問題、農耕と社会の階層化の関係、饗宴が果たした役割、公共建造物の出現、象徴的意味の付与された器物の生産など、それぞれのテーマが議論されている英文の論文を読み、それを基にした議論を通じて理解を深める。	隔年
	先史学・考古学研究IIA	人類社会の適応戦略について幅広い視点から考察する先史学の方法と理論について理解を深める。狩猟採集社会の特徴について多方向から検討しているテキストを講読し、議論を通じて先史時代の社会について考察する。受講者がテキストの中から担当する文献を選び、その内容について発表した後、討論をおこない、それぞれのテーマに関する理解を深めていく。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	先史学・考古学研究IIB	人類社会の適応戦略について幅広い視点から考察する先史学の方法と理論について理解を深める。初期農耕社会の特徴について多方面から検討しているテキストを講読し、議論を通じて先史時代の社会について考察する。テキストとして指定された論文を読み、受講者がその内容について発表し、それを受けて議論していく。	隔年
	先史学・考古学研究IIIA	古墳時代は日本列島中央部における国家形成期と位置づけられ、各地域社会を横断する汎列島規模での重層的な政治構造が成立した時期と考えられる。この授業では、古墳の存在形態をめぐる従来の議論を批判的に検討しながら、古墳時代における政治構造の変遷とその特質について理解を深めることを目標とする。毎回の授業では、古墳の存在形態をめぐるこれまでの議論とその問題点について、受講生1名が研究報告をおこなう。その内容を受けて教員による講義と全体での討議をおこない、古墳時代の政治構造を多角的かつ通時的に考察する。	隔年
	先史学・考古学研究IIIB	弥生時代から古墳時代にかけての社会変化を理解するにあたり、前方後円墳に代表される古墳がどのような経緯で成立したのかを明らかにすることは、きわめて重要な課題である。この授業では、各地に認められる弥生墳丘墓の実態を把握したうえで、古墳出現の歴史的意義について理解を深める。授業の前半で弥生墳丘墓の実態把握を進め、授業の後半で纏向型前方後円墳と東日本の前方後方墳について検討する。毎回の授業では、個別のテーマについて1名の受講生が研究報告をおこなう。その内容を受けて教員による講義と全体での討議をおこない、古墳出現の歴史的意義を考察する。	隔年
	先史学・考古学研究IVA	弥生時代には、拠点集落を中核とした地域社会の構造が典型的に認められるが、古墳時代になると、一般の集落から独立したかたちで首長居館が成立し、一般の集落は散在化する。この授業では、主に関東地方の事例分析にもとづきながら、古墳時代における地域社会の特質について理解を深める。古墳時代の居住域、墓域、生産域などにかかわる個別のテーマについて、毎回1名の受講生が研究報告をおこなう。その内容を受けて教員による講義と全体での討議をおこない、古墳時代における地域社会の構造的特質について考察する。	隔年
	先史学・考古学研究IVB	古墳時代の考古資料には、近畿地方の政治勢力とのかかわりを示すものとは別に、特定の地域にのみ分布する考古資料も少なからず存在する。この授業では、そうした地域的偏在性を示す考古資料を取り上げて、古墳時代の地域色とその背景について理解を深める。地域的偏在性を示す古墳時代資料のうち、東海地方と関東地方の事例を取り上げて、毎回1名の受講生が研究報告をおこなう。その内容を受けて教員による講義と全体での討議をおこない、古墳時代の地域色について考察する。	隔年
	先史学・考古学研究VA	先史学研究に求められる材質分析、製作技法の解明、年代測定、産地推定、古環境復元といった考古科学、考古化学に関する理論と実践について、それぞれの原理と課題について理解を深めることを目的とする。その上で、それらの成果から導き出される先史学・考古学的な解釈を含んだ最新の論文等を読解し、幅広い視点からその結果および課題を考察する。受講生の研究テーマを考慮のうえ、いくつかの特定の時代および地域に注目し、とくに産地推定に関する最新の学術論文を選択する。論文中に利用されている分析手法の理論を理解したうえで、内容を読解、考察しながらその方法論と課題について検討する。各回のテーマについて、毎回1名の受講生が理論についてまとめ、次に、結果の解釈・課題について研究報告をおこなう。つづいて、その内容について全体で討議をおこなう。	隔年
	先史学・考古学研究VB	先史学研究に求められる材質分析、製作技法の解明、年代測定、産地推定、古環境復元といった考古科学、考古化学に関する理論と実践について、それぞれの原理と課題について理解を深めることを目的とする。その上で、それらの成果から導き出される先史学・考古学的な解釈を含んだ最新の論文等を読解し、幅広い視点からその結果および課題を考察する。受講生の研究テーマを考慮のうえ、いくつかの特定の時代および地域に注目し、とくに年代測定に関する最新の学術論文を選択する。論文中に利用されている分析手法の理論を理解したうえで、内容を読解、考察しながらその方法論と課題について検討する。各回のテーマについて、毎回1名の受講生が理論についてまとめ、次に、結果の解釈・課題について研究報告をおこなう。つづいて、その内容について全体で討議をおこなう。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	先史学・考古学研究VIA	先史学研究に求められる材質分析、製作技法の解明、年代測定、産地推定、古環境復元といった考古科学、考古化学に関する理論と実践について、それぞれの原理と課題について理解を深めることを目的とする。その上で、それらの成果から導き出される先史学・考古学的な解釈を含んだ最新の論文等を読み解き、幅広い視点からその結果および課題を考察する。受講生の研究テーマを考慮のうえ、いくつかの特定の時代および地域に注目する。とくに材質分析に関する最新の学術論文を選択し、そこに利用されている分析手法の理論を理解する。選択した論文を読み解き、考察しながらその方法論と課題について検討する。各回のテーマについて、毎回1名の受講生が理論についてまとめ、次に、結果の解釈・課題について研究報告をおこなう。つづいて、その内容について全体で討議をおこなう。	隔年
	先史学・考古学研究VIB	先史学研究に求められる材質分析、製作技法の解明、年代測定、産地推定、古環境復元といった考古科学、考古化学に関する理論と実践について、それぞれの原理と課題について理解を深めることを目的とする。その上で、それらの成果から導き出される先史学・考古学的な解釈を含んだ最新の論文等を読み解き、幅広い視点からその結果および課題を考察する。受講生の研究テーマを考慮のうえ、いくつかの特定の時代および地域を設定する。とくに機器分析を用いた材質分析に関する最新の学術論文を選択し、そこに利用されている分析手法の理論を理解する。それらの論文を読み解き、考察しながらその方法論と課題について検討する。各回のテーマについて、毎回1名の受講生が理論についてまとめ、次に、結果の解釈・課題について研究報告をおこなう。つづいて、その内容について全体で討議をおこなう。	隔年
	先史学・考古学基礎実習	発掘調査や測量調査などのフィールドワークに参加し、基本的な作業を修得することを目標とする。あわせて、フィールドワークに参加している学群生を指導し、調査指導者として必要な基礎的能力を養うことを目標とする。	集中
	民俗学特講IA	民俗学における信仰伝承研究に関わる先端的な研究動向を主に歴史民俗学的研究の立場から把握する。受講者それぞれの関心に応じた問題を析出し、議論を踏まえた上で、分析を行い得る能力を高める。	隔年
	民俗学特講IB	「祖先祭祀研究・葬制墓制研究の現在」をテーマとして、日本および東アジアの葬制に関する民俗学および文化人類学の研究について、比較民俗学、ならびに歴史民俗学的研究視点からの講義を行う。また関連する論文を講読し、検討することでテーマに関する研究視点・方法論を学ぶ。	隔年
	民俗学特講IIA	本講義では、主として日本の「漁業」の民俗を対象に、民俗学初期の古典的研究から精読を行い、輪読形式で、その枠組みと方法を批判的に検討しながら、民俗学的視点と方法を展望する。	隔年
	民俗学特講IIB	本講義では、「漁業」をとりまくサブシステムの動態を対象に、領域横断的な研究例の検討を行う。日本に事例を主として、日本以外の例をも参照し、今日の「漁業」研究の視点と方法について展望することを目的とする。	隔年
	民俗学特講IIIA	家族という研究対象について、関連諸科学を横断しての学説史の整理、東アジアを中心とした家族の変容の実態、暮らし（衣食住、年中行事など）、ジェンダー（婚姻、出産など）、教育・労働・福祉・暴力・死といった今日的な諸問題、グローバリゼーション下の比較家族史の課題などを理解する。これらを題材に、自身の研究を進める思考法を身につける。	隔年
	民俗学特講IIIB	自身のフィールドワークの成果を持ち寄って、端的かつ効果的な表現、概念・分析を視覚化(見える化)する様々な表現法・プレゼンテーション法、効果的な構成・レイアウトを、それぞれの事例を用いながら検討し、身に付ける。	隔年
	民俗学演習IA	民俗学における信仰伝承研究を踏まえ、民俗学ならびに関連分野の論文を講読し、受講者それぞれの研究関心からの検討を加える。民俗学における信仰伝承研究に関わる基本的な学説史を主に歴史民俗学的研究の立場から把握し、問題を析出し、議論を踏まえた上で、分析を行い得る能力を高める。	隔年
	民俗学演習IB	主に歴史民俗学的視点に関わる民俗学研究ならびに、歴史学・文化人類学・社会学・宗教学など関連領域の研究から文献を選び、講読し、批判的に検討する事により、参加者各々が歴史民俗学的研究に関する知見を深め、方法論の検討を行う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	民俗学演習IIA	柳田国男、宮本常一、桜田勝徳を取り上げ、高度経済成長期以前における民俗誌的試みを、フィールドワークやフィールドノートも含めて対象化し、民俗(族)誌の意義と可能性について検討する。	隔年
	民俗学演習IIB	占領期、高度経済成長期に現れた民俗(族)誌、及び、1990年代以降、近年の試みとして、領域横断的、あるいは、実験的な試みを、民俗学、社会学、人類学等から取り上げ(英語文献を含む)、民俗学的フィールドワークに基づく民俗(族)誌の意義と可能性について検討することを目的とする。	隔年
	民俗学演習IIIA	民俗誌の限界と可能性について考える。例として、台湾でのフィールドワークを取り上げ、戦後台湾の民俗誌の講読を通して当時の生活・家族・婚姻・養子などについて検討し、理解する。	隔年
	民俗学演習IIIB	戦前から戦中の日本統治下における台湾の社会と民俗・信仰について、当時の資料・民俗誌を講読することで理解する。特に、地域社会と人々の信仰のあり方に直結した寺廟整理に着目し、この政策がどのように始まり、地域社会にいかにか受容され、具体的にどのような手続きがなされたのかについて、当事者の生の記録を通して読み解く。これに関連して同時期の台湾において日本人・台湾人を交えた台湾の民俗の調査・研究の機運の高まりとその成果についても取り扱う。	隔年
	文化人類学特講IA	人類学の学問としての特徴は何か?本講義は民族誌の記述と文化人類学理論の関係について、具体的なケースを取り上げて議論する。テーマとしては現象学、権力論、身体論を問題化した民族誌の記述とその理論的な課題について考察する。	隔年
	文化人類学特講IB	人類学の学問としての特徴は何か?本講義は民族誌の記述と文化人類学理論の関係について、具体的なケースを取り上げて議論する。テーマとしては経済活動、親族関係、環境、主体を問題化した民族誌の記述とその理論的な課題について考察する。	隔年
	文化人類学特講IIA	現代の文化人類学の課題や理論的な動向について学ぶ。特に1980年代以降に焦点を当て、その時代に提起された課題とそれへの応答として起きた変化、およびその後の新しい考え方や方法を理解する。授業では、こうした動向の形成に大きな影響を及ぼした著作や代表的な論文を取り上げ、そこで何が問題とされ、どのようなことが論じられているか、またどのようなスタイルで調査や記述が行われているかを把握し、それに対して自分自身がどのような立ち位置を取るかを考える。	隔年
	文化人類学特講IIB	現代の文化人類学の課題や理論的な動向について学ぶ。特に科学技術社会論と呼ばれる研究群が現代の人類学に与えた理論的・方法的な影響に焦点を当て、この分野の独自性や方向性の形成に大きな影響を及ぼした著作や代表的な論文を取り上げ、そこで何が問題とされ、どのようなことが論じられているか、またどのようなスタイルで調査や記述が行われているかを把握し、その可能性と限界、および自分自身がどのような立ち位置を取るかを考える。	隔年
	文化人類学演習IA	人間を環境世界・周囲世界の中においてポストヒューマンの視点から再考する。本演習では、脱人間中心の倫理学の可能性をポストヒューマンの多様な視点から考察し議論する。	隔年
	文化人類学演習IB	本演習は民族誌の可能性について考察をした後、人類学的な問いを立てて、これを民族誌を書くことを通して、その答えを示唆する訓練を行う。演習では民族誌を分解してその構成について議論し、民族誌を書いて、建設的な批判を行う。	隔年
	文化人類学演習IIA	文化人類学の主要なテーマを取り上げ、代表的な著作、論文を取り上げて講読することで、文化人類学の考え方とアプローチについて具体的に学ぶ。この授業では特に古典的なテーマである親族に焦点を当て、受講者全員で指定した文献の講読と議論を行うことで、このテーマについての広汎かつ体系的な理解を得るとともに、近年提出されている概念や理論についても検討し、その可能性と限界、および自分自身の研究をどう位置づけるかを考える。	隔年
	文化人類学演習IIB	文化人類学の主要なテーマを取り上げ、代表的な著作、論文を取り上げて講読することで、文化人類学の考え方とアプローチについて具体的に学ぶ。この授業では特に現代的なテーマである主体性や情動に焦点を当て、受講者全員で指定した文献の講読と議論を行うことで、このテーマについての広汎かつ体系的な理解を得るとともに、近年提出されている概念や理論についても検討し、その可能性と限界、および自分自身の研究をどう位置づけるかを考える。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	民俗学・文化人類学実習A	1年次生を対象として、フィールドワークの方法論を実践的に学ぶ。フィールドワークの深め方と総合化等、今後の民俗学研究・文化人類学研究の基礎となる研究法を訓練する。民俗学・文化人類学領域全教員による指導を受け、研究テーマについての発表に基づき、参加者による討論を行う。フィールドや調査テーマについての自主学習の計画や共同学習をコーディネートする。	集中
	民俗学・文化人類学実習B	1年次生を対象として、修士論文に向けたフィールドワークの実践的遂行能力を養う。フィールドや調査テーマについての自主学習の計画や共同学習のコーディネートを継続し、実習前に予備調査を行う。民俗学・文化人類学領域全教員による指導を受け、1週間程度のフィールドワークを行い、フィールドワークで得られた資料を基について報告書を作成する。	集中
	修士論文演習A	歴史・人類学サブプログラムにおいて修士論文を作成する2年次生が、自己の所属するサブプログラム・専門領域のみならず他学術院・他研究群・他学位プログラム・他サブプログラム・他専門領域の教員も加えて随時に研究指導を受けながら、資料の収集およびその具体的な考察の方法を検討しつつ、修士論文の構想を深めていく。	集中
	修士論文演習B	歴史・人類学サブプログラムにおいて修士論文を作成する2年次生が、自己の所属するサブプログラム・専門領域のみならず他学術院・他研究群・他学位プログラム・他サブプログラム・他専門領域の教員も加えて随時に研究指導を受けながら、論文の構成および具体的な執筆方法を検討し、最終的な修士論文の完成を目指す。	集中
	(研究指導：歴史・人類学)	(9 伊藤純郎) 日本地域社会史の観点から修論執筆に向けた指導を行う。 (23 佐藤千登勢) アメリカ史に関する研究発表の指導を行う。 (35 徳丸亜木) 日本民俗学の観点から研究指導を行う。 (37 中西僚太郎) 歴史地理学の観点から修論執筆に向けた指導を行う。 (38 中野目徹) 日本近代思想史の観点から、研究指導を行う。 (56 丸山宏) 東洋社会文化史、特に宗教文化史の観点から指導を行う。 (58 三宅裕) 西アジア先史学の観点から研究発表の指導を行う。 (62 山田重郎) 古代西アジア史に関する研究発表の指導を行う。 (82 木村周平) 文化人類学の観点から研究指導を行う。 (89 柴田大輔) 西アジア宗教社会史の観点から研究指導を行う。 (97 滝沢誠) 日本考古学の観点から研究指導を行う。 (98 武井基晃) 社会伝承論の観点から研究指導を行う。 (99 谷口陽子) 文化財科学の観点から研究指導を行う。 (104 中野泰) 社会構成論の観点から研究指導を行う。 (108 朴宣美) 日本文化交流史の観点から研究指導を行う。 (121 三谷芳幸) 日本法制史・経済史の観点から研究指導を行う。 (128 山澤学) 日本宗教社会史の観点から研究指導を行う。 (129 山本真) 東洋政治経済史、特に近代中国史の観点から指導を行う。	
文学	文学批評研究(1A)	20世紀以降蓄積されてきたさまざまな文学理論を意識しながら、文学研究を学術的に展開するための方法論を発表形式で実践的に学ぶ。学生各自の問題意識にもとづいて研究方法を洗練させていくために、受講生各自が自分の研究にとってもっとも重要な先行研究を紹介し、それをもとに自分の研究の構想を発表する。受講生全員が題材として紹介される先行研究を授業までに読んでくることを義務とし、討議の充実をはかる。	隔年
	文学批評研究(1B)	すぐれた批評的・理論的著作を対象文献として指定し、毎回担当者を決めた輪読形式で読み進めることにより、文学研究を遂行するための基礎的な知識を身につけ、分析と論述の手法について学ぶ。たとえば、ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』『続・物語のディスクール』、ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力―「オブジェクション」試論』『女の時間』、橋本陽介『物語における時間と語法の比較詩学』、検索に移動 砂野 幸稔『多言語主義再考―多言語状況の比較研究』など。対象テキストは受講者の希望を勘案して決定する。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	文学批評研究(2A)	方法論的意識をより拡充しながら、文学研究を学術的に展開するための能力を高める。とりわけ近年の新たな研究動向に着目し、これからの文学研究に必要な着眼点や有効な問題設定を抽出する。先行研究からとりわけ分析の手法と論述の技法を学び、みずからの研究活動に生かすために、教員および学生各自が自分の研究と関わる優れた著作・論文を選んで紹介するとともに批評的な分析を加える。受講生全員が題材として紹介される先行研究を授業までに読んでくることを義務とし、討議の充実をはかる。	隔年
	文学批評研究(2B)	文学研究能力を高め、必要な基礎知識を確かなものとすると同時に、将来の文学教育者としての基礎的な資質を養うためにも、文学批評概説ないし文学研究入門書の一項目を受講生各自が試行的に執筆する。モデルとして、橋本陽介『物語論 基礎と応用』、丹治愛・山田広昭『文学批評への招待』、土田知則・青柳悦子『文学理論のプラクティス』、廣野由美子『批評理論入門—『フランケンシュタイン』解剖講義』などを用いる。学生各自が選んだ対象作品について、構想の作成、素案執筆、学生相互の批評を経た推敲をおこない、学術的信頼を獲得しうる水準にまで高めていく。	隔年
	文学研究発表演習A	受講生全員が研究発表を行い、教員も参加してディスカッションを行うことで、文学・文化研究分野における論文執筆や学会発表の方法の基礎を実践的に学ぶ。発表者は、必ずしも完成された研究内容でない萌芽的な研究であっても、問題意識を鮮明にし、先行研究を概観しつつ当該研究の位置づけを示し、的確に対象テキストの分析をおこなったうえで有意義な考察を展開するよう努め、その成果を学術的な形式にのっとり発信する機会とする。他の受講者は、これらの側面を吟味し、研究の質の向上のための改善策を検討し、建設的な発言能力を磨く。	
	文学研究発表演習B	受講生全員がより高度な学術的水準をめざして研究発表を行い、教員も参加してディスカッションを行うことで、文学・文化研究分野における学術論文執筆や学会発表の洗練方法を実践的に学ぶ。発表者は学位論文に結実することを念頭においた研究発表をおこない、問題意識を深化させ、先行研究を批判的に概観しつつ当該研究の独自性を示し、的確かつ説得力ある対象テキスト分析をおこなったうえで学界に寄与する考察を展開するよう努め、その成果を完成度の高い学術的形式にのっとり発信する機会とする。他の受講者は、これらの側面を吟味し、研究の質の向上のための有効な改善策を検討し、建設的な発言能力を一層磨いて、学術交流のための資質を高める。	
	文学理論研究(1A)	最新の文学理論を自ら応用し作品分析に利用できるまで習熟することを目標とする。そのために、最近の文学理論を理解するために不可欠な、すでに古典的となった欧米の文学理論書、エーリッヒ・アウエルバッハ『ミメーシス』を、主に日本語訳を利用して講読することで、ヨーロッパ文学における現実表象について学ぶ。	隔年
	文学理論研究(1B)	最新の文学理論を自ら応用し作品分析に利用できるまで習熟することを目標とする。そのために、最近の文学理論を理解するために不可欠な、すでに古典的となった欧米の文学理論書、エドワード・サイード『オリエンタリズム』の英語原典(部分)を、日本語訳を参考にしながら講読することで、脱構築、ポストコロニアル批評の根本的発想を学ぶ。	隔年
	文学理論研究(2A)	最新の文学理論を自ら応用し作品分析に利用できるまで習熟することを目標とする。そのために、最近の文学理論を理解するために不可欠な、すでに古典的となった欧米の文学理論書、ポール・ド・マン『盲目と洞察』を、主に日本語訳を利用して講読することで、言葉の意味作用の複雑性について学ぶ。	隔年
	文学理論研究(2B)	最新の文学理論を自ら応用し作品分析に利用できるまで習熟することを目標とする。そのために、最近の文学理論を理解するために不可欠な、すでに古典的となった欧米の文学理論書、フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識』の英語原典(部分)を、日本語訳を参考にしながら講読することで、マルクス主義批評の根本的発想を学ぶ。	隔年
	文学交流論演習(1A)	広義でのテキスト作品(文学テキスト作品、画像・映像を併用した作品を含む)を通じた文化交流の諸相を知るために、日本語もしくは英語で書かれた、近現代テキスト作品を精読する。学術的レベルでのテキスト作品精読に不可欠な、周辺資料の調査方法、研究資料調査方法を習得する。植民地出身者が宗主国語で書いた作品や、テキストで用いられる言語を第一言語としない人により書かれた作品、高級文化とポピュラー・カルチャーを交錯させる作品など、複数の文化・言語・地域を交流・交差させる作品を取り上げる。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	文学交流論演習(1B)	広義でのテキスト作品（文学テキスト作品、図像・映像を併用した作品を含む）を通じた文化交流についての理解を深めるために、日本語もしくは英語で書かれた、近現代テキストの精読を行う。学術的レベルでのテキスト作品精読に不可欠な、周辺資料の調査方法、研究資料調査方法、研究倫理を習得する。ジェンダー論、ポストコロニアル理論とくに重視する。LGBTQ、女性、人種のマイノリティなど、社会的弱者によって/ついて書かれたテキスト作品を重視する。	隔年
	文学交流論演習(2A)	広義でのテキスト作品（文学テキスト作品、図像・映像を併用した作品を含む）を通じた文化交流の諸相を知るために、日本語もしくは英語で書かれた、近現代テキスト作品に関する、研究論文（日本語・英語）の読解演習を行う。学術論文を読解し、論理構成を理解し、自分の研究に応用するための基礎力を養成する。研究論文読解の前提となる、対象テキスト作品の精読を合わせて行う。ジェンダー、階級、マイノリティ表象に注目した、複数の文化・言語・地域を交流・交差させる作品について書かれた学術論文を取り上げる。	隔年
	文学交流論演習(2B)	広義でのテキスト作品（文学テキスト作品、図像・映像を併用した作品を含む）を通じた文化交流の諸相に関する理解を深めるために、日本語もしくは英語で書かれた、近現代テキスト作品に関する、学術・研究論文（日本語・英語）の読解演習を行う。学術論文を読解し、論理構成を理解し、自分の研究に応用するための応用力を養成する。研究論文読解の前提となる、対象テキスト作品の精読スキル育成を行う。ジェンダー、階級、マイノリティ表象、文化序列に注目した、複数の文化・言語・地域を交流・交差させる作品について書かれた学術論文を取り上げる。	隔年
	比較文学研究(1A)	比較文学のひとつの方法論として翻訳研究を行う。明治時代の言説（文学論・評論・文芸）を当時の文脈で考証する力をつけることを目標として同時代資料と併せて読み込む訓練を行う。基礎知識となる著作の講読を担当を決めて行う。	隔年
	比較文学研究(1B)	明治時代の一次資料を丁寧に読む。近代文学を歴史的に位置づけながら追究する。まずは二次資料による現在の解釈を離れて、文献を初出の形で読むことによる研究方法を学ぶ。受講者の知識の領域や興味の範囲を勘案してより具体的な計画をたてる。自らが研究している領域のなかから翻訳・翻案に関わるテーマを見出して発表を準備したうえで、履修者で討論・検討を行う。	隔年
	比較文学研究(2A)	比較文学のひとつの基本的研究としてジャンル研究を行う。明治時代の言説（文学論・評論・文芸）を当時の文脈で考証する力をつけることを目標として同時代資料と併せて読み込む訓練を行う。基礎知識となる著作の講読を担当を決めて行う。	隔年
	比較文学研究(2B)	明治時代の一次資料を丁寧に読む。近代文学を歴史的に位置づけながら追究する。近代文学を歴史的に、当時のままの形（初出形態かそれを代替するもの）で丁寧に読み、時代状況のなかに位置づける訓練をする。必要な資料と適切なテキストを準備しそれを読む。基本的に演習形式で行なう。自らが研究している領域のなかから外交文学受容とジャンルに関わるテーマを見出して発表を準備したうえで、履修者で討論・検討を行う。	隔年
	古典古代学研究(1A)	ルネサンス期のラテン語・イタリア語文献を原典で講読する。ルネサンス期イタリアの文化は、三代にわたるメディチ家の人々、すなわちコジモ（1389-1464）、ピエロ（1416-1469）、ロレンツォ（1449-1492）の治世に極まる。この授業ではロレンツォによる『書簡集』を系統的に講読し、芸術家や文化人たちとの交流の諸相を浮き彫りにする。テキストとしては、リッカルド・フビーニ編による『書簡集』より第1巻（1460-1474）を扱う。また必要に応じて聖書に言及し、神学的背景を辿る。	隔年
	古典古代学研究(1B)	ルネサンス期のラテン語・イタリア語文献を原典で講読する。ルネサンス期イタリアの文化は、三代にわたるメディチ家の人々、すなわちコジモ（1389-1464）、ピエロ（1416-1469）、ロレンツォ（1449-1492）の治世に極まる。この授業ではロレンツォによる『書簡集』を系統的に講読し、芸術家や文化人たちとの交流の諸相を浮き彫りにする。テキストとしては、リッカルド・フビーニ編による『書簡集』より第2巻（1474-1478）を扱う。また必要に応じて聖書に言及し、神学的背景を辿る。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	古典古代学研究(2A)	ルネサンス期のラテン語・イタリア語文献を原典で講読する。ルネサンス期イタリアの文化は、三代にわたるメディチ家の人々、すなわちコジモ(1389-1464)、ピエロ(1416-1469)、ロレンツォ(1449-1492)の治世に極まる。この授業ではロレンツォによる『書簡集』を系統的に講読し、芸術家や文化人たちとの交流の諸相を浮き彫りにする。テキストとしては、ニコライ・ルビンスティン編による『書簡集』より第3巻(1478-1479)を扱う。また必要に応じて聖書に言及し、神学的背景を辿る。	隔年
	古典古代学研究(2B)	ルネサンス期のラテン語・イタリア語文献を原典で講読する。ルネサンス期イタリアの文化は、三代にわたるメディチ家の人々、すなわちコジモ(1389-1464)、ピエロ(1416-1469)、ロレンツォ(1449-1492)の治世に極まる。この授業ではロレンツォによる『書簡集』を系統的に講読し、芸術家や文化人たちとの交流の諸相を浮き彫りにする。テキストとしては、ニコライ・ルビンスティン編による『書簡集』第4巻(1479-1480)を扱う。また必要に応じて聖書に言及し、神学的背景を辿る。	隔年
	古典古代学演習(1A)	弘法大師空海以来、本邦での一千年に及ぶ梵字悉曇学の伝承を、江戸期に『梵学津梁』全1千巻のかたちで集大成した慈雲尊者飲光のヴィジョンを継承し、サンスクリット文献学を悉曇学の延長線上において捉える。サンスクリット文法に関しては、辻直四郎『サンスクリット文法』(岩波全書、1974年)の体系的記述を全面的に参照する。テキストとしては『普賢行願讃』の本文伝承を論じ、かつ併せて本邦における仏教諸派の教義史をも参照する。また印欧語文法学を参照し、ギリシア語・文学にも論及する。	隔年
	古典古代学演習(1B)	弘法大師空海以来、本邦での一千年に及ぶ梵字悉曇学の伝承を、江戸期に『梵学津梁』全1千巻のかたちで集大成した慈雲尊者飲光のヴィジョンを継承し、サンスクリット文献学を悉曇学の延長線上において捉える。サンスクリット文法に関しては、辻直四郎『サンスクリット文法』(岩波全書、1974年)の体系的記述を全面的に参照する。テキストとしては『阿弥陀経』の本文伝承を論じ、かつ併せて本邦における仏教諸派の教義史をも参照する。また印欧語文法学を参照し、ギリシア語・文学にも論及する。	隔年
	古典古代学演習(2A)	弘法大師空海以来、本邦での一千年に及ぶ梵字悉曇学の伝承を、江戸期に『梵学津梁』全1千巻のかたちで集大成した慈雲尊者飲光のヴィジョンを継承し、サンスクリット文献学を悉曇学の延長線上において捉える。サンスクリット文法に関しては、辻直四郎『サンスクリット文法』(岩波全書、1974年)の体系的記述を全面的に参照する。テキストとしては『般若心経』の本文伝承を論じ、かつ併せて本邦における仏教諸派の教義史をも参照する。また印欧語文法学を参照し、ギリシア語・文学にも論及する。	隔年
	古典古代学演習(2B)	弘法大師空海以来、本邦での一千年に及ぶ梵字悉曇学の伝承を、江戸期に『梵学津梁』全1千巻のかたちで集大成した慈雲尊者飲光のヴィジョンを継承し、サンスクリット文献学を悉曇学の延長線上において捉える。サンスクリット文法に関しては、辻直四郎『サンスクリット文法』(岩波全書、1974年)の体系的記述を全面的に参照する。テキストとしては『金剛般若経』の本文伝承を論じ、かつ併せて本邦における仏教諸派の教義史をも参照する。また印欧語文法学を参照し、ギリシア語・文学にも論及する。	隔年
	和漢比較文学研究(1A)	古代和歌の表現に習熟し、古代文学関連の文献の扱い方を学ぶことを主な目的とし、『古今和歌集』から「寛平御時后宮歌合」歌を取りあげる。なかでも『新撰万葉集』所収歌について和歌を翻案した漢詩との表現の異同を考察する。あわせて詩的言語の注解方法に習熟するとともに『万葉集』から『古今和歌集』に到る古代和歌の表現形成を探求する。扱う資料の概観を行った後、12番歌、13番歌について演習担当者を決めて報告を求め、討議を行う。	隔年
	和漢比較文学研究(1B)	古代和歌の表現に習熟し、古代文学関連の文献の扱い方を学ぶことを主な目的とする。『古今和歌集』から「寛平御時后宮歌合」歌を取りあげる。なかでも『新撰万葉集』所収歌について和歌を翻案した漢詩との表現の異同を考察する。あわせて詩的言語の注解方法に習熟するとともに『万葉集』から『古今和歌集』に到る古代和歌の表現形成を探求する。15番歌、46番歌について演習担当者を決めて報告を求め、討議を行う。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	和漢比較文学研究(2A)	古代和歌の表現に習熟し、古代文学と関連の深い歴史文献の扱い方を学ぶことを主な目的とする。『古今和歌集』から「寛平御時后宮歌合」歌を取りあげる。なかでも『新撰万葉集』所収歌について和歌を翻案した漢詩との表現の異同を考察する。あわせて漢詩表現を支える歴史文献の用語についても習熟することで、『万葉集』から『古今和歌集』に到る古代和歌の連続性に目を向ける。扱う資料の概観を行った後、92番歌、101番歌について演習担当者を決めて報告を求め、討議を行う。	隔年
	和漢比較文学研究(2B)	古代和歌の表現に習熟し、古代文学と関連の深い歴史文献の扱い方を学ぶことを主な目的とする。『古今和歌集』から「寛平御時后宮歌合」歌を取りあげる。なかでも『新撰万葉集』所収歌について和歌を翻案した漢詩との表現の異同を考察する。あわせてあわせて漢詩表現を支える歴史文献の用語についても習熟することで、『万葉集』から『古今和歌集』に到る古代和歌の連続性に目を向ける。103番歌、131番歌について演習担当者を決めて報告を求め、討議を行う。	隔年
	日本古典文学研究(1A)	『源氏物語』注釈所引の年代記類をとりあげ、私撰国史のひろがりについて考える。あわせて、問題を自分のものとするために考察を進める技術、知識を得る。具体的には、『源氏物語』、『源氏物語』注釈史と、時代をつうじてさまざまに書かれた年代記類とが不可分にかかわりをもつことを、年表型、三国対照型の形式をもつものに中心的に注目して考察する。また、『源氏物語』の全巻注釈の早い段階の注釈書類が依拠したと指摘されている『一代要記』をとりあげ、双方のかかわりを具体例の精査のなかで展望する。	隔年
	日本古典文学研究(1B)	文学史という視点で『源氏物語』をよみ、中古、中世の教養の基盤について考察する知識、技術を得る。注釈史、享受史とぎれることがなかったという点で『源氏物語』は、物語作品として特異な存在といえる。そのことに留意し、『源氏物語』を文学史のなかで捉えだすことをこころみる。その過程でとくに、伝本の問題に注目する。これまで書物の伝来の問題として注目されてきた『源氏物語』の諸本について、その注釈史と不可分の問題をもつことについて具体的に考察する。	隔年
	日本古典文学研究(2A)	『源氏物語』注釈史の問題をとりあげる。注釈史のなかで『源氏物語』中の語に漢字をあて、出典を記す注が見られる。それらが、同時代の字書類に引用されて『源氏物語』を離れて生きていった実態をあきらかにすることをこころみる。さらに、従来、近代以降の常識ではジャンルが異なるため、そのかかわりについて注目されることの少なかった『三教指帰』と『源氏物語』注釈史とがかかわりをもつことについて考察する。近代以降『源氏物語』理解とのかかわりがわからなくなっていた注がどのような空間のなかで生きていたかについて具体的に考察してゆく。	隔年
	日本古典文学研究(2B)	『源氏物語』について、文学史の諸問題を意識し、本文間の異文が生じた経緯を、注釈書、梗概書の記事から考察する。さらに、享受者に、武士、連歌師が加わったことで、この作品の理解がどのように変わっていったかを具体的に考え、『源氏物語』の本文、注釈の歴史について、考察をすすめる技術、知識を得る。また、平安物語作品で、注釈史のとぎれることのなかった特異な作品として、『源氏物語』の他に『伊勢物語』を指摘できるが、その双方が引用する漢籍が、直接引用ではなく、清原宣賢周辺の抄物経由であることを指摘、その宣賢が依拠したものという視点から、中世・近世期の教養の基盤をなす『日本書紀』注釈史との接点についても考察してゆく。	隔年
	日本近代文学研究(1A)	近代の作品(散文)について、歴史的・文化的背景をできるだけ明確することで、同時代的な文脈における実証的な観点からの評価を試みるものである。とくに前近代から近代にかけての変革期である明治期の文学を扱う。出版事情等の書誌的な調査も重視する。授業は演習形式で行い、語釈・注釈などの調査事項と、作品解釈について各自発表を行ってもらうものとする。	隔年
	日本近代文学研究(1B)	近代の作品(散文)について、歴史的・文化的背景をできるだけ明確することで、同時代的な文脈における実証的な観点からの評価を試みるものである。とくに近代の文学的諸制度が確立・隆盛する大正・昭和期の文学を扱う。出版事情等の書誌的な調査も重視する。授業は演習形式で行い、語釈・注釈などの調査事項と、作品解釈について各自発表を行ってもらうものとする。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本近代文学研究(2A)	近代の作品(韻文)について、歴史的・文化的背景をできるだけ明確することで、同時代的な文脈における実証的な観点からの評価を試みるものである。とくに前近代から近代にかけての変革期である明治期の文学を扱う。出版事情等の書誌的な調査も重視する。授業は演習形式で行い、語釈・注釈などの調査事項と、作品解釈について各自発表を行ってもらうものとする。	隔年
	日本近代文学研究(2B)	近代の作品(韻文)について、歴史的・文化的背景をできるだけ明確することで、同時代的な文脈における実証的な観点からの評価を試みるものである。とくに近代の文学的諸制度が確立・隆盛する大正・昭和期の文学を扱う。出版事情等の書誌的な調査も重視する。授業は演習形式で行い、語釈・注釈などの調査事項と、作品解釈について各自発表を行ってもらうものとする。	隔年
	イギリス文学研究(1A)	この授業は、(1)シェイクスピアを中心としたエリザベス朝演劇に関する読解の基本的技能の習得、(2)先行研究のサーヴェイ力の構築、(3)論文作成技術の習得、の3点を到達目標としている。具体的には、OED等に丹念に当たりながらシェイクスピア戯曲の意味を特定する作業を行う。また、エリザベス朝演劇研究には、すでに膨大な量の研究の蓄積があり、そのエッセンスはアーデン版の脚注などに反映されているが、こうした脚注を正確に読み取ることも、かなりの力量が要求される。本授業では、この2点を軸として、Twelfth Nightを対象にシェイクスピアおよび同時代の戯曲を読み解く能力を議論を通して涵養する。	隔年
	イギリス文学研究(1B)	この授業は、(1)シェイクスピアを中心としたエリザベス朝演劇に関する読解の発展的技能の習得、(2)先行研究のサーヴェイ力の構築、(3)論文作成技術の習得、の3点を到達目標としている。具体的には、OED等に丹念に当たりながらシェイクスピア戯曲の意味を特定する作業を行う。また、エリザベス朝演劇研究には、すでに膨大な量の研究の蓄積があり、そのエッセンスはアーデン版の脚注などに反映されているが、こうした脚注を正確に読み取ることも、かなりの力量が要求される。本授業では、この2点を軸として、Twelfth Nightを対象にシェイクスピアおよび同時代の戯曲を読み解く能力を涵養した上で、オリジナリティのある論文作成のスキルを議論を通して習得させる。	隔年
	イギリス文学研究(2A)	この授業は、(1)シェイクスピアを中心としたエリザベス朝演劇に関する読解の基本的技能の習得、(2)先行研究のサーヴェイ力の構築、(3)論文作成技術の習得、の3点を到達目標としている。具体的には、OED等に丹念に当たりながらシェイクスピア戯曲の意味を特定する作業を行う。また、エリザベス朝演劇研究には、すでに膨大な量の研究の蓄積があり、そのエッセンスはアーデン版の脚注などに反映されているが、こうした脚注を正確に読み取ることも、かなりの力量が要求される。本授業では、この2点を軸として、A Midsummer Night's Dreamを対象にシェイクスピアおよび同時代の戯曲を読み解く能力を議論を通して涵養する。	隔年
	イギリス文学研究(2B)	この授業は、(1)シェイクスピアを中心としたエリザベス朝演劇に関する読解の発展的技能の習得、(2)先行研究のサーヴェイ力の構築、(3)論文作成技術の習得、の3点を到達目標としている。具体的には、OED等に丹念に当たりながらシェイクスピア戯曲の意味を特定する作業を行う。また、エリザベス朝演劇研究には、すでに膨大な量の研究の蓄積があり、そのエッセンスはアーデン版の脚注などに反映されているが、こうした脚注を正確に読み取ることも、かなりの力量が要求される。本授業では、この2点を軸として、A Midsummer Night's Dreamを対象にシェイクスピアおよび同時代の戯曲を読み解く能力を涵養した上で、オリジナリティのある論文作成のスキルを議論を通して習得させる。	隔年
	英語圏文学文化研究(1A)	This seminar explores the cultural productions of the Great Depression in America. We will be exploring music, poetry, literature, radio, and cinema, focusing on changing conceptions of gender, values, and race relations. Additionally, we will be engaging with theories of modernity in the American context. 本授業では、アメリカの大恐慌時代の文化的生産物を議論する。音楽、詩、文学、ラジオ放送、映画などがその対象となり、ジェンダー、価値観、人種などの概念の変化に注目する。さらに、アメリカ的文脈における近代性に関する諸理論を取り上げる。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語圏文学文化研究(1B)	<p>Melodrama can be seen as an expressive mode, a genre and an ideological form. As it relies heavily on emotions, pathos and sensationalism, melodrama has been criticized as “low brow” and relegated to the “woman’s genre”. In this course, we will discuss melodrama as a culturally situated genre and expressive mode, which incorporates a variety of stylistics and aesthetic conventions. We will finally explore melodrama’s intertwining with discourse of gender, race, nationalism and modernity.</p> <p>メロドラマは、表現力に富んだモードであり、イデオロギーを表象する形式でもある。メロドラマは、感情やパトス、感傷主義に依存するため、「低俗」で「女性的ジャンル」とされてきた。本授業では、メロドラマを文化的に位置づけられた、表現力に富んだモードとして議論する。その上で、メロドラマが、ジェンダーや人種、ナショナリズムや近代性などの言説と交差する様を検証する。</p>	隔年
	英語圏文学文化研究(2A)	<p>This seminar explores the women’s genres in literature, radio, and film throughout 20th century America, as they intersect with changing social contexts and tastes. We will additionally explore production trends, criticism, and popular ideas about gender.</p> <p>本授業は、20世紀アメリカにおける文学、ラジオ放送、映画に見られる女性のジェンダー表象を議論する。特に、変化する社会的文脈や嗜好と相互交渉する様に注目する。また、ジェンダーにまつわる文化的生産物の傾向や批評、ジェンダーに対する考え方なども考察する。</p>	隔年
	英語圏文学文化研究(2B)	<p>This seminar approaches the writers and filmmakers working in pulp and Noir films in Hollywood from the 1930s to the late 1950s and beyond. We will examine the stylistic and thematic preoccupations of the genre, its roots in German Expressionism, as well as the influence of WWII, the Great Depression, and the detective novel. This seminar will allow students to develop further understanding of key mid-20th century American writers and filmmakers, the functioning of the Studio system, and two influential aesthetic traditions: film noir and the hardboiled detective novel.</p> <p>本授業は、1930年代から1950年代以降にわたる、ハリウッドで制作されたノワール映画の作家や映画制作者を分析する。その際の観点は、ノワール映画の文体的・主題的前提、ドイツ表現主義におけるルーツ、第2次世界大戦や大恐慌・探偵小説の影響などである。本授業では、20世紀中期の重要なアメリカ人作家や映画制作者、スタジオシステムの機能、ノワール映画とハードボイルド探偵小説の影響と伝統などを、受講生がより十全に理解できることを目的とする。</p>	隔年
	フランス文学研究(1A)	<p>20世紀以降のフランス文学作品の精読を中心として、作品の作られた背景や歴史、同時代の作品との関連などについて考察する。とりわけ第二次世界大戦後の文学作品と批評（内在批評、記号論分析、精神分析など）との関係にも触れることで、文学研究の方法論を学ぶ。</p>	隔年
	フランス文学研究(1B)	<p>20世紀以降のフランス文学作品の精読を中心として、作品の作られた背景や歴史、同時代の作品との関連などについて考察する。19世紀の「小説」の時代を経て、20世紀にはジャンルの解体が行なわれた。多様なテキストのあり方やその可能性について考える。</p>	隔年
	フランス文学研究(2A)	<p>20世紀以降、フランス文学は大きな発展をみた。北アフリカやカリブ海など、フランス語圏文学の射程は大きく広がり、複数の言語、複数の文化背景をもつ作家も排出された。そうした多様性という観点からフランス文学を見直し、文学の可能性を問う。具体的なテキスト分析を中心に、批評文などを読み、理解を深める。</p>	隔年
	フランス文学研究(2B)	<p>20世紀以降、フランス文学は大きな発展をみた。多様な文化やジャンル、言語が内包されるテキストを創造することで、メタレベルでの言語のあり方やその可能性を暗示するような作品も多く生み出された。そうした作品を分析することで、言語や翻訳など、文学作品を構成するテーマについて深く考える。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	フランス文学演習(1A)	ブルーストの『失われた時を求めて』を題材に、この作品で取り上げられた文学作品が語り手によってどのように批評され、また登場人物にどのように語られているか、特定の人物による批評がどのような意味をもつか、さらに物語の進行とどのように関わるのかについて考察する。具体的な作家としてはラシーヌ、セヴィニエ夫人、サン＝シモン等を取り上げるが、サン＝シモンに関してはブルースト自身による模作も存在するので、それも考察対象とする。	隔年
	フランス文学演習(1B)	ブルーストの『失われた時を求めて』を題材に、この作品で取り上げられた文学作品が語り手によってどのように批評され、また登場人物にどのように語られているか、特定の人物による批評がどのような意味をもつか、さらに物語の進行とどのように関わるのかについて考察する。具体的な作家としてはバルザック、フローベール、サント＝ブーヴ等を取り上げるが、ブルースト自身による彼らの模作も射程に入れながら、模作や批評がどのように小説へと変貌を遂げたのかについても考察する。	隔年
	フランス文学演習(2A)	ブルーストの『失われた時を求めて』を題材に、この作品で取り上げられた美術作品が語り手によってどのように批評され、また登場人物にどのように語られているか、特定の人物による批評がどのような意味をもつか、さらに物語の進行とどのように関わるのかについて考察する。画家エルスチールについてはもとより、美術愛好家スワンに関しては現実の人間を絵画中の人物と同一視するという偶像崇拝の傾向があるので、それも芸術作品制作を阻むものという位置付けで見えていく。	隔年
	フランス文学演習(2B)	ブルーストの『失われた時を求めて』を題材に、この作品で取り上げられた音楽作品が語り手によってどのように批評され、また登場人物にどのように語られているか、特定の人物による批評がどのような意味をもつか、さらに物語の進行とどのように関わるのかについて考察する。『ペレアスとメリザンド』のドビュッシー、19世紀フランスでワグネル主義の興隆を見たワーグナー、そして後期弦楽四重奏曲が流行ったベートーヴェンを主な考察対象とする。	隔年
	Transnational Literature(1)	<p>“Transnational Literary Studies” does not only comprise literature (and other media) that is produced across borders and in various languages (including translation), it also analyzes the common multi-lingual and multi-cultural basis inherent in aesthetic productivity. The focus point of this course is on text, author, genre, period, aesthetics, media, methods or translation, depending on the needs and interests of its participants and the research focus of the instructor.</p> <p>「越境文学研究」は、国境を越えてさまざまな言語（翻訳を含む）で作られた文学（および他のメディア）だけでなく、美的創造物に固有の共通の多言語および多文化の基礎も分析する。このコースは、参加者のニーズと関心、および講師の研究関心に応じて、テキスト、作者、ジャンル、時期、美学、メディア、方法または翻訳などに注目する。</p>	隔年
	Applied Humanities(1)	<p>The study of “Applied Humanities” focuses on the interface between traditional literary studies and society. In this course the focus will be on humanities’ contribution to society and on career strategies. Students will have the opportunity to discuss their own approaches and design their own academic profiles. The course will also include analysis and discussion of literary and theoretical texts in an “Applied Humanities” perspective and introduce the relevant methodology.</p> <p>「応用人文学」研究は、伝統的文学研究がもつ社会との接点に焦点を当てている。このコースでは、人文学の社会への貢献とキャリア戦略おもとりにとあげます。学生は自分のアプローチについて話し合ったり、自分の学問プロフィールをデザインできるようになる。このコースでは、「応用人文学」の観点から文学的および理論的テキストの分析とディスカッションを行い、関連する方法論を紹介する。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Transnational Literature(2)	<p>This course focuses on “Relational Studies in Literature” and analyzes and discusses how texts connect in literature, culture and politics in an international framework. The course will be based on the analysis and interpretation of interconnected primary literary texts proposed by the instructor or participants. It will also introduce and discuss various conceptualizations of “intertextuality”, “relationality”, “multilingualism” and translation”.</p> <p>このコースは、「文学における関係学」を取りあげて、国際的な枠組みの中でテキスト、文学、文化、政治がどのように結びついているかを分析し、議論する。このコースは、教員または参加者が提案した相互に関連する重要な文学テキストの分析と解釈に基づく。また、「相互文脈」、「関係性」、「多言語化」、「翻訳」といった様々な概念化について紹介し、議論する予定である。</p>	隔年
	Applied Humanities(2)	<p>The study of “Applied Humanities” answers to social and intellectual needs of society and is especially dedicated to the understanding and solution-finding processes of global and local crises. The course will focus on topical material (especially literary publications) concerning long-term crises or acute disaster. Students will have the opportunity to do original literary research connected to the course’s main topic.</p> <p>「応用人文科学」の研究は、社会における社会的・知的ニーズに答えるものであり、特に、世界的および地域的危機の理解と解決策発見のプロセスを集中的に学ぶ。このコースでは、長期的な危機や突発的な災害についての時事的な題材（特に文学刊行物）に焦点を当てる。学生は、コースのテーマに関連した独自の文学研究を行う機会を得られる。</p>	隔年
	中国文学研究(1A)	<p>論理的な思考力を鍛えて知の活用力を付けるために、120巻本『文選』の精読を通してその特徴を把握することが当該授業の到達目標である。具体的には、巻43所収の詩・巻56所収の挽歌・巻63所収の騷・巻71所収の教・巻79所収の弾事・巻91所収の序・巻113所収の誄・巻47所収の詩・巻61所収の雜擬を読む。独創的な構想力を身につけ、知を共創する能力を養うため、授業は、演習担当者を決めて報告を求め、討議を行いながら進める。</p>	隔年
	中国文学研究(1B)	<p>論理的な思考力を鍛えて知の活用力を付けるために、鈔本で『文選』を読み、諸本の注釈と比較検討をすることが当該授業の到達目標である。具体的には、巻47所収の詩・巻56所収の雜歌詩・巻66所収の騷・巻71所収の策秀才文・巻85所収の書・巻93所収の頌・巻116所収の碑・巻48所収の詩・巻68所収の七を読む。独創的な構想力を身につけ、知を共創する能力を養うため、授業は、演習担当者を決めて報告を求め、討議を行いながら進める。</p>	隔年
	中国文学研究(2A)	<p>論理的な思考力を鍛えて知の活用力を付けるために、集注本で『文選』を読み、各注の特徴を確認することが当該授業の到達目標である。具体的には、巻48所収の詩・巻59所収の雜詩・巻68所収の七・巻73所収の表・巻88所収の檄・巻94所収の贊・巻56所収の樂府・巻66所収の騷・巻98所収の史論を読む。独創的な構想力を身につけ、知を共創する能力を養うため、授業は、演習担当者を決めて報告を求め、討議を行いながら進める。</p>	隔年
	中国文学研究(2B)	<p>論理的な思考力を鍛えて知の活用力を付けるために、『唐鈔文選集注彙存』を読み、補注をつけることが当該授業の到達目標である。具体的には、巻56所収の樂府・巻61所収の雜擬・巻71所収の令・巻79所収の弾事・巻88所収の難・巻98所収の史論・巻59所収の雜詩・巻85所収の書・巻91所収の序を読む。独創的な構想力を身につけ、知を共創する能力を養うため、授業は、演習担当者を決めて報告を求め、討議を行いながら進める。</p>	隔年
	文学研究演習A	<p>文学サブプログラムにおいて修士論文を作成する2年次生が、自己の所属するサブプログラム・専門領域のみならず、他の専門領域の教員も加わって随時に研究に関する議論を行いながら、資料の収集およびその具体的な考察の方法を検討しつつ、修士論文の構想を深めていく。</p>	
	文学研究演習B	<p>文学サブプログラムにおいて修士論文を作成する2年次生が、自己の所属するサブプログラム・専門領域のみならず、他の専門領域の教員も加わって随時に研究に関する議論を行いながら、論文の構成および具体的な執筆方法を検討し、最終的な修士論文の完成を目指す。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	(研究指導：文学)	<p>文学研究に関する修士論文作成の指導を行う。</p> <p>(2 青柳悦子) 文学研究の方法論を意識しながら、学術研究を推進するための基礎的な諸技法を実践的に学ぶ。</p> <p>(4 秋山学) 古典古代学に関連するテーマでの論文執筆者に対し、必要な方法論を修得させる。</p> <p>(21 加藤百合) 学術論文(修士論文)を執筆する方法論を演習形式で学ぶ。</p> <p>(24 佐野隆弥) ターム・ペーパーの改善と関連文献講読、研究報告とファイナル・ペーパーの作成などの指導を行う。</p> <p>(32 谷口孝介) 日本古代から中世にかけての中日比較研究にかかわる修士論文作成の指導を行う。</p> <p>(54 増尾弘美) フランス19～20世紀の文学作品を研究対象とした修士論文の作成について指導を行う。</p> <p>(75 小川美登里) ヨーロッパの文学を中心に、文体や翻訳などについて批評的に考察する。</p> <p>(79 稀代麻也子) 四部分類および義疏など中国文学研究の基礎について指導を行う。</p> <p>(84 齋藤一) 文学理論(特にポストコロニアル理論)の知見を応用して作品を精読しつつ、学術論文(修士論文)を執筆する方法論を演習形式で学ぶ。</p> <p>(111 馬場美佳) 日本近代文学の研究法等について指導を行う。</p> <p>(116 Heselhaus Geva Herrad) Supervision of advanced research in literary studies and degree thesis composition.</p> <p>文学研究と修士論文作成のための高次の研究指導を行う。</p> <p>(132 吉原ゆかり) 学術論文(修士論文)を執筆する方法論を演習形式で学ぶ。</p> <p>(133 吉森佳奈子) 平安文学作品の注釈・享受の教養の基盤について文学史的に考察する演習を行う。</p>	
言語学	歴史言語学A	<p>世界のさまざまな言語を例に、伝統的な歴史言語学の方法論の基礎を学ぶ。具体的には、(1)歴史言語学の研究史、(2)音法則[概論]、(3)音法則[合流と分裂]、(4)音法則[同化]、(5)音法則[弱化]、(6)音法則[その他の変化]、(7)借用、(8)類推、(9)内的再建、(10)比較による祖語の再建を論じる。毎回の授業では講義を行った上で、それをふまえて受講生が自ら例題を通時的に分析してみることにより、言語変化の諸相、規則性、要因等に対する理解を深めていく。</p>	
	歴史言語学B	<p>授業前半では、生成文法と言語類型論の枠組みで言語変化の普遍性と個別性について考察する。特に、語順、格の変化など、言語の骨格となる文法変化に焦点をあてて授業をすすめる。授業後半では日本語の文法変化を扱う。理論の枠組みを用いて仮説を立て、日本語の資料を見て行くと、日本語にも言語の普遍性に関わる変化が起こっていることがわかります。上代日本語(8世紀頃)から中古(12世紀頃)の散文資料を用いて、実証研究をする方法論を紹介する。</p>	
	生成統語論A	<p>チョムスキーに始まり「普遍文法」を視野にいたした生成統語論の観点から言語現象を考察する。具体的には、英語および日本語を中心とするいくつかの言語から題材をもとめ、生成統語論的な分析の実践例を数多く見ることを通して、研究の目的および手法を理解し、自らが生成統語論の立場で新たな文法現象の発掘、分析、議論ができるようになることを目指す。この授業では、主に句構造、形式素性、移動現象にかかわる問題に焦点をあてる。</p>	隔年
	生成統語論B	<p>チョムスキーに始まり「普遍文法」を視野にいたした生成統語論の観点から言語現象を考察する。具体的には、英語および日本語を中心とするいくつかの言語から題材をもとめ、生成統語論的な分析の実践例を数多く見ることを通して、研究の目的および手法を理解し、自らが生成統語論の立場で新たな文法現象の発掘、分析、議論ができるようになることを目指す。この授業では、主に構造格、束縛とコントロール、省略現象にかかわる問題に焦点をあてる。</p>	隔年
	認知意味論A	<p>言語の形式と意味の対応関係にかかわる問題について、英語と日本語を比較対照しながら認知意味論的な観点から考察する。認知意味論的観点というのは、言語が語る意味の世界は客体世界そのものではなく、人間の目を通した世界であり、したがって言語の意味を考へるときには、人間がものごとをどのように理解し、経験するかという視点が不可欠とするものである。この授業では、特に、言語と認知の関係に関わる様々な語彙・構文現象に焦点をあてる。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	認知意味論B	言語の形式と意味の対応関係にかかわる問題について、英語と日本語を比較対照しながら認知意味論的な観点から考察する。認知意味論的観点というのは、言語が語る意味の世界は客体世界そのものではなく、人間の目を通した世界であり、したがって言語の意味を考えるとときには、人間がものごとをどのように理解し、経験するかという視点が不可欠とするものである。この授業では、特に、文法と語用論の関係や言語使用に関わる様々な言語現象に焦点をあてる。	隔年
	対照言語学A	日本語のデータを出発点に他言語との比較対照をまじえながら、人間言語の普遍のおよび個別的側面について理論的な観点から考察する。この授業の目標は、対照言語分析に必要な理論的知識（主に生成文法）を獲得するとともに、言語間の異同さらには人間言語の個別性と普遍性に関する議論を具体的なデータからどのように組み立てるかを学ぶことである。最終的に受講生は、一定の理論的枠組みに則って研究論文が執筆できるまでになることが期待される。授業形態としては、基本的に前半を講義形式、後半を演習形式で授業を進める。	
	対照言語学B	このコースの目的は、対照言語学の基礎的知識と実践的研究能力の涵養である。まず、主に日本語と英語の身近な具体例を出発点に、いくつかの事例研究の概観・検討を通して対照言語学の射程・目標・方法・意義・成果などを学びながら、受講者それぞれが自分のテーマで対照言語学的研究を試み、実践的な観察・分析・実証・立論能力を養う。その後、各受講者に研究成果を順番に発表してもらい、その内容についてクラス全員で議論する。基本的に、前半は講義形式、後半は演習/セミナー形式で授業を進めるが、その割合は受講者の希望や進展状況に応じて調整する。	
	音韻論A	言語の音声・音韻に関する研究について理解するうえで必要とされる、基礎的な知識および観点を身につけることを目標とする。記述・理論にわたる音韻論の基礎的な概念および知見について、講義を通じて理解を深めるとともに、日本語を中心とする分節音韻現象の分析事例を学びながら、音韻研究の方法についての理解を図る。その理解に立って、実際の分析課題に受講者各自が取り組み、その成果を発表するとともに、相互の討議を通じて合理的な音韻分析のあり方について考察する。授業で扱う主要なトピックは次のとおりである。 言語音の生成過程/言語音の分類/音韻対立と中和/音韻素性/異音の分布/素性階層/異形態現象	隔年
	音韻論B	音韻論の基礎的な事項の理解に基づいて、音韻分析の手法を身につけることを目標とする。音韻分析の理論的手法について講義を通じて理解を深めるとともに、日本語を中心とする分節現象・韻律現象の分析事例を学びながら、音韻論的考察の方法について理解を深める。その理解に立って、実際の分析課題に受講者各自が取り組み、その成果を発表するとともに、相互の討議を通じて合理的な音韻分析・韻律分析のあり方について考察する。授業で扱う主要なトピックは次のとおりである。 音韻分析と音韻理論/音韻的不透明性/制約理論の基礎/アクセント論の基礎/韻律分析の手法/アクセント現象と一般化	隔年
	形態論A	屈折形態論に関する研究史を概観し、それぞれの理論・モデルがどのような点において対立しているのかを見るとともに、主要な問題・対立点について整理する。次に、同形性、補充、ゼロ形態等、屈折形態論研究における重要な用語・概念について、どのような言語現象の分析において問題になるのか具体的に検討し、各理論・モデルを用いた分析の利点・難点について考える。対象言語は日本語・英語を中心とするが、必要に応じて様々な言語を取り上げる。	隔年
	形態論B	複合を含む派生形態論に関する研究史を概観し、それぞれの理論・モデルがどのような点において対立しているのかを見るとともに、主要な問題・対立点について整理する。次に、同音異義性・類義性・多義性、阻止、項構造等、派生形態論研究における重要な用語・概念について、どのような言語現象の分析において問題になるのか具体的に検討し、各理論・モデルを用いた分析の利点・難点について考える。対象言語は日本語・英語を中心とするが、必要に応じて様々な言語を取り上げる。	隔年
	日本語文法論IA	現代日本語文法の文法カテゴリーについて、これまでの研究を踏まえ、さらにどのような課題があるか考察し、現代日本語文法の諸現象に関して、課題発見型のアプローチを行う能力を身につける。 (オムニバス方式/全10回)	オムニバス方式 隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(69 石田尊・25 杉本武・40 沼田善子・109 橋本修・59 矢澤真人／1回) 本授業で取り上げる課題の導入を行う。</p> <p>(69 石田尊・25 杉本武／2回) 格とヴォイスの現象を取り上げ、課題となる問題について考察する。</p> <p>(109 橋本修／2回) テンス・アスペクト、複文の現象を取り上げ、課題となる問題について考察する。</p> <p>(40 沼田善子／2回) とりたて、モダリティの現象を取り上げ、課題となる問題について考察する。</p> <p>(59 矢澤真人／1回) 修飾の現象を取り上げ、課題となる問題について考察する。</p> <p>(69 石田尊・25 杉本武・40 沼田善子・109 橋本修・59 矢澤真人／2回) その他の現象を取り上げ、課題となる問題について考察した上で、まとめを行う。</p>	
	日本語文法論IB	<p>現代日本語文法と言語の機能などがどのように関わるか、複合的な観点と応用的な観点から考察し、現代日本語の文法について様々な角度から、課題解決型のアプローチを行う能力を身につける。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(69 石田尊・25 杉本武・40 沼田善子・109 橋本修・59 矢澤真人／2回) 本授業で取り上げる問題の導入とまとめを行う。</p> <p>(69 石田尊／1回) 文法と事態認識の問題を取り上げ、その関係について考察する。</p> <p>(25 杉本武／2回) 文法と空間認識、文法と自然言語処理の問題を取り上げ、その関係について考察する。</p> <p>(109 橋本修／2回) 文法と時間認識、文法と語用論の問題を取り上げ、その関係について考察する。</p> <p>(40 沼田善子／2回) 文法と主観性、文法と教育の問題を取り上げ、その関係について考察する。</p> <p>(59 矢澤真人／1回) 文法と辞書の問題を取り上げ、その関係について考察する。</p>	オムニバス方式 隔年
	日本語文法論IIA	<p>日本語文法の記述的研究の方法論について学ぶとともに、理論的研究との関わりについて考察し、日本語文法の記述的研究の現状と課題について理解を深める。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(69 石田尊・25 杉本武・40 沼田善子・109 橋本修・59 矢澤真人／2回) 本授業で取り上げる問題の導入とまとめを行う。</p> <p>(59 矢澤真人／2回) 文法の記述を概説し、現代語の記述について考察する。</p> <p>(25 杉本武／2回) 文法の記述と理論の関係、方言文法の記述について論じる。</p> <p>(40 沼田善子／2回) 共時態の記述を概説し、方言文法の記述について論じる。</p> <p>(69 石田尊・109 橋本修／2回) 文法史の記述について論じる。</p>	オムニバス方式 隔年
	日本語文法論IIB	<p>現代日本語文法の諸現象に関する受講者各自の研究発表と討論を通して、記述的研究の方法論を学び、データを観察、記述する能力を養う。具体的には、文法の記述と内省やコーパスの関係について考察した上で、格、ヴォイス、テンス・アスペクト、修飾、とりたて、複文、モダリティなどの文法現象の中から課題を取り出し、それぞれの記述に関わる問題を明らかにした上で、受講者が設定した研究課題に関して議論を行う。</p>	隔年
	日本語意味論A	<p>現代日本語の動詞(空間に関わる動詞群)を対象に、コーパス等を用いながら、用例収集、用例分析を行い、動詞の意味を含む語彙的特性の記述し、文法と関わりを考察する。これによって、用例収集、用例分析の方法論を学ぶ。具体的には、意味全般、語彙の意味と文法的意味を含む語の意味の捉え方について概観した上で、空間表現と、存在、移動、移動様態などの空間に関わる動詞群の分析をコーパスの用例などから行う。</p>	隔年
	日本語意味論B	<p>現代日本語の動詞(働きかけ、変化などに関わる動詞群)を対象に、コーパス等を用いながら、用例収集、用例分析を行い、動詞の意味を含む語彙的特性の記述し、文法と関わりを考察する。これによって、用例収集、用例分析の方法論を学ぶ。具体的には、接触・打撃、状態変化などを表す動詞群の分析をコーパスの用例などから行った上で、意味と文法の関係について考察する。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本語談話論A	本科目は、日本語の談話（話し言葉）を対象に、分析に必要な理論や基礎的な概念を習得し、データを分析する力を身につけることを目標とする。さらに、分析により得られた知見を言語教育や隣接分野に応用するための視野を身につける。具体的には、「発話行為」「語りの構造」「会話の開始と終結」「スタイルシフト」などの概念を、論文などを通じて最新の研究動向を踏まえて紹介する（第1回～第5回）。その上で、データ収集と分析の方法を提示し、受講者による実践を交えて理解を深める（第6回～第8回）。授業の最後には、日本語教育や国語教育、文法研究など隣接分野との関連を考え、ディスカッションを行う（第9,10回）。	隔年
	日本語談話論B	本科目は、日本語の談話（書き言葉）を対象に、分析に必要な理論や基礎的な概念を習得し、データを分析する力を身につけることを目標とする。さらに、分析により得られた知見を言語教育や隣接分野に応用するための視野を身につける。具体的には、「ジャンル」「文体」「結束性」「コロケーション」などの概念を、論文などを通じて最新の研究動向を踏まえて紹介する（第1回～第5回）。その上で、データ収集と分析の方法を提示し、受講者による実践を交えて理解を深める（第6回～第8回）。授業の最後には、日本語教育や国語教育、文法研究など隣接分野との関連を考え、ディスカッションを行う（第9,10回）。	隔年
	古典日本語学A	文献資料から日本語史をたどり、古典日本語、特に中世・近世の日本語を考察する。具体的には江戸期刊行の版本狂言記（万治三（1660）年刊行）を講読し、狂言という芸能の言語を通して、古典日本語について考察する。日本語史上の中世・近世の位置付けからスタートし、狂言の歴史を映像を使って確認したうえで、版本のコピーを実際に読み解き、文献資料の扱い方、語学的な問題のとりえ方、狂言という芸能に関する知識など、日本語史研究のための基本的な事項も確認する。	隔年
	古典日本語学B	日本語史の資料としての狂言台本の価値を考え、あらためて中世から近世への日本語の変遷との関わりを確認する。狂言や古典芸能の基礎知識をふまえて、江戸期の版本狂言記と諸流派の狂言台本の詞章を詳しく比較していく。可能な場合は実演映像も含めて、詞章の異同を検証し日本語史上の問題としてどのように捉えるべきか、具体例から考えていく。受講者にも諸台本の読み比べを行ってもらい、様々な観点から言語事象を捉える練習とする。	隔年
	英語統語論A	近年の英語統語論は生成文法理論の下で発展してきており、その考え方と研究手法はこれから言語研究を学ぶ者には基本となるものである。また、英語で書かれた著作を深く理解し、自分の考えを英語で発信していくための英語力も必須である。このような考えのもと、この科目では英語で書かれた統語論、理論言語学の著作・論文を読みながら、内容を適切に把握する訓練を行い、統語論研究の基礎知識と方法論を身につける演習を行う。具体的には、受講者が自分の専門分野に関わる英語論文を取り上げて紹介し、全員でディスカッションを行う。中心テーマは「機能語・機能範疇」とする。	隔年
	英語統語論B	近年の英語統語論は生成文法理論の下で発展してきており、その考え方と研究手法はこれから言語研究を学ぶ者には基本となるものである。また、英語で書かれた著作を深く理解し、自分の考えを英語で発信していくための英語力も必須である。このような考えのもと、この科目では英語で書かれた統語論、理論言語学の著作・論文を読みながら、内容を適切に把握する訓練を行い、統語論研究の基礎知識と方法論を身につける演習を行う。具体的には、受講者が自分の専門分野に関わる英語論文を取り上げて紹介し、全員でディスカッションを行う。中心テーマは「英語と他言語との比較」とする。	隔年
	英語意味論A	認知言語学や構文文法を中心とした、現代英語をめぐる様々な意味論的アプローチの研究動向を探る。この授業では、特に、形式と意味機能の対応関係や認知と比喩の関係を中心に扱い、主観性に基づく意味論を基にした分析方法について考察する。最新の言語学専門誌・論文集から選んだ論文をもとにした発表内容を基に批判的検討を加え、授業参加者による討論を行なう。	隔年
	英語意味論B	語用論研究や言語使用に関する日英語比較を中心とした、現代英語をめぐる様々な意味・語用論的アプローチの研究動向を探る。この授業では、特に、語用論・言語使用と意味機能の関係を扱い、代表的な意味論・語用論に関する理論についても触れる。最新の言語学専門誌・論文集から選んだ論文をもとにした発表内容を基に批判的検討を加え、授業参加者による討論を行なう。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ドイツ語学A	現代ドイツ語の特徴を、語彙、文法ならびに語史の観点から明らかにする。また、必要に応じて日本語や英語などとドイツ語を比較対照し、ドイツ語ないしゲルマン語が持つ個別の特徴と、人間言語が持つ普遍的特徴について、記述的、理論的ならびに通時的ないし歴史的な視点から考察を行うことになる。授業は、まず重要なキーワードなどを含めた総論を講義し、参考文献を批判的に検討した上で、特定のトピックについて参加者全員で議論する。	
	ドイツ語学B	現代ドイツ語の特徴を、意味論的ならびに語用論的な観点から明らかにする。また、必要に応じて日本語や英語などとドイツ語を比較対照し、ドイツ語ないしゲルマン語が持つ個別の特徴と、人間言語が持つ普遍的特徴について、記述的、理論的ならびに通時的ないし歴史的な視点から考察を行うことになる。授業は、まず重要なキーワードなどを含めた総論を講義し、参考文献を批判的に検討した上で、特定のトピックについて参加者全員で議論する。	
	中国語学A	中国語の文法研究に関する優れた論文を演習形式で読み進めながら、中国語の諸現象について考える。文法現象に表れた中国語の事態把握の特徴を他言語（主に日本語）との対照を通して検討する。中国各地の方言データも取り上げながら、標準語のみを対象とする従来の文法研究が看過してきた特徴を明らかにする。研究テーマをどのように設定するか、またそれをどのように分析していくかなど、研究方法や分析手順を学ぶこともこの授業の目的の一つである。	
	中国語学B	中国語文法研究をおこなううえで、必ず通読し理解しておくべき基礎文献を演習形式で読み進めていく。品詞分類、語順、主題、アスペクト、モダリティ、ヴォイス、ダイクシスなど中国語の個性が色濃く現れると思われるテーマを取り上げ、中国語文法研究に必要な最低限の知識を身に付けることを目指す。授業では、内容に対する正確な理解が求められるだけでなく、各自が批判的な視点を以て問題点・疑問点を見つけ出し、積極的に議論に参加することが求められる。	
	韓国語学A	現代韓国語の先行研究を熟読して、その問題点や課題を論議することで、現代韓国語の特徴を把握する。音韻、形態構造、語彙、文法、表現、統語などの言語分析の諸分野だけに限らず、文章・論理構造、談話理解、言語コミュニケーションなどの言語運用の諸分野まで、現代韓国語が持っている個別性を概論的に考察する。また、日本語との対照を通して、言語の普遍性と個別性をより深く理解する。主テーマになる分野は、各年度別に選定する。	隔年
	韓国語学B	言語表現の分析には、その表現がどのような「視点」を取りながら意味を表しているのかを考察する方法もある。例えば、日本語は話者・聴者・主体との関係で表現のスピーチレベルが決められる。反面、韓国語は話者と他者との関係でスピーチレベルが決められる。つまり、敬語表現において、日本語は移動的視点を持ち、韓国語は固定的視点を持っていると言える。現代韓国語の時制・指示・授受・慣用表現・あいさつことばなどの表現類型から見られる視点を考察する。また、「感情・主観」の介入程度により視点がどのように変化するかを、対象になる表現の意味を具体的に分類しながら調べる。主テーマになる表現類型は、各年度別に選定する。	隔年
	言語政策論A	ロシアや中央アジア諸国などの多民族・多言語社会を事例として、地位計画（言語の法的地位）、実体計画（標準語の整備）、普及計画（言語教育政策他）等の観点から各国の言語政策の現状と課題を検討・考察する。授業では、当該国の言語状況・言語政策に関する研究論文を取り上げ、論点を整理し、議論する。また講義、学生の発表や議論などを通じて、言語政策研究の方法論や分析手法などについての理解も深める。	隔年
	言語政策論B	世界（特に旧ソ連・旧東欧地域）の多民族・多言語国家の言語状況や言語政策に関する研究事例を通して、多言語社会における言語政策の役割について考察する。その上で、比較という観点から日本社会の言語状況・言語政策の実情と課題について検討する。また講義、学生の発表や議論などを通じて、社会に貢献する言語政策研究の研究対象としての新たな可能性を探求する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国語教育学A	言語研究（主として日本語研究）と言語教育（主として国語教育）との目的や方法論の違いを理解した上で、グローバル社会・情報化社会に対応する国語教育学を展開させていくために必要な日本語学的な素養や言語学的観点を身につけることを目的とする。まず講義を通して、言語研究と言語教育、国語教育と日本語教育との目的や方法論の違いについて、文法論・語彙論・待遇表現論・コミュニケーション論などの分野を例に、言語研究の成果がどのように国語教育へ応用されてきたかを把握した上で、演習形式で、グローバル社会・情報化社会に必要とされる論理展開力の育成やアイデンティティ・共感力の育成のために、母語教育にはどのような観点が必要とされるか、また日本語研究はどのようにそれを支援できるかについて検討していく。	隔年
	国語教育学B	日本語研究と国語（日本語）教育との関係に関わる比較的高度な知識を習得することで、両者の相互互恵的な関係を意識するとともに、これからのグローバル社会・情報化社会の母語教育において求められる言語分析力について深く洞察する知識と能力を身につけることを目的とする。まず、日本語の文法研究史・文法教育史の関わりについての概説を行い、各時代が何のために「言葉の説明」を求めたのか、日本語研究がそれにいかなる「文法論」を提供したのかについて検討を加える。これをふまえて、演習形式で、これからの多言語使用多文化理解社会へ向けて、母語教育は、初等教育から中等教育へ、母語から多言語へ、いかに接続させていくか、それにはいかなる言語分析能力の育成が求められるのか、それを支援するためにどのような言語情報提供ツールの開発が求められるのか等について検討していく。	隔年
	日本語教育学IA	日本語教育学分野の論文講読および発表者・受講生間の討論を通じ、クリティカルに物事を捉える基礎的な力を身につける。具体的には、「日本語教育方法の改善に役立つ実験・調査を行っている論文(日本語)」をとりあげ、その研究の方法論に関して討議する。受講生は、口頭による発表方法を工夫し、また積極的に議論に参加することが期待される。	隔年
	日本語教育学IB	第二言語習得研究の観点から、日本語音声教育の理論と方法について考察する。また、学習者の発音の分析や、教材・教具の分析を行い、音声指導法について検討する。扱う素材は音声であるが、根底にあるものは「教育方法の追究」である。さまざまな知識を統合して、広い視野から「学習が起こるための支援」はどうあるべきかを考えていきたい。	隔年
	日本語教育学IIA	日本語教育における学習者・教師・接触場面での母語話者及び非母語話者、日本語教育を必要とする年少者などに焦点を当てた心理学的研究について知見を深めることを目的とする。授業方法としては、①日本語教育における心理学的研究論文の講読、②統計に関する基礎的知識の習得、③自分自身の研究に心理学的研究をどのように応用できるかの考察、と段階を追って進める。授業形態としては、①③は主に学生の発表と討論、②は教師の講義形式で進めていく予定である。	隔年
	日本語教育学IIB	日本語教育における学習者・教師・接触場面での母語話者及び非母語話者、日本語教育を必要とする年少者などに焦点を当てた心理学的研究について、実践的な知識と研究方法・論文作成の技術の習得を目的とする。授業方法としては、①研究テーマ設定、②研究計画とデータ収集方法の計画、③データ収集、④データ入力、⑤データ分析（統計処理）、⑥統計処理結果の論文記載の仕方と、心理学的研究の一連の流れを体験する。授業形態としては、学生主導の発表・討論を中心として進めていく予定である。	隔年
	外国語教育学A	外国語教育（特に外国語としての英語教育）の文脈において、テクノロジーを活用した授業モデルの言語習得に対する効果について論じた研究論文や関連文献を検討し、言語接触、中間言語の観点からどのような意味合いが求められるかについて検討する。授業は、論文発表と討論を中心に進めていき、授業の最後の段階では、ミニリサーチを行う。特にこの授業では、授業の中で得られるテキストデータ、コーパスの利用に焦点を置き、データの分析や分析結果の報告に関する活動も行っていく。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	外国語教育学B	外国語教育（特に外国語としての英語教育）の文脈において、テクノロジーを活用した授業モデルの言語習得に対する効果について論じた研究論文や関連文献を検討し、特に心理言語学の観点からどのような意味合いが考えられるかについて検討する。授業は、論文発表と討論を中心に進めていき、授業の最後の段階では、ミニリサーチを行う。特にこの授業では、量的研究方法論、質問紙の作成、結果の記述などの演習に焦点をおき、データの分析や分析結果に関する活動も行なっていく。	隔年
	言語情報論A	言語研究を行うにあたって理解しておくべきICT（情報コミュニケーション技術）の基礎的な知識・技能の習得を目的とした演習を行う。 (オムニバス方式／全10回) (231 和氣愛仁／4回) コンピュータおよびインターネットの基礎、情報のデジタル化、正規表現を用いたテキスト検索等について講義と演習を行う。 (76 小野雄一／3回) 言語データを利用した量的実証研究を行うために必要となる自然言語処理技術、統計に関する講義と実習を行う。 (69 石田尊／3回) ICTを活用した研究発信を目的として、著作権に関する講義と、動画を組み込んだコンテンツを制作する演習を行う。	オムニバス方式
	言語情報論B	言語研究をより深めるためのICT（情報コミュニケーション技術）活用法について、履修者の専門分野・問題意識に基づいた実践的な演習を行う。 (オムニバス方式／全10回) (76 小野雄一／3回) 大量の言語データを扱うテキストマイニングに関するケーススタディを概観した上で、プログラムを利用したデータの自動収集・分析についての技能を習得する。 (69 石田尊／3回) 研究発信方法の多様化を目的として、静止画・動画・音声編集のスキルを習得するための演習を行う。 (231 和氣愛仁／4回) WWWを通じた研究資源の共有・成果発信等を目的として、CMSを用いたウェブサイト構築およびそれに必要なプログラミング・データベース設計等についての演習を行う。	オムニバス方式
	プロジェクト演習(1A)	言語学サブプログラムにおいて修士論文を作成する1年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員と学生で議論を行いながら、言語研究における研究倫理、言語研究の諸側面に関する理解を深めるとともに、言語研究全体の中での位置づけを考えながら、修士論文の構想を深める。	
	プロジェクト演習(1B)	言語学サブプログラムにおいて修士論文を作成する1年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員と学生で議論を行いながら、構想に基づき先行研究を検討し、先行研究における課題を明らかにし、自身の研究を先行研究の中で位置づけることによって、研究課題を具体化し、修士論文のテーマを定める。	
	プロジェクト演習(2A)	言語学サブプログラムにおいて修士論文を作成する1年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員と学生で議論を行いながら、構想に基づき先行研究を検討し、先行研究における課題を明らかにし、自身の研究を先行研究の中で位置づけることによって、研究課題を具体化し、修士論文のテーマを定める。	
	プロジェクト演習(2B)	言語学サブプログラムにおいて修士論文を作成する2年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員と学生で議論を行いながら、論文の構成、結論等を決定し、最終的な修士論文の作成を行う。	
	プロジェクト実習(1A)	言語学サブプログラムにおいて修士論文を作成する1年次生を対象に、複数の教員から成る指導グループから、研究会発表(またはそれに準じるもの)のテーマ設定、構成に関する指導を受け、プレゼンテーションの方法を実際に学ぶ。	
	プロジェクト実習(1B)	言語学サブプログラムにおいて修士論文を作成する1年次生を対象に、複数の教員から成る指導グループから、研究会発表(またはそれに準じるもの)のテーマ設定、構成に関する指導を受け、プレゼンテーションの方法を実際に学ぶ。	
	プロジェクト実習(2A)	言語学サブプログラムにおいて修士論文を作成する2年次生を対象に、複数の教員から成る指導グループから、研究会発表(またはそれに準じるもの)のテーマ設定、構成に関する指導を受け、プレゼンテーションの方法を実際に学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	プロジェクト実習(2B)	言語学サブプログラムにおいて修士論文を作成する2年次生を対象に、複数の教員から成る指導グループから、研究会発表(またはそれに準じるもの)のテーマ設定、構成に関する指導を受け、プレゼンテーションの方法を実際に学ぶ。	
	(研究指導：言語学)	<p>(1 青木三郎) 言語多様性と意味構築の修士論文の提出に向けて、論文指導を行う。</p> <p>(7 池田潤) 歴史言語学・記述言語学・実験言語学・セム語学に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(10 伊藤眞) ドイツ語の語彙について、同じ印欧語族の言語のみならず日本語などの語彙と比較対照しながら語彙論研究の実践・指導を行い、ドイツ語と他言語の語彙の背景にある文化的視点も加えながら論文指導を行う。</p> <p>(13 白山利信) 言語政策に関するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(14 大倉浩) 日本語史について中世・近世の語彙・語法を中心に論文指導を行う。</p> <p>(15 大矢俊明) 現代ドイツ語の文法論に関して、他のゲルマン語や日本語などと比較しながら、研究の実践、指導を行い、ドイツ語と他言語の比較文法論について論文指導を行う。</p> <p>(20 加賀信広) 生成統語論に関するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(25 杉本武) コーパスを用いた研究方法で、主に現代日本語の動詞が関わる文法現象の記述に関する論文指導を行う。</p> <p>(27 竹沢幸一) 日本語統語論および比較統語論の論文指導を行う。</p> <p>(40 沼田善子) 人類の体験や記憶の言語化のメカニズム、および記憶の共有、継承への言語関与について、具体的なデータに基づく研究実践を通して、研究方法の指導を行う。</p> <p>(45 一二三朋子) 日本語教育における心理学的側面に関するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(50 廣瀬幸生) 認知意味論・機能言語学・語用論に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(59 矢澤真人) 言語教育や翻訳・通訳、辞典編集など、今後の多言語多文化社会に向けた、言語研究の実践的な応用のあり方について考える。</p> <p>(60 柳田優子) 言語類型論、生成文法の枠組みで、言語の文法変化に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(69 石田尊) 現代日本語を主な対象とした統語的・意味的研究に関する論文指導を行う。</p> <p>(76 小野雄一) テクノロジーを活用した言語処理、言語分析や学習支援システムの言語教育への利用などに関する論文指導を行う。</p> <p>(81 金仁和) 韓国語学及び韓日対照と関連するテーマについて論文指導する。</p> <p>(85 佐々木勲人) 中国語文法研究、日中対照研究に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(87 澤田浩子) 構文・談話・コミュニケーションを対象に、日本語学・日本語教育学に関する論文指導を行う。</p> <p>(91 島田雅晴) 生成統語論に関するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(94 住大恭康) ドイツ語の機能語に関して、他の言語と比較しつつ、文法的、意味的、語用論的な論文の指導を行う。</p> <p>(106 那須昭夫) 音声・音韻研究を実践するうえで必要とされる知識・技能ならびに考察手法に関して、日本語の分節現象・韻律現象を題材とした指導を行うとともに、受講者の研究課題にあわせた論文指導を行う。</p> <p>(109 橋本修) 日本語史・他言語との対照を含めた、広義日本語文法論に関する基礎的な方法論について論文指導をおこなう。</p> <p>(118 松崎寛) 音声学・日本語教育学に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(123 宮腰幸一) 主に日本語/英語の意味論・文法論の論文指導を行う。</p> <p>(135 和田尚明) 時制・アスペクト・モダリティに関連するテーマの論文指導を行う。</p>	
現代文化学	ヨーロッパ文化学IA	この授業はイギリス、ドイツ、スペインを中心としたヨーロッパの社会と文化を対象に、そこに見られる諸問題を扱う。とりわけ、政治や経済等の大きな変動に伴う社会と文化の変容をテーマにする。英語かドイツ語またはスペイン語で書かれた文献を用いて、受講者が発表を行い、それに基づいて議論を行う。専門文献の読解力の向上、ヨーロッパの人々が直面した社会的・文化的な摩擦や対立に関する知識の深化、自らの研究に関する発表・議論スキルの向上を目指す。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ヨーロッパ文化学IB	この授業はイギリス、ドイツ、スペインを中心としたヨーロッパの社会と文化を対象に、そこに見られる諸問題を扱う。とりわけ民族や異文化との摩擦・対立などをテーマにする。英語かドイツ語またはスペイン語で書かれた文献を用いて、受講者が発表を行い、それに基づいて議論を行い、専門文献の読解力の向上、ヨーロッパの人々が直面した社会的・文化的な摩擦や対立に関する知識の深化、自らの研究に関する発表・議論スキルの向上を目指す。	隔年
	ヨーロッパ文化学IIA	この授業はイギリス、ドイツ、スペインを中心としたヨーロッパの社会と文化を対象に、そこに見られる諸問題を扱う。とりわけ社会的・文化的マイノリティに関する諸問題を考察する。専門文献の読解力の向上、ヨーロッパの人々が直面した社会的・文化的な差異や対立に関する知識の深化、自らの研究に関する発表・議論スキルの向上を目指す。	隔年
	ヨーロッパ文化学IIB	この授業はイギリス、ドイツ、スペインを中心としたヨーロッパの社会と文化を対象に、そこに見られる諸問題を扱う。とりわけ年齢や性など、習慣やアイデンティティの違いから生じる諸問題などのテーマを考察する。専門文献の読解力の向上、ヨーロッパの社会的・文化的な差異や対立に関する知識の深化、自らの研究に関する発表・議論スキルの向上を目指す。	隔年
	文化現象学 IA	この授業では主にヨーロッパや日本の展覧会、博覧会、音楽堂などを対象としたテキストを講読しつつ、そうした文化的な制度や施設を通じて、文化や芸術が各国・地域で、あるいは国際間でどのように影響を与えあい、現象し、発展していくのかを考える。受講者ごとに担当箇所を決め、訳読を行いつつ進める。 また受講者は自らの関心のある課題を独自に調査・研究する。月1回程度の割合で各自の関心に沿った文献の紹介・調査研究の報告などの回を設ける。そうした議論を継続的に進めることで、受講者どうしがお互いの関心を把握し、建設的な議論を行う基礎知識を共有し、問題設定やアプローチ方法について検討しあえるような場を作っていく。それを通じて、対象をより多面的に把握・理解する力を養う。	隔年
	文化現象学 IB	この授業では主にヨーロッパや日本の展覧会、博覧会、音楽堂などを対象としたテキストを講読しつつ、そうした文化的な制度や施設を通じて、文化や芸術が各国・地域で、あるいは国際間でどのように影響を与えあい、現象し、発展していくのかを考える。受講者ごとに担当箇所を決め、訳読を行いつつ進める。 また受講者は自らの関心のある課題を独自に調査・研究し月1回程度の割合で各自の関心に沿った文献の紹介・調査研究の報告などの回を設ける。そうした議論を継続的に進めることで、受講者どうしがお互いの関心を把握し、建設的な議論を行う基礎知識を共有し、問題設定やアプローチ方法について検討しあえるような場を作っていく。またそれに基づいた論文執筆についての具体的なアドバイスをなども行っていく。	隔年
	文化現象学 IIA	この授業では主にヨーロッパや日本の展覧会、博覧会、音楽堂などを対象としたテキストを講読しつつ、そうした文化的な制度や施設を通じて、文化や芸術が各国・地域で、あるいは国際間でどのように影響を与えあい、現象し、発展していくのかを考える。受講者ごとに担当箇所を決め、訳読を行いつつ進める。 また受講者は自らの関心のある課題を独自に調査・研究する。月1回程度の割合で各自の関心に沿った文献の紹介・調査研究の報告などの回を設ける。そうした議論を継続的に進めることで、受講者どうしがお互いの関心を把握し、建設的な議論を行う基礎知識を共有し、問題設定やアプローチ方法について検討しあえるような場を作っていく。また限られた時間内で必要な情報を要約し、的確に伝えるプレゼンテーションの力も鍛える。同時にまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	文化現象学 IIB	この授業では主にヨーロッパや日本の展覧会、博覧会、音楽堂などを対象としたテキストを講読しつつ、そうした文化的な制度や施設を通じて、文化や芸術が各国・地域で、あるいは国際間でどのように影響を与えあい、現象し、発展していくのかを考える。受講者ごとに担当箇所を決め、訳読を行いつつ進める。 また受講者は自らの関心のある課題を独自に調査・研究する。月1回程度の割合で各自の関心に沿った文献の紹介・調査研究の報告などの回を設ける。そうした議論を継続的に進めることで、受講者どうしがお互いの関心を把握し、建設的な議論を行う基礎知識を共有し、問題設定やアプローチ方法について検討しあえるような場を作っていく。そうすることによって、自らの課題を明確に意識し、より大きな論文へとステップアップさせていくためのきっかけを作っていく。特に論理的な構成力を涵養することを重視し指導する。	隔年
	文化構造学 I	現代文化を理解するための基礎文献を講読し、文化構造の分析に必要な基礎的な理論を習得する。本授業ではとりわけ、マルクス、フロイト、アルチュセール、フーコー、ドゥルーズ＝ガタリなど、19世紀から20世紀に至る社会理論、文化理論に関する重要文献を読解し、近代の社会、文化構造を批判的に分析できる能力を養うことを目的とする。本授業は演習形式で行うこととし、発表とディスカッションを通じて、批判的思考能力と論理的思考能力を養成する。	隔年
	文化構造学 II	現代文化を理解するための基礎文献を講読し、文化構造の分析に必要な基礎的な理論を習得する。本授業ではとりわけ、バリバル、ランシエール、ネグリ＝ハート、バトラーなど、現代の社会理論、文化理論に関する重要文献を読解し、現代の社会、文化構造を批判的に分析できる能力を養うことを目的とする。本授業は演習形式で行うこととし、発表とディスカッションを通じて、現代社会、現代文化に関する批判的思考能力を養成する。	隔年
	文化動態学 IA	本講義では、変幻するグローバル社会の多様な価値観に新たな文脈を提示すべく、現代文化を読み解くうえで必要な国内外の理論的文献を講読する。とくにポストメディア時代における芸術と社会の関係について考察し、批判的な思考力を養う。授業は演習形式で行う。	隔年
	文化動態学 IB	本講義では、変幻するグローバル社会の多様な価値観に新たな文脈を提示すべく、現代文化を読み解くうえで必要な国内外の理論的文献を講読する。とくにポストメディア時代における具体的な社会的事象とその表象をめぐる文化のダイナミズムを精緻に考察する。授業は演習形式で行う。	隔年
	文化動態学 IIA	本講義では、グローバル社会の多様な価値観に新たな文脈を提示すべく、現代文化を読み解くうえで必要な国内外の理論的文献を講読する。とくにメディア理論、芸術理論をふまえながら欧米の具体的な社会的事象とその表象をめぐる文化のダイナミズムをより精緻に考察する。授業は演習形式で行うが、ディスカッションを重視し、それを通して自らの思考を的確に表現できる力を養成する。	隔年
	文化動態学 IIB	本講義では、グローバル社会の多様な価値観に新たな文脈を提示すべく、現代文化を読み解くうえで必要な国内外の理論的文献を講読する。とくにポストメディア時代におけるメディア論や芸術論の関係について、具体的な社会的事象とその表象をめぐる文化のダイナミズムをより精緻に考察し、批判的な思考力を養う。授業は演習形式で行い、ディスカッションを通して自らの思考を的確に表現できる力を養成する。	隔年
	文化差異学 IA	アメリカ文化のダイナミズムと不可分である文化的差異（人種、ジェンダー、地域、障害等）に注目する。国家の枠組みを一旦保留して、環太平洋という文化ネットワークのなかで、パブリックな領域とプライベートな領域を横断しながら、文化と力の関係を検証する。孤児をめぐる国際養子縁組のシステム形成など、環太平洋ネットワークを移動する「こども」を読み解く。毎回、発表ならびにディスカッションをとおして発信力と批判的思考力を養う。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	文化差異学 IB	アメリカ文化のダイナミズムと不可分である文化的差異（人種、ジェンダー、地域、障害等）に注目する。国家の枠組みを一旦保留して、環太平洋という文化ネットワークのなかで、パブリックな領域とプライベートな領域を横断しながら、「核」と文化の関係を検証する。広島・長崎とネバダ核実験場、核家族と核シェルター、宇宙開発と地下都市計画、などの共鳴を考察する。毎回、発表ならびにディスカッションをとおして発信力と批判的思考力を養う。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	文化差異学 IIA	アメリカ文学のダイナミズムと不可分である文化的差異（人種、ジェンダー、地域、障害等）に注目する。とりわけ、文学と視覚・聴覚文化、文学とモノ文化、文学と食文化などの相互交渉のなかで見えてくる文化的差異と規範の構築性を考察する。ロビン・バーンスタインによるScriptive Thingの方法論などを検証し、アメリカの人種（白人と黒人）をめぐる言説が、文化のなかで、人間とモノ（痛みを感じない人形）との関係として形成されていった歴史を論じる。毎回、発表ならびにディスカッションをとおして発信力と批判的思考力を養う。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	文化差異学 IIB	アメリカ文学のダイナミズムと不可分である文化的差異（人種、ジェンダー、地域、障害等）に注目する。とりわけ、文学と視覚・聴覚文化、文学とモノ文化、文学と食文化などの相互交渉のなかで見えてくる文化的差異と規範の構築性を考察する。カイラ・ワザナ・トンプキンズのCritical Eating Studiesの方法論などを検証し、アメリカの人種（白人と黒人）をめぐる言説が、文化のなかで、人間とモノ（食べ物）との関係として形成されていった歴史を論じる。毎回、発表ならびにディスカッションをとおして発信力と批判的思考力を養う。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	文化批評学 I	この授業は現代文化研究を行う上で必要である現代文化を批評するための様々な視点について学ぶことを目的としている。授業では、主に思想・批評理論・文学の文献の講読を中心に、とくに現代文化の表象に関わる諸現象について様々な角度から考察する。受講者には、授業中の発表、授業の最後のレポートの提出が求められ、それらをもとに成績評価が行われる。授業のテーマに関する幅広い知識をつけること、複合的理解力、批判的思考力を高めることを目標とする。また、この授業では学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	文化批評学 II	この授業は現代文化研究を行う上で必要である現代文化を批評するための様々な視点について学ぶことを目的としている。授業では、主に思想・批評理論・文学の文献の講読を中心に、とくに現代文化の言語やイメージに関わる諸現象について様々な角度から考察する。受講者には、授業中の発表、授業の最後のレポートの提出が求められ、それらをもとに成績評価が行われる。授業のテーマに関する幅広い知識をつけること、理解力、批判的思考力を高めることを目標とする。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	文化生成学 IA	18世紀から現代に至るドイツにおいて文化の問題がどのような角度から論じられてきたかを、主要な思想家（ヘルダー、ゲーテ、ニーチェ、カッシーラー、ベンヤミン、ガダマー等）の原典や文化理論についての研究書（ブルーメンベルク、ベーム、アスマン）を精読しながら考察する。特に異文化理解の問題、多文化主義と翻訳の問題、文化と言語の相互関係の問題などを取り上げて、文化生成の動的なあり方について考える。解釈学、言語論、翻訳論の諸議論を手がかりにして多角的に考察を進める。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	文化生成学 IB	啓蒙主義、古典主義、ロマン主義の時代のドイツにおいて文化形成の問題がどのような角度から論じられてきたかを、主要な思想家（ヴィンケルマン、ヘルダー、ゲーテ、シラー、シェリング等）の原典や文化理論についての研究書を精読しながら考察する。当時の社会的・思想的背景を踏まえて、特に文化と芸術、古代と近代、文化と自然といった問題について考える。解釈学、文化記憶論、感性論、芸術論の諸議論を手がかりにして、多角的に考察を進める。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	文化生成学 IIA	近代ドイツを中心に、文化・自然・芸術をめぐる諸問題について、主要な思想家（ヴィンケルマン、ヘルダー、ゲーテ、シラー、シェリング等）の原典や文化理論についての研究書を精読しながら考察する。当時の文化的・思想的背景を踏まえて、特に歴史哲学、自然哲学、芸術哲学などを中心に考察を進める。解釈学、文化記憶論、感性論、芸術論の諸研究を手がかりにして、多角的に考察を行う。	隔年
	文化生成学 IIB	近代から現代に至るドイツにおけるさまざまな文化論を、思想家（ヘルダー、ニーチェ、カッシーラー、ベンヤミン、ガダマー等）の原典や文化理論についての研究書（ベーム、アスマン）を精読しながら考察する。特にイメージ・図像を介した解釈の問題が文化の形成や変容にどのような位置を占めているのかという問題について、解釈学、言語論、翻訳論、形象学等の諸議論を手がかりにして多角的に考察を進める。	隔年
	感性文化学 IA	本授業では、現代文化の諸事象を取り上げ、感性的な次元にまで遡って、意味生成の契機をどのように記述できるかを探究するための方法論を習得する。問題としては、文化はその生成の場においてどこまで感性的なものや生物学的なものに基礎付けられているのか、あるいは反対に、すでに成立した文化形成体において、感性的な要素や生物学的な要素がどのように作動しているかを考える。方法的には、メルロ＝ポンティ、デリダ、レヴィナスらの現象学、ドゥルーズの思想、シモンドンやフーコーのテクノロジーに関する議論を批判的に検討することによって、二世紀の知のありかたにふさわしい方法論を模索する。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	感性文化学 IB	本授業では、現代文化の諸事象を取り上げ、感性的・身体的な次元にまで遡って、そこにおける意味生成の契機をどのように記述できるかを探究するため、具体的な事例の分析方法を習得する。問題としては、文化はその生成の場においてどこまで感性的・身体的なものに基礎付けられているのか、あるいは反対に、すでに成立した文化形成体において、感性的・身体的な要素がどのように作動しているかを考える。具体的には、現象学による身体論や芸術（絵画、彫刻、映画、舞踏など）論を検討することによって、事例に則した分析方法を練り上げることを目指す。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	感性文化学 IIA	本授業では、現代文化の諸事象を取り上げ、身体の原初的な次元にまで遡って、感覚の次元のシンボル機能の契機をどのように記述できるかを探究するための方法論を習得する。問題としては、感性と言語、社会、諸制度を感性的なものがどのように基礎付けているかを、身体に定位して考察する。あるいは反対に、すでに成立した文化形成体において、身体の感性的な次元の気づきを働かせるにはどうすればよいかを考える。方法的には、メルロ＝ポンティ、レヴィナスらの現象学的身体論、ドゥルーズの思想、シモンドンのイメージ論やフーコーのテクノロジーに関する議論を批判的に検討することによって、二世紀の文化的な諸現象を分析する方法を探る。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	感性文化学 IIB	本授業では、現代文化の諸事象を取り上げ、感性的・身体的な次元にまで遡って、シンボル機能をどのように記述できるかを探究するための、具体的な事例の分析方法を習得する。問題としては、ある文化事象において感性的・身体的なものがどのように作動しているかを探究することによって、「文化」そのものの概念を実践的に刷新するような思考をどのように練り上げるかを考える。具体的には、現象学による身体論や芸術（絵画、彫刻、映画、文学作品、舞踏など）論を感性文化論的な視点から検討することによって、事例に則した分析方法を練り上げることを目指す。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	文化横断学 IA	様々な国や地域の文化と学問・芸術領域を横断しながら、学際的な関係性に焦点を当てながら分析を進めていく。現代文化学コースの授業として、現代的・共時的視点が重要となるが、それぞれの文化や学問・芸術領域のダイナミックな通時的変化や、大きな影響力を持ち続ける各種伝統などにも、丁寧に注目していく。各年度の授業開始時に、担当教員がテーマや教材等を指定するが、受講生それぞれの興味や専門を柔軟に反映させられるような演習形式で展開していく。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	文化横断学 IB	文化横断学IA同様、様々な国や地域の文化と学問・芸術領域を横断しながら、学際的な関係性に焦点を当てて分析を進めていく。また、現代文化学コースの授業として、現代的・共時的視点を大切にしつつ、それぞれの文化や学問・芸術領域の通時的変化や各種伝統にも丁寧に注目するという点も同じである。一方、文化横断学IAよりも、受講生それぞれの興味や専門を取り入れた視点から独自の分析を展開し、それを発表や文章を通して伝えるという点に力を入れる。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	文化横断学 IIA	複数の国・地域の文化と学問・芸術領域を横断し、学際的な関係性に焦点を当てながら分析を進める。現代文化学コースの授業として、現代的・共時的視点を重視するが、それぞれの文化や学問・芸術領域のダイナミックな通時的変化や、大きな影響力を持ち続ける各種伝統などにも、丁寧に注目していく。各年度の授業開始時に、担当教員がテーマや教材等を指定するが、受講生それぞれの興味や専門を柔軟に反映させられるような演習形式で展開していく。同時にまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も実施する。	隔年
	文化横断学 IIB	文化横断学IIAを発展させる形で、様々な国・地域の文化と学問・芸術領域を横断しながら、学際的な関係性に焦点を当てていく。また、現代的・共時的視点を大切にしつつ、それぞれの文化や学問・芸術領域の通時的変化や各種伝統にも丁寧に注目するという点は、文化横断学IIAと同じである。一方、文化横断学IIAよりも、受講生それぞれの興味や専門を取り入れた視点から独自の分析を展開し、それを発表や文章を通して伝えるという点に力を入れる。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	芸術文化学 I	この授業では、人間の創造行為を芸術と人類学の接点を模索するイメージ人類学のアプローチから再考し、そのアプローチを用いた芸術文化研究の可能性を探る。この探究の根底にあるのは、「イメージが放つ効力とはどのように生み出され、受容され、そして伝承されていくのか」という問いである。この問いに答えるために、イメージ人類学が提唱されるに至った学問的背景を把握しつつ、関連文献を講読する。文献研究を通して、芸術研究と人類学を結ぶ多様な視点を獲得し、イメージ、モノ、身体、文化、記憶、メディア、芸術等を研究する柔軟な思考法を習得する。本授業で取り上げる「芸術」は、いわゆる「純粋芸術」の作品だけではなく、日常品や、形の残らないもの、不完全なもの含まれる。それらの「日常の美学」や「不完全なるものの美学」も追究する。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	芸術文化学 II	イメージ人類学のアプローチを具体的な芸術文化研究に応用する。本授業では、いわゆる「純粋芸術」のみならず、美術史研究では取り上げられることのなかった装飾や人工的なモノ（宗教的な奉納物、日常品等）、ファッション、インテリア、ダンスなども考察の対象とし、そのようなものの中に潜まれるイメージの力を問題にする。文化的にも歴史的にも多様な題材を取り上げ、イメージ人類学の射程を広げる試みを行う。文化的な所産物である日常品が生み出す「日常の美学」、「完全」ではないものが持つ「不完全なもの美学」にも迫りたい。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	イメージ文化学 IA	この授業では、言語・音声・映像・身体所作などによって表現されたもののある部分や断片が、それが置かれている文脈や全体性の安定性を揺るがしたり、部分的でありながら文脈や全体性に所属していないように思われる場合、そのような部分的な表現をイメージと定義して研究を行う。このような部分的イメージには、新しい意味や表現を生み出すという創造的な側面があるが、その具体例を文学や映像などによる作品の中に求め、イメージに関する文献を参照しながら論考する。導入的授業として、様々なテキスト・作品の講読や閲覧を中心にして、個々のイメージがどのような効果を持っているのかを具体的に把握することを目標とする。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	イメージ文化学 IB	イメージ文化学IAで考察されたイメージの諸相について、さらに理論的側面から研究を深める。部分的イメージは、それが置かれている文脈や全体性の安定性を揺るがしたり、文脈や全体性が取り込もうとする力に反発するように作動するが、そのような特性がどのように新しい意味や表現を生み出すのかという問題を表象論的に論考する。具体的には、イコノロジー、詩的想像力研究、文学理論、現代哲学などの分野の中でイメージに関係するテキストを取りあげて研究する。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	イメージ文化学 IIA	この授業では、言語・音声・映像・身体所作などによって表現されたもののある部分や断片が、それが置かれている文脈や全体性の安定性を揺るがしたり、部分的でありながら文脈や全体性に所属していないように思われる場合、そのような部分的な表現をイメージと定義して研究を行う。このような部分的イメージには、新しい意味や表現を生み出すという創造的な側面があるが、その具体例を文学や映像などによる作品の中に求め、イメージに関する文献を参照しながら論考する。導入的授業として、様々なテキスト・作品の講読や閲覧を中心にして、個々のイメージの部分的性がどのような効果を全体性に及ぼすことになるのかを具体的に把握することを目標とする。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	イメージ文化学 IIB	イメージ文化学IIAで考察されたイメージの諸相について、さらに理論的側面から研究を深める。部分的イメージは、それが置かれている文脈や全体性の安定性を揺るがしたり、文脈や全体性が取り込もうとする力に反発するように作動するが、そのような特性がどのように新しい意味や表現を生み出すのかという問題を表象論的に論考する。具体的には、ベケット（反表象的表現）、ジョルジュ・デュリュイ（イコノロジー）、ガストン・バシュラール（詩的想像力研究）、ドゥルーズやレヴィナス（現代哲学）など、部分的イメージに関係するテキストを取りあげて研究する。この授業ではまた、学生の研究テーマに応じて研究指導も適宜実施する。	隔年
	(研究指導：現代文化)	<p>修士論文の完成に向けて、参考文献や資料収集の助言、執筆の手法、研究倫理など総合的に指導する。</p> <p>(5 畔上泰治) 主にドイツ語圏の現代文化をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (28 竹谷悦子) 主に人種やジェンダーなど文化的な差異テーマにした（英語での）論文執筆に関して研究指導を行う。 (36 中田元子) 主にイギリスの文化をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (42 濱田真) 主に18世紀から現代に至るドイツ語圏の文化をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (49 廣瀬浩司) 主にフランス現代思想をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (61 山口恵里子) 主に芸術をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (73 江藤光紀) 主に絵画や音楽などテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (86 佐藤吉幸) 主に現代思想や文化の構造をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (92 清水知子) 主にポストメディア社会における諸問題をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (102 対馬美千子) 主に現代文化を対象に批判的な観点から論文執筆を目指す学生の研究指導を行う。 (117 馬籠清子) 主に複数の国々を横断する文化をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (125 宮崎和夫) 主にスペイン語圏の文化をテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。 (131 吉野修) 主に映像や言語などで表されたイメージをテーマにした論文執筆に関して研究指導を行う。</p>	
英語教育学	英語教育学 IA	本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、文字言語情報をより正確かつ高度に処理するプロセスやその習得の解明を目指していく。特に読み手の知識や経験、関心、スタイルおよび認知的な要因が英語の「読み」にどのような影響を与えているのか、読み手の心の中に生じているプロセスの分析を試み、リーディング能力の優劣はどのような要因から決定されるのかを探り、その応用として教室における英語リーディング指導の在り方を検証する。	隔年
	英語教育学 IB	本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、文字言語情報をより正確かつ高度に処理するプロセスやその習得の解明を目指していく。特に、英語の「読み」の理論と実践研究にかかわる諸問題を考察していく中で、受講生が各自の問題意識を鮮明に持つよう討議を進め、外国語習得理論および英文読解理論の究明に寄与する実験研究の手法やリサーチデザイン、さらには、理論に基づく教室における英語リーディング指導の在り方を学んでいく。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語教育学 II A	本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、文字言語情報をより正確かつ高度に処理するプロセスやその習得の解明を目指していく。最新の文献から、英語リーディングおよび心理学など関連分野の理論を学び、特に読み手の知識や経験、関心、スタイルおよび認知的な要因が英語の「読み」にどのような影響を与えているのか、読み手の心の中に生じているプロセスの分析を試み、リーディング能力の優劣はどのような要因から決定されるのかを検証する。	隔年
	英語教育学 II B	本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、文字言語情報をより正確かつ高度に処理するプロセスやその習得の解明を目指していく。特に、英語リーディングおよび心理学など関連分野の理論を学び、英語の「読み」の理論と実践研究の諸問題を考察し、受講生が各自の問題意識を鮮明に持つよう討議を進め、英文読解理論の究明に寄与する実験研究の手法やリサーチデザイン、理論に基づく教室における英語リーディング指導の在り方を学んでいく。	隔年
	英語教育学 III A	本講義では、語彙指導を中心に据えながら、英語教育学分野における実践的な手法を、その理論的背景と共に理解することを目指す。先行研究および授業ビデオを活用しながら学び、4技能5領域における幾多の授業手法が、どのような原理に基づいているのかを解明することで、授業実践に係る原理と効果的な指導法を理解していく。さらに、こうした点を授業実践力育成の観点からグループ・ディスカッションをすることによっても、理解を深める。	隔年
	英語教育学 III B	本講義では、英語教育における統語構造および語彙文法の学習を、いかにコミュニケーション活動と統合して、実践していくかを学んでいく。そのために、取り上げる統語構造および語彙文法を、先行研究における指導上の留意点および英語学の観点から学び理解を深めた上で、Focus on Formの枠組みを用い、そうした事項をいかに効果的なコミュニケーション活動に落とし込んでいくかについて学ぶ。このために、グループディスカッションも取り入れ、理論・実践の両面から理解を深める。	隔年
	英語教育学 IV A	本講義では、英語教員および英語研究者として必要な学術的表現力、特にアカデミック・ライティング力を向上させることを目指す。このために、(a)学術領域におけるライティングの日英語の発想の違いを理解し、(b)論文執筆に必要なreferencesおよびオンライン/オフライン・コーパスの検索技術を理解し、(c)英文要約の効果的な手法を理解した上で、(d)APAスタイルで英文を執筆する手法と推敲方法を学んでいく。このために、毎回の事前課題提出および授業内のディスカッションを重視して、こうした点の理解を深める。	隔年
	英語教育学 IV B	本授業では、先行文献における英文実証研究を参考にしながら、リサーチ内容を発表する上での、効果的なプレゼンテーション手法について理解を深める。そのために、国際学会での発表を念頭に、APAスタイルでのリサーチ概要のまとめ方、議論の組み立て方、学術用語の定義、難解表現のパラフレーズ、効果的なスライド作成、メモを読まずにスライド上のキーワードを基に発表する手法、効果的なアイ・コンタクトについて、実践的に練習を行い、ピア・フィードバックも交えて発表スキルを高めていく。	隔年
	英語教育学 V A	本講義では、コミュニケーション能力とはどのような能力で構成されているのか、さまざまな言語モデルに触れ、その構成されている概念に関する知見を深めることを目標とする。これらの構成概念の中で、日本人学習者にとって重要と思われる語彙や文法能力を如何にコミュニケーションの中で使えるようになるかについて、モデルを基礎、講義や討論を交えながら、その理論と教授法についての知識を深める。そしてそれを如何に評価していくかを考察していく。	隔年
	英語教育学 V B	技能統合的タスクやパフォーマンス能力に関する理論と指導方法を踏まえ、その評価方法の知識を習得することを目標とする。具体的な技能統合的タスクの事例を上げ、それぞれのタスクが、どのような現実のコミュニケーション能力に効果があるかを議論することによって、その理論と指導法の知識を深めることを狙いとする。その後、それぞれのタスク講義と討論を交えながら、その理論と教授法についての知識を深める。その後、それらのタスクを如何に評価していくかを考察していく。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語教育学 VIA	本講義では、4技能の伸びや授業の進み具合の評価についての理論とその評価手法について学んでいく。中でも生徒の学習状況を知るため、また、成績を付けるためにテストを実施することは不可欠である。そのテストを作成する際にどのようなことに気をつけて作成すればよいのか、テストによって派生する効果について講義と討論をとして知識を深めることを目標とする。特に、大学入試改革における現状のテストで求められる能力、その能力を身につけるためのテストと評価のあり方を考えていく。	隔年
	英語教育学 VIB	本講義では、教授方法の違いによる言語の伸びの測定や認知能力の心理測定についての理論を学んでいく。古典的テスト理論から項目応答理論、効果量の測定、一般化可能性理論、構造方程式モデリング、メタ分析などさまざまな現代のテスト理論とその手法について関連文献を読み進めながら知識を深めていくことをねらいとする。その中で必要な統計手法の実践や実際にその手法が使用されている文献を探ることで、理論だけでなく実際に研究に応用できるようになることを目指す。	隔年
	英語教育学 VIA	本講義では、Computer-Assisted Language Learning (CALL)に関する基礎理論や、CALL授業のモデルに関する実践と研究の方法論を理解する。そして、言語学、情報工学、教育学など、積極的に他分野からの文献を引用し、学際的な視野から論点が整理できるようになる。具体的には、多読、多聴、語彙、発音についての教室外学習、ダイアログ、日記、オンライン素材、ゲーミフィケーション、ソーシャルメディア、交流サイトについて概観する。	隔年
	英語教育学 VIB	本講義では、Computer-Assisted Language Learning (CALL)に関する基礎理論や、CALL授業のモデルに関する実践と研究の方法論を理解する。そして、言語学、情報工学、教育学など、積極的に他分野からの文献を引用し、学際的な視野から論点が整理できるようになる。具体的には、PBL学習、PBL協働学習、自律的学習、エコロジ、ビデオ制作についての教室外プロジェクト、海外研修、異文化遭遇、教員養成、文化的利益、ホームチューターなど母語話者との交流について概観する。	隔年
	英語教育学 VIIA	本講義では、Computer-Assisted Language Learning (CALL)に関する基礎理論や、CALL授業のモデルに関する実践と研究の方法論を理解する。そして、言語学、情報工学、教育学など、積極的に他分野からの文献を引用し、学際的な視野から論点が整理できるようになる。具体的には、コンピュータを活用した学習、CALLからTELLへ、デジタルという文脈、ハードウェアの役割、リスニングスキル、スピーキングスキル、リーディングスキル、デジタルテキストについて概観する。	隔年
	英語教育学 VIB	本講義では、Computer-Assisted Language Learning (CALL)に関する基礎理論や、CALL授業のモデルに関する実践と研究の方法論を理解する。そして、言語学、情報工学、教育学など、積極的に他分野からの文献を引用し、学際的な視野から論点が整理できるようになる。具体的には、ライティング支援、協働ライティング、視覚情報の役割、マルチモーダルな学習、仮想的な学習環境、協働的プレゼンテーション、若者とテクノロジー、安全と子供たちの保護について概観する。	隔年
	英語教育学 IXA	本講義では、生後すぐからバイリンガル環境で育てられた子どもがどのように二言語を発達させるのか、ケース・スタディを通して音韻・語彙・文・言語選択の各観点を検討する。テキストで取り上げられたケースを自分の言語（外国語）習得過程と比較する。	隔年
	英語教育学 IXB	本講義では、英語と日本語のバイリンガル環境で育てられた子どもがどのように二言語を発達させるのか、特に読み書きとアイデンティティの関心に焦点を当てて検討する。	隔年
	英語教育学 XA	本講義では、SLA分野の研究方法を紹介するテキストを1章ずつ読むとともに、その手法を用いた研究論文を取り上げて議論する。現在の研究テーマに直接関係していなくても、どのようなテーマに対してその手法が有効かを考える。	隔年
	英語教育学 XB	本講義では、リサーチ・シンセシス及びメタ分析を紹介するテキストを1章ずつ読むとともに、その手法を用いた研究論文を取り上げて議論する。データベースの使用やコーディングなど、それぞれのステップを経験する。現在の研究テーマに直接関係していなくても、先行研究を包括的に理解したいテーマを自分なりに考える。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語教育学 XIA	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生に対して、英語教育学の理論および実証研究を概観し、研究および実践上の指導的役割を果たし得る学識と能力を培う内容を講義する。特に本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、理論的および実証的研究成果や知見をもとに、学習者の言語や認知的な発達をふまえた言語能力および伝達能力の教授可能性や方法論を考察する。	隔年
	英語教育学 XIB	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生に対して、英語教育学の理論および実証研究を概観し、研究および実践上の指導的役割を果たし得る学識と能力を培う内容を講義する。特に本講義では、外国語として英語を学ぶ上で、理論的および実証的研究成果や知見をもとに、教室における英語教授法の在り方を検証し、実践への具体的な提言や示唆を与えることを目指していく。	隔年
	英語教育学 XIA	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生を対象に、外国語として英語を学ぶ上で、英語教育学および関連分野の理論的および実証的研究成果や知見をもとに、学習者の言語や認知的な発達をふまえた言語能力および伝達能力の教授可能性や方法論を考察する。	隔年
	英語教育学 XIB	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生を対象に、外国語として英語を学ぶ上で、英語教育学および関連分野の理論的および実証的研究成果や知見をもとに、学習者の言語や認知的な発達をふまえた言語能力および伝達能力の教授可能性や方法論を考察する。そしてとりわけ、教室における英語教授法の在り方を検証し、実践への具体的な提言や示唆を与えることを目指していく。	隔年
	英文法研究 I	生成文法の視点を踏まえながら、英語の文法について考察する。動詞、名詞、形容詞などから成る基本的な文型について理解を深めるとともに、受動文、分裂文、倒置文などの構文や、関係節、不定詞、分詞、動名詞などの文法項目を取り上げ、その統語的、意味的特徴を明らかにしてゆく。また、冠詞の用法、仮定法、法助動詞を用いた丁寧表現、多様な省略など、日本人学習者にとって難しく映る文法現象を掘り下げて検討したい。さらに、英語の音声面や語形成の特徴についても学習する。 (オムニバス方式／全10回) (20 加賀信広／3回) 意味役割・数量詞の分析等言語学全般にわたる指導を行う。 (60 柳田優子／3回) 日本語の格システム等言語学全般にわたる指導を行う。 (123 宮腰幸一／2回) 理論言語学全般にわたる指導を行う。 (156 山村崇斗／2回) 生成文法理・統語論全般にわたる指導を行う。	オムニバス方式 隔年
	英文法研究 II	授業前半では、生成文法理論における、言語の普遍性、ヒトの文法能力とは何かについて学び、動詞句、名詞句構造、補文構造、移動構文、空範嚙、機能範嚙など実証的事実を通して、文や句の階層性の概念を習得する。授業後半では、生成文法における言語習得論の仮説について学び、第一言語獲得と第二言語獲得の違いに関して考察する。とくに、認知言語学における言語習得観と対比しながら、言語習得メカニズムに関する議論を深める。 (オムニバス方式／全10回) (20 加賀信広／3回) 意味役割・数量詞の分析等言語学全般にわたる指導を行う。 (60 柳田優子／3回) 日本語の格システム等言語学全般にわたる指導を行う。 (123 宮腰幸一／2回) 理論言語学全般にわたる指導を行う。 (156 山村崇斗／2回) 生成文法理・統語論全般にわたる指導を行う。	オムニバス方式 隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語圏の文化・文学 I	<p>アメリカ合衆国の文化・文学を、「国家」の物語として読むことを一旦保留して、多文化共生と多様性の視点から多角的に検証する。アメリカ文化・文学的営為のダイナミズムと不可分である文化的差異（人種、ジェンダー、地域、障害等）に注目することで規範の構築性を再考する。授業では、「読むという行為」について考察し、文学作品を視覚・聴覚文化やモノ文化などのより広い文脈に布置することを試みる。毎回、英語による発表ならびにディスカッションをとおして発信力と批判的思考力を養う。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（28 竹谷悦子／2回）アメリカ文学・文化全般にわたる指導を行う。</p> <p>（36 中田元子／2回）19世紀イギリス文学・文化全般にわたる指導を行う。</p> <p>（61 山口恵里子／2回）イギリス美術全般にわたる指導を行う。</p> <p>（117 馬籠清子／2回）音楽・文学研究全般にわたる指導を行う。</p> <p>（92 清水知子／2回）比較文学・文化理論、メディア文化論全般にわたる指導を行う。</p>	オムニバス方式 隔年
	英語圏の文化・文学 II	<p>英語圏の中でもとくにイギリスを中心とした文化・文学について学ぶ。イギリスの文化・歴史について書かれた文献によって基本的な全体像をつかむとともに、19世紀から現代までのイギリスを中心とした英語圏の文学作品をとりあげ、階級問題、女性問題、植民地問題などの社会問題の文学的表象を考察する。文学テキストの英語表現にも注意を払って読み、英語についての知識を深める。授業は演習形式で行い、自らの思考を的確に表現できる力を養成する。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（28 竹谷悦子／2回）アメリカ文学・文化全般にわたる指導を行う。</p> <p>（36 中田元子／2回）19世紀イギリス文学・文化全般にわたる指導を行う。</p> <p>（61 山口恵里子／2回）イギリス美術全般にわたる指導を行う。</p> <p>（117 馬籠清子／2回）音楽・文学研究全般にわたる指導を行う。</p> <p>（92 清水知子／2回）比較文学・文化理論、メディア文化論全般にわたる指導を行う。</p>	オムニバス方式 隔年
	英語教育学演習 I	<p>本講義では、講義、演習、発表、討論、演示、授業参観など、多面的な学習活動を結合した形で展開する。マイクロ・ティーチング（模擬授業）の機会を多く取り入れながら、テキストにより知識の整理と問題意識の焦点化を図る。「英語で英語を読む授業」の進め方を中心に、オーラル・イントロダクション、発音指導、4技能の指導と統合的指導、コミュニケーションな言語活動、学習ストラテジーへの焦点化、指導案の作成、教科書の活用、授業分析、発問スキル、テスト作成と評価にもふれる。</p>	隔年
	英語教育学演習 II	<p>本講義では、講義、演習、発表、討論、演示、授業参観など、多面的な学習活動を結合した形で展開する。マイクロ・ティーチング（模擬授業）の機会を多く取り入れながら、「英語リーディング指導を核とした4技能5領域の統合型授業」の進め方を学ぶ。具体的には、オーラル・イントロダクション、発音指導、4技能の指導と統合的指導、コミュニケーションな言語活動、学習ストラテジーへの焦点化、指導案の作成、教科書の活用、授業分析、発問スキル、テスト作成と評価にもふれる。</p>	隔年
	英語教育学演習 III	<p>本講義では、実際の英語教科書を活用し、各教科書の構成を確認した上で、英語による授業運用方法について学んでいく。このために、口頭による授業導入、コロケーションを含む新出語彙の提示、新出文法事項導入時の既習知識との結び付け、リーディング活動における内容理解を促進する音読と発問、そしてそれらを統合し、コミュニケーションに結び付けるFocus on Formの手法を理解していく。こうした点を授業実践力に生かすため、研究授業ビデオも参考にした上で、英語による模擬授業を行う。</p>	隔年
	英語教育学演習 IV	<p>本講義では、実際の教材を用い、各種活動の理論的背景を理解した上で、実際に英語で授業を行うための実践力を学んでいく。このために、名詞・動詞を中心とする語彙をコロケーション提示する手法、授業におけるICTの活用、適切な英文用例の選択と提示、効果的プレゼンテーション手法も理解した上で、それをコミュニケーション活動に生かす模擬授業を行う。模擬授業は、教室言語を英語として実践し、それについてのピア・フィードバックをし、他の授業ビデオも参考にして、実践的授業力向上を図る。</p>	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語教育学演習 V	本講義では、演習を中心に、学習指導要領で何が求められているか理解を深め、それを実践するための理論的背景や指導法を概観し、授業内でどのように生かすことができるかを学ぶことを目標とする。扱うテーマは、技能統合的パフォーマンスの指導、アクティブラーニングによるスピーキング活動と評価、フォーカス・オン・フォームやCLILなどについて学ぶ。そして、授業ビデオや中高の公開授業などを通して、どのように生かされているか、その指導法を観察する。最後に、指導案を作成し、模擬授業を行い内省する。	隔年
	英語教育学演習 VI	本講義では実践演習を中心に、技能統合タスクやパフォーマンスタスクの指導の実践および評価を行っていく。4技能の評価方法に加え、Can-do評価、CEFRに基づいた評価、ルーブリック作成、フィードバックの与え方、ポートフォリオを使用した内省による評価などを概観する。その後、実際にタスクやテストを作成し、授業で使用し、評価を行う練習をする。教師役と生徒役の立場に立ったときのフィードバックや内省、評価得点の分析や生徒への還元の方法について議論する。	隔年
	英語教育学演習 VII	毎回優れた授業実践事例について、担当者が発表を行う。その上で、討論を行い、望ましい授業をデザインする。具体的には、英文の内容を理解するだけの英語授業でよいのか、内容理解の先に批判的検討や意見交換がある授業、英語で議論できる教育、グラフィック・オーガナイザーを用いた内容理解活動、クリティカル・リーディングの授業、批判的思考力の測定、英語が苦手な学生がスピーチを楽しむ、授業実践例、生徒が身を乗り出してくるタスクとは、などを取り扱う。	隔年
	英語教育学演習 VIII	毎回優れた授業実践事例について、担当者が発表を行う。その上で、討論を行い、望ましい授業をデザインする。具体的には、生き方が見えてくる英語授業、思考力育成へ向けた授業実践、批判的思考力育成のためのCTスキル、小グループが英語で打ち合わせ、英語でプレゼンテーションできる指導、ディベートの授業実践、ライティング技術の指導、英語を通してより豊かに生きることにつながる授業、これからの大学入試が求める英語力（問題発見・判断・意思決定・解決の力）、現代の大学入試問題はどのような英語力を試そうとしているか、などを取り扱う。	隔年
	英語教育学演習 IX	「特定目的の英語 (English for specific purposes; ESP)」では、学習者のニーズや言語サンプルを調べる「ニーズ分析」を実施し、それに基づいてコースを設計することが必要である。本講義では、ESPコースの実例を調査し、ESPのコース設計に必要な過程と手法を修得する。	隔年
	英語教育学演習 X	本講義では「特定目的の英語 (English for specific purposes; ESP)」のうち「職業目的の英語 (English for occupational purposes; EOP)」を対象にする。その中で EOP プログラム設計に欠かせない「ニーズ分析」に焦点を当て、実例を分析し、ニーズ分析の手法を修得する。	隔年
	英語教育学演習 XI	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生を対象に、講義、演習、発表、討論、演示、授業参観など、多面的な学習活動を結合した形で展開する。マイクロ・ティーチング（模擬授業）の機会を多く取り入れながら、オーラル・イントロダクション、発音指導、4技能の指導と統合的指導、コミュニケーション活動、指導案の作成、教科書の活用、発問スキルにもふれる。	隔年
	英語教育学演習 XII	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生を対象に、講義、演習、発表、討論、演示、授業参観など、多面的な学習活動を結合した形で展開する。マイクロ・ティーチング（模擬授業）の機会を多く取り入れながら、学習ストラテジーへの焦点化、授業分析、テスト作成と評価の基礎も学び、4技能の指導と統合的指導についての高度な授業力を身に付けることを目指す。	隔年
	英語教育学研究 I A	本講義は、外国語として英語を学ぶ上で、英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得、コーパスを利用した語彙研究、教材論やタスク・デザイン、言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係、Computer-Assisted Language Learning などについての研究手法を学ぶことを目的としている。英語教育学研究 I Aでは、国内外の文献研究を中心に検証し、討議しながら進めていく。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語教育学研究 IB	本講義は、外国語として英語を学ぶ上で、英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得、コーパスを利用したの語彙研究、教材論やタスク・デザイン、言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係、Computer-Assisted Language Learning などについての研究手法を学ぶことを目的としている。英語教育学研究 IBでは、英語教育学研究 IAで修得した専門知識をさらに深化させ、問題意識を研究テーマとして発展させることを目指す。	隔年
	英語教育学研究 IIA	本本講義は、外国語として英語を学ぶ上で、英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得、コーパスを利用したの語彙研究、教材論やタスク・デザイン、言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係、Computer-Assisted Language Learning などについての研究手法を学ぶことを目的としている。英語教育学研究 IIAでは、研究テーマをもとに、仮説およびリサーチデザインを立て方および研究の遂行について学ぶことを目指す。	隔年
	英語教育学研究 IIB	本本講義は、外国語として英語を学ぶ上で、英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得、コーパスを利用したの語彙研究、教材論やタスク・デザイン、言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係、Computer-Assisted Language Learning などについての研究手法を学ぶことを目的としている。英語教育学研究 IIBでは、英語教育学研究 IIAで学んだ研究手法をもとに、研究の成果をまとめることを目指す。	隔年
	英語教育学研究 IIIA	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生を対象に行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得、コーパスを利用したの語彙研究、教材論やタスク・デザイン、言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係、Computer-Assisted Language Learning などについての研究手法を学ぶことを目的としている。英語教育学研究 IIIAでは、国内外の文献研究を中心に検証し、討議しながら進めていく。	隔年
	英語教育学研究 IIIB	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生を対象に行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得、コーパスを利用したの語彙研究、教材論やタスク・デザイン、言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係、Computer-Assisted Language Learning などについての研究手法を学ぶことを目的としている。英語教育学研究 IIIBでは、英語教育学研究 IIIAで修得した専門知識をさらに深化させ、問題意識を研究テーマとして発展させることを目指す。	隔年
	英語教育学研究 IVA	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生を対象に行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得、コーパスを利用したの語彙研究、教材論やタスク・デザイン、言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係、Computer-Assisted Language Learning などについての研究手法を学ぶことを目的としている。英語教育学研究 IVAでは、研究テーマをもとに、仮説およびリサーチデザインを立て方および研究の遂行について学ぶことを目指す。	隔年
	英語教育学研究 IVB	本講義は、大学院設置基準第14条（教育方法の特例）に対応する科目として、現職教員等、すでに英語の指導経験を有する学生を対象に行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得、コーパスを利用したの語彙研究、教材論やタスク・デザイン、言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係、Computer-Assisted Language Learning などについての研究手法を学ぶことを目的としている。英語教育学研究 IVBでは、英語教育学研究 IVAで学んだ研究手法をもとに、研究の成果をまとめることを目指す。	隔年
	英語教育学論文演習 I	本科目は、授業担当者が、自ら指導する学生に対して行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、その指導および習得に関して、文献および実証的・実践的な研究を行い、英語教育学についての修士論文執筆を完成させるために必要な、明確な目的意識の涵養と博士論文執筆に関するスキルの修得を目的とする。英語教育学論文演習 I では、研究倫理に関する知識の確認、専門知識の深化、論文執筆や研究成果の公開等に関わるスキルを演習形式で修得することを目的とする。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語教育学論文演習 II	<p>本科目は、授業担当者が、自ら指導する学生に対して行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、その指導および習得に関して、文献および実証的・実践的な研究を行い、英語教育学についての修士論文執筆を完成させるために必要な、明確な目的意識の涵養と博士論文執筆に関するスキルの修得を目的とする。英語教育学論文演習 I を受け、この英語教育学論文演習 II は考察した成果を論文としてまとめ、完成させる技術の修得をめざす。</p>	
	(研究指導：英語教育学)	<p>(11 磐崎弘貞) コーパスを利用したの語彙研究など英語教育学全般にわたる課題の研究指導を行う。 (12 卯城祐司) 英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得など英語教育学全般にわたる課題の研究指導を行う。 (46 平井明代) 言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係など英語教育学全般にわたる課題の研究指導を行う。 (76 小野雄一) Computer-Assisted Language Learning など英語教育学全般にわたる課題の研究指導を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際公共政策関連科目 専門基礎科目	社会学基礎理論A	<p>社会学の基礎理論を古典的なものから最新のものに至るまで広範に修得すると共に、社会学の各分野の成果を踏まえ、各自の問題を設定し、データを収集し、仮説を検証する仕方での一定の社会学的考察を展開しながら、修士論文執筆のための基本的な研究計画を作成するための訓練を行う。Aではおもに、社会学の各分野の基礎理論を修得することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(136 葛山泰央/2回) 各自の社会学的な問題関心・問題意識から出発して、社会学の基礎理論を踏まえながら研究計画の素案をまとめ (136 葛山泰央/1回) 社会意識論の分野に関連する社会学の基礎理論を修得するなかで、各自の研究計画を再検討する。 (16 奥山敏雄/1回) 医療社会学の分野に関連する社会学の基礎理論を修得するなかで、各自の研究計画を再検討する。 (34 土井隆義/1回) 社会病理学や社会問題論の分野に関連する社会学の基礎理論を修得するなかで、各自の研究計画を再検討する。 (107 野上元/1回) 歴史社会学や文化社会学の分野に関連する社会学の基礎理論を修得するなかで、各自の研究計画を再検討する。 (67 五十嵐泰正/1回) 都市社会学や地域社会学の分野に関連する社会学の基礎理論を修得するなかで、各自の研究計画を再検討する。 (127 森直人/1回) 社会階層論の分野に関連する社会学の基礎理論を修得するなかで、各自の研究計画を再検討する。 (72 URANO EDSON IOSHIAQUI/1回) 国際社会政策論の分野に関連する社会学の基礎理論を修得するなかで、各自の研究計画を再検討する。 (51 黄順姫/1回) 教育社会学やジェンダー社会論の分野に関連する社会学の基礎理論を修得するなかで、各自の研究計画を再検討する。</p>	隔年 オムニバス方式
	社会学基礎理論B	<p>社会学の基礎理論を古典的なものから最新のものに至るまで広範に修得すると共に、社会学の各分野の成果を踏まえ、各自の問題を設定し、データを収集し、仮説を検証する仕方での一定の社会学的考察を展開しながら、修士論文執筆のための基本的な研究計画を作成するための訓練を行う。Bではおもに、社会学の各分野の成果を踏まえ、修士論文執筆のための基本的な研究計画を作成することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(136 葛山泰央/2回) 各自の社会学的な問題関心・問題意識から出発して、社会学の基礎理論の修得を前提とした研究計画の素案をま (136 葛山泰央/1回) 社会意識論の分野に関連する社会学の基礎理論を前提とした上で、各自の研究計画を再検討する。 (16 奥山敏雄/1回) 医療社会学の分野に関連する社会学の基礎理論を前提とした上で、各自の研究計画を再検討する。 (34 土井隆義/1回) 社会病理学や社会問題論の分野に関連する社会学の基礎理論を前提とした上で、各自の研究計画を再検討する。 (107 野上元/1回) 歴史社会学や文化社会学の分野に関連する社会学の基礎理論を前提とした上で、各自の研究計画を再検討する。 (67 五十嵐泰正/1回) 都市社会学や地域社会学の分野に関連する社会学の基礎理論を前提とした上で、各自の研究計画を再検討する。 (127 森直人/1回) 社会階層論の分野に関連する社会学の基礎理論を前提とした上で、各自の研究計画を再検討する。 (72 URANO EDSON IOSHIAQUI/1回) 国際社会政策論の分野に関連する社会学の基礎理論を前提とした上で、各自の研究計画を再検討する。 (51 黄順姫/1回) 教育社会学やジェンダー社会論の分野に関連する社会学の基礎理論を前提とした上で、各自の研究計画を再検討する。</p>	隔年 オムニバス方式
	国際関係論A	<p>国際関係論において高度な研究を推進し得る基礎的能力を開発し、変動する国際関係やグローバルな政治経済上の課題に対して、多様な視点から対応策を提示できる柔軟な思考力を育成することを主な目的とする。特に、国際政治学や国際関係論に加え、文化人類学、国際政治経済学の分析視角も含めて、雑化・多様化・重層化する国際関係現象を総合的・学際的に理解することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(3 赤根谷達雄/1回) 国際関係論とはどのような学問かを概説するとともに、国際安全保障論の諸理論について考察する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(122 南山淳／1回) 国際関係論における国際政治の諸理論について概説する。 (137 鈴木創／1回) 政治学や比較政治の観点から、国際関係について考察する。 (112 東野篤子／1回) ヨーロッパの国際関係について概説する。 (39 中村逸郎／1回) ロシア・東欧諸国の国際関係について概説す (154 毛利亜樹／1回) アジアの国際関係について概説する。 (26 関根久雄／1回) 気候変動と国際関係について、太平洋島嶼国の事例から考察する。 (93 鈴木伸隆／1回) 文化変動論の観点から、国際関係の変容について考察する。 (78 柏木健一／2回) 国際貿易の発展と経済成長の関係を概説し、国際経済関係上の諸課題について検討する。	
	国際関係論B	本講義では、国際関係の諸理論を学びつつ、国際関係論の基礎を事例研究を通して深く理解するために、旧ソ連諸国（ロシア、ウクライナ、ベラルーシに加え、コーカサス、中央アジア諸国）と日本の政治的・外交的関係を取り上げ、新しいユーラシア共同体構築の試みと日本の関わりや、この地域における日本の外交政策を分析する。	
	公共政策論A	本講義では、公共政策と政策決定における主要な理論潮流を概説し、政策と政治分析を組み合わせた公共政策研究のアプローチを考察する。公共政策の本質的目標は問題解決であるが、その方途を探るとともに、この目標がどのように達成されるかを分析する。また、公共政策に関連する政策アクターや制度、政策の必要性や制約を考察しつつ、なぜある公共政策が成功し、他の公共政策が失敗するのかも議論する。	隔年
	社会開発論	本講義では、社会開発論を学ぶための基礎的科目として、発展途上国の教育、保健、医療等の分野における開発課題に関する経済学の実証分析の文献をレビューしつつ、教育や保健、貧困削減、他の関連する分野に関し、様々な政策的課題について議論する。分析のツールとして、経済学の実証分析の基礎的手法を学びつつ、実証分析のツールが社会開発分野の政策研究にどのように適用され、また、どのような学術的・社会的成果が得られているのかについて考察する。	
	政策評価分析	本講義では、政策プログラムが個人や家計、地域社会としての人々の生活に及ぼす影響について学び、政策プログラム評価方法について知識を得る。先行研究から実証研究の事例を学び、様々なレベルにおける政府や非政府による政策やプログラムの課題を批判的に議論する。また、政策のインパクトが受益者によってどのように異なるのか、どのような要因がインパクトの差異をもたらすかについて深く分析する。	
専門科目	現代政策過程分析A	政策過程を分析するために必要な理論や方法の基礎を習得するために、欧米や日本で展開されている最新の政治理論、分析枠組とその実証例について焦点を当てて、文献講読と学生との議論を通じて検討する。また、具体的事例として、日本の政治についても分析の対象としつつ、政策過程分析についての基礎的理解を深める。	隔年
	現代政策過程分析B	政策過程分析するために必要な理論や方法についての理解を深めるために、欧米や日本で展開されている最新の公共政策の理論、分析枠組とその実証例について焦点を当てて、文献講読とそれに基づく学生との議論を通じて検討する。また、具体的事例として、日本の公共政策についても分析の対象としつつ、政策過程分析についての総合的理解を深める。	隔年
	比較政治学A	現在の比較政治学やアメリカ政治研究は、政治現象を説明する一般化可能な理論を構築し、それを経験的に検証する性格をますます強めている。この授業では、比較政治学に関する具体的なトピックをとりあげて論じる。その際、比較研究分析のテーマとする政治現象の内容を理解するだけでなく、それを分析するための理論や方法論の有用性と限界を検討することも目標とする。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	比較政治学B	現在の比較政治学やアメリカ政治研究は、政治現象を説明する一般化可能な理論を構築し、それを経験的に検証する性格をますます強めている。この授業では、比較政治学の基礎的理解を踏まえ、アメリカ政治研究に関する具体的なトピックをとりあげて論じる。その際、テーマとするアメリカの政治現象の内容を理解するだけでなく、それを分析するための理論や方法論の有用性と限界を検討することも目標とする。	隔年
	国際政治理論A	近年のグローバルな政治現象は複雑化しており、それを説明する国際政治の理論も多様な変化をとげている。本講義では、国際政治理論の最新の研究動向について解説しながら、複雑化するグローバルな政治現象を分析するための手法について検討する。これにより、国際政治理論研究における主要理論や分析枠組について理解を深める。	隔年
	国際政治理論B	近年のグローバルな政治現象は複雑化しており、それを説明する国際政治の理論も批判的検討が重要である。本講義では、批判的国際関係理論（CIRT）と批判的安全保障研究（CSS）の近年の研究動向を中心にグローバルな統治構造とセキュリタイゼーション現象について理論的に検討する。これにより、国際政治理論研究について総合的理解を深める。	隔年
	国際政治史A	現代国際政治の歩みを俯瞰する。おおむね19世紀末から20世紀後半、冷戦期および冷戦終結直後までを考察の対象とする。20世紀前半については大国（列強）間関係、冷戦期にはアメリカとソ連（ロシア）との関係を軸としつつ、植民地主義に対する民族主義の反抗、共産主義と反共主義の衝突、大国の介入による代理戦争などさまざまな局面を検討する。また現代国際政治と日本などの視点も絡めて論じたい。	隔年
	国際政治史B	現代国際政治の歩みを俯瞰する。とくに20世紀から21世紀初頭にかけて発生したいくつかの重要な戦争や紛争を取り上げ、それぞれについて歴史的背景や勃発の直接原因、拡大を許した問題点、当事者や世界各国の態度、終結にいたる過程、影響や遺産、今日的な意義などに焦点を当てながら、戦争と平和という大きな問題について考察していきたい。またそうした戦争と日本との関わりについても触れていきたい。	隔年
	国際安全保障論A	初めに国際政治学の理論体系や主要概念の基本と最新の理論的展開を習得する。基本パラダイムであるリアリズムやリベラリズム、コンストラクティビズム等、それぞれの思考様式と分析アプローチの特徴について学ぶ。そのうえで、国際政治学の主要テーマである国際安全保障に関する古典的著作や近年の理論的発展、新しい安全保障の課題等について体系的に学習する。	隔年
	国際安全保障論B	国際安全保障に関する理論や分析手法を踏まえたうえで、今日の世界やアジアにおける安全保障問題、日本の安全保障、新しい安全保障の課題等について体系的に学習する。特に、中国の台頭と米国の対世界・対アジア戦略、北朝鮮の核兵器開発問題、日本をとりまく安全保障環境の変化と日本の安全保障政策などについて、理論・実証の両面から学ぶ。	隔年
	ヨーロッパ国際関係論A	欧州連合（EU）および北大西洋条約機構（NATO）などを中心としたヨーロッパの機構と、それらをめぐるヨーロッパの国際関係などについて考察する。Aでは主に、EU・NATO域内の政治・安全保障問題に特化し、ヨーロッパ域内の国際関係について深く学ぶ予定である。文献のレジюме発表を中心とするため、詳しくは履修者と相談の上決定する。	隔年
	ヨーロッパ国際関係論B	欧州連合（EU）および北大西洋条約機構（NATO）などを中心としたヨーロッパの機構と、それらをめぐるヨーロッパの国際関係の理論枠組みなどについて考察する。Bでは主に、EU・NATOの対外関係の対象としての近隣地域（主に地中海や旧ソ連諸国）の諸問題を扱い、ヨーロッパと域外地域との国際関係を深く学ぶ予定である。文献のレジюме発表を中心とするため、詳しくは履修者と相談の上決定する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ロシア・東欧の国際関係A	本講義では、ロシアとソ連構成諸国、さらに東欧諸国の国際関係を考察する。2014年のロシアによるウクライナ領のクリミア併合後、ロシアと周辺諸国の政治的、軍事的な緊張感は強くなっている。その要因等を含めて現状について、ロシア語と日本語の文献を読みながら分析していく。これにより、ロシア・東欧諸国の国際関係の近年の動向やその背景にある課題を説明できるようになることを目指す。	隔年
	ロシア・東欧の国際関係B	本講義では、ロシアを中心に旧ソ連構成国と東欧諸国の国際関係について考察する。ロシアはエネルギー資源を用いて周辺諸国にたいして外交攻勢をかけているが、その一方でこれらの国々はロシアにたいする反発を強めている。こうした実態について、ロシア語と日本語の文献を読みながら分析していく。本講義を通して、国際関係の理論的枠組を基に、ロシア・東欧諸国の国際関係を分析できるようになることを目指す。	隔年
	東アジア政治外交A	21世紀初頭の東アジアは経済相互依存が進展する一方で、伝統的安全保障問題の緊張も高まっている。本講義では、この国際環境における中国の台頭と関係国の反応について、英語及び中国語の文献を読みながら分析し、東アジアの政治外交についての理解を深める。本講義を通して、近年の東アジアの国際関係の変化を中国の台頭と関係国の反応から説明できるようになることを目指す。	隔年
	東アジア政治外交B	本講義では、東アジアにおける地域協力の発展と中国の台頭の関係について、開発モデルや地域秩序構想といった複数の問題領域を検討しながら理解を深めつつ、東アジアの政治外交について総合的に考察する。到達目標として、政治外交分析の理論・分析枠組を用い、近年の東アジアの国際関係の変化を中国の台頭を含む諸要因から分析できるようになることを目指す。	隔年
	国際法A	本講義では、法学及び国際法の基礎的知識に立脚した上、法源論等を含む、専門的な問題について判例等を参照しつつ検討を行う。テキストは、Hans Kelsen (1946), General Theory of Law and State等を用い、国際法の基礎について理解を深める。これにより、法学や国際法の基礎的知識を習得しつつ、法学上の専門的な課題や問題を判例等を基に分析し、検討を行うことができる能力を身につける。	隔年
	国際法B	本講義では、法学及び国際法の基礎的知識に立脚した上、国際法と国家の一般理論に係る諸問題を取り上げる。テキストとして、Hans Kelsen (1946) General Theory of Law and Stateやその他欧語論文等を扱いつつ、国際法についての総合的理解を深める。これにより、国際法の理論と分析枠組に基づき、国際法と国家の一般理論に係る諸問題を説明できるようになることを目指す。	隔年
	国際文化論A	文化人類学の方法論としてのフィールドワーク、および民族誌の意義と位置付けを理解し、他学における現地調査との差異を、認識論的また存在論的に明らかにする。特に、文化相対主義の意義と限界を理解し、グローバリゼーションによる文化の接合の展開を、グローカリゼーションと地域開発という観点から総合的に捉える分析方法論と理論的枠組の展開について論じる。	隔年
	国際文化論B	文化人類学の方法論としてのフィールドワーク、および民族誌の意義と位置付けを理解し、他学における現地調査との差異を、認識論的また存在論的に明らかにする。特に、文化相対主義の意義と限界やグローバリゼーションによる文化接合の展開を総合的分析方法への理解を踏まえ、自然と文化の関係性を、レヴィ=ストロースから現在の生成=存在論的アプローチへという展開に沿って講じる。	隔年
	開発人類学A	途上国開発に対して文化的視点からアプローチする人類学的実践の基礎的諸事項について演習形式で講義する。特に、20世紀半ば以降にイギリスで展開された実践的人类学やアメリカの応用人類学に関する批判的議論を通じて、人類学的開発研究の基本的スタンスを明らかにする。さらに、第二次世界大戦後の時代における人類学と途上国開発との距離感を、オリエンタリズム批判、ポストモダン人類学の諸議論、内発的発展論、持続可能な開発論などの関わりから考察し、現代開発人類学の姿を参加者との議論を通して再定義する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	開発人類学B	1950年代から現在までの途上国における社会開発の潮流の変化を概説し、途上国開発の課題について考察する。特に、1950年代のコミュニティ開発、1960年代から顕著になる経済開発の主流化、1970年代にはじまるBHN（人間の基本的ニーズ）充足路線や成長の限界論、1980年代の人間開発論や持続可能な開発論、1990年代における社会開発の主流化、2000年代のMDGs（ミレニアム開発目標）と現在のSDGs（持続可能な開発目標）を主要トピックとして取りあげ、開発業界の特徴と限界、新たな開発パラダイム転換の必要性について講義する。	隔年
	文化変動論A	近年、人の移動がより複雑かつ錯綜した形で展開されることで、新たな文化変動が生みだされている。本講義では文化人類学および隣接諸科学の最新の研究動向を視野に入れながら、人の移動を媒介とした文化変動に関する諸問題、諸事情を具体的に考察する。とくに東南アジアもしくは日本を対象とし、移住、移民コミュニティ、アイデンティティといった問題を考察する。なおAでは、より基礎的な知識や概念習得を目的としている。文化変動論演習Aと併せて受講することが望ましい。	隔年
	文化変動論B	近年、人の移動がより複雑かつ錯綜した形で展開されることで、新たな文化変動が生みだされている。本講義では文化人類学および隣接諸科学の最新の研究動向を視野に入れながら、人の移動を媒介とした文化変動に関する諸問題、諸事情を具体的に考察する。とくに東南アジアもしくは日本を対象とし、移住、移民コミュニティ、アイデンティティといった問題を考察する。なおBでは、Aを踏まえ、より発展的かつ高度な分析能力習得を目的としている。文化変動論演習Bと併せて受講することが望ましい。	隔年
	社会意識論A	この講義では、ユートピアやコミュニオンなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした社会意識論のいくつかの問題領域と、イデオロギー論や知識社会学などそれらに関連する古典的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ一八世紀後半から一九世紀前半にかけての、啓蒙以後の／社会学以前の社会学的思考の展開を再検討するなかで、制度の生成と変容の学問としての社会学が、それ自体としていかに生成し変容することになるのかを概観する。Aでは一八世紀後半の社会思想を主題化する。	隔年
	社会意識論B	この講義では、ユートピアやコミュニオンなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした社会意識論のいくつかの問題領域と、イデオロギー論や知識社会学などそれらに関連する古典的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ一八世紀後半から一九世紀前半にかけての、啓蒙以後の／社会学以前の社会学的思考の展開を再検討するなかで、制度の生成と変容の学問としての社会学が、それ自体としていかに生成し変容することになるのかを概観する。Bでは一九世紀前半の社会思想を主題化する。	隔年
	医療社会学A	この講義では、病院化社会やスピリチュアルケアなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした医療社会学のいくつかの問題領域と、現象学的社会学や臨床社会学、コミュニケーション論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ近代社会における死の医学化／医療化の展開と現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を再検討するなかで、それらの理論枠組みの射程と限界について概観する。Aでは近代社会における死の医学化／医療化の展開を主題化する。	隔年
	医療社会学B	この講義では、病院化社会やスピリチュアルケアなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした医療社会学のいくつかの問題領域と、現象学的社会学や臨床社会学、コミュニケーション論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ近代社会における死の医学化／医療化の展開と現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を再検討するなかで、それらの理論枠組みの射程と限界について概観する。Bでは現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会病理学	この講義では、犯罪／非行、いじめやひきこもりなど現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている逸脱行動論ならびに社会統制論のいくつかの問題領域と、アノミー論やレイベリング論、自己論やコミュニケーション論、リスク社会論や社会的排除論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ現代社会における青少年の逸脱行動の背景にある親密性の変容と、その非常に重要な要因となる人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を再検討するなかで、人間関係論的な観点からの逸脱行動論や社会統制論の理論枠組みを再構築する。社会病理学では現代社会における親密性の変容を主題化する。	隔年
	社会問題論	この講義では、犯罪／非行、いじめやひきこもりなど現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている逸脱行動論ならびに社会統制論のいくつかの問題領域と、アノミー論やレイベリング論、自己論やコミュニケーション論、リスク社会論や社会的排除論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ現代社会における青少年の逸脱行動の背景にある親密性の変容と、その非常に重要な要因となる人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を再検討するなかで、人間関係論的な観点からの逸脱行動論や社会統制論の理論枠組みを再構築する。社会問題論では人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を主題化する。	隔年
	歴史社会学	この講義では、戦争の記憶や社会学的な歴史叙述の方法など西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした歴史社会学のいくつかの問題領域と、社会意識論や言説分析、集合的記憶論やメディア論などそれらに関連する文化社会学の古典的な枠組みを概説することを目標とする。とりわけ近代社会における戦争とその記憶、現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割などの諸問題を社会学的に再検討するなかで、それらの理論枠組みの可能性と限界について概観する。歴史社会学では近代社会における戦争とその記憶を主題化する。	隔年
	文化社会学	この講義では、戦争の記憶や社会学的な歴史叙述の方法など西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした歴史社会学のいくつかの問題領域と、社会意識論や言説分析、集合的記憶論やメディア論などそれらに関連する文化社会学の古典的な枠組みを概説することを目標とする。とりわけ近代社会における戦争とその記憶、現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割などの諸問題を社会学的に再検討するなかで、それらの理論枠組みの可能性と限界について概観する。文化社会学では現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割を主題化する。	隔年
	都市社会学	この講義では、グローバル化する現代都市や地域コミュニティの抱え込む諸々の課題など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている都市社会学や地域社会学のいくつかの問題領域と、グローバル都市論やコミュニティ論、リスクコミュニケーション論や社会的差別論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ現代社会における都市のグローバル化と地域コミュニティの変容と、それらの非常に重要な要因となる、人やモノや情報の移動と定着の現代的な意味を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界について概観する。都市社会学では現代社会における都市のグローバル化を主題化する。	隔年
	地域社会学	この講義では、グローバル化する現代都市や地域コミュニティの抱え込む諸々の課題など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている都市社会学や地域社会学のいくつかの問題領域と、グローバル都市論やコミュニティ論、リスクコミュニケーション論や社会的差別論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ現代社会における都市のグローバル化と地域コミュニティの変容と、それらの非常に重要な要因となる、人やモノや情報の移動と定着の現代的な意味を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界について概観する。地域社会学では現代社会における地域コミュニティの抱え込む諸々の課題を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会階層論A	この講義では、社会移動と社会階層、教育や福祉をめぐる格差や不平等など近現代社会における社会学の歴史的展開とも同時代的に結び付いてきた社会階層論のいくつかの問題領域と、階級・階層論や社会移動研究、文化的再生産論や教育福祉論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ近代社会における社会移動と社会階層、現代社会における教育と福祉をめぐる格差や不平等などを再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界について概観する。Aでは近代社会における社会移動と社会階層を主題化する。	隔年
	社会階層論B	この講義では、社会移動と社会階層、教育や福祉をめぐる格差や不平等など近現代社会における社会学の歴史的展開とも同時代的に結び付いてきた社会階層論のいくつかの問題領域と、階級・階層論や社会移動研究、文化的再生産論や教育福祉論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ近代社会における社会移動と社会階層、現代社会における教育と福祉をめぐる格差や不平等などを再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界について概観する。Bでは現代社会における教育や福祉をめぐる格差や不平等を主題化する。	隔年
	国際社会政策論A	この講義では、国際人口移動の加速化や通信網の発達、国際労働市場の再編とそれに伴う社会政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている国際社会学や労働社会学のいくつかの問題領域と、グローバル化をめぐる研究や人的資本論、移民社会論やエスニシティ論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編と、それらに対応する社会政策の変容を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界について概観する。Aでは現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編を主題化する。	隔年
	国際社会政策論B	この講義では、国際人口移動の加速化や通信網の発達、国際労働市場の再編とそれに伴う社会政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている国際社会学や労働社会学のいくつかの問題領域と、グローバル化をめぐる研究や人的資本論、移民社会論やエスニシティ論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編と、それらに対応する社会政策の変容を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界について概観する。Bでは国際的な移動の加速化と労働市場の再編に伴う社会政策そのものの変容を主題化する。	隔年
	教育社会学	この講義では、少子化やグローバル化やインターネット社会化とそれらに伴う教育政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている教育社会学のいくつかの問題領域と、メリトクラシー論や脱・学校化社会論、文化的再生産論や学校文化論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを概説することを目標とする。とりわけ現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化、揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界について概観する。教育社会学では現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化を主題化する。	隔年
	ジェンダー社会論	世界経済フォーラム (WEF) が経済、教育、政治、保健の尺度で分析した、男女格差を表す「ジェンダー・ギャップ指数 (GGI) 2017年」で、日本は144カ国中114位であった。ジェンダー社会論の講義では、日本社会・文化構造における男女格差・不平等の正当化と再生産を社会的に考察する。少子化・高齢化・グローバル化で、ジェンダー格差・不平等によって、①男性・女性の生きづらさの生成と差異の構造、②メディア (男性・女性向けの雑誌で正当化する身体文化) による正当化の問題、③家族内の社会化を通して形成されるジェンダー不平等、④学校教育での格差再生産・受容の問題、④組織社会のなかでの集団としての男性支配体制の維持を目的とした女性への排除によるリスク、コスト及び男性自身の生きづらさの問題等を分析し、今後日本社会のためにジェンダー平等、労働力率向上、男性・女性の共生と生きがい、ジェンダー政策への提言を考える。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会調査方法論A	この講義では、おもに社会学における従来の社会調査の歴史と意義を踏まえた上で、社会調査に関連するいくつかの問題領域と、各種の統計的調査の方法（データの収集と整理）や統計的分析法（データの分析）、さらには各種の質的調査の方法などそれらに関連する理論的・方法的な枠組みを概説するなかで、将来的な社会調査の実施に向けての、社会調査の設計に必要な知識と分析技能を修得することを目標とする。Aでは各種の統計的調査の方法や統計的分析法について学ぶ。	隔年
	社会調査方法論B	この講義では、おもに社会学における従来の社会調査の歴史と意義を踏まえた上で、社会調査に関連するいくつかの問題領域と、各種の統計的調査の方法（データの収集と整理）や統計的分析法（データの分析）、さらには各種の質的調査の方法などそれらに関連する理論的・方法的な枠組みを概説するなかで、将来的な社会調査の実施に向けての、社会調査の設計に必要な知識と分析技能を修得することを目標とする。Bでは各種の質的調査の方法について学ぶ。	隔年
	地域調査法I	本講義では、地域調査における質的調査の手法と研究デザインについての基礎を学ぶことを目的とする。地域調査法IIでの学習内容を見通しつつ、地域調査法Iでは、講義やグループディスカッションを通して、自分自身の研究計画を立案し、地域調査の手法の基礎を習得しつつ、質的調査を実施するための実践的なスキルと理論的枠組を学ぶ。	
	地域調査法II	本講義では、地域調査法Iでの学習を踏まえつつ、地域調査における質的調査の手法と研究デザインについての理解を深めることを目的とする。講義やグループディスカッションを通して、立案した自分自身の研究計画を基に、地域調査の手法の理解を深めつつ、質的調査を実施するための実践的なスキルと理論的・実証的枠組について学ぶ。	
	東南アジア・オセアニア研究概論	本概論では、東南アジア・オセアニア地域に関する政治・経済・社会の基本問題をオムニバス形式により講義する。講義にあたっては最近の研究動向も紹介しつつ、人文地理学、比較政治学、開発経済学の諸分野から、東南アジア・オセアニア地域を分析するための基本的アプローチや主要課題、分析枠組・分析方法について理解を深める。 (オムニバス方式/全10回) (213 堤純/4回) 地誌学の観点から、東南アジア・オセアニアの地理について説明しつつ、地域研究のアプローチや主要課題、分析方法について講義する。 (143 茅根由佳/3回) 比較政治学の観点から、東南アジア・オセアニアの政治変動について説明しつつ、地域研究のアプローチや主要課題、分析方法について講義する。 (120 Abdul Malek Mohammad/3回) 開発経済学の観点から東南アジア・オセアニアの経済発展について説明しつつ、地域研究のアプローチ地域研究のアプローチや主要課題、分析方法について講義する。	オムニバス方式
	東南アジア・オセアニア人文地理学研究A	本講義では、オーストラリアの自然、歴史、文化的背景を認識し、地誌学的な視点からオーストラリアの特徴を理解する。具体的には、1970年代以降、急速にアジアとの接近を進めるオーストラリア社会をとりあげ、多文化社会に特有の諸問題を考察する。これにより、オーストラリアの地誌学的特性を説明でき、それを事例に多文化社会の諸課題を説明できることを目指す。	隔年
	東南アジア・オセアニア人文地理学研究B	本講義では、1970年代初頭に相次いで起きたオーストラリアの脱イギリス化、アジア太平洋国家への変貌をテーマとし、このような劇的な変化を引き起こしたメカニズムを世界地誌的な立場から解説し、オセアニアの人文地理研究に関する理解を深める。これにより、世界地誌的観点からオーストラリアの劇的変化のメカニズムを説明できることを目指す。	隔年
	東南アジア・オセアニア政治研究A	本講義では、多様性に富んだ現代東南アジア政治のあり方について学ぶ。具体的には、比較政治学の観点から、東南アジア各国の政治史を中心に、国家形成と国民統合をめぐる諸問題について検討しつつ、東南アジアの政治について深く理解する。本講義を通じて、比較政治学の分析枠組や分析手法を用いて、東南アジアの国家形成と国民統合の諸課題を概説できることを目指す。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	東南アジア・オセアニア政治研究B	本講義では、東南アジア各国が抱える宗教とナショナリズムの問題について検討する。具体的には、比較政治学の観点から、フィリピン、タイ、インドネシア、マレーシアを事例として、各国の政治史から宗教と国民統合をめぐる問題について議論しつつ、東南アジアの政治について深く理解する。本講義を通じて、比較政治学の分析枠組や分析手法を用いて、東南アジアの宗教と国民統合の諸課題を概説できることを目指す。	隔年
	東南アジア・オセアニア経済研究A	本講義の目的は、東南アジアの経済を導入的に概説することである。アジアは多くの低所得国や先進国も存在し、経済は非常に多様化しており、開発課題と地域統合という2つの経済的問題が重要である。本講義では、当該地域における各国の経済発展の経験と課題に焦点を当てる。また、グローバリゼーションの観点から地域経済統合に焦点をあてる。	隔年
	東南アジア・オセアニア経済研究B	本講義は、東南アジアの経済研究に特化した大学院生を対象とする。具体的には、開発経済学の理論的・実証的分析を基に、経済発展と構造転換、工業化と農業転換、天然資源基盤と資源制約、東アジアの奇跡、1997年のアジア通貨危機、グローバルな金融危機とその影響、政策改革の政治経済学、経済統合、工業化と外国直接投資、国際貿易、経済地理学等のトピックについて説明し、東南アジアの経済発展を概説する。	隔年
	中央ユーラシア文化社会研究A	本講義では、歴史学の観点から、中央アジアの灌漑地域における近代史についての講義を行う。特に、19世紀と20世紀における政治・社会的変動と環境変化との相関関係やそれらの変化を説明する諸要因について焦点をあて、中央アジア地域の灌漑史について理解を深める。これにより、歴史学の理論的枠組や分析手法を用いて、灌漑地域の歴史を軸とした中央アジアの政治・社会・環境の変化を説明できることを目指す。	隔年
	中央ユーラシア文化社会研究B	本講義では、1920年代と1930年代の中央ユーラシアにおけるソビエト民族主義政策の発展・定着について、国民国家形成の過程について検討する。また、現代中央ユーラシアにおけるソビエト民族主義政策の影響に関し、歴史学、文化人類学、環境研究による最新の研究動向を文献のレビューを通じて概説する。これにより、中央ユーラシア地域の国民国家形成過程における諸課題に関する理解を深めるとともに、同地域の文化・社会研究の総合的アプローチや分析方法を学ぶ。	隔年
	中東・北アフリカ研究概論	本講義では、開発経済学の分析枠組を用いて、現代中東・北アフリカ諸国における持続的経済発展と政治的安定のための主要課題や経済政策における主要課題等を概説する。特に、欧州による植民地支配からの独立後に焦点をあて、人口増加と人口転換、国内・国際労働移動、工業化と経済成長、教育と労働市場、水資源問題、農業発展等について説明し、開発経済学の分析枠組の基礎を理解するとともに、中東・北アフリカ経済のグローバル化における諸課題を考察する。	
	中東・北アフリカ思想宗教研究	近現代に至るまで、歴史的あるいは政治的に大きな痕跡を遺すことになったユダヤ教徒たちの「ディアスポラ」問題について、その根幹となるユダヤ教思想を掘り下げるとともに、ディアスポラの変遷を辿る。具体的には、(1) ヘブライ語原典に遡っての旧約聖書思想の考究、(2) バビロン捕囚の実態の史的解明および捕囚解放期以降におけるディアスポラの史的考察、(3) ディアスポラのうち最大の中心地となったアレクサンドリアにおけるユダヤ教・キリスト教文化の諸相の解明を課題とし、現代世界に対して「ディアスポラ」が投げかける問題についても考究する。	
	ヨーロッパ人文地理学研究	本講義では、ヨーロッパにおける人口、文化、ツーリズム空間などを素材にしなが、ヨーロッパの地域性と風土について解説しつつ、ヨーロッパの人文地理学についての理解を深める。ヨーロッパを人文地理的諸要素を題材にしつつ、人文地理学のアプローチと分析手法を学ぶことにより、ヨーロッパの地域特性がどのように理解し、説明できるのかを深く考察する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ヨーロッパ思想宗教研究	ヨーロッパにあって、古代末期から中世初期にかけて次第に重要性を増し、中世盛期から近世にかけては政治外交面においても大きな影響力を持つことになった「永遠の都」ローマ（ないしヴァチカン）の宗教的意義と役割について考究する。具体的には、(1) ラテン語（ないしギリシア語）で記された教父文献に基づく神学的考察、(2) 教会法文献に見るローマ教皇の首位性の確立と変遷をめぐる歴史的考察、(3) 各時代の公会議文書に見る教会合同の諸相、(4) 現代におけるヴァチカンの活動をめぐる考察を中心に、現代政治と宗教の関わりにも論究する。	
	ヨーロッパ研究特講A	ヨーロッパ地域研究に関して、ロシア語圏の国々の言語をめぐる諸問題について概説し、ロシア語圏の地域研究の基礎を学ぶ。また、受講生の研究テーマや方向性を踏まえ、ロシア語圏における言語問題や言語政策、言語教育に関する文献を講読する。これにより、ヨーロッパ地域研究のアプローチと分析方法を学ぶとともに、ロシア語圏における言語諸問題に関する理解を深める。	隔年
	ヨーロッパ研究特講B	ヨーロッパ地域研究に関して、ロシア語圏の国々の文化をめぐる諸問題について概説し、ロシア語圏の地域研究について理解を深める。また、受講生の研究テーマや方向性を踏まえ、ロシア語圏における文化問題や文化政策、文化教育に関する文献を講読する。これにより、ヨーロッパ地域研究のアプローチと分析方法を学ぶとともに、ロシア語圏における文化諸問題に関する理解を深める。	隔年
	ヨーロッパ研究特講C	帝国時代のスペイン王権の統治構造を、複合王政論の観点に立って分析する。特に、カタルーニャなどのイベリア半島東部諸国、南イタリア諸国、アメリカ植民地に対する支配のあり方を比較検討することにより、スペイン帝国による被支配地における統治構造を分析する。分析対象とする時代としては、15世紀初頭から16世紀前半までを扱う。	
	ラテン・アメリカ研究概論	本講義では、現代のラテンアメリカ諸国における経済開発の主要問題について概説する。同諸国の経済発展過程における歴史的負の遺産や、同諸国が現在抱えている経済発展上の諸課題について説明する。特に、輸入代替工業化、貿易赤字、財政赤字、債務危機問題、インフレーション、所得格差、失業・不完全就業などのラテンアメリカ経済が抱える経済的特徴とその特徴を生み出す要因とメカニズムについて議論する。	
	ラテン・アメリカ経済研究	本講義では、ラテンアメリカ諸国における経済発展の諸課題に焦点をあてる。具体的には、植民地時代からの歴史的背景、資源輸出国としての課題、所得分配の不平等、様々な社会問題、教育・医療・保健を含む社会開発の課題、輸入代替工業化の成果と限界などのトピックについて議論する。経済学の分析ツールをラテンアメリカの文脈の中で適用し、どのような経済開発・社会開発上の課題が導き出せるかを検討する。	
	朝鮮語文化研究	本講義では、構文構造における日・韓両言語の対照を行う。特に、倒置文と省略文を中心として、日・韓の相違点から言語運用における文化的影響を探ることにより、朝鮮語と朝鮮語文化に関する理解を深める。朝鮮語の習得だけでなく、言語の背景にある文化を理解することを企図する。日・韓両言語の分析から、言語と文化の関係や言語の相違が文化に与える影響を考察する。	
	ロシア語文化研究	ロシア語の基本文法と必要最低限の語彙・表現を習得し、ロシア及び旧ソ連地域に研究対象として主体的にアプローチするための初歩的コミュニケーション能力を養う。また、文化・教養的側面をより重視した高度な講読を中心に行う。教材として、ロシアの新聞、雑誌、著書の中から取り上げた。文化や社会事情に関わる様々な内容の記事を用いる。	
	スペイン語文献研究 I	本講義では、スペイン語で書かれた学術論文を講読する。テキストは、初回の授業で参加者と話し合い、学生のスペイン語文献に関する関心や学生の研究テーマにしたがって決める。スペイン語の基礎的トレーニングを文献講読を通じて行うことにより、ラテンアメリカを含むスペイン語圏に関する学生の研究の深化に貢献する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	スペイン語文献研究II	本講義では、スペイン語文献研究Iでの学習を踏まえ、スペイン語で書かれた学術論文を講読する。テキストは、初回の授業で参加者の関心と研究テーマに基づき話し合っ決めて、スペイン語文献研究Iとは異なるテキストを用いる。スペイン語の読解能力を文献講読を通じて行うことにより、ラテンアメリカを含むスペイン語圏に関する学生の研究の深化と発展に貢献する。	
	公共政策論B	本講義では、公共政策における政策形成の主要理論を概説するとともに、公共政策の実践的アプローチについて考察する。公共政策の実践においては問題解決が目標とされるが、その方途を探るとともに、この目標がどのように達成されるかを政策形成の観点から分析する。特に、公共政策の実践と政策形成に関連する政策アクターや制度、政策の必要性や制約を考察しつつ、なぜある政策形成が成功し、他の政策形成が失敗するのかも議論する。	隔年
	国際社会と法	本講義では、国際社会における刑事手続の在り方について考察する。日本の刑事手続を概観し、国際的観点から見える問題点について議論するとともに、国際社会における犯罪、刑事手続とその問題点等について議論する。これにより、グローバル化する国際社会における刑事手続と法に関する問題点についての理解を深める。	
	国際貿易論	本講義では、伝統的な貿易理論と新しい貿易理論、またこれらの理論研究の成果を検討する。また、伝統的な貿易理論と新しい貿易理論による諸モデルを適用することによって、貿易不均衡や所得不平等、賃金格差などの国際貿易における主要課題について分析する。これにより、国際貿易の伝統的理論を踏まえた上で、新しい貿易理論の諸モデルを説明できるようになることを目指す。	
	公共経済学	本科目は、理論的・実証的側面から公共経済学における高度な研究課題について学習する。公共経済学の課題として、社会的選択理論、厚生経済学の基本定理、租税の理論、市場の失敗と外部性、不確実性と情報、公共財の理論等を学びつつ、資源配分の効率性と所得配分の公平性の達成について理論的・実証的に考察する。	
	ミクロ経済学	本講義では、政策評価分析のために、大学院レベルのミクロ経済学の知識を深めることを目的とする。講義のトピックには、消費者理論、生産者理論、市場均衡、不確実性と情報、ゲーム理論などミクロ経済学上の諸理論が含まれる。これにより、ミクロ経済学の諸理論・モデルを習得し、理論の基づくミクロ実証分析のための基盤ができることを目指す。	
	開発経済学I	世界経済は急速に変化しており、所得格差、貧困・中所得のトラップ、食料不安、生産性・スキルの格差、制度の相違、紛争、ジェンダー格差など、さまざまな課題に直面している。かかる課題は数量的のどのようにとらえることが可能か？この質問に答えるために、本講義では、詳細な調査データと科学的に検証された政策を検討する。	
	開発経済学II	世界経済は急速に変化しており、所得格差、貧困・中所得のトラップ、食料不安、生産性・スキルの格差、制度の相違、紛争、ジェンダー格差など、さまざまな課題に直面している。これらの課題の解明を目的とした、様々な技術的・制度的革新を評価するためには、どのような分析ツールが必要であろうか？本講義では、この質問に答えるために、詳細な調査データに基づき科学的に有用性が評価された政策について分析する。	
	国際金融と政策	本講義では、大学院生向けに国際金融論・政策についての先端理論とその応用について講義する。主要トピックとして、リアルビジネスサイクル論、経常収支不均衡、為替レートの決定、貿易フローの短期的・長期的調整、公的債務、債務リスク、国際資本移動と多国籍生産活動の主因、国際的金融政策と政策協調等について学ぶ。	
	経済開発論	本講義では、開発経済学の主要理論とアプローチについて説明し、発展途上国の経済発展における諸課題について概説することを目的とする。特に、開発の概念、構造変化、経済成長、貧困と不平等の問題等を扱う。経済発展の諸理論やモデルを学ぶことで、学生が開発経済学への理解を深めるとともに、発展途上国の経済発展に関する分析において、興味深い問題設定を行えるようになることを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際公共政策リサーチワークショップA	研究倫理を踏まえ、研究関心や着想を修士論文のテーマ設定に結び付け、かつ、自立的に研究プロセスを管理する能力及びリサーチデザイン能力の育成を図る。	
	国際公共政策リサーチワークショップB	研究関心や着想を修士論文のテーマ設定に結び付け、かつ、自立的に研究プロセスを管理する能力及びリサーチデザイン能力の育成を図りつつ、修士論文の指導を行う。	
	(研究指導)	<p>(3 赤根谷達雄) 国際政治学の分析手法を用いて、国際安全保障の課題に関する研究指導を行う。</p> <p>(4 秋山学) 古典古代学や西洋古典学における研究課題に関する指導を行う。</p> <p>(13 白山利信) 言語学の分析手法を用いて、社会言語学的研究や言語政策における課題に関する研究指導を行う。</p> <p>(16 奥山敏雄) 現象学的社会学や臨床社会学などの手法を用いて、医療社会学に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(21 加藤百合) 比較文学の分析手法を用いて、文化と言語に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(26 関根久雄) 文化人類学のアプローチと分析手法を用いて、開発人類学や開発と文化に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(29 竹中佳彦) 統計分析などの手法を用いて、政治過程の課題の研究指導を行う。</p> <p>(30 DADABAEV Timur) 国際政治学の分析手法を用いて、中央アジアの国際関係の課題に関する研究指導を行う。</p> <p>(34 土井隆義) アノミー論やレイベリング論などの手法を用いて、社会病理学に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(39 中村逸郎) 政治学のアプローチと分析手法を用いて、ロシア政治や外交、日ロ関係の課題に関する研究指導を行う。</p> <p>(51 黄順姫) 文化的再生産論や学校文化論などの手法を用いて、教育社会学に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(53 前川啓治) 文化人類学のアプローチやフィールドワークの手法を用いて、国際文化論や文化と開発に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(55 松岡完) 歴史研究などの手法を用いて、国際政治史の課題の研究指導を行う。</p> <p>(57 箕輪真理) 開発経済学における分析手法を用いて、社会開発の課題に関する論文指導を行う。</p> <p>(63 吉田脩) 法学のアプローチと分析手法を用いて、国際法に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(67 五十嵐泰正) グローバル都市論やコミュニティ論などの手法を用いて、地域社会学に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(72 URANO EDSON IOSHIAQUI) グローバル化をめぐる研究や社会政策論などの手法を用いて、労働社会学に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(78 柏木健一) 開発経済学の分析枠組や計量経済学的手法を用いて、中東・北アフリカの経済発展の課題に関する論文指導を行う。</p> <p>(83 黒川義教) 国際経済学の理論的・実証的分析に関する論文指導を行う。</p> <p>(93 鈴木伸隆) 文化人類学のアプローチと分析手法を用いて、文化変動に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(103 内藤久裕) 公共経済学の分析枠組や計量経済学的手法を用いた経済分析に関する論文指導を行う。</p> <p>(105 中野優子) 開発経済学や農業経済学の分析枠組や計量経済学的手法を用いて、アフリカの経済発展の課題に関する論文指導を行う。</p> <p>(107 野上元) 集合的記憶論やメディア論などの手法を用いて、文化社会学に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(112 東野篤子) 国際政治学の分析手法を用いて、ヨーロッパの国際政治や国際関係の課題に関する研究指導を行う。</p> <p>(114 福住多一) ミクロ経済学やゲーム理論に関する応用経済学の研究指導を行う。</p> <p>(119 松島みどり) 計量経済学的手法を用いて、政策評価分析に関する論文指導を行う。</p> <p>(120 Abdul Malek Mohammad) 開発経済学や農業経済学の分析枠組や計量経済学的手法を用いて、アジアの経済発展の課題に関する研究指導を行う。</p> <p>(122 南山淳) 理論研究などの手法を用いて、国際政治学の課題の研究指導を行う。</p> <p>(126 MOGES Abu Girma) 開発経済学における分析手法を用いて、国際開発と政策の課題に関する論文指導を行う。</p> <p>(127 森直人) 階級・階層論や教育福祉論などの手法を用いて、社会階層論に関連する課題の研究指導を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(134 レスリータック川崎) 情報メディア分析やコンテンツ分析の手法を用いて、メディアと政治に関する課題についての研究指導を行う。</p> <p>(136 葛山泰央) イデオロギー論や知識社会学などの手法を用いて、社会意識論に関連する課題の論文指導を行う。</p> <p>(137 鈴木創) 数理分析などの手法を用いて、比較政治の課題の研究指導を行う。</p> <p>(144 塩谷哲史) 歴史学の分析手法を用いて、中央アジア近現代史に関する課題について研究指導を行う。</p> <p>(154 毛利亜樹) 政治学の分析手法を用いて、中国政治や東アジアの国際関係の課題に関する論文指導を行う。</p>	
	日本政治論演習A	<p>本演習では、現代日本の政治に関する文献を輪読して討論しながら、それを通じて日本政治や政治学理論について理解を深めることを目的とする。授業は演習形式で行い、政治学理論の基礎を習得しつつ、日本の政治、政策過程、公共政策に関する理論的・実証的研究についても文献レビューを通して理解を深める。また、学生の修士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、論文輪読を通じて、論文執筆の方法についても学び、日本政治や政治学理論に関する理解を深める。</p>	隔年
	日本政治論演習B	<p>本演習では、現代日本の政治に関する文献を輪読して討論しながら、それを通じて政治学の実証分析の方法について学ぶことを目的とする。授業は演習形式で行い、実証分析の基礎を習得しつつ、日本の政治、政策過程、公共政策に関する理論的・実証的研究についても文献レビューを通して理解を深める。また、学生の修士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、論文輪読を通じて、論文執筆の方法についても学び、日本政治の実証分析に関する理解を深める。</p>	隔年
	比較政治学演習A	<p>現在の比較政治学やアメリカ政治研究は、政治現象を説明する一般化可能な理論を構築し、それを経験的に検証する性格をますます強めている。本演習では、比較政治学、特に選挙や政策決定をテーマとする文献を講読する。その際、テーマとする世界各国の政治現象の内容を理解するだけでなく、それを比較分析するための理論や方法論の有用性と限界を検討することも目標とする。</p>	隔年
	比較政治学演習B	<p>現在の比較政治学やアメリカ政治研究は、政治現象を説明する一般化可能な理論を構築し、それを経験的に検証する性格をますます強めている。本演習では、比較政治学の基礎的理解を踏まえ、アメリカ政治研究、特に選挙や政策決定をテーマとする文献を講読する。その際、テーマとするアメリカの政治現象の内容を理解するだけでなく、それを分析するための理論や方法論の有用性と限界を検討することも目標とする。</p>	隔年
	国際政治理論演習A	<p>近年のグローバルな政治現象は複雑化しており、それを説明する国際政治の理論も様々な分野の視点を取り入れる必要がある。本演習では、国際政治理論研究の拡張と深化を目指して、特に、政治哲学、歴史研究等の異分野との方法論的接合について検討する。授業は演習形式で行い、近年の国際政治理論の研究動向や主要論点について学ぶ。また、参加者の個別研究テーマに応じた修士論文執筆のための指導も行いつつ、国際政治の理論研究に関する理解を深める。</p>	隔年
	国際政治理論演習B	<p>近年のグローバルな政治現象は複雑化しており、それを説明する国際政治の理論も様々な分野の視点を取り入れる必要がある。本演習では、国際政治理論研究の拡張と深化を目指して、特に、社会思想、文化研究、科学論等の異分野との方法論的接合について検討する。授業は演習形式で行い、近年の国際政治理論研究を批判的に考察する。また、参加者の修士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、国際政治の理論研究に関する理解を深める。</p>	隔年
	国際政治史演習A	<p>20世紀とりわけ冷戦期、さらに冷戦後から21世紀の今日までの時代を対象に、現代国際政治の歩みについて考察する。とくに日本を含む各国の外交戦略の策定、具体的な外交政策の形成過程、その影響などを中心的なテーマとする。ただし受講者それぞれの問題関心に十分配慮し、20世紀以降あるいは狭義の外交に限定せず、広くさまざまな内容を扱い、個別のテーマについて研究成果を発表する形をとりたい。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際政治史演習B	20世紀とりわけ冷戦期、さらに冷戦後から今日までの時代を対象に、歴史的に重要と思われる戦争や紛争を取り上げ、それぞれについて対立の歴史的背景、戦争勃発の誘因、拡大を許した当事者や世界各国の対応、終結にいたる過程、影響や遺産、今日的な意義を検証する。ただし受講者それぞれの問題関心に配慮し、戦争以外の事象にも目を配りながら、各自が個別のテーマについて研究発表を行う形をとりたい。	隔年
	国際安全保障論演習A	国際安全保障問題について、理論および分析手法に力点を置いて、主要な著作や最新の論文を取り上げて輪読する。その際、今日的課題や受講者各自の問題意識に引き付けて、それらを批判的に検討し、理解を深める。また受講者各自の研究テーマに沿った研究成果の報告をしてもらい、討論と相互批判を通じて、分析および理解を深めていく。また個別にも学位論文の研究・執筆指導を行う。	隔年
	国際安全保障論演習B	国際安全保障問題について、今日の具体的なイシューや課題に照らして、関連する国際関係の著作を輪読し、演習形式で批判的に検討し、理解を深める。また受講者各自の研究テーマに沿った研究成果の報告をしてもらい、討論と相互批判を通じて、分析および理解を深めていく。また個別にも学位論文の研究・執筆指導を行う。	隔年
	ヨーロッパ国際関係論演習A	欧州連合（EU）や北大西洋条約機構（NATO）を中心としたヨーロッパの機構と、それらをめぐるヨーロッパの国際関係、その理論枠組みなどに関する重要文献を読みながら、EU・NATO域内の政治・安全保障問題やヨーロッパ域内の国際関係について深く学ぶ。演習形式で授業を行い、ヨーロッパの国際関係に関する修士論文を準備する。	隔年
	ヨーロッパ国際関係論演習B	欧州連合（EU）や北大西洋条約機構（NATO）などを中心としたヨーロッパの機構と、それらをめぐるヨーロッパの国際関係、その理論枠組みなどに関する重要文献を読みながら、EU・NATOの対外関係、近隣地域（主に地中海や旧ソ連諸国）の諸問題を扱い、ヨーロッパと域外地域との国際関係を深く学ぶ。演習形式で授業を行い、ヨーロッパの国際関係に関する修士論文を準備する。	隔年
	ロシア・東欧の国際関係演習A	本演習では、受講生の個別の関心や研究テーマにそって、また、近年の研究動向を踏まえて、旧ソ連構成国及び東欧諸国の国内政治と外交政策について考察する。特に、2014年のロシアによるウクライナ領のクリミア併合後のロシアと周辺諸国の政治的、軍事的な緊張関係に焦点をあてる。演習形式で授業を行い、ロシア・東欧の国内政治と国際関係に関する理解を深める。履修者にはロシア語文献の講読を課し、演習形式で行う。	隔年
	ロシア・東欧の国際関係演習B	本演習では、受講生の個別の関心や研究テーマにそって、また、近年の研究動向を踏まえて、旧ソ連構成国及び東欧諸国の国内政治と外交政策について考察する。エネルギー資源を用いたロシアの外交政策とそれに対する周辺諸国の反発に焦点をあてる。演習形式で授業を行い、ロシア・東欧の外交政策と国際関係に関する修士論文を準備する。受講生にはロシア語の履修を希望する。	隔年
	東アジア政治外交演習A	21世紀初頭の東アジアは経済相互依存が進展する一方で、伝統的安全保障問題の緊張も高まっている。本科目では、東アジア各国を中心に、国内政治と外交の連動を検討する。特に、中国の台頭と関係国の反応などについて、外交政策分析の先行研究を学ぶことにより、外交研究における専門知識を深める。学生の東アジアの政治外交研究や国際関係に関する研究テーマの関心や方向性を踏まえつつ、演習形式で授業を行う。	隔年
	東アジア政治外交演習B	本科目では、東アジア各国を中心に、国内政治と外交の連動を検討する。特に、外交政策分析の関連理論を学んだ上で、東アジアの地域協力の発展と中国の台頭の関係や開発モデル、地域秩序構想などの具体的な事例を取り上げることにより、外交研究における研究力を身につける。演習形式で授業を行い、東アジアの政治外交研究や国際関係に関して、学生の修士論文の指導も行う。	隔年
	国際法演習A	法学及び国際法における基礎的知識の習得と国際法Aでの学修に基づき、国際法における理論的な課題について考察するとともに、修士論文の指導を行う。これにより、国際法の理論研究における専門知識を深める。近年の国際法の研究動向や主要潮流、学生の修士論文の研究テーマや方向性を踏まえて、演習形式で授業を行い、国際法の理論に関する理解を深める。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際法演習B	法学及び国際法における基礎的知識の習得と国際法Bでの学修に基づき、国際法における実務・理論上の諸問題について考察するとともに、修士論文の指導を行う。これにより、国際法の理論と実務の研究における専門知識を深める。近年の国際法の研究動向や学生の修士論文の進捗状況や成果を踏まえつつ、演習形式で授業を行い、国際法の理論と実務に関する研究力の向上を図る。	隔年
	国際文化論演習A	本演習では、地域社会に関する種々の民族誌の具体例を吟味することによって、グローバリゼーションの影響による地域社会の変容の原理を解明する。特に、映像人類学の種々のフィルムから、人類学における「イメージ」という概念が地域社会に展開する可能性について考察する。民族誌については、演習出席者が研究対象とする地域社会の発展や変容の事例を中心に検証してゆき、文化人類学の方法論と理論という観点から、修士論文の指導を行う。	隔年
	国際文化論演習B	本演習では、地域文化に関する種々の民族誌の具体例を吟味することによって、グローバリゼーションの影響による地域文化の変容の原理を解明する。特に、映像人類学の種々のフィルムから、人類学における「イメージ」という概念が地域文化に展開する可能性について考察する。民族誌については、演習出席者が研究対象とする地域文化の発展や変容の事例を踏まえ、文化人類学の方法論と理論という観点から、修士論文の指導を行う。	隔年
	開発人類学演習A	文化的視点から開発現象を分析する力を養うために、アジア、アフリカ、オセアニアにおける開発援助の具体的事例を取りあげ、批判的に考察する。また、先進国から途上国へ向けた開発援助の事例だけでなく、先進国および途上国双方で行われている様々な地域開発の実践についても、検討対象としたい。授業は演習形式で行い、途上国や日本国内における地域開発や開発援助に関する人類学的研究テーマを設定する学生を主対象とする。	隔年
	開発人類学演習B	2015年9月の国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）は2030年までの開発を地球レベルで規定する統一的目标である。これは経済的な意味における貧困削減だけでなく、教育やジェンダーなどの文脈における平等、自然資源の保全と持続的な活用など17項目169ターゲットからなり、各国政府だけでなくNGOや企業など民間組織にも共有されるものである。本授業では、各国の開発実践をSDGsの観点から捉え直し、同目標の達成のために必要な開発実践のあり方について議論する。授業は演習形式で行い、開発実践やSDGsに関する人類学的研究テーマを設定する学生を主対象とする。	隔年
	文化変動論演習A	今日、小さなコミュニティーの文化変動ですら、地球規模で展開する政治経済システムとの連関を抜きにしては語れなくなってきている。本演習では、ローカルな文化変動とグローバルな政治経済システムに関連する諸問題を多角的かつ批判的に考察することで、修士論文作成に求められる基礎的な知識を習得する。とくに演習Aでは研究発表を通して、論文執筆に向けた先行研究の整理と研究の枠組みについて学ぶ。文化変動論Aと併せて受講することが望ましい。	隔年
	文化変動論演習B	今日、小さなコミュニティーの文化変動ですら、地球規模で展開する政治経済システムとの連関を抜きにしては語れなくなってきている。本演習では、ローカルな文化変動とグローバルな政治経済システムに関連する諸問題を多角的かつ批判的に考察することで、修士論文作成に求められる高度な分析能力を習得する。とくに演習Bでは研究発表を通して、実証的な論文執筆について学ぶ。文化変動論Bと併せて受講することが望ましい。	隔年
	政策評価分析演習A	本演習では、実際にデータを使って政策評価の分析方法を学ぶ。評価分析のための研究課題を設定した上で、データを用いた数量的分析方法を学ぶ。分析方法としては、統計的因果推論と反事実モデル、無作為抽出法、回帰不連続デザイン、差分の差、傾向スコアマッチング等を学ぶ。政策評価分析の理解力と研究力を高めるために、受講者には宿題を課す。本演習を通して、受講者が政策評価分析の様々な方法に関する知識と技術を習得することを旨とする。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	政策評価分析演習B	本演習では、政策評価分析を実際に二次データを用いて実施する。処置効果を検討するには様々な方法があるが、本演習では、サンプルの抽出、仮説設定、政策評価分析の実施、分析結果の発表等を通して、学生自らが設定した問題提起と仮説に対して、どのような分析方法が適しているのかを検討する。また、実際の分析結果を基に、自分の分析の限界を批判的に考察する。政策評価分析の理解力と研究力を高めるために、受講者には宿題を課す。本演習を通して、受講者が適切な方法で政策評価分析ができることを目指す。	隔年
	社会意識論演習A	この演習では、ユートピアやコミュニオンなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした社会意識論のいくつかの問題領域に、イデオロギー論や知識社会学などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ一八世紀後半から一九世紀前半にかけての、啓蒙以後の／社会学以前の社会学的思考の展開を再検討するなかで、制度の生成と変容の学問としての社会学が、それ自体としていかに生成し変容することになるのかを検証する。Aでは一八世紀後半の社会思想を主題化する。	隔年
	社会意識論演習B	この演習では、ユートピアやコミュニオンなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした知識社会学のいくつかの問題領域に、イデオロギー論や社会意識論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ一八世紀後半から一九世紀前半にかけての、啓蒙以後の／社会学以前の社会学的思考の展開を再検討するなかで、制度の生成と変容の学問としての社会学が、それ自体としていかに生成し変容することになるのかを検証する。IBでは一九世紀前半の社会思想を主題化する。	隔年
	医療社会学演習A	この演習では、病院化社会やスピリチュアルケアなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした医療社会学のいくつかの問題領域に、現象学的社会学や臨床社会学、コミュニケーション論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ近代社会における死の医学化／医療化の展開と現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を再検討するなかで、それらの理論枠組みの射程と限界について検証する。Aでは近代社会における死の医学化／医療化の展開を主題化する。	隔年
	医療社会学演習B	この演習では、病院化社会やスピリチュアルケアなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした医療社会学のいくつかの問題領域に、現象学的社会学や臨床社会学、コミュニケーション論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ近代社会における死の医学化／医療化の展開と現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を再検討するなかで、それらの理論枠組みの射程と限界について検証する。Bでは現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を主題化する。	隔年
	社会病理学演習	この演習では、犯罪／非行、いじめやひきこもりなど現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている逸脱行動論ならびに社会統制論のいくつかの問題領域に、アノミー論やレイベリング論、自己論やコミュニケーション論、リスク社会論や社会的排除論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ現代社会における青少年の逸脱行動の背景にある親密性の変容と、その非常に重要な要因となる人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を再検討するなかで、人間関係論的な観点からの逸脱行動論や社会統制論の理論枠組みを再検証する。社会病理学演習では現代社会における親密性の変容を主題化する。	隔年
	社会問題論演習	この演習では、犯罪／非行、いじめやひきこもりなど現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている逸脱行動論ならびに社会統制論のいくつかの問題領域に、アノミー論やレイベリング論、自己論やコミュニケーション論、リスク社会論や社会的排除論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ現代社会における青少年の逸脱行動の背景にある親密性の変容と、その非常に重要な要因となる人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を再検討するなかで、人間関係論的な観点からの逸脱行動論や社会統制論の理論枠組みを再検証する。社会問題論演習では人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	歴史社会学演習	この演習では、戦争の記憶や社会的な歴史叙述の方法など西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした歴史社会学のいくつかの問題領域に、社会意識論や言説分析、集合的記憶論やメディア論などそれらに関連する文化社会学の古典的な枠組みを応用することを目標とする。とりわけ近代社会における戦争とその記憶、現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割などの諸問題を社会的に再検討するなかで、それらの理論枠組みの可能性と限界を検証する。歴史社会学演習では近代社会における戦争とその記憶を主題化する。	隔年
	文化社会学演習	この演習では、戦争の記憶や社会的な歴史叙述の方法など西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした歴史社会学のいくつかの問題領域に、社会意識論や言説分析、集合的記憶論やメディア論などそれらに関連する文化社会学の古典的な枠組みを応用することを目標とする。とりわけ近代社会における戦争とその記憶、現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割などの諸問題を社会的に再検討するなかで、それらの理論枠組みの可能性と限界を検証する。文化社会学演習では現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割を主題化する。	隔年
	都市社会学演習	この演習では、グローバル化する現代都市や地域コミュニティの抱え込む諸々の課題など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている都市社会学や地域社会学のいくつかの問題領域に、グローバル都市論やコミュニティ論、リスクコミュニケーション論や社会的差別論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ現代社会における都市のグローバル化と地域コミュニティの変容と、それらの非常に重要な要因となる、人やモノや情報の移動と定着の現代的な意味を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。都市社会学演習では現代社会における都市のグローバル化を主題化する。	隔年
	地域社会学演習	この演習では、グローバル化する現代都市や地域コミュニティの抱え込む諸々の課題など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている都市社会学や地域社会学のいくつかの問題領域に、グローバル都市論やコミュニティ論、リスクコミュニケーション論や社会的差別論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ現代社会における都市のグローバル化と地域コミュニティの変容と、それらの非常に重要な要因となる、人やモノや情報の移動と定着の現代的な意味を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。地域社会学演習では現代社会における地域コミュニティの抱え込む諸々の課題を主題化する。	隔年
	社会階層論演習A	この演習では、社会移動と社会階層、教育や福祉をめぐる格差や不平等など近現代社会における社会学の歴史的展開とも同時代的に結び付いてきた社会階層論のいくつかの問題領域に、階級・階層論や社会移動研究、文化的再生産論や教育福祉論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ近代社会における社会移動と社会階層、現代社会における教育や福祉をめぐる格差や不平等などを再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。Aでは近代社会における社会移動と社会階層を主題化する。	隔年
	社会階層論演習B	この演習では、社会移動と社会階層、教育や福祉をめぐる格差や不平等など近現代社会における社会学の歴史的展開とも同時代的に結び付いてきた社会階層論のいくつかの問題領域に、階級・階層論や社会移動研究、文化的再生産論や教育福祉論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ近代社会における社会移動と社会階層、現代社会における教育や福祉をめぐる格差や不平等などを再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。Bでは現代社会における教育や福祉をめぐる格差や不平等を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際社会政策論演習A	この演習では、国際人口移動の加速化や通信網の発達、国際労働市場の再編とそれに伴う社会政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている国際社会学や労働社会学のいくつかの問題領域に、グローバル化をめぐる研究や人的資本論、移民社会論やエスニシティ論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編と、それらに対応する社会政策の変容を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。国際社会学演習では現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編を主題化する。	隔年
	国際社会政策論演習B	この演習では、国際人口移動の加速化や通信網の発達、国際労働市場の再編とそれに伴う社会政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている国際社会学や労働社会学のいくつかの問題領域に、グローバル化をめぐる研究や人的資本論、移民社会論やエスニシティ論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編と、それらに対応する社会政策の変容を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。労働社会学では国際的な移動の加速化と労働市場の再編に伴う社会政策そのものの変容を主題化する。	隔年
	教育社会学演習	この演習では、少子化やグローバル化やインターネット社会化とそれらに伴う教育政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている教育社会学のいくつかの問題領域に、メリトクラシー論や脱・学校化社会論、文化的再生産論や学校文化論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化、揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。教育社会学演習では現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化を主題化する。	隔年
	ジェンダー社会論演習	この演習では、少子化やグローバル化やインターネット社会化とそれらに伴う教育政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている教育社会学のいくつかの問題領域に、メリトクラシー論や脱・学校化社会論、文化的再生産論や学校文化論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用することを目標とする。とりわけ現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化、揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。ジェンダー社会論演習ではジェンダー・トラックとの関連で揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を主題化する。	隔年
	社会調査方法論演習A	この演習では、おもに社会学における従来の社会調査の歴史と意義を踏まえた上で、社会調査に関連するいくつかの問題領域と、各種の統計的調査の方法（データの収集と整理）や統計的分析法（データの分析）、さらには各種の質的調査の方法などそれらに関連する理論的・方法的な枠組みを概説するなかで、将来的な社会調査の実施に向けた、社会調査の設計を行うことを目標とする。Aでは各自の問題関心・問題意識に基づき、各種の統計的調査の方法や統計的分析法を踏まえた社会調査の設計を行う。	隔年
	社会調査方法論演習B	この演習では、おもに社会学における従来の社会調査の歴史と意義を踏まえた上で、社会調査に関連するいくつかの問題領域と、各種の統計的調査の方法（データの収集と整理）や統計的分析法（データの分析）、さらには各種の質的調査の方法などそれらに関連する理論的・方法的な枠組みを概説するなかで、将来的な社会調査の実施に向けた、社会調査の設計を行うことを目標とする。Bでは各自の問題関心・問題意識に基づき、各種の質的調査の方法を踏まえた社会調査の設計を行う。	隔年
	東南アジア・オセアニア研究演習AI	本演習は、人文地理学、比較政治学、開発経済学等の観点から、東南アジア・オセアニア地域研究の基本的アプローチを理解するとともに、修士論文の指導を行う。学生は、近年の研究動向を踏まえ、修士論文の構想や文献レビュー、データ・資料等を含む研究の方法に関する発表を定期的に行うことが求められる。教員も本演習で研究発表を行うことで、受講学生や参画教員と研究上のアイデアを積極的に交換し、東南アジア・オセアニア地域研究を推進する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	東南アジア・オセアニア研究演習AII	本演習は、AIでの学習に基づき、人文地理学、比較政治学、開発経済学等の観点から、東南アジア・オセアニア地域研究を深めるとともに、修士論文の指導を行う。学生は、自分の論文で使用するデータ・資料等を含む研究の進捗や分析結果と考察に関する発表を定期的に行うことが求められる。教員も本演習で研究発表を行うことで、受講学生や参画教員と研究上のアイデアを積極的に交換し、東南アジア・オセアニア地域研究の深化を図る。	隔年
	東南アジア・オセアニア研究演習BI	本演習は、人文地理学、比較政治学、開発経済学等の各アプローチから、東南アジア・オセアニア地域研究の学際的アプローチを理解するとともに、修士論文の指導を行う。学生は、近年の研究動向を踏まえ、学生は修士論文の構想や文献レビュー、データ・資料等を含む研究の方法に関する発表を定期的に行うことが求められる。教員も本演習で研究発表を行うことで、受講学生や参画教員と研究上のアイデアを積極的に交換し、学際的視点から東南アジア・オセアニア地域研究を推進する。	隔年
	東南アジア・オセアニア研究演習BII	本演習は、BIでの学習に基づき、人文地理学、比較政治学、開発経済学等の各アプローチから、東南アジア・オセアニアの学際的領域研究を深めるとともに、修士論文の指導を行う。学生は、自分の論文で使用するデータ・資料等を含む研究の進捗や分析結果に関する発表を定期的に行うことが求められる。教員も本演習で研究発表を行うことで、受講学生や参画教員と研究上のアイデアを積極的に交換し、学際的視点から東南アジア・オセアニア地域研究を深化を図る。	隔年
	中央ユーラシア研究演習AI	中央ユーラシア地域に関する研究課題に対して、論文構想や先行研究のレビューを通して、論文指導を行う。特に、政治学・国際関係論、政治学・メディア論および歴史学の手法を用いて、主に中央ユーラシアの政治、国際関係、公共政策、歴史についての課題の論文指導を行う。中央ユーラシア研究演習AIでは特に、学生は、論文構想や先行研究のレビューを報告することが求められる。	隔年
	中央ユーラシア研究演習AII	中央ユーラシア地域に関する研究課題に対して、分析方法を学ぶことを通して、論文指導を行う。特に、政治学・国際関係論、政治学・メディア論および歴史学の手法を用いて、主に中央ユーラシアの政治、国際関係、公共政策、歴史についての課題の論文指導を行う。中央ユーラシア研究演習AIIでは特に、学生は、収集した史料・資料、データを含めた分析方法を報告することが求められる。	隔年
	中央ユーラシア研究演習BI	中央ユーラシア地域に関する研究課題に対して、分析結果の解析や解釈の方法を学ぶことを通して、論文指導を行う。特に、政治学・国際関係論、政治学・メディア論および歴史学の手法を用いて、主に中央ユーラシアの政治、国際関係、公共政策、歴史についての課題の論文指導を行う。中央ユーラシア研究演習BIでは特に、学生は、収集した史料・資料、データに基づく分析結果を報告することが求められる。	隔年
	中央ユーラシア研究演習BII	中央ユーラシア地域に関する研究課題に対して、修士論文の総括を目指して、論文指導を行う。特に、政治学・国際関係論、政治学・メディア論および歴史学の手法を用いて、主に中央ユーラシアの政治、国際関係、公共政策、歴史についての課題の論文指導を行う。中央ユーラシア研究演習BIIでは特に、学生は、論文の全体を報告することが求められる。	隔年
	中東・北アフリカ研究演習AI	中東・アフリカ地域に関する研究に対して、論文構想や先行研究のレビューを通して、論文指導を行う。歴史学・考古学の手法や開発経済学における実証分析を基に、中東地域の歴史、社会、経済についての課題の論文指導を行う。中東・北アフリカ研究演習AIでは特に、学生は、論文構想や先行研究のレビューを報告することが求められる。	隔年
	中東・北アフリカ研究演習AII	中東・アフリカ地域に関する研究に対して、分析方法を学ぶことを通して、論文指導を行う。歴史学・考古学の手法や開発経済学における実証分析を基に、中東地域の歴史、社会、経済についての課題の論文指導を行う。中東・北アフリカ研究演習AIIでは特に、学生は、史料やデータの収集を含めて分析方法を報告することが求められる。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中東・北アフリカ研究演習BI	中東・アフリカ地域に関する研究に対して、分析結果の解析や解釈の方法を学ぶことを通して、論文指導を行う。歴史学・考古学の手法や開発経済学における実証分析を基に、中東地域の歴史、社会、経済についての課題の論文指導を行う。中東・北アフリカ研究演習BIでは特に、学生は、収集した史料・資料やデータに基づく分析結果を報告することが求められる。	隔年
	中東・北アフリカ研究演習BII	開発経済学における理論モデルや実証分析の方法を学ぶとともに、貿易・投資の停滞や農業発展の制約を含む中東・アフリカ経済の主要課題を演習形式で学習する。特に、中東・北アフリカ経済を含む途上国経済の実証分析のレビューを基に、中東・北アフリカ経済の特殊性を理解する。また、学生の研究テーマに応じて、修士論文の指導を行う。学生は、使用するデータや分析結果と考察を含む修士論文の進捗について報告する。	隔年
	ヨーロッパ研究演習AI	言語学の手法を用いたヨーロッパ地域研究の基本的アプローチを理解しつつ、先行研究のレビュー等を通して、論文指導を行う。特に、ロシア語圏の言語問題や言語政策、言語教育に関する地域研究の方法論を学ぶ。学生は、論文構想や先行研究のレビュー、分析枠組、資料・史料やデータの収集、フィールドワーク等含む研究計画を報告することが求められる。	隔年
	ヨーロッパ研究演習AII	ヨーロッパ研究演習AIでの学習を踏まえ、ヨーロッパ地域に関する研究に対して、分析方法を学ぶことを通して、論文指導を行う。特に、言語学の手法を用いて、主にロシア語圏の文化・社会についての課題の論文指導を行う。ヨーロッパ研究演習AIIでは特に、学生は、資料・史料やデータの収集を含めて分析方法を報告することが求められる。	隔年
	ヨーロッパ研究演習BI	言語学の手法を用いたヨーロッパ地域研究の基本的アプローチを理解しつつ、先行研究のレビュー等を通して、論文指導を行う。特に、ロシア語圏の文化問題や文化政策、文化教育に関する地域研究の方法論を学ぶ。学生は、論文構想や先行研究のレビュー、分析枠組、資料・史料やデータの収集、フィールドワーク等含む研究計画を報告することが求められる。	隔年
	ヨーロッパ研究演習BII	ヨーロッパ研究演習BIでの学習を踏まえ、言語学の手法を用いたヨーロッパ地域研究のアプローチに関する理解を深めつつ、修士論文の指導を行う。特に、ロシア語圏文化問題や文化政策、文化教育に関する地域研究を深化させる。学生は、収集した資料やデータによる分析結果、フィールドワークによる調査結果などを報告することが求められる。	隔年
	ラテン・アメリカ研究演習AI	ラテンアメリカ地域に関する研究に対して、論文構想や先行研究のレビューを通して、論文指導を行う。開発経済学や社会学の手法を用いて、主にラテンアメリカの経済、公共政策、社会、文化に関する課題の論文指導を行う。ラテン・アメリカ研究演習AIでは、学生は、論文構想や先行研究のレビューを報告することが期待される。	隔年
	ラテン・アメリカ研究演習AII	ラテンアメリカ地域に関する研究に対して、分析方法を学ぶことを通して、論文指導を行う。開発経済学や社会学の手法を用いて、主にラテンアメリカの経済、公共政策、社会、文化に関する課題の論文指導を行う。ラテン・アメリカ研究演習AIIでは、学生は、資料やデータの収集を含めて分析方法を報告することが期待される。	隔年
	ラテン・アメリカ研究演習BI	ラテンアメリカ地域に関する研究に対して、分析結果の解釈や考察の方法を学ぶことを通して、論文指導を行う。開発経済学や社会学の手法を用いて、主にラテンアメリカの経済、公共政策、社会、文化に関する課題の論文指導を行う。ラテン・アメリカ研究演習BIでは、学生は、収集した資料やデータによる分析結果を報告することが期待される。	隔年
	ラテン・アメリカ研究演習BII	開発経済学や国際社会学の観点から、ラテン・アメリカ地域研究のアプローチに関する議論を深めるとともに、分析方法を学ぶことを通して、修士論文の指導を行う。開発経済学と国際社会学を融合させた分析枠組や分析手法を用いて、ラテン・アメリカの社会開発政策や社会政策に関する研究の方法を習得する。学生は、収集した資料やデータによる分析結果、フィールドワークによる調査結果などを報告することが期待される。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際協力研究インターンシップⅠ	独立行政法人国際協力機構筑波国際センター（以下、JICA筑波）が海外研修員向けに実施している直営型研修コースにインターンシップとして参加する。技術協力活動の現場に接する機会を通して、農村開発分野、国際協力分野における途上国社会のニーズや問題点、必要とされる国際協力や開発援助の在り方などに関する理解を深めることを目的とする。参加者は、参加プログラム終了後に受講レポートの提出し、提出されたレポートと講座への出席状況に基づき、評価が行われる。	
	国際協力研究インターンシップⅡ（SEND活動）	長期休暇中あるいは留学中に行った日本文化を進める活動に対して単位を与える。主に海外の大学、研究センター、大使館、自治体等の公的機関において日本語・日本文化の発信を行う。本インターンでは、現地社会との関係の中で実務経験を積み日本と現地の懸け橋となる人材の具体像を学ぶこと、大学での学びと社会における経験を結びつける意識を育て新たな学習意欲を喚起すること、多世代・多国籍の人々と人間関係を形成しコミュニケーション能力を高めることなどを目的としている。	
	国際協力研究インターンシップⅢ	長期休暇中あるいは留学中に行った国際機関や企業でのインターンシップ活動に対して単位を与える。主に海外の企業、国際機関、団体等におけるインターンシップ活動を評価の対象とする。本インターンでは、現場の視点から自分が専門とする国・地域を学ぶ機会を得ること、大学での学びと社会における経験を結びつける意識を育て新たな学習意欲を喚起すること、それぞれの職業適性や大学院修了後の将来設計について主体的に考える機会を得ることなどを目的としている。	
	経済学セミナーⅠ	ミクロ経済学やマクロ経済学、国際経済学、計量経済学、開発経済学などの経済学の諸分野における理論やモデルについて議論を深めつつ、演習形式による修士論文の指導を行う。受講生は、修士論文の研究計画やモデル・データを含む分析方法について発表し、経済系全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、学生ともディスカッションを行うことにより、研究の基礎的能力を身につける。	
	経済学セミナーⅡ	経済学セミナーⅠの受講とミクロ経済学やマクロ経済学、国際経済学、計量経済学、開発経済学などの経済学の諸分野における実証分析の方法について議論を深めつつ、演習形式による修士論文の指導を行う。受講生は、実証分析のデータやモデル、分析結果を発表し、経済系全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、学生ともディスカッションを行うことにより、研究水準の深化を図る。	
	経済学セミナーⅢ	経済学セミナーⅠ-Ⅱの受講とミクロ経済学やマクロ経済学、国際経済学、計量経済学、開発経済学などの経済学の諸分野における理論と実証研究について議論を深めつつ、演習形式による修士論文の指導を行う。受講生は、分析結果と考察を含め修士論文の完成に向けた研究総括に関する発表を行い、経済系全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、学生ともディスカッションを行うことにより、研究水準の深化と質の向上を図る。	
	公共政策セミナーⅠ	本セミナーは、学生が研究を行う上で、また学術論文を書く上で、特に自分の論文や論文を書く上で自分のスキルを向上させることを目的とする。同セミナーは、特に国際関係論の修士課程の学生（JDSプログラム）のために提供されており、より幅広いディスカッションと仲間の学生や教授からのフィードバックのために各自の研究プロジェクトを発表し議論する学生の機会を提供するものである。このセミナーⅠでは、学生は研究の基本的な方法論とともに、研究発表を通して公共政策や国際関係における幅広いトピックを学ぶことが期待される。	
	公共政策セミナーⅡ	本セミナーは、学生が研究を行う上で、また学術論文を書く上で、特に自分の論文や論文を書く上で自分のスキルを向上させることを目的とする。同セミナーは、特に国際関係論の修士課程の学生（JDSプログラム）のために提供されており、より幅広いディスカッションと仲間の学生や教授からのフィードバックのために各自の研究プロジェクトを発表し議論する学生の機会を提供するものである。このセミナーⅡでは、学生は分析の手法を学ぶとともに、研究発表を通して公共政策や国際関係における幅広いトピックを学ぶことが期待される。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	公共政策セミナーIII	<p>This seminar seeks to help students improve their skills in conducting research and in academic writing, especially in working on their theses and dissertations. This seminar, specially offered for the students of masters program in international relations (JDS program), offers the students opportunities to present and discuss their respective research projects for a wider discussion and feedback from fellow students and professors. In this seminar III, students are expected to study how to develop and finalize the thesis, as well as a wide range of topics in public policy and international relations through students' research presentations.</p> <p>本セミナーは、学生が研究を行う上で、また学術論文を書く上で、特に自分の論文や論文を書く上で自分のスキルを向上させることを目的とする。同セミナーは、特に国際関係論の修士課程の学生（JDSプログラム）のために提供されており、より幅広いディスカッションと仲間の学生や教授からのフィードバックのために各自の研究プロジェクトを発表し議論する学生の機会を提供するものである。このセミナーIIIでは、論文の発展の方法やまとめ方を学ぶとともに、研究発表を通して公共政策や国際関係における幅広いトピックを学ぶことが期待される。</p>	
	インターンシップI	<p>本科目は、授業で学んだ経済学や公共政策上の知識を実務的経験を通して深めるために、政府機関、研究所、NGO、日本の民間部門、または海外においてインターンシップを行うものである。本インターンシップは主に留学生を対象とし、母国の経済発展に役立つ人材育成するために、大学院生が幅広い行政的な経験を積み、政策立案、行政実務への知識を広げることを目的にインターンシップを奨励する。受講者は、インターンシップに関する報告書を提出する必要があり、職業実習への参加の成果が評価される。インターンシップIは、主に春学期休業中に行われものを対象とする。</p>	
	インターンシップII	<p>本科目は、授業で学んだ経済学や公共政策上の知識を実務的経験を通して深めるために、政府機関、研究所、NGO、日本の民間部門、または海外においてインターンシップを行うものである。本インターンシップは主に留学生を対象とし、母国の経済発展に役立つ人材育成するために、大学院生が幅広い行政的な経験を積み、政策立案、行政実務への知識を広げることを目的にインターンシップを奨励する。受講者は、インターンシップに関する報告書を提出する必要があり、職業実習への参加の成果が評価される。インターンシップIIは、主に秋学期休業中に行われものを対象とする。</p>	
	現地調査プロジェクト演習	<p>本演習では、日本の中央政府や地方自治体においてどのような経済政策や公共政策が実施されているかを学び、授業で学んだ知識を深めるために、日本の政府機関や民間団体を訪問する機会を現地調査として提供するものである。特に、現地調査を通して、戦後の日本の経済発展や経済成長、産業発展や産業政策の経験、また、経済政策や公共政策の実施の具体的事例について深く考察する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際日本研究関連科目	国際日本研究のための日本語	日本語で修士論文を執筆することを目指す留学生や日本語非母語話者を対象として、日本語を通じて、研究対象・研究方法をめぐる着想・着眼、資料の収集や情報の探索をめぐる適切な手法、参考文献の探し方・読み方、研究発表の望ましい方法など、研究を推進し論文を執筆するために必要な知識について講義を通じて議論し、各自の基礎的な能力開発を図る。	
	国際日本研究のための英語	This course will discuss and explain the necessary knowledge such as methodology, literary review for writing master's thesis. この授業は、英語非母語話者を主たる対象とし、修士論文や学術雑誌投稿論文を英語で執筆することを念頭におき、研究対象の設定や研究方法論、資料収集・情報探索、文献のレビュー、英文アカデミックライティングの基礎など、論文を書くために必要な知識について講義を通して議論し、各自の基礎的な能力開発を図る。	
	複合研究基礎論	さまざまな分野にまたがる研究対象に、それぞれの分野固有のディシプリンを超えてアプローチする複合研究の基礎を講義する。実証主義の限界をふまえて人間や社会が拠って立つ基礎を明らかにするものとして、フッサールの現象学やウィトゲンシュタインの言語ゲームといった20世紀西洋哲学と仏教思想・キリスト教神秘主義思想といった東西の伝統思想に通底するものを据え、それに基づいてさまざまな分野の学問・科学を再構築するようなトランス・ディシプリナリーな研究をふまえたうえで、さまざまな分野が協同して人間や社会の事象をとらえるようなインター・ディシプリナリーなアプローチを試みるものとして、複合研究を特徴づけたうえで、複合研究の例として交換や貨幣について考察する。テキストとして『平山朝治著作集 第1巻 増補 社会科学を超えて 超歴史的比較と総合の試み』（中央経済社、2009年）などを使用する。	
	日本社会と宗教1A	社会の中の特定の個人の思想や宗教ではなく、無名の集約的な原思想、原宗教を、検討対象とする。日本人論の中の、国民性、倫理観、美意識、神聖観(感)などがおもな話題となる。その背景にある、歴史的、地理的な要因について、歴史学、人類学、民俗学、神話学、言語学などの知見を活用する。明確な教義や組織のない、日本の宗教状況を、これらのゆるやかな集合体として把握することを試みる。	隔年
	日本社会と宗教1B	社会の特定の個人の思想や宗教ではなく、無名の集約的な原思想、原宗教を対象とする。民俗学、人文地理学、文学研究、芸術研究、異文化研究の一部が探求してきた、「懐かしさ」という感情に焦点を絞り、原風景、原体験などがおもな話題となる。ナショナリズムと一括される思想や感情を切り分けて、トランスナショナルなレベルで養護し得る要素を救いとる。とくに「深層文化としての宗教」という捉え方を軸に、日本宗教を対外的に発信する方法を工夫する。	隔年
	東アジアの思想と文化1	中国・韓国(朝鮮半島)・日本の東アジア地域は、古くから漢字文化圏、それにちなんで儒教文化圏とも呼ばれてきた。本授業では、東アジアにおける儒教思想、特に中国宋代の新儒学の勃興以降の展開と特徴を比較的な観点で考察することを目的とする。とりわけここでは、韓国の儒学思想史を対象として、壇君神話や新羅の花郎道にみえる思想的な特徴、三国時代と高麗期において仏教が思想的な主流をなしているなかでの儒学思想の展開様相と役割、そして高麗後期に受容された朱子学の展開様相などを概観する。朱子学の展開様相では、高麗・朝鮮の易姓革命をめぐる朱子学の担い手である新進士大夫たちの理念と行動、それに基づく朝鮮時代初期の官学派と士林派の葛藤と展開、その中に現れている朝鮮儒学の特徴などを考察する。	隔年
	比較文学論1A	近現代の文学を研究対象として取り扱う際、海外の文化や文学との交流や影響関係を考えることは大変重要である。本授業は、比較文学の手法を学ぶことによって、近・現代文学研究における新たな視野を獲得することを目的とする。多言語のテキストの精読による実証研究や、翻訳理論などを用いたテキスト研究の具体例に触れ、こうした研究に関する知識を得ることで、比較文学研究の視点を体得し、履修者の修士論文に向けての研究に生かす。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	比較文学論1B	近現代の文学を研究対象として取り扱う際、海外の文化や文学との交流や影響関係を考えることは大変重要である。本授業では、比較文学の手法を実践的に学ぶことによって、近・現代文学研究における新たな視野を獲得することを目的とする。多言語のテキストの精読による実証や、翻訳理論・ジェンダー理論・ポストコロニアル理論などを用いたテキスト分析を実際に行うことにより、比較文学研究の視点を体得し、履修者の修士論文に向けての研究に生かす。「比較文学論1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	日本の文化と文芸1A	世界的にみても、ある文学作品が発生するのは、その国家・民族の文化活動の一環であることはいままでもないことである。本講義では日本文学古典作品について文学史の基本的事項をふまえながらカルチュラルスタディーズの手法を応用しつつ、受講する大学院生の研究対象に即して、研究の指導を適宜発表の形式も交えながら行っていく。	隔年
	日本の文化と文芸1B	世界的にみても、ある文学作品が発生するのは、その国家・民族の文化活動の一環であることはいままでもないことである。本講義では日本文学近代作品について文学史の基本的事項をふまえながらカルチュラルスタディーズの手法を応用しつつ、受講する大学院生の研究対象に即して、研究の指導を適宜発表の形式も交えながら行っていく。「日本の文化と文芸1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	メディア研究 1	この授業では、メディアとコミュニケーションの研究方法に関する文献を輪読する。主にメディア研究方法について学習する。メディアの実証研究の読み方及び実証研究を実施する際に必要になる能力を習得することを目標とする。指定された文献を図書館のデータベースよりダウンロードし、授業のときまでに読み、事前にレポートをウェブにて提出する。授業では文献に関するディスカッションとプレゼンテーションを行い、他の履修生と情報共有し、授業後にその活動内容を報告する。これを、各回実施する。	隔年
	メディア思想と日本社会1	本授業はメディア研究の生成とその歴史的社会的背景を考えるものである。マス・メディアが誕生して以降、メディアは政治経済文化などさまざまな現象に影響を与え、また影響を受けてきた。メディア研究にはそのような歴史的社会的背景が色濃く影響している。本授業では、メディア研究やその中の種々の理論や批評がいかんにして生まれたのかを歴史的社会的連関の中で考察し、そこから透過できる日本社会とメディア思想についての理解を深めることを目的としている。授業は適切なメディア研究と近現代日本史に関するテキストを選別し、担当箇所を受講生が報告し、全体で議論を進め、理解を深めていく輪読形式をとる。これをつうじて先行研究の把握と論文における課題設定の方法、論理的実証的な研究の進め方について学習する。	隔年
	比較メディア思想 1	本授業は、メディア研究の生成とその歴史的社会的背景について、新聞・映画・ラジオ・テレビなどの各メディアとの比較メディア史的観点及び欧米やアジア諸国と日本との国際比較の観点から、考えるものである。マス・メディアが誕生して以降、メディアは政治経済文化などさまざまな現象に影響を与え、また影響を受けてきた。メディア研究やメディアを考察するメディア思想にはそのような社会現象が強く刻印されている。メディア研究やメディア思想への考察から、社会や政治や文化の国ごとの特質や共通性について理解できるようになる。授業はメディア史やメディア思想に関する適切なテキストを選別し、担当箇所を受講生が報告し、全体で議論を進め、理解を深めていく輪読形式をとる。これをつうじて先行研究の把握と論文における課題設定の方法、論理的実証的な研究の進め方について学習する。	隔年
	日本語相互行為分析1	「日常会話」は、言語を問わず、様々な言語使用状況の中でも最も一般的かつ根源的な社会的相互行為場面である。その「日常会話」をフィールドとして、社会学者のHarvey Sacks、Emanuel Schegloff、Gail Jeffersonらによって日常的相互行為の組織を明らかにするべく創始され、開発されたのが「会話分析」である。本授業では、会話分析の理論的背景や視点、データ収集・転写の方法およびその理論的根拠を学んだ上で、会話分析の基本的分析概念を日本語会話における具体的事例を通して理解し、会話分析の手法の基礎を身につける。人間関係や社会的関係を築く基盤となる日常会話がどのように組織されているのかを厳密に捉える視点を養うことによって、そこで生じていることを的確に、かつ、深く理解する力を身につける。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日常会話のエスノグラフィ1	当たり前の現象としてある「日常会話」から社会と文化に切り込む方法について学ぶ。言語人類学の会話やディスコースへのアプローチを理論的に学び、談話や会話を分析する上での方法論について考える。	隔年
	日本政治と市民社会 1	日本の政治や市民社会に関する日本語の文献を広く講読し、その内容を深く理解するとともに、社会科学における研究の方法等を修得する。とりわけ、比較という視座から日本の市民社会を相対化して捉えられるようになることを目指す。この授業では、市民社会に関する幅広い題材を取り扱う。	隔年
	比較政治1	比較政治の主要な概念や理論を、英語文献の精読を通して学習する。講義で扱う具体的なテーマは、政治現象の科学研究に関する方法論、近代国家の起源、民主制と独裁、民主化などである。これらのテーマを素材に、比較政治学の主要な概念や理論を学ぶことを通して、比較政治分野での研究設計について理解を深める。	隔年
	Comparative Politics 1	<p>In this course, students are exposed to major research topics in the field of comparative politics by scrutinizing published journal articles. Topics covered in this course include political regimes, regime change, macro-political system, political parties, post-industrial politics, and (un)conventional mass behavior. By going through these topics, students are expected to learn how to design their own research in the field of comparative politics.</p> <p>本講義では、比較政治学における主要な研究課題を、英文学術誌に出版された論文の精読を通して概観する。扱う研究課題は、政治体制論、体制変動論、マクロ政治システム、政党、脱工業化期の政治、政治行動論などである。これらのテーマを素材に、比較政治学の主要な概念や理論を学ぶことを通して、比較政治分野での研究設計について理解を深める。</p>	隔年
	日本の対外関係 1	本講義においては近現代日本の対外政策の形成過程とその背景に関する研究資料や文献を講読し、その内容への理解を深めると同時に、日本外交に関する歴史的研究の基礎的な方法論を習得する。講義内容は原則として1890年以降の日本外交を対象とするが、第二次世界大戦後のいわゆる「冷戦時代」（1940年代から90年代初頭まで）及び「ポスト冷戦時代」にウェートを置く。主として和文文献を使用するが、必要に応じて英文資料も適宜取り上げる。「日本の対外関係2」と相互補完的な講義である。	隔年
	Foreign Relations of Japan 1	<p>This course examines the historical background of modern Japanese foreign relations with an emphasis on the political and security spheres. It also discusses basic methodologies regarding historical research of modern Japanese foreign relations. The lectures focus on post-1890 Japanese history while higher priorities will be given to the period after the end of the Second World War (i.e., the Cold War days between late 1940s and late 1980s, as well as the post-Cold War era). The lectures and class discussion will be conducted in English. Textbook and other materials used in class will be limited in those published in English. Active participation in class discussions is strongly encouraged. This course is complementary to “Foreign Relations of Japan 2”.</p> <p>本講義は現代日本の対外政策の形成とその歴史的背景を、政治及び安全保障面を中心に、議論するものである。更に、現代日本の対外関係に関する歴史的な研究の方法論についても適宜議論する。本講義は1890年代以降の時代を対象とするが、第二次世界大戦終戦後の時代（1940年代後半から1980年代後半までの「冷戦期」並びに「ポスト冷戦期」）に重点を置く。講義は原則的に英語で行われる。教科書や各種資料も英語の出版物を中心に選定する。講義中、活発な議論を強く奨励する。“Foreign Relations of Japan 2”と相互補完的な講義である。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	International Relations 1A	<p>The aim of this course is to introduce students to some of the main theories of conflict and cooperation in international relations. Students are expected not just to understand the main arguments of various theories, but also to critically examine them and develop skills to think like a social scientist.</p> <p>国際関係の主要な理論を、英語文献を通して学習する。国際政治における対立と協調に関する論文を取り上げ、様々な角度から諸理論・アプローチを批判的に検証することを通し、社会科学的な分析能力を身に付けることを目標とする。</p>	隔年
	International Relations 1B	<p>The aim of this course is to introduce students to some of the main theories of conflict and cooperation in international relations. Students are expected not just to understand the main arguments of various theories, but also to apply theories to explain actual cases. Students are also expected to consider policy implications of various theories, and explore what they mean for today's international relations.</p> <p>国際関係の主要な理論を、英語文献を通して学習する。国際政治における対立と協調に関する論文を取り上げ、様々な角度から諸理論・アプローチを理解することにとどまらず、実際のケースに理論を応用する能力を身に付ける。また、理論の政策的なインプリケーションについても検討し、今日の国際関係との関連性を学ぶ。</p>	隔年
	比較歴史教育 1	<p>比較教育学の理論を、その歴史的発展過程をたどりながら学ぶ。比較教育学の発展は、ヨーロッパにおける近代国民国家の形成という時代を背景に発展したことを理解するとともに、その後の学問的潮流の変遷、例えば近代化理論・実証主義・ポスト植民地主義・ポストモダン理論などとともに変化・発展してきた過程を理解する。そのことを踏まえ、21世紀のグローバル社会における共生ということテーマとした歴史教育のあり方について、日本と諸外国の事例(Comparative History Education 1ではとりあげないもの)について比較検討する。比較歴史教育1では、特に戦争など国際紛争と教育という観点から歴史教育の在り方について考察する。</p>	隔年
	Comparative History Education 1	<p>Tracing the historical development of Comparative Education as a field of academic study, students learn various theories on the subject. It is expected that they understand the development of this study is closely related to the formation of modern nation-states in Europe as well as to changes in academic discourses such as modernization theories, positivist theories, post-colonialism and post-modern theories. Based on that understanding, students investigate what kind of history education would be appropriate in global society in the 21st century. In Comparative History Education 1, special attention will be paid to history of war and international conflict.</p> <p>比較教育学の理論を、その歴史的発展過程をたどりながら学ぶ。比較教育学の発展は、ヨーロッパにおける近代国民国家の形成という時代を背景に発展したことを理解するとともに、その後の学問的潮流の変遷、例えば近代化理論・実証主義・ポスト植民地主義・ポストモダン理論などとともに変化・発展してきた過程を理解する。そのことを踏まえ、21世紀のグローバル社会における共生ということテーマとした歴史教育のあり方について、日本と諸外国の事例について比較検討する。比較歴史教育1では、特に戦争など国際紛争と教育という観点から歴史教育の在り方について考察する。</p>	隔年
	計量分析 1A	<p>計量分析は、社会の様々な分野での諸現象や実態を取り巻く溢れる情報から、現象や実態の把握、物事の意味付け、簡略化、客観化、推定等のため、多くの分野で用いる分析ツールの一つである。この授業では、分析に用いるデータの調査方法と、計量分析ツールを正しく使うための基礎統計の概念について講義する。講義内容は、計量分析の概要、基礎集計(度数分布)、記述統計(代表値、散布度)など統計の基本概念を理解し、計量分析2Aを勉強するための土台作りを行う。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	計量分析 1B	計量分析は、社会の様々な分野での諸現象や実態を取り巻く溢れる情報から、現象や実態の把握、物事の意味付け、簡略化、客観化、推定等のため、多くの分野で用いる分析ツールの一つである。この授業では、計量分析1Aに相当する知識(基礎集計、記述統計)をベースに、分析に用いる計量分析ツールの正しい使い方を講義する。講義内容は、統計分析用ソフトSPSS(場合によっては、エクセルを並行)を用いて、一連の分析プロセスや、SPSSの基本操作(データ加工・整理・基本集計など)を学び、計量分析2Bでの高度な分析を行うための土台作りを行う。	隔年
	応用ミクロ経済学 1	この授業は講義形式で行う。目標として、まずミクロ経済理論の基本を理解する。そしてこの理論の経済現象への典型的な応用研究例を学ぶ。ミクロ理論の内容は、完全競争市場における家計と企業の理論及びこれらの双対理論、完全競争市場における市場均衡点の性質である。これらを学んだうえで、部分均衡に関する実験経済学、需要の価格弾力性の実証研究、生産関数・費用関数の実証研究、経済厚生と租税の転嫁と帰着、国際貿易理論などの基礎的な研究例を紹介する。	隔年
	Applied Microeconomics 1	This lecture provides the intermediate-level theory of microeconomics and its applications. The topics of the theories are consisting of the general equilibrium theory and the theory of monopolistic competition markets. The main goal of this lecture is to analyze the following economic phenomena by using the theories above. As the application of the general equilibrium theory, dynamic models of macroeconomics are introduced and problems of the economic growth and the social securities are investigated. As the application of the theory of monopolistic competition markets, the macroeconomic theory of the business cycle is dealt with. この講義ではミクロ経済学の中級レベルの理論と、その応用が紹介される。理論のトピックスは一般均衡理論と不完全競争市場の理論からなる。この講義の目標は、これらの理論を用いて、以下の経済現象を分析することである。一般均衡理論においては、動学的なマクロ経済モデルが紹介され、それを用いて社会保障問題が検討される。不完全競争市場の理論では、企業の独占的競争理論が扱われ、それが景気循環のマクロ経済モデルに応用される。	隔年
	金融 1	この講義の目的は、金融論の基本的議論を19世紀から現在までの日本経済の発展を事例として学ぶことである。本講義では、特に、債権・債務関係、貨幣および決済の視点を中心に、各種の金融問題を整理する。金融 1 は、日本の銀行システムの歴史的な形成過程や機能について学ぶ。高度成長期、バブル経済の崩壊、非伝統的金融政策について概観する。頼母子講や模合等の民間金融の世界についても触れる。参加者には、授業で扱った金融問題のいずれかの論点について、日本の歴史的経験と他国の歴史的経験を比較する形で検討する課題が与えられる。例えば、プレゼンテーションを行ってもらったうえで、期末レポートとしてまとめてもらう。	隔年
	日本経済発展論	The aim of this course is to study modernization of Japanese economy from the late 19th century to the present. Now, Japan is one of the leading economies of the world, but in the late 19th century, Japan was one of the emerging economies. In this class, participants study modernization of Japanese economy from the late 19th century as a case study to clarify the asymmetrical relationship between core and peripheral countries. The study of past experience of Japanese economy as peripheral country in the late 19th century could offer you rich insight into present experience of emerging markets. Participants are required to analyze historical path of a specific country in terms of political and economic asymmetrical relation between core and peripheral countries.	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		この講義の目的は、19世紀から現在までの日本経済の発展について学ぶことである。本講義では、特に、中心国と周辺国の間の非対称的な国際関係の視点から、19世紀の日本経済がグローバル経済に参入する際に直面した課題を検討する。現在の日本は世界経済をけん引する国の一つとなったが、19世紀末においては、当時のグローバル経済に関わり始めたばかりの新興国の一つであった。当時の日本経済の経験を学ぶことは、現在のグローバル経済に関わらざるを得ない新興国にとっても有益な示唆を与えるであろう。参加者には、中心国と周辺国の非対称的な関係という視点から、ある国の歴史的な発展過程を検討する課題が与えられる。	
	世界経済史1	グローバル経済の展開を歴史的にみる観点から、各国の経済発展とそれを支える社会経済的基盤の形成と変容について、参加者が文献研究報告ないし論文準備報告を行い、議論を行う。報告では、A4で4枚程度のレジュメないし原稿を用意して発表し、(日本語での)口頭報告やさまざまな意見や質問に対して応答する演習を行いながら、論文の問題意識や論理構成、資料等について、全員の議論を通じて深めていく。修士論文の完成に向かって、基礎的な文献を読み込んでいくとともに、論文の構想をまとめつつ、執筆を進めていくことを支援する。	隔年
	Comparative Labor Studies 1	Participants would make presentations on the articles they study or on their own thesis. We would discuss the topic in a small group, from the viewpoint of comparative historical analysis of the labor relations. Participants are required to prepare about 4 to 6 pages paper for their presentations in Japanese or English. The research questions, the logic structure and used materials would be examined in the discussion with all the participants. During this course participants would be encouraged to read needed articles and materials, constitute and rearrange the thesis' s structure, and finally to prepare for the master thesis. 参加者は文献研究報告ないし論文準備報告を行い、経済活動の基盤となる労働関係について比較歴史分析の視点から少人数で議論を行う。参加者はA4で4~6枚程度のレジュメないし原稿を用意して発表し(日本語ないし英語)、論文の問題意識や論理構成、資料等について、全員の議論を通じて深めていく。修士論文の完成に向かって、基礎的な文献を読み込んでいくとともに、論文の構想をまとめつつ、執筆を進めていくことを支援する。	隔年
	地域経済・経営史1A	本授業はグローバル競争時代の地域企業経営およびその課題について深く理解する前提として、グローバル競争以前の経営・事業展開を歴史的に検討することを目標とする。特に本授業では、地域経済の発展に貢献することを強く意識した「地域貢献型企業」に着目し、創業からその後の事業展開を歴史的に検討することを主なテーマとする。授業では、毎回、注目される研究事例・文献等を取り上げ、それについてまず教員が近年の研究動向を踏まえつつ重要点を説明する。さらに教員が一方的に講義を行うのではなく、受講生の報告と討論も取り入れる形で授業を進める予定である。	隔年
	地域経済・経営史1B	本授業はグローバル競争時代における地域産業の衰退あるいは再生・活性化について深く理解する前提として、グローバル競争以前の地域産業の発展および産業集積の形成・展開について歴史的に検討することを目標とする。特に本授業では、都市型産業集積、企業城下町型産業集積、産地型産業集積の3つのタイプに着目し、それらの集積の特徴と形成・発展過程について歴史的に検討することを主なテーマとする。授業では、毎回、注目される研究事例・文献等を取り上げ、それについてまず教員が近年の研究動向を踏まえつつ重要点を説明する。さらに教員が一方的に講義を行うのではなく、受講生の報告と討論も取り入れる形で授業を進める予定である。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Media Research 1	<p>This is a graduate level course taught in English for students who wish to learn about media research methods. Through this course, students will gain further understanding of empirical research that requires univariate and multivariate statistical analysis. Students will also build their computational skills they should have acquired at the undergraduate level. In this class, students will need to download material from databases and submit summaries online, and have discussions and presentations. As this course will be conducted in English, students must be able to perform all discussions and assignments in English.</p> <p>この授業は英語でメディアに関する研究方法を学習する。実証研究における分析手法を学ぶ。多変量解析などの活用方法を理解できるようになる。この授業では、指定された文献を図書館のデータベースよりダウンロードし、授業のときまでに読み、事前にレポートをウェブにて提出する。授業では文献に関するディスカッションとプレゼンテーションを行い、他の履修生と情報共有し、授業後にその活動内容を報告する。これを、各回実施する。</p>	隔年
	移民研究・国際人口移動論1	<p>移民・難民など現代の国際人口移動に関する現状、理論、政策、政治、ガバナンス、市場経済等について、政治学・国際関係論の観点・命題を中心に学際的に考察する。おもに、この分野における主要基本文献の精読と解題をおこなうほか、時事的なケーススタディをもとに議論を深める。</p>	隔年
	Migration and Multicultural Studies1	<p>This course aims to examine contemporary international migration issues and multiculturalization of Japanese society through theoretical researches and empirical case studies. Using English materials, participants will read and discuss major topics on migration theories, policies, politics, governances, and market economies from the perspectives of political science and international relations.</p> <p>移民・難民など現代の国際人口移動と日本社会の「多文化」化に関する現状、理論、政策、政治、ガバナンス、市場経済等について、政治学・国際関係論の観点・命題を中心に学際的な考察を加える。おもに、この分野における主要基本文献（英語）の精読と解題をおこなうほか、時事的なケーススタディをもとに議論を深める。</p>	隔年
	法と市民社会 1A	<p>近代市民社会において成立した法は、一定の理念、価値に基づいている。他方、グローバル化、情報化、少子高齢化が進む中で、法は変容を続けている。このような中で、我々は、法の根底にある理念、価値を学び直し、変えてはいけぬものと変えるべきものを切り分ける能力を持たなければならない。そこで、市民社会において現に起きている事件や論争などの法的問題を、憲法、刑事法、民事法、他国との比較などの観点から検討し、法の理念、価値を理解した上で、現実の対応策を提言できるようになることを目指す。授業計画と形式であるが、受講生からテーマを募り、そのテーマの理解に必要な基礎的知識について講義をした上で、そのテーマに関する具体的な事件や論争を取り上げ、討論する。</p>	隔年
	法と市民社会 1B	<p>近代市民社会において成立した法は、一定の理念、価値に基づいている。他方、グローバル化、情報化、少子高齢化が進む中で、法は変容を続けている。このような中で、我々は、法の根底にある理念、価値を学び直し、変えてはいけぬものと変えるべきものを切り分ける能力を持たなければならない。そこで、市民社会において現に起きている事件や論争などの法的問題を、憲法、刑事法、民事法、他国との比較などの観点から検討し、法の理念、価値を理解した上で、現実の対応策を提言できるようになることを目指す。授業計画と形式であるが、受講生からテーマを募り、そのテーマの理解に必要な基礎的知識について講義をした上で、そのテーマに関する具体的な事件や論争を取り上げ、討論する。「法と市民社会 1A」とは異なるトピックスを扱う。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	法と現代社会1A	法は現代社会にとって役に立つのか立たないのか、立つとしてどの程度か、それはなぜか、といった問いについて、受講生各人が自分の頭で考え、調べ、結論を出すことができるようになることを目標とする。グローバル社会における日本が抱える現代的な法的問題について考察するために、生殖医療、義務教育、校則、少年犯罪、就職活動等、現代日本の社会問題について法的な観点から講義した上で、質疑応答を行う。受講生は、各回のテーマについて、指定する教科書・参考書等を読んで理解を深め、新聞・テレビ・インターネット等のメディアを通じて最新の情報を収集し、質疑応答に臨むことが要求される。	隔年
	法と現代社会1B	法は現代社会にとって役に立つのか立たないのか、立つとしてどの程度か、それはなぜか、といった問いについて、受講生各人が自分の頭で考え、調べ、結論を出すことができるようになることを目標とする。グローバル社会における日本が抱える現代的な法的問題について考察するために、労働法、死刑制度、環境問題、多重債務者、安楽死・尊厳死、相続等、現代日本の社会問題について法的な観点から講義した上で、質疑応答を行う。受講生は、各回のテーマについて、指定する教科書・参考書等を読んで理解を深め、新聞・テレビ・インターネット等のメディアを通じて最新の情報を収集し、質疑応答に臨むことが要求される。	隔年
	日本語会話教育法	日本語の会話技術を指導する際に留意すべき点を考える。まず、会話能力の構成概念の検討、それに関する先行研究の講読、及び、習得理論上での位置づけの検討を行う。その上で、受講生を学生に見立てた教壇実習と振り返りを行い、習得を促進させるのに必要な先鋭的取り組みを生み出す。	
	文章表現研究	文章・談話研究の中で日本語教育に関連の深いテーマを取り上げて、日本語の文章・談話の構造や表現について知見を深め、分析・記述の方法を学ぶことを目標とする。授業では、日本語教育に関連する基礎的な文献や最新の文献を取り上げ、文献講読と質疑応答、文章・談話の分析を行う。文献講読では類似したテーマの論文を比較し、批判的に検討する。文献講読はスライドを用いた口頭発表、文章表現分析課題はポスター発表とし、受講者の日本語による表現力の向上も目指す。	
	応用会話分析研究	言語研究の中でも、20世紀後半から発達した、話者と聴者のコミュニケーションを扱う伝統的語用論研究、事態の認識方法に関わる認知言語学、人間関係維持を重んじたポライトネス理論の研究内容や手法を学ぶ。認知に関わる言語の主観性表現や、聴者や発話の場を鑑みた表現方法について、予め決められた発表者が該当論文を紹介する。発表者は論文の要旨を述べ、疑問点や議論したいテーマを設定する。それを受けて、受講者は具体的例を挙げながら、議論し、日本語教育上の問題点や、日本語教育への応用を考える。「日本語語用論研究」とは異なるトピックスを扱う。	
	日本語教育と社会言語学	急変する社会の中でことばがどのように変化し、その変化がコミュニケーションへどのような影響を与えるかを考える。他言語にも触れながら、主に日本の社会と日本語との関連を扱う文献を通して社会言語学の手法を学ぶ。受講者が順番に自らの興味に合ったテーマの研究論文を選択し、研究内容を発表し、有益なポイントと疑問点を述べる。受講者全員と議論しながら、日本語教育上の問題点や、日本語教育への応用を考える。授業での使用言語（日本語・英語）は受講者と相談のうえで決める。	
	日本語教育原論	日本語教育領域に関連する基礎的な知識を学ぶと同時に、日本語学習者、日本語教室、教材開発、日本語の文法・会話・作文・読解・聴解などの技能別指導方法、日本の社会や文化、異文化コミュニケーション、会話分析、語用論などの観点から日本語教育現場への応用について学ぶ。授業担当は日本語教育学コースを担当する教員がオムニバスで担当する。 (オムニバス方式／全10回) (17 小野正樹／1回) 日本語教育の観点から読解教育の特徴を理解し、現場への応用について議論する。 (80 木戸光子／1回) 日本語教育の観点から作文教育の特徴を理解し、現場への応用について議論する。 (45 一二三朋子／1回) 日本語教育の観点から学習者の心理的側面に焦点を当て、現場への応用について議論する。 (118 松崎寛／1回) 日本語教育の観点から学習者の発音特徴を理解し、現場への応用について議論する。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(95 関崎博紀/1回) 日本語の会話教育について談話分析の観点から日本語教育への応用について議論し、検討する。</p> <p>(115 BUSHNELL CADE CONLAN/1回) 日本語学習者と日本語母語話者の異文化コミュニケーションについて議論し、日本語教育現場への応用を検討する。</p> <p>(70 井出里咲子/1回) 日本語の語用論研究の観点から日本語教育への応用について学ぶ。</p> <p>(96 高木智世/1回) 学習者の「言語能力」について日本語教育の観点から検討を行う。</p> <p>(71 Vanbaelen Ruth/1回) 社会言語学的な観点から日本語教育への応用について議論する。</p> <p>(140 伊藤秀明/1回) 日本語の教材開発、ICTの応用方法などを中心に日本語教授法について学ぶ。</p>	
	日本語教育評価法	<p>日本語教育原論と連動する形で、日本語教育原論で学んだ指導方法をもとに、評価やテストについて考える。日本語の文法・会話・作文・読解・聴解、日本の社会や文化、異文化コミュニケーション、社会言語学、会話分析、語用論などの観点を踏まえつつ、学習効果の評価がいかにか可能であるかを、テストの作成、インタビューやポートフォリオ作成といった実践を通して学ぶ。授業担当は日本語教育学コースを担当する教員がオムニバスで担当する。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(17 小野正樹/1回) 日本語教育の観点から読解教育の特徴を理解し、その評価法について考える。</p> <p>(80 木戸光子/1回) 日本語教育の観点から作文教育の特徴を理解し、その評価法について考える。</p> <p>(45 一二三朋子/1回) 日本語教育の観点から学習者の心理的側面に焦点を当て、その評価法について考える。</p> <p>(118 松崎寛/1回) 日本語教育の観点から学習者の発音特徴を理解し、その評価法について考える。</p> <p>(95 関崎博紀/1回) 日本語の会話教育について談話分析の観点から日本語教育への応用について議論し、その評価法について考える。</p> <p>(115 BUSHNELL CADE CONLAN/1回) 日本語学習者と日本語母語話者の異文化コミュニケーションについて議論し、その評価法について考える。</p> <p>(70 井出里咲子/1回) 日本語の語用論研究の観点から日本語教育への応用について学び、その評価法について考える。</p> <p>(96 高木智世/1回) 学習者の「言語能力」について日本語教育の観点から検討を行い、その評価法について考える。</p> <p>(71 Vanbaelen Ruth/1回) 社会言語学的な観点から日本語教育への応用について議論し、その評価法について考える。</p> <p>(140 伊藤秀明/1回) 日本語の教材開発、ICTの応用方法などを中心に日本語教授法について学び、その評価法について考える。</p>	オムニバス方式
専門科目	リサーチ・プログラム開発1	<p>自らの研究テーマに関して指導教員(複数が望ましい)の指定する学習教材、文献、各種資料などをはば広く集中的に学習し、また関連する学会、シンポジウム、会議、公開講座等に参加し、そこでの学習成果を「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録する。それを指導教員に報告し、学習の進捗度について指導を受ける。学習の進捗状況、学習内容について「可」としての判断が出た場合、最終レポートを執筆し、レポートが合格になれば単位が与えられる。学習内容、レポートは通常の10回分の講義 および予復習を通じて身につけられる程度に相当する質と量が必要である。レポートおよび「リサーチ・プログラム開発ノート」はウェブ上で公開することを原則とする。本演習は早期修了予定者が修士論文作成に必要な知識を習得することを念頭に置いて開講するものであり、履修に先立っては、指導教員の許可がある。早期修了予定者以外の学生で特別な理由があり、本演習を受講したい者は、事前に指導教員、学位プログラムリーダーの承諾がある。許可があれば、同一の研究テーマで複数の「リサーチ・プログラム開発」授業・演習を履修することができる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	リサーチ・プログラム開発2	<p>自らの研究テーマに関して指導教員(複数が望ましい)の指定する学習教材、文献、各種資料などをはば広く集中的に学習し、また関連する学会、シンポジウム、会議、公開講座等に参加し、そこでの学習成果を「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録する。それを指導教員に報告し、学習の進捗度について指導を受ける。学習の進捗状況、学習内容について「可」としての判断が出た場合、最終レポートを執筆し、レポートが合格になれば単位が与えられる。学習内容、レポートは通常の10回分の講義 および予復習を通じて身につけられる程度に相当する質と量が必要である。レポートおよび「リサーチ・プログラム開発ノート」はウェブ上で公開することを原則とする。本演習は早期修了予定者が修士論文作成に必要な知識を習得することを念頭に置いて開講するものであり、履修に先立っては、指導教員の許可がある。早期修了予定者以外の学生で特別な理由があり、本演習を受講したい者は、事前に指導教員、学位プログラムリーダーの承諾がある。許可があれば、同一の研究 テーマで複数の「リサーチ・プログラム開発」授業・演習を履修することができるが、「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録される学習内容、レポートは「リサーチ・プログラム開発1」とは別のものでなくてはならない。</p>	
	リサーチ・プログラム開発3	<p>自らの研究テーマに関して指導教員(複数が望ましい)の指定する学習教材、文献、各種資料などをはば広く集中的に学習し、また関連する学会、シンポジウム、会議、公開講座等に参加し、そこでの学習成果を「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録する。それを指導教員に報告し、学習の進捗度について指導を受ける。学習の進捗状況、学習内容について「可」としての判断が出た場合、最終レポートを執筆し、レポートが合格になれば単位が与えられる。学習内容、レポートは通常の10回分の講義 および予復習を通じて身につけられる程度に相当する質と量が必要である。レポートおよび「リサーチ・プログラム開発ノート」はウェブ上で公開することを原則とする。本演習は早期修了予定者が修士論文作成に必要な知識を習得することを念頭に置いて開講するものであり、履修に先立っては、指導教員の許可がある。早期修了予定者以外の学生で特別な理由があり、本演習を受講したい者は、事前に指導教員、学位プログラムリーダーの承諾がある。許可があれば、同一の研究 テーマで複数の「リサーチ・プログラム開発」授業・演習を履修することができるが、「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録される学習内容、レポートは「リサーチ・プログラム開発1,2」とは別のものでなくてはならない。</p>	
	リサーチ・プログラム開発4	<p>自らの研究テーマに関して指導教員(複数が望ましい)の指定する学習教材、文献、各種資料などをはば広く集中的に学習し、また関連する学会、シンポジウム、会議、公開講座等に参加し、そこでの学習成果を「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録する。それを指導教員に報告し、学習の進捗度について指導を受ける。学習の進捗状況、学習内容について「可」としての判断が出た場合、最終レポートを執筆し、レポートが合格になれば単位が与えられる。学習内容、レポートは通常の10回分の講義 および予復習を通じて身につけられる程度に相当する質と量が必要である。レポートおよび「リサーチ・プログラム開発ノート」はウェブ上で公開することを原則とする。本演習は早期修了予定者が修士論文作成に必要な知識を習得することを念頭に置いて開講するものであり、履修に先立っては、指導教員の許可がある。早期修了予定者以外の学生で特別な理由があり、本演習を受講したい者は、事前に指導教員、学位プログラムリーダーの承諾がある。許可があれば、同一の研究 テーマで複数の「リサーチ・プログラム開発」授業・演習を履修することができるが、「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録される学習内容、レポートは「リサーチ・プログラム開発1,2,3」とは別のものでなくてはならない。</p>	
	日本社会と家1	<p>日本の伝統的な家業経営体であるイエの構造、その組織原理としての特性やイエが育む個人主義を歴史比較制度分析の視点からとらえることを目指す。イエとは何か、氏(ウジ)からイエへ、イエ社会の経済秩序、イエの普及と資本主義の発達、イエ社会の産業化、イエ社会と「外部」の人々、といった論点を、平山朝治『イエ社会と個人主義：日本型組織原理の再検討』(日本経済新聞社、1995年)をテキストとして講義する。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	韓国社会と家1	韓国社会における「家」について他文化圏との比較考察を交えつつ学ぶ。韓国の「家」は、伝統的に儒教思想の強い影響下にあったが、植民地の時代を経ながら、また近代化の進行の中で変貌を余儀なくされている。現代においては高齢化問題、少子化問題の深刻化が進み、政治・社会・経済の変動にともなう、老父母扶養の問題、夫婦間の役割問題、親子間の価値観問題なども顕在化している。この授業では、朝鮮時代を中心とする韓国の伝統的な「家」像と、近代化の過程で現れている「家」の現住所について、家族制度、家族倫理、家庭教育といった側面から、他文化圏との比較考察を交えつつ、その模様を考察する。韓国の家族制度、家族倫理、家庭教育に関する原典資料および研究書・論文を読みながら、討議・説明する。	隔年
	日本古典文化と身体1	東洋思想では気をもって人間の身体を説明し、その関連で養生論を発達させてきた。広く東洋思想の中の気論・養生論を概観しながら、日本の古典に現れる気・養生論の特徴を考察する。この授業を通して、東洋思想の中の気論、養生論について知識を広め、日本的な気論と養生論の特徴を理解する。東洋思想と日本思想の中の気論、養生論に関する原典資料および研究書・論文を読みながら、討議・説明する。特に貝原益軒の『養生訓』について詳論する。	隔年
	アイドルと社会経済	比較歴史制度分析の観点から日本のアイドルの特質を明らかにし、明治以降の日本経済の長期波動とアイドル・ブームの関係を、映像・音源を視聴しながら検討することを通して、現代日本の社会経済と文化についての洞察を深めることをめざす。平山朝治「アイドル150年：アイドル・ブームと長期波動」『経済学論集』70号、2018年、 http://doi.org/10.15068/00150843 などをテキストとして講義する。	隔年
	翻訳からみた日本と東アジアの文化1	漢字・漢文は日本語・日本文化の形成と発展にとって二重的構造を持つ他者である。この授業では、固有の日本語に対する「漢語」、大陸の文化を受け入れるために独自に発展させてきた「訓読」、そして明治期の西洋文明の導入における「翻訳」を対象として、日本文化における漢字・漢文・翻訳の問題の諸相を考察する。荻生徂徠の『訳文筌蹄』をはじめとして、これらの問題に関わる研究書や論文を紹介し一緒に読みながら、討議・説明していく。	隔年
	日本の精神文化と翻訳1	学術用語、文化用語としての日本語は、地域言語として、古くは中国語、新しくは欧米諸語、現在はほぼ英語という、世界言語に從属する形で、それらのキーワードを直輸入、翻訳、修正しながら、知的営みを積み重ねてきた。そのうち、明治以降の欧米諸語の輸入、翻訳に焦点を絞り、いくつかの問題点を再検討する。とくに、翻訳語と思われるキーワードのうち、日本オリジナルのものがあることに注目して、その成立の経緯を考察する。	隔年
	日本社会と宗教2A	社会の中の特定の個人の思想や宗教ではなく、無名の集合的な原思想、原宗教を、検討対象とする。日本人論の中の、国民性、倫理観、美意識、神聖観(感)などがおもな話題となる。その背景にある、歴史的、地理的な要因について、歴史学、人類学、民俗学、神話学、言語学などの知見を活用する。明確な教義や組織のない、日本の宗教状況を、これらのゆるやかな集合体として把握することを試みる。「日本社会と宗教1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	日本社会と宗教2B	社会の特定の個人の思想や宗教ではなく、無名の集合的な原思想、原宗教を対象とする。民俗学、人文地理学、文学研究、芸術研究、異文化研究の一部が探求してきた、「懐かしさ」という感情に焦点を絞り、原風景、原体験などがおもな話題となる。ナショナリズムと一括される思想や感情を切り分けて、トランスナショナルなレベルで養護し得る要素を救いとる。とくに「深層文化としての宗教」という捉え方を軸に、日本宗教を対外的に発信する方法を工夫する。「日本社会と宗教1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	東アジアの思想と文化2	中国・韓国(朝鮮半島)・日本の東アジア地域は、古くから漢字文化圏、それにちなんで儒教文化圏とも呼ばれてきた。本授業では、東アジアにおける儒教思想、特に中国宋代の新儒学の勃興以降の展開と特徴を比較的な観点で考察することを目的とする。とりわけここでは、「朝鮮半島と日中の思想文化1A」に引き続き、朝鮮時代の中期以後の儒学思想を概観する。李退溪と李栗谷に代表される朝鮮朱子学の定立と分化の様相、彼らの登場以後展開される嶺南学派と畿湖学派对立、四七論争、人心道心論争、礼学論争、人物性同異論争などの朝鮮儒学の思想的争点を概観し、朱子学に反対した実学の思想的特徴を考察する。ここでは江戸の古文辞学と清朝の考証学との比較を取り上げる。	隔年
	日本文化と経済思想1	日本の文明化のプロセスと日本文明の特性を、比較歴史制度分析の視点からとらえることを目指す。自由民による支配者選択の伝統、華帝国の藩王としての大王、聖徳太子とは何者か、国家神道は護国仏教の邦訳版、仏教による荒ぶる神々の鎮撫、普遍と特殊が天皇制で交錯する、思想史的巨人としての空海、怒しの契機を孕む怨霊思想、荘園制の下での文明の成熟、日本的なタテ関係の「やさしさ」、慈悲は法より優先される、産業発展の求心性という伝統、一揆と革命の違い、神道は「日本らしい」か、「日本らしさ」の現代的意味、といった論点を、平山朝治『「日本らしさ」の地層学』(情況出版、1993年、 http://hdl.handle.net/2241/00126546)をテキストとして講義する。	隔年
	比較文学論2A	近現代の文学を研究対象として取り扱う際、海外の文化や文学との交流や影響関係を考えることは大変重要である。本授業は、比較文学の手法を学ぶことによって、近・現代文学研究における新たな視野を獲得することを目的とする。内外の研究者による、ジェンダー理論やポストコロニアル理論を用いたテキスト研究の具体例に触れ、こうした研究に関する知識を得ることで、比較文学研究の視点を体得し、履修者の修士論文に向けての研究に生かす。「比較文学論1A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	比較文学論2B	近現代の文学を研究対象として取り扱う際、海外の文化や文学との交流や影響関係を考えることは大変重要である。本授業では、演習形式によって、比較文学の手法を実践的に学ぶことによって、近・現代文学研究における新たな視野を獲得することを目的とする。多言語のテキストの精読による実証や、翻訳理論・ジェンダー理論・ポストコロニアル理論などを用いたテキスト分析を実際に行うことにより、比較文学研究の視点を体得し、履修者の修士論文に向けての研究に生かす。「比較文学論1A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	日本の文化と文芸2A	世界的にみても、ある文学作品が発生するのは、その国家・民族の文化活動の一環であることはいままでのないことである。本講義では日本文学古典作品について文学史の基本的事項をふまえながらカルチュラルスタディーズの手法を応用しつつ、受講する大学院生の研究対象に即して、研究の指導を適宜発表の形式も交えながら行っていく。「日本の文化と文芸1A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	日本の文化と文芸2B	世界的にみても、ある文学作品が発生するのは、その国家・民族の文化活動の一環であることはいままでのないことである。本講義では日本文学の近代作品について文学史の基本的事項をふまえながらカルチュラルスタディーズの手法を応用しつつ、受講する大学院生の研究対象に即して、研究の指導を適宜発表の形式も交えながら行っていく。「日本の文化と文芸1A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	メディア研究 2	この授業では、メディアとコミュニケーションの研究方法に関する文献を輪読する。主にメディア研究方法について学習する。メディアの実証研究の読み方及び実証研究を実施する際に必要になる能力を習得することを目標とする。指定された文献を図書館のデータベースよりダウンロードし、授業のときまでに読み、事前にレポートをウェブにて提出する。授業では文献に関するディスカッションとプレゼンテーションを行い、他の履修生と情報共有し、授業後にその活動内容を報告する。これを、各回実施する。「メディア研究 1」とは異なるトピックスを扱う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	メディア思想と日本社会2	本授業はメディア研究の生成とその歴史的社会的背景を考えるものである。マス・メディアが誕生して以降、メディアは政治経済文化などさまざまな現象に影響を与え、また影響を受けてきた。メディア研究にはそのような歴史的社会的背景が色濃く影響している。本授業では、メディア研究やその中の種々の理論や批評がいかにして生まれたのかを歴史的社会的連関の中で考察し、そこから透過できる日本社会とメディア思想についての理解を深めることを目的としている。授業は適切なメディア研究と近現代日本史に関するテキストを選別し、担当箇所を受講生が報告し、全体で議論を進め、理解を深めていく輪読形式をとる。これをつうじて先行研究の把握と論文における課題設定の方法、論理的実証的な研究の進め方について学習する。「メディア思想と日本社会1」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	比較メディア思想2	本授業は、メディア研究の生成とその歴史的社会的背景について、新聞・映画・ラジオ・テレビなどの各メディアとの比較メディア史的観点及び欧米やアジア諸国と日本との国際比較の観点から、考えるものである。マス・メディアが誕生して以降、メディアは政治経済文化などさまざまな現象に影響を与え、また影響を受けてきた。メディア研究やメディアを考察するメディア思想にはそのような社会現象が強く刻印されている。メディア研究やメディア思想への考察から、社会や政治や文化の国ごとの特質や共通性について理解できるようになる。授業はメディア史やメディア思想に関する適切なテキストを選別し、担当箇所を受講生が報告し、全体で議論を進め、理解を深めていく輪読形式をとる。これをつうじて先行研究の把握と論文における課題設定の方法、論理的実証的な研究の進め方について学習する。「比較メディア思想1」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	日本語相互行為分析2	近年、会話分析や相互行為言語学の手法を用いた研究によって、日本語という言語に用意されている言語資源（語順、助詞、省略、フィラーなど）が、日本語を用いた相互行為の組織にどのように利用されているかが次々に明らかにされている。本講義では、これらの研究論文を精読し、その手法や知見を理解する。その上で、相互行為分析の対象として未だ取り上げられていない日本語現象について会話分析的な分析を行い、新たな知見を引き出すことを試みる。この作業を通して、言語が根源的に社会的なものであることの理解を深める。	隔年
	日常会話のエスノグラフィー2	当たり前の現象としてある「日常会話」から社会と文化に切り込む方法について学べる。言語人類学の会話やディスコースへのアプローチを理論的に学び、談話や会話を分析する上での方法論について考える。「日常会話のエスノグラフィー1」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	日本政治と市民社会2	「日本政治と市民社会1」に引き続き、日本の政治や市民社会に関する日本語の文献を講読し、その内容を深く理解するとともに、社会科学における研究の方法等を修得する。とりわけ、比較という視座から日本の市民社会を相対化して捉えられるようになることを目指す。この授業では、国家と市民社会との関係に焦点を合わせて議論する。	隔年
	Japan's Politics and Civil Society 2	Following "Japan's Politics and Civil Society 1", we aim to understand Japanese politics and civil society and to master methodology of social sciences through reading some basic literatures. In particular, we make much account of comparative methods. We focus on the relationship between state and civil society in this class. "Japan's Politics and Civil Society 1"に引き続き、日本の政治や市民社会に関する英語の文献を講読し、その内容を深く理解するとともに、社会科学における研究の方法等を修得する。とりわけ、比較という視座から日本の市民社会を相対化して捉えられるようになることを目指す。この授業では、国家と市民社会との関係に焦点を合わせて議論する。	隔年
	比較政治2	「比較政治1」に引き続き、比較政治の主要な概念や理論を、英語文献の精読を通して学習する。講義で扱う具体的なテーマは、議会制と大統領制、選挙制度、政党システムなどである。これらのテーマを素材に、比較政治学の主要な概念や理論を学ぶことを通して、比較政治分野での研究設計について理解を深める。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Comparative Politics 2	<p>In this course, students focus on research methods and theory building in comparative politics. It is designed to familiarize students with the terminology, methods, debates, and challenges of conducting comparative research. Topics covered in this course include theory building and theory testing, observational research, causation and explanation, small-N research, mixed methods, concepts and operationalization, and comparative historical research. By going through these topics, students are expected to learn how to design their own research in the field of comparative politics.</p> <p>本講義では、比較政治学における研究方法と理論構築について集中的に学ぶ。比較研究を行う際に直面する専門用語、方法、論争、課題に慣れ親しめるよう、本講義は設計されている。講義で扱う具体的なテーマは、理論構築と検証、観察研究、因果関係と説明、少数事例研究、混合研究法、概念と操作化、比較歴史研究などである。これらのテーマを素材に、比較政治学の主要な概念や理論を学ぶことを通して、比較政治分野での研究設計について理解を深める。</p>	隔年
	日本の対外関係2	<p>本講義においては近現代日本の対外政策の形成過程とその背景に関する研究資料や文献を講読し、その内容への理解を深めると同時に、日本外交に関する歴史的研究の基礎的な方法論を習得する。講義内容は原則として1890年以降の日本外交を対象とするが、第二次世界大戦後のいわゆる「冷戦時代」（1940年代から90年代初頭まで）及び「ポスト冷戦時代」にウェートを置く。主として和文文献を使用するが、必要に応じて英文資料も適宜取り上げる。「日本の対外関係1」を併せて履修すること。</p>	隔年
	Foreign Relations of Japan 2	<p>This course examines the historical background of modern Japanese foreign relations with an emphasis on the political and security spheres. It also discusses basic methodologies regarding historical research of modern Japanese foreign relations. The lectures focus on post-1890 Japanese history while higher priorities will be given to the period after the end of the Second World War (i. e., the Cold War days between late 1940s and late 1980s, as well as the post-Cold War era). The lectures and class discussion will be conducted in English. Textbook and other materials used in class will be limited in those published in English. Active participation in class discussions is strongly encouraged. Those who are taking this course shall also take “Foreign Relations of Japan 1” .</p> <p>本講義は現代日本の対外政策の形成とその歴史的背景を、政治及び安全保障面を中心に、議論するものである。更に、現代日本の対外関係に関する歴史的な研究の方法論についても適宜に議論する。本講義は1890年代以降の時代を対象とするが、第二次世界大戦終戦後の時代（1940年代後半から1980年代後半までの「冷戦期」並びに「ポスト冷戦期」）に重点を置く。講義は原則的に英語で行われる。教科書や各種資料も英語の出版物を中心に選定する。講義中、活発な議論を強く奨励する。なお、本講義を履修するには“Foreign Relations of Japan 1”も併せて履修することが必要である。</p>	隔年
	International Relations 2A	<p>The aim of this course is to introduce students to some of the main theories of conflict and cooperation in international relations. Students are expected not just to understand the main arguments of various theories, but also to critically examine them and develop skills to think like a social scientist. Students will also read materials related to theory testing to improve their understanding of theory in general.</p> <p>国際関係の主要な理論を、英語文献を通して学習する。国際政治における対立と協調に関する論文を取り上げ、様々な角度から諸理論・アプローチを批判的に検証することを通し、社会科学的な分析能力を身に付ける。また、理論検証に関する文献も読むことを通し、理論全般における理解を深める。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	International Relations 2B	<p>The aim of this course is to introduce students to some of the main theories of conflict and cooperation in international relations. Students are expected not just to understand the main arguments of various theories, but also to apply theories to explain actual cases. Students are also expected to consider policy implications of various theories, and explore how theories can contribute or hinder our understanding of international relations.</p> <p>国際関係の主要な理論を、英語文献を通して学習する。国際政治における対立と協調に関する論文を取り上げ、様々な角度から諸理論・アプローチを理解することにとどまらず、実際のケースに理論を応用する能力を身に付ける。また、理論の政策的なインプリケーションについても検討し、理論が国際関係を理解する上で、どの程度役立つかあるいは妨げとなるかも検証する。</p>	隔年
	比較歴史教育2	<p>比較歴史教育1で習得した内容をもとに、理論からより具体的事例に議論と考察を発展させる。具体例は、履修者の研究テーマおよび関心事例を中心に、Comparative History Education 2では取り上げないものを、日本及び諸外国の事例から選択する。比較歴史教育1では、特に戦争など国際紛争と教育という観点から歴史教育の在り方について考察したが、比較歴史教育2では、主にアフリカやアジア・ラテンアメリカで展開されてきた植民地支配の歴史を中心に扱い、特に発展途上国における歴史教育の在り方について考察する。</p>	隔年
	Comparative History Education 2	<p>Based on the already-studied contents of Comparative History Education 1, students further develop discussions and investigations in dealing with concrete cases, which will be selected from Japan or other countries in the world according to the theme of their Master's dissertation or their research interest. While histories of warfare or international conflicts are dealt with in Comparative History Education 1, this course deals with colonial histories particularly in Africa, Asia and Latin-America, in order to discuss history education in developing countries in these regions.</p> <p>"Comparative History Education 1"で習得した内容をもとに、理論からより具体的事例に議論と考察を発展させる。具体例は、履修者の研究テーマおよび関心事例を中心に、日本及び諸外国の事例から選択する。"Comparative History Education 1"では、特に戦争など国際紛争と教育という観点から歴史教育の在り方について考察したが、"Comparative History Education 2"では、主にアフリカやアジア・ラテンアメリカで展開されてきた植民地支配の歴史を中心に扱い、特に発展途上国における歴史教育の在り方について考察する。</p>	隔年
	計量分析2A	<p>計量分析は、社会の様々な分野での諸現象や実態を取り巻く溢れる情報から、現象や実態の把握、物事の意味付け、簡略化、客観化、推定等のため、多くの分野で用いる分析ツールの一つである。この授業では、分析に用いるデータの調査方法と、計量分析ツールを正しく使うための基礎統計の概念について講義する。講義内容は、計量分析1Aで学んだ知識(基礎集計、記述統計)を土台とし、関連分析(相関分析、回帰分析)を中心とした、計量分析の入門的な概念を理解し、発展させる。</p>	隔年
	計量分析2B	<p>計量分析は、社会の様々な分野での諸現象や実態を取り巻く溢れる情報から、現象や実態の把握、物事の意味付け、簡略化、客観化、推定等のため、多くの分野で用いる分析ツールの一つである。この授業では、計量分析2Aに相当する知識(相関分析、回帰分析)をベースに、分析に用いる計量分析ツールの正しい使い方を講義する。講義内容は、統計分析用ソフトSPSS(場合によっては、エクセルを並行)を用いて、計量分析1Bで学んだSPSSの基本操作(データ加工・整理・基本集計など)を土台とし、高度な分析(相関分析、回帰分析、因子分析、各種検定など)を行う。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	応用ゲーム理論1	この授業は講義形式で行う。目標として、まずゲーム理論の最も基本的な概念を理解する。そしてこれらのゲーム理論の社会・経済現象への典型的な応用研究例を学ぶ。ゲーム理論の内容は、期待効用理論、戦略形ゲームと展開形ゲームによるゲームの表現、ナッシュ均衡と部分ゲーム完全均衡の概念である。これらを学んだ上で、社会・経済慣行の形成を分析する協調ゲームの実験、寡占市場の企業の戦略的行動の理論、ネットワーク形成の理論モデルなどの研究例を紹介する。	隔年
	Applied Game Theory 1	<p>This lecture provides the theories of infinitely repeated games, games with incomplete information, and evolutionary games. These topics are the intermediate-level in non-cooperative game theory. The main goal of this lecture is to analyze following socio-economic phenomena by using the theories above. As the applications of infinitely repeated games, long term contracts in an organization and the possibility of implicit collusion in the oligopoly markets are investigated. As the application of games with incomplete information, the structure of common knowledge among players and the signaling behaviors in labor markets are dealt with. Finally, in the topic of the evolutionary game theory, we study a stable social situation to which the aggregation of adaptive behaviors of bounded rational players approaches, which is the economic analysis of the convention and the culture of the society.</p> <p>この講義では、無限繰り返しゲーム、不完備情報ゲーム、そして進化ゲームの理論を紹介する。これらのトピックは、中級の非協力ゲーム理論に相当する。この講義の目標は、これらの理論を用いて、以下の社会・経済現象を分析することである。無限繰り返しゲームにおいては、組織内の長期契約と寡占市場における企業間の暗黙の結託の可能性が検討される。不完備情報ゲームにおいては、プレイヤーたちの間の共有知識の構造と、労働市場におけるシグナリング行動が扱われる。進化ゲーム理論においては、限定合理的プレイヤーの適応的な行動の集計量が近づいていく安定的な社会状態について学ぶが、これはその社会の社会慣習や文化の経済分析である。</p>	隔年
	環境とマクロ経済学2	本講義では持続可能な開発・経済成長の分析に必要な基礎的な経済成長理論であるソロー・スワンモデルを習得する。経済成長の基本要因を学んだ上で、貧困、所得分布、文化・社会、地理的要因に焦点を当てて経済成長の各国間の差異の決定要因について理解する。さらに気候変動による生産性の変化や自然災害などについても検討する。経済成長の限界、あるいは持続可能な開発・経済成長について問題点を把握し経済学的視点から議論する能力を身につけることを目標とする。	隔年
	The Environment and Macroeconomics 2	<p>This course offers an introduction to the theory of economic growth to analyze the interaction between the environment/natural resources and economic growth. The course focuses on understanding poverty, culture, climate, and natural resources that affect economic growth. The goal is to give the students skills to apply the basic theory and competences to discuss various environmental issues and environmental policy.</p> <p>本講義では持続可能な開発・経済成長の分析に必要な基礎的な経済成長理論であるソロー・スワンモデルを習得する。経済成長の基本要因を学んだ上で、貧困、所得分布、文化・社会、地理的要因に焦点を当てて経済成長の各国間の差異の決定要因について理解する。さらに気候変動による生産性の変化や自然災害などについても検討する。習得した経済成長理論をもとに様々な環境問題と持続可能な成長のための環境政策を分析・議論する能力を身につけることを目標とする。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	金融2	この講義の目的は、金融論の基本的議論を19世紀から現在までの日本経済の発展を事例として学ぶことである。本講義では、特に、債権・債務関係と決済の視点を中心に、各種の金融問題を整理する。金融2は、日本と国際金融システムの関わりを中心に学ぶ。具体的には、金本位制やブレトンウッズ体制などの国際金融制度、あるいは大恐慌やアジア金融危機等の国際金融危機について一通り学ぶ。参加者には、授業で扱った金融問題のいずれかの論点について、日本の歴史的経験と他国の歴史的経験を比較する形で検討する課題が与えられる。例えば、プレゼンテーションを行ってもらったうえで、期末レポートとしてまとめてもらう。	隔年
	世界経済史2	グローバル経済の展開を歴史的にみる観点から、各国の経済発展とそれを支える社会経済的基盤の形成と変容について、参加者が文献研究報告ないし論文準備報告を行い、議論を行う。報告では、A4で4枚程度のレジメないし原稿を用意して発表し、(日本語での)口頭報告やさまざまな意見や質問に対して応答する演習を行いながら、論文の問題意識や論理構成、資料等について、全員の議論を通じて深めていく。修士論文の完成に向かって、基礎的な文献を読み込んでいくとともに、論文の構想をまとめつつ、執筆を進めていくことを支援する。「世界経済史1」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	Comparative Labor Studies 2	Participants would make presentations on the articles they study or on their own thesis. We would discuss the topic in a small group, from the viewpoint of comparative historical analysis of the labor relations. Participants are required to prepare about 4 to 6 pages paper for their presentations in Japanese or English. The research questions, the logic structure and used materials would be examined in the discussion with all the participants. During this course participants would be encouraged to read needed articles and materials, constitute and rearrange the thesis' s structure, and finally to prepare for the master thesis. This class deals with different topics from those of 'Comparative Labor Studies 1'. 参加者は文献研究報告ないし論文準備報告を行い、経済活動の基盤となる労働関係について比較歴史分析の視点から少人数で議論を行う。参加者はA4で4~6枚程度のレジメないし原稿を用意して発表し(日本語ないし英語)、論文の問題意識や論理構成、資料等について、全員の議論を通じて深めていく。修士論文の完成に向かって、基礎的な文献を読み込んでいくとともに、論文の構想をまとめつつ、執筆を進めていくことを支援する。「Comparative Labor Studies1」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	地域経済・経営史2A	本授業はグローバル競争下における地域企業経営および事業展開を、それ以前の展開と対比させつつ検討することを目標とする。特に本授業では、地域経済の発展に貢献することを強く意識した「地域貢献型企業」に着目し、それらの企業がグローバル競争下にどのような問題に直面したか、それに対してどのような改革・取り組みを展開しているかについて検討することを主なテーマとする。授業では、毎回、注目される研究テーマ・事例・文献等を取り上げ、それについてまず教員が近年の研究動向を踏まえつつ重要点を説明する。さらに教員が一方的に講義を行うのではなく、受講生の報告と討論も取り入れる形で授業を進める予定である。「地域経済・経営史1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	地域経済・経営史2B	本授業はグローバル競争下における地域産業の衰退あるいは再生・活性化に関して、グローバル競争に突入する以前の地域産業あるいは産業集積の発展と対比させつつ検討することを目標とする。特に本授業では、都市型産業集積、企業城下町型産業集積、産地型産業集積の3つのタイプに着目し、グローバル競争下における産業構造の変化や直面する課題、地域・集積内で取り組まれている再生策(産学連携等)について検討することを主なテーマとする。授業では、毎回、注目される研究テーマ・事例・文献等を取り上げ、それについてまず教員が近年の研究動向を踏まえつつ重要点を説明する。さらに教員が一方的に講義を行うのではなく、受講生の報告と討論も取り入れる形で授業を進める予定である。「地域経済・経営史1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Media Research 2	<p>This is a graduate level course taught in English for students who wish to learn about media research methods. Through this course, students will gain further understanding of empirical research that requires univariate and multivariate statistical analysis. Students will also build their computational skills they should have acquired at the undergraduate level. In this class, students will need to download material from databases and submit summaries online, and have discussions and presentations. As this course will be conducted in English, students must be able to perform all discussions and assignments in English. This class deals with different topics from those of 'Media Research 1'.</p> <p>この授業は英語でメディアに関する研究方法を学習する。実証研究における分析手法を学ぶ。多変量解析などの活用方法を理解できるようになる。この授業では、指定された文献を図書館のデータベースよりダウンロードし、授業のときまでに読み、事前にレポートをウェブにて提出する。授業では文献に関するディスカッションとプレゼンテーションを行い、他の履修生と情報共有し、授業後にその活動内容を報告する。これを、各回実施する。「Media Research 1」とは異なるトピックスを扱う。</p>	隔年
	移民研究・国際人口移動論2	<p>移民・難民など現代の国際人口移動に関する現状、理論、政策、政治、ガバナンス、市場経済等について、社会学の観点・命題を中心に学際的な考察を加える。おもに、この分野における主要基本文献の精読と解題をおこなうほか、時事的なケーススタディをもとに議論を深める。</p>	隔年
	Migration and Multicultural Studies2	<p>This course aims to examine contemporary international migration issues and multiculturalization of Japanese society through theoretical researches and empirical case studies. Using English materials, participants will read and discuss major topics on migration theories, policies, politics, governances, and market economies from the perspectives of sociology and other disciplines.</p> <p>移民・難民など現代の国際人口移動と日本社会の「多文化」化に関する現状、理論、政策、政治、ガバナンス、市場経済等について、社会学の観点・命題を中心に学際的な考察を加える。おもに、この分野における主要基本文献（英語）の精読と解題をおこなうほか、時事的なケーススタディをもとに議論を深める。</p>	隔年
	法と市民社会 2A	<p>近代市民社会において成立した法は、一定の理念、価値に基づいている。他方、グローバル化、情報化、少子高齢化が進む中で、法は変容を続けている。このような中で、我々は、法の根底にある理念、価値を学び直し、変えてはいけぬものと変えるべきものを切り分ける能力を持たなければならない。そこで、市民社会において現に起きている事件や論争などの法的問題を、憲法、刑事法、民事法、他国との比較などの観点から検討し、法の理念、価値を理解した上で、現実の対応策を提言できるようになることを目指す。授業計画と形式であるが、受講生からテーマを募り、そのテーマの理解に必要な基礎的知識について講義をした上で、そのテーマに関する具体的な事件や論争を取り上げ、討論する。「法と市民社会 1 A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。</p>	隔年
	法と市民社会 2B	<p>近代市民社会において成立した法は、一定の理念、価値に基づいている。他方、グローバル化、情報化、少子高齢化が進む中で、法は変容を続けている。このような中で、我々は、法の根底にある理念、価値を学び直し、変えてはいけぬものと変えるべきものを切り分ける能力を持たなければならない。そこで、市民社会において現に起きている事件や論争などの法的問題を、憲法、刑事法、民事法、他国との比較などの観点から検討し、法の理念、価値を理解した上で、現実の対応策を提言できるようになることを目指す。授業計画と形式であるが、受講生からテーマを募り、そのテーマの理解に必要な基礎的知識について講義をした上で、そのテーマに関する具体的な事件や論争を取り上げ、討論する。「法と市民社会 1 A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	法と現代社会2A	法は現代社会にとって役に立つのか立たないのか、立つとしてどの程度か、それはなぜか、といった問いについて、受講生各人が自分の頭で考え、調べ、結論を出すことができるようになることを目標とする。グローバル社会における日本が抱える現代的な法的問題について考察するために、生殖医療、義務教育、校則、少年犯罪、就職活動等、現代日本の社会問題について法的な観点からディスカッションを行う。受講生は、各回のテーマについて、指定する教科書・参考書等を読んで理解を深め、新聞・テレビ・インターネット等のメディアを通じて最新の情報を収集し、質疑応答に臨むことが要求される。	隔年
	法と現代社会2B	法は現代社会にとって役に立つのか立たないのか、立つとしてどの程度か、それはなぜか、といった問いについて、受講生各人が自分の頭で考え、調べ、結論を出すことができるようになることを目標とする。グローバル社会における日本が抱える現代的な法的問題について考察するために、労働法、死刑制度、環境問題、多重債務者、安楽死・尊厳死、相続等、現代日本の社会問題について法的な観点からディスカッションを行う。受講生は、各回のテーマについて、指定する教科書・参考書等を読んで理解を深め、新聞・テレビ・インターネット等のメディアを通じて最新の情報を収集し、質疑応答に臨むことが要求される。	隔年
	日本語教育研究概論	日本語教育原論での基礎知識を踏まえ、日本語教育に関する研究論文を書くための講義をオムニバス形式で行う。コース前半では、研究論文を書く方法として、先行研究批判方法や、オリジナリティと論理性の示し方、調査方法、引用、剽窃、データの扱い方を講義する。その上で、教員の専門性を伝えるべく、文章・談話研究の方法、自然会話研究の方法、ポライトネス研究の方法、日本語学習者研究の方法など、日本語教育に必要な研究方法を学ぶ。 (オムニバス方式／全10回) (17 小野正樹／4回) オリエンテーションとまとめを担当する。加えて、研究論文を書く方法として、オリジナリティ、論理性の重要性を説明する。 (96 高木智世／1回) 日本語教育に有効な質的研究の方法を講義す (71 Vanbaelen Ruth／1回) 日本語教育に有効な社会言語学研究の方法を講義する。 (80 木戸光子／1回) 日本語教育に有効な文章・談話研究の方法を講義する。 (115 BUSHNELL CADE CONLAN／1回) 日本語教育に有効な自然会話研究の方法を講義する。 (95 関崎博紀／1回) 日本語教育に有効なポライトネス研究の方法を講義する。 (140 伊藤秀明／1回) 日本語教育に有効な日本語学習者研究の方法を講義する。	オムニバス方式
	日本語語用論研究	言語研究の中でも、20世紀後半から発達した、話者と聴者のコミュニケーションを扱う伝統的語用論研究、事態の認識方法に関わる認知言語学、人間関係維持を重んじたポライトネス理論の研究内容や手法を学ぶ。認知に関わる言語の主観性表現や、聴者や発話の場を鑑みた表現方法について、予め決められた発表者が該当論文を紹介する。発表者は論文の要旨を述べ、疑問点や議論したいテーマを設定する。それを受けて、受講生は具体的例を挙げながら、議論し、日本語教育上の問題点や、日本語教育への応用を考える。	
	ICTと日本語教育研究	ICTを利用した日本語教育関連の文献・ツールを通して、ICTを活用した日本語教育研究についての基礎知識・研究手法について学ぶ。受講生はICTを活用した日本語教育関連の文献やツールの内容を発表し、受講生全体で効果的な点や疑問点・改善点について議論する。その議論を通して、ICTを活用した日本語教育の研究についての理解を深める。	
	日本語教育実践研究 1	筑波大学グローバルコミュニケーション教育センターで開講されている、日本語教育コース専任教員が担当する初級レベルの総合日本語から、中級日本語、上級日本語レベルの読む、書く、聞く、話すなどの技能別日本語の中で、受講生自身が強い興味・関心のある授業を、担当教員と相談の上、選択し、授業運営方法、教育方法を学ぶ。授業担当教員教員の指示に従って教室活動、教材作成に関わる教育実習を行い、実践的日本語教育能力を高めることを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本語教育実践研究 2	日本語教育実践研究 1 を承けて、受講生は本学で学ぶ日本語学習者が求める日本語教育内容を検討し、初級レベルの学習者を中心に実際のクラス運営を行う。クラス運営は、2～3名から成るグループ単位で行う。指導内容を設定し、その内容に基づいてシラバス作成、参加者の募集とレベルチェック、授業、評価、及び、クラス運営に関する振り返りを行う。日本語教育コース専任教員がグループに分かれて、教育内容、振り返りを確認、助言し、実践的日本語教育能力を高めることを目的とする。	
	日本語教育実践研究 3	日本国内外の日本語教育機関で日本語を教えた経験を持っている学生を対象に、教育を行った教育機関、期間、担当授業内容について、コースコーディネーション、プレースメント、主副教材作成、学習者のニーズ、シラバス作成、成績評価法、授業の評価の観点から、学内で報告会を開催し、質疑議論を行う。日本語教育コース専任教員が実践内容について、今後の方向性などを助言し、実践的日本語教育能力を高めることを目的とする。	
	プロジェクト演習 1A	受講者は、自らの研究プロジェクトを指導教員(複数)との討議や協議の中で、作成し、そのプロポーザルを発表する。基本的な議論の枠組み、主要な先行研究、主要な素材を提示するとともに、今後の原著的な研究のための研究計画を提示する。主に4月入学者が受講する。	
	プロジェクト演習 1B	受講者は、自らの研究プロジェクトを指導教員(複数)との討議や協議の中で、作成し、そのプロポーザルを発表する。基本的な議論の枠組み、主要な先行研究、主要な素材を提示するとともに、今後の原著的な研究のための研究計画を提示する。主に10月入学者が受講する。	
	プロジェクト演習 2A	受講者は、自らの研究プロジェクトの中間報告を、指導教員(複数)との討議や協議の中で、作成し、その研究成果を発表する。基本的な議論の枠組み、主要な先行研究と自らの議論との違いと共通点、主要な素材の分析を提示するとともに、今後の原著的な研究のための執筆計画を提示する。主に4月入学者が受講する。	
	プロジェクト演習 2B	受講者は、自らの研究プロジェクトの中間報告を、指導教員(複数)との討議や協議の中で、作成し、その研究成果を発表する。基本的な議論の枠組み、主要な先行研究と自らの議論との違いと共通点、主要な素材の分析を提示するとともに、今後の原著的な研究のための執筆計画を提示する。主に10月入学者が受講する。	
	プロジェクト演習 2C	プロジェクト演習 2A または 2B をふまえ、指導教員(複数)との討議や協議をしながら原著的な研究を行いつつ修士論文の執筆を進め、修士論文を提出した後は、その内容に関して口頭試問を行う。主に4月入学者が受講する。	
	プロジェクト演習 2D	プロジェクト演習 2A または 2B をふまえ、指導教員(複数)との討議や協議をしながら原著的な研究を行いつつ修士論文の執筆を進め、修士論文を提出した後は、その内容に関して口頭試問を行う。主に10月入学者が受講する。	
	(研究指導)	<p>国際日本研究の諸領域に関して、研究の実践、指導を行い、修士論文執筆者について論文指導を行う。</p> <p>(8 石塚修) カルチュラル・スタディーズの手法を用いて、日本の文学や文化に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(17 小野正樹) 機能文法の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(19 海後宗男) 社会心理学の手法を用いて、メディア研究に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(31 田中洋子) 経済史・労働経済学の手法を用いて、労働問題や社会政策に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(33 津城寛文) 宗教学・深層文化論の手法を用いて、宗教や文化に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(41 根本信義) 法解釈学の手法を用いて、日本社会の法的問題に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(43 潘亮) 外交史の手法を用いて、日本の対外関係に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(47 平沢照雄) 経済史・地域経済論の手法を用いて、日本の地域経済に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(48 平山朝治) 経済学・思想研究の手法を用いて、日本の経済思想に関する課題の研究指導を行う。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(65 明石純一) 国際関係論の手法を用いて、国際人口移動に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(68 生藤昌子) マクロ経済学の手法を用いて、環境問題に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(70 井出里咲子) 言語人類学の手法を用いて、日本語教育や言語行為に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(71 Vanbaelen Ruth) 社会言語学の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(74 大友貴史) 国際関係論の手法を用いて、日本の国際関係に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(77 嚴錫仁) 思想史の手法を用いて、東アジアの思想に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(80 木戸光子) 文章論の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(90 柴田政子) 教育学の手法を用いて、比較教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(95 関崎博紀) 語用論の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(96 高木智世) 会話分析の手法を用いて、日本語教育や相互行為に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(100 崔宰英) 統計科学の手法を用いて、数量社会分析に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(113 平石典子) 比較文学・比較文化の手法を用いて、日本と諸地域の文学や文化の比較に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(114 福住多一) ミクロ経済学・ゲーム理論の手法を用いて、日本と諸地域の経済の比較に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(115 BUSHNELL CADE CONLAN) 言語人類学の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(124 宮坂渉) 法制史の手法を用いて、日本と諸地域の比較法制に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(130 山本英弘) 政治社会学の手法を用いて、日本政治と市民社会に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(147 高橋秀直) 経済史・金融論の手法を用いて、日本の経済発展と金融に関する課題の研究指導を行う。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
（人文社会ビジネス科学学術院 人文社会科学研究群 博士後期課程）			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学 院 共 通 科 目	応用倫理	<p>Situational ethical principles such as research ethics for research laboratories and medical ethics for hospitals do not always correspond well each other in giving us a clear direction in pursuing the best quality of life in modern society. Rather than taking individual principles for granted, this course attempts to understand how we may disentangle somewhat conflicting ethical principles. In so doing, this course provides unique perspectives to ethical principles by incorporating cultural and historical contexts of human rights and environmental concerns.</p> <p>研究倫理や医療倫理など状況に特化した倫理原理は、必ずしも相互に補完する関係にないため、現代社会の中で最善の質を求めるための明確な指針とはなっていない。こうした絡まった倫理原理を解きほぐすことを試みる。</p> <p>（オムニバス方式／全8回）</p> <p>（198 松井健一／7回） Provides perspectives to ethical principles by incorporating cultural and historical contexts of human rights and environmental concerns. 文化や歴史的な文脈から人権や環境に関する問題も含め、応用倫理のための視点を醸成する。</p> <p>（226 大神明／1回） Provides perspectives of industrial doctors and considers ethics related to risks. 産業医の視点からリスクに関わる倫理的な問題を提起する。</p>	集中 オムニバス方式
	環境倫理学概論	<p>Environmental ethics helps us not only think about interpersonal relations in society but also the ones between people and the natural environment. This expansive scope helps us see our daily activities, ethical or not, within ecosystems or biotic communities. This course invites students to think about a need to establish a universally applicable ethical principle/ law for global citizens to tackle with environmental problems. To answer this question, it introduces many environmental ethical ideas related to biodiversity, bioethics, animal rights/ welfare, and household activities.</p> <p>環境倫理は、社会における対人関係だけでなく、人と自然環境の関係について考える助けとなる。こうした広い視野を持つことで、我々は生態系の一部として日々の活動が倫理的かどうかを考えることができる。この授業では、学生に対し世界市民として、環境問題を解決するため、ユニバーサルな倫理大綱や法律を構築する必要性について考えてもらう。</p> <p>（オムニバス方式／全8回）</p> <p>（198 松井健一／7回） Introduces many environmental ethical ideas related to biodiversity, bioethics, animal rights/ welfare, and household activities. 生物多様性や生命倫理、動物の権利・福祉、生活者のための環境倫理を紹介する。</p> <p>（177 渡邊和男／1回） Introduces ethical principles related to international environmental law. 国際法に関する環境倫理原理を紹介する。</p>	集中 オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	研究倫理	<p>研究活動に従事する上で踏まえるべき研究倫理の基礎を、具体的事例を交えて講義する。研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスなどを取り上げる。また、これらを理解するための前提となる、科学技術政策、研究助成のしくみ、申請や審査のしくみなどについても触れる。</p> <p>本科目は講義を主体としつつ、講義の間に演習（個別演習・グループ演習）を交互に挟む構成とする。講義においては、研究倫理と研究公正に関連する基本概念を整理すると共に、研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスに関わる問題などを取り上げる。また、これらを理解するための前提となる、学術研究活動を取りまく環境の変化や、科学研究費の申請や審査のしくみなどについても触れる。特に特定不正行為に関しては具体的事例を元にその原因や背景を解説し、受講者が研究活動を行う上で必要な対策について具体的に考える機会を与える。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（205 岡林浩嗣／9回）上記の講義を行う。演習においては、ワークシートを用いて自らの研究活動の構造を分析した上で、研究倫理上の問題点とその背景について討議する。さらに、研究不正を防止するために必要な施策について討議を行い、グループ単位での発表とその指導を行う。</p> <p>（227 大須賀壮／1回）理化学研究所における研究管理状況をふまえて、適切な実験ノートの取り方について講義を行う。また、演習の際に岡林と合同でグループ討議の指導を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 9時間 演習 6時間
	生命倫理学	<p>遺伝子治療、臓器移植、人工臓器、生殖医療、遺伝子診療、薬物やその他の治療法の治験などの現代の医療や医学研究には、インフォームドコンセント、個人の尊厳やプライバシー、脳死判定やリスクマネージメント、治療停止の選択など生命倫理にかかわる多くの問題を含んでいる。現代医療が抱える生命倫理諸問題の基礎知識、基本的考え方を習得するとともに、実例により学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式/全10回）</p> <p>（216 菅野幸子／1回）テーマとして「生命倫理とその歴史」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（201 柳久子／1回）テーマとして「予防医学における生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（191 西村健／1回）テーマとして「再生医学と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（183 川崎彰子／1回）テーマとして「生殖医療と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（158 杉山文博／1回）テーマとして「動物実験と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（228 木澤義之／1回）テーマとして「緩和医療と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（207 高橋一広／1回）テーマとして「臓器移植と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（231 宗田聡／1回）テーマとして「遺伝学と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（176 我妻ゆき子／1回）テーマとして「国際保健における生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（166 野口恵美子／1回）テーマとして「医学・医療の倫理」について取り上げ、講義を行う。</p>	オムニバス方式
	企業と技術者の倫理	<p>多くの技術者は企業に属し、その中で社会とビジネス的な関わりを持ちながら仕事を行っている。本講義では、具体的事例や現場の声を取り上げながら、企業における技術者の倫理について議論する。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（180 掛谷英紀／7回）技術の社会的役割の変遷について講義を行う。併せて、「東日本大震災と今後の防災・エネルギー」、「企業不正のグレーゾーン（Facebook、NHK受信料等）」の2つのグループ・ディスカッションを行い、21世紀の「人に役立つ技術」を考える。</p> <p>（232 西澤真理子／3回）実際の企業現場の事例を取り上げながら、「企業のリスクコミュニケーション」について講義を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 9時間 演習 6時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
情報伝達力・コミュニケーション力養成科目群	テクニカルコミュニケーション	事実やデータに基づいて行われる情報発信であるテクニカルコミュニケーションを円滑に行うための基本を、講義と演習で修得する。講義では、発信する内容を組み立てるための発想法の活用法、誰にでも一通りに伝えるための文法、レイアウトデザインの基礎理論、文字と絵の役割の違いなどをあつかう。さらに、語彙を豊富にするための演習、物事を数多くの視点から説明するための演習、専門用語に頼らずに内容の本質を伝える演習などを通して、テクニカルコミュニケーションを実践的に学ぶ。	集中 講義10時間 演習 5時間
	英語発表	This course provides an overview of basic techniques for public speaking and presentations in English. Students are then given ample opportunity to practice these techniques in front of the class. 本講義ではコミュニケーションの基礎理論、英語でのパブリック・スピーキング、プレゼンテーションの技術の修得を目標とする。また、学んだ理論・技術を応用活用する経験として、実際に聴衆を前にしたプレゼンテーションをおこなう。	集中 講義10時間 演習 5時間
	異分野コミュニケーションのためのプレゼンテーションバトル	プレゼンテーションの初歩から中級までを対象とし、異分野学生それぞれによるプレゼンテーションをベースに現代に必要なアカデミックスキルを磨くことを目的とする。参加者が異分野の学生との協働によってアイデアを出し合い、新しいコンテンツの作成に向かって協働することで、異なる領域の知識や技術を互いに理解しコミュニケーション能力を高める。演習トラック毎によって設定する目標を決め、それに従ってコンテンツを実際に作成する。時にドラマレッスンを盛り込む。	集中
	Global Communication Skills Training	Precise communication with people having diverse perspectives and personalities is the key to building relationships, and success. Through practices of communication, including effective listening, effective presentation, assertive communication, we help you learn and practice communication methods. You should be prepared to have open and active class participation and require a certain level of English skill. 対面でのコミュニケーションのスタイルには、人それぞれに個性があります。どのようなコミュニケーションスタイルを持つ相手とも正確に情報を伝達しあうことが、信頼を得て成功するための鍵になります。この授業では、情報を効率よく受け取ったり、正確に話すための練習を通して、コミュニケーション力を高めます。受講するためには、ある程度の英語力が必要です。また、受身ではなく発言や議論を通して積極的に授業に参加することが求められます。	集中 講義 7時間 演習 8時間
	サイエンスコミュニケーション概論	サイエンスコミュニケーション (SC) とは「難しく敬遠されがちなサイエンスをわかりやすく説明することである」という理解はきわめて一面的である。SCの対象は科学技術分野の専門家、非専門家を問わないため、「サイエンスの専門家と非専門家との対話促進」がSCであるとも言いきれない。広い意味でのSCとは、個人々人ひいては社会全体が、サイエンスを活用することで豊かな生活を送るための知恵、関心、意欲、意見、理解、楽しみを身につけ、サイエンスリテラシーを高め合うことに寄与するコミュニケーションである。そのために必要なこと、理念、スキルなどについて概観する。	集中
	サイエンスコミュニケーション特論	現代社会は科学技術の恩恵なくして成り立たない。科学技術はわれわれの生活に深く根ざしており、よりよい社会を築いていくためには一人でも多くの人が科学技術との付き合い方に関心を向けることで、社会全体として科学技術をうまく活用していく必要がある。そのためには様々な立場から科学技術についてのコミュニケーションをし合うことで科学技術を身近な文化として定着させ、社会全体の意識を高める必要がある。このような問題意識から登場したのがサイエンスコミュニケーションという理念である。この理念が登場した背景を知ると同時に、方法論としてはどのようなものがあるのかを議論しつつ、コミュニケーションスキルの向上も目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	サイエンスコミュニケーター養成実践講座	<p>主として、自分の専門の科学を一般の人々にわかりやすく伝えられるコミュニケーション能力の養成を中心に、国立科学博物館の資源や環境を活用した理論と実践を組み合わせた対話型学習を進める。</p> <p>理論面では、サイエンスコミュニケーションとは？サイエンスとは？といった考え方をはじめ、メディア・研究機関・大学・博物館など、各機関・領域で活躍しているサイエンスコミュニケーターの実践を踏まえた理論を学習する。また、様々な人々に科学を伝える際に効果的なプレゼンテーションの方法について学修する。</p> <p>実践面では、ライティングに関する課題を通じた文章の書き方や表現方法の学習、国立科学博物館の展示室における来館者との双方向的な対話を目指し、自らの専門分野についてのトークを作成・改善・実施・考察する。</p>	集中
	人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える	<p>哲学、歴史、文学、言語学、社会科学、地域研究などの人文社会分野における学術研究の成果をどのように社会に伝え、人々の知的好奇心を呼び起こし、当該学問分野の社会的認知度を如何に向上させるか、その考え方、方法、それらを担う人材に求められる必要なスキルなどについて学ぶ機会を提供する。人文社会分野における「学問と社会を結ぶ」ためのスキルを磨くための内容を含む。加えて、現在発展が著しい人文社会分野における最先端機器を駆使して行う研究は多くの学術的成果を生み出しており、その魅力は計り知れない。このような最先端研究に基づく解析法は自然科学分野の最先端技術を活用したものでもあり、ここに人文社会科学と自然科学の接点があり、分野融合の意義、有用性、重要性を含めた科学の現状を多くの大学院生に紹介するための科目とする意図も企画者側にある。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(4 池田潤／4回) 「文芸・言語学、世界と地域の文化・歴史、世界と地域の社会科学に関する人文社会科学知見に関して、自然科学と最先端科学技術を駆使する成果がどのように活かされているかについて、その相関を俯瞰しつつ解説し、人文社会科学と自然科学・工学的技術の融合の重要性」について講義を行うことで人文社会科学における自然科学基礎的・応用的知的基盤の重要性について学習する。</p> <p>(147 大澤 良／4回) 「生物多様性、生物の地理的拡散、有用植物や作物の地理的分布などに関する自然科学的研究成果をベースに、それらが人間及び人間の生活とどのようなかかわりを有してきたかなどの人文社会科学知見を加えて分析し、自然科学と人文社会科学の要素がどのように融合・連関をなしているか、その相関を俯瞰しつつ解説し、自然科学と人文社会科学の融合の重要性」について講義を行うことで自然科学の視点から自然科学の基礎的・応用的知的基盤がいかに人文社会科学に重要な役割を果たしているかについて学習する。</p> <p>(230 白岩善博／2回) 「自然科学研究の成果を基盤に、最先端研究成果を如何に社会に広報、拡散、応用するかなどに関して、サイエンスコミュニケーションやトランスフェラブルスキルを駆使して、自然科学的研究成果が人間及び人間の生活とどのようなかかわりを有してきたかを解説し、自然科学の科学的・技術的成果をどのように社会に導入するかの方法論」について講義を行い、さらにそのスキルアップをどう図るかを学ばせることで、大学院修了後のキャリアパスにそれをどう生かすかに関して学習する。</p>	集中 オムニバス方式
国際性養成科目群	21世紀的中国 ―現代中国的多相―	<p>巨大な隣国である中国は、1976年の文化大革命の終結以降、経済の改革開放政策の成果により、大きな変貌をとげた。21世紀初頭の今、ますます存在感を増した中華人民共和国の現在の諸相を、学生にとって身近な目線で講じる。中国と日本の関わりを実際の動きの中で捉えていくことを目論む。</p> <p>現在中国との関わりの深い筑波大学OBを講師とし、現代中国の文化、社会、経済、環境、日中翻訳など、様々な観点から、現場に立つ講師ならではの姿を描き出す。既成の学問の枠で説明されたものを理解して満足するのではなく、実社会の動きの中で課題を捉え、みずから解決していくために何が必要か、講義中から受講者自身で考えだすことを望みたい。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際研究プロジェクト	学生自らが海外の大学・研究機関における専門および関連分野の研究計画を企画し実現することで、自身の能力涵養を図る科目である。海外における受け入れ先の開拓、海外渡航の手続き、海外での研究・実習、受入先でのコミュニケーション、海外での生活等を経験することで、英語によるコミュニケーション能力・国際性・研究マネジメント能力の向上を実現する。学習成果をより効果的なものとするため、海外において研究活動を行うだけでなく、実施計画書を基にした事前指導及び帰国後の成果報告書の作成とフィードバックを受けることを必要とする。	
	国際インターンシップ	学生自らが国際的な職業体験（海外の大学におけるPFF体験を含む）や海外の大学・研究機関で主催される各種トレーニングコースを開拓し参加することで、自身の能力涵養を図る科目である。海外における受入先との調整、海外渡航の手続き、海外での職業体験、受入先でのコミュニケーション、海外生活経験を通して、コミュニケーション能力、国際性、キャリアマネジメント能力の向上を実現する。学習成果をより効果的なものとするため、海外において研究活動を行うだけでなく、実施計画書を基にした事前指導及び帰国後の成果報告書の作成とフィードバックを受けることを必要とする。	
	地球規模課題と国際社会:食料問題	国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。 当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」の中でGoal 2 & 12に関連した、国際社会が直面する「食料問題」について取り扱う。世界の人口動態と食料生産・消費動向、植物育種新技術、食料生産新技術、植物防除新技術などについての講義を通して国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。	集中
	地球規模課題と国際社会:海洋環境変動と生命	国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。 当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 13 & 14に関連した、国際社会が直面する「海洋環境変動と生命」について取り扱う。CO2濃度上昇に関わる地球規模環境課題、海洋酸性化、地球温暖化による生物影響、北極・南極の海氷融解などの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。 (オムニバス方式/全10回) (145 稲葉一男/5回) 「海洋生物、特に海洋動物に関する形態学、生理学、生化学、分子生物学的手法を駆使した最先端の科学的知見を基盤に、地球規模かつローカルな海洋環境の変化を海洋動物がどのような仕組みで感知するか、さらにその環境変化によってどのような生物学的変化を引き起こすか」について講義を行うことで地球規模の海洋環境変動が生命に与える影響について学習する。 (230 白岩善博/5回) 「海洋生物、特に海洋植物・藻類の光合成生物や光合成機能を有する微生物に関する形態学、生理学、生化学、分子生物学的手法を駆使した最先端の科学的知見を基盤に、地球規模かつローカルな海洋環境の変化を海洋動物がどのような仕組みで感知するか、さらにその環境変化によってどのような生物学的変化を引き起こすか」について講義を行うことで地球規模の海洋環境変動が生命に与える影響について学習する。	集中 オムニバス方式
	地球規模課題と国際社会:社会脳	国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。 当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」の中で、主として、Goal 3 & 4に関連するが、社会性や共生という観点から現代に生きる人類に共通する課題とそれに対する取り組みの方向性を提起する先端的な講義を展開する。 国際社会が直面する「社会性の変容」に起因する様々な問題を「社会脳」として新たな分野を創成しそれを取り扱う。 個別課題として、社会性の発達と環境、社会認知の脳内基盤、高齢者の認知機能などについて講義する。	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地球規模課題と国際社会：感染症・保健医療問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 3に関連した、国際社会が直面する「感染症・保健医療問題」について取り扱う。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(218 福重瑞徳/全5回) 「持続可能な開発目標（SDGs）」、「感染症」、「プロジェクト・サイクル・マネージメント（PCM）手法」をテーマに講義を行い、また、学生はPCMを用いた国際保健に関するプロジェクト形成・発表を行う。</p> <p>(176 我妻ゆき子/全3回) 「国際保健とその歴史」、「人口・リプロダクティブヘルス・栄養」、「慢性疾患とリスク」をテーマに講義を行う。</p> <p>(154 近藤正英/全2回) 「途上国における保健医療問題と優先付け」、「途上国における保健医療制度・医療経済」をテーマに講義を行う。</p>	集中 オムニバス方式
	地球規模課題と国際社会：社会問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」を地域自立と振興の観点から全て網羅する課題である「社会問題」について取り扱う。</p> <p>発展と持続性に関し、天然資源、環境保全、及び経済発展を軸として、国家としてのガバナンス、国家間の懸案事項、ボーダーレス社会での“歪み”、非政府組織や先住民族の存在によるグラスルートでの課題対応をグローバルに概論する。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会：環境汚染と健康影響	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 3に関連した、国際社会が直面する「環境汚染と健康影響」について取り扱う。</p> <p>国際的汚染問題の概要、ナノ粒子、外因性内分泌攪乱化学物質、環境中親電子物質、エクスポソーム、カドミウム、ヒ素、有機ハロゲン化合物、メチル水銀、トリブチルスズなどの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会：環境・エネルギー	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 7, 9 & 13に関連した、国際社会が直面する「環境・エネルギー」について取り扱う。</p> <p>太陽電池、燃料電池、人工光合成、ナノエレクトロニクスによる省エネルギー、パワーエレクトロニクスによる電力制御、核融合発電などの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
キャリア ア マ ネ ジ メ ン ト 科 目 群	JAPICアドバンストディスカッションコースI-流動化する世界とこれからの日本	<p>最新の社会問題、国際問題、ビジネス上の課題を対象に議論を行うため、産業界のトップリーダーを講師として招聘する。</p> <p>世界が益々流動化する中で日本の現状と課題を再確認すると共に、今後の変化に対応する為になにが必要か検証・議論することで、社会人基礎力として重要なさまざまな能力を身に付けることを目的とする。</p> <p>事前学習を通じて情報収集力を、授業時間中の議論を通じてディベート力を、レポート作成を通じてまとめる能力を身につける。</p>	集中
	JAPICアドバンストディスカッションコースIII-テクノロジーとグローバルで拓く未来	<p>最新の社会問題、国際問題、ビジネス上の課題を対象に議論を行うため、産業界のトップリーダーを講師として招聘する。</p> <p>グローバルとテクノロジーについて、実ビジネスの観点から議論し学習することで、社会人基礎力として重要なさまざまな能力を身に付けることを目的とする。</p> <p>事前学習を通じて情報収集力を、授業時間中の議論を通じてディベート力を、レポート作成を通じてまとめる能力を身につける。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ダイバーシティとSOGI/LGBT+	<p>産業化、技術革新、国際化による変化にともない、人々の生活や働き方、人間関係にもさまざまな変化が生まれています。本科目では、さまざまな属性や特徴を有する個人がどのように「仕事と生活の両立（ワークライフバランス）」を図りながら人生を生きるのか、なぜ男女共同参画やダイバーシティ（多様性）を推進する必要があるのか、その方法と意味を理解することを目指します。特に近年のダイバーシティ推進の重要なトピックである「SOGI」「LGBT+」に代表されるセクシュアル・マイノリティについて集中的に授業を行います。</p> <p>くわえて、授業ではダイバーシティ推進に欠かせない実践力（グループワークにより聴く力、伝える力、情報収集力、マネジメント力等）を身につけることも目標とします。</p>	集中 講義7.5時間 演習7.5時間
	ワークライフミックス – モーハウスに学ぶパラダイムシフト	<p>仕事と私生活を調和した新たなビジネススタイルである、「ワークライフミックス」を講義の基本テーマとして取り上げることで、新たな価値創造の基礎となるアントレプレナーシップや、多角的思考からワークライフを捉え、受講者のキャリアマネジメント能力の向上を図る。</p> <p>また、「ワークライフミックス」を実践している企業である「モーハウス」を事例として取り上げることで、ワークライフに関わる物の見方と考え方を習得し、受講生が自分の仕事や今後のライフプランについて、多様な角度から思考できるようにする。</p>	集中
	魅力ある理科教員になるための生物・地学実験	<p>気象、地質、岩石、昆虫、植物、菌、微生物、内燃機関といった、「生物」と「地学」を合体した内容をフィールドワーク重視の実習形式で実施することにより、受講者が将来理科教員になった場合に役立つ実践的な実習・実験の高度専門知識を身につけることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全6回)</p> <p>(178 上松佐知子/1回) フィールドでの化石探索を通し、地球の歴史に関する実習を行う。 (162 田島淳史/1回) 「食べものを作る動物たち」をテーマに実習を行う。 (192 野口良造/1回) 「内燃機関の原理と組み立て」をテーマに実習を行う。 (150 戒能洋一・187 澤村京一・190 中山剛・209 八畑謙介/1回) (共同) 「生物に関するフィールドワーク」をテーマに実習を行う。 (172 久田健一郎/1回) 「地質調査入門」をテーマに実習を行う。 (174 山岡裕一/1回) 「微生物（菌類）に関するフィールドワーク」をテーマに実習を行う。</p>	集中 オムニバス方式 共同（一部）
	アクセシビリティリーダー特論	<p>障害のある人々が包摂された社会を実現するために、身体障害や発達障害といった様々な障害の理解や支援に関する幅広い講義を行う。また、障害のある人への災害時支援や、障害のある人に役立つ支援技術、諸外国と日本における支援の比較や展開といったマクロな視点や今日的な話題を通して、多様な背景をもつ人々が共生することのできる社会とはどのような社会なのかについて考える力を身につけることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(160 竹田一則/1回) 「障害児・者支援の理念と背景」について講義を行うことで、障害者支援の現状や歴史的背景、今日的課題について学習する。 (217 野口代/2回) 「障害児・者の現状および支援の流れ、支援体制」について講義を行うことで、支援領域（就学、生活、就職ほか）ごとの支援方法や支援体制について学ぶ。 (184 小林秀之/3回) 「視覚障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、視覚障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (171 原島恒夫/4回) 「聴覚障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、聴覚障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (208 名川勝/5回) 「運動・内部障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、運動・内部障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (179 岡崎慎治/6回) 「発達障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、発達障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。</p>	オムニバス方式 共同（一部）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(217 野口代／7回) 「障害のある人への災害時支援」について講義を行うことで、障害種別に災害時に留意すべき事項について学習する。</p> <p>(186 佐々木銀河／8回) 「障害のある人に役立つ支援技術」について講義を行うことで、最新の支援機器や支援技術について学習する。</p> <p>(186 佐々木銀河／9回) 「諸外国と日本における支援の比較と展開」について講義を行うことで、国際的な動向を踏まえた障害者のある人へのアクセシビリティについて学習する。</p> <p>(160 竹田一則・169 野呂文行／10回) (共同) 講義のまとめと討論を行うことで、これまでに学んだ障害の特性や、障害のある人のアクセシビリティを支援するための知識を表現できるようにする。</p>	
	脳の多様性とセルフマネジメント	<p>本学大学院生が産業界や地域社会で自身の能力を十分に発揮できるよう、自己および他者における脳の多様性を適切に理解することを通して、自身の特性に合ったセルフマネジメントスキルを身に付けることを目標とする。</p> <p>講義としては、発達障害から定型発達との連続体として捉えられる「脳の多様性(ニューロダイバーシティ)」について概説する。加えて学業や日常生活において有効なセルフマネジメントテクニック・ツールを紹介する。</p> <p>演習としては、自身にはどのような特性があるかを客観視する個人ワークを行う。また自身の特性に合ったマネジメント方法を身に付ける。さらに社会で活躍する発達障害当事者をゲストスピーカーとして招き、自己および他者における脳の多様性を深く理解するための事例を提供する。</p>	集中 講義 9時間 演習 6時間
知的基盤形成科目群	生物多様性と地球環境	<p>本科目では、筑波大学と科学博物館筑波植物園のコラボレーションにより、生物多様性と地球環境についての理解を促進するための講義と展示・フィールドを利用した現場型の生物多様性・地球環境教育についてのフィールド実習を行う。</p> <p>有用植物の進化を実物で見ながら、植物の進化とは異なる人間の手が加わった栽培化シンドロームを実感してもらうことで、生物多様性の実体と生物遺伝資源について、自然科学的・社会科学的にとらえられるようにすることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全4回)</p> <p>(147 大澤 良／1回) 「栽培植物の起源」についての講義と植物園見学を行うことで、多様性研究の意味について学習する。</p> <p>(225 海老原淳／1回) 「生物多様性ホットスポットとしての日本列島」をテーマとする講義と絶滅危惧であるシダ植物園見学・管理実習を行う。</p> <p>(229 國府方吾郎／1回) 「絶滅危惧植物と生物多様性」をテーマに植物園における社会発信と保全の見学、植物登録管理の実習を行う。</p> <p>(170 林久喜／1回) 「作物の多様性」をテーマに講義と実習を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 7.5時間 実習 15時間
	内部共生と生物進化	<p>非常に多くの生物が、恒常的もしくは半恒常的に他の生物(ほとんどの場合は微生物)を体内にすまわせている。</p> <p>このような「内部共生」という現象から、しばしば新しい生物機能が創出される。共生微生物と宿主生物がほとんど一体化して、あたかも一つの生物のような複合体を構築する場合も少なくない。</p> <p>共生関係からどのような新しい生物機能や現象があらわれるのか? 共生することにより、いかにして異なる生物のゲノムや機能が統合されて一つの生命システムを構築するまでに至るのか? 共に生きることの意義と代償はどのようなものなのか? 個と個、自己と非自己が融け合うときになにが起こるのか? 共生と生物進化の関わりについて、その多様性、相互作用の本質、生物学的意義、進化過程など、基本的な概念から最新の知見にいたるまでを概観することで、そのおもしろさと重要性についての認識を共有することをめざす。</p>	集中
	海洋生物の世界と海洋環境講座	<p>海は地球上の生命の源であり、生物の多様性を生みだしてきた。地球と我々人間を理解するためには、海洋生物に関する知識が不可欠である。</p> <p>本科目では魚類をはじめ、さまざまな海洋生物の体制、生殖、寄生種に関する観察や実験、講義を行うことにより、海洋生物の多様性および海洋環境についての理解を深めることを目的とする。</p> <p>下田臨海実験センターにて実施することで、研究調査船による採集や磯採集など野外でのより実践的な実習も行う。</p>	集中 講義 4.5時間 実習 21時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	科学的発見と創造性	科学的発見がおこなわれる現場の歴史的状況を再現し、行為者の創造性がどのような形で発揮されたのか、「ハンソンの理論的負荷性」、「ニュートンの林檎と万有引力の理論」、「ゼメルヴェイスによる産褥熱の予防」、「ジョン・ドルトンと化学的原子論」等様々な事例研究を通じて解明する。 科学的発見が単なる偶然でも、幸運でもなく、周到に企図された創造性によるものであることを理解することを目的とする。	集中
	自然災害にどう向き合うか	国土交通省で活躍する有識者を講師として招聘し、災害列島とも言われる我が国の現状及び温暖化等により今後益々増加する災害リスクに対して、社会としてどのように対応するべきかを考える。 「総合的な津波対策」、「大規模土砂災害への対応」、「地震対策」等のテーマを通じて、防災施設の整備の状況、リスク等を踏まえた今後の社会資本整備のあり方について考え方が整理されること、個人や地域の核としての防災対応力を身につけることを目的とする。	
	「考える」動物としての人間-東西哲学からの考察	「考える」のは人間の特性である。人間は言葉を使って知性によって「考える」。だが「考える」とはどのような営為なのか、東西の哲学がどのように「考え」てきたのかを参照しながら「考える」ことについて「考える」。 (オムニバス方式/全10回) (55 吉水千鶴子/2回) 仏教の思想を参照して「考える」ことについて考える。 (3 井川義次/2回) 中国の思想を参照して「考える」ことについて考える。 (127 千葉建/2回) ドイツ哲学思想を参照して「考える」ことについて考える。 (92 津崎良典/2回) フランス哲学思想を参照して「考える」ことについて考える。 (79 志田泰盛/2回) インド思想を紹介しながら「考える」ことについて考える。	集中 オムニバス方式
	21世紀と宗教	21世紀の現代社会の情勢は宗教と深く関わっており、複雑な国際情勢、テロなどの暴力と対峙せねばならない現代社会において、それを解く鍵ともなる宗教について正しい知識と理解を得ることは重要である。 当科目では、21世紀の現代社会の情勢と宗教とのかかわりについて、いくつかの事例を取り上げながら考察する。 宗教による対立や政治への介入は紀元前の昔から続いてきた人類の課題とも言え、その歴史や背景を正しく知り、現在のグローバルな社会において正しく対応するための知識と理解を身につけることを目的とする。 (オムニバス方式/全10回) (18 木村武史/5回) 「先住民の宗教の関り」について講義を行うことで現代グローバル社会における先住民宗教の意義について学習する。 (55 吉水千鶴子/5回) 「アジアの民族と宗教の関り」について講義を行うことで現代グローバル社会における伝統宗教の意義について学習する。	集中 オムニバス方式
身心基盤形成科目群	塑造実習	当科目は豊かな心、逞しい精神、豊かな人間力を涵養する大学院生のための塑造の実践講座である。作品鑑賞と、人物モデルを使用した粘土による頭像制作を行う。「デッサン」、「心棒組み」、「大掴みな土付け」、「量塊の構成」、「面と量塊」、「量感豊かな表現、比例・均衡・動勢について」といった制作に関する内容の学習を通して、立体的な形態把握と、これを表現する能力を養うことを目的とする。	隔年
	コミュニケーションアート&デザインA	授業の到達目標及びテーマ：現代アート全般、ビジュアルデザイン全般、陶磁、木工、構成学について概説し各諸分野の位置付けを明らかにする。 (オムニバス方式/全10回) (212 上浦佑太/1回) (1) ガイダンス (151 國安孝昌/2回) (2) 総合造形の研究、(3) 総合造形の教育 (185 齋藤敏寿/1回) (4) 現代の実材主義的な造形	隔年 オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(163 田中佐代子/1回) (5) ビジュアル・コミュニケーション・デザイン (194 原忠信/1回) (6) ブランディングデザイン (200 宮原克人/1回) (7) 木工・漆芸 (211 小野裕子/1回) (8) 特殊造形、環境とアート (219 Gary Roderick MCLEOD/1回) (9) 写真 (212 上浦佑太/1回) (10) 構成学	
	コミュニケーションアート&デザインB	授業の到達目標及びテーマ：環境デザイン全般、ガラス工芸、メディアアート、絵本や漫画について概説し各諸分野の位置付けを明らかにする。 (オムニバス方式/全10回) (222 山本美希) (1) ガイダンス (167 野中勝利/1回) (2) 市民参加によるまちづくり (173 藤田直子/1回) (3) ランドスケープデザイン (204 渡和由/2回) (4) サイトプランニング、(5) 住環境の総合的デザイン (193 橋本剛/2回) (6) 快適な環境、(7) 伝統民家のデザイン (215 鄭然ギョン/1回) (8) ガラス (221 村上史明/1回) (9) メディアアート、テクノロジーと芸術 (222 山本美希/1回) (10) 絵本、マンガ、イラストレーション	隔年 オムニバス方式
	日本画実習	日本の芸術を理解し、生涯において楽しむことのできる豊かな人間性を涵養することを目的とする授業。日本画用の筆・和紙・絵具を用いた作品制作を通して、長い歴史に育まれた日本画への理解を深め、豊かなところを養う。必要に応じて、日本画の鑑賞について、材料や技法についての講義も織り交ぜる。グローバル化の中においては、世界を意識すると同時に日本の芸術文化に改めて注目し理解することが必要で、当科目はそのきっかけとなる。	隔年
	ヨーガコース	当科目は「ヨーガ行法の体系、歴史、思想（ヨーガの日本文化への貢献）」、「ヨーガの効果」、「社会的意義（環境思想への影響、自然科学思想への貢献）」といったヨーガ思想と技法の講義、「予備体操」、「アーサナ」、「呼吸法」、「冥想」の実習を行うことで、インドが生み出したヨーガを通じて、深く自己を掘り下げる東洋の実践的な身心思想を学び実践する。 健康でかつ不安や絶望に対処できる柔軟な身心と強い意志をもって、よりよい人生を築ける自己を養うことを目的とする。	集中 講義10時間 実習20時間
	絵画実習A	全人的な教養教育として、知識のみならず、自分自身の「手仕事」として「絵を描く」という体験は、作る楽しさや喜びを感じつつ、まさに芸術的感性を磨くことが可能である。 当科目は、芸術を楽しむ豊かな人間性を涵養するため、特に油絵具を使用し、制作・実習をおこなうものである。 様々なモチーフの写生などを通して、絵画表現に対する理解を深め、造形感覚を養うことも目的とする。	隔年
	現代アート入門	なぜこれが芸術なのか、現代アートは一見、普通の生活者に無縁のように感じられることが多い。しかし、難しい現代アートも勉強をすれば、誰にでもわかるものなのだ。そうした基礎的芸術教養を身に付ければ、「無用の用」である芸術は、一人ひとりの人生を豊かにしてくれるものになる。 この授業では、現代アートについて、作家としての体験的視点から、多くのヴィジュアル資料を見せながら、現代芸術の考え方（コンセプト）や大きな流れ（芸術運動史や主要な芸術家や作品）を知り芸術への理解を深めることを目的とする。対象は19世紀末から21世紀の現在までとする。	隔年
	大学院体育Ia	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレー、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	大学院体育Ib	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Ic	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIa	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIb	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIc	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIa	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	大学院体育IVa	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IVb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IVc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Va	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Vb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Vc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
人文学 関連科目	専門基礎科目	英語文献講読	<p>学術的英語能力を養成するために、英語文献の読解方法、英語による調査方法の方法などの演習を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(121 吉原ゆかり/5回) 英語による研究成果の現状について知るための、文献調査。それぞれの専門分野の、英語による国際学会で発表できる能力獲得を目指し、国際学会公募要領・プロポーザル(応募原稿)を読み、関連した調査を英語で行う。授業は日本語と英語を用いる。</p> <p>(107 Heselhaus Geva Herrad/5回) Through reading and analyzing exemplary texts, students will develop an understanding of the rhetoric and argumentative structures involved in international English-language paper publications and presentations.</p> <p>代表的なテキストを読んで分析することを通して、国際的な英語論文とプレゼンテーションのレトリックと議論の構造との理解を深める。</p>	オムニバス方式
		哲学・思想博士論文執筆演習IA	哲学研究、倫理学研究、宗教研究の諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、テーマ設定等、主として最初期段階の研究指導を行い、それぞれの論文執筆を指導を行う。	
		哲学・思想博士論文執筆演習IB	哲学研究、倫理学研究、宗教研究の諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、研究資料の選択等、主として初期段階の研究指導を行い、それぞれの論文執筆を指導を行う。	
		哲学・思想博士論文執筆演習IIA	哲学研究、倫理学研究、宗教研究の諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、資料蒐集等、主として中期段階前半の研究指導を行い、それぞれの論文執筆を指導を行う。	
		哲学・思想博士論文執筆演習IIB	哲学研究、倫理学研究、宗教研究の諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、資料読解・分析等、主として中期段階後半の研究指導を行い、それぞれの論文執筆を指導を行う。	
		哲学・思想博士論文執筆演習IIIA	哲学研究、倫理学研究、宗教研究の諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、論文の構成等、主として後期段階の研究指導を行い、それぞれの論文執筆を指導を行う。	
		哲学・思想博士論文執筆演習IIIB	哲学研究、倫理学研究、宗教研究の諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、総合的に完成段階の研究指導を行い、それぞれの論文執筆を指導を行う。	
		(研究指導：哲学・思想)	<p>(3 井川義次) 文献学の実証研究の手法を用いて、儒教思想の発展・展開の解明に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(14 小野基) インド古典文献学および仏教文献学の方法論を用いて、インド古典および仏教文献の文献学的、思想史的研究に関する研究指導を行う。</p> <p>(18 木村武史) 宗教学・宗教史学・宗教社会学・宗教人類学の手法を用いて、宗教現象の解釈の課題の研究指導を行う。</p> <p>(37 檜垣良成) 主に西洋哲学史を踏まえた概念史的手法を用いて、西洋哲学の課題の研究指導を行う。</p> <p>(44 保呂篤彦) 近代以降のキリスト教思想とキリスト教を中心にした宗教哲学的研究、キリスト教と仏教の邂逅に基づく日本の哲学や神学、現代の宗教多元主義をめぐる諸議論など宗教哲学的問題を中心に研究指導と論文執筆指導を行う</p> <p>(55 吉水千鶴子) 文献学的手法を用いてインド・チベット仏教思想の課題について研究指導を行う。</p> <p>(57 五十嵐沙千子) 哲学的ディスカッションおよび哲学カフェの手法を用いて、現代倫理学について研究指導を行う。</p> <p>(79 志田泰盛) 宗教学と古典文献学的手法を用いて、宗教哲学の課題の研究指導を行う。</p> <p>(92 津崎良典) 文献学的手法を用いて、(フランス)近世哲学史に関する研究指導を行う。</p> <p>(101 橋本康二) 分析哲学の手法を用いて、哲学の課題の研究指導を行う。</p> <p>(127 千葉建) 文献学的概念史およびメタ倫理学的方法を用いて、西洋近現代の倫理思想について研究指導を行う。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
歴史・ 人類学	プレゼンテーション演習	毎回、受講者である各大学院生が、修士論文等、自分の専門分野で行ってきた研究について、専門の異なる同僚大学院生、教員を前にしてプレゼンテーションを行い、その専門的な内容を可能な限り理解させるとともに、その意義を理解してもらえるように努める。プレゼンテーションの後は、受講者および教員の全員で、主としてプレゼンテーションの手法について、問題点を指摘し合い、改善の方途を助言し合うことにより、プレゼンテーション能力の向上に努める。	
	日本史研究演習IA	課程博士論文作成のための1年次対応の演習である。修士論文を基礎として、より高次の実証性と理論性の獲得を図る。日本史学研究を行うにあたり、高度な実証性を身につけるとともに、新たな研究視角の獲得を目指し、これらの錬成を通じて基礎的な研究能力の向上を図る。受講者は、学期を通じて順次、自己の研究の方向性について盛り込んだ研究報告を行い、討論を行う。	
	日本史研究演習IB	課程博士論文作成のための1年次対応の演習である。博士論文の構想を広げるとともに、研究史上への位置づけをいっそう明確化し、博士論文の基礎となるべき学術論文作成を図る。日本史学研究の方法論を深化させ、自己の研究の多元的な展開を図る。これらを通じて、博士論文の作成に必要な能力を涵養していく。受講者は、学期を通じて順次、学術論文作成のための基礎報告を行ない、討論を行う。	
	日本史研究演習IIA	課程博士論文作成のための2年次対応の演習である。学術雑誌投稿用の論文作成の上に、より高次に理論的に整合する課題設定を行い、日本史学研究のさらなる高度化を図る。受講者自らが、研究の基礎とする方法論と研究視角を再考し、研究の質全体の向上を目指し、博士論文の作成計画を前進させていく。受講者は、学期を通じて順次、新たな方法論と研究視角を盛り込んだ報告を行い、討論を行う。	
	日本史研究演習IIB	課程博士論文作成のための2年次対応の演習である。博士論文作成のための基礎となるべき課題を、自らの全体構想のなかに位置づけた学術論文の作成を図る。明解かつ丁寧な実証のうえに、いっそうの理論化を図った学術論文を作成しつつ、新たな知見と方法論による博士論文作成計画を具体化させていく。受講者は、学期を通じて順次、学術論文作成の構想を報告し、討論を行う。	
	日本史研究演習IIIA	課程博士論文作成のための3年次対応の演習である。博士論文の完成に向け、実証内容の深化のうえに、研究上新たな問題視角と方法、知見を備えた博士論文の全体概要を提示する。日本史学研究の深化を図り、博士論文の全体構想を明確化し、研究の基盤となるべき実証性を確認しつつ、研究史上に明解に位置づけていく。受講者は、学期を通じて順次、報告を行なう。その後の討論に基づき、博士論文の完成を図る。	
	日本史研究演習IIIB	課程博士論文作成のための3年次対応の演習である。自らの日本史学研究の基軸となる研究の全体構想をふまえ、実証内容の一層の深化のみならず、学術論文としての理論性を高め、研究上新たな地平を切り開きうるものとしての博士論文の質的な充実をよりいっそう図る。受講者は、学期を通じて順次、論文完成度の向上を目指し、報告を行う。その後の討論に基づき、博士論文を完成させていく。	
	東洋史研究演習IA	課程博士論文作成のための1年次生を対象とする春学期の研究演習。関連する隣接諸科学の知識の習得、新たな史料の発掘とその利用について指導する。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて研究を進め、本演習において1回ないし複数回の研究報告を行い、東洋史学領域全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	東洋史研究演習IB	課程博士論文作成のための1年次生を対象とする秋学期の研究演習。研究テーマに関する先行研究の整理、基本的史料の利用方法等について、基礎的演習を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて研究を進め、本演習において1回ないし複数回の研究報告を行い、東洋史学領域全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	東洋史研究演習IIA	課程博士論文作成のための2年次生を対象とする春学期の研究演習。博士論文の内容構成、史料の利用法、論文の全体的な構想の修正と補強に関して、具体的な指導を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて研究を進め、本演習において1回ないし複数回の研究報告を行い、東洋史学領域全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	東洋史研究演習IIB	課程博士論文作成のための2年次生を対象とする秋学期の研究演習。博士論文の内容構成、史料の利用法、論文の全体的な構想の修正と補強に関して、より実践的な指導を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて研究を進め、本演習において1回ないし複数回の研究報告（博士論文構想発表を含む）を行い、東洋史学領域全教員から博士論文の計画について指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	東洋史研究演習IIIA	課程博士論文作成のための3年次生を対象とする春学期の研究演習。博士論文の完成にむけて、具体的な指導を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて博士論文の執筆を進め、本演習において1回ないし複数回の研究報告（博士論文中間発表を含む）を行い、東洋史学領域全教員から博士論文の完成を見据えて指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	東洋史研究演習IIIB	課程博士論文作成のための3年次生を対象とする秋学期の研究演習。博士論文の進捗状況に応じて、より実践的な指導を行う。履修者はあらかじめ指導教員の指導・助言を受けて、自身の関心・方法に基づいて博士論文の執筆を進め、本演習においてその進捗状況を報告し、東洋史学領域全教員から博士論文を完成させるための指導・助言を受けるとともに、その他の履修者とも議論を行う。	
	西洋史研究演習IA	本授業では西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表と、それに関するディスカッションでもって進められる。その際、博士論文に向けての研究の事前準備を主たる目的としつつ、研究テーマの設定から使用する一次史料の調査を行う。	
	西洋史研究演習IB	本授業では西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表と、それに関するディスカッションでもって進められる。その際、博士論文に向けての研究の事前準備を主たる目的としつつ、設定したテーマに沿って先行研究の渉猟を進める。	
	西洋史研究演習IIA	本授業では西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表と、それに関するディスカッションでもって進められる。その際、博士論文に向けての研究の事前準備を主たる目的としつつ、学術論文として公表可能な研究成果を挙げるための準備作業の場として位置づけられる。	
	西洋史研究演習IIB	本授業では西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表と、それに関するディスカッションでもって進められる。その際、博士論文に向けての研究の事前準備を主たる目的としつつ、その全体的な構成を組み立てる作業を行う。	
	西洋史研究演習IIIA	本授業は西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表と、それに関するディスカッションでもって進められる。その際、博士論文に向けての研究の事前準備を主たる目的としつつ、各章の概要を研究発表として行う。	
	西洋史研究演習IIIB	本授業は西洋史学領域全教員の出席のもと、受講生による研究発表と、それに関するディスカッションでもって進められる。その際、博士論文に向けての研究の事前準備を主たる目的としつつ、その全体の概要を研究発表として行う。	
	歴史地理学研究演習IA	1年次前期段階に応じた歴史地理学分野の博士論文作成のための研究指導を行うことを目的とする。修士論文を基礎として、理論的・実証的により高度で、独創性のある研究能力を涵養する。受講者は、博士論文作成を意識した研究報告を行い、討論を行う。	
	歴史地理学研究演習IB	1年次後期段階に応じた歴史地理学分野の博士論文作成のための研究指導を行うことを目的とする。博士論文を構想するとともに、従来の研究史との関係を明確化し、博士論文の基礎となる学術論文の作成を進める。受講者は、博士論文作成を意識した研究報告を行い、討論を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	歴史地理学研究演習IIA	2年次前期段階に応じた歴史地理学分野の博士論文作成のための研究指導を行うことを目的とする。研究の基礎となる方法論と研究視角を再考し、独創性のある研究能力の獲得を進める。受講者は、博士論文作成を意識した研究報告を行い、討論を行う。	
	歴史地理学研究演習IIB	2年次後期段階に応じた歴史地理学分野の博士論文作成のための研究指導を行うことを目的とする。博士論文の構想を具体化するとともに、従来の研究史との関係をいっそう明確化し、博士論文の基礎となる学術論文の作成をさらに進める。受講者は、博士論文作成を意識した研究報告を行い、討論を行う。	
	歴史地理学研究演習IIIA	3年次前期段階に応じた歴史地理学分野の博士論文作成のための研究指導を行うことを目的とする。博士論文の完成に向け、博士論文の全体像を提示する。博士論文を研究史上に明解に位置づけ、歴史地理学研究の深化を図る。受講者は博士論文の中間報告を行い、討論を行いつつ、博士論文の完成を図る。	
	歴史地理学研究演習IIIB	3年次後期段階に応じた歴史地理学分野の博士論文作成のための研究指導を行うことを目的とする。博士論文の全体的な論理構成を明確にし、かつ独創性のある研究を進める。受講者は、博士論文の中間報告を行い、最終的に博士論文を完成させる。	
	歴史地理学研究実習A	博士後期課程段階に応じた歴史地理学分野での高度な学術論文・学術報告を作成できる調査能力を養うことを目的とする。特定地域をフィールドに選び、野外での観察や調査の方法を実地で指導する。具体的には、調査の計画立案から、自然景観および人文景観の観察、土地利用の調査、石造物の調査、建築物の調査、公文書ならびに私蔵文書史料の調査、聞き取り調査などの方法を実地で指導する。受講生の積極的・主体的な取り組みを重視し、フィールドでの学習の過程で、自ら問題を見出すこともねらいとする。	集中
	歴史地理学研究実習B	博士後期課程段階に応じた歴史地理学における野外実習結果の分析方法とまとめ方を指導し、歴史地理学分野での高度な学術論文・学術報告を作成できる能力を養うことを目的とする。具体的には、歴史地理学研究実習Aにおける自然景観・人文景観の観察、土地利用の調査、石造物の調査、建築物の調査、公文書ならびに私蔵文書史料の調査、聞き取り調査などの結果を、どのように分析・表現して、学術論文・学術報告としてまとめることができるのかを指導する。授業の最後に受講生は調査結果のレポートを作成して提出する。	集中
	先史学・考古学研究演習IA	課程博士論文作成のための1年次対応の演習である。研究テーマの具体的な設定を目標とし、受講生には最新の研究成果について報告を求める。毎回の授業では、受講生1～2名が研究報告をおこない、その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	先史学・考古学研究演習IB	課程博士論文作成のための1年次対応の演習であり、応用的な実践研究を目的とする。研究テーマの具体的な設定を目標とし、受講生には最新の研究成果について報告を求める。毎回の授業では、受講生1～2名が応用的な研究報告をおこない、その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	先史学・考古学研究演習IIA	課程博士論文作成のための2年次対応の演習である。研究テーマにかかわる資料の分析と考察を目標とし、受講生には最新の研究成果について報告を求める。毎回の授業では、受講生1～2名が研究報告をおこない、その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	先史学・考古学研究演習IIB	課程博士論文作成のための2年次対応の演習であり、応用的な実践研究を目的とする。研究テーマにかかわる応用的な資料の分析と考察を目標とし、受講生には最新の研究成果について報告を求める。毎回の授業では、受講生1～2名が研究報告をおこない、その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	先史学・考古学研究演習IIIA	課程博士論文作成のための3年次対応の演習である。博士論文の構成を確定することを目標とし、受講生には博士論文の中心的な議論について報告を求める。毎回の授業では、受講生1～2名が研究報告をおこない、その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	先史学・考古学研究演習 IIB	課程博士論文作成のための3年次対応の演習である。博士論文の完成を目標とし、受講生には博士論文の結論について報告を求め、毎回の授業では、受講生1～2名が研究報告をおこない、その内容を受けて、先史学・考古学領域全教員と受講生による全体討議をおこなう。	
	先史学・考古学研究実習	発掘調査や測量調査などのフィールドワークに主導的な立場で参加する。調査計画の立案から調査の円滑な遂行、調査成果の取りまとめまでの一連の方法を修得することを目標とする。あわせて、フィールドワークに参加している博士前期課程の大学院生及び学群生を指導し、調査指導者として必要な実践的能力を養うことを目標とする。	集中
	民俗学・文化人類学研究IA	1年次生を対象とする中級セミナー。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、学生各自が博士論文の研究課題に沿って文献発表をする。博士論文のテーマ選定を目標として、論文執筆に関わる指導を行う。	
	民俗学・文化人類学研究IB	1年次生を対象とする中級セミナー。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、学生各自が博士論文の研究課題に即して調査地に関する情報を分析し、発表する。博士論文に向けての研究計画・調査計画に関わる指導を行う。	
	民俗学・文化人類学研究 IIA	2年次生を対象とする中級セミナーの後半。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、学生各自がフィールドワークで収集した資料を整理・分析して発表する。博士論文の完成を目標として、論文執筆に関わる指導を行う。	
	民俗学・文化人類学研究 IIB	2年次生を対象とする中級セミナーの後半。学生各自が具体的な調査データに基づいて博士論文の全体構成を検討する。さらに、民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、博士論文の研究課題に即して他の地域や社会と比較考察した成果を発表する。	
	民俗学・文化人類学研究 IIIA	3年次生を対象とする上級セミナー。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、博士論文の完成を目標として、学生各自が博士論文の研究課題およびその構成を発表する。博士論文の課題および概要について指導を行う。	
	民俗学・文化人類学研究 IIIB	3年次生を対象とする中級セミナーの後半。実際に論文を執筆しながらさらに研究課題を明確化し、博士論文を完成させる。民俗学・文化人類学領域全教員の出席のもと、参加者による討論を行う。	
	民俗学・文化人類学研究実習A	1年次生を対象として、民俗学・文化人類学領域全教員による指導のもと、博士論文作成に向けてフィールドワークの方法論を実践的に学ぶ。実習に関わる事前学習会、フィールドの選定並びに予備調査に主体的に関わり、調査と研究の方法全般についてより高度な訓練を行う。	集中
	民俗学・文化人類学研究実習B	1年次生を対象として、民俗学・文化人類学領域全教員による指導のもと、博士論文作成に向けたフィールドワークの実践的遂行能力を養う。実習に関わる事前学習会、フィールドの選定並びに予備調査、本調査、事後学習会に主体的に関わることにより、特定地域のフィールドワークとその報告、フィールドワークの実務、およびフィールドワークの指導方法を学ぶ。研究テーマに即したレポートや論文の執筆を課す。	集中
	(研究指導：歴史・人類学)	(6 伊藤純郎) 日本地域社会史の観点から修論執筆に向けた指導を行う。 (19 佐藤千登勢) アメリカ史に関する研究発表の指導を行う。 (29 徳丸亜木) 日本民俗学の観点から研究指導を行う。 (31 中西僚太郎) 歴史地理学の観点から修論執筆に向けた指導を行う。 (32 中野目徹) 日本近代思想史の観点から、研究指導を行う。 (49 三宅裕) 西アジア先史学の観点から研究発表の指導を行う。 (47 丸山宏) 東洋社会文化史、特に宗教文化史の観点から指導を行う。 (53 山田重郎) 古代西アジア史に関する研究発表の指導を行う。 (73 木村周平) 文化人類学の観点から研究指導を行う。 (80 柴田大輔) 西アジア宗教社会史の観点から研究指導を行う。 (88 滝沢誠) 日本考古学の視点から研究指導を行う。 (89 武井基晃) 社会伝承論の観点から研究指導を行う。 (90 谷口陽子) 文化財科学の観点から研究指導を行う。 (95 中野泰) 社会構成論の観点から研究指導を行う。 (99 朴宣美) 日本文化交流史の観点から研究指導を行う。 (111 三谷芳幸) 日本法制史・経済史の観点から研究指導を行う。 (118 山澤学) 日本宗教社会史の観点から研究指導を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(119 山本真) 東洋政治経済史、特に近代中国史の観点から指導を行う。	
文学	文学論文演習(1A)	文学研究諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、テーマ設定等、主として最初期段階の研究方法について議論を行い、それぞれの論文執筆の準備に資する。	
	文学論文演習(1B)	文学研究諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、研究資料の選択等、主として初期段階の研究方法についての議論を行い、それぞれの論文執筆の準備に資する。	
	文学論文演習(2A)	文学研究諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、資料蒐集等、主として中期段階前半の研究方法について議論を行い、それぞれの論文執筆の準備に資する。	
	文学論文演習(2B)	文学研究諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域の立場から、資料読解・分析等、主として中期段階後半の研究方法について議論を行い、それぞれの論文執筆の準備に資する。	
	文学論文演習(3A)	文学研究諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域・他研究領域の両方の立場から、論文の構成等、主として後期段階の研究方法について議論を行い、それぞれの論文執筆の準備に資する。	
	文学論文演習(3B)	文学研究諸領域のいずれかにおいて博士論文を執筆しようと計画している大学院生に対して、当該研究領域・他研究領域の両方の立場から、総合的に博士論文の完成に向けた議論を行う。	
	(研究指導：文学)	文学に関わる博士論文作成の指導を行う。 (1 青柳悦子) 文学研究の方法論を意識しながら、学術論文(博士論文)を執筆するための諸技法を実践的に学ぶ。 (2 秋山学) 古典受容史関連の学術論文を読み、論文執筆に必要な手法について指導を行う。 (17 加藤百合) 学術論文(博士論文)を執筆する方法論を演習形式で学ぶ。 (20 佐野隆弥) 研究発表とプレゼンテーション、ペーパーの完成などの指導を行う。 (27 谷口孝介) 日本古代から中世にかけての中日比較文学研究にかかわる博士論文作成の指導を行う。 (45 増尾弘美) フランス19~20世紀の文学作品を研究対象とした博士論文の作成について指導を行う。 (66 小川美登里) フランス文学について論文を書くための実践的なスキルについて鍛錬する。 (70 稀代麻也子) 中国文学に関わる学位論文作成のための語彙選択などの指導を行う。 (75 齋藤一) 文学理論(特にポストコロニアル理論)の知見を応用して作品を精読しつつ、学術論文(博士論文)を執筆する方法論を演習形式で学ぶ。 (102 馬場美佳) 日本近代文学の研究法等について専門的な指導を行う。 (107 Heselhaus Geva Herrad) Degree thesis supervision and colloquium on latest research trends in relevant literary studies and on academic ethics. 関連する文学研究における最新の研究動向および学術倫理について議論をし、学位論文作成のための指導を行う。 (121 吉原ゆかり) 日本語・英語で書かれた文学作品に関する学術論文(博士論文)を執筆する方法論を演習形式で学ぶ。 (122 吉森佳奈子) 文学研究に関わる歴史資料に注目し、平安文学研究の成果を論文として問う際に必須の知識を得る。	
言語学	リサーチラボ演習(1A)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する1年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員の研究とも連動、協同しながら、言語研究における研究倫理、言語研究の諸側面に関する理解を深めるとともに、自身の修士論文等の研究の課題等を洗い出し、先行研究を検討することによって、博士論文に向けての展望を行う。	
	リサーチラボ演習(1B)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する1年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員の研究とも連動、協同しながら、展望に基づき博士論文の大まかな構成を定め、今後の論文執筆の計画を立て、データの収集、分析を行う。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	リサーチラボ演習 (2A)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する2年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員の研究とも連動、協同しながら、論文執筆計画に基づき、博士論文の中核となる部分の執筆を行う。	
	リサーチラボ演習 (2B)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する2年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員の研究とも連動、協同しながら、博士論文の中核となる部分の問題点を洗い出すとともに、博士論文全体の構成を決定する。	
	リサーチラボ演習 (3A)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する3年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員の研究とも連動、協同しながら、博士論文の中核となる部分を補完する部分の執筆を行い、予備論文を作成する。	
	リサーチラボ演習 (3B)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する3年次生が複数の教員から成る指導グループの指導のもと、教員の研究とも連動、協同しながら、予備論文の問題点、課題を洗い出し、本論文の作成する。	
	リサーチラボ実習 (1A)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する1年次生を対象に、複数の教員から成る指導グループから、学会発表(またはそれに準じるもの)のテーマ設定、構成に関する指導を受け、プレゼンテーションの方法を実際に学ぶ。	
	リサーチラボ実習 (1B)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する1年次生を対象に、学会発表(またはそれに準じるもの)を行い、それに基づき、複数の教員から成る指導グループからフォローアップを受ける。	
	リサーチラボ実習 (2A)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する2年次生を対象に、複数の教員から成る指導グループから、学会発表(またはそれに準じるもの)のテーマ設定、構成に関する指導を受け、プレゼンテーションの方法を実際に学ぶ。	
	リサーチラボ実習 (2B)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する2年次生を対象に、学会発表(またはそれに準じるもの)を行い、それに基づき、複数の教員から成る指導グループからフォローアップを受ける。	
	リサーチラボ実習 (3A)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する3年次生を対象に、複数の教員から成る指導グループから、学会発表(またはそれに準じるもの)のテーマ設定、構成に関する指導を受け、プレゼンテーションの方法を実際に学ぶ。	
	リサーチラボ実習 (3B)	言語学サブプログラムにおいて博士論文を作成する3年次生を対象に、学会発表(またはそれに準じるもの)を行い、それに基づき、複数の教員から成る指導グループからフォローアップを受ける。	
	(研究指導：言語学)	<p>(4 池田潤) 歴史言語学・記述言語学・実験言語学・セム語学に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(9 白山利信) 言語政策に関するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(10 大倉浩) 日本語史について中世・近世の語彙・語法を中心に論文指導を行う。</p> <p>(11 大矢俊明) 現代ドイツ語の文法論に関して、他のゲルマン語や日本語などと比較しながら、研究の実践、指導を行い、ドイツ語と他言語の比較文法論について論文指導を行う。</p> <p>(16 加賀信広) 生成統語論に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(21 杉本武) コーパスを用いた研究方法で、主に現代日本語の動詞が関わる文法現象の記述に関する論文指導を行う。</p> <p>(33 沼田善子) 人類の体験や記憶の言語化のメカニズム、および記憶の共有、継承への言語関与について、心理学、社会学、歴史学、文学等の関連領域の研究との連携を視野に入れて、実践的な論文指導を行う。</p> <p>(38 一二三朋子) 日本語教育における心理学的側面に関するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(50 矢澤真人) 言語教育や翻訳・通訳、辞典編集など、今後の多言語多文化社会に向けた、言語研究の実践的な応用のあり方について考える。</p> <p>(51 柳田優子) 言語類型論、生成文法の枠組みで、言語の文法変化に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(60 石田尊) 現代日本語を主な対象とした統語的・意味的研究に関する論文指導を行う。</p> <p>(72 金仁和) 韓国語学及び韓日対照と関連するテーマについて論文指導する。</p> <p>(76 佐々木勲人) 中国語文法研究、日中対照研究に関連するテーマの論文指導を行う。</p> <p>(78 澤田浩子) 構文・談話・コミュニケーションを対象に、日本語学・日本語教育学に関する論文指導を行う。</p> <p>(82 島田雅晴) 生成統語論に関連するテーマの論文指導を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(97 那須昭夫) 日本語の音声・音韻・韻律にかかわる諸現象のうち、とくに近年変異が進行しつつある事象を複数取り上げ、変異の機序および要因の解明を課題とした研究を実践するとともに、考察を進めるうえで必要となる論文指導を行う。 (100 橋本修) 日本語史・他言語との対照を含めた、広義日本語文法論に関する中長期的な研究計画・企画推進について論文指導をおこなう。 (109 松崎寛) 音声学・日本語教育学に関連するテーマの論文指導を行う。 (124 和田尚明) 時制・アスペクト・モダリティに関連するテーマの論文指導を行う。	
現代文化学	現代文化学論文演習 IA	この科目は、授業担当者が、自ら主指導教員として指導する学生に対して行う授業である。現代文化学論文演習IAは研究倫理に関する知識の確認、専門知識の深化、幅広い研究研究方法（協働研究）、論文執筆・研究成果の公開等に関わるスキルを演習形式で修得することを目的としている。	
	現代文化学論文演習 IB	この科目は、授業担当者が、自ら主指導教員として指導する学生に対して行う授業である。現代文化学論文演習IBは、現代文化学論文演習IAで修得した専門知識をさらに深化させ、論文執筆や研究成果の公開等に関わるスキルの拡大を目的とする。担当教員は博士論文の完成と研究成果の積極的な公開に向けての総合的な研究指導を実施する。	
	現代文化学論文演習 IIA	この科目は、授業担当者が、自ら主指導教員として指導する学生に対して行う授業である。現代文化学論文演習IIAでは、学生自身の研究の進捗状況に関する報告、それを受けた教員と受講者全員による討論形式の授業を中心に実施する予定である。	
	現代文化学論文演習 IIB	この科目は、授業担当者が、自ら主指導教員として指導する学生に対して行う授業である。現代文化学論文演習IIAに引き続き、学生に対して専門知識をさらに深化させ、また論文の執筆や研究成果の公開等に関わるスキルを修得させることを目的とする。とくに専門分野における討論技術の修得を目指す。	
	現代文化学論文演習 IIIA	この科目は、授業担当者が、自ら主指導教員として指導する学生に対して行う授業である。資料・文献の分析、論文の添削や進捗状況に関する発表、研究テーマに関連する諸問題を扱った討論など、授業は演習形式で行われる。とくに現代文化学論文演習IIIAでは、考察した成果を論文としてまとめ上げる技術の修得をめざす。	
	現代文化学論文演習 IIIB	この科目は、授業担当者が、自ら主指導教員として指導する学生に対して行う授業である。現代文化学論文演習IIIAを受け、この論文演習IIIBは考察した成果を論文としてまとめ、完成させる技術の修得をめざす。	
	博士論文プロポーザル演習 I	この授業は現代文化学コースの学生を対象に、博士論文をはじめ専門的な学術論文を完成させるために必要な明確な目的意識の涵養と研究計画書の執筆等に関するスキルの修得を目的としたものである。受講生には自らの研究の目的や方法、論文の章立て、論文の完成・提出までのスケジュールを文章にまとめて発表する。演習Iでは研究目的の明確化とそれにふさわしい方法論の確立を主題として、プレゼンテーションの演習をする。	隔年
博士論文プロポーザル演習 II	この授業は現代文化学コースの学生を対象に、博士論文をはじめ専門的な学術論文を完成させるために必要な明確な目的意識の涵養と研究計画書の執筆等に関するスキルの修得を目的とする。演習IIでは、一次資料の収集・分析、先行研究への批判的分析を主題として、プレゼンテーションの演習をする。	隔年	
海外研究・教育実践演習 I	この授業は現代文化学コースの学生を対象に、海外において修得した自らの研究成果や研修経験を発表することを通して、修得した学術的な知見やスキルを他者に伝える技術を磨くことを目的としている。履修条件として、本学の協定校以外の海外の大学に留学し帰国した学生、また海外の研究機関などにおける研修を受けて帰国した学生であることが求められている。また履修登録は留学あるいは研修が終了し、帰国してから原則として1年以内に行う。この授業では研修に関する口頭発表を行い、研究・研修報告書の作成が求められる。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	海外研究・教育実践演習 II	この授業は現代文化学コースの学生を対象に、協定校であるカナダのプリンス・エドワード島大学(UPEI)において修得した自らの研究成果や研修経験を発表することを通して、修得した学術的な知見やスキルを他者に伝える技術を磨くことを目的としている。UPEIの夏期短期研修「英語で授業ができる教員養成のための海外研修プログラム」を受講し、この科目を履修登録した学生は、帰国報告会での英語による口頭発表を実施する。	
	(研究指導：現代文化学)	<p>(23 竹谷悦子) アメリカ研究や人種・ジェンダー研究を行い、英語で博士論文執筆をする学生を対象に、アカデミックな博士論文の作成法を実践し、完成に向けて指導する。</p> <p>(30 中田元子) 英国圏の文化の生成や変容などをテーマとして研究する学生を対象に、アプローチの視点や文献・資料の評価、論文作成・成果公開の方法などを中心に指導を行う。</p> <p>(35 濱田真) 文化生成や文化変容の問題について研究を進める学生を対象に、資料・文献の収集や先行研究の参照の仕方、研究テーマの設定と論文作成の仕方等を中心に指導を行う。</p> <p>(42 廣瀬浩司) 感性や情動性と文化事象との関係、そこにおけるシンボルの生成などのテーマを研究する学生を対象に、一次資料の解読と分析、論文作成・成果公開の方法、プレゼンテーションの具体的な方法などを中心に演習をおこなう。</p> <p>(52 山口恵里子) イギリス美術、日英の芸術的交渉、イメージ人類学、服飾文化などのテーマを研究する学生を対象に、論文を完成させるための指導を中心に行いつつ、論文完成後の成果公開の方法についても検討する。</p> <p>(64 江藤光紀) 芸術(とりわけ美術・音楽)全般、あるいは芸術と社会といった問題をテーマとする学生を対象に、添削指導など論文を完成させるための具体的なアドバイスをを行う。</p> <p>(77 佐藤吉幸) 現代思想や社会理論を研究する学生を対象に、主題設定、文献・資料の評価、論文作成・成果公開の方法などを中心に指導を行う。執筆した論文の草稿をもとにディスカッションを行い、博士論文の完成を目標とする。成果公開の方法の指導も行う。</p> <p>(83 清水知子) 文化理論、メディア文化論を研究テーマとする学生を対象に、資料収集、主題の設定、論文執筆、成果発表の方法に関わる指導を行う。</p> <p>(93 対馬美千子) 文学への思想的アプローチ、表象文化論、言語思想に関わるテーマを研究する学生を対象に、資料・文献の分析、論文執筆、成果発表の方法に関わる指導を行う。</p> <p>(108 馬籠清子) 文学と文化、文学と音楽、などといった学際的な研究を進める学生に対し、理論的な枠組の作り方、資料収集の仕方、論文作成や発表の仕方などを指導する。必要な場合は、英語での研究・発表の仕方についても強化する。</p> <p>(115 宮崎和夫) 異文化集団間の交流と対立および相互の認識などのテーマを研究する学生を対象に、一次資料を用いた研究論文等の作成の方法を中心に指導を行う。</p>	
英語教育学	英語教育学特別論文演習 IA	本科目は、授業担当者が、自ら主査、副査として指導する学生に対して行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、その指導および習得に関して、文献および実証的・実践的な研究を行い、英語教育学についての博士論文執筆を完成させるために必要な、明確な目的意識の涵養と博士論文執筆に関するスキルの修得を目的とする。英語教育学特別論文演習 IAでは、研究倫理に関する知識の確認、専門知識の深化、論文執筆や研究成果の公開等に関わるスキルを演習形式で修得することを目的としている。	
	英語教育学特別論文演習 IB	本科目は、授業担当者が、自ら主査、副査として指導する学生に対して行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、その指導および習得に関して、文献および実証的・実践的な研究を行い、英語教育学についての博士論文執筆を完成させるために必要な、明確な目的意識の涵養と博士論文執筆に関するスキルの修得を目的とする。英語教育学特別論文演習 IBでは、英語教育学特別論文演習 IAで修得した専門知識をさらに深化させ、論文執筆や研究成果の公開等に関わるスキルの拡大を目的とする。担当教員は博士論文の完成と研究成果の積極的な公開に向けての総合的な研究指導を実施する。	
	英語教育学特別論文演習 IIA	本科目は、授業担当者が、自ら主査、副査として指導する学生に対して行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、その指導および習得に関して、文献および実証的・実践的な研究を行い、英語教育学についての博士論文執筆を完成させるために必要な、明確な目的意識の涵養と博士論文執筆に関するスキルの修得を目的とする。英語教育学特別論文演習 IIAでは、学生自身の研究の進捗状況に関する報告、それを受けた教員との討論形式の授業を中心に実施する。また、受講者全員による構想発表と質疑応答の場を設ける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	英語教育学特別論文演習ⅡB	<p>本科目は、授業担当者が、自ら主査、副査として指導する学生に対して行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、その指導および習得に関して、文献および実証的・実践的な研究を行い、英語教育学についての博士論文執筆を完成させるために必要な、明確な目的意識の涵養と博士論文執筆に関するスキルの修得を目的とする。英語教育学特別論文演習ⅡAに引き続き、学生に対して専門知識をさらに深化させ、また論文の執筆や研究成果の公開等に関わるスキルを修得させることを目的とする。とくに専門分野における討論技術の修得を目指す。</p>	
	英語教育学特別論文演習ⅢA	<p>本科目は、授業担当者が、自ら主査、副査として指導する学生に対して行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、その指導および習得に関して、文献および実証的・実践的な研究を行い、英語教育学についての博士論文執筆を完成させるために必要な、明確な目的意識の涵養と博士論文執筆に関するスキルの修得を目的とする。特に英語教育学特別論文演習ⅢAでは、考察した成果を論文としてまとめ上げる技術の修得をめざす。また、受講者全員による中間発表と質疑応答の場を設ける。</p>	
	英語教育学特別論文演習ⅢB	<p>本科目は、授業担当者が、自ら主査、副査として指導する学生に対して行う授業である。外国語として英語を学ぶ上で、その指導および習得に関して、文献および実証的・実践的な研究を行い、英語教育学についての博士論文執筆を完成させるために必要な、明確な目的意識の涵養と博士論文執筆に関するスキルの修得を目的とする。英語教育学特別論文演習ⅢAを受け、この英語教育学特別論文演習ⅢBは考察した成果を論文としてまとめ、完成させる技術の修得をめざす。</p>	
	(研究指導：英語教育学)	<p>(7 磐崎弘貞) コーパスを利用したの語彙研究など英語教育学全般にわたる課題の研究指導を行う。 (8 卯城祐司) 英文読解プロセスの理論と指導法や語彙習得など英語教育学全般にわたる課題の研究指導を行う。 (39 平井明代) 言語熟達度の測定と評価、言語・文化・コミュニケーションの動的な関係など英語教育学全般にわたる課題の研究指導を行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際公共政策関連科目	国際公共政策プロジェクト演習A	研究倫理を踏まえ、各自の博士論文の研究内容を内外に発信する能力、自らの研究プロセスを管理する能力を育成することを目的とする。博士論文作成過程における論文投稿、学会・研究集会での発表、フィールドワークや資料調査の成果等も評価の対象とする。また、指導教員による指導を継続的に受け、博士論文の作成を進める。	
	国際公共政策プロジェクト演習B	研究倫理を踏まえ、各自の博士論文の研究内容を内外に発信する能力、自らの研究プロセスを管理する能力を育成することを目的とする。博士論文作成過程における論文投稿、学会・研究集会での発表、フィールドワークや資料調査の成果等も評価の対象とする。また、指導教員による指導を継続的に受け、各自の研究を深化させるとともに、博士論文を作成する。	
	(研究指導)	(12 奥山敏雄) 現象学的社会学や臨床社会学などの手法を用いて、医療社会学に関連する課題の研究指導を行う。 (23 関根久雄) 文化人類学のアプローチと分析手法を用いて、開発人類学や開発と文化に関連する課題の研究指導を行う。 (24 竹中佳彦) 統計分析などの手法を用いて、政治過程の課題の研究指導を行う。 (25 DADABAEV Timur) 国際関係論の手法を用いて、中央アジアの国際関係に関する課題の研究指導を行う。 (28 土井隆義) アノミー論やレイベリング論などの手法を用いて、社会病理学に関連する課題の研究指導を行う。 (43 黄順姫) 文化的再生産論や学校文化論などの手法を用いて、教育社会学に関連する課題の研究指導を行う。 (46 松岡完) 歴史研究などの手法を用いて、国際政治史の課題の研究指導を行う。 (54 吉田脩) 法学のアプローチと分析手法を用いて、国際法に関連する課題の研究指導を行う。 (58 五十嵐泰正) グローバル都市論やコミュニティ論などの手法を用いて、都市社会学に関連する課題の研究指導を行う。 (63 URANO EDSON IOSHIAQUI) グローバル化をめぐる研究や社会政策論などの手法を用いて、国際社会政策論に関連する課題の研究指導を行う。 (84 鈴木伸隆) 文化人類学やフィールドワークのアプローチと分析手法を用いて、文化変動論に関連する課題の研究指導を行う。 (94 内藤久裕) 公共経済学の実証分析や計量経済学的手法を用いた経済分析に関する論文指導を行う。 (98 野上元) 集合的記憶論やメディア論などの手法を用いて、歴史社会学に関連する課題の研究指導を行う。 (103 東野篤子) 国際政治学の分析手法を用いて、ヨーロッパの国際政治や国際関係の課題に関する研究指導を行う。 (112 南山淳) 理論研究などの手法を用いて、国際政治学の課題の研究指導を行う。 (117 森直人) 階級・階層論や教育福祉論などの手法を用いて、社会階層論に関連する課題の研究指導を行う。 (123 レスリータック川崎) メディア分析の手法を用いて、情報社会に関する課題の研究指導を行う。	
	政治学特別演習AI	本演習では、欧米で展開されつつある現代政治や政治理論に関する文献を講読し、討論しながら、それを通じて日本政治を分析するために必要な理論と手法を習得することを目的とする。授業は演習形式で行い、政治理論の基礎や比較分析、実証分析の手法を学び、日本政治に関する理解を深める。また、学生の博士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、論文輪読を通じて、論文執筆の方法についても学び、政治学の理論的・実証的研究の可能性を検討する。	隔年
政治学特別演習AII	本演習では、欧米で展開されつつある現代政治や政治理論に関する文献を講読し、討論しながら、それを通じて日本政治を分析するために必要な理論と手法を習得することを目的とする。授業は演習形式で行い、政治理論の基礎や比較分析、実証分析の手法を学び、日本政治に関する理解を深める。また、学生の博士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、論文輪読を通じて、論文執筆の方法についても学び、政治学の理論的・実証的研究の深化を図る。	隔年	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	政治学特別演習BI	本演習では、欧米で展開されつつある政策過程分析に関する文献を講読し、討論しながら、それを通じて日本の政策過程を分析するために必要な理論と手法を習得することを目的とする。授業は演習形式で行い、政策過程分析の基礎や実証分析の手法を学び、日本の公共政策に関する理解を深める。また、学生の博士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、論文輪読を通じて、論文執筆の方法についても学び、政策過程の理論的・実証的研究の可能性を検討する。	隔年
	政治学特別演習BII	本演習では、欧米で展開されつつある政策過程分析に関する文献を講読し、討論しながら、それを通じて日本の政策過程を分析するために必要な理論と手法を習得することを目的とする。授業は演習形式で行い、政策過程分析の基礎や実証分析の手法を学び、日本の公共政策に関する理解を深める。また、学生の博士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、論文輪読を通じて、論文執筆の方法についても学び、政策過程の理論的・実証的研究の深化を図る。	隔年
	比較政治学特別演習AI	現在の比較政治学やアメリカ政治研究は、政治現象を説明する一般化可能な理論を構築し、それを経験的に検証する性格をますます強めている。この演習では、比較政治学の観点から、様々な国の選挙や政策決定をテーマとする近年の文献を講読する。研究動向を把握するとともに、政治現象を比較分析する際のリサーチ・デザイン、理論などの問題についても検討する。	隔年
	比較政治学特別演習AII	現在の比較政治学やアメリカ政治研究は、政治現象を説明する一般化可能な理論を構築し、それを経験的に検証する性格をますます強めている。この演習では、比較政治学の観点から、様々な国の選挙や政策決定をテーマとする近年の文献を講読する。研究動向を把握するとともに、政治現象を比較分析する際の方法論などの問題についても検討する。	隔年
	比較政治学特別演習BI	現在の比較政治学やアメリカ政治研究は、政治現象を説明する一般化可能な理論を構築し、それを経験的に検証する性格をますます強めている。この演習では、アメリカ政治研究、特に選挙や政策決定をテーマとする近年の文献を講読する。研究動向を把握するとともに、アメリカの政治現象を分析する際のリサーチ・デザイン、理論などの問題についても検討する。	隔年
	比較政治学特別演習BII	現在の比較政治学やアメリカ政治研究は、政治現象を説明する一般化可能な理論を構築し、それを経験的に検証する性格をますます強めている。この演習では、アメリカ政治研究、特に選挙や政策決定をテーマとする近年の文献を講読する。研究動向を把握するとともに、アメリカの政治現象を分析する際の方法論などの問題についても検討する。	隔年
	国際政治理論特別演習AI	近年のグローバルな政治現象は複雑化しており、それを説明する国際政治の理論も様々な分野の視点を取り入れる必要がある。本授業では、国際政治理論研究の拡張を目指して、政治哲学、歴史研究などの異分野との方法論的接合について検討する。授業は演習形式で行い、近年の国際政治理論の拡張に関する研究の動向や主要論点を学び、国際政治の理論研究に関する基礎的理解を深める。	隔年
	国際政治理論特別演習AII	近年のグローバルな政治現象は複雑化しており、それを説明する国際政治の理論も様々な分野の視点を取り入れる必要がある。本授業では、政治哲学や歴史研究などの異分野との方法論的接合を踏まえて、近年の国際政治理論を批判的に検討しつつ、参加者の個別研究テーマに応じた博士論文執筆のための論文指導を行う。授業は演習形式で行い、学生の博士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、国際政治の理論研究に関する理解を深める。	隔年
	国際政治理論特別演習BI	近年のグローバルな政治現象は複雑化しており、それを説明する国際政治の理論も様々な分野の視点を取り入れる必要がある。本授業では、国際政治理論研究の拡張を目指して、社会思想、文化研究、科学論などの異分野との方法論的接合について検討する。授業は演習形式で行い、近年の国際政治理論の拡張に関する研究の動向や主要論点を学び、国際政治の理論研究に関する基礎的理解を深める。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際政治理論特別演習BII	近年のグローバルな政治現象は複雑化しており、それを説明する国際政治の理論も様々な分野の視点を取り入れる必要がある。本授業では、社会思想、文化研究、科学論などの異分野との方法論的接合を踏まえて、近年の国際政治理論を批判的に検討しつつ、参加者の個別研究テーマに応じた博士論文執筆のための論文指導を行う。授業は演習形式で行い、学生の博士論文における研究の方向性や進捗も踏まえつつ、国際政治の理論研究に関する理解を深める。	隔年
	国際政治史特別演習AI	現代国際政治全般の歩みと関連づけながら、アメリカの政治外交史について考察する。20世紀前半から冷戦期にかけて、アメリカが行ってきたさまざまな戦争を取り上げ、指導者の脅威認識、彼らのメンタリティが形成された背景、彼らに軍事介入あるいは不介入を選択させた要因、その結果や長期的遺産などを検証する。ただし受講生の問題関心に配慮し、博士論文完成をめざす指導を念頭において研究発表を進める。	隔年
	国際政治史特別演習AII	現代国際政治全般の歩みと関連づけながら、アメリカの政治外交史について考察を深める。冷戦期および冷戦後の時代を中心に、アメリカが行ってきたさまざまな戦争をテーマとし、議会・世論・メディア・選挙など、指導者による戦争の実施や遂行に影響する国内政治環境に着目する。ただし博士論文完成をめざす受講生の問題関心にも十分配慮し、狭義の戦争にとらわれずに自由なテーマで研究発表を行いたい。	隔年
	国際政治史特別演習BI	現代国際政治の歩みと関連づけながら、アメリカの政治外交史について考察する。20世紀前半から冷戦期にかけて、アメリカが採用した外交・軍事戦略、具体的な外交政策の立案・実施過程、その結果などを考える。孤立主義・国際主義・反共主義といった、指導者の対外認識や外交イデオロギーが形成された背景やその影響が大きなテーマとなる。また受講生の問題関心にも配慮し、論文指導を念頭において進めたい。	隔年
	国際政治史特別演習BII	現代国際政治の歩みと関連づけながら、アメリカの政治外交史について考察を深める。冷戦期および冷戦後の時代を中心に、アメリカの外交戦略や具体的な外交政策の立案・実施過程、その結果などを考える。特定の外交戦略や個別の政策が採用される過程で、議会や世論などがいかに影響を及ぼしたかが重要なテーマとなる。ただし受講生の問題関心にも配慮し、論文指導を念頭において研究発表を主軸としたい。	隔年
	ヨーロッパ国際関係論特別演習AI	本演習では、欧州連合（EU）や北大西洋条約機構（NATO）を中心としたヨーロッパの機構と、それらをめぐるヨーロッパの国際関係、その理論枠組みなどに関する重要文献を読みながら、EU・NATO域内の政治・安全保障問題やヨーロッパ域内の国際関係について深く学びつつ、研究デザインや理論・枠組みを含め、博士論文作成を指導する。理論および枠組み面での基礎的トレーニングも集中的に実施する。	隔年
	ヨーロッパ国際関係論特別演習AII	本演習では、欧州連合（EU）や北大西洋条約機構（NATO）を中心としたヨーロッパの機構と、それらをめぐるヨーロッパの国際関係、その理論枠組みなどに関する重要文献を読みながら、EU・NATO域内の政治・安全保障問題やヨーロッパ域内の国際関係について深く学びつつ、分析方法を含め、博士論文作成を指導する。理論および枠組みに関する応用的トレーニングも実施する。	隔年
	ヨーロッパ国際関係論特別演習BI	本演習では、欧州連合（EU）や北大西洋条約機構（NATO）などを中心としたヨーロッパの機構と、それらをめぐるヨーロッパの国際関係、その理論枠組みなどに関する重要文献を読みながら、EU・NATOの対外関係、近隣地域（主に地中海や旧ソ連諸国）の諸問題を扱い、ヨーロッパと域外地域との国際関係を深く学びつつ、研究デザインや理論・枠組みを含め、博士論文作成を指導する。博士課程の学生の学会報告に向けた基礎的トレーニングなどについても、要望に応じて積極的に実施していく予定。	隔年
	ヨーロッパ国際関係論特別演習BII	本演習では、欧州連合（EU）や北大西洋条約機構（NATO）などを中心としたヨーロッパの機構と、それらをめぐるヨーロッパの国際関係、その理論枠組みなどに関する重要文献を読みながら、EU・NATOの対外関係、近隣地域（主に地中海や旧ソ連諸国）の諸問題を扱い、ヨーロッパと域外地域との国際関係を深く学びつつ、分析方法を含め、博士論文作成を指導する。博士課程の学生の学会報告に向けた応用的トレーニングなどについても、要望に応じて積極的に実施していく予定。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	東アジア政治外交特別演習 AI	21世紀初頭の東アジアは経済相互依存が進展する一方で、伝統的安全保障問題の緊張も高まっている。本授業では、アジア太平洋の政治外交に関心を持つ学生を対象とする。履修者は、東アジア各国における国内政治と外交の連動、中国の台頭と関係国の反応など、東アジアの政治外交の基礎を学びつつ、研究関心に基づく報告を行うことが求められる。演習形式で授業を行い、学生の研究テーマの関心や方向性を踏まえつつ、東アジアの政治外交研究や国際関係に関して博士論文の指導も行う。	隔年
	東アジア政治外交特別演習 AII	21世紀初頭の東アジアは経済相互依存が進展する一方で、伝統的安全保障問題の緊張も高まっている。本授業では、アジア太平洋の政治外交に関心を持つ学生を対象とする。履修者は、東アジア各国における国内政治と外交の連動、中国の台頭と関係国の反応など、東アジアの政治外交への理解を深めつつ、研究関心に基づく報告を行うことが求められる。演習形式で授業を行い、学生の研究の進捗を踏まえつつ、東アジアの政治外交研究や国際関係に関して博士論文の指導も行う。	隔年
	東アジア政治外交特別演習 BI	本授業では、アジア太平洋の政治外交に関心を持つ学生を対象とする。履修者は、東アジアにおける、競合する複数の地域協力枠組みをめぐる国際関係などを検討し、東アジアの政治外交の基礎を学びつつ、研究関心に基づく報告を行うことが求められる。演習形式で授業を行い、学生の研究テーマの関心や方向性を踏まえつつ、東アジアの政治外交研究や国際関係に関して博士論文の指導も行う。	隔年
	東アジア政治外交特別演習 BII	本授業では、アジア太平洋の政治外交に関心を持つ学生を対象とする。履修者は、東アジアにおける、地域協力枠組みにおける紛争管理メカニズムなどを検討し、東アジアの政治外交への理解を深めつつ、研究関心に基づく報告を行うことが求められる。演習形式で授業を行い、学生の研究の進捗を踏まえつつ、東アジアの政治外交研究や国際関係に関して博士論文の指導も行う。	隔年
	国際法特別演習 AI	国際法における基礎理論上の諸問題を学ぶために、演習形式で授業を行い、かつ、博士論文の指導を行う。これにより、国際法の基礎理論に関する専門知識を深め、研究力を養う。また、近年の国際法の理論研究の動向や主要潮流を学びつつ、学生の博士論文の研究テーマや方向性、研究計画を踏まえて、国際法に関する理解を深める。	隔年
	国際法特別演習 AII	国際法における基礎理論上の諸問題の理解に基づき、特に、国際法の実務上の諸問題を学ぶために、一次資料に基づく演習を行い、かつ、博士論文の指導を行う。近年の国際法の研究動向や学生の博士論文の進捗状況や成果を踏まえつつ、演習形式で授業を行い、国際法の理論と実務に関する専門知識と深め、研究力の向上を図る。	隔年
	国際法特別演習 BI	国際法学における理論的な諸問題を学ぶために、比較法の視座も含めて検討し、演習及び博士論文の指導を行う。これにより、国際法の理論的諸課題における専門知識を深める。近年の国際法の研究動向や主要潮流、学生の博士論文の研究テーマや方向性、研究計画を踏まえて、演習形式で授業を行い、国際法の理論的諸課題に関する専門知識と深め、研究力の向上を図る。	隔年
	国際法特別演習 BII	国際法における理論的諸問題の理解に基づき、国際法の現代的な諸問題を学ぶために、特に外国語文献に基づき、演習及び博士論文の指導を行う。近年の国際法の研究動向や学生の博士論文の進捗状況や成果を踏まえつつ、演習形式で授業を行い、国際法の理論的・現代的諸問題とに関する専門知識と深め、研究力の向上を図る。	隔年
	開発人類学特別演習 AI	本演習では、開発人類学の基礎的理解を踏まえ、社会開発など途上国や日本において生起する近代的諸現象に関わる開発学的研究を取りあげ、理論的・応用(実践)的に関与する人類学の可能性について議論する。本授業では特に、開発事象に関するフィールドワークのあり方を中心に考察を行う。1980年代以降のポストモダン人類学の議論を踏まえて、調査者(あるいは外部からの実践者)と現地の人々との関係性について検討する。	隔年
	開発人類学特別演習 AII	本演習では、開発のフィールドワークのあり方について、特に1980年代以降に注目され始めた参加型開発に関連した調査方法を取りあげ批判的に検討すると共に、より効果的な方法について、人類学的視点から議論する。具体的には参加型農村調査法(PRA)や参加型学習と行動(PLA)、そして開発民族誌とOECD・DACの評価5項目を融合させた文化的交叉評価を取りあげる。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	開発人類学特別演習BI	本演習では、人類学的開発研究の特徴を示すものの一つとして開発民族誌を取りあげ、その実践指向の記述法や活用法を、過去の良質な民族誌を使いながら具体的に考察する。また、近年一部の開発研究者の間で、開発プロジェクトの実施プロセスを詳細に描き出すプロジェクト・ドキュメンテーションが注目されており、それについても民族誌との異同を確認しながら有効性と限界について考察する。	隔年
	開発人類学特別演習BII	本演習では、開発研究と人類学的実践とを融合させた実践について歴史的・理論的考察、事例研究などを踏まえて総括すると共に、今後の開発業界の向かうべき方向性について人類学的視点をベースに議論する。特に、ポストモダン人類学、参加型開発、参加型学習と行動、開発民族誌などの観点を総括しつつ、開発研究と人類学的実践による包括的アプローチから開発業界の在り方について深く考察する。	隔年
	文化変動論特別演習AI	今日、小さなコミュニティーの文化変動ですら、地球規模で展開する政治経済システムとの連関を抜きにしては語れなくなってきている。本演習では、ローカルな文化変動とグローバルな政治経済システムに関連する諸問題を多角的かつ批判的に考察することで、博士論文作成に必要な基礎的な知識習得を目的とする。とくにAIでは研究発表を通して、先行研究の整理と研究の枠組みについて学ぶ。日本語で講義をおこなう。	隔年
	文化変動論特別演習AII	今日、小さなコミュニティーの文化変動ですら、地球規模で展開する政治経済システムとの連関を抜きにしては語れなくなってきている。本演習では、ローカルな文化変動とグローバルな政治経済システムに関連する諸問題を多角的かつ批判的に考察することで、博士論文作成に必要な高度な分析能力習得を目的とする。とくにAIIでは研究発表を通して、実証的な論文執筆について学ぶ。日本語で講義をおこなう。	隔年
	文化変動論特別演習BI	今日、小さなコミュニティーの文化変動ですら、地球規模で展開する政治経済システムとの連関を抜きにしては語れなくなってきている。本演習では、ローカルな文化変動とグローバルな政治経済システムに関連する諸問題を多角的かつ批判的に考察することで、博士論文作成に必要な基礎的な知識習得を目的とする。とくにBIでは研究発表を通して、先行研究の整理と研究の枠組みについて学ぶ。日本語で講義をおこなう。	隔年
	文化変動論特別演習BII	今日、小さなコミュニティーの文化変動ですら、地球規模で展開する政治経済システムとの連関を抜きにしては語れなくなってきている。本演習では、ローカルな文化変動とグローバルな政治経済システムに関連する諸問題を多角的かつ批判的に考察することで、博士論文作成に必要な高度な分析能力習得を目的とする。とくにBIIでは研究発表を通して、実証的な論文執筆について学ぶ。日本語で講義をおこなう。	隔年
	政策評価分析特別演習AI	本演習では、政策評価分析の基礎習得を踏まえ、世界トップクラスのジャーナルの論文を読み、政策評価分析に関する最新の知識や分析方法への理解を深める。特に、政策評価分析に関する様々な論文をレビューし、批判的に検討する。博士課程の学生にとって、研究の知識と展望を広げるために、自分の関心分野以外でも論文を読むことは重要である。レビューする論文は、政策評価に関連するものを幅広くあつかう。本演習を通して、学生は政策評価分析の論文の内容を十分に理解し、批判的に議論することができることを目指す。受講学生は、政策評価分析の基本的知識と分析のスキルを持っていることが期待される。	隔年
	政策評価分析特別演習AII	本演習では、政策評価分析の基礎習得を踏まえ、世界トップクラスのジャーナルの論文を読み、政策評価分析に関する最新の知識や分析方法への理解を更に深める。特に、政策評価分析に関する論文の方法論をレビューし、分析方法の組み合わせや融合について検討する。レビューする論文は、政策評価に関連するものを幅広くあつかう。本演習を通じて、学生は政策評価分析の論文の内容を十分に理解し、様々な分析方法を批判的に議論できることを目指す。受講学生は、政策評価分析の基本的知識と分析のスキルを持っていることが期待される。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	政策評価分析特別演習BI	本演習では、授業の前半は世界トップクラスのジャーナルの論文を読み、政策評価分析に関する最新の知識や分析方法への理解を深める。後半では、政策評価分析に関する学生の研究課題についての発表と議論を行う。受講生は、この演習の中で、政策評価に関する実証分析の結果をまとめて報告することが求められる。受講生は、実際に一次データや二次データを用いて、自分の興味と関心に基づいて研究課題を設定する。本演習の到達目標としては、学生は自らがたてた研究課題に関し、政策評価分析による実証結果をだせることができるようになることである。受講生は、政策評価分析の基本的知識と分析のスキルを持っていることが期待される。	隔年
	政策評価分析特別演習BII	本演習では、授業の前半は世界トップクラスのジャーナルの論文を読み、政策評価分析に関する最新の知識や分析方法への理解を深める。後半では、政策評価分析に関する学生の博士論文の進捗を含む発表と議論を行う。受講生は、本演習の中で、政策評価に関する実証分析の結果をまとめて報告することが求められる。本演習を通して、学生は博士論文を含む自分の研究課題に関し、政策評価による実証分析を行い、論文をまとめる能力を育成する。受講生は、政策評価分析の基本的知識と分析のスキルを持っていることが期待される。	隔年
	社会意識論特別演習AI	この特別演習では、ユートピアやコミュニオンなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした社会意識論のいくつかの問題領域に、イデオロギー論や知識社会学などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ一八世紀後半から一九世紀前半にかけての、啓蒙以後の／社会学以前の社会学的思考の展開を再検討するなかで、制度の生成と変容の学問としての社会学が、それ自体としていかに生成し変容することになるのかを検証する。AIでは一八世紀後半の社会思想を主題化する。	隔年
	社会意識論特別演習AII	この特別演習では、ユートピアやコミュニオンなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした社会意識論のいくつかの問題領域に、イデオロギー論や知識社会学などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ一八世紀後半から一九世紀前半にかけての、啓蒙以後の／社会学以前の社会学的思考の展開を再検討するなかで、制度の生成と変容の学問としての社会学が、それ自体としていかに生成し変容することになるのかを検証する。AIIでは一八世紀後半の社会思想を主題化する。	隔年
	社会意識論特別演習BI	この特別演習では、ユートピアやコミュニオンなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした社会意識論のいくつかの問題領域に、イデオロギー論や知識社会学などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ一八世紀後半から一九世紀前半にかけての、啓蒙以後の／社会学以前の社会学的思考の展開を再検討するなかで、制度の生成と変容の学問としての社会学が、それ自体としていかに生成し変容することになるのかを検証する。BIでは一九世紀前半の社会思想を主題化する。	隔年
	社会意識論特別演習BII	この特別演習では、ユートピアやコミュニオンなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした社会意識論のいくつかの問題領域に、イデオロギー論や知識社会学などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ一八世紀後半から一九世紀前半にかけての、啓蒙以後の／社会学以前の社会学的思考の展開を再検討するなかで、制度の生成と変容の学問としての社会学が、それ自体としていかに生成し変容することになるのかを検証する。BIIでは一九世紀前半の社会思想を主題化する。	隔年
	医療社会学特別演習AI	この特別演習では、病院化社会やスピリチュアルケアなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした医療社会学のいくつかの問題領域に、現象学的社会学や臨床社会学、コミュニケーション論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における死の医学化／医療化の展開と現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を再検討するなかで、それらの理論枠組みの射程と限界について検証する。AIでは近代社会における死の医学化／医療化の展開を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	医療社会学特別演習AII	この特別演習では、病院化社会やスピリチュアルケアなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした医療社会学のいくつかの問題領域に、現象学的社会学や臨床社会学、コミュニケーション論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における死の医学化/医療化の展開と現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を再検討するなかで、それらの理論枠組みの射程と限界について検証する。AIIでは近代社会における死の医学化/医療化の展開を主題化する。	隔年
	医療社会学特別演習BI	この特別演習では、病院化社会やスピリチュアルケアなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした医療社会学のいくつかの問題領域に、現象学的社会学や臨床社会学、コミュニケーション論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における死の医学化/医療化の展開と現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を再検討するなかで、それらの理論枠組みの射程と限界について検証する。BIでは現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を主題化する。	隔年
	医療社会学特別演習BII	この特別演習では、病院化社会やスピリチュアルケアなど西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした医療社会学のいくつかの問題領域に、現象学的社会学や臨床社会学、コミュニケーション論などそれらに関連する古典的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における死の医学化/医療化の展開と現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を再検討するなかで、それらの理論枠組みの射程と限界について検証する。BIIでは現代社会における病や死を巡るホスピスや緩和ケアの展開を主題化する。	隔年
	社会病理学特別演習I	この特別演習では、犯罪/非行、いじめやひきこもりなど現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている逸脱行動論ならびに社会統制論のいくつかの問題領域に、アノミー論やレイベリング論、自己論やコミュニケーション論、リスク社会論や社会的排除論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における青少年の逸脱行動の背景にある親密性の変容と、その非常に重要な要因となる人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を再検討するなかで、人間関係論的な観点からの逸脱行動論や社会統制論の理論枠組みを再検証する。社会病理学特別演習Iでは現代社会における親密性の変容を主題化する。	隔年
	社会病理学特別演習II	この特別演習では、犯罪/非行、いじめやひきこもりなど現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている逸脱行動論ならびに社会統制論のいくつかの問題領域に、アノミー論やレイベリング論、自己論やコミュニケーション論、リスク社会論や社会的排除論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における青少年の逸脱行動の背景にある親密性の変容と、その非常に重要な要因となる人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を再検討するなかで、人間関係論的な観点からの逸脱行動論や社会統制論の理論枠組みを再検証する。社会病理学特別演習IIでは現代社会における親密性の変容を主題化する。	隔年
	社会問題論特別演習I	この特別演習では、犯罪/非行、いじめやひきこもりなど現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている逸脱行動論ならびに社会統制論のいくつかの問題領域に、アノミー論やレイベリング論、自己論やコミュニケーション論、リスク社会論や社会的排除論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における青少年の逸脱行動の背景にある親密性の変容と、その非常に重要な要因となる人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を再検討するなかで、人間関係論的な観点からの逸脱行動論や社会統制論の理論枠組みを再検証する。社会問題論特別演習Iでは人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会問題論特別演習II	この特別演習では、犯罪／非行、いじめやひきこもりなど現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている逸脱行動論ならびに社会統制論のいくつかの問題領域に、アノミー論やレイベリング論、自己論やコミュニケーション論、リスク社会論や社会的排除論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における青少年の逸脱行動の背景にある親密性の変容と、その非常に重要な要因となる人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を再検討するなかで、人間関係論的な観点からの逸脱行動論や社会統制論の理論枠組みを再検証する。社会問題論特別演習IIでは人間関係に対する青少年の社会的メンタリティの変化を主題化する。	隔年
	歴史社会学特別演習I	この特別演習では、戦争の記憶や社会学的な歴史叙述の方法など西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした歴史社会学のいくつかの問題領域に、社会意識論や言説分析、集合的記憶論やメディア論などそれらに関連する文化社会学の古典的な枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における戦争とその記憶、現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割などの諸問題を社会学的に再検討するなかで、それらの理論枠組みの可能性と限界を検証する。歴史社会学特別演習Iでは近代社会における戦争とその記憶を主題化する。	隔年
	歴史社会学特別演習II	この特別演習では、戦争の記憶や社会学的な歴史叙述の方法など西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした歴史社会学のいくつかの問題領域に、社会意識論や言説分析、集合的記憶論やメディア論などそれらに関連する文化社会学の古典的な枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における戦争とその記憶、現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割などの諸問題を社会学的に再検討するなかで、それらの理論枠組みの可能性と限界を検証する。歴史社会学特別演習IIでは近代社会における戦争とその記憶を主題化する。	隔年
	文化社会学特別演習I	この特別演習では、戦争の記憶や社会学的な歴史叙述の方法など西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした歴史社会学のいくつかの問題領域に、社会意識論や言説分析、集合的記憶論やメディア論などそれらに関連する文化社会学の古典的な枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における戦争とその記憶、現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割などの諸問題を社会学的に再検討するなかで、それらの理論枠組みの可能性と限界を検証する。文化社会学特別演習Iでは現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割を主題化する。	隔年
	文化社会学特別演習II	この特別演習では、戦争の記憶や社会学的な歴史叙述の方法など西欧近代社会における社会学の歴史を背景とした歴史社会学のいくつかの問題領域に、社会意識論や言説分析、集合的記憶論やメディア論などそれらに関連する文化社会学の古典的な枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における戦争とその記憶、現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割などの諸問題を社会学的に再検討するなかで、それらの理論枠組みの可能性と限界を検証する。文化社会学特別演習IIでは現代社会におけるメディアの機能や歴史叙述の役割を主題化する。	隔年
	都市社会学特別演習I	この特別演習では、グローバル化する現代都市や地域コミュニティの抱え込む諸々の課題など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている都市社会学や地域社会学のいくつかの問題領域に、グローバル都市論やコミュニティ論、リスクコミュニケーション論や社会的差別論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における都市のグローバル化と地域コミュニティの変容と、それらの非常に重要な要因となる、人やモノや情報の移動と定着の現代的な意味を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。都市社会学特別演習Iでは現代社会における都市のグローバル化を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	都市社会学特別演習II	この特別演習では、グローバル化する現代都市や地域コミュニティの抱え込む諸々の課題など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている都市社会学や地域社会学のいくつかの問題領域に、グローバル都市論やコミュニティ論、リスクコミュニケーション論や社会的差別論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における都市のグローバル化と地域コミュニティの変容と、それらの非常に重要な要因となる、人やモノや情報の移動と定着の現代的な意味を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。都市社会学特別演習IIでは現代社会における都市のグローバル化を主題化する。	隔年
	地域社会学特別演習I	この特別演習では、グローバル化する現代都市や地域コミュニティの抱え込む諸々の課題など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている都市社会学や地域社会学のいくつかの問題領域に、グローバル都市論やコミュニティ論、リスクコミュニケーション論や社会的差別論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における都市のグローバル化と地域コミュニティの変容と、それらの非常に重要な要因となる、人やモノや情報の移動と定着の現代的な意味を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。地域社会学特別演習Iでは現代社会における地域コミュニティの抱え込む諸々の課題を主題化する。	隔年
	地域社会学特別演習II	この特別演習では、グローバル化する現代都市や地域コミュニティの抱え込む諸々の課題など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている都市社会学や地域社会学のいくつかの問題領域に、グローバル都市論やコミュニティ論、リスクコミュニケーション論や社会的差別論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における都市のグローバル化と地域コミュニティの変容と、それらの非常に重要な要因となる、人やモノや情報の移動と定着の現代的な意味を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。地域社会学特別演習IIでは現代社会における地域コミュニティの抱え込む諸々の課題を主題化する。	隔年
	社会階層論特別演習AI	この特別演習では、社会移動と社会階層、教育や福祉をめぐる格差や不平等など近現代社会における社会学の歴史的展開とも同時代的に結び付いてきた社会階層論のいくつかの問題領域に、階級・階層論や社会移動研究、文化的再生産論や教育福祉論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における社会移動と社会階層、現代社会における教育や福祉をめぐる格差や不平等などを再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。AIでは近代社会における社会移動と社会階層を主題化する。	隔年
	社会階層論特別演習AII	この特別演習では、社会移動と社会階層、教育や福祉をめぐる格差や不平等など近現代社会における社会学の歴史的展開とも同時代的に結び付いてきた社会階層論のいくつかの問題領域に、階級・階層論や社会移動研究、文化的再生産論や教育福祉論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における社会移動と社会階層、現代社会における教育や福祉をめぐる格差や不平等などを再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。AIIでは近代社会における社会移動と社会階層を主題化する。	隔年
	社会階層論特別演習BI	この特別演習では、社会移動と社会階層、教育や福祉をめぐる格差や不平等など近現代社会における社会学の歴史的展開とも同時代的に結び付いてきた社会階層論のいくつかの問題領域に、階級・階層論や社会移動研究、文化的再生産論や教育福祉論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における社会移動と社会階層、現代社会における教育や福祉をめぐる格差や不平等などを再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。BIでは現代社会における労働をめぐる格差や不平等を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会階層論特別演習BII	この特別演習では、社会移動と社会階層、教育や福祉をめぐる格差や不平等など近現代社会における社会学の歴史的展開とも同時代的に結び付いてきた社会階層論のいくつかの問題領域に、階級・階層論や社会移動研究、文化的再生産論や教育福祉論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ近代社会における社会移動と社会階層、現代社会における教育や福祉をめぐる格差や不平等などを再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。BIIでは現代社会における労働をめぐる格差や不平等を主題化する。	隔年
	国際社会政策論特別演習AI	この特別演習では、国際人口移動の加速化や通信網の発達、国際労働市場の再編とそれに伴う社会政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている国際社会学や労働社会学のいくつかの問題領域に、グローバル化をめぐる研究や人的資本論、移民社会論やエスニシティ論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編と、それらに対応する社会政策の変容を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。国際社会学特別演習Iでは現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編を主題化する。	隔年
	国際社会政策論特別演習AII	この特別演習では、国際人口移動の加速化や通信網の発達、国際労働市場の再編とそれに伴う社会政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている国際社会学や労働社会学のいくつかの問題領域に、グローバル化をめぐる研究や人的資本論、移民社会論やエスニシティ論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編と、それらに対応する社会政策の変容を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。国際社会学特別演習IIでは現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編を主題化する。	隔年
	国際社会政策論特別演習BI	この特別演習では、国際人口移動の加速化や通信網の発達、国際労働市場の再編とそれに伴う社会政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている国際社会学や労働社会学のいくつかの問題領域に、グローバル化をめぐる研究や人的資本論、移民社会論やエスニシティ論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編と、それらに対応する社会政策の変容を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。労働社会学特別演習Iでは国際的な移動の加速化と労働市場の再編に伴う社会政策そのものの変容を主題化する。	隔年
	国際社会政策論特別演習BII	この特別演習では、国際人口移動の加速化や通信網の発達、国際労働市場の再編とそれに伴う社会政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている国際社会学や労働社会学のいくつかの問題領域に、グローバル化をめぐる研究や人的資本論、移民社会論やエスニシティ論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における国際移動の加速化と国際労働市場の再編と、それらに対応する社会政策の変容を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。労働社会学特別演習IIでは国際的な移動の加速化と労働市場の再編に伴う社会政策そのものの変容を主題化する。	隔年
	教育社会学特別演習I	この特別演習では、少子化やグローバル化やインターネット社会化とそれらに伴う教育政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている教育社会学やジェンダー社会論のいくつかの問題領域に、メリトクラシー論や脱・学校化社会論、文化的再生産論や学校文化論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化、揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。教育社会学特別演習Iでは現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化を主題化する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	教育社会学特別演習II	この特別演習では、少子化やグローバル化やインターネット社会化とそれらに伴う教育政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている教育社会学やジェンダー社会論のいくつかの問題領域に、メリトクラシー論や脱・学校化社会論、文化的再生産論や学校文化論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化、揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。教育社会学特別演習Iでは現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化を主題化する。	隔年
	ジェンダー社会論特別演習I	この特別演習では、少子化やグローバル化やインターネット社会化とそれらに伴う教育政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている教育社会学やジェンダー社会論のいくつかの問題領域に、メリトクラシー論や脱・学校化社会論、文化的再生産論や学校文化論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化、揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。ジェンダー社会論特別演習Iではジェンダー・トラックとの関連で揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を主題化する。	隔年
	ジェンダー社会論特別演習II	この特別演習では、少子化やグローバル化やインターネット社会化とそれらに伴う教育政策そのものの変容など現代社会における社会学の展開とも同時代的に結び付いている教育社会学やジェンダー社会論のいくつかの問題領域に、メリトクラシー論や脱・学校化社会論、文化的再生産論や学校文化論などそれらに関連する現代的な理論枠組みを応用するなかで、博士学位論文の作成に際して必要な構想力を養うことを目標とする。とりわけ現代社会における教育をめぐる格差と学校の多様化、揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を再検討するなかで、それらの理論枠組みの有効性と限界を検証する。ジェンダー社会論特別演習IIではジェンダー・トラックとの関連で揺らぐメリトクラシーと学びの方向転換を主題化する。	隔年
	東南アジア・オセアニア研究特別演習AI	この演習は、博士論文の研究課題に対する理解を深めることを目的とする。各学生は定期的に自分の論文概要と文献レビューに関する発表を行うことが求められる。教員もまた本演習で研究発表を行う。	隔年
	東南アジア・オセアニア研究特別演習AII	本演習は、AIでの学習に基づき、人文地理学、比較政治学等の観点から、東南アジア・オセアニア地域研究を深めるとともに、博士論文の指導を行う。学生は、自分の論文で使用するデータ・資料等を含む研究の進捗や分析結果と考察に関する発表を定期的に行うことが求められる。教員も本演習で研究発表を行うことで、受講学生や参画教員と研究上のアイデアを積極的に交換し、東南アジア・オセアニア地域研究の深化を図る。	隔年
	東南アジア・オセアニア研究特別演習BI	本演習は、人文地理学、比較政治学等の各アプローチから、東南アジア・オセアニア地域研究の学際的アプローチを理解するとともに、博士論文の指導を行う。学生は、近年の研究動向を踏まえ、学生は博士論文の構想や文献レビュー、データ・資料等を含む研究の方法に関する発表を定期的に行うことが求められる。教員も本演習で研究発表を行うことで、受講学生や参画教員と研究上のアイデアを積極的に交換し、学際的視点から東南アジア・オセアニア地域研究を推進する。	隔年
	東南アジア・オセアニア研究特別演習BII	本演習は、BIでの学習に基づき、人文地理学、比較政治学等の各アプローチから、東南アジア・オセアニアの学際的地域研究を深めるとともに、博士論文の指導を行う。学生は、自分の論文で使用するデータ・資料等を含む研究の進捗や分析結果に関する発表を定期的に行うことが求められる。教員も本演習で研究発表を行うことで、受講学生や参画教員と研究上のアイデアを積極的に交換し、学際的視点から東南アジア・オセアニア地域研究を深化を図る。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中央ユーラシア研究特別演習AI	ソ連解体後に独立した中央アジア5カ国を中心とする中央ユーラシア地域が抱える諸課題に関し、日・中央ユーラシア関係や日本の外交政策、日本が提示する解決の方法について議論する。また、中央ユーラシア地域研究の基本的アプローチを理解するとともに、先行研究のレビューやフィールドワークの方法、資料・史料、データの分析方法等の学習を通して、博士論文の指導を行う。特に、政治学・国際関係論、政治学・メディア論および歴史学の手法を用いて、主に中央ユーラシアの政治、国際関係、公共政策、歴史についての課題の論文指導を行う。	隔年
	中央ユーラシア研究特別演習AII	ソ連解体後に独立した中央アジア5カ国を中心とする中央ユーラシア地域が抱える諸課題に関し、日・中央ユーラシア関係や日本の外交政策、日本が提示する課題解決の方法について議論する。また、中央ユーラシア地域研究のアプローチへの理解を深めるとともに、分析結果の解析や解釈の方法を学ぶことを通して、博士論文の指導を行う。特に、政治学・国際関係論、政治学・メディア論および歴史学の手法を用いて、主に中央ユーラシアの政治、国際関係、公共政策、歴史についての課題の論文指導を行う。	隔年
	中央ユーラシア研究特別演習BI	ソ連解体後に独立した中央アジア5カ国を中心とする中央ユーラシア地域が抱える諸課題に関し、国際社会の持続可能な開発目標(SDGs)を踏まえた観点から議論する。また、中央ユーラシア地域研究の基本的アプローチを理解するとともに、先行研究のレビューやフィールドワークの方法、資料・史料、データの分析方法等の学習を通して、博士論文の指導を行う。博士論文の指導を行う。特に、政治学・国際関係論、政治学・メディア論および歴史学の手法を用いて、主に中央ユーラシアの政治、国際関係、公共政策、歴史についての課題の論文指導を行う。	隔年
	中央ユーラシア研究特別演習BII	ソ連解体後に独立した中央アジア5カ国を中心とする中央ユーラシア地域が抱える諸課題に関し、国際社会の持続可能な開発目標(SDGs)を踏まえた観点から議論する。また、中央ユーラシア地域研究のアプローチへの理解を深めるとともに、分析結果の解析や解釈の方法を学ぶことを通して、博士論文の指導を行う。特に、政治学・国際関係論、政治学・メディア論および歴史学の手法を用いて、主に中央ユーラシアの政治、国際関係、公共政策、歴史についての課題の論文指導を行う。	隔年
	中東・北アフリカ研究特別演習AI	開発経済学のアプローチや主要理論を理解するとともに、天然資源や水資源の制約、人口増と人口転換、国際的労働移動などの中東・北アフリカ経済の主要課題を演習形式で学習する。特に、他の途上国経済との比較分析を通して、中東・北アフリカ経済の構造とメカニズムを考察する。また、学生の研究テーマに応じて、博士論文の指導を行う。学生は、問題設定や仮説、分析枠組、使用するデータを含む博士論文の研究計画について報告する。	隔年
	中東・北アフリカ研究特別演習AII	開発経済学における理論モデルや実証分析の方法を学ぶとともに、資本蓄積と技術進歩の停滞、所得・賃金格差拡大、労働市場の不均衡等を含む中東・北アフリカ経済の主要課題を演習形式で学習する。特に、中東・北アフリカ経済を含む途上国経済の実証分析のレビューを基に、中東・北アフリカ経済の特殊性を理解する。また、学生の研究テーマに応じて、博士論文の指導を行う。学生は、使用するデータや分析結果と考察を含む博士論文の進捗について報告する。	隔年
	中東・北アフリカ研究特別演習BI	開発経済学のアプローチや主要理論を理解するとともに、教育格差、失業・不完全就業、貧困などの中東・北アフリカ経済の主要課題を演習形式で学習する。特に、他の途上国経済との比較分析を通して、中東・北アフリカ経済の構造とメカニズムを考察する。また、学生の研究テーマに応じて、博士論文の指導を行う。学生は、問題設定や仮説、分析枠組、使用するデータを含む博士論文の研究計画について報告する。	隔年
	中東・北アフリカ研究特別演習BII	開発経済学における理論モデルや実証分析の方法を学ぶとともに、貿易・投資の停滞や農業発展の制約を含む中東・北アフリカ経済の主要課題を演習形式で学習する。特に、中東・北アフリカ経済を含む途上国経済の実証分析のレビューを基に、中東・北アフリカ経済の特殊性を理解する。また、学生の研究テーマに応じて、博士論文の指導を行う。学生は、使用するデータや分析結果と考察を含む博士論文の進捗について報告する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ラテン・アメリカ研究特別演習AI	開発経済学や国際社会学の観点からラテン・アメリカ地域研究の基本的アプローチを議論するとともに、先行研究のレビューを通して、博士論文の指導を行う。開発経済学と国際社会学を融合させた分析枠組や分析手法を用いて、ラテン・アメリカの経済政策や公共政策に関する研究の方法を習得する。学生は、問題設定と仮説、分析枠組、使用するデータ、フィールドワークを含む調査・分析方法を報告することが期待される。	隔年
	ラテン・アメリカ研究特別演習AII	開発経済学や国際社会学の観点から、ラテン・アメリカ地域研究のアプローチに関する議論を深めるとともに、分析方法を学ぶことを通して、博士論文の指導を行う。開発経済学と国際社会学を融合させた分析枠組や分析手法を用いて、ラテン・アメリカの経済政策や公共政策に関する研究の方法を習得する。学生は、収集した資料やデータによる分析結果、フィールドワークによる調査結果などを報告することが期待される。	隔年
	ラテン・アメリカ研究特別演習BI	開発経済学や国際社会学の観点から、ラテン・アメリカ地域研究の基本的アプローチを議論するとともに、先行研究のレビューを通して、博士論文の指導を行う。開発経済学と国際社会学を融合させた分析枠組や分析手法を用いて、ラテン・アメリカの社会開発政策や社会政策に関する研究の方法を習得する。学生は、問題設定と仮説、分析枠組、使用するデータ、フィールドワークを含む調査・分析方法を報告することが期待される。	隔年
	ラテン・アメリカ研究特別演習BII	開発経済学や国際社会学の観点から、ラテン・アメリカ地域研究のアプローチに関する議論を深めるとともに、分析方法を学ぶことを通して、博士論文の指導を行う。開発経済学と国際社会学を融合させた分析枠組や分析手法を用いて、ラテン・アメリカの社会開発政策や社会政策に関する研究の方法を習得する。学生は、収集した資料やデータによる分析結果、フィールドワークによる調査結果などを報告することが期待される。	隔年
	経済学特別演習AI	ミクロ経済学やマクロ経済学、国際経済学、計量経済学などの経済学の主要分野を中心に、経済理論やモデルについて議論を深めつつ、演習形式による博士論文の指導を行う。受講生は、博士論文の問題設定、仮説、理論的枠組と経済モデル、使用するデータ、分析方法等を含む研究計画について発表し、経済系全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、研究水準の深化を図る。	隔年
	経済学特別演習AII	経済学特別演習AIでの学習を踏まえ、また、ミクロ経済学やマクロ経済学、国際経済学、計量経済学などの経済学の主要分野を中心に、実証分析について議論を深めつつ、演習形式による博士論文の指導を行う。受講生は、実証分析のデータやモデル、分析結果や考察について発表し、経済系全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、学生ともディスカッションを行うことにより、研究水準の深化と質の向上を図る。	隔年
	経済学特別演習BI	公共経済学、開発経済学、農業経済学などの経済学の応用分野を中心に、理論やモデルについて議論を深めつつ、演習形式による博士論文の指導を行う。受講生は、受講生は、博士論文の問題設定、仮説、理論的枠組と経済モデル、使用するデータ、分析方法等を含む研究計画について発表し、経済系全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、学生ともディスカッションを行うことにより、研究水準の深化を図る。	隔年
	経済学特別演習BII	経済学特別演習BIでの学習と 公共経済学、開発経済学、農業経済学などの経済学の応用分野を中心に、実証分析の方法をについて議論を深めつつ、演習形式による博士論文の指導を行う。受講生は、実証分析のデータやモデル、分析結果や考察について発表し、経済系全教員から今後の研究について指導・助言を受けるとともに、学生ともディスカッションを行うことにより、研究水準の深化と質の向上を図る。	隔年
	国際開発政策論特別演習AI	本演習は、国際開発問題とそれに関する政策研究の上級編である。現代的トピックと開発経済における課題を扱い、最新の分析ツールをレビューし、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ諸国における開発政策の課題を理解する。学生は、幅広く文献を読んだ上で発表を行い、開発経済学における最近の貢献についての議論やレビューに参加することが求められる。同演習は、開発経済学や開発政策問題におけるにおいて幅広いテーマを順番に扱う。	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際開発政策論特別演習AII	本演習は、国際開発問題とそれに関する政策研究の上級編である。現代的トピックと開発経済における課題を扱い、最新の分析ツールをレビューし、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ諸国における開発政策の課題を理解する。学生は、幅広く文献を読んだ上で発表を行い、開発経済学における最近の貢献についての議論やレビューに参加することが求められる。開発経済学における理論上および分析上の問題に焦点をあてる。また、開発開発政策における国別および地域別の経験とケーススタディ、各国の相互作用と協力を扱う。	隔年
	国際開発政策論特別演習BI	本演習は、国際開発問題とそれに関する政策研究の上級編である。現代的トピックと開発経済における課題を扱い、最新の分析ツールをレビューし、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ諸国における開発政策の課題を理解する。学生は、幅広く文献を読んだ上で発表を行い、開発経済学における最近の貢献についての議論やレビューに参加することが求められる。同演習は、開発経済学や開発政策問題におけるにおいて幅広いテーマを順番に扱う。	隔年
	国際開発政策論特別演習BII	本演習は、国際開発問題とそれに関する政策研究の上級編である。現代的トピックと開発経済における課題を扱い、最新の分析ツールをレビューし、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ諸国における開発政策の課題を理解する。学生は、幅広く文献を読んだ上で発表を行い、開発経済学における最近の貢献についての議論やレビューに参加することが求められる。開発経済学における理論上および分析上の問題に焦点をあてる。また、開発開発政策における国別および地域別の経験とケーススタディ、各国の相互作用と協力を扱う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
国際 日本 研究 関連 科目	リサーチ・プログラム開発5	<p>自らの研究テーマに関して指導教員(複数が望ましい)の指定する学習教材、文献、各種資料などをはば広く集中的に学習し、また関連する学会、シンポジウム、会議、公開講座等に参加し、そこでの学習成果を「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録する。それを指導教員に報告し、学習の進捗度について指導を受ける。学習の進捗状況、学習内容について「可」としての判断が出た場合、最終レポートを執筆し、レポートが合格になれば単位が与えられる。学習内容、レポートは通常の10回分の講義および予復習を通じて身につけられる程度に相当する質と量が必要である。レポートおよび「リサーチ・プログラム開発ノート」はウェブ上で公開することを原則とする。本演習は早期修了予定者が修士論文作成に必要な知識を習得することを念頭に置いて開講するものであり、履修に先立って、指導教員の許可がある。早期修了予定者以外の学生で特別な理由があり、本演習を受講したい者は、事前に指導教員、学位プログラムリーダーの承諾がある。本演習では早期修了のために必要な学習プロセスの基本(学会発表等)についても学ぶ。レポートは「リサーチ・プログラム開発1, 2, 3, 4」とは別のものでなければならない。</p>	
	リサーチ・プログラム開発6	<p>自らの研究テーマに関して指導教員(複数が望ましい)の指定する学習教材、文献、各種資料などをはば広く集中的に学習し、また関連する学会、シンポジウム、会議、公開講座等に参加し、そこでの学習成果を「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録する。それを指導教員に報告し、学習の進捗度について指導を受ける。学習の進捗状況、学習内容について「可」としての判断が出た場合、最終レポートを執筆し、レポートが合格になれば単位が与えられる。学習内容、レポートは通常の10回分の講義および予復習を通じて身につけられる程度に相当する質と量が必要である。レポートおよび「リサーチ・プログラム開発ノート」はウェブ上で公開することを原則とする。本演習は早期修了予定者が修士論文作成に必要な知識を習得することを念頭に置いて開講するものであり、履修に先立って、指導教員の許可がある。早期修了予定者以外の学生で特別な理由があり、本演習を受講したい者は、事前に指導教員、学位プログラムリーダーの承諾がある。本演習では早期修了のために必要な学習プロセスの基本(学会発表等)についても学ぶ。「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録される学習内容、レポートは「リサーチ・プログラム開発1, 2, 3, 4, 5」とは別のものでなくてはならない。</p>	
	リサーチ・プログラム開発7	<p>自らの研究テーマに関して指導教員(複数が望ましい)の指定する学習教材、文献、各種資料などをはば広く集中的に学習し、また関連する学会、シンポジウム、会議、公開講座等に参加し、そこでの学習成果を「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録する。それを指導教員に報告し、学習の進捗度について指導を受ける。学習の進捗状況、学習内容について「可」としての判断が出た場合、最終レポートを執筆し、レポートが合格になれば単位が与えられる。学習内容、レポートは通常の10回分の講義および予復習を通じて身につけられる程度に相当する質と量が必要である。レポートおよび「リサーチ・プログラム開発ノート」はウェブ上で公開することを原則とする。本演習は早期修了予定者が修士論文作成に必要な知識を習得することを念頭に置いて開講するものであり、履修に先立って、指導教員の許可がある。早期修了予定者以外の学生で特別な理由があり、本演習を受講したい者は、事前に指導教員、学位プログラムリーダーの承諾がある。本演習では早期修了のために必要な学習プロセスの基本(学会発表等)についても学ぶ。「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録される学習内容、レポートは「リサーチ・プログラム開発1, 2, 3, 4, 5, 6」とは別のものでなくてはならない。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	リサーチ・プログラム開発8	<p>自らの研究テーマに関して指導教員(複数が望ましい)の指定する学習教材、文献、各種資料などをはば広く集中的に学習し、また関連する学会、シンポジウム、会議、公開講座等に参加し、そこでの学習成果を「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録する。それを指導教員に報告し、学習の進捗度について指導を受ける。学習の進捗状況、学習内容について「可」としての判断が出た場合、最終レポートを執筆し、レポートが合格になれば単位が与えられる。学習内容、レポートは通常の10回分の講義および予復習を通じて身につけられる程度に相当する質と量が必要である。レポートおよび「リサーチ・プログラム開発ノート」はウェブ上で公開することを原則とする。本演習は早期修了予定者が修士論文作成に必要な知識を習得することを念頭に置いて開講するものであり、履修に先立っては、指導教員の許可がある。早期修了予定者以外の学生で特別な理由があり、本演習を受講したい者は、事前に指導教員、学位プログラムリーダーの承諾がある。本演習では早期修了のために必要な学習プロセスの基本(学会発表等)についても学ぶ。「リサーチ・プログラム開発ノート」に記録される学習内容、レポートは「リサーチ・プログラム開発1, 2, 3, 4, 5, 6, 7」とは別のものでなくてはならない。</p>	
	日本社会と家2	<p>日本の伝統的な家業経営体であるイエの構造、その組織原理としての特性やイエが育む個人主義を比較歴史制度分析の視点からとらえることを目指して、組織原理としての「家」を巡る歴史観や理論を演習を通して再検討する。一休の転生と破戒の思想—日本個人主義の—源流、「近代」の脱オリエンタリズム的再定義—産業革命はなかった、「家」社会の個人と組織—西洋と日本の近代、日本における暴力の宗教的正統化、イエ社会の盛衰とイモセの絆、「甘え」の破綻と「いき」の復権、母性社会論の脱構築、といった論点について、『平山朝治著作集 第4巻 「家」の伝統と現代社会』（中央経済社、2009年）をテキストとして検討する。</p>	隔年
	韓国社会と家2	<p>韓国社会における「家」について他文化圏との比較考察を交えつつ学ぶ。韓国の「家」は、伝統的に儒教思想の強い影響下にあったが、植民地の時代を経ながら、また近代化の進行の中で変貌を余儀なくされている。現代においては高齢化問題、少子化問題の深刻化が進み、政治・社会・経済の変動にともなう、老父母扶養の問題、夫婦間の役割問題、親子間の価値観問題なども顕在化している。この授業では、主に韓国の伝統的な家族倫理と家庭教育の内容に関する諸文献を講読しながら、中国、日本の「家」との比較考察を行う。</p>	隔年
	日本古典文化と身体2	<p>東アジア地域において同じ儒教文化圏に属しながらも、武人政権の長い歴史を持っている日本文化は、儒教的身心論の展開においても中国と朝鮮とは異なる特性を表している。一つは「文武二道」として、日常生活のなかでの身体的能力の錬磨の重視であり、もう一つは「賞罰を施すと云も、此身のはたらき上に従て置施ぞ」というような、身体的行動がもたらす結果を心的な動議よりも重視している点である。この授業では、こうした点をベースにおいて、江戸時代の儒学者の言説を取り扱い、日本人が伝統的に受け継いできた身体的所作について、中国、韓国との比較においてその文化的意義を学ぶ。</p>	隔年
	日本のエンターティメントと社会経済	<p>日本の貨幣経済と、冤罪で殺された貴人の怨霊・御霊を祭って災異を避け、加護を得るという信仰は、7世紀後半に東南アジアから伝わった東方キリスト教に由来する（『平山朝治著作集 第3巻 貨幣と市民社会の起源』中央経済社、2009年）。尾池和夫らによれば祇園祭は869=貞観11年（2011年の1周期前）の東日本大震災後に行われた神泉苑御霊会にはじまり https://blog.goo.ne.jp/kotodama2009/e/b034458fc6acbf07cff0150b5411ee24、「京都の地球科学（二五五）」『氷室』2015年7月号）、多くの人が説くように蘇民将来伝説は過越と似ており、祇園守紋は×十字であるように、東方キリスト教起源の怨霊・御霊信仰が日本の伝統的な祭礼や芸能を生み出した。このような日本の伝統的エンターティメントと社会経済の関係について、上記拙著を予め読んだ上で、DVD視聴や実地体験をふまえて議論し、知見を深めることを目的とする。祇園祭DVD、能楽DVD（道成寺 梅若六郎）、歌舞伎DVD（京鹿子娘道成寺 坂東玉三郎）などを取り上げ、祇園祭の宵山、山鉦巡行、神輿渡御などの見学（7月16～17日、京都）を行う。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	情報学特別演習 1 A	文献輪読による演習形式の科目。具体的には中井正一の文章及びその関連文献を読み討論する。身につく力は討論力、テキスト分析力である。中井正一（1900-52）は戦前は映画を射程に入れた美学者として知られ、現代のマスメディアの報道等も射程に入れた独自の美学を構築し、また反ファシズムの運動の一環で読者の投稿のみによって作られることを目標にした新聞を刊行した。メディア、媒介を意味する言葉として中井はメディウム、ミッテル二つの概念を対比させた。メディウムは媒介物というモノ、ミッテルは媒介するというコトであり、メディウムは本や理論や知識人で、ミッテルは対話や実践や大衆でもある。またメディウムが一方であるのに対してミッテルは双方向である。中井はメディウムからミッテルへと一貫して唱えつつ、晩年、そのことへの躊躇の念ももたず。中井のこの揺れをテキストの緻密な分析を通して追うと共にその現代的意義を探りたい。	
	東アジアの思想と文化3	中国・韓国（朝鮮半島）・日本の東アジア地域は、古くから漢字文化圏、それにちなんで儒教文化圏とも呼ばれてきた。本授業では、東アジアにおける儒教思想、特に中国宋代の新儒学の勃興以降の展開と特徴を比較的な観点で考察することを目的とする。とりわけここでは、中国の新儒学と朝鮮時代の儒学思想を念頭に置いて、日本の江戸時代の儒学思想の展開と特徴を考察する。朝鮮時代の李退溪思想は、江戸中期の崎門学派や幕末・明治期の熊本実学派の思想形成に少なくない影響を与えた。しかし彼らの李退溪への尊崇とは裏腹に、実質的な思想展開の面においては独自の特性をあらわしている。主に山崎闇斎や佐藤直方などの崎門学派の文献を講読しながら、中国儒学また李退溪に代表される朝鮮儒学とは異なる日本の思想営為の特徴を考察する。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	東アジアの思想と文化4	中国・韓国（朝鮮半島）・日本の東アジア地域は、古くから漢字文化圏、それにちなんで儒教文化圏とも呼ばれてきた。本授業では、東アジアにおける儒教思想、特に中国宋代の新儒学の勃興以降の展開と特徴を比較的な観点で考察することを目的とする。とりわけここでは、日本の幕末・明治期の儒学思想の展開と特徴を考察する。主に大塚退野、横井小楠、元田永孚といった熊本実学派の文献を講読しながら、大勢の西洋文明の流れの中で朱子学（退溪学）的な儒教の復活を唱える、その時代的意義を当時の中国、韓国の儒学界との比較において考察する。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	日本文化と経済思想2	日本神話のなかに分権的社会経済を支える自由主義の伝統を見出すことをめざす。新羅王子・天日槍にはじまる系譜の復元、神功・応神像の変遷、道照の偉業、日本における自由主義の誕生、アマテラスと天岩戸神話のなりたち、スサノオと出雲神話のなりたち、神武東征のなりたち、といった論点について、拙著「記紀皇統譜の女系原理：天日槍（=天彦火）王家の復元」 http://doi.org/10.15068/00137842 , 「日本神話にみる自由主義のなりたち」 http://doi.org/10.15068/00137840 をテキストとして検討する。	隔年
	日本文化と経済思想3	天皇制のなかに分権的社会経済を支える自由主義の伝統を見出すことをめざす。女系原理と女帝の進化、一休の恋人、譲位慣行進化論、長屋王の聖徳太子、光明皇后と鑑真の聖徳太子、室町の十字架一足利義嗣と一休宗純、水戸学と自由の伝統、といった論点について、『平山朝治著作集 第5巻 天皇制を読み解く』（中央経済社、2009年）や、拙著書評論文「水戸学に自由の伝統を発掘 吉田俊純著『水戸学の研究：明治維新史の再検討』（明石書店、二〇一六年五月）」（ http://hdl.handle.net/2241/00146873 ）をテキストとして検討する。	隔年
	比較日本文学論1A	近代以降の日本の文学を研究対象として取り扱う際、海外の文化や文学との交流や影響関係を考えることは大変重要である。本授業は、比較文学の手法を用いて、日本近・現代文学の問題点を考察し、履修者が当該分野の学術論文を準備することを目的とする。日本の近・現代文学を比較文学的視野から扱う、多言語のテキストの精読による実証研究や、ジェンダー理論・ポストコロニアル理論などを用いたテキスト研究に関する研究の実践・指導を行い、当該分野についての博士論文の指導を行う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	比較日本文学論1B	近代以降の日本の文学を研究対象として取り扱う際、海外の文化や文学との交流や影響関係を考えることは大変重要である。本授業は、比較文学の手法を用いて、日本近・現代文学の問題点を考察し、履修者が当該分野の学術論文を作成・発表することを目的とする。日本の近・現代文学を比較文学的視野から扱う、多言語のテキストの精読による実証研究や、ジェンダー理論・ポストコロニアル理論などを用いたテキスト研究に関する研究の実践・指導を行い、当該分野についての博士論文の指導を行う。「比較日本文学論3A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	比較日本文学論2A	近代以降の日本の文学を研究対象として取り扱う際、海外の文化や文学との交流や影響関係を考えることは大変重要である。本授業は、比較文学の手法を用いて、日本近・現代文学の問題点を考察し、履修者が当該分野の学術論文を準備することを目的とする。日本の近・現代文学を比較文学的視野から扱う、多言語のテキストの精読による実証研究や、ジェンダー理論・翻訳理論などを用いたテキスト研究に関する研究の実践・指導を行い、当該分野についての博士論文の指導を行う。「比較日本文学論3A, 3B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	比較日本文学論2B	近代以降の日本の文学を研究対象として取り扱う際、海外の文化や文学との交流や影響関係を考えることは大変重要である。本授業は、比較文学の手法を用いて、日本近・現代文学の問題点を考察し、履修者が当該分野の学術論文を作成・発表することを目的とする。日本の近・現代文学を比較文学的視野から扱う、多言語のテキストの精読による実証研究や、ジェンダー理論・翻訳理論などを用いたテキスト研究に関する研究の実践・指導を行い、当該分野についての博士論文の指導を行う。「比較日本文学論3A, 3B, 4A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	日本文芸・文化研究1A	世界的にみても、ある文学作品が発生するのは、その国家・民族の文化活動の一環であることはいままでのことである。本講義では日本文学古典作品について文学史の基本的事項をふまえながらカルチュラルスタディーズの手法を応用しつつ、受講する大学院生の研究対象に即して、研究の指導を適宜発表の形式も交えながら行っていく。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	日本文芸・文化研究1B	世界的にみても、ある文学作品が発生するのは、その国家・民族の文化活動の一環であることはいままでのことである。本講義では日本文学近代作品について文学史の基本的事項をふまえながらカルチュラルスタディーズの手法を応用しつつ、受講する大学院生の研究対象に即して、研究の指導を適宜発表の形式も交えながら行っていく。「日本文芸・文化研究1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	日本文芸・文化研究2A	世界的にみても、ある文学作品が発生するのは、その国家・民族の文化活動の一環であることはいままでのことである。本講義では日本文学古典作品について文学史の基本的事項をふまえながらカルチュラルスタディーズの手法を応用しつつ、受講する大学院生の研究対象に即して、研究の指導を適宜発表の形式も交えながら行っていく。「日本文芸・文化研究1A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	日本文芸・文化研究2B	世界的にみても、ある文学作品が発生するのは、その国家・民族の文化活動の一環であることはいままでのことである。本講義では日本文学の近代作品について文学史の基本的事項をふまえながらカルチュラルスタディーズの手法を応用しつつ、受講する大学院生の研究対象に即して、研究の指導を適宜発表の形式も交えながら行っていく。「日本文芸・文化研究1A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	社会情報論1	社会関係資本の形成過程とインターネットの利用の関連性、利用者、コミュニティ、社会への効果を学習する。情報通信、コミュニティ、地域振興、地方自治という視点から考える。この授業では、指定された文献を図書館のデータベースよりダウンロードし、授業のときまでに読み、事前にレポートをウェブにて提出する。授業では文献に関するディスカッションとプレゼンテーションを行い、他の履修生と情報共有し、授業後にその活動内容を報告する。これを、各回実施する。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会情報論2	社会関係資本の形成過程とインターネットの利用の関連性、利用者、コミュニティ、社会への効果を学習する。情報通信、コミュニティ、地域振興、地方自治という視点から考える。この授業では、指定された文献を図書館のデータベースよりダウンロードし、授業のときまでに読み、事前にレポートをウェブにて提出する。授業では文献に関するディスカッションとプレゼンテーションを行い、他の履修生と情報共有し、授業後にその活動内容を報告する。これを、各回実施する。「社会情報論1」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	コミュニケーションの人類学1A	文化社会的な場に埋め込まれた実践行動としてのコミュニケーションを、言語人類学の手法を通して記述/解釈する方法について学ぶ。また英語と日本語のエスノグラフィーのケーススタディ論文を読み、それを土台として議論を行う力を養う。受講者各自がデータ収集を行う（フィールドワークと相互行為の文字化）体験を通して、自律的にコミュニケーションを分析する方法を学ぶ。	隔年
	コミュニケーションの人類学1B	文化社会的な場に埋め込まれた実践行動としてのコミュニケーションを、言語人類学の手法を通して記述/解釈する方法について学ぶ。また英語と日本語のエスノグラフィーのケーススタディ論文を読み、それを土台として議論を行う力を養う。受講者各自がデータ収集を行う（フィールドワークと相互行為の文字化）体験を通して、自律的にコミュニケーションを分析する方法を学ぶ。「コミュニケーションの人類学1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	コミュニケーションの人類学2A	文化社会的な場に埋め込まれた実践行動としてのコミュニケーションを、言語人類学の手法を通して記述/解釈する方法について学ぶ。また英語と日本語のエスノグラフィーのケーススタディ論文を読み、それを土台として議論を行う力を養う。受講者各自がデータ収集を行う（フィールドワークと相互行為の文字化）体験を通して、自律的にコミュニケーションを分析する方法を学ぶ。「コミュニケーションの人類学1A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	コミュニケーションの人類学2B	文化社会的な場に埋め込まれた実践行動としてのコミュニケーションを、言語人類学の手法を通して記述/解釈する方法について学ぶ。また英語と日本語のエスノグラフィーのケーススタディ論文を読み、それを土台として議論を行う力を養う。受講者各自がデータ収集を行う（フィールドワークと相互行為の文字化）体験を通して、自律的にコミュニケーションを分析する方法を学ぶ。「コミュニケーションの人類学1A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	相互行為分析研究1A	社会学者のHarvey Sacks, Emanuel Schegloff, Gail Jeffersonらによって開発された、相互行為組織の研究法である「会話分析」において、最も重要な分析概念の一つである「行為形成(action formation)」に関連する主要文献を精読し、議論することによって正確な理解を深める。また、各論文における記述や主張が、実際の日本語における社会的行為の産出と理解についての記述にどのように適用可能かを検討する。これらの作業を通して、社会的行為を産出し、理解するというのはいかなることかという根源的問いに対する洞察を深める。	隔年
	相互行為分析研究1B	社会学者のHarvey Sacks, Emanuel Schegloff, Gail Jeffersonらによって開発された、相互行為組織の研究法である「会話分析」の理論的背景・視点・方法的意義等について、重要文献を中心に精読し、議論することによって正確な理解を深める。また、その理解を踏まえた上で、モデルとなる先行研究論文を具体的に検討することを通して、会話分析的研究として論文を作成する際のポイントについて学ぶ。さらに、受講生自身が執筆中の研究論文について、相互に検討・討議し、質の高い投稿論文に仕上げる技術を身につける。	隔年
	相互行為分析研究2A	社会学者のHarvey Sacks, Emanuel Schegloff, Gail Jeffersonらによって開発された、相互行為組織の研究法である「会話分析」において、最も重要な分析概念の一つである「行為形成(action formation)」に関連する主要文献を精読し、議論することによって正確な理解を深める。また、各論文における記述や主張が、実際の日本語における社会的行為の産出と理解についての記述にどのように適用可能かを検討する。これらの作業を通して、社会的行為を産出し、理解するというのはいかなることかという根源的問いに対する洞察を深める。「相互行為分析研究1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	相互行為分析研究2B	社会学者のHarvey Sacks, Emanuel Schegloff, Gail Jeffersonらによって開発された、相互行為組織の研究法である「会話分析」の理論的背景・視点・方法論的意義等について、重要文献を中心に精読し、議論することによって正確な理解を深める。また、その理解を踏まえた上で、モデルとなる先行研究論文を具体的に検討することを通して、会話分析的研究として論文を作成する際のポイントについて学ぶ。さらに、受講生自身が執筆中の研究論文について、相互に検討・討議し、質の高い投稿論文に仕上げる技術を身につける。「相互行為分析研究1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	メディア思想と日本社会3	本授業はメディア研究の生成とその歴史的社会的背景を考えるものである。マス・メディアが誕生して以降、メディアは政治経済文化などさまざまな現象に影響を与え、また影響を受けてきた。メディア研究にはそのような歴史的社会的背景が色濃く影響している。本授業では、メディア研究やその中の種々の理論や批評がいかにして生まれたのかを歴史的社会的連関の中で考察し、そこから透過できる日本社会とメディア思想についての理解を深めることを目的としている。授業は適切なメディア研究と近現代日本史に関するテキストを選別し、担当箇所を受講生が報告し、全体で議論を進め、理解を深めていく輪読形式をとる。これをつうじて先行研究の把握と論文における課題設定の方法、論理的実証的な研究の進め方について学習する。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	メディア思想と日本社会4	本授業はメディア研究の生成とその歴史的社会的背景を考えるものである。マス・メディアが誕生して以降、メディアは政治経済文化などさまざまな現象に影響を与え、また影響を受けてきた。メディア研究にはそのような歴史的社会的背景が色濃く影響している。本授業では、メディア研究やその中の種々の理論や批評がいかにして生まれたのかを歴史的社会的連関の中で考察し、そこから透過できる日本社会とメディア思想についての理解を深めることを目的としている。授業は適切なメディア研究と近現代日本史に関するテキストを選別し、担当箇所を受講生が報告し、全体で議論を進め、理解を深めていく輪読形式をとる。これをつうじて先行研究の把握と論文における課題設定の方法、論理的実証的な研究の進め方について学習する。「メディア思想と日本社会3」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	比較メディア思想3	本授業は、メディア研究の生成とその歴史的社会的背景について、新聞・映画・ラジオ・テレビなどの各メディアとの比較メディア史的観点及び欧米やアジア諸国と日本との国際比較の観点から、考えるものである。マス・メディアが誕生して以降、メディアは政治経済文化などさまざまな現象に影響を与え、また影響を受けてきた。メディア研究やメディアを考察するメディア思想にはそのような社会現象が強く刻印されている。メディア研究やメディア思想への考察から、社会や政治や文化の国ごとの特質や共通性について理解できるようになる。授業はメディア史やメディア思想に関する適切なテキストを選別し、担当箇所を受講生が報告し、全体で議論を進め、理解を深めていく輪読形式をとる。これをつうじて先行研究の把握と論文における課題設定の方法、論理的実証的な研究の進め方について学習する。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	比較メディア思想4	本授業は、メディア研究の生成とその歴史的社会的背景について、新聞・映画・ラジオ・テレビなどの各メディアとの比較メディア史的観点及び欧米やアジア諸国と日本との国際比較の観点から、考えるものである。マス・メディアが誕生して以降、メディアは政治経済文化などさまざまな現象に影響を与え、また影響を受けてきた。メディア研究やメディアを考察するメディア思想にはそのような社会現象が強く刻印されている。メディア研究やメディア思想への考察から、社会や政治や文化の国ごとの特質や共通性について理解できるようになる。授業はメディア史やメディア思想に関する適切なテキストを選別し、担当箇所を受講生が報告し、全体で議論を進め、理解を深めていく輪読形式をとる。これをつうじて先行研究の把握と論文における課題設定の方法、論理的実証的な研究の進め方について学習する。「比較メディア思想3」とは異なるトピックスを扱う。	隔年 講義 8 時間 演習 7 時間
	日本政治と市民社会3	日本の政治や市民社会に関する日本語の文献を講読し、その内容を深く理解するとともに、受講者自身の研究に活かしていく。そのため、受講者の研究関心に応じた文献をを精読したうえで、課題設定、研究方法、議論の含意等について批判的に検討する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本政治と市民社会4	「日本政治と市民社会3」に引き続き、日本の政治や市民社会に関する日本語の文献（「日本政治と市民社会3」では取り上げなかったもの）を講読し、その内容を深く理解するとともに、受講者自身の研究に活かしていく。そのため、受講者の研究関心に応じた文献をを精読したうえで、課題設定、研究方法、議論の含意等について批判的に検討する。	隔年
	Japan's Politics and Civil Society 3	In this class, we aim to improve the participants' researches through examination of literatures in English concerning Japanese politics and civil society. We examine literatures critically in terms of research questions, methodology, implications, and so on. 日本の政治や市民社会に関する英語の文献を講読し、その内容を深く理解するとともに、受講者自身の研究に活かしていく。そのため、受講者の研究関心に応じた文献をを精読したうえで、課題設定、研究方法、議論の含意等について批判的に検討する。	隔年
	Japan's Politics and Civil Society 4	Following "Japan's Politics and Civil Society 3", we aim to improve the participants' researches through examination of English literatures other than those of "Japan's Politics and Civil Society 3" concerning Japanese politics and civil society. We examine literatures critically in terms of research questions, methodology, implications, and so on. "Japan's Politics and Civil Society 3"に引き続き、日本の政治や市民社会に関する英語の文献（"Japan's Politics and Civil Society 3"では取り上げなかったもの）を講読し、その内容を深く理解するとともに、受講者自身の研究に活かしていく。そのため、受講者の研究関心に応じた文献をを精読したうえで、課題設定、研究方法、議論の含意等について批判的に検討する。	隔年
	比較政治3	本科目の目的は、政治学のトップ・ジャーナルに掲載された論文（「比較政治4」、「Comparative Politics 3」、「Comparative Politics 4」で取り上げなかったもの）の講読を通して、比較政治の理論や方法に関する理解を深め、受講者が博士論文の着想を得ることにある。受講者は自身の論文や研究計画を報告し、他の参加者や担当教員との議論を通して、論文の質を向上させることが期待される。	隔年
	比較政治4	本科目の目的は、政治学のトップ・ジャーナルに掲載された論文（「比較政治3」、「Comparative Politics 3」、「Comparative Politics 4」で取り上げなかったもの）の講読を通して、比較政治の理論や方法に関する理解を深め、受講者が査読付学術誌に出版できる能力を身につけることにある。受講者は自身の論文を報告し、他の参加者や担当教員との議論を通して、論文の質を向上させることが期待される。	隔年
	Comparative Politics 3	The goal of this course is that students improve their understandings of theories and approaches that are used in the field of comparative politics through the readings of articles that are published in top journals in political science (and that are not examined in "比較政治3", "比較政治4", and "Comparative Politics 4"). Through this training, students are expected to generate the idea of their dissertation. Students are expected to present their own research or research plan, discuss it with other participants and the instructor, and improve their project. 本科目の目的は、政治学のトップ・ジャーナルに掲載された論文（「比較政治3」、「比較政治4」、「Comparative Politics 4」で取り上げなかったもの）の講読を通して、比較政治の理論や方法に関する理解を深め、受講者が博士論文の着想を得ることにある。受講者は自身の論文や研究計画を報告し、他の参加者との議論を通して、論文の質を向上させることが期待される。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Comparative Politics 4	<p>The goal of this course is that students improve their understandings of theories and approaches that are used in the field of comparative politics through the readings of articles that are published in top journals in political science (and that are not examined in “比較政治3”, “比較政治4”, and “Comparative Politics 3”). Through this training, students are expected to acquire necessary skills to publish in peer-reviewed journals. Students are expected to present their own research, discuss it with other participants and the instructor, and improve their project.</p> <p>本科目の目的は、政治学のトップ・ジャーナルに掲載された論文（「比較政治3」、「比較政治4」、「Comparative Politics 3」で取り上げなかったもの）の講読を通して、比較政治の理論や方法に関する理解を深め、受講者が査読付学術誌に出版できる能力を身に付けることにある。受講者は自身の論文を報告し、他の参加者との議論を通して、論文の質を向上させることが期待される。</p>	隔年
	Foreign Relations of Japan 3A	<p>This course examines the historical background of modern Japanese foreign relations with an emphasis on the political and security spheres. It also discusses various methodological subjects regarding historical research of modern Japanese foreign relations. The lectures focus on pre-WWII (between 1890 and 1945) Japanese history. The lectures and class discussion will be conducted in English. Textbook and other materials used in class will be limited in those published in English. Active participation in class discussions is strongly encouraged. Those who are taking this course shall also take “Foreign Relations of Japan 3B”.</p> <p>本講義は現代日本の対外政策の形成とその歴史的背景を、政治及び安全保障面を中心に、議論するものである。更に、現代日本の対外関係に関する歴史的な研究の方法論についても適宜に議論する。本講義は戦前期（1890年～1945年）を対象とする。講義は原則的に英語で行われる。教科書や各種資料も英語の出版物を中心に選定する。講義中、活発な議論を強く奨励する。なお、本講義を履修するには“Foreign Relations of Japan 3B”も併せて履修することが必要である。</p>	隔年
	Foreign Relations of Japan 3B	<p>This course examines the historical background of modern Japanese foreign relations with an emphasis on the political and security spheres. It also discusses various methodological subjects regarding historical research of modern Japanese foreign relations. The lectures focus on pre-WWII (between 1890 and 1945) Japanese history. The lectures and class discussion will be conducted in English. Textbook and other materials used in class will be limited in those published in English. Active participation in class discussions is strongly encouraged. Those who are taking this course shall also take “Foreign Relations of Japan 3A”.</p> <p>本講義は現代日本の対外政策の形成とその歴史的背景を、政治及び安全保障面を中心に、議論するものである。更に、現代日本の対外関係に関する歴史的な研究の方法論についても適宜に議論する。本講義は戦前期（1890年～1945年）を対象とする。講義は原則的に英語で行われる。教科書や各種資料も英語の出版物を中心に選定する。講義中、活発な議論を強く奨励する。なお、本講義を履修するには“Foreign Relations of Japan 3A”も併せて履修することが必要である。</p>	隔年
	Foreign Relations of Japan 4A	<p>This course examines the historical background of modern Japanese foreign relations with an emphasis on the political and security spheres. It also discusses various methodological subjects regarding historical research of modern Japanese foreign relations. The lectures focus on the period after the end of the Second World War. The lectures and class discussion will be conducted in English. Textbook and other materials used in class will be limited in those published in English. Active participation in class discussions is strongly encouraged. Those who are taking this course shall also take “Foreign Relations of Japan 4B”.</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>本講義は現代日本の対外政策の形成とその歴史的背景を、政治及び安全保障面を中心に、議論するものである。更に、現代日本の対外関係に関する歴史的な研究の方法論についても適宜に議論する。本講義は第二次世界大戦終戦後の時代を対象とする。講義は原則的に英語で行われる。教科書や各種資料も英語の出版物を中心に選定する。講義中、活発な議論を強く奨励する。なお、本講義を履修するには“Foreign Relations of Japan 4B”も併せて履修することが必要である。</p>	
	Foreign Relations of Japan 4B	<p>This course examines the historical background of modern Japanese foreign relations with an emphasis on the political and security spheres. It also discusses various methodological subjects regarding historical research of modern Japanese foreign relations. The lectures focus on the period after the end of the Second World War. The lectures and class discussion will be conducted in English. Textbook and other materials used in class will be limited in those published in English. Active participation in class discussions is strongly encouraged. Those who are taking this course shall also take “Foreign Relations of Japan 4A”.</p> <p>本講義は現代日本の対外政策の形成とその歴史的背景を、政治及び安全保障面を中心に、議論するものである。更に、現代日本の対外関係に関する歴史的な研究の方法論についても適宜に議論する。本講義は第二次世界大戦終戦後の時代を対象とする。講義は原則的に英語で行われる。教科書や各種資料も英語の出版物を中心に選定する。講義中、活発な議論を強く奨励する。なお、本講義を履修するには“Foreign Relations of Japan 4A”も併せて履修することが必要である。</p>	隔年
	International Relations 3A	<p>In this course, students will deepen their understanding of international relations theories. By critically reading various materials and studying approaches to international relations, students will develop their skills to think like a social scientist. This course also provides students with an opportunity to present their ideas and improve their arguments and methods.</p> <p>本科目の目的は、様々な文献を通し国際関係の理論やアプローチに関する理解を深め、受講者の社会科学的な分析能力をさらに身につけるところにある。また、受講者は関心のある研究対象について報告をすることを通し、分析を進める上で核となる方法論や議論の組み立て方について学ぶ。</p>	隔年
	International Relations 3B	<p>In this course, students will deepen their understanding of international relations theories. By critically reading various materials and studying approaches to international relations, students will develop their skills to think like a social scientist. This course also provides students with an opportunity to present their ideas and improve their arguments and methods. Students are expected to offer constructive criticism to other students' works.</p> <p>本科目の目的は、様々な文献を通し国際関係の理論やアプローチに関する理解を深め、受講者の社会科学的な分析能力をさらに身につけるところにある。また、受講者が関心のある研究対象についての報告、そして参加者との討論を通し、分析を進める上で核となる方法論や議論の組み立て方について共に考える。受講者は、他の学生の論文に対して、建設的なコメントをすることが求められる。</p>	隔年
	International Relations 4A	<p>In this course, students will deepen their understanding of international relations theories. By critically reading various materials and studying approaches to international relations, students will develop their skills to think like a social scientist. This course also provides students with an opportunity to present their ideas and improve their arguments and methods. Students are expected to do so by closely studying well-written works.</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>本科目の目的は、様々な文献を通し国際関係の理論やアプローチに関する理解を深め、受講者の社会科学的分析能力をさらに身につけるところにある。関心のある研究対象についての報告、そして参加者との討論を通し、また、完成度の高い論文や著書を読み込むことを通し、核となる方法論や議論の組み立て方を学び自身のアーギュメントを再考し、改善する。</p>	
	International Relations 4B	<p>In this course, students will deepen their understanding of international relations theories. By critically reading various materials and studying approaches to international relations, students will develop their skills to think like a social scientist. Through discussions, this course also provides students with an opportunity to improve their skills to communicate their ideas more effectively.</p> <p>本科目の目的は、様々な文献を通し国際関係の理論やアプローチに関する理解を深め、受講者の社会科学的分析能力をさらに身につけるところにある。また、受講者は関心のある研究対象についての報告、そして参加者との討論を通し、分析を進める上で核となるアイデアをより効果的に伝える訓練を行う。</p>	隔年
	教育政策論1	<p>近代国民国家の形成過程における公的教育制度の発展について考察する。具体的事例として、18世紀から19世紀にかけて発展したドイツ（プロシア）と、フランス革命以降のフランス、並びに幕末から明治初期の日本の事例を中心に扱う。これら事例については、ナショナリズムと教育・国民アイデンティティの形成と教育・近代工業化と教育という3つの視点から検討する。さらに、近代以降の日本と諸外国における社会変遷と教育政策の役割の相互関係についても議論する。</p>	隔年
	教育政策論2	<p>教育政策論1で習得した内容をもとに、理論から具体的事例に議論と考察を進展させる。具体例は、履修者の研究テーマおよび関心事例を中心に、日本及び諸外国の事例（「教育政策1」で取り上げなかったもの）から選択する。教育政策論1では、特に教育史に重点をおいたが、教育政策論2ではより現代に近い時代に視点を移し、国家の経済的発展と教育・多様化する社会と教育というテーマに目を転じ、21世紀のグローバル社会における教育政策の在り方について検討する。扱う国や地域も日本やヨーロッパに限らず、発展途上国も含めた広く世界の国々に視野を広げる。</p>	隔年
	Educational Policy 1	<p>Students study the historical development of the public education system in the process of the formation of modern states. Examples are drawn from Germany (Prussia) in the 18th and the 19th century, France after the French Revolution, as well as Japan from the end of the Tokugawa period until the beginning of the Meiji era. In dealing with these three cases, discussions are conducted in the following perspectives, i.e. nationalism and education; the formation of national identity and education; and industrialization and education. Furthermore, the role of education policy is discussed in reference to social transformation in Japan and other countries in the world in the modern period and onwards.</p> <p>近代国民国家の形成過程における公的教育制度の発展について考察する。具体的事例として、18世紀から19世紀にかけて発展したドイツ（プロシア）と、フランス革命以降のフランス、並びに幕末から明治初期の日本の事例（「教育政策1」「同2」で取り上げなかったもの）を中心に扱う。これら事例については、ナショナリズムと教育・国民アイデンティティの形成と教育・近代工業化と教育という3つの視点から検討する。さらに、近代以降の日本と諸外国における社会変遷と教育政策の役割の相互関係についても議論する。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Educational Policy 2	<p>Based on the already-studied contents in Educational Policy 1, students further develop discussions and investigations in dealing with concrete cases., which will be selected from Japan and other countries in the world according to their research interest. While in Educational Policy 1 students focused on the history of education, special attention will be shifted to the periods of modern times in Educational Policy 2. By doing so, students focus on the role of education in the 21st century, and deal with the following themes, i.e. the development of the national education and education; and globalized diverse society and education. In this course, the scope of discussion will be expanded from Japan and Europe to the rest of the world more globally, including developing countries.</p> <p>“Educational Policy 1”で習得した内容をもとに、理論から具体的事例に議論と考察を発展させる。具体例は、履修者の研究テーマおよび関心事例を中心に、日本及び諸外国の事例（「教育政策1」「同2」“Educational Policy 1”で取り上げなかったもの）から選択する。“Educational Policy 1”では、特に教育史に重点をおいたが、“Educational Policy 2”ではより現代に近い時代に視点を移し、国家の経済的発展と教育・多様化する社会と教育というテーマに目を転じ、21世紀のグローバル社会における教育政策の在り方について検討する。扱う国や地域も日本やヨーロッパに限らず、発展途上国も含めた広く世界の国々に視野を広げる。</p>	隔年
	計量分析3A	<p>計量分析は、社会の様々な分野での諸現象や実態を取り巻く溢れる情報から、現象や実態の把握、物事の意味付け、簡略化、客観化、推定等のため、多くの分野で用いる分析ツールの一つである。この授業では、分析に用いるデータの調査方法と、計量分析ツールを正しく使うための基礎統計の概念について講義する。講義内容は、計量分析の概要、基礎集計(度数分布)、記述統計(代表値、散布度)など統計の基本概念を理解し、計量分析4Aを勉強するための土台作りを行う。また、これらの知識を取得している場合は、多変量分析の基礎部分(各種検定、相関分析、回帰分析、カテゴリカル回帰分析、ロジスティック分析)で、柔軟に講義する。</p>	隔年
	計量分析3B	<p>計量分析は、社会の様々な分野での諸現象や実態を取り巻く溢れる情報から、現象や実態の把握、物事の意味付け、簡略化、客観化、推定等のため、多くの分野で用いる分析ツールの一つである。この授業では、計量分析3Aに相当する知識(基礎集計、記述統計)をベースに、分析に用いる計量分析ツールの正しい使い方を講義する。講義内容は、統計分析用ソフトSPSS(場合によっては、エクセルを並行)を用いて、一連の分析プロセスや、SPSSの基本操作(データ加工・整理・基本集計など)を学び、計量分析4Bでの高度な分析を行うための土台作りを行う。</p>	隔年
	計量分析4A	<p>計量分析は、社会の様々な分野での諸現象や実態を取り巻く溢れる情報から、現象や実態の把握、物事の意味付け、簡略化、客観化、推定等のため、多くの分野で用いる分析ツールの一つである。この授業では、分析に用いるデータの調査方法と、計量分析ツールを正しく使うための基礎統計の概念について講義する。講義内容は、計量分析3Aで学んだ知識(基礎集計、記述統計)を土台とし、関連分析(相関分析、回帰分析)を中心とした、計量分析の入門的な概念を理解し、発展させる。また、これらの知識を取得している場合は、多変量分析の高度な部分(主成分分析、因子分析、判別分析、クラスター分析、テキスト分析など)で、柔軟に講義する。</p>	隔年
	計量分析4B	<p>計量分析は、社会の様々な分野での諸現象や実態を取り巻く溢れる情報から、現象や実態の把握、物事の意味付け、簡略化、客観化、推定等のため、多くの分野で用いる分析ツールの一つである。この授業では、計量分析4Aに相当する知識(相関分析、回帰分析)をベースに、分析に用いる計量分析ツールの正しい使い方を講義する。講義内容は、統計分析用ソフトSPSS(場合によっては、エクセルを並行)を用いて、計量分析3Bで学んだSPSSの基本操作(データ加工・整理・基本集計など)を土台とし、高度な分析(相関分析、回帰分析、因子分析、各種検定など)を行う。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	応用ミクロ経済学2	ミクロ経済学と非協力ゲーム理論の主に数理的側面の基礎と発展に関する研究テーマの研究の指導をする。この準備のために位相数学もしくは測度論のテキストを輪読する。これらの数学の学習と並行して、ゲーム理論や数理経済学等の専門雑誌から、履修者の興味に沿った最新研究論文を抜粋して精読を行い、履修者各自の研究テーマを絞り込んでいく。取り上げるトピックには次のようなものがある。不完備情報ゲームの基礎研究 (common knowledge と universal belief spaces) , 不完全観測を伴う繰り返しゲーム理論の研究、ネットワーク形成ゲームの最新の展開など。	隔年
	応用ミクロ経済学3	非協力ゲーム理論を社会・経済現象のミクロ的側面に応用して分析している研究テーマの研究の指導をする。その準備のために特にオークション理論、コンテスト理論もしくはマッチング理論の研究書レベルのテキストを輪読する。これらの学習と並行して、経済学、政治学もしくはゲーム理論等の専門雑誌から、これらの応用分野の研究論文を抜粋して精読する。これによって履修者の興味に即した研究論文のアイディアの醸成と応用性に富んだモデル構築技術の習得をうながし、博士論文作成の基礎力を養う。	隔年
	応用ゲーム理論2	協力ゲーム理論に関する専門的な最新研究論文や研究書を輪読する。必要に応じて位相数学や凸解析の数学的トレーニングとして、これらのテキストの輪読も行う。協力ゲームの様々な解の公理的特徴付けだけでなく、非協力ゲーム理論に基づく戦略的観点から、協力ゲームの様々な解概念の性質を検討する (ナッシュ・プログラム) 研究も積極的に扱う。さらにこれらの理論的知見を、履修者が関心を持つ様々な社会・経済現象に応用する手法を検討しながら研究の指導を行う。	隔年
	応用ゲーム理論3	進化ゲーム理論及びプレイヤーの学習モデル、そしてこれらに基づいた非協力ゲーム理論の均衡選択問題に関する研究の指導を行う。受講生の理解の水準に合わせて、これらの研究書もしくは必要となる確率過程や微分方程式のテキストの輪読を行う。これと並行して最新の研究論文を精読する。具体的なテーマは、ポテンシャル・ゲーム、確率進化ゲーム、選好進化の理論、言語の進化モデル分析などを予定している。これらの最新理論の経済学や政治学への応用研究論文も扱い、受講生の関心に沿った研究テーマ設定をして論文指導を行う。	隔年
	環境とマクロ経済学3A	環境経済学の標準的なテキストである洋書を輪読する。受講者の報告と議論を通じて環境問題について経済学的視点から取り組むための理論を習得し、環境政策および、その課題を検討する。持続可能な経済成長の分析に必要な、入門的なマクロ経済動学理論も学習する。ミクロ的な個々の経済主体の意思決定が環境や資源量の変化、気候変動により、どのようにマクロ的な一国全体あるいは国際社会・経済に影響を与えるかについての分析能力の向上を目指す。	隔年
	環境とマクロ経済学3B	主に受講者が選んだ環境経済学の学術論文の講読の形式で授業を進める。受講者の状況に応じて環境経済学の標準的なテキストである洋書の輪読も含む。受講者の報告・議論を通じて環境問題について経済学的視点から取り組むための理論・実証分析の方法への理解を深める。ミクロ的な個々の経済主体の意思決定が環境や資源量の変化、気候変動により、どのようにマクロ的な一国全体あるいは国際社会・経済に影響を与えるかについての分析能力と論文作成の基礎能力の向上を目指す。	隔年
	環境とマクロ経済学4A	資源・エネルギー経済学の標準的なテキストである洋書を輪読する。受講者の報告・議論を通じて資源・エネルギー問題について経済学的視点から取り組むための理論を習得し、環境政策および、その課題を検討する。持続可能な経済成長の分析に必要な、入門的なマクロ経済動学理論も学習する。ミクロ的な個々の経済主体の意思決定が資源量の変化や気候変動により、どのようにマクロ的な一国全体あるいは国際社会・経済に影響を与えるかについての分析能力の向上を目指す。	隔年
	環境とマクロ経済学4B	主に受講者が選んだ資源・エネルギー経済学の学術論文の講読の形式で授業を進める。受講者の状況に応じて資源・エネルギー経済学の標準的なテキストである洋書の輪読も含む。受講者の報告・議論を通じて資源・エネルギー問題について経済学的視点から取り組むための理論・実証分析の方法への理解を深める。ミクロ的な個々の経済主体の意思決定が資源量の変化や気候変動により、どのようにマクロ的な一国全体あるいは国際社会・経済に影響を与えるかについての分析能力と論文作成の基礎能力の向上を目指す。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	金融3A	この講義の目的は、金融論の様々な論点を19世紀から現在までの日本経済の発展を事例として学ぶことである。本講義では、特に、債権・債務関係、貨幣および決済の視点を中心に、各種の金融問題を整理する。日本の銀行システムの歴史的形成過程や機能の議論について学ぶ。例えば、高度成長期、バブル経済の崩壊、非伝統的金融政策について概観する。頼母子講や模合等の民間金融の世界についても触れる。参加者には、授業で扱った金融問題のいずれかの論点について、日本の歴史的経験と他国の歴史的経験を比較する形で検討する課題が与えられる。博士論文として金融と関わる論点を検討する参加者には、博士論文の一章として成立するような形で、期末レポートをまとめてもらう。	隔年
	金融3B	この講義の目的は、金融論の様々な論点を19世紀から現在までの日本経済の発展を事例として学ぶことである。本講義では、特に、債権・債務関係と決済の視点を中心に、各種の金融問題を整理する。金本位制やブレトンウッズ体制などの国際金融制度あるいは、大恐慌やアジア金融危機等の国際金融危機について一通り学ぶ。参加者には、授業で扱った金融問題のいずれかの論点について、日本の歴史的経験と他国の歴史的経験を比較する形で検討する課題が与えられる。博士論文として金融と関わる論点を検討する参加者には、博士論文の一章として成立するような形で、期末レポートをまとめてもらう。	隔年
	金融4A	この講義の目的は、金融論の様々な論点を19世紀から現在までの日本経済の発展を事例として学ぶことである。本講義では、特に、債権・債務関係、貨幣および決済の視点を中心に、各種の金融問題を整理する。日本の銀行システムの歴史的形成過程や機能の議論について学ぶ。例えば、高度成長期、バブル経済の崩壊、非伝統的金融政策について概観する。頼母子講や模合等の民間金融の世界についても触れる。参加者には、授業で扱った金融問題のいずれかの論点について、日本の歴史的経験と他国の歴史的経験を比較する形で検討する課題が与えられる。博士論文として金融と関わる論点を検討する参加者には、博士論文の一章として成立するような形で、期末レポートをまとめてもらう。「金融3A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	金融4B	この講義の目的は、金融論の様々な論点を19世紀から現在までの日本経済の発展を事例として学ぶことである。本講義では、特に、債権・債務関係と決済の視点を中心に、各種の金融問題を整理する。金本位制やブレトンウッズ体制などの国際金融制度あるいは、大恐慌やアジア金融危機等の国際金融危機について一通り学ぶ。参加者には、授業で扱った金融問題のいずれかの論点について、日本の歴史的経験と他国の歴史的経験を比較する形で検討する課題が与えられる。博士論文として金融と関わる論点を検討する参加者には、博士論文の一章として成立するような形で、期末レポートをまとめてもらう。「金融3B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	世界経済史3	グローバル経済の展開を歴史的にみる観点から、各国の経済発展とそれを支える社会経済的基盤の形成と変容について、参加者が文献研究報告ないし論文準備報告を行い、少人数ないし個別面談の形で議論を行う。報告では、レジュメあるいはPPTで発表し、(日本語での)口頭報告やさまざまな意見や質問に対して応答する演習を行うだけでなく、事前にA4で10~15枚程度の草稿を提出し、論文の一部を形式に沿った形で書き上げていくことが求められる。論文の問題意識や構成、資料等について、全員の議論を通じて深めるとともに、国内外での学会報告の準備を行い、論文投稿の準備について計画しつつ、博士論文の執筆を進めていく。	隔年
	世界経済史4	グローバル経済の展開を歴史的にみる観点から、各国の経済発展とそれを支える社会経済的基盤の形成と変容について、参加者が文献研究報告ないし論文準備報告を行い、少人数ないし個別面談の形で議論を行う。報告では、レジュメあるいはPPTで発表し、(日本語での)口頭報告やさまざまな意見や質問に対して応答する演習を行うだけでなく、事前にA4で10~15枚程度の草稿を提出し、論文の一部を形式に沿った形で書き上げていくことが求められる。論文の問題意識や構成、資料等について、全員の議論を通じて深めるとともに、国内外での学会報告の準備を行い、論文投稿の準備について計画しつつ、博士論文の執筆を進めていく。「世界経済史3」とは異なるトピックスを扱う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Comparative Labor Studies 3	<p>Participants would make presentations on the articles or on their thesis. We would discuss the topic in a small group, from the viewpoint of comparative historical analysis of the labor relations. Participants are required to prepare not only resume or PPT presentations in Japanese or English, but also manuscript with 10-15 pages paper. During this course participants would be encouraged to apply and take part in academic conferences in and outside Japan, to prepare their articles for the academic journals, and finally to prepare for the doctoral thesis. This class deals with different topics from those of 'Comparative Labor Studies 1, 2'.</p> <p>参加者は文献研究報告ないし論文準備報告を行い、経済活動の基盤となる労働関係について比較歴史分析の視点から少人数で議論を行う。参加者はレジュメあるいはPPTで発表する（日本語ないし英語）だけでなく、A4で10～15枚程度の草稿を提出することが求められる。論文内容を全員の議論を通じて深めるとともに、国内外での学会報告への応募、論文の投稿などの準備を行い、博士論文の執筆を進めていけるように支援する。「Comparative Labor Studies 1, 2」とは異なるトピックスを扱う。</p>	隔年
	Comparative Labor Studies 4	<p>Participants would make presentations on the articles or on their thesis. We would discuss the topic in a small group, from the viewpoint of comparative historical analysis of the labor relations. Participants are required to prepare not only resume or PPT presentations in Japanese or English, but also manuscript with 10-15 pages paper. During this course participants would be encouraged to apply and take part in academic conferences in and outside Japan, to prepare their articles for the academic journals, and finally to prepare for the doctoral thesis. This class deals with different topics from those of 'Comparative Labor Studies 1, 2, 3'.</p> <p>参加者は文献研究報告ないし論文準備報告を行い、経済活動の基盤となる労働関係について比較歴史分析の視点から少人数で議論を行う。参加者はレジュメあるいはPPTで発表する（日本語ないし英語）だけでなく、A4で10～15枚程度の草稿を提出することが求められる。論文内容を全員の議論を通じて深めるとともに、国内外での学会報告への応募、論文の投稿などの準備を行い、博士論文の執筆を進めていけるように支援する。「Comparative Labor Studies 1, 2, 3」とは異なるトピックスを扱う。</p>	隔年
	地域経済・経営史3A	<p>本授業はグローバル競争時代の地域企業経営およびその課題について専門的に研究する前提として、グローバル競争以前の経営・事業展開を歴史的に検討することを目標とする。その場合、本授業では、経済の発展に貢献することを強く意識した「地域貢献型企業」や、地域に存在する「ニッチ・トップ企業」、「研究開発重視型企業」、「自立志向型企業」などに着目し、その事業展開を歴史的に検討することを主なテーマとする。授業にあたっては、教員が着目する事例を予め提示し、その事例の重要点について説明する。それを踏まえ担当者が当該事例に関する調査結果を持ち寄り報告し、受講生全員による検討・討論を行うという形で授業を進める予定である。</p>	隔年
	地域経済・経営史3B	<p>本授業はグローバル競争時代における地域産業の衰退あるいは再生・活性化について専門的に研究する前提として、グローバル競争以前の地域産業の発展および産業集積の形成・展開について歴史的に検討することを目標とする。その場合、本授業では、地域経済の発展を支えてきた基軸産業の歴史的な変遷や地域内におけるキー・プレイヤーの変遷などに着目し、地域経済発展のダイナミズムを明らかにすることを主なテーマとする。授業にあたっては、教員が着目する事例を予め提示し、その事例の重要点について説明する。それを踏まえ担当者が当該事例に関する調査結果を持ち寄り報告し、受講生全員による検討・討論を行うという形で授業を進める予定である。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地域経済・経営史4A	<p>本授業はグローバル競争下における地域企業経営および事業展開を、それ以前の展開と対比させつつ専門的に検討することを目標とする。特に本授業では、グローバル競争に適応しつつ持続的な企業成長を実現し、地域経済の発展に貢献しつつある企業に着目し、それらの企業が、グローバル競争のなかでどのような問題に直面し、どのような経営改革（「第2の創業」も含む）や新たな取り組みを展開しているのかについて具体的に検討することを主なテーマとする。授業にあたっては、教員が着目する事例を予め提示し、その事例の重要点について説明する。それを踏まえ担当者が当該事例に関する調査結果を持ち寄り報告し、受講生全員による検討・討論を行うという形で授業を進める予定である。</p>	隔年
	地域経済・経営史4B	<p>本授業はグローバル競争下における地域産業の衰退あるいは再生・活性化に関して、グローバル競争に突入する以前の地域産業あるいは産業集積の発展と対比させつつ専門的に検討することを目標とする。特に本授業では、グローバル競争下における産業集積の縮小や機能低下あるいは地域内の基軸産業の衰退に直面するなかで、新たに取り組みされている再生・活性化策やイノベーション・ダイナミズムと地域産業との関連などについて具体的に検討することを主なテーマとする。授業にあたっては、教員が着目する事例を予め提示し、その事例の重要点について説明する。それを踏まえ担当者が当該事例に関する調査結果を持ち寄り報告し、受講生全員による検討・討論を行うという形で授業を進める予定である。</p>	隔年
	Informatics and Society 1	<p>The aim of this course is to learn about research methods related to the fields of social informatics and new media research. Emphasis will be on empirical methods and research design, establishing hypotheses and analysis. In this class, students will need to download material from databases and submit summaries online, and have discussions and presentations. As this course will be conducted in English, students must be able to perform all discussions and assignments in English. Students should also have a basic understanding of introductory statistics and have prior experience in using statistical software.</p> <p>この授業は英語で社会情報学やニューメディアに関する研究方法を学習する。実証研究における研究計画の立案、仮説や分析手法を学ぶ。この授業では、指定された文献を図書館のデータベースよりダウンロードし、授業のときまでに読み、事前にレポートをウェブにて提出する。授業では文献に関するディスカッションとプレゼンテーションを行い、他の履修生と情報共有し、授業後にその活動内容を報告する。これを、各回実施する。</p>	隔年
	Informatics and Society 2	<p>The aim of this course is to learn about research methods related to the fields of social informatics and new media research. Emphasis will be on empirical methods and research design, establishing hypotheses and analysis. In this class, students will need to download material from databases and submit summaries online, and have discussions and presentations. As this course will be conducted in English, students must be able to perform all discussions and assignments in English. Students should also have a basic understanding of introductory statistics and have prior experience in using statistical software. This class deals with different topics from those of 'Informatics and Society 1'.</p> <p>この授業は英語で社会情報学やニューメディアに関する研究方法を学習する。実証研究における研究計画の立案、仮説や分析手法を学ぶ。この授業では、指定された文献を図書館のデータベースよりダウンロードし、授業のときまでに読み、事前にレポートをウェブにて提出する。授業では文献に関するディスカッションとプレゼンテーションを行い、他の履修生と情報共有し、授業後にその活動内容を報告する。これを、各回実施する。「Informatics and Society 1」とは異なるトピックスを扱う。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Global Society & Information 1	<p>The main purpose of this course is to provide students with an overview of issues and topics related to the information society in the world in general and Japan and south-east Asia in particular. We will explore current topics such as soft power, nation-branding, national information security infrastructures, and comparative Internet freedoms and restrictions among select nations.</p> <p>この授業の目的は、一般に世界における、特に日本と東南アジアにおける、情報化社会に関連する問題やトピックの概要を学生に提供することである。ソフトパワー、国家ブランディング、国家の情報セキュリティ・インフラストラクチャー、選択された国の間でのインターネットの自由や制限の比較など、現在の話題を探求する。</p>	隔年
	Global Society & Information 2	<p>The main purpose of this course is to provide students with an overview of issues and topics related to the information society in the world in general and Japan and south-east Asia in particular. We will explore current topics such as soft power, nation-branding, national information security infrastructures, and comparative Internet freedoms and restrictions among select nations. This class deals with different topics from those of 'Global Society & Information1'.</p> <p>この授業の目的は、一般に世界における、特に日本と東南アジアにおける、情報化社会に関連する問題やトピックの概要を学生に提供することです。ソフトパワー、国家ブランディング、国家の情報セキュリティ・インフラストラクチャー、選択された国の間でのインターネットの自由や制限の比較など、現在の話題を探求します。「Global Society & Information1」とは異なるトピックスを扱う。</p>	隔年
	移民研究・国際人口移動論3	<p>移民・難民など現代の国際人口移動に関する現状、理論、政策、ガバナンスについて、政治学・国際関係論を中心に学際的に考察する。おもに、この分野における主要基本文献の精読と解題をおこなうほか、時事的なケーススタディをもとに議論を深める。</p>	隔年
	移民研究・国際人口移動論4	<p>移民・難民など現代の国際人口移動に関する現状、理論、政策、ガバナンスについて、社会学を中心に学際的に考察する。おもに、この分野における主要基本文献の精読と解題をおこなうほか、時事的なケーススタディをもとに議論を深める。</p>	隔年
	Migration and Multicultural Studies3	<p>This course aims to examine contemporary international migration issues and multiculturalization of Japanese society through theoretical researches and empirical case studies. Using English materials, participants will read and discuss major topics on migration theories, policies, politics, governances, and market economies from the perspectives of political science and international relations.</p> <p>移民・難民など現代の国際人口移動と日本社会の「多文化」化に関する現状、理論、政策、政治、ガバナンス、市場経済等について、政治学・国際関係論の観点・命題を中心に学際的な考察を加える。おもに、この分野における主要基本文献（英語）の精読と解題をおこなうほか、時事的なケーススタディをもとに議論を深める。</p>	隔年
	Migration and Multicultural Studies4	<p>This course aims to examine contemporary international migration issues and multiculturalization of Japanese society through theoretical researches and empirical case studies. Using English materials, participants will read and discuss major topics on migration theories, policies, politics, governances, and market economies from the perspectives of sociology and other disciplines.</p> <p>移民・難民など現代の国際人口移動と日本社会の「多文化」化に関する現状、理論、政策、政治、ガバナンス、市場経済等について、社会学の観点・命題を中心に学際的な考察を加える。おもに、この分野における主要基本文献（英語）の精読と解題をおこなうほか、時事的なケーススタディをもとに議論を深める。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	法と市民社会3A	近代市民社会において成立した法は、一定の理念、価値に基づいている。他方、グローバル化、情報化、少子高齢化が進む中で、法は変容を続けている。このような中で、我々は、法の根底にある理念、価値を学び直し、変えてはいけぬものと変えるべきものを切り分ける能力を持たなければならない。そこで、市民社会において現に起きている事件や論争などの法的問題を、憲法、刑事法、民事法、他国との比較などの観点から検討し、法の理念、価値を理解した上で、現実の対応策を提言できるようになることを目指す。授業計画と形式であるが、受講生からテーマを募り、そのテーマの理解に必要な基礎的知識について講義をした上で、そのテーマに関する具体的な事件や論争を取り上げ、討論する。「法と市民社会1 A, 1B, 2A, 2B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	法と市民社会3B	近代市民社会において成立した法は、一定の理念、価値に基づいている。他方、グローバル化、情報化、少子高齢化が進む中で、法は変容を続けている。このような中で、我々は、法の根底にある理念、価値を学び直し、変えてはいけぬものと変えるべきものを切り分ける能力を持たなければならない。そこで、市民社会において現に起きている事件や論争などの法的問題を、憲法、刑事法、民事法、他国との比較などの観点から検討し、法の理念、価値を理解した上で、現実の対応策を提言できるようになることを目指す。授業計画と形式であるが、受講生からテーマを募り、そのテーマの理解に必要な基礎的知識について講義をした上で、そのテーマに関する具体的な事件や論争を取り上げ、討論する。「法と市民社会1 A, 1B, 2A, 2B, 3A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	法と市民社会4A	近代市民社会において成立した法は、一定の理念、価値に基づいている。他方、グローバル化、情報化、少子高齢化が進む中で、法は変容を続けている。このような中で、我々は、法の根底にある理念、価値を学び直し、変えてはいけぬものと変えるべきものを切り分ける能力を持たなければならない。そこで、市民社会において現に起きている事件や論争などの法的問題を、憲法、刑事法、民事法、他国との比較などの観点から検討し、法の理念、価値を理解した上で、現実の対応策を提言できるようになることを目指す。授業計画と形式であるが、受講生からテーマを募り、そのテーマの理解に必要な基礎的知識について講義をした上で、そのテーマに関する具体的な事件や論争を取り上げ、討論する「法と市民社会1 A, 1B, 2A, 2B, 3A, 3B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	法と市民社会4B	近代市民社会において成立した法は、一定の理念、価値に基づいている。他方、グローバル化、情報化、少子高齢化が進む中で、法は変容を続けている。このような中で、我々は、法の根底にある理念、価値を学び直し、変えてはいけぬものと変えるべきものを切り分ける能力を持たなければならない。そこで、市民社会において現に起きている事件や論争などの法的問題を、憲法、刑事法、民事法、他国との比較などの観点から検討し、法の理念、価値を理解した上で、現実の対応策を提言できるようになることを目指す。授業計画と形式であるが、受講生からテーマを募り、そのテーマの理解に必要な基礎的知識について講義をした上で、そのテーマに関する具体的な事件や論争を取り上げ、討論する。「法と市民社会1 A, 1B, 2A, 2B, 3A, 3B, 4A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	法と現代社会3A	国家制度と法が時代的、地域的に限定された諸条件の下で生み出され展開されること、それにもかかわらずローマ法は日本を含む現代世界まで受け継がれるだけの普遍性を内包していたこと、を理解することができるようになることを目標とする。本演習では、ヨーロッパの法文化の基礎であり、これを受け継いだ日本の法文化の基礎の一部でもある、古代ローマの国家制度と法(一般にローマ法と呼ばれる)を題材とする。古代ローマの歴史・社会(法を含む)・文化に対する興味感心を喚起すると共に、ローマ法がいかなる法的紛争に対し、いかなる解決を与えてきたかを史料に基づいて検討するために、ローマ法が現代まで連綿と受け継がれてきた経緯を概説した上で、ローマ法の内容を現代に伝えるラテン語史料、特に法学提要Institutionesの検討を中心に議論する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	法と現代社会3B	国家制度と法が時代的、地域的に限定された諸条件の下で生み出され展開されること、それにもかかわらずローマ法は日本を含む現代世界まで受け継がれるだけの普遍性を内包していたこと、を理解することができるようになることを目標とする。本演習では、ヨーロッパの法文化の基礎であり、これを受け継いだ日本の法文化の基礎の一部でもある、古代ローマの国家制度と法(一般にローマ法と呼ばれている)を題材とする。古代ローマの歴史・社会(法を含む)・文化に対する興味感心を喚起すると共に、ローマ法がいかなる法的紛争に対し、いかなる解決を与えてきたかを史料に基づいて検討するために、ローマ法が現代まで連綿と受け継がれてきた経緯を概説した上で、ローマ法の内容を現代に伝えるラテン語史料、特に学説彙纂Digestaの検討を中心に議論する。	隔年
	法と現代社会4A	国家制度と法が時代的、地域的に限定された諸条件の下で生み出され展開されること、それにもかかわらずローマ法は日本を含む現代世界まで受け継がれるだけの普遍性を内包していたこと、を理解することができるようになることを目標とする。本演習では、ヨーロッパの法文化の基礎であり、これを受け継いだ日本の法文化の基礎の一部でもある、古代ローマの国家制度と法(一般にローマ法と呼ばれている)を題材とする。古代ローマの歴史・社会(法を含む)・文化に対する興味感心を喚起すると共に、ローマ法がいかなる法的紛争に対し、いかなる解決を与えてきたかを史料に基づいて検討するために、ローマ法が現代まで連綿と受け継がれてきた経緯を概説した上で、ローマ法の内容を現代に伝えるラテン語史料、特に勅法集Codexの検討を中心に議論する。	隔年
	法と現代社会4B	国家制度と法が時代的、地域的に限定された諸条件の下で生み出され展開されること、それにもかかわらずローマ法は日本を含む現代世界まで受け継がれるだけの普遍性を内包していたこと、を理解することができるようになることを目標とする。本演習では、ヨーロッパの法文化の基礎であり、これを受け継いだ日本の法文化の基礎の一部でもある、古代ローマの国家制度と法(一般にローマ法と呼ばれている)を題材とする。古代ローマの歴史・社会(法を含む)・文化に対する興味感心を喚起すると共に、ローマ法がいかなる法的紛争に対し、いかなる解決を与えてきたかを史料に基づいて検討するために、ローマ法が現代まで連綿と受け継がれてきた経緯を概説した上で、ローマ法の内容を現代に伝えるラテン語史料、特に金石文、蠟版文書等の検討を中心に議論する。	隔年
	ユーラシア研究演習1	ソ連解体後のユーラシア諸国・地域における国家建設と社会変成の文脈の中での、政治組織の生成と発展のあり方について議論する。とくに、ソ連解体以降の地域統合、資源の分配、歴史の記憶、マハツラを中心とした社会編制などを取り上げながら、ユーラシア諸国の政治組織の生成と発展のあり方について考察する。	隔年
	ユーラシア研究演習2	ソ連解体後のユーラシア諸国・地域における政治組織の形成と解体過程について議論する。とくにソ連の遺産の政治的、社会的影響、国内政治エリート、社会内の諸アクターの役割、国際NGOの活動、マハツラを中心としたコミュニティ組織の社会的役割と政治参加などについて総合的に検討し、議論する。	隔年
	ユーラシア研究演習3	中央ユーラシア史またはユーラシア地域と日本の交流史に関する研究文献を講読し、その内容について議論する。中央ユーラシア史の展開に関しては、ユーラシア草原地帯における騎馬遊牧民集団の誕生から、シルクロードに代表される東西交易の展開、テュルク化とイスラーム化、モンゴル帝国・ティムール帝国の成立と展開、その後の中央ユーラシアの周縁化プロセスについて、最新の研究動向を把握し、個々の研究論文の内容について議論していく。また日本における中央アジア、ユーラシア理解、とくにシルクロード論争の展開などについて学び、その内容を議論する。	隔年
	ユーラシア研究演習4	中央ユーラシア史、人類学に関する研究文献を講読し、その内容について議論する。とくに19世紀以降のロシア帝国・ソ連期の中央ユーラシア諸国の政治、社会、経済、文化に関する歴史学、人類学を中心とした諸分野の研究論文を取り上げながら、その内容を議論する。またシルクロード探検事業から今日の中央アジアプラス日本の外交枠組み構築に至るまでの、19世紀後半以降の日本とユーラシア諸国との関係史について学ぶ。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	日本・ユーラシア研究演習1	日本と旧ソ連諸国との外交・経済関係の展開について、歴史学、国際関係学の視点から議論する。とくに、中央アジアプラス日本の外交枠組みの中での日本と中央アジア諸国との関係構築の歩みと現状を検討し、それらと中国、韓国などの中央アジア諸国に対するアプローチとの共通点、差異について理解を深めるとともに、今後の課題について議論する。	隔年
	日本・ユーラシア研究演習2	日本と旧ソ連諸国との異文化交流の展開について、歴史学、国際関係学の視点から議論する。とくに、日本のユーラシア諸国・地域の文化振興面での支援や日本文化の普及に向けた取り組みについて、そのあり方と問題点について議論する。	隔年
	ユーラシアの国際関係1	JICAつくばや他の国際協力機関と連携しながら、ユーラシア諸国の社会、経済が直面している様々な課題について学ぶ。またODAとその評価、効果的な水資源管理体制の構築、一村一品運動に代表される地域振興、NGOなど非政府組織の社会的役割とそれに対する支援などのユーラシア諸国の社会・経済問題解決に向けた取り組みの実態について理解するとともに、その問題点について議論する。	隔年
	ユーラシアの国際関係2	日本による中央アジアプラス日本のイニシアティブとロシア、中国などが主導する上海協力機構に焦点をあて、これらの外交イニシアティブの利点、弱点、課題と将来を検討する。とくに韓国、中国の対中央アジア外交および援助のあり方との比較を通じて、日本の対中央アジア外交の特徴を明らかにするとともに、米国、EU、ロシアなど中央アジア諸国への関与と、日本の関与のあり方との相互性についても検討する。	隔年
	日本語教育学プログラム演習1A	受講生は、自分自身の博士論文完成を目的として、日本語教育学に関わる研究を、Power pointなどを用いた口頭発表と、ポスター形式で発表する。初めに、口頭発表で研究内容をアピールし、ポスターで詳細に議論する形式をとる。教員・院生が一体となって議論を行うことで、課題設定、分析方法の適性、現象の結果の真偽等を議論し、研究の深化を図る。受講者には、口頭発表の技術をしっかりと理解することを求める。加えて、学会などの運営手法も学ぶことも求め、プログラム作成、司会も担当する。	
	日本語教育学プログラム演習1B	受講生は、「日本語教育学プログラム演習1A」をふまえ、自分自身の博士論文完成を目的として、日本語教育学に関わる研究を、Power pointなどを用いた口頭発表と、ポスター形式で発表する。発表内容は「日本語教育学プログラム演習1A」と異なるものとする。初めに、口頭発表で研究内容をアピールし、ポスターで詳細に議論する形式をとる。教員・院生が一体となって議論を行うことで、課題設定、分析方法の適性、現象の結果の真偽等を議論し、研究の深化を図る。受講者には、口頭発表の技術をしっかりと理解することを求める。加えて、学会などの運営手法も学ぶことも求め、プログラム作成、司会も担当する。	
	日本語教育学プログラム演習2A	受講生は、「日本語教育学プログラム演習1B」をふまえ、自分自身の博士論文完成を目的として、日本語教育学に関わる研究を、Power pointなどを用いた口頭発表と、ポスター形式で発表する。発表内容は「日本語教育学プログラム演習1A」「同1B」と異なるものとする。初めに、口頭発表で研究内容をアピールし、ポスターで詳細に議論する形式をとる。教員・院生が一体となって議論を行うことで、課題設定、分析方法の適性、現象の結果の真偽等を議論し、研究の深化を図る。受講者には、口頭発表の技術をしっかりと理解することを求める。加えて、学会などの運営手法も学ぶことも求め、プログラム作成、司会も担当する。	
	日本語教育学プログラム演習2B	受講生は、「日本語教育学プログラム演習2A」をふまえ、自分自身の博士論文完成を目的として、日本語教育学に関わる研究を、Power pointなどを用いた口頭発表と、ポスター形式で発表する。発表内容は「日本語教育学プログラム演習1A」「同1B」「同2A」と異なるものとする。初めに、口頭発表で研究内容をアピールし、ポスターで詳細に議論する形式をとる。教員・院生が一体となって議論を行うことで、課題設定、分析方法の適性、現象の結果の真偽等を議論し、研究の深化を図る。受講者には、口頭発表の技術をしっかりと理解することを求める。加えて、学会などの運営手法も学ぶことも求め、プログラム作成、司会も担当する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	言語表現研究1A	日本語教育に関連した文章・談話研究について理論および研究方法について知見を深め、日本語学習者および日本語母語話者の書いた日本語の文章・談話を分析・記述する能力を身につけることを目標とする。特に、日本語の文章表現を対象とした研究の中で基礎的な研究を中心に取り上げる。授業では、関連領域の文献も含めて読み、研究の視野を広める。文献を読んで研究内容を理解した上で、研究の意義や背景、問題点などを批判的に検討する。授業方法としては、日本語学および日本語教育、言語学の文章・談話関係の文献を精読し、ディスカッションを行う。文献講読は分担を決め、発表者は概要をレジュメにまとめて説明する。講読した文献の内容について重要点と自分の意見をまとめたレポートを毎回課す。さらに、各自の研究テーマについて、論文講読、文章データ分析、発表、論文作成も適宜行う。	隔年
	言語表現研究1B	日本語教育に関連した文章・談話研究について理論および研究方法について知見を深め、日本語学習者および日本語母語話者の書いた日本語の文章・談話を分析・記述する能力を身につけることを目標とする。特に、日本語の文章表現を対象とした研究の中で応用的な研究を中心に取り上げる。授業では、関連領域の文献も含めて読み、研究の視野を広める。文献を読んで研究内容を理解した上で、研究の意義や背景、問題点などを批判的に検討する。授業方法としては、日本語学および日本語教育、言語学の文章・談話関係の文献を精読し、ディスカッションを行う。文献講読は分担を決め、発表者は概要をレジュメにまとめて説明する。「言語表現研究1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	言語表現研究2A	日本語教育に関連した文章・談話研究について理論および研究方法について知見を深め、日本語学習者および日本語母語話者の書いた日本語の文章・談話を分析・記述する能力を身につけることを目標とする。特に、日本語の書き言葉を対象とした研究の中で基礎的な研究を中心に取り上げる。授業では、関連領域の文献も含めて読み、研究の視野を広める。文献を読んで研究内容を理解した上で、研究の意義や背景、問題点などを批判的に検討する。授業方法としては、日本語学および日本語教育、言語学の文章・談話関係の文献を精読し、ディスカッションを行う。文献講読は分担を決め、発表者は概要をレジュメにまとめて説明する。「言語表現研究1A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	言語表現研究2B	日本語教育に関連した文章・談話研究について理論および研究方法について知見を深め、日本語学習者および日本語母語話者の書いた日本語の文章・談話を分析・記述する能力を身につけることを目標とする。特に、日本語の書き言葉を対象とした研究の中で応用的な研究を中心に取り上げる。授業では、関連領域の文献も含めて読み、研究の視野を広める。文献を読んで研究内容を理解した上で、研究の意義や背景、問題点などを批判的に検討する。授業方法としては、日本語学および日本語教育、言語学の文章・談話関係の文献を精読し、ディスカッションを行う。文献講読は分担を決め、発表者は概要をレジュメにまとめて説明する。「言語表現研究1A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	言語と行動理論研究1A	日本語を中心として、日本語らしさの文法形式と談話の流れや、それを分析するための言語研究や、日本語学習者に焦点を当てた学習者の日本語観察や、日本語教師の視点からの教授法など、日本語教育の応用を目指した研究を、先行研究を踏まえて、毎回決められた受講生が発表する。それを受けて、参加者間で議論を行う。発表者には、博士論文完成のため、他の受講者と徹底的な議論を行えるような、ハンドアウト作成技術を求め、受講者には批判的な意見を述べられるようなトレーニングの場とする。	隔年
	言語と行動理論研究1B	日本語を中心として、日本語らしさの文法形式と談話の流れや、それを分析するための言語研究や、日本語学習者に焦点を当てた学習者の日本語観察や、日本語教師の視点からの教授法など、日本語教育の応用を目指した研究を、先行研究を踏まえて、毎回決められた受講生が発表する。それを受けて、参加者間で議論を行う。発表者には、博士論文完成のため、他の受講者と徹底的な議論を行えるような、ハンドアウト作成技術を求め、受講者には批判的な意見を述べられるようなトレーニングの場とする。「言語と行動理論研究1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	言語と行動理論研究2A	日本語を中心として、日本語らしさの文法形式と談話の流れや、それを分析するための言語研究や、日本語学習者に焦点を当てた学習者の日本語観察や、日本語教師の視点からの教授法など、日本語教育の応用を目指した研究を、先行研究を踏まえて、毎回決められた受講生が発表する。それを受けて、参加者間で議論を行う。発表者には、博士論文完成のため、他の受講者と徹底的な議論を行えるような、ハンドアウト作成技術を求め、受講者には批判的な意見を述べられるようなトレーニングの場とする。「言語と行動理論研究1A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	言語と行動理論研究2B	日本語を中心として、日本語らしさの文法形式と談話の流れや、それを分析するための言語研究や、日本語学習者に焦点を当てた学習者の日本語観察や、日本語教師の視点からの教授法など、日本語教育の応用を目指した研究を、先行研究を踏まえて、毎回決められた受講生が発表する。それを受けて、参加者間で議論を行う。発表者には、博士論文完成のため、他の受講者と徹底的な議論を行えるような、ハンドアウト作成技術を求め、受講者には批判的な意見を述べられるようなトレーニングの場とする。「言語と行動理論研究1A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	社会言語学研究1A	どの言語も社会や社会変化の影響を受けて変化し、さまざまなバリエーションが生まれる。一時的にのみ流行るバリエーションもあれば、定着するものもあり、それぞれを日本語教育に取り入れる必要性や困難について考える。受講者が順番に先行研究を踏まえて発表を行う。発表者には、博士論文完成のため、そして学会参加の際の質疑応答のため、徹底的な議論を行えるような、ハンドアウト作成・発表技術を求め、受講者には批判的かつ建設的な意見を述べられるようなトレーニングの場とする。授業での使用言語（日本語・英語）は受講者と相談のうえで決める。	隔年
	社会言語学研究1B	どの言語も社会や社会変化の影響を受けて変化し、さまざまなバリエーションが生まれる。一時的にのみ流行るバリエーションもあれば、定着するものもあり、それぞれを日本語教育に取り入れる必要性や困難について考える。受講者が順番に先行研究を踏まえて発表を行う。発表者には、博士論文完成のため、そして学会参加の際の質疑応答のため、徹底的な議論を行えるような、ハンドアウト作成・発表技術を求め、受講者には批判的かつ建設的な意見を述べられるようなトレーニングの場とする。授業での使用言語（日本語・英語）は受講者と相談のうえで決める。「社会言語学研究1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	社会言語学研究2A	どの言語も社会や社会変化の影響を受けて変化し、さまざまなバリエーションが生まれる。一時的にのみ流行るバリエーションもあれば、定着するものもあり、それぞれを日本語教育に取り入れる必要性や困難について考える。受講者が順番に先行研究を踏まえて発表を行う。発表者には、博士論文完成のため、そして学会参加の際の質疑応答のため、徹底的な議論を行えるような、ハンドアウト作成・発表技術を求め、受講者には批判的かつ建設的な意見を述べられるようなトレーニングの場とする。授業での使用言語（日本語・英語）は受講者と相談のうえで決める。「社会言語学研究1A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	社会言語学研究2B	どの言語も社会や社会変化の影響を受けて変化し、さまざまなバリエーションが生まれる。一時的にのみ流行るバリエーションもあれば、定着するものもあり、それぞれを日本語教育に取り入れる必要性や困難について考える。受講者が順番に先行研究を踏まえて発表を行う。発表者には、博士論文完成のため、そして学会参加の際の質疑応答のため、徹底的な議論を行えるような、ハンドアウト作成・発表技術を求め、受講者には批判的かつ建設的な意見を述べられるようなトレーニングの場とする。授業での使用言語（日本語・英語）は受講者と相談のうえで決める。「社会言語学研究1A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	対人配慮行動理論研究1A	欧米で提唱されてきた対人配慮の行動に関する理論、及び当該理論に対するその後の批判を講読する。参加者自身も批判的に検討を加えるだけでなく、各自が持つデータからどのような修正が可能を実証的に議論する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	対人配慮行動理論研究1B	欧米で提唱されてきた対人配慮の行動に関する理論、及び当該理論に対するその後の批判を講読する。参加者自身も批判的に検討を加えるだけでなく、各自が持つデータからどのような修正が可能を実証的に議論する。「対人配慮行動理論研究1A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	対人配慮行動理論研究2A	欧米で提唱されてきた対人配慮の行動に関する理論、及び当該理論に対するその後の批判を講読する。参加者自身も批判的に検討を加えるだけでなく、各自が持つデータからどのような修正が可能を実証的に議論する。「対人配慮行動理論研究1A, 1B」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	対人配慮行動理論研究2B	欧米で提唱されてきた対人配慮の行動に関する理論、及び当該理論に対するその後の批判を講読する。参加者自身も批判的に検討を加えるだけでなく、各自が持つデータからどのような修正が可能を実証的に議論する。「対人配慮行動理論研究1A, 1B, 2A」とは異なるトピックスを扱う。	隔年
	ことばと行為のマイクロ分析研究1A	会話分析の研究に対する批判の一つとして、順番取りや行為連鎖などとフォカスがあまりにもマイクロのせいで、その会話が置かれているいわゆる「コンテキスト」を見落とすがちだということである。会話分析では「コンテキスト」という概念がどのように捉えられるか、またコンテキストに関わる情報を記述しようとするエスノグラフィー的な研究手法とどのような関係を持つ可能性があるのかについて考えるために、会話分析とエスノグラフィーの相性について論じる研究や、会話分析とエスノグラフィーの手法を併用する「マイクロエスノグラフィー」の研究を取りあげる。授業では対象文献の内容を丁寧に確認し、ディスカッションをすることによって理解力を深める。また、受講生は各自でデータを集め、マイクロエスノグラフィー的な手法を用いて小規模な研究プロジェクトを遂行する。最後にその成果をレポートにまとめて提出する。	隔年
	ことばと行為のマイクロ分析研究1B	エスノメソドロジー的な研究によって、第2言語学習に関する研究に対してどのような見解が提供できるかを検討していきながら、特にSacks (1972a, 1972b, 1979, 1995)によって提唱され、Watson (1978, 1997)やJayyusi (1984)、Hester & Eglin (1997)、Stokoe (2012)、Bushnell (2014)、Fitzgerald & Housley (2015)などによってさらに展開されてきている成員カテゴリー化分析の基本的な考え方や分析の技術を身につけることを狙う。	隔年
	ことばと行為のマイクロ分析研究2A	ことばと行為のマイクロ分析研究2Aと2Bでは、1Aと1Bなどで身につけた分析技術を駆使して、一学年を通して教員と受講生全員やその他の協力研究者、院生で分担して英語でオリジナルな研究を論文の形にまとめて共著で実際に投稿することを目標とする。2Aでは特に先行研究を吟味して自分たちで執筆する論文に使うデータや研究課題を検討しつつ毎週の発表で進捗状況を報告していく。	隔年
	ことばと行為のマイクロ分析研究2B	ことばと行為2Bでは、2Aから進めてきている研究を継続しさらに発展させ、共同で一本の論文を英語で執筆する。最終的には適切な投稿先を決め実際に投稿してみることを目指す。	隔年
	プロジェクト演習3A	受講者は、自らの研究プロジェクトに基づいた博士論文の予備的論文を、指導教員(複数)との討議や協議の中で、作成し、その研究成果を発表する。基本的な議論の枠組みの展開、主要な先行研究との関連、主要な素材分析結果、学問的な諸発見と貢献を提示するとともに、博士論文の構成および執筆計画を発表する。主に4月入学者が受講する。	
	プロジェクト演習3B	受講者は、自らの研究プロジェクトに基づいた博士論文の予備的論文を、指導教員(複数)との討議や協議の中で、作成し、その研究成果を発表する。基本的な議論の枠組みの展開、主要な先行研究との関連、主要な素材分析結果、学問的な諸発見と貢献を提示するとともに、博士論文の構成および執筆計画を発表する。主に10月入学者が受講する。	
	プロジェクト演習4A	受講者は、自らの研究プロジェクトに基づいた博士論文の予備的論文を、指導教員(複数)との討議や協議の中で、作成し、その研究成果を発表する。基本的な議論の枠組みの展開、主要な先行研究との関連、主要な素材分析結果、学問的な諸発見と貢献を提示するとともに、博士論文の中核となる諸章を発表する。主に4月入学者が受講する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	プロジェクト演習4B	受講者は、自らの研究プロジェクトに基づいた博士論文の予備的論文を、指導教員(複数)との討議や協議の中で、作成し、その研究成果を発表する。基本的な議論の枠組みの展開、主要な先行研究との関連、主要な素材分析結果、学問的な諸発見と貢献を提示するとともに、博士論文の中核となる諸章を発表する。主に10月入学者が受講する。	
	(研究指導)	<p>国際日本研究の諸領域に関して、研究の実践、指導を行い、博士論文執筆者について論文指導を行う。</p> <p>(5 石塚修) カルチュラル・スタディーズの手法を用いて、日本の文学や文化に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(13 小野正樹) 機能文法の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(15 海後宗男) 社会心理学の手法を用いて、メディア研究に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(26 田中洋子) 経済史・労働経済学の手法を用いて、労働問題や社会政策に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(34 根本信義) 法解釈学の手法を用いて、日本社会の法的問題に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(36 潘亮) 外交史の手法を用いて、日本の対外関係に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(40 平沢照雄) 経済史・地域経済論の手法を用いて、日本の地域経済に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(41 平山朝治) 経済学・思想研究の手法を用いて、日本の経済思想に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(25 DADABAEV Timur) 国際関係論の手法を用いて、中央アジアの国際関係に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(56 明石純一) 国際関係論の手法を用いて、国際人口移動に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(59 生藤昌子) マクロ経済学の手法を用いて、環境問題に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(61 井出里咲子) 言語人類学の手法を用いて、日本語教育や言語行為に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(62 Vanbaelen Ruth) 社会言語学の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(65 大友 貴史) 国際関係論の手法を用いて、日本の国際関係に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(68 巖錫仁) 思想史の手法を用いて、東アジアの思想に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(71 木戸光子) 文章論の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(81 柴田政子) 教育学の手法を用いて、比較教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(87 高木 智世) 会話分析の手法を用いて、日本語教育や相互行為に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(91 崔宰英) 統計科学の手法を用いて、数量社会分析に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(104 平石典子) 比較文学・比較文化の手法を用いて、日本と諸地域の文学や文化の比較に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(105 福住多一) ミクロ経済学・ゲーム理論の手法を用いて、日本と諸地域の経済の比較に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(106 BUSHNELL CADE CONLAN) 言語人類学の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(114 宮坂渉) 法制史の手法を用いて、日本と諸地域の比較法制に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(120 山本英弘) 政治社会学の手法を用いて、日本政治と市民社会に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(123 レスリータック川崎) メディア分析の手法を用いて、情報社会に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(86 関崎博紀) 語用論の手法を用いて、日本語教育に関する課題の研究指導を行う。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文社会ビジネス科学学術院 ビジネス科学研究群 博士前期課程)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学 院 共 通 科 目	応用倫理	<p>Situational ethical principles such as research ethics for research laboratories and medical ethics for hospitals do not always correspond well each other in giving us a clear direction in pursuing the best quality of life in modern society. Rather than taking individual principles for granted, this course attempts to understand how we may disentangle somewhat conflicting ethical principles. In so doing, this course provides unique perspectives to ethical principles by incorporating cultural and historical contexts of human rights and environmental concerns.</p> <p>研究倫理や医療倫理など状況に特化した倫理原理は、必ずしも相互に補完する関係にないため、現代社会の中で最善の質を求めるための明確な指針とはなっていない。こうした絡まった倫理原理を解きほぐすことを試みる。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(125 松井健一/7回) Provides perspectives to ethical principles by incorporating cultural and historical contexts of human rights and environmental concerns. 文化や歴史的な文脈から人権や環境に関する問題も含め、応用倫理のための視点を醸成する。 (162 大神明/1回) Provides perspectives of industrial doctors and considers ethics related to risks. 産業医の視点からリスクに関わる倫理的な問題を提起する。</p>	集中 オムニバス方式
	環境倫理学概論	<p>Environmental ethics helps us not only think about interpersonal relations in society but also the ones between people and the natural environment. This expansive scope helps us see our daily activities, ethical or not, within ecosystems or biotic communities. This course invites students to think about a need to establish a universally applicable ethical principle/ law for global citizens to tackle with environmental problems. To answer this question, it introduces many environmental ethical ideas related to biodiversity, bioethics, animal rights/ welfare, and household activities.</p> <p>環境倫理は、社会における対人関係だけでなく、人と自然環境の関係について考える助けとなる。こうした広い視野を持つことで、我々は生態系の一部として日々の活動が倫理的かどうかを考えることができる。この授業では、学生に対し世界市民として、環境問題を解決するため、ユニバーサルな倫理大綱や法律を構築する必要性について考えてもらう。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(125 松井健一/7回) Introduces many environmental ethical ideas related to biodiversity, bioethics, animal rights/ welfare, and household activities. 生物多様性や生命倫理、動物の権利・福祉、生活者のための環境倫理を紹介する。 (85 渡邊和男/1回) Introduces ethical principles related to international environmental law. 国際法に関する環境倫理原理を紹介する。</p>	集中 オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	研究倫理	<p>研究活動に従事する上で踏まえるべき研究倫理の基礎を、具体的事例を交えて講義する。研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスなどを取り上げる。また、これらを理解するための前提となる、科学技術政策、研究助成のしくみ、申請や審査のしくみなどについても触れる。</p> <p>本科目は講義を主体としつつ、講義の間に演習（個別演習・グループ演習）を交互に挟む構成とする。講義においては、研究倫理と研究公正に関連する基本概念を整理すると共に、研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスに関わる問題などを取り上げる。また、これらを理解するための前提となる、学術研究活動を取りまく環境の変化や、科学研究費の申請や審査のしくみなどについても触れる。特に特定不正行為に関しては具体的事例を元にその原因や背景を解説し、受講者が研究活動を行う上で必要な対策について具体的に考える機会を与える。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（135 岡林浩嗣／9回）上記の講義を行う。演習においては、ワークシートを用いて自らの研究活動の構造を分析した上で、研究倫理上の問題点とその背景について討議する。さらに、研究不正を防止するために必要な施策について討議を行い、グループ単位での発表とその指導を行う。</p> <p>（163 大須賀壮／1回）理化学研究所における研究管理状況をふまえて、適切な実験ノートの取り方について講義を行う。また、演習の際に岡林と合同でグループ討議の指導を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 9時間 演習 6時間
	生命倫理学	<p>遺伝子治療、臓器移植、人工臓器、生殖医療、遺伝子診療、薬物やその他の治療法の治験などの現代の医療や医学研究には、インフォームドコンセント、個人の尊厳やプライバシー、脳死判定やリスクマネージメント、治療停止の選択など生命倫理にかかわる多くの問題を含んでいる。現代医療が抱える生命倫理諸問題の基礎知識、基本的考え方を習得するとともに、実例により学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式/全10回）</p> <p>（150 菅野幸子／1回）テーマとして「生命倫理とその歴史」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（129 柳久子／1回）テーマとして「予防医学における生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（114 西村健／1回）テーマとして「再生医学と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（98 川崎彰子／1回）テーマとして「生殖医療と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（53 杉山文博／1回）テーマとして「動物実験と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（164 木澤義之／1回）テーマとして「緩和医療と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（138 高橋一広／1回）テーマとして「臓器移植と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（167 宗田聡／1回）テーマとして「遺伝学と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（84 我妻ゆき子／1回）テーマとして「国際保健における生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（66 野口恵美子／1回）テーマとして「医学・医療の倫理」について取り上げ、講義を行う。</p>	オムニバス方式
	企業と技術者の倫理	<p>多くの技術者は企業に属し、その中で社会とビジネス的な関わりを持ちながら仕事を行っている。本講義では、具体的事例や現場の声を取り上げながら、企業における技術者の倫理について議論する。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（94 掛谷英紀／7回）技術の社会的役割の変遷について講義を行う。併せて、「東日本大震災と今後の防災・エネルギー」、「企業不正のグレーゾーン（Facebook、NHK受信料等）」の2つのグループ・ディスカッションを行い、21世紀の「人に役立つ技術」を考える。</p> <p>（168 西澤真理子／3回）実際の企業現場の事例を取り上げながら、「企業のリスクコミュニケーション」について講義を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 9時間 演習 6時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
情報伝達力・コミュニケーション力養成科目群	テクニカルコミュニケーション	事実やデータに基づいて行われる情報発信であるテクニカルコミュニケーションを円滑に行うための基本を、講義と演習で修得する。講義では、発信する内容を組み立てるための発想法の活用法、誰にでも一通りに伝えるための文法、レイアウトデザインの基礎理論、文字と絵の役割の違いなどをあつかう。さらに、語彙を豊富にするための演習、物事を数多くの視点から説明するための演習、専門用語に頼らずに内容の本質を伝える演習などを通して、テクニカルコミュニケーションを実践的に学ぶ。	集中 講義10時間 演習 5時間
	英語発表	This course provides an overview of basic techniques for public speaking and presentations in English. Students are then given ample opportunity to practice these techniques in front of the class. 本講義ではコミュニケーションの基礎理論、英語でのパブリック・スピーキング、プレゼンテーションの技術の修得を目標とする。また、学んだ理論・技術を応用活用する経験として、実際に聴衆を前にしたプレゼンテーションをおこなう。	集中 講義10時間 演習 5時間
	異分野コミュニケーションのためのプレゼンテーションバトル	プレゼンテーションの初歩から中級までを対象とし、異分野学生それぞれによるプレゼンテーションをベースに現代に必要なアカデミックスキルを磨くことを目的とする。参加者が異分野の学生との協働によってアイデアを出し合い、新しいコンテンツの作成に向かって協働することで、異なる領域の知識や技術を互いに理解しコミュニケーション能力を高める。演習トラック毎によって設定する目標を決め、それに従ってコンテンツを実際に作成する。時にドラマレッスンを盛り込む。	集中
	Global Communication Skills Training	Precise communication with people having diverse perspectives and personalities is the key to building relationships, and success. Through practices of communication, including effective listening, effective presentation, assertive communication, we help you learn and practice communication methods. You should be prepared to have open and active class participation and require a certain level of English skill. 対面でのコミュニケーションのスタイルには、人それぞれに個性があります。どのようなコミュニケーションスタイルを持つ相手とも正確に情報を伝達しあうことが、信頼を得て成功するための鍵になります。この授業では、情報を効率よく受け取ったり、正確に話すための練習を通して、コミュニケーション力を高めます。受講するためには、ある程度の英語力が必要です。また、受身ではなく発言や議論を通して積極的に授業に参加することが求められます。	集中 講義 7時間 演習 8時間
	サイエンスコミュニケーション概論	サイエンスコミュニケーション (SC) とは「難しく敬遠されがちなサイエンスをわかりやすく説明することである」という理解はきわめて一面的である。SCの対象は科学技術分野の専門家、非専門家を問わないため、「サイエンスの専門家と非専門家との対話促進」がSCであるとも言いきれない。広い意味でのSCとは、個人々ひいては社会全体が、サイエンスを活用することで豊かな生活を送るための知恵、関心、意欲、意見、理解、楽しみを身につけ、サイエンスリテラシーを高め合うことに寄与するコミュニケーションである。そのために必要なこと、理念、スキルなどについて概観する。	集中
	サイエンスコミュニケーション特論	現代社会は科学技術の恩恵なくして成り立たない。科学技術はわれわれの生活に深く根ざしており、よりよい社会を築いていくためには一人でも多くの人々が科学技術との付き合い方に関心を向けることで、社会全体として科学技術をうまく活用していく必要がある。そのためには様々な立場から科学技術についてのコミュニケーションをし合うことで科学技術を身近な文化として定着させ、社会全体の意識を高める必要がある。このような問題意識から登場したのがサイエンスコミュニケーションという理念である。この理念が登場した背景を知ると同時に、方法論としてはどのようなものがあるのかを議論しつつ、コミュニケーションスキルの向上も目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	サイエンスコミュニケーター養成実践講座	<p>主として、自分の専門の科学を一般の人々にわかりやすく伝えられるコミュニケーション能力の養成を中心に、国立科学博物館の資源や環境を活用した理論と実践を組み合わせた対話型学習を進める。</p> <p>理論面では、サイエンスコミュニケーションとは？サイエンスとは？といった考え方をはじめ、メディア・研究機関・大学・博物館など、各機関・領域で活躍しているサイエンスコミュニケーターの実践を踏まえた理論を学習する。また、様々な人々に科学を伝える際に効果的なプレゼンテーションの方法について学修する。</p> <p>実践面では、ライティングに関する課題を通じた文章の書き方や表現方法の学習、国立科学博物館の展示室における来館者との双方向的な対話を目指し、自らの専門分野についてのトークを作成・改善・実施・考察する。</p>	集中
	人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える	<p>哲学、歴史、文学、言語学、社会科学、地域研究などの人文社会分野における学術研究の成果をどのように社会に伝え、人々の知的好奇心を呼び起こし、当該学問分野の社会的認知度を如何に向上させるか、その考え方、方法、それらを担う人材に求められる必要なスキルなどについて学ぶ機会を提供する。人文社会分野における「学問と社会を結ぶ」ためのスキルを磨くための内容を含む。加えて、現在発展が著しい人文社会分野における最先端機器を駆使して行う研究は多くの学術的成果を生み出しており、その魅力は計り知れない。このような最先端研究に基づく解析法は自然科学分野の最先端技術を活用したものでもあり、ここに人文社会科学と自然科学の接点があり、分野融合の意義、有用性、重要性を含めた科学の現状を多くの大学院生に紹介するための科目とする意図も企画者側にある。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(31 池田潤／4回)「文芸・言語学、世界と地域の文化・歴史、世界と地域の社会科学に関する人文社会科学知見に関して、自然科学と最先端科学技術を駆使する成果がどのように活かされているかについて、その相関を俯瞰しつつ解説し、人文社会科学と自然科学・工学的技術の融合の重要性」について講義を行うことで人文社会科学における自然科学基礎的・応用的知的基盤の重要性について学習する。</p> <p>(37 大澤良／4回)「生物多様性、生物の地理的拡散、有用植物や作物の地理的分布などに関する自然科学的研究成果をベースに、それらが人間及び人間の生活とどのようなかかわりを有してきたかなどの人文社会科学知見を加えて分析し、自然科学と人文社会科学的要素がどのように融合・連関をなしているか、その相関を俯瞰しつつ解説し、自然科学と人文社会科学の融合の重要性」について講義を行うことで自然科学の視点から自然科学の基礎的・応用的知的基盤がいかに人文社会科学に重要な役割を果たしているかについて学習する。</p> <p>(166 白岩善博／2回)「自然科学研究の成果を基盤に、最先端研究成果を如何に社会に広報、拡散、応用するかなどに関して、サイエンスコミュニケーションやトランスフェラブルスキルを駆使して、自然科学的研究成果が人間及び人間の生活とどのようなかかわりを有してきたかを解説し、自然科学の科学的・技術的成果をどのように社会に導入するかの方法論」について講義を行い、さらにそのスキルアップをどう図るかを学ばせることで、大学院修了後のキャリアパスにそれをどう生かすかに関して学習する。</p>	集中 オムニバス方式
国際性養成科目群	21世紀的中国 ―現代中国的多相―	<p>巨大な隣国である中国は、1976年の文化大革命の終結以降、経済の改革開放政策の成果により、大きな変貌をとげた。21世紀初頭の今、ますます存在感を増した中華人民共和国の現在の諸相を、学生にとって身近な目線で講じる。中国と日本の関わりを実際の動きの中で捉えていくことを目論む。</p> <p>現在中国との関わりの深い筑波大学OBを講師とし、現代中国の文化、社会、経済、環境、日中翻訳など、様々な観点から、現場に立つ講師ならではの姿を描き出す。既成の学問の枠で説明されたものを理解して満足するのではなく、実社会の動きの中で課題を捉え、みずから解決していくために何が必要か、講義中から受講者自身で考えだすことを望みたい。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際研究プロジェクト	<p>学生自らが海外の大学・研究機関における専門および関連分野の研究計画を企画し実現することで、自身の能力涵養を図る科目である。海外における受け入れ先の開拓、海外渡航の手続き、海外での研究・実習、受入先でのコミュニケーション、海外での生活等を経験することで、英語によるコミュニケーション能力・国際性・研究マネジメント能力の向上を実現する。学習成果をより効果的なものとするため、海外において研究活動を行うだけでなく、実施計画書を基にした事前指導及び帰国後の成果報告書の作成とフィードバックを受けることを必要とする。</p>	
	国際インターンシップ	<p>学生自らが国際的な職業体験（海外の大学におけるPFF体験を含む）や海外の大学・研究機関で主催される各種トレーニングコースを開拓し参加することで、自身の能力涵養を図る科目である。海外における受入先との調整、海外渡航の手続き、海外での職業体験、受入先でのコミュニケーション、海外生活経験を通して、コミュニケーション能力、国際性、キャリアマネジメント能力の向上を実現する。学習成果をより効果的なものとするため、海外において研究活動を行うだけでなく、実施計画書を基にした事前指導及び帰国後の成果報告書の作成とフィードバックを受けることを必要とする。</p>	
	地球規模課題と国際社会:食料問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」の中でGoal 2 & 12に関連した、国際社会が直面する「食料問題」について取り扱う。世界の人口動態と食料生産・消費動向、植物育種新技術、食料生産新技術、植物防除新技術などについての講義を通して国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会:海洋環境変動と生命	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 13 & 14に関連した、国際社会が直面する「海洋環境変動と生命」について取り扱う。CO2濃度上昇に関わる地球規模環境課題、海洋酸性化、地球温暖化による生物影響、北極・南極の海氷融解などの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（33 稲葉一男／5回）「海洋生物、特に海洋動物に関する形態学、生理学、生化学、分子生物学的手法を駆使した最先端の科学的知見を基盤に、地球規模かつローカルな海洋環境の変化を海洋動物がどのような仕組みで感知するか、さらにその環境変化によってどのような生物学的変化を引き起こすか」について講義を行うことで地球規模の海洋環境変動が生命に与える影響について学習する。</p> <p>（166 白岩善博／5回）「海洋生物、特に海洋植物・藻類の光合成生物や光合成機能を有する微生物に関する形態学、生理学、生化学、分子生物学的手法を駆使した最先端の科学的知見を基盤に、地球規模かつローカルな海洋環境の変化を海洋動物がどのような仕組みで感知するか、さらにその環境変化によってどのような生物学的変化を引き起こすか」について講義を行うことで地球規模の海洋環境変動が生命に与える影響について学習する。</p>	集中 オムニバス方式
	地球規模課題と国際社会:社会脳	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」の中で、主として、Goal 3 & 4に関連するが、社会性や共生という観点から現代に生きる人類に共通する課題とそれに対する取り組みの方向性を提起する先端的な講義を展開する。</p> <p>国際社会が直面する「社会性の変容」に起因する様々な問題を「社会脳」として新たな分野を創成しそれを取り扱う。</p> <p>個別課題として、社会性の発達と環境、社会認知の脳内基盤、高齢者の認知機能などについて講義する。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地球規模課題と国際社会：感染症・保健医療問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 3に関連した、国際社会が直面する「感染症・保健医療問題」について取り扱う。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(152 福重瑞徳/全5回) 「持続可能な開発目標（SDGs）」、「感染症」、「プロジェクト・サイクル・マネージメント（PCM）手法」をテーマに講義を行い、また、学生はPCMを用いた国際保健に関するプロジェクト形成・発表を行う。</p> <p>(84 我妻ゆき子/全3回) 「国際保健とその歴史」、「人口・リプロダクティブヘルス・栄養」、「慢性疾患とリスク」をテーマに講義を行う。</p> <p>(47 近藤正英/全2回) 「途上国における保健医療問題と優先付け」、「途上国における保健医療制度・医療経済」をテーマに講義を行う。</p>	集中 オムニバス方式
	地球規模課題と国際社会：社会問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」を地域自立と振興の観点から全て網羅する課題である「社会問題」について取り扱う。</p> <p>発展と持続性に関し、天然資源、環境保全、及び経済発展を軸として、国家としてのガバナンス、国家間の懸案事項、ボーダーレス社会での“歪み”、非政府組織や先住民族の存在によるグラスルートでの課題対応をグローバルに概論する。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会：環境汚染と健康影響	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 3に関連した、国際社会が直面する「環境汚染と健康影響」について取り扱う。</p> <p>国際的汚染問題の概要、ナノ粒子、外因性内分泌攪乱化学物質、環境中親電子物質、エクスポソーム、カドミウム、ヒ素、有機ハロゲン化合物、メチル水銀、トリブチルスズなどの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会：環境・エネルギー	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 7, 9 & 13に関連した、国際社会が直面する「環境・エネルギー」について取り扱う。</p> <p>太陽電池、燃料電池、人工光合成、ナノエレクトロニクスによる省エネルギー、パワーエレクトロニクスによる電力制御、核融合発電などの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
キャリア ア マ ネ ジ メ ン ト 科 目 群	JAPICアドバンストディスカッションコースI-流動化する世界とこれからの日本	<p>最新の社会問題、国際問題、ビジネス上の課題を対象に議論を行うため、産業界のトップリーダーを講師として招聘する。</p> <p>世界が益々流動化する中で日本の現状と課題を再確認すると共に、今後の変化に対応する為になにが必要か検証・議論することで、社会人基礎力として重要なさまざまな能力を身に付けることを目的とする。</p> <p>事前学習を通じて情報収集力を、授業時間中の議論を通じてディベート力を、レポート作成を通じてまとめる能力を身につける。</p>	集中
	JAPICアドバンストディスカッションコースIII-テクノロジーとグローバルで拓く未来	<p>最新の社会問題、国際問題、ビジネス上の課題を対象に議論を行うため、産業界のトップリーダーを講師として招聘する。</p> <p>グローバルとテクノロジーについて、実ビジネスの観点から議論し学習することで、社会人基礎力として重要なさまざまな能力を身に付けることを目的とする。</p> <p>事前学習を通じて情報収集力を、授業時間中の議論を通じてディベート力を、レポート作成を通じてまとめる能力を身につける。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ダイバーシティとSOGI/LGBT+	<p>産業化、技術革新、国際化による変化にともない、人々の生活や働き方、人間関係にもさまざまな変化が生まれています。本科目では、さまざまな属性や特徴を有する個人がどのように「仕事と生活の両立（ワークライフバランス）」を図りながら人生を生きるのか、なぜ男女共同参画やダイバーシティ（多様性）を推進する必要があるのか、その方法と意味を理解することを目指します。特に近年のダイバーシティ推進の重要なトピックである「SOGI」「LGBT+」に代表されるセクシュアル・マイノリティについて集中的に授業を行います。</p> <p>くわえて、授業ではダイバーシティ推進に欠かせない実践力（グループワークにより聴く力、伝える力、情報収集力、マネジメント力等）を身につけることも目標とします。</p>	集中 講義7.5時間 演習7.5時間
	ワークライフミックス – モーハウスに学ぶパラダイムシフト	<p>仕事と私生活を調和した新たなビジネススタイルである、「ワークライフミックス」を講義の基本テーマとして取り上げることで、新たな価値創造の基礎となるアントレプレナーシップや、多角的思考からワークライフを捉え、受講者のキャリアマネジメント能力の向上を図る。</p> <p>また、「ワークライフミックス」を実践している企業である「モーハウス」を事例として取り上げることで、ワークライフに関わる物の見方と考え方を習得し、受講生が自分の仕事や今後のライフプランについて、多様な角度から思考できるようにする。</p>	集中
	魅力ある理科教員になるための生物・地学実験	<p>気象、地質、岩石、昆虫、植物、菌、微生物、内燃機関といった、「生物」と「地学」を合体した内容をフィールドワーク重視の実習形式で実施することにより、受講者が将来理科教員になった場合に役立つ実践的な実習・実験の高度専門知識を身につけることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全6回)</p> <p>(86 上松佐知子/1回) フィールドでの化石探索を通し、地球の歴史に関する実習を行う。 (59 田島淳史/1回) 「食べものを作る動物たち」をテーマに実習を行う。 (115 野口良造/1回) 「内燃機関の原理と組み立て」をテーマに実習を行う。 (42 戒能洋一・106 澤村京一・113 中山剛・141 八畑謙介/1回) (共同) 「生物に関するフィールドワーク」をテーマに実習を行う。 (73 久田健一郎/1回) 「地質調査入門」をテーマに実習を行う。 (80 山岡裕一/1回) 「微生物(菌類)に関するフィールドワーク」をテーマに実習を行う。</p>	集中 オムニバス方式 共同(一部)
	アクセシビリティリーダー特論	<p>障害のある人々が包摂された社会を実現するために、身体障害や発達障害といった様々な障害の理解や支援に関する幅広い講義を行う。また、障害のある人への災害時支援や、障害のある人に役立つ支援技術、諸外国と日本における支援の比較や展開といったマクロな視点や今日的な話題を通して、多様な背景をもつ人々が共生することのできる社会とはどのような社会なのかについて考える力を身につけることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(56 竹田一則/1回) 「障害児・者支援の理念と背景」について講義を行うことで、障害者支援の現状や歴史的背景、今日的課題について学習する。 (151 野口代/2回) 「障害児・者の現状および支援の流れ、支援体制」について講義を行うことで、支援領域(就学、生活、就職ほか)ごとの支援方法や支援体制について学ぶ。 (100 小林秀之/3回) 「視覚障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、視覚障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (72 原島恒夫/4回) 「聴覚障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、聴覚障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (140 名川勝/5回) 「運動・内部障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、運動・内部障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (92 岡崎慎治/6回) 「発達障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、発達障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。</p>	オムニバス方式 共同(一部)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(151 野口代／7回) 「障害のある人への災害時支援」について講義を行うことで、障害種別に災害時に留意すべき事項について学習する。</p> <p>(103 佐々木銀河／8回) 「障害のある人に役立つ支援技術」について講義を行うことで、最新の支援機器や支援技術について学習する。</p> <p>(103 佐々木銀河／9回) 「諸外国と日本における支援の比較と展開」について講義を行うことで、国際的な動向を踏まえた障害者のある人へのアクセシビリティについて学習する。</p> <p>(56 竹田一則・69 野呂文行／10回) (共同) 講義のまとめと討論を行うことで、これまでに学んだ障害の特性や、障害のある人のアクセシビリティを支援するための知識を表現できるようにする。</p>	
	脳 の 多様性とセルフマネジメント	<p>本学大学院生が産業界や地域社会で自身の能力を十分に発揮できるよう、自己および他者における脳の多様性を適切に理解することを通して、自身の特性に合ったセルフマネジメントスキルを身に付けることを目標とする。</p> <p>講義としては、発達障害から定型発達の連続体として捉えられる「脳の多様性 (ニューロダイバーシティ)」について概説する。加えて学業や日常生活において有効なセルフマネジメントテクニック・ツールを紹介する。</p> <p>演習としては、自身にはどのような特性があるかを客観視する個人ワークを行う。また自身の特性に合ったマネジメント方法を身に付ける。さらに社会で活躍する発達障害当事者をゲストスピーカーとして招き、自己および他者における脳の多様性を深く理解するための事例を提供する。</p>	集中 講義 9時間 演習 6時間
知的 基盤 形成 科目 群	生物多様性と地球環境	<p>本科目では、筑波大学と科学博物館筑波植物園のコラボレーションにより、生物多様性と地球環境についての理解を促進するための講義と展示・フィールドを利用した現場型の生物多様性・地球環境教育についてのフィールド実習を行う。</p> <p>有用植物の進化を実物で見ながら、植物の進化とは異なる人間の手が加わった栽培化シンドロームを実感してもらうことで、生物多様性の実体と生物遺伝資源について、自然科学的・社会科学的にとらえられるようにすることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全4回)</p> <p>(37 大澤良／1回) 「栽培植物の起源」についての講義と植物園見学を行うことで、多様性研究の意味について学習する。</p> <p>(161 海老原淳／1回) 「生物多様性ホットスポットとしての日本列島」をテーマとする講義と絶滅危惧であるシダ植物園見学・管理実習を行う。</p> <p>(165 國府方吾郎／1回) 「絶滅危惧植物と生物多様性」をテーマに植物園における社会発信と保全の見学、植物登録管理の実習を行う。</p> <p>(71 林久喜／1回) 「作物の多様性」をテーマに講義と実習を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 7.5時間 実習 15時間
	内部共生と生物進化	<p>非常に多くの生物が、恒常的もしくは半恒常的に他の生物 (ほとんどの場合は微生物) を体内にすまわせている。</p> <p>このような「内部共生」という現象から、しばしば新しい生物機能が創出される。共生微生物と宿主生物がほとんど一体化して、あたかも一つの生物のような複合体を構築する場合も少なくない。</p> <p>共生関係からどのような新しい生物機能や現象があらわれるのか? 共生することにより、いかにして異なる生物のゲノムや機能が統合されて一つの生命システムを構築するまでに至るのか? 共に生きることの意義と代償はどのようなものなのか? 個と個、自己と非自己が融け合うときになにが起こるのか? 共生と生物進化の関わりについて、その多様性、相互作用の本質、生物学的意義、進化過程など、基本的な概念から最新の知見にいたるまでを概観することで、そのおもしろさと重要性についての認識を共有することをめざす。</p>	集中
	海洋生物の世界と海洋環境講座	<p>海は地球上の生命の源であり、生物の多様性を生みだしてきた。地球と我々人間を理解するためには、海洋生物に関する知識が不可欠である。</p> <p>本科目では魚類をはじめ、さまざまな海洋生物の体制、生殖、寄生種に関する観察や実験、講義を行うことにより、海洋生物の多様性および海洋環境についての理解を深めることを目的とする。</p> <p>下田臨海実験センターにて実施することで、研究調査船による採集や磯採集など野外でのより実践的な実習も行う。</p>	集中 講義 4.5時間 実習 21時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	科学的発見と創造性	科学的発見がおこなわれる現場の歴史的状況を再現し、行為者の創造性がどのような形で発揮されたのか、「ハンソンの理論的負荷性」、「ニュートンの林檎と万有引力の理論」、「ゼメルヴェイスによる産褥熱の予防」、「ジョン・ドルトンと化学的原子論」等様々な事例研究を通じて解明する。 科学的発見が単なる偶然でも、幸運でもなく、周到に企図された創造性によるものであることを理解することを目的とする。	集中
	自然災害にどう向き合うか	国土交通省で活躍する有識者を講師として招聘し、災害列島とも言われる我が国の現状及び温暖化等により今後益々増加する災害リスクに対して、社会としてどのように対応するべきかを考える。 「総合的な津波対策」、「大規模土砂災害への対応」、「地震対策」等のテーマを通じて、防災施設の整備の状況、リスク等を踏まえた今後の社会資本整備のあり方について考え方が整理されること、個人や地域の核としての防災対応力を身につけることを目的とする。	
	「考える」動物としての人間-東西哲学からの考察	「考える」のは人間の特性である。人間は言葉を使って知性によって「考える」。だが「考える」とはどのような営為なのか、東西の哲学がどのように「考え」てきたのかを参照しながら「考える」ことについて「考える」。 (オムニバス方式/全10回) (83 吉水千鶴子/2回) 仏教の思想を参照して「考える」ことについて考える。 (30 井川義次/2回) 中国の思想を参照して「考える」ことについて考える。 (139 千葉建/2回) ドイツ哲学思想を参照して「考える」ことについて考える。 (110 津崎良典/2回) フランス哲学思想を参照して「考える」ことについて考える。 (107 志田泰盛/2回) インド思想を紹介しながら「考える」ことについて考える。	集中 オムニバス方式
	21世紀と宗教	21世紀の現代社会の情勢は宗教と深く関わっており、複雑な国際情勢、テロなどの暴力と対峙せねばならない現代社会において、それを解く鍵ともなる宗教について正しい知識と理解を得ることは重要である。 当科目では、21世紀の現代社会の情勢と宗教とのかかわりについて、いくつかの事例を取り上げながら考察する。 宗教による対立や政治への介入は紀元前の昔から続いてきた人類の課題とも言え、その歴史や背景を正しく知り、現在のグローバルな社会において正しく対応するための知識と理解を身につけることを目的とする。 (オムニバス方式/全10回) (44 木村武史/5回) 「先住民族の宗教の関り」について講義を行うことで現代グローバル社会における先住民族宗教の意義について学習する。 (83 吉水千鶴子/5回) 「アジアの民族と宗教の関り」について講義を行うことで現代グローバル社会における伝統宗教の意義について学習する。	集中 オムニバス方式
身心基盤形成科目群	塑造実習	当科目は豊かな心、逞しい精神、豊かな人間力を涵養する大学院生のための塑造の実践講座である。作品鑑賞と、人物モデルを使用した粘土による頭像制作を行う。「デッサン」、「心棒組み」、「大掴みな土付け」、「量塊の構成」、「面と量塊」、「量感豊かな表現、比例・均衡・動勢について」といった制作に関する内容の学習を通して、立体的な形態把握と、これを表現する能力を養うことを目的とする。	隔年
	コミュニケーションアート&デザインA	授業の到達目標及びテーマ：現代アート全般、ビジュアルデザイン全般、陶磁、木工、構成学について概説し各諸分野の位置付けを明らかにする。 (オムニバス方式/全10回) (144 上浦佑太/1回) (1) ガイダンス (45 國安孝昌/2回) (2) 総合造形の研究、(3) 総合造形の教育 (101 齋藤敏寿/1回) (4) 現代の実材主義的な造形	隔年 オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(61 田中佐代子/1回) (5) ビジュアル・コミュニケーション・デザイン (118 原忠信/1回) (6) ブランディングデザイン (128 宮原克人/1回) (7) 木工・漆芸 (143 小野裕子/1回) (8) 特殊造形、環境とアート (153 Gary Roderick MCLEOD/1回) (9) 写真 (144 上浦佑太/1回) (10) 構成学	
	コミュニケーションアート&デザインB	授業の到達目標及びテーマ：環境デザイン全般、ガラス工芸、メディアアート、絵本や漫画について概説し各諸分野の位置付けを明らかにする。 (オムニバス方式/全10回) (157 山本美希) (1) ガイダンス (67 野中勝利/1回) (2) 市民参加によるまちづくり (75 藤田直子/1回) (3) ランドスケープデザイン (134 渡和由/2回) (4) サイトプランニング、(5) 住環境の総合的デザイン (116 橋本剛/2回) (6) 快適な環境、(7) 伝統民家のデザイン (149 鄭然ギョン/1回) (8) ガラス (155 村上史明/1回) (9) メディアアート、テクノロジーと芸術 (157 山本美希/1回) (10) 絵本、マンガ、イラストレーション	隔年 オムニバス方式
	日本画実習	日本の芸術を理解し、生涯において楽しむことのできる豊かな人間性を涵養することを目的とする授業。日本画用の筆・和紙・絵具を用いた作品制作を通して、長い歴史に育まれた日本画への理解を深め、豊かなところを養う。必要に応じて、日本画の鑑賞について、材料や技法についての講義も織り交ぜる。グローバル化の中においては、世界を意識すると同時に日本の芸術文化に改めて注目し理解することが必要で、当科目はそのきっかけとなる。	隔年
	ヨーガコース	当科目は「ヨーガ行法の体系、歴史、思想(ヨーガの日本文化への貢献)」、「ヨーガの効果」、「社会的意義(環境思想への影響、自然科学思想への貢献)」といったヨーガ思想と技法の講義、「予備体操」、「アーサナ」、「呼吸法」、「冥想」の実習を行うことで、インドが生み出したヨーガを通じて、深く自己を掘り下げる東洋の実践的な身心思想を学び実践する。 健康でかつ不安や絶望に対処できる柔軟な身心と強い意志をもって、よりよい人生を築ける自己を養うことを目的とする。	集中 講義10時間 実習20時間
	絵画実習A	全人的な教養教育として、知識のみならず、自分自身の「手仕事」として「絵を描く」という体験は、作る楽しさや喜びを感じつつ、まさに芸術的感性を磨くことが可能である。 当科目は、芸術を楽しむ豊かな人間性を涵養するため、特に油絵具を使用し、制作・実習をおこなうものである。 様々なモチーフの写生などを通して、絵画表現に対する理解を深め、造形感覚を養うことも目的とする。	隔年
	現代アート入門	なぜこれが芸術なのか、現代アートは一見、普通の生活者に無縁のように感じられることが多い。しかし、難しい現代アートも勉強をすれば、誰にでもわかるものなのだ。そうした基礎的芸術教養を身に付ければ、「無用の用」である芸術は、一人ひとりの人生を豊かにしてくれるものになる。 この授業では、現代アートについて、作家としての体験的視点から、多くのヴィジュアル資料を見せながら、現代芸術の考え方(コンセプト)や大きな流れ(芸術運動史や主要な芸術家や作品)を知り芸術への理解を深めることを目的とする。対象は19世紀末から21世紀の現在までとする。	隔年
	大学院体育Ia	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレー、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	大学院体育Ib	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Ic	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIa	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIb	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIc	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIa	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	大学院体育IVa	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IVb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IVc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Va	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Vb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Vc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学術院共通専門基盤科目	法文献学	<p>本講義では、法令・判例・文献の研究手法および研究に必要な基本的な知識を正確に身に付けることができるよう、各ツールを比較・評価しながら例題を混ぜて講義する。研究のほか、先行研究の引用作法についても解説する。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(2 岡本裕樹・19 小林和子/1回 民法) (共同) 民法の体系書や教科書を紹介し、判例などの文献の研究手法を講義する。 (13 本田光宏/1回 税法) 租税法の学習に必要な法令、判例、文献等に関する基本的な研究手法等について講義を行う。 (25 川村藍/1回 イスラム金融・経済法) イスラム金融の概説および経済法の学習に必要な基本的文献をもとに、文献研究に必要な研究手法について講義する。 (1 大淵真喜子・23 藤澤尚江/1回 民事訴訟法・国際私法) (共同) 民事訴訟法のほか民事執行法、民事保全法、破産法・民事再生法等の概要について講義するとともに、基本的文献の説明や各法律に関する論点の研究手法を講義する。国際私法の概要について解説し、基本的な文献を紹介するとともに、必要な研究手法について講義する。 (3 川田琢之・24 渡邊絹子/1回 社会保障法・労働法) (共同) 社会保障法及び労働法のそれぞれにつき、当該法分野の概要、本プログラムにおける当該分野の開設科目、当該法分野における代表的参考文献や文献調査を行う際の留意点等を講義形式で説明する。 (8 潮海久雄・12 平嶋竜太/1回 知的財産法) (共同) 主に判例分析や立法趣旨にさかのぼる研究手法を主に用いて、学生の関心のある研究課題について、研究指導を行う。 (15 弥永真生/3回 リーガルリサーチの基礎) 日本法の法令・判例・文献の研究手法および研究に必要な基本的な知識を紹介する。とりわけ、各種データベース、判例集の特徴と利用方法、レポート及び論文に必要な注の付し方、国会議事録など立法の経緯の検索方法などを取り上げる。 (15 弥永真生・4 木村真生子/1回 商法) (共同) 商法各分野の体系書や教科書を紹介し、商法特有の判例集・雑誌などの文献の研究手法を紹介する。</p>	オムニバス方式 共同 (一部)
	ビジネス法入門	<p>ビジネスをはじめとした多様な社会現象から解決されるべき法的課題を発見・設定して、自らの視点で研究を遂行する基礎となる、法的専門知識と思考方法の基本及び研究作法を体得する。</p> <p>(オムニバス方式/全6回 各回1.7コマ)</p> <p>(1 大淵真喜子/1回 民事手続法) 民事手続法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (2 岡本裕樹/1回 民法) 民法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (8 潮海久雄/1回 知的財産法) 知的財産法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (12 平嶋竜太/1回 知的財産法) 知的財産法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (19 小林和子/1回 民法) 民法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。 (23 藤澤尚江/1回 国際私法) 国際私法分野における基本的専門知識と思考方法、研究手法について講義する。</p>	オムニバス方式
	トップレクチャーⅠ	<p>民間企業、教育・研究機関、官公庁、国際機関等のトップ・マネジャーを講師に迎えて、現実の企業や社会システムにおける諸問題の解決方法やトップマネジメント戦略の構築並びに実践方法などについての講義を行う。</p> <p>他授業や研究活動において修得した学術的な知識や知見と、本講義で提示されるトップ・マネジャーの現場からの知識や経験を高度に融合させることで、自らの多角的な思考能力や問題発見・解決能力を涵養することが期待される。</p>	隔年, 集中
	トップレクチャーⅡ	<p>トップレクチャーⅠに続いて、民間企業、教育・研究機関、官公庁、国際機関等のトップ・マネジャーを講師に迎えて、現実の企業や社会システムにおける諸問題の解決方法やトップマネジメント戦略の構築並びに実践方法などについての講義を行う。</p> <p>他授業や研究活動において修得した学術的な知識や知見と、本講義で提示されるトップ・マネジャーの現場からの知識や経験を高度に融合させることで、自らの多角的な思考能力や問題発見・解決能力を涵養することが期待される。</p>	隔年, 集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	哲学プラクティスA	ワールドカフェやオープン・スペース・テクノロジー（OST）などの手法を用いつつ、毎回、現代社会のさまざまな問題や各人が抱えている実存的な問題などをテーマにして、哲学カフェの形式で哲学的な対話を実践する。これを通して、哲学カフェの作り方やファシリテーションの方法の基礎を学び、自らそれを実践する力を身につけるとともに、開かれた態度で他者の話を聞く態度、自らの考えのもつ限界や偏見に気づき、他者との対話を通して考えを深めていく態度といった哲学の実践にとって本質的な姿勢を身につけるよう努める。特にこのAの授業では、心を開き、自ら率直に語り、他者の言葉を謙虚に聞く、対話の基本的態度を身につけるよう努める。	
	哲学プラクティスB	ワールドカフェやオープン・スペース・テクノロジー（OST）などの手法を用いつつ、毎回、現代社会のさまざまな問題や各人が抱えている実存的な問題などをテーマにして、哲学カフェの形式で哲学的な対話を実践する。これを通して、哲学カフェの作り方やファシリテーションの方法の基礎を学び、自らそれを実践する力を身につけるとともに、開かれた態度で他者の話を聞く態度、自らの考えのもつ限界や偏見に気づき、他者との対話を通して考えを深めていく態度といった哲学の実践にとって本質的な姿勢を身につけるよう努める。特にこのBの授業では、実際の哲学カフェにおいてファシリテーターを務め、対話をリードする経験を積む。	
	言語対照論	多様性と普遍性の観点から言語を対照することによって、言語間の違い、個別言語の深層を探る手法を考える。 (オムニバス方式/全10回) (40 大矢俊明/5回) ヨーロッパの言語の対照に関わる問題を概観する。 (104 佐々木勲人/5回) 日本語、アジアの言語の対照に関わる問題を概観する。	隔年 オムニバス方式
	言語資料論	史料、コーパスなどの言語資料について学ぶことによって、それらによって実証的な研究を行う手法を考える。 (オムニバス方式/全10回) (36 大倉浩/5回) 日本語古典史料には、どのようなものがあり、それぞれどのような性格を有し、どのような研究が行えるのか概観する。 (52 杉本武/5回) 日本語や英語のコーパスには、どのようなものがあり、それぞれどのような性格を有し、どのような研究が行えるのか概観する。	隔年 オムニバス方式
	文献資料学	文学作品を研究するさいの基礎となる文献資料の扱い方について講義を行う。 (オムニバス方式/全10回) (28 秋山学/3回) 第1回：西洋古典文献の伝承史と関連事項について講義を行う。第2回：聖書原典の西洋語への翻訳伝承について講義を行う。第3回：仏教関係原典の漢訳による伝承について講義を行う。 (99 稀代麻也子/2回) 中国古典作品通読の基本となる総集と別集について講義を行う。 (51 佐野隆弥/3回) シェイクスピア戯曲の印刷版本について講義を行う。 (117 馬場美佳/1回) 日本近代文学と出版の関係について講義す (133 吉森佳奈子/1回) 日本文学史の教養の基盤について講義を行う。	オムニバス方式
	比較文学	地域や言語を横断するかたちで文学研究をおこなうための方法について学ぶ。 (オムニバス形式/全10回) (26 青柳悦子/3回) 環地中海地域を中心に異文化交流と文学の発展について多角的に論じるとともに、物語叙述法の言語間比較についても講義する。 (43 加藤百合/3回) 翻訳研究が比較文学のひとつの柱である所以を考察しつつ、ロシア文学を中心として明治期以降の西欧文学の翻訳/受容について講義する。 (77 増尾弘美/2回) フランスの作家（ゴンクール兄弟、ピエール・ロチ、ブルースト等）が作品中で日本文化をどのように扱っているかについて講義する。 (62 谷口孝介/2回) 日本文学における中国文学の受容の様相をたどったうえで、中日の文学の異同について講義を行う。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	表象文化論	<p>文学作品のみならず広く文化事象をテキストとして解析する方法について講義を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(93 小川美登里/3回) ときにはテキストの外にあり、ときにはテキストに内包されるイメージのあり方について、絵画、写真、映画の分析を通じて考える。</p> <p>(102 齋藤一/3回) 主にポストコロニアル批評の成果について具体例を用いて講義を行う。</p> <p>(122 Heselhaus Geva Herrad/2回) Lecture topics will be selected from the following: Discourse Analysis, Deconstruction, Psychoanalysis, Gender/Queer Studies, Postcolonialism and Film Analysis.</p> <p>講義のトピックは、談話分析、脱構築、精神分析、ジェンダー/クィア研究、ポストコロニアル、映画分析から選択される。</p> <p>(158 Lafontaine Andree/2回) Using key texts and concepts from Cultural Studies and Psychoanalysis, this seminar will focus on the representation of Otherness and abjection in American and Japanese visual culture.</p> <p>このセミナーでは、文化研究と精神分析の主要なテキストと概念を使用して、アメリカと日本の視覚文化における他者性とアブジェクションの表現に焦点を当てる。</p>	オムニバス方式
	現代文化学基礎 I	<p>この授業は現代文化研究に不可避の「トピック」を設定し、旧来の方法論を総合人間学の視点から批判的に問い直し、新たな研究領域と価値を切り開く能力を養成することを目的としている。授業は現代文化学コース担当教員によるオムニバス形式(全10回)で実施する。受講者には全授業の最後にレポートの提出が求められる。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(74 廣瀬浩司/2回) 今日の現代文化研究において、ふたたび先端的な学問として研究されている身体思想について、具体的な例の分析を検討しながら講義する。</p> <p>(70 濱田真/2回) 文化記憶論、文化イメージ・形象論といった現代ドイツ文化学の一つの研究を取り上げて、現代における文化の伝達と変容の問題について演習形式で考察する。</p> <p>(81 山口恵里子/2回) 現代文化をとりまく「イメージ」についての研究および調査の方法を具体例に即して検討しながら、「イメージ」をめぐる様々な問題を考察する。</p> <p>(111 対馬美千子/1回) 現代文化における想像力やイメージに関わる理論、文化現象について考察する。</p> <p>(91 江藤光紀/2回) 劇場大国といわれるドイツの劇場、歌劇場の現状を分析し、それを日本の現状と比較することで、ポストモダン社会における芸術・文化活動の課題とこれからの方向性を検討す</p> <p>(29 畔上泰治/1回) 現代のドイツにおける異文化圏出身者との摩擦の現状を概観し、移民問題など社会的マイノリティをめぐる諸問題を考察する。</p>	オムニバス方式
	現代文化学基礎 II	<p>この授業は現代文化研究に不可避の「トピック」を設定し、具体例を多様な角度から分析し、そこに生じる問題の創造的解決の能力と新たな知・価値を創造する力を養成することを目的としている。授業は現代文化学コース担当教員によるオムニバス形式(全10回)で実施する。受講者には全授業の最後にレポートの提出が求められる。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(57 竹谷悦子/1回) 地図から読みとくアメリカ文化・文学。間大西洋や環太平洋、半球あるいは島嶼などの解釈のパラダイムへと転回していったアメリカ文化・文学研究史を検証する。</p> <p>(124 馬籠清子/1回) 現代アメリカ文学作品(特に短編)に反映されている社会的な問題に注目し、作者やその他様々な立場・視点から柔軟に分析する。</p> <p>(64 中田元子/1回) 19世紀イギリスにおける、階級間、ジェンダー間の葛藤・交渉の様態を考察する。</p> <p>(108 清水知子/1回) 現代の多文化主義、ポスト世俗社会におけるデモクラシーの(不)可能性について理論的に考察する。</p> <p>(105 佐藤吉幸/2回) 構造主義以後のフランス思想における権力理論を概観し、現代社会の権力メカニズムの諸特性について考察する。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(132 吉野修/2回) 20世紀のフランス文化がいかにフランス外部の文化を内に取り込んで発展してきたかを、いくつかのテキストを参照しながら検証する。</p> <p>(127 宮崎和夫/2回) 国民国家に先行する時代の世界帝国であったスペイン帝国における政治的・文化的統合と対立や交流のあり方を概観し、グローバル化について考察する。</p>	
	国際公共政策論	<p>国際的価値の実現と国内的価値の保護との葛藤という現実的な課題に社会科学の立場から深く取り組み、国際社会における普遍的価値の理解を踏まえ、国際的な公共の利益に資するための最適な処方や有意義な提言を行うための思考力や研究能力を養成する。特に、政治学、社会学、国際関係論、政治経済学の分析視角から公共政策の実践と参画について深く考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(88 五十嵐泰正/2回) 本講義の導入、および地域社会学の観点から公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(137 鈴木創/2回) 政治学や比較政治の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(27 赤根谷達雄/1回) 安全保障の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(119 東野篤子/1回) ヨーロッパ政治や地域統合の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(90 URANO EDSON IOSHIAQUI/1回) 国際的な公共政策の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(54 関根久雄/1回) 開発人類学の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p> <p>(95 柏木健一/2回) 政治経済学の観点から、公共政策の実践と参画について考える。</p>	オムニバス方式
	日本政治と市民社会 1	<p>日本の政治や市民社会に関する日本語の文献を広く講読し、その内容を深く理解するとともに、社会科学における研究の方法等を修得する。とりわけ、比較という視座から日本の市民社会を相対化して捉えられるようになることを目指す。この授業では、市民社会に関する幅広い題材を取り扱う。</p>	隔年
	Japan's Politics and Civil Society 1	<p>In this class, we aim to understand Japanese politics and civil society and to master methodology of social sciences through reading some basic literatures in English. In particular, we make much account of comparative methods. We discuss a variety of themes concerning civil society in this class.</p> <p>日本の政治や市民社会に関する英語の文献を広く講読し、その内容を深く理解するとともに、社会科学における研究の方法等を修得する。とりわけ、比較という視座から日本の市民社会を相対化して捉えられるようになることを目指す。この授業では、市民社会に関する幅広い題材を取り扱う。</p>	隔年
	環境とマクロ経済学1	<p>本講義では持続可能な開発・経済成長の分析に必要な基礎的な経済成長理論であるソロー・スワンモデルを習得する。主に物的・人的資本蓄積、人口、生産性、技術進歩に焦点を当てて経済成長の決定要因を学び、生産要素としての自然資源の重要性を理解する。さらに経済成長が環境に影響を与え、環境の質が生産性に大きく影響するメカニズムを学ぶことにより、持続可能な開発・経済成長において人的資本蓄積と技術進歩の重要性についての理解を深めることを目標とする。</p>	隔年
	The Environment and Macroeconomics 1	<p>This course offers an introduction to the theory of economic growth to analyze the interaction between the environment/natural resources and economic growth. The course covers the neoclassical growth model considering capital accumulation, population growth, technological progress, and natural resources. The goal is to give the students skills to apply the basic theory and competences to discuss various environmental issues and environmental policy.</p>	隔年

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>本講義では持続可能な開発・経済成長の分析に必要な基礎的な経済成長理論であるソロー・スワンモデルを習得する。主に物的・人的資本蓄積、人口、生産性、技術進歩に焦点を当てて経済成長の決定要因を学び、生産要素としての自然資源の重要性を理解する。習得した経済成長理論をもとに様々な環境問題と持続可能な成長のための環境政策を分析・議論する能力を身につけることを目標とする。</p>	
	地域研究論	<p>世界の諸地域の特質とともに地域を解明する枠組み等について、人文・社会科学の視点からアプローチし、地域研究の在り方をオムニバス講義を通して学ぶ。また、ラテンアメリカ、東アジア、東南アジア・オセアニア、ロシア・ユーラシア、中東・北アフリカを含む世界各地域を、政治学、経済学、歴史学、地理学、言語学の分析視角から総合的・学際的に理解することを目指す。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(78 箕輪真理／2回) 地域研究の総論とラテンアメリカ経済の発展についての講義を行う。 (90 URANO EDSON IOSHIAQUI／1回) ラテンアメリカの社会についての講義を行う。 (156 毛利亜樹／1回) 東アジアの政治についての講義を行う。 (112 堤純／1回) 東南アジア・オセアニアの地理についての講義を行う。 (145 茅根由佳／1回) 東南アジア・オセアニアの政治についての講義を行う。 (147 塩谷哲史／1回) 中央ユーラシアの歴史についての講義を行う。 (60 DADABAEV Timur／1回) 中央ユーラシアの社会についての講義を行う。 (34 白山利信／1回) ロシア語圏地域の社会についての講義を行う。 (95 柏木健一／1回) 中東・北アフリカ諸国の経済発展についての講義を行う。</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通研究科群目	コーポレートガバナンス	上場会社等の公開会社を中心とした株式会社についての法制度に関して、近年において生じてきている重要な問題点、とりわけ、社外取締役、統治責任者（監査役、監査役会、監査等委員会、監査委員会）、コーポレートガバナンスディスクロージャーを取り上げ検討を加える。判例や学説の考察に加えて、比較法的な面からの研究も検討したい。授業は講義形式とする。	隔年
	コーポレート・ファイナンス	コーポレート・ファイナンスをめぐる法律問題を取り上げる。すなわち、株式（公募、第三者割当、株主割当て）、社債、借入金といったテーマを取り上げ（必要に応じて新株予約権にも言及する）、種類株式やハイブリッド金融商品をめぐる法規制を概観する一方で、最近の動向にもふれる。授業は講義形式とする。	隔年
	経営基礎	経営学とマーケティングの全体像を理論と実務を関連付けながら示した上で、経営戦略論と経営組織論、そしてマーケティングの基礎概念と基本枠組みについて講義形式で概説する。 (オムニバス方式／全10回) (9 立本博文／4回) 経営戦略論では、戦略の概念や競争戦略について学ぶ。 (20 佐藤秀典／2回) 経営組織論では、組織の概念や組織デザインについて学ぶ。 (22 伴正隆／4回) マーケティングでは、市場対応に関する意思決定について学ぶ。	オムニバス方式
	会計基礎	簿記と会計の基本について講義する。具体的には、日常の経済活動を会計的に記録することから始まり、決算を行って貸借対照表と損益計算書を作成する一連の作業の意義が理解できることを目標とする。そして最後に、財務諸表をどのような形で活かすか（財務諸表分析）を解説・実践する。これによって、ビジネスの中で簿記・会計がどのように扱われているのかを学習する。なお、講義内では、演習問題を配布し、各論点の解説を行った後、その問題を解いてもらうことで理解を深めてもらう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
法学 関連 科目	共通 専門 科目	企業法学特別研究I	各専任教員が指導学生に対して、各人の関心に合わせた研究計画の立て方や、重点的な履修の内容・方法に対してアドバイス・指導を行う。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
		企業法学特別研究II	各専任教員が指導学生に対して、研究企画の具体化や、そのための作業の進め方などについて指導を行う。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
		企業法学特別研究III	各専任教員が指導学生に対して、修士論文の骨子の作成や、論文作成に向けての文献の調査・消化方法などについて、計画の進捗度合いに応じて指導を行う。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
		企業法学特別研究IV	各専任教員が指導学生に対して、各人の研究計画に合わせた修士論文の草稿の作成や、中間報告会に向けた準備のための指導を行う。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
		企業法学特別研究V	各専任教員が指導学生に対して、修士論文の草稿の完成および最終原稿の作成に向けての指導を行う。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
		企業法学特別研究VI	各専任教員が指導学生に対して、修士論文の最終原稿の完成に向けて、表現や文献表記など最終段階としての指導を行う。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
		(研究指導)	(1 大淵真喜子) 比較法的ないし法制史的手法等を用いて、民事訴訟法をはじめとする民事手続法に関する課題の研究指導を行う。 (2 岡本裕樹) 比較法・裁判例分析等の手法を用いて、現代私法の課題の研究指導を行う。 (3 川田琢之) 法令、学説、判例の文献調査・分析を中心としつつ、各人の問題関心に応じて比較法等の手法も適宜に用い、労働法分野の課題の研究指導を行う。 (4 木村真生子) 比較法や判例分析等の手法を用いて、金融商品取引法、会社法をはじめとする民商法に関する課題の研究指導を行う。 (8 潮海久雄) 主に判例分析や立法趣旨にさかのぼる研究手法を主に用いて、学生の関心のある知的財産法に関する現代的課題について、研究指導を行う。 (12 平嶋竜太) 指導学生と面談の上で、各自の関心や基礎知識に応じて、適宜、検討の方向性や研究のための文献等に対する助言や指導を与える手法を用いて、知的財産法分野及び情報財の法的保護に関する領域の修士論文作成のために必要な研究指導を行う。 (13 本田光宏) 租税法の理論及び実務の両面から考察する手法を用いて、租税法分野における現代的な課題の研究指導を行う。 (15 弥永真生) 主として比較制度の手法を用いて、企業会計法、金融関連法、会社法、金融商品取引法、ロボット・AI法などに関連する課題の研究指導を行う。 (19 小林和子) 個別面談により、民法に関する課題の研究指導を行う。 (23 藤澤尚江) 国際私法の現代的な課題について、個別に研究指導を行う。 (24 渡邊絹子) 個別面談を通じて、各人の設定した社会保障法に関する課題についての研究指導を行う。 (25 川村藍) イスラーム金融研究の中でも、指導学生が関心のあつた法的な課題を特定し、文献調査による原典解析、比較法や政治経済学的手法を用いて研究指導を行う。	
		現代民法の基礎	民法総則に関する基礎的な知識や理解を得ることを目標とし、人(自然人)、法人、法律行為、代理、条件・期限、時効について講義をする。必要に応じて物権法・債権法にも言及する。関連する最新の裁判例・判例についても取り上げる。	
		現代商法の基礎	商法総則・会社法総則及び商取引法の重要な論点を取り上げ、商法の基礎的な概念について理解を深めることを目標に講義を行なう。	
		損害賠償法	不法行為についての基礎的な知識や理解を得ることを目標とし、不法行為の一般的要件、不法行為の効果、特殊な不法行為責任、契約責任と不法行為責任について講義する。関連する最新の裁判例・判例についても取り上げる。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会保障法演習	社会保障法における主要な判例や近時の注目裁判例、最近のトピックを取り上げ、判例研究や文献講読を行い、参加者全員による議論を通じて、重要な論点についての理解を深める。各回は、報告担当者を決め、その報告をもとに参加者全員で議論する。授業は演習形式で行う。	
	金融商品取引法演習	金融商品取引法の分野における最近のトピックについて、判例研究や文献講読などの方法により演習を行う。各回報告担当者を決め、その報告をもとに参加者全員で議論する。	隔年
	担保法演習	担保法の分野における最近のトピックについて、ケーススタディや文献講読などの方法により演習を行う。担保法に関する取引上の問題を検討し、議論状況を理解することで、担保法の知識を深めるとともに、裁判例分析や研究報告の基礎を身に付けることを目標とする。毎回、報告担当者を決め、その者による報告をもとに、受講生全員で議論を行う。報告者は、一定の裁判例から報告対象を選択し、その裁判例に関連する従来の裁判例や文献を渉猟して、報告を行う。	
	知的財産法判例演習 I	知的財産法（主として特許法、著作権法等）の分野における最近のトピックについて、裁判例研究を中心としたケーススタディや文献講読などを受講者全員が分担して報告・議論を行うことで、裁判例や文献の分析検討能力を高めるとともに、議論を通じた多面的な思考方法を体得することを目指す。	
	知的財産法判例演習 II	知的財産法（主として特許法、著作権法等）の分野における最近のトピックについて、裁判例研究を中心としたケーススタディや文献講読などを受講者全員が分担して報告・議論を行うことで、裁判例や文献の分析検討能力を高めるとともに、議論を通じた多面的な思考方法を体得することを目指す。知的財産法判例演習 I を既に履修している者は、当該科目で分担した内容とは異なる、より発展的な内容を分担するものとする。	
	国際私法演習	国際私法一般に関し、演習形式で学習する。国際私法の重要な論点に関し、裁判例や学説を通して、理解を深めることを目標とする。国際企業法（主として国際私法・国際金融法等）の分野における最近のトピックについて、ケーススタディや文献講読などの方法により演習を行う。	
	労働法演習 I	報告者による報告と参加者による質疑・討論を行い、参加者各自が関心を有する労働法上の問題について報告・討論を通じて理解を深めるとともに、他の参加者の報告とそれについての討論を通じて現代の労働法における代表的な問題・課題についての理解を広げる。労働法に関する実務上重要な問題・課題の中から、参加者にテーマを選択して報告をしてもらい、当該報告をもとに質疑・討論を演習形式にて行う。労働法演習 II と共通コンセプトの科目であるが、報告テーマは前年度の労働法演習 II との重複を避けつつ出席者の問題関心に応じた形で選定する結果、毎年異なるものとなるので、具体的な授業内容は労働法演習 II とは異なったものとなる。	隔年
	労働法演習 II	報告者による報告と参加者による質疑・討論を行い、参加者各自が関心を有する労働法上の問題について報告・討論を通じて理解を深めるとともに、他の参加者の報告とそれについての討論を通じて現代の労働法における代表的な問題・課題についての理解を広げる。労働法に関する実務上重要な問題・課題の中から、参加者にテーマを選択して報告をしてもらい、当該報告をもとに質疑・討論を演習形式にて行う。労働法演習 I と共通コンセプトの科目であるが、報告テーマは前年度の労働法演習 I との重複を避けつつ出席者の問題関心に応じた形で選定する結果、毎年異なるものとなるので、具体的な授業内容は労働法演習 I とは異なったものとなる。	隔年
	知的財産法演習	知的財産法（特許法・著作権法・商標法・不正競争防止法・意匠法など）の重要なテーマについて演習を行う。ケーススタディや文献講読などの方法により、裁判例・学説の基礎的な理解を深めるとともに、裁判例分析や研究報告の基礎を身に付けることを目的とする。	
	契約法・損害賠償法演習	契約法・損害賠償法の重要な論点について、裁判例や学説を通して、理解を深める。毎回、契約法・損害賠償法に関する判決について、担当者が報告をし、その後、参加者全員で議論を演習形式にて行う。	
	アメリカ取引法文献講読	米国の商取引や電子契約に関する裁判例や英語論文を読む。判例の読み方を習得するとともに、法律英語論文の読解力を養うことを目的とする。授業は演習形式にて行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	民事手続法演習I	民事手続法分野における重要な問題について、判例研究ないし外国文献講読などの方法により演習を行う。年度によって取り上げる法分野が異なることがある。外国の民事手続に関する基礎的な英語文献を講読して、それらの基本的知識の習得を目的とする。報告担当者が講読予定部分をあらかじめ邦訳したレジュメをメールによって事前に受講者全員に配布し、各受講者においてこれを検討していることを前提として、受講者全員で疑問点等につき討議を行う。年度によって、判例研究ないし外国文献講読のいずれであるかは異なる。	隔年	
	民事手続法演習II	民事手続法分野における重要な問題について、判例研究ないし外国文献講読などの方法により演習を行う。年度によって取り上げる法分野が異なることがある。外国の民事手続に関する基礎的な英語文献を講読して、それらの基本的知識の習得を目的とする。報告担当者が講読予定部分をあらかじめ邦訳したレジュメをメールによって事前に受講者全員に配布し、各受講者においてこれを検討していることを前提として、受講者全員で疑問点等につき討議を行う。年度によって、判例研究ないし外国文献講読のいずれであるかは異なる。	隔年	
	租税計画演習	租税計画を学ぶ上で最近の重要判例、文献等について、演習形式で学習する。報告者は、事前に割り当てられた判例や文献等について、報告し、その後、質問者が報告者の報告についてのコメント・質問等を行い、受講者全員で、提示された論点等について、ディスカッションを行う。租税実務において重要性を増している租税計画の検討や策定において必要となる判断枠組み、知識、技術を修得する。		
	会社法演習	会社法分野における最新のトピック、重要なトピックについて、判例研究や文献講読などの方法により演習を行う。各回報告担当者を決め、その報告をもとに参加者全員で議論する。	隔年	
	中東・湾岸諸国法	中東及び湾岸諸国の中でも、アラブ首長国連邦、エジプト及びサウディアラビアに焦点をあてて、各国法についての基本的理解を得ることを目的とする。具体的には、各国における法律事情、法制史や司法制度について取り扱うことを中心とする。演習形式の授業を通じて学習する。		
	金融法実務（イスラム金融）	中東・北アフリカ地域の金融法についての基本的理解を得ることを目的とする。具体的には、金融法に加えて、商事代理店法、およびイスラム法（イスラム金融を含む）について解説する。授業は演習形式で行う。		
専門科目	企業関係法	契約法I	民法のうち契約総論に関する講義である。契約総論（契約の意義・成立・効力・終了・変更）に関する基礎的な知識や理解を得ることを目標とする。主に売買を具体例にしなが、条文・判例を中心として解説する。	
		契約法II	民法のうち契約各論に関する講義である。契約法Iで取り扱わない典型契約（消費貸借、使用貸借、賃貸借、雇用、請負、委任、寄託、組合、終身定期金、和解）に関する基礎的な知識や理解を得ることを目標とし、条文・判例を中心として解説する。	
		消費者取引と法	消費者・事業者間取引に対するルールの基礎的な知識や理解を得ることを目標とし、消費者契約法、割賦販売法、特定商取引法、製造物責任法、消費者裁判手続特例法などについて講義する。関連する最新の裁判例・判例も数多く取り上げる。	隔年
		不動産法	広義の民法における不動産に関わる規律を、講義形式で解説する。民法典の構造上、不動産に関わる規律は散在しており、また、民法典以外にも不動産に関わる重要な法令があるところ、授業は、関連規律をトピック的に取り扱い、不動産に関わる司法上の規律に関する知識を習熟させることを目的とする。具体的には、不動産の売買、不動産物権変動、不動産登記制度、不動産の所有態様、不動産賃貸借、ならびに、サブリースその他の不動産事業について解説を行う。	
		担保法I	物的担保のうち、不動産を目的とする担保に関わる規律を、講義形式で解説する。不動産担保に関する理解を深めることだけでなく、物的担保に共通する基礎的な知識を身に着けることも目的としている。講義では、不動産担保のなかで最も重要な役割を果たしている抵当権を中心として、非典型担保である譲渡担保と仮登記担保、ならびに、典型担保物権である質権、先取特権および留置権について、不動産を対象とする場面における私法上の規律を解説する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	担保法II	物的担保のうち、動産と権利を目的とする担保に関わる規律を、講義形式で解説する。これら担保に関する基礎知識を身に着けるとともに、近時の金融取引で重要性を増している集合動産・債権譲渡担保の法的構造の理解を目的とする。講義では、動産と債権を目的とした譲渡担保を中心として、典型担保物権である質権、先取特権、留置権、非典型担保である所有権留保とファイナンスリース、ならびに、権利担保としての相殺予約と一括支払システムについて、解説を行う。	隔年
	債権保全・回収法	主に金銭債務を念頭に置いて、物的担保を除いた、債権回収の基礎について、講義形式で解説する。債権者・債務者双方の視点から、債務の弁済に際しての法的留意点の理解を目的とする。具体的には、有効な弁済の要件、第三者弁済の処理、弁済受領権者以外の者への弁済の処理、責任財産保全制度としての債権者代位権と詐害行為取消権、人的担保としての連帯債務と保証、ならびに、債権回収手段としても用いられる相殺と債権譲渡について、解説を行う。	隔年
	会社法	ガバナンスに関する規律を中心に、会社法の全体像を概観する。制度の趣旨・目的を理解することを主眼とするが、重要な論点については判例や学説を取り上げて理解を深める。授業は講義形式とする。	
	企業会計法	企業会計に関する会社法・金融商品取引法における法規制、すなわち、一般に公正妥当と認められる企業会計の慣行ないし基準の意義、資産・負債・純資産の認識と測定、計算書類（財務諸表）の用語・様式・作成方法、剰余金の分配規制などを概観する。連結財務諸表、デリバティブ取引、監査制度なども対象とするし、中小企業の会計にも注目する。授業は講義形式とする。	
	金融商品取引法	資本市場に関わる様々な制度や、関係者の行為を規律している金融商品取引法の基本的な概念を学ぶ。法の目的と構造、企業内容等の開示制度、開示制度を担保する制度、企業買収、業規制、不公正な取引の規制を各回のテーマとする。重要な論点については、関係判例や学説を取り上げて理解を深める。授業は講義形式とする。	
	民事訴訟法	民事訴訟法の基礎理論・手続内容について概説するとともに、重要な理論的問題に関する判例・学説についても解説する。第一審の審理手続を中心とする。第一審を中心とする民事訴訟手続の全体構造に関して基本的な理解・知識を得ることを目的として、手続上の基本概念とこれに関する理論上の諸問題、重要判例について講義を行うことを中心とするが、実務的側面についても適宜触れる予定である。主として法学未修者を念頭に置いて講義を進める予定である。なお、多数当事者訴訟・複数請求訴訟及び上訴・再審については、上級民事訴訟法で取り扱うこととする。	
	上級民事訴訟法	上訴審での手続および再審手続を中心として、民事訴訟法における主要な理論的問題について判例・学説を解説し、より掘り下げた検討を行う。民事訴訟法で取り扱わなかった多数当事者訴訟・複数請求訴訟、上訴・再審、特別訴訟等について講義する。民事訴訟手続全体についてより深い知識・理解を取得することを目的とする。受講生に民事訴訟法に関する一通りの基本的理解があることを前提として講義を進めるので、受講生は何らかの形で民事訴訟法を履修していることが望ましい。	隔年
	民事執行・民事保全法	民事執行法及び民事保全法について、各手続の概要を講義するほか、重要な理論的問題についても解説する。前半に民事執行法、後半に民事保全法につき講義する。民事執行法については、民事強制執行・担保執行総論のほか、不動産強制競売・担保競売、動産執行、権利執行その他の各論についても基本的構造を理解することを目的として講義を行い、重要判例についても検討する。民事保全法については、保全命令発令手続を中心に講義する。民事訴訟法に関する基礎的知識があることを前提とするため、受講生は民事訴訟法を履修していることが望ましい。	隔年
	倒産処理法	破産法及び民事再生法について、基礎理論について概説するとともに重要問題の検討を行う。破産法及び民事再生法についての基本的理解・知識を得ることを目的として、各手続の具体的内容、基礎的な理論上の問題点等について講義を行うことを中心とする。講義前半に破産法、講義後半に民事再生法を講義する予定であり、会社更生法については原則として取り上げない。いわゆる倒産実体法の部分については、破産法と民事再生法とで共通する部分を破産法でまとめて取り扱い、民事再生法では、破産法と異なる部分を中心に講義する。民法の基礎知識があることを前提として講義を進めるので、民法の基礎知識（特に債権総論、債権各論、担保物権等）があることが望ましい。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	商事法研究I	原則として直近の西暦奇数年度の商事判例（前年度以前に商事法研究II で取り上げた裁判例は対象外とする）について、参加者が報告し、参加者が討論を行うが、企業法学演習に比べて高度なものを予定しており、時間を十分にとるため、原則として、日曜日または休日に研究会を開催する予定である。したがって、準備には相当の時間を要する。会社法その他商事法に関する基礎知識を有していることを前提として進める。授業は演習形式とする。	隔年, 共同	
	商事法研究II	原則として直近の西暦偶数年度の商事判例（前年度以前に商事法研究I で取り上げた裁判例は対象外とする）について、参加者が報告し、参加者が討論を行うが、企業法学演習に比べて高度なものを予定しており、時間を十分にとるため、原則として、日曜日または休日に研究会を開催する予定である。したがって、準備には相当の時間を要する。会社法その他商事法に関する基礎知識を有していることを前提として進める。授業は演習形式とする。	隔年, 共同	
	支払決済法	手形・小切手、クレジット・カード、電子マネー、デビット・カード、一括支払システム、電子記録債権などをめぐる法律問題を取り上げる。可能なかぎり、裁判例や約款の内容にも言及することとする。授業は講義形式とする。	隔年	
	民事法研究I	民事法上の近時の重要な問題について、参加者の報告をもとに、研究会形式で討論を行う。民事法に関する基礎知識を有していることを前提として、共通専門科目の演習科目よりも高度な検討を行うものとし、民事法上の知識を深め、研究能力を高めることを目的とする。参加者は、最低1度の報告を担当し、最新裁判例を対象とした裁判例研究等を行う。授業は演習方式とする。	隔年, 共同	
	民事法研究II	民事法上の近時の重要な問題について、参加者の報告をもとに、研究会形式で討論を行う。民事法に関する基礎知識を有していることを前提として、共通専門科目の演習科目よりも高度な検討を行うものとし、民事法上の知識を深め、研究能力を高めることを目的とする。参加者は、最低1度の報告を担当し、学位論文に関する研究報告等を行う。授業は演習方式とする。	隔年, 共同	
	国際 ビ ジ ネ ス 法	国際私法	国際私法（財産法・家族法）に関して、講義形式で解説する。国際私法に関して、基礎的な知識や理解を得ることを目標とする。国際私法は、国際的な法律関係において生じる異なる法律の抵触という問題に解決を与えようとするものである。この講義では、国際私法の制度と、特に取引法におけるその実現について概説する。	
		国際取引法	企業活動のグローバル化を背景として、国際取引の諸相とダイナミズムを法的側面から探りつつ、現代の国際取引法の基礎理論を学び、その応用としての現実の国際取引の多様な形態を検討する。授業は講義形式とする。	
		国際経済法	戦後の国際貿易体制の軸となったGATTとそれを承継したWTOの法と制度を中心に講義する。GATT/WTOの紛争処理手続の下で扱われた事例を検討していく。授業は講義形式とする。	隔年
		ヨーロッパ契約法	契約法に関するヨーロッパにおける国際的統一の動きに関する理解を深めることを目標とする。「共通欧州売買法」（草案・英文）を講読する。講読を通して、日本法との考え方の共通点や相違点について考える。授業は講義形式とする。	隔年
		国際民事訴訟法	国際民事訴訟法（国際裁判管轄、外国判決の承認・執行の問題等）に関して、講義形式で解説する。国際民事訴訟法の基礎的な知識や理解を得ることを目標とする。国際取引に関する訴訟法上の問題、特に国際裁判管轄、外国判決の承認等について学ぶ。	
知的 財 産 法	著作権法I	情報化時代において著作権法の知識が必要となっている。知的財産法（特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか）のうち創作法の分野に属する著作権法の基本的な考え方を身につけることを目的とする。授業は講義形式とする。	隔年	
	著作権法II	著作権法の全体についての基本的な理解と知識を獲得することを目的として、解説を中心とした形式で講義を行う。具体的には、著作権法の目的、制度構造、保護対象、著作権（支分権）の各内容、権利侵害の判断手法と権利制限、著作者、著作権のライセンスと集中管理、著作者人格権、著作隣接権の概要、等について一通りの理解を得ることを目指す。さらに、時間的に可能な範囲で、至近の裁判例や立法の動向や学説上の議論についても適宜紹介・検討する。	隔年	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	特許法I	特許法の基本的な枠組についての理解と知識を獲得することを目的として解説を中心とした講義を行う。特許法の目的、制度構造、保護対象、特許権の具体的内容、特許権侵害の法的構造と法的救済、発明者、特許行政手続、実施権、等について一通りの理解を得ることを目指す。さらに、可能な範囲で、近時の判例や学説における議論についても、適宜紹介・解説する。(実用新案法についても、特許法との差異を理解することに重点をおいて概説する予定である。)	隔年
	特許法II	情報化時代において特許法の知識が必要となっている。知的財産法(特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか)のうち創作法の分野に属する特許法の基本的な考え方を身につけることを目的とする。新しい問題についても検討する。授業は講義形式とする。	隔年
	不正競争防止法	市場における競争秩序に関する規制法として近年益々重要性を増しつつある不正競争防止法は、標識の法的保護体系とそれ以外の法的保護体系(商品形態、営業秘密、その他)に大別される。ここでは、その全体構造について概観し、重要事項についての基本的な理解を得ることを目的とする。講義形式による解説を中心とする。	
	商標法	情報化時代において商標法の知識が必要となっている。知的財産法(特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか)のうち標識法の分野に属する商標法の基本的な考え方を身につけることを目的とする。新しい問題についても検討する。授業は講義形式とする。	
	デザイン法	日本におけるデザイン保護法制の主な柱である、意匠法及び不正競争防止法(商品形態の保護)を中心として基本的な知識を得るとともに、デザインという切り口から法的な取扱いを理解できるような思考の涵養を目指す。講義形式による検討を中心とするが、参加人数によっては適宜、判例演習のようなゼミ形式の導入も考えられる。	
	国際知的財産法	情報化時代において知的財産法の国際的側面について知識が必要となっている。知的財産法の条約、協定および、国際私法の側面(管轄、準拠法等)を含めて国際的に生じている問題について討論し、その基本的な考え方を身につけることを目的とする。新しい問題についても検討する。授業は講義形式とする。	
社会・経済法	労働判例研究I	報告者による報告と参加者による質疑・討論を行い、労働法・社会保障法上の理論上・実務上重要な問題及び、こうした問題を解決するための労働法規・法理論の運用のあり方についての理解を深めるとともに、判例分析の手法に習熟する。労働法・社会保障法分野において理論上・実務上の重要な意義を有する、あるいは、理論上・実務上の問題を提起する最近の判例・裁判例の中から、参加者にテーマを選択して、当該事件の事実関係、判旨、裁判所の判断の理論上・実務上の位置づけや意義、その妥当性当について報告してもらい、当該報告をもとに質疑・討論を行う。授業は演習形式とする。労働判例研究IIと共通コンセプトの科目であるが、研究対象とする判例はその時点での最新のものの中から選定する結果、毎年異なるものとなるので、具体的な授業内容は労働判例研究IIとは異なったものとなる。	隔年, 共同
	労働判例研究II	報告者による報告と参加者による質疑・討論を行い、労働法・社会保障法上の理論上・実務上重要な問題及び、こうした問題を解決するための労働法規・法理論の運用のあり方についての理解を深めるとともに、判例分析の手法に習熟する。労働法・社会保障法分野において理論上・実務上の重要な意義を有する、あるいは、理論上・実務上の問題を提起する最近の判例・裁判例の中から、参加者にテーマを選択して、当該事件の事実関係、判旨、裁判所の判断の理論上・実務上の位置づけや意義、その妥当性当について報告してもらい、当該報告をもとに質疑・討論を行う。授業は演習形式とする。労働判例研究Iと共通コンセプトの科目であるが、研究対象とする判例はその時点での最新のものの中から選定する結果、毎年異なるものとなるので、具体的な授業内容は労働判例研究Iとは異なったものとなる。	隔年, 共同
	労働関係法	講義を中心とし、一部に配布資料を用いた質疑・討論を行い、労働関係法を構成する法令、判例、法理論について、その全体像を体系的に把握、理解する。労働契約法、労働基準法、労働組合法等の法律や、関連する判例法理等によって構成される労働関係法の主要な内容について体系的に講義する。授業時間の一部は、配布資料を用いた質疑・討論に充て、労働法上の主要な問題のいくつかについて、更なる理解の促進を図る。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会保障法	近年の社会保障制度改革の動向を踏まえながら、年金保険、医療保険、介護保険、労働保険といった社会保険法のほか、公的扶助や社会福祉に関する諸制度について、各制度の仕組み・内容、制度構築に関する基本的な考え方、法理論上の問題等について理解することを目的とする。授業は、時に受講者との議論を交えるなど双方での展開を予定していることから、受講者には授業での積極的な発言が求められる。授業は講義形式とする。	
	独占禁止法	独占禁止法は、市場経済における競争秩序を維持する法制として重要な地位を占めている。審決・判例等を参照しながら、また、公取委のガイドラインにもふれながら、主要な違反行為の要件についての解釈等を学ぶ。	
	企業の組織・活動と労働法	講義を中心とし、一部に配布資料を用いた質疑・討論を行い、労働関係法のうち、企業法務一般の見地から重要度が高いと考えられるいくつかの問題について、問題の内容や、関連する判例、労働法理論のあり方についての理解を深める。 授業の前半では、合併、事業譲渡、会社分割等の会社の組織の変動に伴う労働法上の問題、後半では、企業活動上の法令順守という観点から重要と考えられる労働法上の問題の中から、開講時点における社会的関心の状況等を考慮していくつかの問題を取り上げ、講義する。授業時間の一部は、配布資料を用いた質疑、討論に充てる。	
	社会保障法の現代的課題	所得保障の役割を担う諸制度（公的年金、企業年金等）の概要を講義を通じて把握した上で、公的年金制度を中心とする近時の改正議論等を踏まえ、所得保障法制をめぐる各種課題について検討することを目的とする。授業では、各種論点について、受講者による議論の時間を設けるため、受講者には授業での積極的な発言が求められる。	
税法	実務租税法	実務上の観点から、企業にとって重要な租税法の解釈・適用を体系的に論じる。具体的には、租税法総論、所得税法及び法人税法の解釈上重要な論点や近年の重要判決等の実務的な論点を中心に講義する。授業においては、具体的なケースや判例等を素材としてディスカッションを取り入れることにより、租税法に関する理論と実務の双方の観点から考察する試行方式を涵養することを目指す。授業は講義形式とする。	
	租税法研究I	報告者による報告と、参加者による討論を行い、租税法の現代的な論点につき、最新の研究成果を基に、理解を深める。租税法の現代的な論点（基本原則・所得税法・法人税法・相続税法・消費税法・国際課税法等）につき、学内・学外の報告者（教授・実務家等）が研究報告を行い、その後参加者が討論を行う。授業は演習形式とする。	隔年, 共同
	租税法研究II	租税法研究を進展させるに当たり必要となる重要かつ高度な論点等について、演習形式で学ぶ。内外の租税制度や税務行政に関する近年の動向、判例、税制改正等も演習の対象に含めて、租税法研究の全体的・体系的な進展を図ることを目標とする。	隔年, 共同
	租税手続法	納税義務の成立・税額の確定、是正手続、附帯税の賦課要件等、更正決定等の期間制限等の重要論点について、最近の裁判例を踏まえて論じる。具体的なケースや判例等を素材としてディスカッションを取り入れることにより、租税法に関する理論と実務の双方の観点から考察する思考方式を涵養することを目指す。授業は講義形式とする。	
	租税計画I	近年の経済活動の高度化に伴い、租税計画（タックス・プランニング）の重要性が増している中、個人に係る所得課税や資産課税等の租税計画に係る重要論点について理解を深めることを目標とする。また、租税計画に関係する近年の判例、実務上の重要論点及び税制改正の動向等についても講義する。	
	国際課税法I	社会経済の国際化の中で重要性の高まっている国際税務に関し、我が国の国際課税制度（我が国の国内法）について理解を深めることを目標とし、国内源泉所得の概念、恒久的施設（PE）の概念、過少資本税制、タックス・ヘイブンを対策税制、移転価格税制等について論じる。授業は講義形式とする。	
	国際課税法II	国際租税制度の法源の一つである租税条約に関して、趣旨・目的、基本原則、個々の条文の解釈・適用上の論点を中心に学習する。授業においては、具体的なケースや判例等を素材としてディスカッションを取り入れることにより、租税法に関する理論と実務の双方の観点から考察する思考方式を涵養することを目指す。授業は講義形式とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
経営学関連科目	ビジネス数理	ビジネス上の具体的な課題を数理的な問題として定式化して分析する数理的モデリングの考え方を、具体的な例を通して理解する。あわせて、ビジネス科学を学ぶ過程で必要となる数理的な基礎知識を修得することを目標とする。具体的な内容として、論理、集合、ベクトルと行列、線形代数、関数（1次関数、べき関数、対数関数、指数関数、多変数関数など）、微分・積分、最適化、確率などを解説する。また、生産計画、マーケティング、意思決定などで現れる問題を例として取り上げる。授業は講義形式で行う。	
	ビジネスと情報	今日のビジネスシーンにおいて、情報や情報技術がどのように関わって来るか、情報や情報技術がビジネスにどのような形でプラスやマイナスの影響を与え得るか、ビジネス側から情報や情報技術に対してどのような知識を持ち、どのような姿勢でアプローチすべきかについて、さまざまな切り口から取り上げる。授業は講義形式で行う。 (オムニバス方式/全10回) (10 津田和彦/2回) テキストマイニングの研究事例について学ぶ。 (5 倉橋節也/2回) エージェントシミュレーションの研究事例について学ぶ。 (17 吉田健一/2回) ネット上の情報解析の研究事例について学ぶ。 (10 津田和彦、5 倉橋節也、17 吉田健一/4回) (共同) 本学位プログラムで学習する上で基礎となる情報技術について学ぶ。	オムニバス方式 共同 (一部)
	プログラミング基礎	近年、多くの情報が散乱しており、これらの情報を分析することで有益な情報を抽出するという取り組みが盛んに行われている。しかし、散乱している情報を分析に適した形式に変換するには多大な労力が必要である。この労力を軽減するためにはプログラムを活用することは不可欠である。本講義では、プログラミングの初心者から、データの整理や書式変換が出来るプログラムを開発できるようになることを目的に、実習形式で進める。具体的には、プログラミング言語Cを用いて、コンピュータの基本的な動作やメモリ管理を体験する。さらには、コンピュータアルゴリズムの基本を学習する。	
専門科目	経営戦略論	経営戦略の概念を複数の視座から理解する。その後、環境変化と組織の適合をはかる戦略立案、資源ベース観点からの戦略立案、市場の競争構造を意識した戦略立案を古典的な分析ツールとともに理解する。古典的な分析ツールには、SWOT分析、RBVブレイムワーク、ファイブフォース分析、PPM分析を含む。さらに、企業競争上、重要な位置を占めるイノベーションについていくつかのキー概念（プロダクト・イノベーションとプロセス・イノベーション、アーキテクチャー・イノベーション、ディスレプティブイノベーション等のイノベーションダイナミクス）を学ぶ。授業は講義形式で行う。	
	経営組織論	我々の生活は組織抜きでは考えられないほど、現代社会における組織の影響は大きい。この講義では組織のマネジメントに関するさまざまな理論を取り上げ、それらの理論を実際の企業に当てはめてどのようなことが見えてくるのかを検討する。本講義ではそれにより、自ら組織を分析しようとするときにそれぞれの理論が組織のどのような面を理解するのに有効であり、どのような面で限界があるのかを理解して活用できるようになることを目的とする。	
	技術経営論	技術経営論は、製造業の国際競争力の低下を契機に、現実の要請から生まれた学問領域である。その内容は、製造業における多様な経営上の問題に対して、実務的・現実的な解法を探ることにある。競争力獲得のためには、どのような戦略（もしくは戦略的思考）が必要なのかを学習する。本講義では、主にイノベーション、オープン化・標準化、デジタル化、グローバリゼーションとビジネスモデルについて全般的に学ぶ。さらに近年注目されているデータを使った経営戦略の手法についても学ぶ。	
	組織変革	変化する環境に対応するため、組織も変化する必要がある。しかし、組織には変化を妨げる様々な要因が存在する。また、変化を意識しすぎるあまり、自らの強みを見失ってしまうことも少なくない。本講義では、組織が変化しなければいけない理由、変革の妨げとなるものは何か、何を変えて何を変えるべきではないのか、変革における経営者の役割はなにかといった観点から組織変革について検討し、組織変革を様々な面から理解することを目的とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	消費者行動	本講義では、マーケティング戦略上の諸課題との関連性を意識しつつ、マーケティング対象となる市場を構成する消費者の嗜好構造や行動を分析するための枠組み、方法に関する代表的な理論やモデルを概説する。具体的には、消費者行動を規定する外部環境要因、個人差要因、認知・態度・行動などの購買意思決定プロセスなどに関する研究成果を検討し、消費者行動の測定方法や分析アプローチを学習すると共に、事例などを通じて、企業の具体的なマーケティング戦略への展開方法を議論する。	
	マーケティングリサーチ	マーケティング意思決定における諸問題を、市場や顧客に関するデータと論理に基づいて科学的に捉えるための基本的な考え方と具体的な方法を概説する。講義では、市場や顧客データの収集や分析、伝達といったマーケティングリサーチ技法について説明する。本講義のキーワードは、消費者態度、行動、データの取得と整理、質問紙の作成、測定尺度、記述統計、多変量解析（主成分分析、因子分析、クラスター分析、回帰分析）である。	
	マーケティングサイエンス	本講義では、ポジショニング分析や顧客のセグメンテーションなどマーケティング意思決定における諸問題を、市場や顧客に関するデータを用いて科学的に捉えるための技術について学ぶ。具体的な手法としては探索的因子分析やクラスター分析、そしてコンジョイント分析などを扱うが、特に統計的手法を用いたマーケティングデータの解析法を解説する。典型的なマーケティング意思決定問題にどのようなものがあるか、そしてその意思決定を助ける分析技術にはどのようなものがあるかの理解を目指す。	
	環境マーケティング	地球環境問題の台頭に伴って、マーケティングの概念や方向性も変化している。本講義では、地球環境問題とマーケティングを取り上げ、地球環境問題に対する国際動向、法規制や行政の動向、消費者の行動特性とその動向、企業の環境マネジメントと環境マーケティングの実態等を、関連する研究成果や企業事例を取り上げながら概説する。その上で、地球環境保全や資源循環を実現するためのマーケティングのあり方と具体的な展開方法を議論する。	
	マーケティングエンジニアリング	本講義では、マーケティング意思決定における諸問題を、市場や顧客に関するデータを用いて科学的に捉えるための技術について学ぶ。特に、統計的手法を用いたマーケティングデータの解析法を解説し、その内容に関して実際に演習してもらうことで、マーケティングにおけるデータ分析の実際を体得してもらう。具体的には、市場反応分析（集計型、非集計型）、市場の規定、セグメンテーション、顧客管理、製品開発といった実際のマーケティングに資する解析法を実際に学習して、演習してもらう。	
	インベストメントサイエンス	ポートフォリオ理論は、投資の意思決定をする上で重要な役割を果たす。本講義では、ポートフォリオ理論の基礎となる平均分散アプローチ、および Markowitz モデルとその周辺の数学について解説する。まず、ポートフォリオ最適化問題を収益率の平均と分散を用いて定式化し、その解法を示す。さらに、資本市場価格付けモデル（CAPM）や効用関数論、および投資家の期待効用を導入し、投資意思決定に必要なツールの基礎を習得する。また、講義内容について理解を深めるために計算機演習を実施する。	
	ファイナンス工学	デリバティブ（金融派生証券）の価格付けとヘッジ、およびその周辺理論は、ファイナンス工学分野の中心的トピックであり、金融先物・先渡やオプションはもとより、近年話題となっているリアルオプションや天候デリバティブ評価の基礎をなしている。本講義では、デリバティブ取引の概要およびデリバティブ価格付けの基本概念を導入し、オプションを用いた取引、無裁定価格理論、オプションヘッジ戦略について解説を行う。さらに、これら理論や手法について、実際に計算機を使ってシミュレーションを行う。	
	財務会計	近年、国際的な企業会計制度の変革はめざましい速度で進行している。この流れで、わが国の企業会計もその根幹から変わろうとしている。本講義は、このような状況のもとで、財務会計の個別論点（金融商品会計、リース会計、税効果会計、連結会計など）について学習し、企業の経営成績・財政状態およびキャッシュ・フローの状況を表す財務諸表の何が変わって、また何が変わっていないのかを学ぶことを目的とする。なお、講義内では、演習問題を配布し、各論点の解説を行った後、その問題を解いてもらうことで理解を深めてもらう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	会計情報分析	近年のわが国では、企業価値を意識した経営を求められることが多くなってきている。そこで本講義では、どのような原理で企業価値が計算されているのかを確認し、その企業価値を戦略的に高めるにはどのようにしたらよいかを、主に財務会計の視点から議論する。具体的には、企業価値評価に関する講義を行った後、学生同士でチームを組んでもらい、特定の企業が企業価値を高めるための施策についてプレゼンテーションを行ってもらおう。	
	データ解析 I	データ解析に必要な統計知識・技術について初歩から講義する。具体的には、代表値、散布度、共分散、相関、統計的仮説検定、単回帰分析について学ぶ。統計学は数学がベースになっている学問であるが、授業中の解説は数学ベースというよりは、分析手法についてイメージができることや、使いどころが理解できることを目指し、実例を交えながら行う。データ解析の課題に取り組むことで、理解の定着を図る。なお、扱う分析ツールはエクセルとする。	
	データ解析 II	データ解析 I に引き続き、多変量解析を中心とした講義を行う。具体的には、主成分分析、重回帰分析、ロジスティック回帰分析等について学ぶ。データ解析 I と同じように、分析手法についてイメージができることや、使いどころが理解できることを目指し、実例を交えながら講義を行う。講義だけではなく、多変量解析の課題に取り組むことで理解の定着を図る。なお、扱う分析ツールはRとする。Rの基本的な操作については講義中に説明する。	
	応用統計	本講義では、中級以上の統計手法の中からいくつかのトピックを選び、実際のデータ解析事例に触れながら講義する。トピックの例としては、ベイズ統計、傾向スコア分析、数量化理論、欠測データ解析などが挙げられる。各分析手法の理論面の理解だけではなく、何らかのデータセットに手法を適用してみる解析事例の紹介によって、手法の特性や結果の解釈の仕方、あるいはそもそもどのようなデータに適用されるかといったことに関する知識の獲得を目指す。	
	共分散構造分析	社会科学のデータ解析で用いられることが多い共分散構造分析について講義を行う。共分散構造分析によって適切にデータ解析を行うためには、単に分析ができるだけでなく、ある程度の仕組みの理解が必要となる。本講義では、手法としては確認的因子分析、探索的因子分析、パス解析、潜在変数間のパス解析について講義する。理論面に関しては、識別、自由度に特に焦点をあてて説明する。各手法を実行するためのソフトウェアを用い、課題に取り組むことで、共分散構造分析の理論と応用の両面の理解を目標とした講義を行う。	
	計量経済学	本講義では、経営、マーケティング、金融などの分野におけるさまざまなビジネスデータを分析するための中心的手法である回帰モデルの基礎理論、推定手法、仮説検定などを、具体的な分析例を通して修得することを目標とする。最初にモデルや推定手法を理解するための必要な確率・統計の知識を解説した上で、重回帰モデル、残差の系列相関や不均一分散の問題と対処、一般化最小二乗法、同時方程式モデルと操作変数法、パネル回帰などを学ぶ。また、情報量規準によるモデル選択や、符号条件や有意性にもとづく結果の解釈なども説明する。	
	時系列分析	経営、マーケティング、金融ではさまざまな時系列データを取り扱う。本講義では、具体的な時系列データの分析例を通して、時系列に固有の性質を理解した上で、さまざまな時系列データを分析するための知識と技術を修得することを目標とする。 (オムニバス方式／全10回) (14 牧本直樹／6回) 時系列データの集計から始めて、トレンドや周期成分など時系列固有の性質を説明した上で、代表的な定常時系列である自己回帰モデルについて、推定や検定、モデル選択の方法などを解説する。 (6 佐藤忠彦／4回) 前6回で紹介した時系列モデルを発展させた枠組みである状態空間モデルについて、推定法、解析事例を含めて概説する。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	最適化モデル	我々は日常的にさまざまな場面で意思決定を行っている。ランチに行くレストランの選択から、投資先と投資金額の決定まで、例を挙げればきりが無い。特に、ビジネス上の意思決定においては、科学的な評価に基づいた代替案の決定が期待される。本講義では、我々が直面する意思決定問題を科学的に捉え、解決する「見る目」・「態度」を養うことを目的として、問題を解決するための「科学的な意思決定方法」を修得する。本講義では、科学的な意思決定方法として、数理最適化に焦点を当てる。数理最適化は、意思決定主体が有する効用が最大化する代替案を選択するという自然な枠組みを、数理的なモデルとして表現し、その解決案を導出する数理的な方法論である。本講義では、その基本的なモデルである線形計画モデルを中心に、数理的なものの見方や計画技法を、計算機ソフトウェアを利用しながら体得する。	
	ロジスティクスとサプライチェーン	情報通信技術が発展し「情報」の流れが高度化した現代社会においても、「もの」の流れの効率化・高度化に関する興味関心は尽きない。本講義では、「もの」の流れと保管、サービス、加えて関連する情報を計画、実施およびコントロールする過程であるロジスティクスを、上流から下流までのサプライチェーンを構成する企業とその間の活動を統合したシステムとして捉え、システムに内包されるさまざまな意思決定問題の数理的なモデル化と解決方法を修得することを目的とする。具体的には、在庫と発注問題、スケジューリング問題、配送経路問題や施設配置問題を取り上げ、実際の事例とともに、その背後にある理論、特に、ネットワーク理論や組合せ最適化理論について講義する。	
	オペレーションズ・リサーチ	本講義では、オペレーションズ・リサーチのいくつかの手法とそれらを活用したビジネス上の事例を通して、現実の問題に対してよりよい解を得るためのオペレーションズ・リサーチの考え方や活用方法を理解することを目標とする。手法の例としては、モンテカルロシミュレーション、マルコフモデル、待ち行列、最適意思決定などを取り上げる。また、受講生が自身のビジネス課題を具体的に分析したり解決したりするための参考となるよう INTERFACES を中心に企業事例を紹介した論文を解説する。	
	人工知能とビジネス情報分析	ビジネスでの課題をデータから分析・解決する新しい手法として、学習理論や最適化などの人工知能の技術が注目されている。ビジネス情報分析に人工知能技術を適用することで、様々な可能性が開ける。本講義では、人間の知的行動を基礎とした人工知能を用い、現実の問題解決に適用するためのビジネス情報分析手法の基礎理論・応用手法を学ぶ。プログラミングや統計、数理モデルの経験は問わない。具体的な内容としては、探索問題、パターン認識、学習と推論、推薦システム、進化計算や神経回路網を用いた最適化技術などの基礎を学ぶ。	
	データマイニング	本講義では、代表的なデータマイニング・機械学習の手法について演習を交えながら基礎的な概念を学ぶ。具体的な内容としては、Decision Tree Learning、Artificial Neural Networks、Bayesian Learning、Association Rule Learning、SVM など。01KA166 と合わせて受講する事で、ネットワーク上のデータをどのように収集し、分析すればビジネスに役立つ知見を抽出できるかを習得する事を目的とする。01KA165 では、この目的に対して基礎的な分析技術を学ぶ。	
	インターネットとビジネス情報分析	本講義では、インターネット関連のビジネスを進める上で必要な各種事項について基本的な考え方を学ぶ。具体的な内容としては、TCP/IP や WWW などネットワークに関する基本的技術と、WWW を使ったマーケティングとデータマイニングの関係など。「データマイニング」と合わせて受講する事で、ネットワーク上のデータをどのように収集し、分析すればビジネスに役立つ知見を抽出できるかを習得する事を目的とする。「インターネットとビジネス情報分析」では、この目的に対してデータ収集技術の基礎を学ぶ。	
	テキストマイニング	ブログやツイッター、フェイスブックなどのソーシャルネットワークワーキングサービスの発達により、一般の方が情報発信することが一般的になってきた。これらの情報の多くはテキストデータである。このテキストを分析して、製品やサービスや有益な情報を抽出しようとする取り組みが始まっている。そこで本講義では、テキストデータの分析方法など、テキストマイニングの基本的なアルゴリズムを紹介すると共に、テキストマイニングツールを用いて、一般の方が発した口コミ情報を分析して有益な情報を抽出する過程を実習形式で体験する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会シミュレーション	新しいシステム科学として、マルチエージェント技術を用いたシミュレーション手法が注目を浴びている。近年、この手法を用いて、様々な経営課題や社会問題に適用し、多くの成果を上げてきている。本講義では、自律性と相互作用を考慮するエージェントモデルの基礎から、経営戦略モデルや市場制度設計などへの応用までを学ぶ。また、人とエージェントが参加するゲーミングシミュレーションへの発展も行う。演習を通し、実際にモデルを作成し動かすことで、実践的な経営シミュレーション手法を習得することを目標とする。履修にあたって、初歩的なプログラムが必要になるが、特に高度なプログラミングの経験は問わない。	
	ビジネスゲーム	企業経営を、企業戦略、調達、生産、サプライチェーン、マーケティング、会計等の諸機能分野から構成されるシステムとして理解し、情報の収集・分析を行いながら、総合的視点から経営の意思決定を論理的に行う能力を修得する。演習では、ゲーミングの手法を用い、競争的な市場の中で、各チームが経営意思決定をアクティブに学習する。 (演習を含めたオムニバス方式/全10回) (5 倉橋節也/4回) ビジネスゲームの概念やシミュレーションについて学ぶ。 (7 猿渡康文/3回) 在庫理論や需要予測について学ぶ。 (21 中村亮介/3回) 会計理論について学ぶ。	講義 5時間 演習 10時間 オムニバス方式
研究科目	経営システム科学研究・I-I	1年次の春学期に行われるセミナー形式の授業である。学術研究とは何かといったビジネス実務的な考え方との違い、サーベイの方法、専門外の聴衆に対する分かりやすいプレゼンテーションなど、研究活動を遂行するうえで必須となる研究方法の基礎を学ぶ。さらに、学生と教員のディスカッションによって各自の研究計画を学術的に深化させるとともに、全くバックグラウンドの異なる聴衆からのコメントによって多面的に計画の再検討を行うことが期待される。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	経営システム科学研究・I-II	1年次の春秋学期に行われるセミナー形式の授業で、指導教員の下で、各自の研究企画の具体化や、そのための作業の進め方などの習得を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	経営システム科学研究・I-III	1年次の秋学期に行われるセミナー形式の授業で、指導教員の下で、研究計画発表に向けての文献の調査・研究方法などの習得を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	経営システム科学研究・II-I	2年次の春学期に行われるセミナー形式の授業で、指導教員の下で、中間発表会に向けた準備のために、各自の研究計画に合わせた修士論文の草稿の作成方法の習得を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	経営システム科学研究・II-II	2年次の春秋学期に行われるセミナー形式の授業で、指導教員の下で、ドラフト発表に向けて、修士論文研究で得られた結果の整理と考察の方法の習得を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	経営システム科学研究・II-III	2年次の秋学期に行われるセミナー形式の授業で、指導教員の下で、修士論文の最終原稿の完成に向けて精度の向上を図るとともに、修士論文として適切な文章表現や最終審査に臨むためのプレゼンテーション方法の習得を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	(研究指導)	(5 倉橋節也) 人工知能の手法を用いて、経営システムの課題の研究指導を行う。 (6 佐藤忠彦) ベイズモデルを含む統計モデルの手法を用いて、マーケティング現象を題材にした課題の研究指導を行う。 (7 猿渡康文) 最適化の手法を用いて、企業や社会に内在する意思決定に関する課題の研究指導を行う。 (9 立本博文) 事例分析・統計分析の手法を用いて、経営戦略の課題の研究を行う。 (10 津田和彦) 自然言語処理の手法を用いて、筆者の意図理解の課題の研究指導を行う。 (11 西尾チヅル) 統計的手法を用いて、消費者行動およびそれを起点としたマーケティングの課題の研究指導を行う。 (14 牧本直樹) 確率モデルの手法を用いて、ファイナンスやオペレーションズ・リサーチの課題の研究指導を行う。 (16 山田雄二) 計量的手法や統計的手法などを用いて、ファイナンス分野の課題の研究指導を行う。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(17 吉田健一) 機械学習や人工知能など情報処理の技術を用いて、学生が興味を持つ修論課題の研究指導を行う。 (18 尾碕幸謙) 統計的手法を用いて、教育・心理学分野の課題の研究指導を行う。 (20 佐藤秀典) 定性的、定量的な様々な手法を用いて、経営組織における課題の研究指導を行う。 (21 中村亮介) 計量経済学等の手法を用いて、会計の課題の研究指導を行う。 (22 伴正隆) 統計的手法を用いて、マーケティングに関する課題の研究指導を行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文社会ビジネス科学学術院 ビジネス科学研究群 博士後期課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
大学院 共通科目	応用倫理	<p>Situational ethical principles such as research ethics for research laboratories and medical ethics for hospitals do not always correspond well each other in giving us a clear direction in pursuing the best quality of life in modern society. Rather than taking individual principles for granted, this course attempts to understand how we may disentangle somewhat conflicting ethical principles. In so doing, this course provides unique perspectives to ethical principles by incorporating cultural and historical contexts of human rights and environmental concerns.</p> <p>研究倫理や医療倫理など状況に特化した倫理原理は、必ずしも相互に補完する関係にないため、現代社会の中で最善の質を求めるための明確な指針とはなっていない。こうした絡まった倫理原理を解きほぐすことを試みる。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(92 松井健一/7回) Provides perspectives to ethical principles by incorporating cultural and historical contexts of human rights and environmental concerns. 文化や歴史的な文脈から人権や環境に関する問題も含め、応用倫理のための視点を醸成する。 (120 大神明/1回) Provides perspectives of industrial doctors and considers ethics related to risks. 産業医の視点からリスクに関わる倫理的な問題を提起する。</p>	集中 オムニバス方式
	環境倫理学概論	<p>Environmental ethics helps us not only think about interpersonal relations in society but also the ones between people and the natural environment. This expansive scope helps us see our daily activities, ethical or not, within ecosystems or biotic communities. This course invites students to think about a need to establish a universally applicable ethical principle/ law for global citizens to tackle with environmental problems. To answer this question, it introduces many environmental ethical ideas related to biodiversity, bioethics, animal rights/ welfare, and household activities.</p> <p>環境倫理は、社会における対人関係だけでなく、人と自然環境の関係について考える助けとなる。こうした広い視野を持つことで、我々は生態系の一部として日々の活動が倫理的かどうかを考えることができる。この授業では、学生に対し世界市民として、環境問題を解決するため、ユニバーサルな倫理大綱や法律を構築する必要性について考えてもらう。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(92 松井健一/7回) Introduces many environmental ethical ideas related to biodiversity, bioethics, animal rights/ welfare, and household activities. 生物多様性や生命倫理、動物の権利・福祉、生活者のための環境倫理を紹介する。 (70 渡邊和男/1回) Introduces ethical principles related to international environmental law. 国際法に関する環境倫理原理を紹介する。</p>	集中 オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	研究倫理	<p>研究活動に従事する上で踏まえるべき研究倫理の基礎を、具体的事例を交えて講義する。研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスなどを取り上げる。また、これらを理解するための前提となる、科学技術政策、研究助成のしくみ、申請や審査のしくみなどについても触れる。</p> <p>本科目は講義を主体としつつ、講義の間に演習（個別演習・グループ演習）を交互に挟む構成とする。講義においては、研究倫理と研究公正に関連する基本概念を整理すると共に、研究不正（FFP）、研究費の不正使用、その他のコンプライアンスに関わる問題などを取り上げる。また、これらを理解するための前提となる、学術研究活動を取りまく環境の変化や、科学研究費の申請や審査のしくみなどについても触れる。特に特定不正行為に関しては具体的事例を元にその原因や背景を解説し、受講者が研究活動を行う上で必要な対策について具体的に考える機会を与える。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（98 岡林浩嗣／9回）上記の講義を行う。演習においては、ワークシートを用いて自らの研究活動の構造を分析した上で、研究倫理上の問題点とその背景について討議する。さらに、研究不正を防止するために必要な施策について討議を行い、グループ単位での発表とその指導を行う。</p> <p>（121 大須賀壮／1回）理化学研究所における研究管理状況をふまえて、適切な実験ノートの取り方について講義を行う。また、演習の際に岡林と合同でグループ討議の指導を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 9時間 演習 6時間
	生命倫理学	<p>遺伝子治療、臓器移植、人工臓器、生殖医療、遺伝子診療、薬物やその他の治療法の治験などの現代の医療や医学研究には、インフォームドコンセント、個人の尊厳やプライバシー、脳死判定やリスクマネージメント、治療停止の選択など生命倫理にかかわる多くの問題を含んでいる。現代医療が抱える生命倫理諸問題の基礎知識、基本的考え方を習得するとともに、実例により学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式/全10回）</p> <p>（110 菅野幸子／1回）テーマとして「生命倫理とその歴史」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（95 柳久子／1回）テーマとして「予防医学における生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（85 西村健／1回）テーマとして「再生医学と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（76 川崎彰子／1回）テーマとして「生殖医療と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（48 杉山文博／1回）テーマとして「動物実験と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（122 木澤義之／1回）テーマとして「緩和医療と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（100 高橋一広／1回）テーマとして「臓器移植と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（125 宗田聡／1回）テーマとして「遺伝学と生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（69 我妻ゆき子／1回）テーマとして「国際保健における生命倫理」について取り上げ、講義を行う。</p> <p>（56 野口恵美子／1回）テーマとして「医学・医療の倫理」について取り上げ、講義を行う。</p>	オムニバス方式
	企業と技術者の倫理	<p>多くの技術者は企業に属し、その中で社会とビジネス的な関わりを持ちながら仕事を行っている。本講義では、具体的事例や現場の声を取り上げながら、企業における技術者の倫理について議論する。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（73 掛谷英紀／7回）技術の社会的役割の変遷について講義を行う。併せて、「東日本大震災と今後の防災・エネルギー」、「企業不正のグレーゾーン（Facebook、NHK受信料等）」の2つのグループ・ディスカッションを行い、21世紀の「人に役立つ技術」を考える。</p> <p>（126 西澤真理子／3回）実際の企業現場の事例を取り上げながら、「企業のリスクコミュニケーション」について講義を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 9時間 演習 6時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
情報伝達力・コミュニケーション力養成科目群	テクニカルコミュニケーション	事実やデータに基づいて行われる情報発信であるテクニカルコミュニケーションを円滑に行うための基本を、講義と演習で修得する。講義では、発信する内容を組み立てるための発想法の活用法、誰にでも一通りに伝えるための文法、レイアウトデザインの基礎理論、文字と絵の役割の違いなどをあつかう。さらに、語彙を豊富にするための演習、物事を数多くの視点から説明するための演習、専門用語に頼らずに内容の本質を伝える演習などを通して、テクニカルコミュニケーションを実践的に学ぶ。	集中 講義10時間 演習 5時間
	英語発表	This course provides an overview of basic techniques for public speaking and presentations in English. Students are then given ample opportunity to practice these techniques in front of the class. 本講義ではコミュニケーションの基礎理論、英語でのパブリック・スピーキング、プレゼンテーションの技術の修得を目標とする。また、学んだ理論・技術を応用活用する経験として、実際に聴衆を前にしたプレゼンテーションをおこなう。	集中 講義10時間 演習 5時間
	異分野コミュニケーションのためのプレゼンテーションバトル	プレゼンテーションの初歩から中級までを対象とし、異分野学生それぞれによるプレゼンテーションをベースに現代に必要なアカデミックスキルを磨くことを目的とする。参加者が異分野の学生との協働によってアイデアを出し合い、新しいコンテンツの作成に向かって協働することで、異なる領域の知識や技術を互いに理解しコミュニケーション能力を高める。演習トラック毎によって設定する目標を決め、それに従ってコンテンツを実際に作成する。時にドラマレッスンを盛り込む。	集中
	Global Communication Skills Training	Precise communication with people having diverse perspectives and personalities is the key to building relationships, and success. Through practices of communication, including effective listening, effective presentation, assertive communication, we help you learn and practice communication methods. You should be prepared to have open and active class participation and require a certain level of English skill. 対面でのコミュニケーションのスタイルには、人それぞれに個性があります。どのようなコミュニケーションスタイルを持つ相手とも正確に情報を伝達しあうことが、信頼を得て成功するための鍵になります。この授業では、情報を効率よく受け取ったり、正確に話すための練習を通して、コミュニケーション力を高めます。受講するためには、ある程度の英語力が必要です。また、受身ではなく発言や議論を通して積極的に授業に参加することが求められます。	集中 講義 7時間 演習 8時間
	サイエンスコミュニケーション概論	サイエンスコミュニケーション (SC) とは「難しく敬遠されがちなサイエンスをわかりやすく説明することである」という理解はきわめて一面的である。SCの対象は科学技術分野の専門家、非専門家を問わないため、「サイエンスの専門家と非専門家との対話促進」がSCであるとも言いきれない。広い意味でのSCとは、個人々ひいては社会全体が、サイエンスを活用することで豊かな生活を送るための知恵、関心、意欲、意見、理解、楽しみを身につけ、サイエンスリテラシーを高め合うことに寄与するコミュニケーションである。そのために必要なこと、理念、スキルなどについて概観する。	集中
	サイエンスコミュニケーション特論	現代社会は科学技術の恩恵なくして成り立たない。科学技術はわれわれの生活に深く根ざしており、よりよい社会を築いていくためには一人でも多くの人々が科学技術との付き合い方に関心を向けることで、社会全体として科学技術をうまく活用していく必要がある。そのためには様々な立場から科学技術についてのコミュニケーションをし合うことで科学技術を身近な文化として定着させ、社会全体の意識を高める必要がある。このような問題意識から登場したのがサイエンスコミュニケーションという理念である。この理念が登場した背景を知ると同時に、方法論としてはどのようなものがあるのかを議論しつつ、コミュニケーションスキルの向上も目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	サイエンスコミュニケーター養成実践講座	<p>主として、自分の専門の科学を一般の人々にわかりやすく伝えられるコミュニケーション能力の養成を中心に、国立科学博物館の資源や環境を活用した理論と実践を組み合わせた対話型学習を進める。</p> <p>理論面では、サイエンスコミュニケーションとは？サイエンスとは？といった考え方をはじめ、メディア・研究機関・大学・博物館など、各機関・領域で活躍しているサイエンスコミュニケーターの実践を踏まえた理論を学習する。また、様々な人々に科学を伝える際に効果的なプレゼンテーションの方法について学修する。</p> <p>実践面では、ライティングに関する課題を通じた文章の書き方や表現方法の学習、国立科学博物館の展示室における来館者との双方向的な対話を目指し、自らの専門分野についてのトークを作成・改善・実施・考察する。</p>	集中
	人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える	<p>哲学、歴史、文学、言語学、社会科学、地域研究などの人文社会分野における学術研究の成果をどのように社会に伝え、人々の知的な好奇心を呼び起こし、当該学問分野の社会的認知度を如何に向上させるか、その考え方、方法、それらを担う人材に求められる必要なスキルなどについて学ぶ機会を提供する。人文社会分野における「学問と社会を結ぶ」ためのスキルを磨くための内容を含む。加えて、現在発展が著しい人文社会分野における最先端機器を駆使して行う研究は多くの学術的成果を生み出しており、その魅力は計り知れない。このような最先端研究に基づく解析法は自然科学分野の最先端技術を活用したものでもあり、ここに人文社会科学と自然科学の接点があり、分野融合の意義、有用性、重要性を含めた科学の現状を多くの大学院生に紹介するための科目とする意図も企画者側にある。</p> <p>(オムニバス方式／全10回)</p> <p>(33 池田潤／4回) 「文芸・言語学、世界と地域の文化・歴史、世界と地域の社会科学に関する人文社会科学知見に関して、自然科学と最先端科学技術を駆使する成果がどのように活かされているかについて、その相関を俯瞰しつつ解説し、人文社会科学と自然科学・工学的技術の融合の重要性」について講義を行うことで人文社会科学における自然科学基礎的・応用的知的基盤の重要性について学習する。</p> <p>(37 大澤良／4回) 「生物多様性、生物の地理的拡散、有用植物や作物の地理的分布などに関する自然科学的研究成果をベースに、それらが人間及び人間の生活とどのようなかわりを有してきたかなどの人文社会科学知見を加えて分析し、自然科学と人文社会科学的要素がどのように融合・連関をなしているか、その相関を俯瞰しつつ解説し、自然科学と人文社会科学の融合の重要性」について講義を行うことで自然科学の視点から自然科学の基礎的・応用的知的基盤がいかに人文社会科学に重要な役割を果たしているかについて学習する。</p> <p>(124 白岩善博／2回) 「自然科学研究の成果を基盤に、最先端研究成果を如何に社会に広報、拡散、応用するかなどに関して、サイエンスコミュニケーションやトランスフェラブルスキルを駆使して、自然科学的研究成果が人間及び人間の生活とどのようなかわりを有してきたかを解説し、自然科学の科学的・技術的成果をどのように社会に導入するかの方法論」について講義を行い、さらにそのスキルアップをどう図るかを学ばせることで、大学院修了後のキャリアパスにそれをどう生かすかに関して学習する。</p>	集中 オムニバス方式
国際性養成科目群	21世紀的中国 ―現代中国的多相―	<p>巨大な隣国である中国は、1976年の文化大革命の終結以降、経済の改革開放政策の成果により、大きな変貌をとげた。21世紀初頭の今、ますます存在感を増した中華人民共和国の現在の諸相を、学生にとって身近な目線で講じる。中国と日本の関わりを実際の動きの中で捉えていくことを目論む。</p> <p>現在中国との関わりの深い筑波大学OBを講師とし、現代中国の文化、社会、経済、環境、日中翻訳など、様々な観点から、現場に立つ講師ならではの姿を描き出す。既成の学問の枠で説明されたものを理解して満足するのではなく、実社会の動きの中で課題を捉え、みずから解決していくために何が必要か、講義中から受講者自身で考えだすことを望みたい。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際研究プロジェクト	学生自らが海外の大学・研究機関における専門および関連分野の研究計画を企画し実現することで、自身の能力涵養を図る科目である。海外における受け入れ先の開拓、海外渡航の手続き、海外での研究・実習、受入先でのコミュニケーション、海外での生活等を経験することで、英語によるコミュニケーション能力・国際性・研究マネジメント能力の向上を実現する。学習成果をより効果的なものとするため、海外において研究活動を行うだけでなく、実施計画書を基にした事前指導及び帰国後の成果報告書の作成とフィードバックを受けることを必要とする。	
	国際インターンシップ	学生自らが国際的な職業体験（海外の大学におけるPFF体験を含む）や海外の大学・研究機関で主催される各種トレーニングコースを開拓し参加することで、自身の能力涵養を図る科目である。海外における受入先との調整、海外渡航の手続き、海外での職業体験、受入先でのコミュニケーション、海外生活経験を通して、コミュニケーション能力、国際性、キャリアマネジメント能力の向上を実現する。学習成果をより効果的なものとするため、海外において研究活動を行うだけでなく、実施計画書を基にした事前指導及び帰国後の成果報告書の作成とフィードバックを受けることを必要とする。	
	地球規模課題と国際社会:食料問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」の中でGoal 2 & 12に関連した、国際社会が直面する「食料問題」について取り扱う。世界の人口動態と食料生産・消費動向、植物育種新技術、食料生産新技術、植物防除新技術などについての講義を通して国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会:海洋環境変動と生命	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 13 & 14に関連した、国際社会が直面する「海洋環境変動と生命」について取り扱う。CO2濃度上昇に関わる地球規模環境課題、海洋酸性化、地球温暖化による生物影響、北極・南極の海氷融解などの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p> <p>（オムニバス方式／全10回）</p> <p>（35 稲葉一男／5回）「海洋生物、特に海洋動物に関する形態学、生理学、生化学、分子生物学的手法を駆使した最先端の科学的知見を基盤に、地球規模かつローカルな海洋環境の変化を海洋動物がどのような仕組みで感知するか、さらにその環境変化によってどのような生物学的変化を引き起こすか」について講義を行うことで地球規模の海洋環境変動が生命に与える影響について学習する。</p> <p>（124 白岩善博／5回）「海洋生物、特に海洋植物・藻類の光合成生物や光合成機能を有する微生物に関する形態学、生理学、生化学、分子生物学的手法を駆使した最先端の科学的知見を基盤に、地球規模かつローカルな海洋環境の変化を海洋動物がどのような仕組みで感知するか、さらにその環境変化によってどのような生物学的変化を引き起こすか」について講義を行うことで地球規模の海洋環境変動が生命に与える影響について学習する。</p>	集中 オムニバス方式
	地球規模課題と国際社会:社会脳	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」の中で、主として、Goal 3 & 4に関連するが、社会性や共生という観点から現代に生きる人類に共通する課題とそれに対する取り組みの方向性を提起する先端的な講義を展開する。</p> <p>国際社会が直面する「社会性の変容」に起因する様々な問題を「社会脳」として新たな分野を創成しそれを取り扱う。</p> <p>個別課題として、社会性の発達と環境、社会認知の脳内基盤、高齢者の認知機能などについて講義する。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地球規模課題と国際社会：感染症・保健医療問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 3に関連した、国際社会が直面する「感染症・保健医療問題」について取り扱う。</p> <p>（オムニバス方式/全10回）</p> <p>（112 福重瑞徳/全5回）「持続可能な開発目標（SDGs）」、「感染症」、「プロジェクト・サイクル・マネージメント（PCM）手法」をテーマに講義を行い、また、学生はPCMを用いた国際保健に関するプロジェクト形成・発表を行う。</p> <p>（69 我妻ゆき子/全3回）「国際保健とその歴史」、「人口・リプロダクティブヘルス・栄養」、「慢性疾患とリスク」をテーマに講義を行う。</p> <p>（44 近藤正英/全2回）「途上国における保健医療問題と優先付け」、「途上国における保健医療制度・医療経済」をテーマに講義を行う。</p>	集中 オムニバス方式
	地球規模課題と国際社会：社会問題	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」を地域自立と振興の観点から全て網羅する課題である「社会問題」について取り扱う。</p> <p>発展と持続性に関し、天然資源、環境保全、及び経済発展を軸として、国家としてのガバナンス、国家間の懸案事項、ボーダーレス社会での“歪み”、非政府組織や先住民族の存在によるグラスルートでの課題対応をグローバルに概論する。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会：環境汚染と健康影響	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 3に関連した、国際社会が直面する「環境汚染と健康影響」について取り扱う。</p> <p>国際的汚染問題の概要、ナノ粒子、外因性内分泌攪乱化学物質、環境中親電子物質、エクスポソーム、カドミウム、ヒ素、有機ハロゲン化合物、メチル水銀、トリブチルスズなどの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
	地球規模課題と国際社会：環境・エネルギー	<p>国連が提起した「持続可能な開発目標（SDGs）」に密接に関わる国際社会が直面する課題を理解し、大学院生各人に国際社会の一員としての自覚を誘起することで、高等教育を受けた者が果たすべき役割と責任について熟考させることを目的とする。</p> <p>当科目は「持続可能な開発目標（SDGs）」のうち、Goal 7, 9 & 13に関連した、国際社会が直面する「環境・エネルギー」について取り扱う。</p> <p>太陽電池、燃料電池、人工光合成、ナノエレクトロニクスによる省エネルギー、パワーエレクトロニクスによる電力制御、核融合発電などの個別課題を含めて講義することにより、国際社会で活躍できる能力と人間力を養う。</p>	集中
キャリア ア マ ネ ジ メ ン ト 科 目 群	JAPICアドバンストディスカッションコースI-流動化する世界とこれからの日本	<p>最新の社会問題、国際問題、ビジネス上の課題を対象に議論を行うため、産業界のトップリーダーを講師として招聘する。</p> <p>世界が益々流動化する中で日本の現状と課題を再確認すると共に、今後の変化に対応する為になにが必要か検証・議論することで、社会人基礎力として重要なさまざまな能力を身に付けることを目的とする。</p> <p>事前学習を通じて情報収集力を、授業時間中の議論を通じてディベート力を、レポート作成を通じてまとめる能力を身につける。</p>	集中
	JAPICアドバンストディスカッションコースIII-テクノロジーとグローバルで拓く未来	<p>最新の社会問題、国際問題、ビジネス上の課題を対象に議論を行うため、産業界のトップリーダーを講師として招聘する。</p> <p>グローバルとテクノロジーについて、実ビジネスの観点から議論し学習することで、社会人基礎力として重要なさまざまな能力を身に付けることを目的とする。</p> <p>事前学習を通じて情報収集力を、授業時間中の議論を通じてディベート力を、レポート作成を通じてまとめる能力を身につける。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ダイバーシティとSOGI/LGBT+	<p>産業化、技術革新、国際化による変化にともない、人々の生活や働き方、人間関係にもさまざまな変化が生まれています。本科目では、さまざまな属性や特徴を有する個人がどのように「仕事と生活の両立（ワークライフバランス）」を図りながら人生を生きるのか、なぜ男女共同参画やダイバーシティ（多様性）を推進する必要があるのか、その方法と意味を理解することを目指します。特に近年のダイバーシティ推進の重要なトピックである「SOGI」「LGBT+」に代表されるセクシュアル・マイノリティについて集中的に授業を行います。</p> <p>くわえて、授業ではダイバーシティ推進に欠かせない実践力（グループワークにより聴く力、伝える力、情報収集力、マネジメント力等）を身につけることも目標とします。</p>	集中 講義7.5時間 演習7.5時間
	ワークライフミックス – モーハウスに学ぶパラダイムシフト	<p>仕事と私生活を調和した新たなビジネススタイルである、「ワークライフミックス」を講義の基本テーマとして取り上げることで、新たな価値創造の基礎となるアントレプレナーシップや、多角的思考からワークライフを捉え、受講者のキャリアマネジメント能力の向上を図る。</p> <p>また、「ワークライフミックス」を実践している企業である「モーハウス」を事例として取り上げることで、ワークライフに関わる物の見方と考え方を習得し、受講生が自分の仕事や今後のライフプランについて、多様な角度から思考できるようにする。</p>	集中
	魅力ある理科教員になるための生物・地学実験	<p>気象、地質、岩石、昆虫、植物、菌、微生物、内燃機関といった、「生物」と「地学」を合体した内容をフィールドワーク重視の実習形式で実施することにより、受講者が将来理科教員になった場合に役立つ実践的な実習・実験の高度専門知識を身につけることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全6回)</p> <p>(71 上松佐知子/1回) フィールドでの化石探索を通し、地球の歴史に関する実習を行う。 (52 田島淳史/1回) 「食べものを作る動物たち」をテーマに実習を行う。 (86 野口良造/1回) 「内燃機関の原理と組み立て」をテーマに実習を行う。 (40 戒能洋一・80 澤村京一・84 中山剛・103 八畑謙介/1回) (共同) 「生物に関するフィールドワーク」をテーマに実習を行う (62 久田健一郎/1回) 「地質調査入門」をテーマに実習を行う。 (66 山岡裕一/1回) 「微生物（菌類）に関するフィールドワーク」をテーマに実習を行う。</p>	集中 オムニバス方式 共同（一部）
	アクセシビリティリーダー特論	<p>障害のある人々が包摂された社会を実現するために、身体障害や発達障害といった様々な障害の理解や支援に関する幅広い講義を行う。また、障害のある人への災害時支援や、障害のある人に役立つ支援技術、諸外国と日本における支援の比較や展開といったマクロな視点や今日的な話題を通して、多様な背景をもつ人々が共生することのできる社会とはどのような社会なのかについて考える力を身につけることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(50 竹田一則/1回) 「障害児・者支援の理念と背景」について講義を行うことで、障害者支援の現状や歴史的背景、今日的課題について学習する。 (111 野口代/2回) 「障害児・者の現状および支援の流れ、支援体制」について講義を行うことで、支援領域（就学、生活、就職ほか）ごとの支援方法や支援体制について学ぶ。 (77 小林秀之/3回) 「視覚障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、視覚障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (61 原島恒夫/4回) 「聴覚障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、聴覚障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (102 名川勝/5回) 「運動・内部障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、運動・内部障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。 (72 岡崎慎治/6回) 「発達障害児・者の理解と支援」について講義を行うことで、発達障害児・者の実態や、支援内容、支援方法、評価等について学習する。</p>	オムニバス方式 共同（一部）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(111 野口代/7回) 「障害のある人への災害時支援」について講義を行うことで、障害種別に災害時に留意すべき事項について学習する。</p> <p>(79 佐々木銀河/8回) 「障害のある人に役立つ支援技術」について講義を行うことで、最新の支援機器や支援技術について学習する。</p> <p>(79 佐々木銀河/9回) 「諸外国と日本における支援の比較と展開」について講義を行うことで、国際的な動向を踏まえた障害者のある人へのアクセシビリティについて学習する。</p> <p>(50 竹田一則・59 野呂文行/10回) (共同) 講義のまとめと討論を行うことで、これまでに学んだ障害の特性や、障害のある人のアクセシビリティを支援するための知識を表現できるようにする。</p>	
	脳の多様性とセルフマネジメント	<p>本学大学院生が産業界や地域社会で自身の能力を十分に発揮できるよう、自己および他者における脳の多様性を適切に理解することを通して、自身の特性に合ったセルフマネジメントスキルを身に付けることを目標とする。</p> <p>講義としては、発達障害から定型発達との連続体として捉えられる「脳の多様性(ニューロダイバーシティ)」について概説する。加えて学業や日常生活において有効なセルフマネジメントテクニック・ツールを紹介する。</p> <p>演習としては、自身にはどのような特性があるかを客観視する個人ワークを行う。また自身の特性に合ったマネジメント方法を身に付ける。さらに社会で活躍する発達障害当事者をゲストスピーカーとして招き、自己および他者における脳の多様性を深く理解するための事例を提供する。</p>	集中 講義 9時間 演習 6時間
知的基盤形成科目群	生物多様性と地球環境	<p>本科目では、筑波大学と科学博物館筑波植物園のコラボレーションにより、生物多様性と地球環境についての理解を促進するための講義と展示・フィールドを利用した現場型の生物多様性・地球環境教育についてのフィールド実習を行う。</p> <p>有用植物の進化を実物で見ながら、植物の進化とは異なる人間の手が加わった栽培化シンドロームを実感してもらうことで、生物多様性の実体と生物遺伝資源について、自然科学的・社会科学的にとらえられるようにすることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式/全4回)</p> <p>(37 大澤良/1回) 「栽培植物の起源」についての講義と植物園見学を行うことで、多様性研究の意味について学習する。</p> <p>(119 海老原淳/1回) 「生物多様性ホットスポットとしての日本列島」をテーマとする講義と絶滅危惧であるシダ植物園見学・管理実習を行う。</p> <p>(123 國府方吾郎/1回) 「絶滅危惧植物と生物多様性」をテーマに植物園における社会発信と保全の見学、植物登録管理の実習を行う。</p> <p>(60 林久喜/1回) 「作物の多様性」をテーマに講義と実習を行う。</p>	集中 オムニバス方式 講義 7.5時間 実習 15時間
	内部共生と生物進化	<p>非常に多くの生物が、恒常的もしくは半恒常的に他の生物(ほとんどの場合は微生物)を体内にすまわせている。</p> <p>このような「内部共生」という現象から、しばしば新しい生物機能が創出される。共生微生物と宿主生物がほとんど一体化して、あたかも一つの生物のような複合体を構築する場合も少なくない。</p> <p>共生関係からどのような新しい生物機能や現象があらわれるのか? 共生することにより、いかにして異なる生物のゲノムや機能が統合されて一つの生命システムを構築するまでに至るのか? 共に生きることの意義と代償はどのようなものなのか? 個と個、自己と非自己が融け合うときになにが起こるのか? 共生と生物進化の関わりについて、その多様性、相互作用の本質、生物学的意義、進化過程など、基本的な概念から最新の知見にいたるまでを概観することで、そのおもしろさと重要性についての認識を共有することをめざす。</p>	集中
	海洋生物の世界と海洋環境講座	<p>海は地球上の生命の源であり、生物の多様性を生みだしてきた。地球と我々人間を理解するためには、海洋生物に関する知識が不可欠である。</p> <p>本科目では魚類をはじめ、さまざまな海洋生物の体制、生殖、寄生種に関する観察や実験、講義を行うことにより、海洋生物の多様性および海洋環境についての理解を深めることを目的とする。</p> <p>下田臨海実験センターにて実施することで、研究調査船による採集や磯採集など野外でのより実践的な実習も行う。</p>	集中 講義 4.5時間 実習 21時間

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	科学的発見と創造性	科学的発見がおこなわれる現場の歴史的状況を再現し、行為者の創造性がどのような形で発揮されたのか、「ハンソンの理論的負荷性」、「ニュートンの林檎と万有引力の理論」、「ゼメルヴェイスによる産褥熱の予防」、「ジョン・ドルトンと化学的原子論」等様々な事例研究を通じて解明する。 科学的発見が単なる偶然でも、幸運でもなく、周到に企図された創造性によるものであることを理解することを目的とする。	集中
	自然災害にどう向き合うか	国土交通省で活躍する有識者を講師として招聘し、災害列島とも言われる我が国の現状及び温暖化等により今後益々増加する災害リスクに対して、社会としてどのように対応するべきかを考える。 「総合的な津波対策」、「大規模土砂災害への対応」、「地震対策」等のテーマを通じて、防災施設の整備の状況、リスク等を踏まえた今後の社会資本整備のあり方について考え方が整理されること、個人や地域の核としての防災対応力を身につけることを目的とする。	
	「考える」動物としての人間-東西哲学からの考察	「考える」のは人間の特性である。人間は言葉を使って知性によって「考える」。だが「考える」とはどのような営為なのか、東西の哲学がどのように「考え」てきたのかを参照しながら「考える」ことについて「考える」。 (オムニバス方式/全10回) (68 吉水千鶴子/2回) 仏教の思想を参照して「考える」ことについて考える。 (32 井川義次/2回) 中国の思想を参照して「考える」ことについて考える。 (101 千葉建/2回) ドイツ哲学思想を参照して「考える」ことについて考える。 (83 津崎良典/2回) フランス哲学思想を参照して「考える」ことについて考える。 (81 志田泰盛/2回) インド思想を紹介しながら「考える」ことについて考える。	集中 オムニバス方式
	21世紀と宗教	21世紀の現代社会の情勢は宗教と深く関わっており、複雑な国際情勢、テロなどの暴力と対峙せねばならない現代社会において、それを解く鍵ともなる宗教について正しい知識と理解を得ることは重要である。 当科目では、21世紀の現代社会の情勢と宗教とのかかわりについて、いくつかの事例を取り上げながら考察する。 宗教による対立や政治への介入は紀元前の昔から続いてきた人類の課題とも言え、その歴史や背景を正しく知り、現在のグローバルな社会において正しく対応するための知識と理解を身につけることを目的とする。 (オムニバス方式/全10回) (41 木村武史/5回) 「先住民族の宗教の関り」について講義を行うことで現代グローバル社会における先住民族宗教の意義について学習する。 (68 吉水千鶴子/5回) 「アジアの民族と宗教の関り」について講義を行うことで現代グローバル社会における伝統宗教の意義について学習する。	集中 オムニバス方式
身心基盤形成科目群	塑造実習	当科目は豊かな心、逞しい精神、豊かな人間力を涵養する大学院生のための塑造の実践講座である。作品鑑賞と、人物モデルを使用した粘土による頭像制作を行う。「デッサン」、「心棒組み」、「大掴みな土付け」、「量塊の構成」、「面と量塊」、「量感豊かな表現、比例・均衡・動勢について」といった制作に関する内容の学習を通して、立体的な形態把握と、これを表現する能力を養うことを目的とする。	隔年
	コミュニケーションアート&デザインA	授業の到達目標及びテーマ：現代アート全般、ビジュアルデザイン全般、陶磁、木工、構成学について概説し各諸分野の位置付けを明らかにする。 (オムニバス方式/全10回) (106 上浦佑太/1回) (1) ガイダンス (42 國安孝昌/2回) (2) 総合造形の研究、(3) 総合造形の教育 (78 齋藤敏寿/1回) (4) 現代の実材主義的な造形	隔年 オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(53 田中佐代子/1回) (5) ビジュアル・コミュニケーション・デザイン (88 原忠信/1回) (6) ブランディングデザイン (94 宮原克人/1回) (7) 木工・漆芸 (105 小野裕子/1回) (8) 特殊造形、環境とアート (113 Gary Roderick MCLEOD/1回) (9) 写真 (106 上浦佑太/1回) (10) 構成学	
	コミュニケーションアート&デザインB	授業の到達目標及びテーマ：環境デザイン全般、ガラス工芸、メディアアート、絵本や漫画について概説し各諸分野の位置付けを明らかにする。 (オムニバス方式/全10回) (116 山本美希) (1) ガイダンス (57 野中勝利/1回) (2) 市民参加によるまちづくり (63 藤田直子/1回) (3) ランドスケープデザイン (97 渡和由/2回) (4) サイトプランニング、(5) 住環境の総合的デザイン (87 橋本剛/2回) (6) 快適な環境、(7) 伝統民家のデザイン (109 鄭然ギョン/1回) (8) ガラス (115 村上史明/1回) (9) メディアアート、テクノロジーと芸術 (116 山本美希/1回) (10) 絵本、マンガ、イラストレーション	隔年 オムニバス方式
	日本画実習	日本の芸術を理解し、生涯において楽しむことのできる豊かな人間性を涵養することを目的とする授業。日本画用の筆・和紙・絵具を用いた作品制作を通して、長い歴史に育まれた日本画への理解を深め、豊かなところを養う。必要に応じて、日本画の鑑賞について、材料や技法についての講義も織り交ぜる。グローバル化の中においては、世界を意識すると同時に日本の芸術文化に改めて注目し理解することが必要で、当科目はそのきっかけとなる。	隔年
	ヨーガコース	当科目は「ヨーガ行法の体系、歴史、思想（ヨーガの日本文化への貢献）」、「ヨーガの効果」、「社会的意義（環境思想への影響、自然科学思想への貢献）」といったヨーガ思想と技法の講義、「予備体操」、「アーサナ」、「呼吸法」、「冥想」の実習を行うことで、インドが生み出したヨーガを通じて、深く自己を掘り下げる東洋の実践的な身心思想を学び実践する。 健康でかつ不安や絶望に対処できる柔軟な身心と強い意志をもって、よりよい人生を築ける自己を養うことを目的とする。	集中 講義10時間 実習20時間
	絵画実習A	全人的な教養教育として、知識のみならず、自分自身の「手仕事」として「絵を描く」という体験は、作る楽しさや喜びを感じつつ、まさに芸術的感性を磨くことが可能である。 当科目は、芸術を楽しむ豊かな人間性を涵養するため、特に油絵具を使用し、制作・実習をおこなうものである。 様々なモチーフの写生などを通して、絵画表現に対する理解を深め、造形感覚を養うことも目的とする。	隔年
	現代アート入門	なぜこれが芸術なのか、現代アートは一見、普通の生活者に無縁のように感じられることが多い。しかし、難しい現代アートも勉強をすれば、誰にでもわかるものなのだ。そうした基礎的芸術教養を身に付ければ、「無用の用」である芸術は、一人ひとりの人生を豊かにしてくれるものになる。 この授業では、現代アートについて、作家としての体験的視点から、多くのヴィジュアル資料を見せながら、現代芸術の考え方（コンセプト）や大きな流れ（芸術運動史や主要な芸術家や作品）を知り芸術への理解を深めることを目的とする。対象は19世紀末から21世紀の現在までとする。	隔年
	大学院体育Ia	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレー、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	大学院体育Ib	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Ic	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して豊かな心を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIa	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIb	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIc	人間性を高める契機としてスポーツを位置づけ、その活動を通して逞しい精神を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIa	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IIIc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の基盤作りのために自己とスポーツとのよい関係を築く。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	大学院体育IVa	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IVb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育IVc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活の実現のために自己とスポーツとの良い関係を継続させる。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Va	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。春学期および秋学期を通して継続的に学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、スポーツの種目特性およびつくば市の地域特性等を考慮して、水泳、テニス、バレエ、つくばマラソンを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Vb	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。年度の始まりならびに季節を踏まえて、春学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、ボディワーク、マリンスポーツ、日本の体育・スポーツ文化、ランニングの世界を各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	
	大学院体育Vc	よりよく生きるための契機としてスポーツを位置づけ、充実した研究生生活とスポーツライフの両立を通して自己を成長させ続ける力を養う。年度の後半ならびに季節を踏まえて、秋学期ならではの学修活動を行うことによって、教育目標の達成を目指す。コースは、各スポーツ種目の運動特性およびわが国の地域特性等を考慮して、器械運動、スノースポーツ、氷上スポーツを各コースとして開設する。またこの場合、各コースは自身のスポーツ実践によって得られる実体験を基礎として学修活動を展開するため、実技を中心に行われる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通研究科群目	ビジネスマネジメント特別演習I-I	研究指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。春学期に開講し、学生各自による研究テーマの絞り込み、博士論文の研究計画書としてまとめを指導し、研究テーマ発表会に臨める形を目標にする。	
	マーケティング・サイエンス特論	本講義では、消費者及び企業の行動をモデル化し、マーケティング上有用な高次情報を抽出するための統計的モデリング法について検討を行う。具体的には、階層ベイズモデル、状態空間モデルなどの手法及びそれらの適用事例について紹介し、関連する知識と研究方法を体得するとともに、最新のマーケティング・サイエンスアプローチを議論する。本講義のキーワードは、ベイジアンモデリング、階層ベイズモデル、状態空間モデル、マルコフ連鎖モンテカルロ法、カルマンフィルタ/固定区間平滑化、粒子フィルタ、市場反応モデル、離散選択モデル等である。	
	経営戦略総論	本講義では、経営戦略論の学術研究を理解し自ら実施するために必要な学術理論と研究手法について概説する。ただし経営戦略に関する研究を行うに当たり、必須となる研究手法の理解を優先し、理論については必要に応じて概説する。研究手法について、とくに統計分析と事例分析について取り上げる。統計分析については経営学研究で頻繁に利用される回帰分析を主に扱う。事例分析については同じく経営学研究で頻繁に利用される比較事例分析を主に扱う。また、それぞれの研究手法における代表的な適用例について既存研究をもとに理解を深める。学術研究を行うにあたり必要な研究手法を理解することを目的とする。	隔年
	財務会計特論	本講義では、会計制度の国際化という状況のもとで、財務会計の最新論点（金融商品会計、リース会計、退職給付会計、税効果会計、減損会計、連結会計など）について整理し、これについてどのような実証研究が行われているのかを学習する。そして、各ステークホルダーの意思決定に役立つような会計制度を構築するためには今後、どのような研究が必要かを考える。そのため、当該トピックスについて関連論文を読み、発表を行ってもらうことで理解を深める。	隔年
	知能情報システム	複雑な社会や経営の問題を扱うためには、知能情報システムのモデル化が必要となる。本講義では、人工知能をベースとしたマルチエージェント技術に基づくシミュレーション&ゲーミング手法を紹介する。これはボトムアップ型のアプローチであり、ソフトウェアエージェントと人間を含むそれぞれの主体が、シンプルなゲーミング環境の下で、自律的・適応的な意思決定を通して、複雑なシステムを実験的に再現することができる。本講義ではゲーム設計を含め、グループワークを通して自律的に参加することで、知能情報システムのモデル化について理解する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
法学 関連 科目	共通 専門 科目	企業法特別研究I	研究指導教員によって院生が希望する「企業法研究」について、研究方法を検討し、研究方針を立てさせることを目標とし、演習形式で1年次に開講する。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		企業法特別研究II	研究指導教員によって演習形式で、1年次に開講する。法学学位プログラム（前期）で提供されている「法文献学パート1」の知識を応用し、我が国における過去の研究等を調査させ、参考文献を収集・整理させることを目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		企業法特別研究III	研究指導教員によって演習形式で、1年次に開講する。院生の研究テーマに関連のある「外国法」について、文献を調査させ、資料を収集・整理させる。最後に、博士論文の研究課題を確定させることを目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		企業法特別研究IV	研究指導教員によって演習形式で、2年次に開講する。主要参考文献（主に邦文）の講読を行い、問題点を検討し、博士論文の内容について推敲させることを目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		企業法特別研究V	研究指導教員によって演習形式で、2年次に開講する。主要参考文献（主に外国法）の講読を行い、問題点を検討し、博士論文の内容について推敲させる。日本法を中心とした比較法的研究とするか、もっぱら外国法・国際法的研究とするか、この段階で決めさせることを目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		企業法特別研究VI	研究指導教員によって演習形式で、2年次に開講する。問題点ごとに検討を深め、博士論文の全体構想を作らせることを目標とする。最後に、論文の中間報告を行わせる。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		企業法特別研究VII	研究指導教員によって演習形式で、3年次に開講する。中間報告に基づいて博士論文の最初の草稿を作成する。その草稿を批判的に検討し、不十分な点を補充させることを目標とする。この部分では、「法文献学パート2」の知識を応用させることになる。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		企業法特別研究VIII	研究指導教員によって演習形式で、3年次に開講する。引用文献が適切かどうかを検討し、院生の草稿全体にわたる見直しを行い、必要な手直しを行わせることを目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		企業法特別研究IX	研究指導教員によって演習形式で、3年次に開講する。博士論文の体裁等を見直すことを目標とし、完成に向けて最終指導にあたる。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。
		(研究指導)	<p>(1 大塚章男) 主として比較法の手法を用いて、会社法、国際取引法、国際経済法をめぐる法分野の研究指導を行う。</p> <p>(2 大淵真喜子) 比較法的ないし法制史的手法を用いて、民事訴訟法をはじめとする民事手続法の課題の研究指導を行う。</p> <p>(3 岡本裕樹) 比較法・裁判例分析等の手法を用いて、現代私法の課題の研究指導を行う。</p> <p>(4 川田琢之) 主として比較法の手法を用い、労働法分野の課題の研究指導を行う。</p> <p>(5 木村真生子) 比較法や判例分析等の手法を用いて、金融商品取引法、会社法をはじめとする民商法に関する課題の研究指導を行う。</p> <p>(9 潮海久雄) 主に比較法の手法を用いて、学生が関心をもっている、知的財産法に関する現代的課題について、研究指導を行う。</p> <p>(15 平嶋竜太) 指導学生の学問的関心及び基礎知識に応じて、知的財産法分野及び情報財の法的保護に関する領域における博士論文研究のための方向性や比較法研究等に対する助言や課題設定を与える手法を用いて、博士論文作成に必要な研究指導を行う。</p> <p>(16 本田光宏) 租税法の理論及び実務の両面から考察する手法を用いて、租税法分野における現代的な課題の研究指導を行う。</p> <p>(18 弥永真生) 主として比較制度の手法を用いて、会社法、金融商品取引法、企業会計をめぐる法分野、AI/ロボット法等に関連する課題の研究指導を行う。</p> <p>(23 小林和子) 比較法・裁判例の分析の手法を用いて、民法の課題の研究指導を行う。</p> <p>(28 藤澤尚江) 国際私法の現代的な課題について、個別に研究指導を行う。</p>

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
		(31 渡邊絹子) 個別面談を通じて、各人の設定した社会保障法に関する課題の研究指導を行う。		
専門科目	企業のグローバル化分野	外国会社法	諸外国（主として、アメリカ、EUまたはEU/EEA構成国、コモンウェルス諸国）における会社法関連あるいは会計制度に関連する外国語文献を題材に、講義形式で概説する。参加者に報告を求め、科目担当者がコメントを加え、補足する等をする一方で参加者間で議論を行う。	隔年
		国際租税計画I	国際課税の最先端のテーマについて講義形式で概説した後、少人数でテーマについて議論する。各年におけるアップトゥデートな国際課税に係るテーマを選定し、報告者・質問者が予め割り当てられた論点や判例等について報告及び質疑を行い、その後、受講者全員で、提示された論点や枠組み等について議論する。国際課税の最先端のテーマについて体系的・包括的に学習することにより、理解を一層深めることを目標とする。	隔年
		国際取引と国際私法	国際私法・国際取引法に関して、講義する。英語文献を講読し議論を行うことを通じて、理解を深めることを目標とする。国際取引において生じる問題を、国際私法の観点から検討する。講義内容は、原則として、受講者の希望に応じて決定する。	
		米国民事訴訟法	米国の民事訴訟法に関する文献を講読し、講義形式で概説する。主に連邦裁判所を中心とする民事訴訟手続のアウトラインを理解することを目的とする。講読する文献の分野や内容は、年度によって異なる。米国連邦民事訴訟法に関する基礎的な英語文献を講読し、米国連邦民事訴訟法に関する基本的知識の習得を目的とする。報告担当者が講読予定部分をあらかじめ邦訳したレジュメをメールによって事前に受講者全員に配布し、各受講者においてこれを検討していることを前提として、受講者全員で議論を行う。必要に応じて、テキスト中の重要判例等も検討しておくことが望ましい。	隔年
		ドイツ民事訴訟法	ドイツの裁判制度、民事訴訟手続に関する文献を講義形式で概説した後、講読する。講読する文献の分野や内容は、年度によって異なる。ドイツ民事手続法に関する基本的なドイツ語文献を講読する。文献は、特定の論点に関するものを読み込むというより、できる限りドイツの学説・判例を読む際にベースとなるような基本的な知識等が得られるような文献を選定する予定である。報告担当者が講読予定部分をあらかじめ邦訳したレジュメをメールによって事前に受講者全員に配布し、各受講者においてこれを検討していることを前提として、受講者全員で議論を行う。専門用語を含めて正確に文意を把握することだけでなく、文献を理解するために必要な背景あるいは基礎的知識を習得することも目的としているので、それらの知識等については、適宜演習の中で触れていく。ドイツ語の文法等の基礎知識があることが望ましい。	隔年
		外国資本市場法	諸外国の証券規制に関する基礎的な文献を講読したり重要な裁判例にあたること等を通じて、証券規制の理論的な問題について検討を深めることを目標とする。授業は講義形式で行う。	隔年
		国際租税計画II	国際課税の最先端の問題（租税条約法に関する問題を含む。）を論じている外国語文献を講読する。授業は、講義形式で実施し、少人数でテーマについて議論する。報告者・質問者が予め割り当てられた範囲・テーマ等について報告及び質疑を行い、その後、受講者全員で、提示された論点や枠組み等について議論し、国際課税の最先端のテーマについての理解を深める。なお、講読する外国語文献のテーマや内容は、年度によって異なる。	隔年
		アメリカ会社法	設立、株式、資金調達、株主総会、取締役会、独立取締役、執行役員、会社と取締役との関係、組織再編行為など多くの分野の中から、当該年度にふさわしいと考えられる、いくつかの重要なトピックを取り上げ、主としてデラウェア州会社法及び模範事業会社法ならびに会社法に係る裁判例及びlandmarkとなっている論文や近年の論文を題材として、担当教員による講義形式によって行う。	隔年
		アメリカ証券取引法	主として1934年証券取引所法及び1933年証券法、証券取引委員会（SEC）によるエンフォースメント、州法・コモンローなどがカバーしている証券取引に係る法を範囲として、当該年度にふさわしいと考えられる、いくつかの重要なトピックを取り上げ、制定法としての連邦法（主として証券法及び証券取引所法）・州法およびそれらに係る裁判例のみならず、コモンローとして証券取引に関して形成されてきた法準則及びlandmarkとなっている論文や近年の論文を題材として、担当教員による講義形式によって行う。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
企業組織と金融分野	現代株式会社法	株式会社法における解釈上および法政策上の現代的諸問題を取り上げ、比較法的観点も考慮する。具体的なテーマの選択については、受講者と相談の上、決定する。参加者に報告を求め、科目担当者がコメントを加え、補足する等をする一方で参加者間で議論を行う。授業は講義形式で行う。	隔年
	比較金融法	諸外国（主としてアメリカ、EUおよびEUまたはEEA構成国、コンウェルス諸国）における金融法に関連する文献を題材に、参加者に報告を求め、科目担当者がコメントを加え、補足する等をする一方で参加者間で議論を行う。授業は講義形式で行う。	隔年
	現代契約法	契約法領域における現代的問題について理解を深めることを目標とする。複数の契約により構成される取引は現代において多くある。このような取引において、それぞれの契約が影響し合うことによって生じる問題について、参加者全員で考える。授業は講義形式で行う。	隔年
	国際会社法	国際的な企業活動において提起される国内外の会社法上の現代的諸問題を、比較法的観点を入れつつ、検討を行うことを目標とする。授業は主として最近の外国語文献を題材に、毎回、報告担当者を決め、その報告をもとに科目担当者がコメントを加え、参加者間で議論を行う。授業は講義形式で行う。	隔年
	現代民事金融法	契約交渉・担保・弁済・債権譲渡・債権回収・債権保全などに関する最近の裁判例や文献に現れた民法解釈論上の問題につき、ケーススタディや文献講読などの方法により検討を行う。日本法のほか、ドイツ法の素材を取り扱うこともある。金融法領域における民事上の問題を検討し、議論状況を理解することで、金融法の知識を深めるとともに、裁判例分析や研究報告の基礎を身に付けることを目標とする。基本的な形式としては、毎回、報告担当者を決め、その者による報告をもとに、受講生全員で議論を行う。報告者は、一定の裁判例から報告対象を選択し、その裁判例に関連する従来の裁判例や文献を渉猟して、報告を行う。授業は講義形式で行う。	
情報テクノロジーと企業分野	知的財産法による情報財保護	情報財保護法制という視点を中心に据えて、法解釈論に限ることなく、制度論、政策論等の多様な視点から、今日の知的財産法全般における諸問題を取り扱い講義形式で概説する。最新の文献講読を基に受講者が報告と議論する。	隔年
企業ノウハウと従業員	雇用形態の変化、企業間競争の構造変化等の現象に伴って、企業に蓄積される営業秘密やノウハウといった情報資産の保護・管理と従業員の労務管理をいかにバランスさせるのかという問題は、経営・実務の上のみならず、法理論的にも極めて重要な課題であるといえる。本科目では、情報資産の保護・管理の側面として知的財産法の観点から、労務管理の側面として労働法の観点から、それぞれ検討を行って、履修者各自が考察の機会を得ることを目的とする。 (オムニバス方式／全10回) (4 川田琢之／5回) 企業とその従業員との関係における企業ノウハウの保護をめぐって生ずる法的問題に関し、企業秘密保持義務、競業禁止義務などの労働法上の問題を中心に講義（一部は配布資料を用いた質疑・討論）する。 (15 平嶋竜太／5回) 企業ノウハウを、企業組織内に存在する経済的価値を有する情報財一般を包含する概念として広く捉えた上で、知的財産法各法による保護のあり方、各知的財産権の帰属を巡る課題等を中心に検討することを予定する。受講者全員が報告・議論に参加するゼミ形式を中心とするが、初回では全体の解説による講義形式をとる。	隔年 オムニバス方式	
電子社会と法	科学技術の進展が既存の法制度にどのような影響を与え得るのかについて、参加者と共に考える。具体的なテーマは、会社法および証券法を主とする民商法分野の最新トピックから選び、比較法的観点も考慮しながら、受講者と相談した上で決定する。参加者に報告を求め、科目担当者がコメントを加えて補足をする一方で、参加者間で討議する。授業は講義およびゼミ形式で行う。		
現代知的財産法	知的財産法（特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか）における現代の重要課題について、欧米との比較法をとおして検討する。主に外国の重要な文献、裁判例を検討しつつ、わが国の重要な学説・裁判例も比較検討する。授業は講義およびゼミ形式で行う。	3年に1度開講	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	欧米知的財産法	欧米の知的財産法（特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか）における問題点や近年の動向を検討する。主に外国の重要な文献、裁判例を検討しつつ、わが国の重要な学説・裁判例も比較検討する。授業は講義およびゼミ形式で行う。	3年に1度開講
	アメリカ知的財産法	米国の知的財産法（特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか）の法制度・裁判例について、英語資料を参照しつつ、比較法的検討を行う。主に外国の重要な文献、裁判例を検討しつつ、わが国の重要な学説・裁判例も比較検討する。授業は講義およびゼミ形式で行う。	3年に1度開講
	比較知的財産法	知的財産法（特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか）の制度・運用について比較法的検討を行う。主に外国の重要な文献、裁判例を検討しつつ、わが国の重要な学説・裁判例も比較検討する。授業は講義およびゼミ形式で行う。	3年に1度開講
	知的財産法の現代的課題	知的財産法（特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか）が抱える現代の諸問題を多角的に検討する。主に外国の重要な文献、裁判例を検討しつつ、わが国の重要な学説・裁判例も比較検討する。授業は講義およびゼミ形式で行う。	3年に1度開講
	外国知的財産法	知的財産法（特許法、著作権法、商標法、不正競争防止法ほか）の国際的な問題点や近年の動向を検討する。主に外国の重要な文献、裁判例を検討しつつ、わが国の重要な学説・裁判例も比較検討する。授業は講義およびゼミ形式で行う。	3年に1度開講
社会・経済法分野	比較労働法の基礎I	労働法分野の比較法研究に必要な外国法の知識、外国語文献の分析方法、比較法的検討の手法について、基礎的な能力を習得する。出席者の問題関心に応じて選択した、労働法分野の外国語文献（基本的に英語文献を想定）を出席者全員で講読し、内容の確認、内容に関する質疑を行うほか、必要に応じて担当教員が関連する外国法に関する解説を行う。授業は講義形式で行う。比較労働法の基礎IIと共通コンセプトの科目であるが、取り上げる講読文献は毎年異なるものとするので、具体的な授業内容は比較労働法の基礎IIとは異なったものとなる。	隔年
	現代社会保障法	社会保障法における法政策上の現代的諸問題を取り上げ、比較法的観点も考慮しつつ、受講者との議論を通じて論点に対する理解を深め、思考力・論理力の養成を図ることを目的とする。授業では、受講者が基本報告を担当し、それをもとに参加者全員で議論する。具体的に取り上げるテーマの選択については、受講者と相談の上、決定する。	
	比較労働法の基礎II	労働法分野の比較法研究に必要な外国法の知識、外国語文献の分析方法、比較法的検討の手法について、基礎的な能力を習得する。出席者の問題関心に応じて選択した、労働法分野の外国語文献（基本的に英語文献を想定）を出席者全員で講読し、内容の確認、内容に関する質疑を行うほか、必要に応じて担当教員が関連する外国法に関する解説を行う。授業は講義形式で行う。比較労働法の基礎Iと共通コンセプトの科目であるが、取り上げる講読文献は毎年異なるものとするので、具体的な授業内容は比較労働法の基礎Iとは異なったものとなる。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
経営学 関連科目	専門科目		
	ビジネスマネジメント特別演習I-I	研究指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。春学期に開講し、学生各自による研究テーマの絞り込み、博士論文の研究計画書としてまとめを指導し、研究テーマ発表会に臨める形を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント特別演習I-II	研究指導教員の方針の下で、複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。春学期に開講し、学生各自の研究テーマに関連する既存の研究のサーベイについて指導する。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント特別演習II-I	研究指導教員の方針の下で、複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。秋学期に開講し、春学期に引き続き、学生各自の研究テーマと研究方法の修得・補強について指導する。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント特別演習II-II	研究指導教員の方針の下で、複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。秋学期に開講し、学生各自に対して研究テーマに関連する既存の研究の徹底的なサーベイ、研究方法の習得・補強について指導する。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント特別演習II-III	研究指導教員の方針の下で、複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。秋学期に開講し、学生各自に対して研究テーマに関連するサーベイ・レポートとしてのまとめを指導し、「博士論文指導委員会」に報告できる形を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント講究I-I	研究指導教員によって、または研究指導教員の方針の下で複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。春学期に開講し、学生各自に対して研究テーマに沿った研究の継続を促し、博士論文の骨格となる部分の構築を指導する。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント講究I-II	研究指導教員の方針の下で、複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。春学期に開講する。学生各自に対して研究テーマに沿った研究の継続を促し、関連指導教員の協力を得て、構築した論文骨格を批判的視点から見つめ直すことを促す。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント講究I-III	研究指導教員の方針の下で、複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。春学期に開講し、学生各自に対して研究テーマに沿った研究を継続、博士論文の骨格部分について中間報告書としてまとめを促し、中間報告会で報告できる形を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント講究II-I	研究指導教員によって、または研究指導教員の方針の下で複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。秋学期に開講する。学生各自に対して研究テーマに関連する博士論文の書き方（論文構成、表現方法、文献引用等）を指導する。論文ドラフトの完成を促し、論文ドラフト発表会に臨める形を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント講究II-II	研究指導教員の方針の下で、複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。秋学期に開講し、学生各自に対して研究テーマに関連する博士論文の執筆を促し、論文ドラフト発表会の質疑応答をふまえて、論文の完成度を高めることを目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
	ビジネスマネジメント講究II-III	研究指導教員の方針の下で、複数の関連指導教員によって行われるセミナー形式の授業である。秋学期に開講し、学生各自に対して研究テーマに関連する博士論文の完成を促し、論文審査委員会に提出できる形を目標とする。担当教員の研究指導領域等の概要は下記「研究指導」欄のとおり。	
(研究指導)	(6 倉橋節也) 人工知能の手法を用いて、ビジネスの課題の研究指導を行う。 (7 佐藤忠彦) ベイズモデルを含む統計モデルの手法を用いて、マーケティング現象を題材にした課題の研究指導を行う。 (8 猿渡康文) ORの手法を用いて、企業や社会システムに内在する課題の研究指導を行う。 (10 XU Hua) システムズアプローチや数理モデルなどの手法でビジネスの課題の研究指導を行う。 (11 立本博文) 事例分析・統計分析の手法を用いて、経営戦略の課題の研究指導を行う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>(12 津田和彦) 自然言語処理の手法を用いて、筆者の意図理解の課題の研究指導を行う。</p> <p>(13 永井裕久) 行動科学的な手法を用いて、組織マネジメント課題の研究指導を行う。</p> <p>(14 西尾チヅル) 統計的手法を用いて、消費者行動およびそれを起点とするマーケティング課題の研究指導を行う。</p> <p>(17 牧本直樹) 確率モデルや統計モデルの分析を通して、ファイナンスやオペレーションズ・マネジメント分野の研究指導を行う。</p> <p>(19 山田雄二) 計量的手法や統計的手法などを用いて、ファイナンス分野の課題の研究指導を行う。</p> <p>(20 吉田健一) 機械学習や人工知能など情報処理の技術を用いて、学生が興味を持つ博論課題の研究指導を行う。</p> <p>(21 尾崎幸謙) 統計的手法を用いて、教育・心理学分野の課題の研究指導を行う。</p> <p>(22 木野泰伸) システムモデリング及び設計の手法を用いて、実務における課題の研究指導を行う。</p> <p>(24 佐藤秀典) 定性分析、定量分析の手法を用いて、経営組織の課題の研究指導を行う。</p> <p>(26 中村亮介) 計量経済学等の手法を用いて、会計の課題の研究指導を行う。</p> <p>(27 伴正隆) 統計モデルの手法を用いて、マーケティング分野の課題の研究指導を行う。</p> <p>(30 領家美奈) 統計的手法、ソフトコンピューティングの手法を用いて、意思決定支援に関わる課題の研究指導を行う。</p> <p>(64 BENTON Caroline Fern) 知識経営の手法を用いて、ビジネスの課題の研究指導を行う。</p>	
専門科目	マーケティングコミュニケーション	<p>本講義では、市場のニーズを充足する製品・サービスを提供し、それを普及・浸透させ、顧客とのよい関係を長期的に形成・維持するために必要なコミュニケーションとその方法について検討する。具体的には、ブランド構築、広告コミュニケーション、セールスプロモーション、顧客維持などに関する国内外の諸文献を講読し、関連する知識と研究方法を体得すると共に、いくつかの具体的なテーマを設定して、マーケティングコミュニケーションの展開方法を議論する。</p>	隔年
	消費者マーケティング	<p>本講義では、市場を構成する最終消費者の構造やメカニズムを学習し、最終消費者向けのマーケティング戦略のあり方とその方法について検討する。具体的には、最終消費者の認知、態度、行動、満足度等の意思決定プロセスとそれを規定する消費者の個人差要因と状況要因についての代表的な理論やモデルに関する国内外の文献を講読し、関連する知識と研究方法を修得する。また、いくつかの具体的なテーマを設定して、消費者マーケティングの展開方法を議論する。</p>	隔年
	マーケティング・サイエンス特論	<p>本講義では、消費者及び企業の行動をモデル化し、マーケティング上有用な高次情報を抽出するための統計的モデリング法について検討を行う。具体的には、階層ベイズモデル、状態空間モデルなどの手法及びそれらの適用事例について紹介し、関連する知識と研究方法を体得するとともに、最新のマーケティング・サイエンスアプローチを議論する。本講義のキーワードは、ベイジアンモデリング、階層ベイズモデル、状態空間モデル、マルコフ連鎖モンテカルロ法、カルマンフィルタ/固定区間平滑化、粒子フィルタ、市場反応モデル、離散選択モデル等である。</p>	
	経営戦略総論	<p>本講義では、経営戦略論の学術研究を理解し自ら実施するために必要な学術理論と研究手法について概説する。ただし経営戦略に関する研究を行うに当たり、必須となる研究手法の理解を優先し、理論については必要に応じて概説する。研究手法について、とくに統計分析と事例分析について取り上げる。統計分析については経営学研究で頻繁に利用される回帰分析を主に扱う。事例分析については同じく経営学研究で頻繁に利用される比較事例分析を主に扱う。また、それぞれの研究手法における代表的な適用例について既存研究をもとに理解を深める。学術研究を行うにあたり必要な研究手法を理解することを目的とする。</p>	隔年
	経営戦略特論	<p>本講義では、経営戦略論に関連する特定テーマについて概説を行う。特定テーマの選定としては、(1) 経営戦略論の様々な研究テーマの中で理論的・実証的に開発途中であり研究対象として重要であるもの(2) 近年の社会的状況や学術的トレンドに応じて研究成果が多く報告されているもの、を中心に1つのテーマを選定する。このようにして選定された特定テーマに対して、頻繁に利用される理論的枠組と研究手法を概説する。それに続いて、欧米の主要なジャーナルの論文の中心に輪読し、最先端の研究動向を理解することを目的とする。</p>	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	イノベーション・マネジメント	イノベーションは広い概念であり、技術シーズと市場ニーズの新しい結びつきにより社会的・産業的な変革を伴う現象と定義される。本講義ではとくに経営学に関連するイノベーションとして、資源ベース理論と組織変革、イノベーション・ダイナミクス（イノベーションと既存企業への影響など）、技術シーズの事業化、イノベーション成果のグローバル展開などのトピックを扱う。さらに、これらのトピックについてビジネス・ケースを配布し、事例をもとにして現実の課題を考察し、実感をもって事例分析ができるようにすることを目的とする。	隔年
	人材開発論	企業活動のグローバル化、労働市場の流動化、雇用形態の多様化の中で、日本企業において従来とは異なる人材育成、人的資源活用のパターンが出現している。こうした潮流の変化に対応すべく、国内外の成功事例に基づく新しい労働慣行を積極的に取り入れる企業や官庁の政策提言も増加している。本講では、社会心理学的な観点から、人材をとり巻く雇用環境の変化の中で、従業員の意識特性や行動様式がどのように変化しているのか、また、企業間移動にともなう汎用的な能力開発に向けた人事政策について、最新の事例研究や学術論文を用いて、参加者の議論を通して考察していく。	隔年
	組織行動論	本講義では、組織の中の人間行動について、3つの行動次元（個人・集団・組織）から、個人の意識特性やパフォーマンスに影響を与える特性、並びに、組織マネジメントについて学習する。各次元に関連するトピックス（例：パーソナリティ、リーダーシップ、動機づけ、コミュニケーション、集団力学等）について、定性的および定量的に分析し、適用するアプローチの仕方について、受講生間の討論および、アクションラーニングを通して考える。	隔年
	実証会計論	本講義では、会計学の先進的な知識をベースに、会計情報が実務のどのような局面で利用されているのかを考察し、会計情報の活用について、テキストや実証研究の結果をもとに議論する。具体的には、報酬契約（たとえば利益連動型報酬契約）・債務契約（たとえば財務制限条項）・証券投資（たとえば経営者による業績予想）といった局面における会計の機能を理解し、その知識を実務に応用できることを目標とする。そのため、当該トピックスについて関連論文を読み、発表を行ってもらうことで理解を深める。	隔年
	財務会計特論	本講義では、会計制度の国際化という状況のもとで、財務会計の最新論点（金融商品会計、リース会計、退職給付会計、税効果会計、減損会計、連結会計など）について整理し、これについてどのような実証研究が行われているのかを学習する。そして、各ステークホルダーの意思決定に役立つような会計制度を構築するためには今後、どのような研究が必要かを考える。そのため、当該トピックスについて関連論文を読み、発表を行ってもらうことで理解を深める。	隔年
	金融工学総論	本講義では、派生証券理論やポートフォリオ最適化理論を中心に、金融工学分野に関するより発展的なテーマについて取り扱うことを目的とする。具体的には、アセットプライシング理論、ポートフォリオ最適化理論、金利期間構造モデル、オプションヘッジ理論などのテーマからトピックを選択し、論文や研究の方法論について議論を行う。また、当該トピックスについて関連論文を読み、発表を行うことで理解を深め、さらなる知識習得を目指す。	隔年
	計量ファイナンス特論	本講義では、ファイナンス工学分野とその周辺に関する領域の中でも特に計量分析に関する内容を中心として、計量ファイナンス分野に関するより発展的なテーマを取り扱う。具体的には、非完備市場における派生証券価格付け、オプションヘッジ、電力市場、天候デリバティブ、バリュエーションや信用リスク問題などのテーマからトピックを選択し、論文や研究の方法論について議論を行う。また、当該トピックスについて関連論文を読み、発表を行うことで理解を深め、さらなる知識習得を目指す。	隔年
	金融データ解析	本講義では、金融分野で現れるさまざまなデータを利用して金融市場分析や投資戦略分析などを行う際に必要となる分析手法やその基盤となる統計理論を修得することを目標とする。金融データは一般に時系列データとなるため、多変量自己回帰モデルや誤差修正モデルなどの時系列モデルを最初に取り上げ、さらに発展的な内容として多変量GARCHモデルやレジームシフトモデルなども解説する。また具体的な分析事例を説明するとともに、分析用ライブラリも紹介する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	確率モデルと意思決定	企業活動に関わる意思決定では、将来的な不確実性をどのように計量化すればよいかという問題が重要となることが多い。本講義では、確率モデルを用いてそうした不確実性を定量化し、その上で意思決定を最適化問題として定式化、分析する枠組を理解することを目標とする。具体的には、最適制御、ゲーム理論、契約理論などに関する論文からさまざまな例を取り上げ、それらを通して確率モデルの理論、モデルの構築方法や分析方法を解説する。	隔年
	金融ビジネス総論	フィンテックに代表されるように、金融ビジネスではさまざまな面で大きな変化が起こりつつある。本講義では、金融ビジネスにおけるそうした先端的なテーマについて、その背景や現在の動向、解決すべき課題や今後の方向性などを理解することを目標とする。テーマとしては、金融市場分析、マクロファイナンス、投資戦略、リスク管理、デリバティブなどを予定している。また、学術的なファイナンス研究と実際の金融ビジネスとの関わりについても理解を深める。	隔年
	計画数理総論	企業や社会システムに内在する諸問題の解決にあたって、数理的なモデルを活用することは有益であると広く認識されている。その理由には、定量的な評価が実現されることを挙げることができる。数理的なモデルによる課題解決において、そのモデル化と解決手法は密接に関連している。本講義では、その基盤となるオペレーションズ・リサーチ、特に、数理最適化理論を修得することを目的とする。数理最適化の基盤となる線形最適化を起点に、グラフ理論、ネットワーク理論、組合せ最適化理論や整数最適化理論を網羅的に扱う。これらの理論を体系的に学ぶことで、対象となる現象の問題構造を分析し、得られた結果の意味解釈が可能となるスキルを修得する。	隔年
	トータルロジスティクス	本講義では、情報通信技術が急速に発展した現代社会においても必要不可欠な、「もの」の流れと保管、サービス、加えて関連する情報を計画、実施およびコントロールする過程であるロジスティクスを、その発生地から消費地までの全体最適を指向した統合的なシステムとして捉え、過程に内包されるさまざまな意思決定問題を数理最適化モデルとして扱い、オペレーションズ・リサーチの理論や手法の適用方法を修得することを目的とする。ロジスティクスに関するいくつかの最新の研究論文を題材に、そのモデル化と問題解決方法を講義するとともに、関連するトピックスについて関連論文を読み、発表を行うことで理解を深める。	隔年
	動的システム総論	現実社会において生じる動的な諸現象やシステムを記述するには微分方程式（差分方程式）モデルがよく用いられている。自然科学、工学に限らず、経済やビジネスなどの社会科学においても、問題の対象を動的システムとして考えることが重要となっている。本講義では、時間的な要素を取り入れる動的システムにおける最適化問題と動的ゲーム問題を基本概念から解き方まで説明する。その後、多期間の経済やビジネスなどの社会システムにおける経済成長、資産運用、市場競争などの応用問題に適用する。	隔年
	リスクマネジメント総論	リスクマネジメントとは、リスクの特定・識別、リスクの定量化・測定、リスクのアセスメント・評価とリスクのコントロールなどの一連の活動から構成されているシステムティックなプロセスのことである。本講義では、リスクマネジメントの基本概念を解説するとともに、リスクマネジメントの各段階に使われている手法やモデルなども紹介する。たとえば、大規模・複雑なシステムのリスク特定・識別に使われている階層ホログラフィックモデル法やリスクのアセスメントとコントロールに必要とするリスクフィルタリング、ランキングとマネジメント法などを紹介する。学生はこれらの手法やモデルなどを使って、各自の関心をもつリスクマネジメントの課題を挑戦する。	隔年
	ソフトコンピューティング	ビジネスにおける意思決定問題には、将来の状況に関する不確実性や状況の記述における言語の曖昧さ、データの不確実性など、従来のクリスプな方法で記述し課題解決することが困難である場合が含まれる。ソフトコンピューティング技術には、曖昧さを扱うファジィ理論やラフ集合、最適化問題の近似解法である遺伝的アルゴリズムや、パターン認識の代表的な方法であるニューラルネットワーク等が含まれる。本講義では、それらの基礎的理論について述べた後、受講生の関心に応じた関連する文献の輪読を通じて理解を深める。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	数量化手法特論	データを分析する際は、データの型に注意して適切な分析手法を選択する必要がある。本講義では、アンケート調査などで用いられるカテゴリカルデータを扱うために、いくつかの代表的な数量化手法について学ぶ。またデータの特性をよりよく把握しモデル構築を行うため、クラスター分析についても学ぶ。手法の適用例については、受講生の関心に応じて書籍や論文を取り上げ、議論することで、より深い理解をはかる。あるいは、感性情報処理をとりあげ、感性評価データの収集とその解析について経験を積み、調査と分析の一連の流れについても理解を深める。	隔年
	経営科学総論	経営における意思決定問題には、直観や経験だけでなく「科学的な意思決定方法」の活用が重要である。そこにはオペレーションズリサーチやデータ中心科学などの広範な領域から実問題へ援用されている様々な手法がある。本講義では、経営の各ファンクションで使われる様々な「科学的な意思決定方法」について学ぶ。方法論それ自身を深いレベルで理解しようとするのではなく、むしろ「科学的な意思決定方法」の概略を知り、それを問題発見や問題解決に向けて自在に駆使できる能力を修得することを目的とする。	隔年
	共分散構造分析特論	本講義では、社会科学研究で頻繁に使われる共分散構造分析について、①理論面の理解を深める、②共分散構造分析が使われている応用論文を批判的に輪読し、共分散構造分析の理解を深める、③共分散構造分析について実際のデータ解析経験を積む、のいずれかを学生の興味にあわせて選択し、これを目的として授業を行う。①に関しては、定評のある書籍や論文を使い、近年の発展についても触れる。②に関しては学生各自の専門分野における論文を選ぶ、③に関しては、共分散構造分析の使い方に関する良書を使い、地に足の着いた理解を目指す。	隔年
	調査データ解析特論	本講義では、マルチレベルモデル、カテゴリカルデータ解析、欠測データ解析について、①理論面の理解を深める、②各手法が使われている応用論文を批判的に輪読し、各手法の理解を深める、③各手法について実際のデータ解析経験を積む、のいずれかを学生の興味にあわせて選択し、これを目的として授業を行う。①に関しては、定評のある書籍や論文を使い、近年の発展についても触れる。②に関しては学生各自の専門分野における論文を選ぶ、③に関しては、各手法の使い方に関する良書を使い、地に足の着いた理解を目指す。	隔年
	プロジェクト・マネジメント論	企業は変革を成し遂げるために、各種プロジェクトを実施する。プロジェクトを確実に成功させるためには、ビジョンの明確化、計画の立案、作業の実施、状況のモニタリングとコントロールの各段階において体系化されたマネジメントプロセスを実施することが大切である。本講義では、その手法として、WBS、PERT、EVM、リスクマネジメント、品質マネジメント、見積り技法等を習得する。それらの技法は、産業分野や地域を超え標準化されたものである。	隔年
	システムデザイン論	世の中には、社会システム、経済システム、情報システムなど、物理的、概念的要素が集まることによって構成されるシステムが多く存在する。それらシステムは、人類によって設計される。良い設計を行うことにより、社会に貢献することができる。本講義では、モデル化技法と、システム設計を行うための技法について習得する。なお、良い設計を行うためには、ニーズ、要件を理解し、優れた概念モデルを作成する必要があるため、文章データから概念モデルを作成する技法についても合わせて習得する。	隔年
	情報検索特論	インターネットの発達などにより、アクセスできる情報は爆発的に増加している。この莫大な情報の中から、キーワード検索のみで必要な情報を探し出すことは困難になりつつある。このような背景のもと、同義語や類義語、シソーラスなどを用いた概念検索や、個人の検索履歴を用いた意図理解検索、世の中で良く検索されているキーワードを活用した予測検索など、高度な検索技術が開発されつつある。本講義では、これらの高度な検索技術について紹介すると共に、その要素技術および適用分野について紹介する。これらの事例を参考にすることで、情報検索のアルゴリズムについて理解する。	隔年
	知的ドキュメント管理論	氾濫するドキュメント情報を、知識とするには「必要とする情報」を漏れなく高速に閲覧できるように管理する必要がある。ドキュメントの中はテキスト情報だけでなく、図や表など様々な情報が記載されている。さらにドキュメントには、作成者や作成日、閲覧履歴など多くの属性情報が付与されている場合が多い。本講義では、これらの情報を総合的に捉え、目的に応じたドキュメントを漏れなく高速に検索できるように管理する手法について議論すると共に、その限界や問題点などについても考察する。これにより、ドキュメントを効果的に利用するための管理方法を習得する。	隔年

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	情報システム特論	情報システム科学および計算機科学及びコンピュータ・サイエンスの分野には、人工知能、データ・マイニング、自然言語処理、プログラミング言語、ソフトウェア工学、ネットワークなどがある。本講義では、知能情報システム、言語情報システム、経営情報システム、分散システム、ネットワークシステムなど、さまざまな情報システムの最新のトピックを取り上げ、最近の研究成果に関する文献講読を交えながら講義する。	隔年
	ネットワーク特論	インターネットの発展は人工知能やデータマイニング、深層学習、強化学習などの技術と共に、新しい社会インフラとしての地位を確立した。本講義では、このような背景の中、ビッグデータやクラウドサービスなど関連の最新論文を題材に、各論文の貢献について議論する。議論の目標は、論文が研究分野にもたらす貢献に留まらず、各論文の査読プロセスなどにも立ち入りながら、査読の仕方、査読への対応の仕方などについて理解する。	講義：8時間 演習：7時間 隔年
	情報マネジメント	現代の情報処理技術がWWWのような新しい価値を創出しつつある一方、迷惑メールやインターネットウイルス等のマイナス面が新たなマイナスの社会要因を作りつつある。本講義では、このような社会背景の中、問題となる各種概念および関連技術に関する論文を題材に、論文内容に関する議論を行う。議論の目標は、論文が研究分野にもたらす貢献に留まらず、各論文の査読プロセスなどにも立ち入りながら、査読の仕方、査読への対応の仕方などについて理解する。	講義：8時間 演習：7時間 隔年
	複雑システム論	流行現象、流通・取引関係、組織運営、伝染病など、人や組織に起因する社会のさまざまな関係は、複雑システムの視点から捉えることができる。これらを分析する手法として、社会ネットワーク分析や複雑ネットワーク分析がある。また、ネットワークモデルを利用したシミュレーション手法として、社会シミュレーションがある。本講義では、これらの理論的背景とモデリング手法を講義するとともに、実際の現象に対して分析を試みることを通して、複雑システムのモデル化の理論と手法を習得する。	隔年
	知能情報システム	複雑な社会や経営の問題を扱うためには、知能情報システムのモデル化が必要となる。本講義では、人工知能をベースとしたマルチエージェント技術に基づくシミュレーション&ゲーミング手法を紹介する。これはボトムアップ型のアプローチであり、ソフトウェアエージェントと人間を含むそれぞれの主体が、シンプルなゲーミング環境の下で、自律的・適応的な意思決定を通して、複雑なシステムを実験的に再現することができる。本講義ではゲーム設計を含め、グループワークを通して自律的に参加することで、知能情報システムのモデル化について理解する。	隔年
	ビジネスマネジメント輪講 I-I	春学期に開講し、ビジネス・マネジメントの領域で登場する、経営戦略・経営組織、マーケティング、会計、ファイナンスなどのコア科目、ならびに、現代の経営を高度化する上で重要となる計量分析に代表される数理学やシステム科学、情報学関連科目について、文献輪読による理解の深化をはかる。ここでは、受講生の要望に合わせて、各分野における基本的理論から先端的な理論や分析手法、事例に関する文献や著書等を輪読する。	
	ビジネスマネジメント輪講 I-II	ビジネスマネジメント輪講I-Iの履修を踏まえ、春学期に開講し、ビジネス・マネジメントの領域で登場する、経営戦略・経営組織、マーケティング、会計、ファイナンスなどのコア科目、ならびに、現代の経営を高度化する上で重要となる計量分析に代表される数理学やシステム科学、情報学関連科目について、文献輪読による理解の深化をはかる。ここでは、受講生の要望に合わせて、各分野における基本的理論から先端的な理論や分析手法、事例に関する文献や著書等を輪読する。	
	ビジネスマネジメント輪講 I-III	ビジネスマネジメント輪講I-IIの履修を踏まえ、春学期に開講し、ビジネス・マネジメントの領域で登場する、経営戦略・経営組織、マーケティング、会計、ファイナンスなどのコア科目、ならびに、現代の経営を高度化する上で重要となる計量分析に代表される数理学やシステム科学、情報学関連科目について、文献輪読による理解の深化をはかる。ここでは、受講生の要望に合わせて、各分野における基本的理論から先端的な理論や分析手法、事例に関する文献や著書等を輪読する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ビジネスマネジメント輪講 II-I	秋学期に開講し、ビジネス・マネジメントの領域で登場する、経営戦略・経営組織、マーケティング、会計、ファイナンスなどのコア科目、ならびに、現代の経営を高度化する上で重要となる計量分析に代表される数理科学やシステム科学、情報学関連科目について、文献輪読による理解の深化をはかる。ここでは、受講生の要望に合わせて、各分野における基本的理論から先端的な理論や分析手法、事例に関する文献や著書等を輪読する。	
	ビジネスマネジメント輪講 II-II	ビジネスマネジメント輪講II-Iの履修を踏まえ、秋学期に開講し、ビジネス・マネジメントの領域で登場する、経営戦略・経営組織、マーケティング、会計、ファイナンスなどのコア科目、ならびに、現代の経営を高度化する上で重要となる計量分析に代表される数理科学やシステム科学、情報学関連科目について、文献輪読による理解の深化をはかる。ここでは、受講生の要望に合わせて、各分野における基本的理論から先端的な理論や分析手法、事例に関する文献や著書等を輪読する。	
	ビジネスマネジメント輪講 II-III	ビジネスマネジメント輪講II-IIの履修を踏まえ、秋学期に開講し、ビジネス・マネジメントの領域で登場する、経営戦略・経営組織、マーケティング、会計、ファイナンスなどのコア科目、ならびに、現代の経営を高度化する上で重要となる計量分析に代表される数理科学やシステム科学、情報学関連科目について、文献輪読による理解の深化をはかる。ここでは、受講生の要望に合わせて、各分野における基本的理論から先端的な理論や分析手法、事例に関する文献や著書等を輪読する。	
	組織研究	この講義では、近年の経営組織論分野における研究を取り上げ、そこで用いられている理論および分析のための手法について検討する。経営組織論における研究では、対象とする現象が組織内の個人に焦点を当てるものから組織間のネットワークに焦点を当てるものまで多岐にわたるため、用いられる理論も多様である。また、分析のための手法も定性的アプローチ、定量的アプローチの両方を含み、様々なものが用いられている。そのため、実際の研究の詳細を見ることで、理論の理解を深めるとともに、主要な研究手法についても学ぶ。それにより、自らの研究に生かせるようにすることを目指す。	
	計量マーケティングモデル特論	本講義では、マーケティング・サイエンスの分野で登場する、統計学や計量経済学をベースとしたいくつかのモデルについて、文献講読を通して、モデルの特性とそのモデルを使用する背景、さらに最新のトピックについて検討する。とくにロジットモデルやプロビットモデルを代表とする離散選択モデルの消費者パネルデータへの適用を扱い、手法だけでなく、文献の中に登場するマーケティングの理論や概念とデータの特性まで合わせて検討することでモデル構築の素養を高める。	
	国際政治経済の概況と経営	今日のビジネス環境は国際政治経済と密接にかかわる。例えば、東アジアの国際政治情勢がインフラ投資事業に影響をもたらしたり、地球温暖化で北極の氷が溶け、新たな航路が開発されたりする。こうした背景の下、本講義では、国際政治経済の概況を理解するために必要な各種分析ツールを学習し、実証分析を行うことを試みる。特に、国際貿易、国際金融、多国籍企業による生産活動、またこうした領域における国際制度、アクター、さらにグローバリゼーションをめぐる論争について、国際政治経済学の4つの世界観（リアリズム、リベラリズム、マルクス主義、構成主義）に基づいて検討を行い、個別の現象がビジネスや国際経営にいかなる影響を及ぼし得るのかを考える。	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文社会ビジネス科学科学学術院 法曹専攻 専門職学位課程)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
法律 基本 科目 群	実定 法 基 礎 科 目	憲法Ⅰ-A〔人権〕	日本国憲法第3章所定の基本的人権規定の中でも特に自由権制約の合憲性審査の基本的作法につき、それぞれの規定の歴史的背景や学理的構造、判例による具体化のあり方等を視野に入れつつ、主に精神的自由権を中心とする部分を素材に、人権編解釈論の基本的な思考法を身につける。特に初学者に対しては、人権分野の学習法(「基本書」や判例を読む際の注意点)についても折に触れつつ指摘する。 本科目では人権総論、包括的基本権、平等原則、精神的自由権までをカバーし、授業は講義形式とする。
	憲法Ⅰ-B〔人権〕	「憲法Ⅰ-A」に引き続き憲法人権編部分の解釈論につき学んでゆくが、基本書に書いてあることや判例を「覚える」レベルの単なる続きではなく、それらを駆使し、具体的な人権制約事例をいかに解決するかという課題へと進む。 そのため、講義が基本形式となるが、教員からの情報提供を中心とする「憲法Ⅰ-A」とは異なり、事例問題演習の要素も取り入れていく。また内容的にも「憲法Ⅰ-A」で取り上げた自由権とは異なり、憲法段階では(法令による具体化を待たない)輪郭のはっきりしない、いわゆる国家制度依存的な権利をめぐる、立法裁量をどの程度尊重すべきか、立法裁量を尊重しつつも、それを統制する手法としていかなるものがあるかといった問題へと進んでいく。	
	憲法Ⅱ〔統治〕	日本国憲法のうち、第3章(基本的人権)を除く、いわゆる「三権」を中心とする部分の基礎理論を確認しつつ、具体的事例を素材としたケーススタディ方式の授業を行う。 講義を中心とするが、可能な限り受講者参加型、対話型双方向形式の授業の実施に努めつつ、日本国憲法がさだめる統治機構について考察する。 関連判例を予習課題として出すことから、事前に判例百選で事実の概要と判旨の内容を読んでおき、授業中に説明を求められたら解答できるようにしておく。 基本的に統治機構論の体系に従いレジュメに沿って進めていくが、適宜、他の憲法領域の基本知識や法学の常識となる事柄について講義の中で問うことがある。	
	行政法Ⅰ	行政法のなかでも、いわゆる“総論”を扱う。公益実現に向けた行政活動を法的に認識するための基本的な道具立て(行政処分などの行為形式や各種法制度など)の意義および判例の学習を通じて、公益と各種個別利益との調整をいかに行うべきか、その具体的諸相を知りつつ、事案の分析を各自で一定程度おこなえるようにする。 授業は講義形式で、あらかじめ配布されたレジュメに従い進行する。 1) 行政法総論の基本的なフレームの解説、およびその理解に必要な基本判例の解説に講義の重点がおかれる。 2) 抽象化された事例に学んだ知識を用いて、紛争解決に必要な法律論を展開できる。	
	行政法Ⅱ	重要(とされる)判例の学習を通じて行政救済法に関する論点を把握し、当該論点に関する議論を理解する。また、抽象化された事例に学んだ知識を用いて、紛争解決に必要な法律論を展開できることを目標とする。 本講義では、いわゆる行政救済法と呼ばれる分野、具体的には、軸となる行政事件訴訟法および国家賠償法のほかに、行政不服審査法および損失補償法が扱われる。以上の4法領域に関する事例の解説を行いながら、受講生が基礎的な知識を習得し、事案の分析を自ら一定程度おこなえるようにする。 授業は講義形式で、あらかじめ配布されたレジュメに従い進行する。 行政救済法の基本的なフレームの解説、およびその理解に必要な重要(とされる)判例の解説に講義の重点がおかれる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	民法Ⅰ〔総則・物権総論〕	<p>授業は講義形式とし、担保物権を除く物権法、および、民法総則のうち「物」ならびに時効に関する箇所を取り扱う。</p> <p>民法全体における物権法の位置付けについて理解するとともに、講義対象となる制度に関する基本的知識(特に、要件・効果・立法趣旨)を身につけることを目的とする。また、特に本講義が1年次配当の基本科目であり民事系科目の入門をなすことから、法的なものの考え方、議論・論証の仕方を、条文・判例などの素材を用いて修得できるようにする。</p>	
	民法Ⅱ〔担保物権〕	<p>授業は講義形式とし、担保とは何かを具体的な設例に基づいて解説し、理解を深めることを目的とする。具体的には、約定の典型担保、法定担保、約定の非典型担保の順序で説明し、約定の典型担保の中では担保物権の女王ともいべき抵当権に関する諸問題を判例を中心に検討する。</p> <p>次に、法定担保として、留置権と先取特権について取り上げ、最後に、非典型担保として、銀行実務において最もよく用いられている譲渡担保を取り上げた後に、仮登記担保、所有権留保を取り扱う。</p>	
	民法Ⅲ〔債権総論〕	<p>本講義の目標は、(1) 債権一般に関わる基本事項を正確に理解すると同時に、契約法・債権法の基本的な仕組み、基礎理論、諸制度を体系的に理解する。(2) 債権一般に関わる様々な判例・裁判例を正確に理解する。(3) 日常生活や取引活動の中で起こる様々な事実や紛争の中から法的問題を抽出する能力を身に付ける。債権法に関する法的ルールを使いこなす能力を身に付ける。(4) ほかの民法関連科目の授業とあわせて、民法全体の基本的な仕組みを理解する。</p> <p>授業は講義形式で、民法の講学上「債権総論」と呼ばれている部分、民法の編別で言えば、第3章・債権の第1節・総則を対象とする。債権総論に関わる事項の習得及び法的な思考能力の向上を目的としている。</p> <p>この授業では、ほかの民法関連科目、とりわけ、民法Ⅳ-1と民法Ⅳ-2との関連に留意しつつ、債権の種類や効力、債権回収等の場面で生ずる問題を中心に説明を行う。</p>	
	民法Ⅳ-1〔契約法〕	<p>本講義の目標は、(1) 契約法の基本的な仕組み、基礎理論、諸制度を体系的に理解する。(2) 契約に関わる様々な判例・裁判例を正確に理解する。(3) 日常生活や取引活動の中で起こる様々な事実や紛争の中から法的問題を抽出する能力を身に付ける。契約法に関する法的ルールを使いこなす能力を身に付ける。(4) ほかの民法関連科目の授業とあわせて、民法全体の基本的な仕組みを理解する。</p> <p>民法Ⅳ-2とともに、契約法に関する基本的な理解を確立すること、また、法的な思考能力を向上させることを目指して、契約に関わる民法上のルールを中心に説明する。この授業では、契約の成立と内容の局面で生ずる問題を中心に、民法総則、契約総論上のルールを扱う。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	民法Ⅳ-2〔契約法〕	<p>本講義の目標は、(1) 契約法の基本的な仕組み、基礎理論、諸制度を体系的に理解する。(2) 契約に関わる様々な判例・裁判例を正確に理解する。(3) 日常生活や取引活動の中で起こる様々な事実や紛争の中から法的問題を抽出する能力を身に付ける。契約法に関する法的ルールを使いこなす能力を身に付ける。(4) ほかの民法関連科目の授業とあわせて、民法全体の基本的な仕組みを理解する。</p> <p>民法Ⅳ-1とともに、契約法に関する基本的な理解を確立すること、また、法的な思考能力を向上させることを目指して、契約に関わる民法上のルールを中心に説明する。この授業では、契約の効力と不履行の局面、各契約類型で生ずる問題を中心に、契約総論及び各論上のルールを扱う。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	民法Ⅴ〔不法行為・不当利得法〕	<p>本講義の目標は、(1) 事務管理・不当利得・不法行為に関する基本的な知識を修得する。(2) 具体的な不法行為事案に対して判例がどのようにして条文を解釈・適用しているのかを理解する。</p> <p>講義では、債権各論のうち、事務管理・不当利得・不法行為について講じる。この分野は条文数は少ないが、特に不法行為について民法典起草後の発展には目ざましいものがあり、この分野を理解するためには条文の文言を理解するのみでは足りない面がある。そこで、条文から要件・効果を引き出すことと並んで、民法典起草後の学説の展開ならびに適用領域の拡大を具体的事例に即して検討することも行いたい。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	民法Ⅵ〔家族法〕	<p>本講義では、親族法、相続法の基本的概念、要件、効果を理解するとともに、実際の実務で、どのように処理されているのかを理解し、主要な裁判例を通して、解釈上の問題点を把握する。親族法、相続法の考え方を身に付けることにより、新しい問題にも応用できる力を身に付ける。</p> <p>民法第4編親族法、第5編相続法全般を対象とし、親族法、相続法の基本的考え方、制度趣旨、個々の条文の趣旨を、主要な裁判例を通して学修する。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	商法Ⅰ〔企業組織法〕	<p>本講義では、受講生が、会社総論、株主の権利義務、株式会社の機関、株式会社の設立に関する会社法の規律について趣旨・要件・効果等を的確に理解するとともに、関連する重要論点について判例・学説の状況を整理・把握し、法的思考力を涵養することを目標とする。</p> <p>講義形式の授業内容は、会社法が株式会社の株主の権利義務と機関および設立について定める各種規律について、関連する重要論点を中心に検討を加える。</p>	
	商法Ⅱ〔企業法総論・企業活動法〕	<p>本講義では、受講生が、授業概要に示した項目に係る会社法等の規律について趣旨・要件・効果等を的確に理解するとともに、関連する重要論点について判例・学説の状況を整理・把握し、法的思考力を涵養することを目標とする。</p> <p>講義形式の授業内容は、会社法に関する事項として、株式譲渡の自由と制限、自己株式取得に関する規律、子会社による親会社株式の取得の禁止、株式分割・株式無償割当て・株式併合・単元株式制度・株式消却、特別支配株主の株式等売渡請求制度、募集株式の発行等・新株予約権の発行、剰余金処分規制、事業譲渡および組織再編・解散、持分会社を扱い、商法総則・商行為法・手形法・小切手法に関する事項として、商人、商業登記、商号、商業使用人・代理商、商行為、手形・小切手の意義と原因関係、約束手形の振出、手形の流通等を扱うこととし、関連する重要論点を中心に検討を加える。</p>	
	民事訴訟法Ⅰ	<p>民事紛争の公権的解決手段を定める民事訴訟法の判決手続全般について講義する。民事訴訟の制度的な仕組みを概観したうえで、その手続の基本原則や構造について、それぞれの適用事例を示しながら講義の中で解説する。</p> <p>第1に、民事訴訟法の基礎を学んでもらうこと、第2に、2年次以降に予定されている民事訴訟実務の基礎、民事法演習の受講に必要な技術的知識を獲得することが目標である。</p> <p>この科目で、全国統一教育基準であるコア・カリキュラムの民事訴訟法部分については一通り扱う予定であるが、実際の項目との対応関係については、順番が異なり煩雑になるので、別途冊子を配布し、そこで具体的な項目の対応関係も示すので、授業の予習・復習教材として扱う。</p>	
	刑法Ⅰ〔総論〕	<p>本講義では、刑法の基礎理論及び刑法総論についての基礎知識の修得と体系的理解を図る。また、関連判例の検討を通じて、事実在即した具体的な問題解決に必要な法的分析能力や議論能力の前提となる、基礎的能力を育成する。</p> <p>刑法総論の基本論点における最新の重要判例・学説に関する知識・理解を正確に身に付けた上で、時として抽象的であるこれらの議論がいかにか現実の問題解決のために寄与しているのかを具体的な事例の学修を通じて理解して貰うことを目標とする。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	刑法Ⅱ〔各論〕	<p>本講義では、刑法各論についての基礎知識の修得と体系的理解を図る。また、関連判例の検討を通じて、事実在即した具体的な問題解決に必要な法的分析能力や議論能力の前提となる、基礎的能力を育成する。</p> <p>刑法各論の基本論点における最新の重要判例・学説に関する知識・理解を正確に身に付けた上で、時として抽象的であるこれらの議論がいかにか現実の問題解決のために寄与しているのかを具体的な事例の学修を通じて理解して貰うことを目標とする。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	刑事訴訟法Ⅰ	<p>本講義では、刑事訴訟法(学)における重要な概念および主要な論点について、つねに刑事手続の全体に目を配りながら説明することで、また、判例・裁判例をとり上げながら具体的に検討することで、刑事訴訟法に関する基本の知識・理論を修得する。</p> <p>刑事訴訟法(学)における重要な概念および主要な論点について、つねに刑事手続の全体に目を配りながら説明することで、また、判例・裁判例をとり上げながら具体的に検討することで、刑事訴訟法に関する基本の知識・理論を修得してもらう。</p> <p>本講義の到達目標は、「コア・カリキュラム(共通的な到達目標モデル(第二次案修正案))：刑事訴訟法」に示された項目に関する知見を得ることにある。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	基礎ゼミⅠ	<p>本演習では、初学者を念頭に、民法について、今後の学修方法の方向性を把握してもらうことを目指し、民法の重要論点を含む事例問題を題材に用いる。</p> <p>特に、法的議論の進め方の特徴を概括的にでも理解すること、基本書や判例を読む際の注意点、使用方法に留意する。以上により、法医学修の最初期に学修の骨格部分を固め、以降の学修に臨む態勢を整える。</p> <p>「物権変動」及び「意思表示の瑕疵(強迫・表見代理、詐欺取消)」について、各5回の授業のうち、それぞれ第1回は当該問題のために必要な論点・基礎知識について解説する。それを踏まえて、残りの各4回は実践的な解説を行う。</p> <p>具体的事案に一般的抽象的な法規範を解釈、適用して事案の解決を導く、という法的議論の進め方を、事実認定⇒法解釈⇒法適用、条文⇒趣旨⇒要件定立⇒あてはめ、というかたちで、受講者と一緒に実際に行う。</p>	
	基礎ゼミⅡ	<p>本演習では、初学者を念頭に、憲法、刑法について、今後の学修方法の方向性を把握してもらうことを目指し、各科目の重要論点を含む事例問題を題材に用いる。</p> <p>特に、法的議論の進め方の特徴を概括的にでも理解すること、基本書や判例を読む際の注意点、使用方法に留意する。以上により、法医学修の最初期に学修の骨格部分を固め、以降の学修に臨む態勢を整える。</p> <p>憲法、刑法、各5回の授業のうち、それぞれ第1回は研究者教員が当該問題のために必要な論点・基礎知識について解説する。それを踏まえて、残りの各4回は実務家教員が実践的な解説を行う。</p> <p>具体的事案に一般的抽象的な法規範を解釈、適用して事案の解決を導く、という法的議論の進め方を、事実認定⇒法解釈⇒法適用、条文⇒趣旨⇒要件定立⇒あてはめ、というかたちで、受講者と一緒に実際に行う。</p>	
	基礎ゼミⅢ	<p>本演習では、民事訴訟法及び刑事訴訟法の特徴を概括的に理解し、今後の学修方法の方向性を把握してもらうことを目指す。</p> <p>各法分野の重要論点を含む事例問題を題材に用いて、条文や基本書、判例を読む際の初歩的な注意点、使用方法に留意しつつ解説するとともに、法的議論の組立て方を演習において概説する。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(40 笹川豪介/5回) 民事訴訟法の基礎、論点・基礎知識の解説。法的議論の進め方、答案作成のために必要な論点の分析、答案の作成。作成された答案を使用した解説・分析。</p> <p>(44 谷口琢哉/5回) 論点及び基礎知識の解説、受講者による答案の作成。作成された答案を使用した解説。</p>	オムニバス方式
実定法発展科目	憲法Ⅲ〔憲法訴訟〕	<p>本演習では、最高裁判例を主たる素材として、憲法訴訟論につき理解を深める。</p> <p>法学未修者については1年次に、また法学既修者については当法科大学院入学前に、憲法(特に人権部分)に関する概論的知識の「インプット」段階の学修を一応一巡していることを前提として、具体的事案(判例または架空事案)を素材としながら、憲法訴訟論上の諸論点について取り上げる。</p> <p>授業は演習形式となるが、各単元の授業に先立ち、検討対象判例、例題その他質問事項をかかげた授業案内レジュメを配布する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	行政法Ⅲ	<p>行政法ⅠおよびⅡで学んだ知識を踏まえて、個別行政法の理解を深めながら、事案に即した紛争解決のあり方を理解する。</p> <p>この授業は演習形式により、あらかじめ提示されたケース問題に含まれる行政法総論および行政救済法上の論点を析出し、柔軟性のある法的解決に向けた議論をおこない、もって、行政法に関する受講生の理解がより深まることを目指す。</p> <p>事例問題を解きながら、関連する知識の確認を行いつつ、紛争解決のあり方を多面的に議論する。</p>	
	民法Ⅶ	<p>民法(財産法)の主要な論点について、具体的な事例及びこれに関する設問を提示し、授業では設問及びこれに関連した質問に対する答えを求める。授業は演習形式とする。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(9 直井義典/5回) 1年次に学習した民法総則ならびに債権総論に関する知識を確認し、判例等にあらわれた具体的な事案に対してそれらの知識がどのように応用されるのかを検討・議論することを通じて、自己の見解を論理的に展開する能力を養う。</p> <p>(42 志賀剛一/5回) 債権各論及び担保法に関する分野において、具体的な事例ないし設問において何が問われているのかを的確に分析し、問題点を抽出し、問題点の解決においてどのような考え方を採ることができるのか、多様な側面からのアプローチを試み、その中から最も望ましいと思われる考え方を論理的に展開する力を養う。</p>	オムニバス方式
	商法Ⅲ	<p>本演習では、会社法(場合によっては、及び手形法・小切手法)の重要問題または各種論点につき、その意義、内容、関連性を正確に理解し、各種論点の対立点、会社法の特徴、今日的課題を正しく把握することを目的とする。</p> <p>事前に各授業日に行う内容に関する演習問題を指定する。受講者がこれら並びに関連する(受講者自らが検索し、発見した)文献及び判例等を予習し、ソクラテスメソッド形式の質疑応答を行う。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(15 弥永真生/5回) 会社の計算・監査・株主総会・新株予約権の発行、取締役会・取締役の責任及び株式交換、取締役会・株主総会及び利益相反取引、株主総会・利益相反取引となる自己株式の処分に関する演習問題についての質疑応答</p> <p>(20 石井文晃/5回) 会社法総論及び株式会社と持分会社、募集株式の発行等、事業譲渡及び会社分割、企業買収と取締役の責任、組織再編に関する演習問題についての質疑応答</p>	オムニバス方式
	民事訴訟法Ⅱ	<p>民事訴訟法の主要な概念や原則の解釈について、具体的事例を通じて判例、学説などを分析し、理解することをねらいとする。</p> <p>授業は演習形式とし、民事訴訟法の主要な概念や問題点について、受講生が事前に配布された資料を基に予習し、双方向の授業での討論に積極的に参加すること等によって、具体的事例を分析して法律実務家として必要な法的思考力や実務処理能力を養いつつ、その概念や問題点についての理解を深め、体得できるようになることを到達目標とする。</p>	
	刑法Ⅲ	<p>理論的・実務的に重要であり、刑法全体の総合的・体系的理解を必要とする刑法総論と刑法各論の重要トピックを選び、本演習ではソクラテスメソッド形式による授業を通じて、これらに集中的な検討を加える。</p> <p>受講者が、問題の所在、最新の学説および判例の状況を正確に把握した上で、実務的思考も重視しながらも論理的思考力を身に付け得るように、事例問題を通じて、総論および各論の基礎知識を見直し、それに基づき応用力を発展させるような演習とする。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(12 渡邊卓也/5回) 実行行為論、違法性論/違法阻却論/自殺関与罪、共犯論2(狭義の共犯/共犯の諸問題)、強盗罪/強盗殺人罪、領罪/背任罪</p> <p>(56 山田勝彦/5回) 因果関係論/暴行・傷害罪、共犯論1(正犯論/広義の共犯/共同正犯の諸問題)、財産犯論・窃盗罪、詐欺罪、放火罪/国家社会公益に対する罪</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	刑事訴訟法Ⅱ	<p>「刑事訴訟法Ⅰ」で得られた基本の知識・理解をもとに、刑事訴訟法の重要論点をとり上げて検討することで、刑事訴訟法に関する知識・理解を深化させるとともに、法的な思考力・分析力を高める。</p> <p>授業のねらいは、架空の事例あるいは判例の事案を用いた論点の検討によって、ポイントとなる事実関係を的確に把握すること、法の解釈に慣熟すること、そして、法のあてはめを具体的に会得することにある。</p> <p>授業は演習形式だが、前提となる知識・理解を簡単に確認してから法解釈・法適用の妥当性について検討するというながれで演習形式により授業をすすめる。</p>	
	憲法総合演習	<p>憲法の具体的事案について、これまで学んできた基本的理解を用いて、適切な解決策を論理一貫した文章で構成する実践的応用力を身につけることを目標にする。</p> <p>より具体的には、当該事例において最も重要な憲法問題を的確に発見でき、その問題について各当事者の観点から首尾一貫した根拠ある主張を構成でき、そして第三者的観点から適切な解決策を論じられる力を身につけることである。</p> <p>最終学年の科目であるため、実践的応用力の到達すべき点を意識して議論を展開することになる。</p> <p>事例問題を素材に、事例における憲法問題の発見・絞り込みや、それについての各当事者の観点からの憲法論の展開などを検討する実践的演習を行う。</p>	
	行政法総合演習	<p>行政法分野における総合的な問題について発展的な演習を行う。とりわけ、これまで学修してきた基本事項相互のつながりを重視し、かつ、行政法の基本的知識を具体的な事案において活用できるようになることを目指し、もって、行政法全体の体系的総合的な理解を図る。</p> <p>本演習の中で、裁判例を基礎とした問題を検討し、実際に書いてみることを通じ、獲得した知識を短時間のうちに構成し文章化する訓練を行う。毎回答案を作成し、課題を検討していただくことが求められる。</p>	
	民法総合演習	<p>本演習では、民法Ⅰ～民法Ⅶで修得した基礎知識の理解を進化させ応用力を養うべく、具体的事例を用いながら双方向的・多方向的議論を行う。</p> <p>指定分野に関する事例問題に関連する問題点についての、受講者と教員との質疑応答ならびに受講者間での議論を中心として進行する。</p> <p>受講者は事例問題に関連する論点をみずから復習した上で演習に臨むことが求められる。なお、事例に関連すると判断される場合には、授業計画では「民法総則」と記載されていても総則以外の論点について質問することは当然である。事例問題で直接に問われた論点以外の論点に関する幅の広い準備を要する。</p>	
	商法総合演習	<p>商法Ⅰ～商法Ⅲで修得した基礎知識を基に、本演習ではその理解を深化させ、かつ具体的事案を解決する能力や論文を作成する能力を養うことを目標とする。</p> <p>受講者は予め配布する事例問題を、参考文献等を見ずに分析・検討しまず起案する。事例問題は実務に即した問題であり、これは十分な猶予期間をもって配布する。</p> <p>その後文献を調査するなどして事例問題を各自十分に研究し、教室での議論の準備をする。また毎週、基礎的な事項を確認する小テストを実施する予定である。</p> <p>以上により、基礎力を確認し、事案分析能力と法律文書起案能力を養う。</p>	
	民事訴訟法総合演習	<p>民事訴訟法Ⅰ、Ⅱで修得した基礎知識を基に、本演習ではその理解を進化させ、事案の分析力、文章表現能力等を養う。</p> <p>比較的簡易な事例の演習問題を利用して、1) 出題ポイントの事前説明、2) 起案、3) 翌週に起案講評というスリーステップ方式を採用し、無理なく段階的に事案の分析力と論点の論述能力を涵養できるように実施する。</p> <p>また、レジュメとして民事訴訟法総合演習用サブノートを配布し、講評時にこれを利用して、基礎知識と重要論点の確認、定着を図る。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	民法法総合演習	<p>民法等の実体法及び民事手続法(民事訴訟法を中心とする。)の実践的、発展的理解を深めることを目標とする。</p> <p>民法等の実体法に定める法規の概念と民事訴訟法の基本原則等を修得していることを前提として、具体的な事例に基づき、その事例に含まれる民法上の問題点や当事者の請求権を実現するための手続法上の問題点等について、主に学生の起案、発表及び討論を契機とする演習形式で授業を展開する。</p> <p>学修効果を上げるために必要な場合は、担当教員が共同して授業に参加する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(4 松家元/10回) 民法分野の即日起案、前週起案についての講評・討論 (6 姫野博昭/5回) 民事訴訟法分野の即日起案、前週起案についての講評・討論</p>	オムニバス方式
	刑法総合演習 I	<p>本演習では、刑法総論・各論に関する基本的な知識・理解を土台として、最新の議論状況を踏まえた(時として複雑な)事案を題材として、個々の論点の内容を再確認した上で、事実関係の抽出や複数の論点がある場合の重点配分などの実践的な問題分析力・答案構成力の修得を目標とする。</p> <p>「刑法I」、「刑法II」等の講義科目における刑法理論についての十分な理解を前提として、そのなかでも理論的・実務的に特に重要と思われる刑法上の論点について、本演習でより深く検討する。</p>	
	刑法総合演習 II	<p>本演習では、刑法解釈上の重要論点につき、最新の判例・学説を踏まえた理解を確認しつつ、事例の分析・重要な事実を選別し、当てはめるという基本的かつ実践的な手法を示して答案等を実現することを旨とする。</p> <p>「刑法I」、「刑法II」等を履修した学生が、刑法総論及び各論における基本的知識の有機的な理解を確認し、具体的な事例を通じて適切な法的解釈、事実認定の視点を導く能力を身につけ、最終的には司法試験の論文式試験問題レベルに対応しうるだけの分析力・答案構成力及び答案の書き方を本演習において修得する。</p>	
	刑事訴訟法総合演習	<p>本演習では、「刑事訴訟法」及び「刑事法総合」を履修した学生が、具体的な事案を題材として、そこに含まれる問題点について検討することを通じて、刑法及び刑事訴訟法の知識を深化させるとともに、柔軟な思考力を涵養し、複雑困難な問題に直面してもこれを解決できるだけの能力を獲得することを目標とする。</p> <p>受講者は、本演習において具体的な事案を題材に討論を行い、刑事訴訟法の基礎的学識を深化させるとともに応用力のきく柔軟な思考力を涵養し、問題解決能力を獲得する。</p>	
法律実務基礎科目群	法曹実務基礎	<p>法曹実務家に求められる基礎的な法的素養を習得することを到達目標とする。そのために、法令・判例・文献をリサーチするために必要なツールを知り、その特徴を理解し、効率良くリサーチできる力を身につけることを目標とする。また、事例問題を前にして基本的な分析力・起案力を得ることを目標とする。</p> <p>授業は講義形式で、法情報リサーチを法令・判例・文献にわけ、例題をもとに用途別にデータベースと資料を使用しながらリサーチ方法を説明する。その後、法律学の基礎につき講義し、最後に、実際に起案をして頂き採点講評を行う。以上を通して法律文書(答案)の起案の作法について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(53 藤井康子/4回) 情報倫理及び法令について/判例検索について (4 松家元/2回) 法律の学び方 (30 大野浩之/4回) 法律文書の起案・講評</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	法曹倫理 I	<p>法曹倫理は専門職責任 (professional responsibility) と呼ばれ、法曹が市民から期待される高度の学識と技能を持つプロフェッション (profession) として当然に身に付けていなければならない職業倫理である。弁護士法1条2項に基づく誠実義務を中心に論ずるが、法曹倫理は日常的な法律事務において問題となるので、法律家が直面する具体的な法律問題の処理・解決を通じて学び、習得させる。</p> <p>授業は講義形式で、事前に配付する問題と資料に基づいて、討論をしながら、弁護士が直面する倫理上の問題に触れる、気付く、対処することを意識させ、もって、弁護士として身につけていなければならない高い職業倫理を修得させる。</p>	
	法曹倫理 II	<p>法曹として実務に携わるためには、現代社会における使命を自覚し、責任感と高い職業倫理を身につけることが必要不可欠である。</p> <p>この授業では、裁判官・検察官が講師となり、講義形式で具体的な事例を検討しながら、法曹実務家としての責任、職業倫理を学ぶ。</p> <p>(オムニバス形式/全10回)</p> <p>(59 派遣裁判官) /5回) 裁判官倫理の構造、裁判所の組織、裁判官制度/司法権の独立・裁判官の独立(1)/司法権の独立・裁判官の独立(2)/裁判官と個人活動/総合事例研究</p> <p>(60 派遣検察官) /5回) 検察官の職務1/検察官の職務2、検察制度の概要、検察官倫理の基本的な考え方/検察官同一性の原則と検察官の独立性、検察官の客観義務(公益の代表者)/検察官の取調べ、検察官の訴追裁量、被害者保護/検察官の公正・中立性、廉潔性、被疑者の更生</p>	オムニバス方式
法務展開科目	民事訴訟実務の基礎 I	<p>本演習では、典型的な民事訴訟事件の記録と同記録について司法研修所が作成したビデオを視聴しながら、事件の相談、訴訟の準備、保全、訴えの提起、訴訟の審理、判決、上訴さらには執行に至る民事訴訟実務における手続の基礎を学修する。</p> <p>また、具体的な事案をもとに事実関係の調査・把握、法的構成の仕方などを体験することによって、民事訴訟を動的にかつ立体的に捉えることを学修する。民事訴訟実務の流れの中で、民事訴訟法の重要論点も復習し、理論と実務の架橋を意識して、民事訴訟法理論が実務でいかに反映されているかを具体的に理解する。</p>	
	刑事訴訟実務の基礎 I	<p>本演習では、刑事訴訟法を履修した者に対し、参考記録を使用して、主に刑事公判手続を中心に、重要な問題を取り上げ、法曹三者の役割を理解させるとともに、刑事手続全体を把握させ、刑事実務の基本的事項に関する手続遂行能力、実体形成能力を獲得させることを目標とする。</p> <p>参考記録についてビデオを視聴しながら刑事訴訟法及び刑事訴訟規則について説明をした上で、刑事裁判の実務における重要な問題点を取り上げ、問答形式を主体として授業を行う。また、刑事訴訟法の重要な論点について起案もしながら理解の深化をはかる。</p>	
	要件事実論 I	<p>実体法上の法律効果を発生させる実体法上の法律要件に該当する具体的な事実(要件事実)については、個々の事案において具体的にどこまで主張・立証すれば足りるのかについて、実体法及び手続法の基本的な理論教育だけでは十分に理解することは難しい。</p> <p>そこで、従来から司法研修所等において研究され、判例理論においても定着した要件事実論を修得して、個々の紛争類型ごとに分析する法的な実務処理能力を身につけることが必要となる。</p> <p>本演習では、個々の基本的な紛争類型における要件事実の構造(請求原因・抗弁・再抗弁等)について説明し、この科目の応用発展科目である「要件事実論II」の授業のための基本的な知識を修得することを到達目標とする。</p>	
	要件事実論 II	<p>授業は演習形式により、次のような授業計画及び目標で行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 要件事実論 I で養った知識を、事案を通して活用し、要件事実論を使いこなすことのできるスキルを身に付ける。 2) 要件事実論は、民法を代表とする実体私法を裁判規範に引き直す作業を含むのであるから、要件事実論は、まさに民法の解釈そのものであり、よって、要件事実的思考を涵養することにより、併せて実体法である民法の理解を深めることも目指す。 3) 要件事実論の魅力、おもしろさ、緻密さを感じ、要件事実と親しくなることも目標とする。 	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	民事訴訟実務の基礎Ⅱ	<p>本演習は、判決効、複雑訴訟、当事者の変更等の知識を再確認すると共に、対抗要件や登記手続請求権をよりよく理解するためにも有用な不動産登記の実務等についての一通りの知識を獲得することを目標とする。</p> <p>演習では、苦手意識を持つ者が少ない判決効や複雑訴訟・当事者変更をめぐる諸問題について、実務的視点から光を当てながら基礎理論を再確認するとともに、その理解を深める。また、通常民事事件を扱うにあたって必要不可欠な不動産登記及び不動産登記訴訟実務の基礎知識を学ぶことにより、実践的な実務知識を身に付ける。</p>	
	刑事訴訟実務の基礎Ⅱ	<p>本演習は、具体的な事例に即した問題発見能力、事実認定の基礎的な能力、刑事法の解釈・適用能力、刑事訴訟を運用する基礎的な能力を涵養することを目標とする。</p> <p>刑法、刑事訴訟法の基本的な理解がされていることを前提として、事例問題や記録教材を用い、刑法、刑事訴訟法の理論が、実務においてどのように運用されているかを学習し、刑事手続全般についての理解を深め、刑事実務の基礎的な知識を習得する。</p> <p>本演習科目は、兼任教員となる派遣検察官が担当する。</p>	
法務臨床科目	民事模擬裁判	<p>本演習は、民事訴訟実務の基礎を修得した者を対象とし、学生自らが裁判官・当事者代理人として、民事模擬裁判、すなわち、争点整理手続での口頭議論、訴訟代理人による口頭弁論や人証への尋問、裁判官による交互尋問の進め方や補充尋問・介入尋問、異議の処理などの訴訟指揮、判決の基礎となる事実認定等を行うなどして、民事訴訟法・同規則が裁判実務において実際にどのように運用されるのかを体験する。</p> <p>これにより、民事訴訟手続についての理解を深めることを目的とする。</p>	集中共同
	刑事模擬裁判	<p>本演習は、刑事法の基礎を習得した者を対象に、模擬裁判を実施してその各段階に必要なとなる文書の起案を実際にして、その起案について講評して刑事裁判において必要とされる法律文書の作成に関する基礎的な知識を修得する。</p> <p>模擬裁判を経験しつつ、その各段階で必要となる文書の内主要な文書を起案し、さらには証人尋問の準備と尋問等を受講者が実際に体験する。</p> <p>これにより、初歩的な刑事裁判実務に対応できる能力を獲得することを到達目標とする。</p>	集中共同
	ロイヤリングⅠ	<p>本演習の内容は、刑事事件の事件受任から終了までの一連の流れを基本的な事件を中心に説明し、議論することを通じて基本的技能を修得することを目的とする。</p> <p>演習では、特定の刑事事件を題材として、被疑者段階の刑事弁護活動を中心に、時々刻々変転する受任から公判準備に至るまでの刑事手続の流れの中で、被疑者(被告人)との模擬接見等に基づき、事案の把握・問題点の拾い出しをしつつ、弁護方針を決定することを学び、もって、法律家として必要とされる聴き取り能力、問題点を発見する能力、問題点を処理・解決する能力を養うとともに、刑事手続全体の中で被疑者弁護活動及び公判準備の位置づけを理解することができるようにする。</p>	
	ロイヤリングⅡ	<p>本演習は、具体的な紛争事例を素材とし、民事事件の代理人弁護士として、依頼者からの事情聴取にはじまり、事案の分析から、法理論や判例の調査・検討、解決手段の選択、結果の実現までの過程をその一連のプロセスに即して、討議及びリサーチペーパーの作成などの方法により、総合的かつ多面的に検討(学修)する。</p> <p>これにより、法を用いて問題を解決する弁護士の思考方法・行動様式について、基本的な理解を得ることを目的とする。</p>	
	リーガルクリニック	<p>法律事務所において事件処理を実地に見聞することにより、弁護士という職業に対する具体的なイメージを形成するとともに、守秘義務・利益相反禁止など職務上の義務を理解し、また、現実生起している事件に即して法理論の実践的な活用場面を経験し、事情聴取、文書起案、交渉、調査などのスキルについて基本的な視点を獲得する。</p> <p>本演習は、原則として、学生2人を1チームとし、法律事務所(学内・学外)において実際の事件処理に立会う。これにより、事情聴取、文書起案、交渉、調査などで必要とされる基本的な視点や技能に関する理解を得ることを目的とする。</p>	集中共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎法学・隣接科目群	法哲学	<p>法哲学(法理学)とは、法と法学の諸問題を根本的なレベルにまで遡って検討する学問である。従ってそれが取り扱う領域は法学全般に及びうるが、通常は総論的部分として次の三つの部分に大別されることが多く、その区分が便利である。</p> <p>1) 法概念(法・義務・権利など)の分析 2) 法的議論(推論)の方法 3) 価値論(特に正義論)</p> <p>本講義では、前半で1)、後半で3)の問題を主として取り上げ、2)の問題には授業で付随的に触れることとする。</p> <p>授業を通じて、法体系を一層広い総合的な視野の下で見る視点を持ち、法解釈のさまざまな場における応用に役立てられるようにする。</p>	
	英米法	<p>英米法の歴史、英米法系の司法制度といった総論的部分と、特定の法分野について考察する各論的部分とを組み合わせ、英米法に関する幅広い基礎知識の修得を目指す。</p> <p>憲法・差別禁止法の分野に関する合衆国最高裁判所およびいくつかの州最高裁判所の重要な判例を取り上げ、現代アメリカ社会における司法の役割の実態について学修する。</p> <p>最先端の動きを学ぶことで、アメリカの法制度を概観するとともに、アメリカ社会で「法」が果たしている機能について幅広い理解を得ることを目標とする。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	EU法	<p>2009年12月発効のリスボン条約で大幅に改正された欧州連合(EU)法に関する概説である。</p> <p>また、EU法の最近の動きを紹介・議論することを通して、新しい問題に関する討論能力を養成することも目標の一つである。</p> <p>授業において扱う「EU法と国内法」は、国内法の各分野(憲法、私法、刑法の順)からEU法を説明する。憲法・民法などは日本法科目でもあるため、馴染みやすい。</p> <p>「EU運営方法条約の最も重要な条文」では、EU法の各領域を扱う。その際、実務における最も重要なところを集中的に説明する。輸入数量制限禁止、EU裁判所の地位などの問題を扱う。</p> <p>2016年1月に「法学学習戦略」を発表したことを受けて、法学に関する効率の良い学修方法も、話題とすることがある。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	法史学	<p>古代ローマ法学を淵源として発展してきた「ヨーロッパ普通法学」の屋台骨となる基礎的な概念が過去の各段階でもった意味を確認し、この概念が現代法と確かにつながって有機的体系を構築していることに気づくことから出発して、最終的に法解釈学の基層にある「所有」や「占有」等の概念の意味を的確に語れるようになり、西洋法の伝統を踏まえた、歴史的な説得力を持った法律文書を作成する力を獲得する。</p> <p>講義形式の授業において、法解釈学の前提となるローマ法の基本枠組を紹介し、「売買」、「原因」、「寄託」等の概念を選んでその意味を「現代法」と応答しながら検討する。古代ローマ法学や近代法学において、これらの概念がどのように機能したかの紹介を通し、「西洋法」の奥底に佇む、あまりにも基礎的であるが故に難解な「コモンセンス」をできる限り純化して提示し、「所有権取得」等に関わる解釈技術をステップアップする手助けをしたい。</p>	
	公共政策	<p>行政による公共政策の立案・実施の過程を、具体的な事例を取り上げながら講義を行う。</p> <p>公共政策とは、公共的な問題を解決する基本的な方向性と具体的な手段である。公共政策学は、大別すると、政策決定や実施・評価という政策過程に関する知識(ofの知識)と、政策分析に必要な知識や個別政策領域に関する知識(inの知識)によって構成される。</p> <p>この講義では、前者の政策過程論(ofの知識)に重点を置き、公共政策学、公共政策とは何かに始まり、アジェンダ設定、政策問題の構造化、公共政策の手段、規範的判断など、公共政策のデザインに関する基礎知識、そして政策決定と合理性、利益・制度・アイデアとの関係、公共政策の評価を含めた、公共政策の決定に関する基礎知識を整理し、それらを理解することを目標とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	立法学	<p>本講義では、法令の構造や立法形式を理解して法令の読解力を高めるとともに、将来、自治体法務・企業法務等に関わる中で法令や規約類を立案することとなった場合や法律家として立法運動に関与することとなった場合等に資するよう、立法の基本概念や基本技術を身に付ける。</p> <p>講義の中で、多くの立法例を参照しながら法令の基本構造や構成要素について解説し、とりわけ複雑な条文の読解法を具体的に伝授するとともに、法文立案のための基本的事項を教授しつつ、教材を提示して実際に立案も行う。</p>		
	刑事政策	<p>犯罪の防止に向けたさまざまな施策の俯瞰ならびに施策のあり方に関する検討の視点を獲得する。</p> <p>講義では、刑事政策の問題として論じられることがらのうち、特に、次のテーマに関する基本の知識・理論を修得することが目的となる。</p> <p>いずれについても、法曹実務に結びついた知識・考え方の提供に軸足を置いて講義する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 犯罪の意義と数量的把握 2) 犯罪の抑止を目的とした措置(刑罰その他)：その意義と実現の過程 3) 犯罪者の処遇 4) 刑事立法：近時の動向とあり方 5) 各種の犯罪とその対策 		
展開・先端科目群	展開・先端科目	知的財産法	<p>本講義は、財産的価値を有する情報(情報財)を保護の客体とする法体系である知的財産法について、その全体像についての基本的理解を得るとともに、知的財産法体系を構成する特許法及び著作権法についての基本構造と重要項目についての理論的知識を得る。</p> <p>そのうえで、特許法及び著作権法についての裁判例・関連文献を素材に具体的な事案に即して思考する訓練を行うことで、特許法及び著作権法関連事件に係る応用展開能力の基礎を身に着けることを目的とする。</p> <p>講義の中では、特許法、著作権法を柱に、重要項目を中心に検討を行う。</p>	
		倒産法	<p>倒産法分野は「法律問題のるつぼ」と称されるように、倒産法のほか、それ以外の多様な分野の法的知識が求められる場面であり、倒産処理に携わることで法曹実務家としても総合力を高めることができる。</p> <p>本授業では、破産・民事再生・会社更生等の各種倒産手続における実務経験を踏まえ、できる限り具体的事例に即して講義する。</p> <p>また、民事基本法である民法、民事訴訟法、民事執行法等との関わりも意識しつつ授業を進め、受講生には相互理解を深めてもらう。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
		国際取引法	<p>本講義を通じてtransnationalな取引・事業活動に関わる様々な諸問題に対して、適法かつ有効にこれらの問題を解決し、適切なリーガル・サービスやリーガル・プランニングを提供し得る基礎的能力を養成することを目指す。</p> <p>講義では、物品、資金、役務、知的財産に関わる国際取引(合弁等の国際企業活動を含む)に関する法領域を扱う。国際企業活動の枠組み、国際物品売買、製造物責任の国際的側面、国際企業進出、販売店と代理店、国際合弁事業、国際企業買収、国際取引と紛争解決などについての法理とケースを検討することにより国際取引法の全体構造を学ぶ。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
		国際私法	<p>本講義では、国際私法判百選に掲載された事件の判決・決定等を、百選に付帯された研究者による解説を参照することなく十分に理解できるレベルを目標とする。</p> <p>渉外的要素のある法律関係について、その法律関係に適用すべき法律の決定基準(国際私法)と裁判手続で法律関係が判断される場合の権限のある国・機関に関する基準(国際民事訴訟法)を学ぶ。</p> <p>授業前には教科書の指定箇所を読み、また事前に配布するレジュメに記載された判例百選の事件の判決、決定・審判の要旨を読むこととする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	経済法	<p>本講義では、独占禁止法について、法曹実務に必要な知識、思考方法を修得し、事業者が行う各種の事業活動に際しての独占禁止法上の具体的な問題について、法的に解決できる能力を養成する。</p> <p>授業では、主要な判例、公正取引委員会の審決・排除措置命令・課徴金納付命令、公正取引委員会のガイドライン、相談事例等を参照しながら、独占禁止法の実体規定の解釈及び手続規定の解釈・運用実態について講義する。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	租税法	<p>所得税法と法人税法に関する主要判例を題材として、租税法の基本原則及び課税所得計算ルールの概要について講義する。</p> <p>本講義では、学修する項目の要点を記載したレジュメを配付し、当該レジュメに沿って各項目について説明する。</p> <p>各項目に関連する主要裁判例については、『ケースブック租税法』を教材として説明する。なお、受講者には、租税法の全体像を概観するため、各自の関心の範囲・程度に合わせて、指定する参考書を読むことを勧める。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	労働法	<p>労働関係をめぐって生じる法的問題を扱う法曹実務家に求められる基本的素養の習得を目的として、労働法領域における基本的な法令・判例及びその背後にある労働法的な思考方法について、質疑応答を交えつつ講義する。</p> <p>1) 労働法領域の主要な法令、判例を、その理論的意義を踏まえつつ体系的に理解する。特に主要判例については、事件の事案や経過(たとえば下級審での判断)を踏まえ、同種事案に対する先例的意義を的確に吟味しうる程度に、その内容を理解する。</p> <p>2) 上記の主要法令、判例の範囲内で、法的解決が求められる具体的問題に直面した際に、解決に必要な法令、判例を的確に選択するとともに、当該問題の事案から法的に意味のある事実を的確に抽出し、これらを用いて当該問題の解決を導く法的思考能力(及びそれを表現する能力)を身につける。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	環境法	<p>本講義では、予防原則等の環境法の基本的な考え方、環境影響評価等の基本的な制度、大気汚染防止法、自然公園法、廃棄物処理法等の主たる環境関係法律の基本的な仕組みとその問題点を学ぶ。</p> <p>そのうえで、法政策的面から見た制度改革の在り方についても考察できるようになることを目標とする。</p> <p>授業は、質問を交えながら講義形式で授業を進める。したがって、受講者は予め参考書の関連部分を読んでおき、講義の中では、法政策面からの現行法制の検討をする際にも、質問を交えながら進める。</p>	
	金融法〔金融監督法・金融取引法〕	<p>金融法の学問分野は、金融取引分野と金融規制分野の双方を含む広大な領域であり、この授業で全てを網羅することはできないが、できるだけ実務に沿った金融取引法、規制法の基本を提示する。</p> <p>講義形式を中心とし、受講者数、企業経験者の多寡により、ディスカッション方式も取り入れるなど柔軟に対応する。</p> <p>(オムニバス方式/全10回)</p> <p>(39 斎藤輝夫/5回) 前半は、銀行取引、貸金、保険などいわば伝統的な金融取引とそれに関連する監督規制の仕組みを学修する。</p> <p>(34 栗林康幸/5回) 後半は、証券化取引及び投資信託など、現代型の金融取引とそれに関連する監督規制の仕組みを学修する。</p>	オムニバス方式
	国際公法	<p>本講義では、国際法に関する基礎概念の整理と、同法の体系的理解を目指す。</p> <p>また、国際法についての教科書・研究書・論文を収集・読解し、国際法に関する小論文を作成する能力の修得を目標とする。</p> <p>本授業では国際法の学修上不可欠である主要な問題に絞って検討する。基本的には講義形式とし、学生による発表・ディスカッションというオーソドックスな教育方法を併用することで、国際法に関する体系的知識の修得を行う。</p> <p>また、事例研究もあわせて実施する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地方自治	<p>地方自治・地方自治法の主要な項目・論点を扱う。 取り上げる項目・論点は、地方自治・地方自治法関係の項目・論点を中心に、法科大学院の教育において特に必要と考えられる範囲をカバーする。</p> <p>この授業の目標は次のとおりで、講義形式で行う。 1) 地方自治・地方自治法について、実務において求められる問題解決能力、事実調査能力、事実認定能力、論述力を高めること。 2) 単に地方自治法の解釈に留まることなく、今後いっそう求められる政策立案能力を身につけ、高めること。</p>	
	金融商品取引法	<p>本講義では、証券取引について、その規制のあり方を概観した上で、特に企業買収に関わる規制を中心に採り上げ、それをめぐる判例や学説や関連する課題についても検討する。そして、金融商品取引法についての法的知識と理解を得させ、法的思考力の養成を図る。</p> <p>これにより、金融商品取引法の内容について、法的知識を修得し、理解を深め、法的思考力を養成しうること等を目的とする。</p> <p>授業は予習を前提に講義を中心とする。加えてケースメソッドやプロブレムメソッドを併用し、ソクラテスマソッドによる質疑応答を交えながら進めていく。</p>	
	消費者法	<p>消費者問題に対応する法律群である「消費者法」について、実際の消費者被害を扱いながら、問題点を的確に捉え、消費者の権利を実現し解決する能力の修得を目指す。</p> <p>消費者被害の実態や原因・背景を十分理解したうえで、それを解決するための法制度の基礎知識を修得しながら、法律実務家の視点から消費者問題に対するスタンスを学ぶ。</p> <p>予め課題を示し、それを受講者が授業前までに回答して、それらを基に講義形式にて授業を実施する。</p>	
	倒産法演習	<p>本演習では、破産法や民事再生法を中心とする基礎的知識を習得した受講生を対象として、具体的事例を題材として検討・討論を行う。</p> <p>倒産法の基礎的知識を深化させるとともに、適切な倒産処理を行うための技能と応用力を養うことを目的とする。</p> <p>受講生には予習内容を指定し、設問・課題に対する答えについて簡単なメモを作成するよう求め、それに基づいて担当教員と受講生、あるいは受講生間で検討・討論しながらの双方向授業を実施する。</p>	
	経済法演習	<p>本演習では、実際の事例又は仮設事例の検討を通じて、独占禁止法(経済法)に関する基礎概念の整理と事案分析力の向上を目指す。</p> <p>最近の実際の事例又は仮設事例を用いて理論・実務の両面から検討し、独占禁止法(経済法) - 特に各行為類型の違反成立要件の内容・その該当性を基礎づける事実の捉え方等 - について理解を深めることを目標とする。</p> <p>以下の項目ごとに、演習の中で学生との間の質疑応答を通じて一般的な規範内容・事例等における事実の捉え方について整理・検討を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) どの行為を検討対象とするか 2) 独禁法の適用条項 3) 検討対象市場の画定(誰に対する/何に関する/誰と誰の間の競争を検討対象とするか) 4) どのような弊害(競争停止/他者排除/その他)に着目するか 5) 正当化理由の有無等を明確に意識して検討する。 	
	労働法演習	<p>本演習の目標は、主要な労働判例の事例を確認し、分析することにより、具体的事案における事実の整理の仕方、バランスのとり方、あてはめ方を学び、紛争解決能力を育成する。</p> <p>また、事例演習で、当事者の立場で紛争解決手段を選択し、法律上の主張を組み立てる能力を養う。</p> <p>『労働法判例百選』(最新判例に関する資料等も配布)を使用し、毎回テーマにあった重要判例について分析・説明する。</p> <p>担当教員が『事例演習労働法』から問題を指定し、受講者が授業までに答案を作成、その答案に基づいて授業内で討論する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	知的財産法演習	<p>特許法及び著作権法につき、判例や事例問題を通じて、実務上取り上げられる問題点を中心に演習を行う。</p> <p>条文・判例を中心とした知識の再確認、事例問題についてレポートを即時起案、そして事例問題の分析・レポート作成におけるポイント等について討論を行う。</p> <p>これにより、与えられた課題における問題点の抽出、規範の定立、当てはめを、的確かつ論理的に答案に展開することができる法的思考力を修得できるようにする。</p> <p>商標法や意匠法、不正競争防止等のその他の知的財産法については、授業に必要な範囲で触れることがある。</p>	
	英文法律文書作成	<p>本講義では、関連する法令・条約、関連する契約法理論についての理解を深め、また契約文書・契約書作成のための実践的な契約文書のDraftingの能力を養い、渉外実務家としての基礎能力を養成することを目的とする。</p> <p>契約法理論としてそれぞれの契約条項の法律解釈、法律問題発生のポイント、国際(英文)契約書の構成などを学ぶ。</p> <p>ビジネス態様別に国際(英文)民商契約の対象となる国際取引を取り上げ、そこにおけるビジネスの内容、ビジネス利益の追求のメカニズム、ビジネス相手方との利害の調整、契約交渉、交渉内容をベースとしての国際(英文)契約書の作成、Draftingに至るプロセスを学ぶこととする。</p> <p>授業は講義形式とする。</p>	
	企業法務	<p>本講義では、企業活動に関連する広範な法的問題の中から、企業にとって特に脅威となるおそれがあり又は企業活動の適法性の確保のために重要と考えられるものを選び、それらの問題がいかなる法律と関係し、また、どのように対処されるべきかを検討する。</p> <p>これにより、実務上の要点を把握することを到達目標とする。</p> <p>事前に配布される判例や資料等を予習することを前提として、授業は講義形式を基本とするが、判例等を用いて可能な限り受講者との双方向型の授業を行う。</p>	
	少年法	<p>少年法は、少年による犯罪から社会を防衛するという意味で、刑事法の領域における特別法であるのと同時に、真の犯罪者と化す危険から少年を保護するという意味で、社会福祉や教育に関する法の領域を構成する要素でもある。</p> <p>このような性格をもつ少年法の意義と役割そして今後のあり方について受講者が深く学ぶために、本講義では、少年法の理念とその歴史を明らかにしたうえで、少年非行の動向・実状に関する認識をたしかにするのと同時に、少年事件の手続・処分のしくみおよび課題をそれぞれの段階・種別ごとに紹介・検討する。</p> <p>非行少年の処遇に関する制度・運用の理解ならびに少年法の意義と今後のあり方を模索するための知見の獲得を目標とする。</p>	
	自治体法務	<p>現代の地方公共団体は、地方自治の主体として、数次に及ぶ制度改革を経て大幅な権限強化が図られており、今後、法曹有資格者の活躍が期待される重要な領域となっている。</p> <p>本講義では、地方公共団体で生起する具体的事例を通じて、行政法だけでなく民法その他の基本法・特別法の知見や法曹としての思考様式や技能がどのように活用されているか検証するとともに、地方公共団体に関わる実践的法務知識を修得する。</p> <p>本講義は、自治体法務に関する通則的テーマと分野別テーマに二分し、適宜、自治体法務の現場で活躍する法曹有資格者ほかをゲストとして招き、担当教員や受講者との対話を通じる等して授業を進行していく。</p>	
	民事執行・保全法	<p>本講義では、民法や民事訴訟法との関係を重視しつつ、多くの具体的な例を基に、民事執行法・民事保全法の仕組みと基本的な諸問題について理解することを目的とする。</p> <p>講義は、教科書の次回の範囲を事前に精読して頂くこととし、民事執行手続及び民事保全手続の仕組みと基本的な諸問題について、双方向に質疑応答形式で行う。</p> <p>各回の授業は、基本的に前回の復習、教科書の指定範囲の解説・質疑に基づく。</p>	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	国際私法演習	<p>国際私法の基礎概念や基本的な発想になじむことを主な目的とする。</p> <p>国際私法、国際民事訴訟法の基礎的知識がある程度修得されていることを前提とするが、本演習においても基礎的知識の再確認を行う。</p> <p>授業では、基本書の利用を中心として、判例も適宜利用していく。また、受講者同士のディスカッションも取り入れながら、演習の中で基本書の設問を利用した答案作成を適宜行っていく。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(人文社会ビジネス科学学術院 国際経営プロフェッショナル専攻 専門職学位課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
Core Courses	Organizational Management I	<p>The success of business depends to a large extent on people. This course is designed to provide students with fundamental knowledge about how individuals behave at the workplace, how they are motivated and how they interact with each other. Specifically, course content are composed of three dimensions, namely, individual, group and organization. For each dimension, integration between theory and implication will be considered. Classes will be a mixture of lectures, discussions and case studies and role plays.</p> <p>ビジネスの成功は、人々に依るところが大きい。このコースは、個人がどのように職場で行動するか、どのように動機付けられ、どのように相互作用するかについて、基本的な知識を学生に提供するように設計されている。より具体的には、コース内容は個人、グループ、組織の3つの次元に分類される。それぞれの次元について、理論と実践の融合について考察する。クラスは、講義、ディスカッション、ケーススタディとロールプレイにより構成される。</p>	
	Human Resource Management I	<p>This course is composed by the lectures where discusses fundamental theories of human resource management (HRM) and the case studies related to it. It aims to facilitate the understanding of how the design and execution of HRM could contribute to build up an effective and a strong organization. This class is designed for the students with years of working experiences and they are expected to participate in the class discussions to exchange the ideas to deepen the understanding of HRM and to solve the problems they face or will face at their workplace.</p> <p>このコースは、人的資源管理の基礎理論についての講義とそれに関連するケーススタディで構成される。人的資源管理の構築および遂行が、効率的かつ強固な組織の構築にいかに関与できるのか、理解促進を目的としている。このクラスは、有職経験を持つ学生のために設計され、人的資源管理の理解を深めるためのアイデアや、職場で直面する問題を解決するためのアイデアを交換し、積極的にディスカッションすることが期待される。</p>	
	Marketing I	<p>The Marketing Management course will provide the basic concepts, theories and methods; the necessary building blocks in understanding marketing. This course has three main objectives, first to help students understand how organizations in create value in their practice of marketing with emphasis on branding, consumer behavior, segmentation and positioning. Students will develop an understanding of marketing practice through extensive readings, class lectures and case studies. The second objective is to develop students' ability to think analytically and strategically in addressing marketing problems. Finally, students will acquire the skills in analyzing and applying decision tools and the know-how of analyzing business situations and developing marketing plans as well as perform marketing research.</p> <p>このコースは、マーケティングの基本的な概念、理論と方法、マーケティングを理解する上で必要な基盤を構築するために、講義、ディスカッション、ケーススタディを組み合わせでデザインされている。このコースでは、3つの主目的がある。まず、ブランディング、消費者行動、セグメンテーション、ポジショニングに重点を置いたマーケティングの実践において、組織がどのように価値を創造するかを理解すること。学生は、文献の多読、講義やケーススタディを通じて、マーケティング実践の理解を深める。第二の目的は、マーケティングの問題に対処するために、分析的かつ戦略的に考える能力を高めること。最後に、意思決定ツールの分析と応用、ビジネス状況の分析、マーケティング計画の立案、マーケティング研究のノウハウを修得する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Business Strategy I	<p>Business strategy is the scenario or playbook for transforming an organization from its present state to a future desired state. This course is designed to provide students with a framework for competitive advantage and industry analysis in order to develop and implement a business strategy. Classes will be a mixture of lecture and critical discussion of theory and practical cases.</p> <p>経営戦略とは何かについて学ぶ講義である。経営戦略は、企業を、現在おかれている状況から将来のあるべき姿に導いていくための道筋を描き、それを実現させていくためのシナリオあるいは脚本のようなものであると言える。この講義では、経営戦略（全社戦略・競争戦略）を策定し、実装するために必要となる、競争優位理解のための理論や、業界分析のためのフレームワークを修得するなど、重要な理論・コンセプトを学べるように設計されている。また、クラスは講義、実践的ケーススタディーなどを通じてインタラクティブに学ぶ機会を提供する。</p>	
	Finance I	<p>This course focuses on basic concepts in corporate finance, which are needed for financial managers to understand the theory of finance and financial market. It shows students how to evaluate whole companies and projects, how to determine the optimal capital structure, and how to evaluate an appropriate dividend policy. It introduces time value of money, discounted cash flow, a weighted average cost of capital, and capital budgeting process. Additionally it covers the Modigliani-Miller theory, dividends theory and M&As.</p> <p>このコースは、財務管理者が財務および金融市場の理論を理解するために必要となる、コーポレートファイナンスの基本的な概念に焦点を当てた、講義とディスカッション形式によるものである。企業全体やプロジェクトの評価方法、最適な資本構造の決定方法、配当政策の評価方法などを学生に示す。それは貨幣の時間的価値、割引キャッシュフロー、資本の加重平均コスト、および資本予算のプロセスに言及する。さらに、それはモディリアーニミラー理論、配当理論および M&Aについてもカバーする。</p>	
	Accounting I	<p>This course focuses on basic concepts in accounting, which are needed for managers to understand the financial statements and disclosure. It aims to help students understand the importance of accounting and let them know the recording process of accounting and the structure of financial statements. Students will learn the accounting knowledge based on the International Financial Reporting Standards (IFRS) issued by the International Accounting Standards Board (IASB). This course introduces several fundamental issues of accounting such as accounts, debits and credits, journal entry, ledger account, trial balance, accounting equation, accounting cycle, time period assumption, revenue / expense recognition principle, etc.</p> <p>このコースでは、講義形式により、財務諸表とその開示について全体的に理解するための基礎的な会計知識を習得する。学生に会計の重要性、会計プロセス、および財務諸表の構造について理解させることを目指す。また、国際会計基準審議会（IASB）によって設定された国際財務報告基準(IFRS)をベースにして、会計知識を学ぶ。講義の内容には、勘定科目や、借方と貸方、仕訳、元帳、試算表、会計等式、会計サイクル、会計期間、収益認識の原則、費用認識の原則などの基礎概念が含まれる。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Global Management I	<p>This course provides an introduction to international political economy - the interface between international economics and international politics. This study is based on the assumption that in order to understand patterns of interaction and change at the global level, we need to look at both international politics and economics in an integrated manner.</p> <p>Students will look at economic issues of trade, finance, production and development, but not from the perspective of economic theory. Instead, students will engage with the International Relations concepts, ideas and literatures on the economic relations among states, and between states and non-state actors (such as firms, societal groups and international organisations). The focus is therefore on the political problems that arise as a consequence of the increasing density of international economic relations. Knowledge of economics is an advantage but not a requirement.</p> <p>ビジネスは、貿易、金融、環境など、ひとつの国家では解決できないグローバル規模の問題の影響を受ける。また、ビジネスも政治・経済・技術など多領域にわたる国際問題のいちアクターとなっている。こうした国際環境を理解するにおいて、「国際政治経済学 (IPE: International Political Economy)」の視点が有効となる。本コースでは、政治と経済の相互作用に着目しつつ国際社会の変容について歴史的に整理した後、国際政治経済の概況を理解するために必要な各種分析ツールを講義形式により学習する。特に、国際貿易、国際金融、多国籍企業による生産活動、またこうした領域における国際制度、アクター、さらにグローバリゼーションをめぐる論争について、国際政治経済学の4つの世界観(リアリズム、リベラリズム、マルクス主義、構成主義)に基づいて検討を行い、個別の現象がビジネスや国際経営に及ぼす影響を及ぼし得るのかを考える。</p>	
	Operations Management I	<p>Operations management is primarily involved with activities of developing, producing and delivering goods and services. It applies the underlying methodologies of management science to deal with the operations. The focus is on how to combine concepts, models, and methods to help managers develop better systems and make better decisions concerning operations. This course covers five operations management and management science topics, which are PERT/CPM, Linear Programming, Analytic Hierarchy Process, Decision Analysis and Inventory Management Models. The fundamental concepts, models and principles associated with each topic and their applications in operations will be taught by different instructors from the corresponding fields.</p> <p>オペレーションズ・マネジメントは、主に、製品またはサービスの開発、生産、供給の活動に関わっている。オペレーションズ・マネジメント問題がマネジメントサイエンスの基礎となる様々な概念、モデル、および方法の応用によって取り扱われる。このコースでは、PERT/CPM、線形計画、階層分析法、意思決定分析、在庫管理モデルという5つのオペレーションズ・マネジメントまたはマネジメントサイエンスのトピックを紹介する。各トピックに関連する基本的な概念、モデル、原則およびオペレーションズへの応用を、関連する分野の教員による講義から学修する。</p>	
Basic Courses	Business Mathematics	<p>Mathematics are needed for the study of economics and business. The objective of business mathematics is to introduce or review some basic mathematical concepts and methods for students to learn quantitative methods in business, which includes topics such as functions and graphs, matrix algebra, probability and statistics, and differentiation. The topics will be taught by different instructors from the corresponding fields.</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>経済やビジネスなどを勉強するために、数学が必要とされる。ビジネス数学は、ビジネスに応用されている様々な定量的な方法を応用するための数学基礎を紹介することを目的とする。このコースでは、ビジネス数学の基礎となるいくつかのトピックス、例えば、関数とグラフ、行列、確率と統計、微分などを紹介/レビューする。各トピックに対して、基本定義、基本的な演算やビジネスへの応用例題などを、クラス演習を交えながら、関連する分野の教員によって講義する。</p>	
	Introduction to Economics I	<p>This course focuses on basic concepts in Economics, which are needed for managers to understand the theory of economics and global market. It shows students how to evaluate demand and supply, how to determine the Keynesian aggregate demand, and how to identify business cycle.</p> <p>このコースでは、管理職が経済学基礎理論とグローバル市場を理解するために必要とされる、ミクロ経済学・マクロ経済学の基本的な概念に焦点を当てる。需要・供給と価格決定のメカニズム、消費者の選択理論(効用概念, 限界効用, 予算制約, 代替効果, 所得効果, 価格弾力性, 上級財, 下級財), 企業の利潤最大化のメカニズム(収入, 費用, 限界利益, 損益分岐点, 操業停止点), ケインズモデル(総支出モデル, 投資乗数, 政府支出乗数), 景気循環と失業・インフレのメカニズムの理解を目標とし、講義とクラス演習を交えながら学修する。</p>	
Elective Courses (Organizational Management)	Organizational Management II	<p>This course will cover topics on learning practical management skills for newly appointed managers to promote performance. It will consist of the three key dimensions of management behaviors, 1) How to successfully make the transition from employee to manager, 2) Tips on how to carry out criticism and discipline, and 3) Strategies and behavior styles for mentoring, coaching, problem resolution. Students are expected to discuss and learn how to succeed and flourish as a manager using highly focused model for effective management.</p> <p>このコースでは、新任管理職がパフォーマンスを発揮するために必要な実践的なマネジメントスキルを習得することを目的とし、1) 一般従業員から管理職へのスムーズな移行, 2) 批評の実施と規律強化のためのポイント, 3) メンタリング, コーチング, 問題解決のための戦略と行動スタイル, 管理行動で鍵となるこれら3つのポイントを踏まえ、講義形式により構成される。学生は、効果的な管理のため高度に焦点を当てたモデルを使用し、管理職として成功するための方法論について積極的な議論、学修が期待される。</p>	
	Human Resource Management III	<p>This course offers an understanding of the human resource management in international business contexts. Topics include the changes of organization in the process of globalization, dynamics of human relations within organization, strategic human resource management, and issues related to recruitment, training and compensation across cultures. The course uses lectures and case study analysis methods, and students are expected to actively participate in the class discussion.</p> <p>このコースでは、国際的なビジネスといったコンテキストにおける人的資源管理について議論を行う。主なトピックとして、グローバル化の過程における組織の変化、組織内におけるダイナミックな人間関係、戦略的人的資源管理、及び異文化間における採用、研修、給与に関するトピックを取り扱う。本コースでは、講義とケーススタディの分析方法を用いることを予定しており、履修生には、積極的に講義における討論を行うことを期待する。</p>	
	Business Anthropology	<p>This interdisciplinary content course—taught by means of lectures and case studies—is designed to provide students with an overview of the field of Business Anthropology. It reviews the historical development of the field, its representative theories, and how business anthropologists conduct research based on a unique method called participant observation. Through this course, students are expected to understand the basic concepts of the field, how an anthropologist uses a holistic approach to gather and analyze data, and to utilize these skills in their work life.</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>講義とケーススタディによって構成されるこの学際的なコースは、経営人類学の分野の概要を学生に示すよう設計されている。これは、この分野の歴史的変遷、その代表的な理論を検討、経営人類学者がどのように参与観察と呼ばれる独自のメソッドに基づき研究を行うかレビューする。このコースを通じて、学生は、この分野の基本的な概念を理解するとともに、人類学者がどのように総体的アプローチを使用してデータ収集、分析を行うかを学び、これらのスキルを業務において活用することが期待される。</p>	
Elective Courses (Business Strategy)	Introduction to Economics II	<p>This course focuses on intermediate concepts in Economics, which are needed for managers to understand the theory of economics and global market. It shows students how to evaluate market structure (monopoly and perfect competition), how to analyze monetary and fiscal policy, how to determine the foreign exchange rate, and how to evaluate economic growth.</p> <p>このコースでは、管理職が経済学基礎理論とグローバル市場を理解するために必要とされる、ミクロ経済学・マクロ経済学の応用的な概念に焦点を当てる。市場構造（完全市場、不完全市場、寡占市場、独占市場）、金融・財政政策（IS曲線、LM曲線、IS-LM分析）、国際貿易と国際収支（絶対優位と比較優位、貿易制限、貿易ブロック、国際収支）、外国為替理論（為替制度、購買力平価説、国際フィッシャー関係式、金利平価説、マンデル＝フレミング・モデル）、経済成長理論（成長会計式、新古典派成長理論、内生的成長）の理解を目標とし、講義やディスカッションにより行われる。</p>	
	Finance II	<p>This course focuses on the basic concepts in valuation, which are needed for financial managers to understand the financial market. It covers several methods of equity valuation and bond valuation which are frequently used in financial market and M&As. By the end of the course, students have all the tools necessary to value a company, a stock and a bond by projecting cash flow and discounting it at an appropriate rate.</p> <p>このコースでは、財務担当者がフィナンシャル・マーケットを理解するために必要な企業価値評価に係る基本概念に焦点を当てる。フィナンシャル・マーケット、特にM&Aにおいて頻繁に使用される株式評価と債券評価に関する概念（WACC、CAPM、ベータ）と、いくつかの手法（配当割引モデル、フリーキャッシュフローモデル、残余価値モデル、マルチプル法）を紹介する。コース終了時に、学生が将来キャッシュフローを予測し適切な割引率を用いて、現在価値を計算するディスカウント・キャッシュフロー・メソッドに習熟することを目標とし、講義形式やクラスディスカッション、ケーススタディ等の組み合わせにより行われる。</p>	
	Accounting II	<p>This course deals with financial data analysis. On completion of this course, students are expected to understand the linkages between financial statements and learn how to analyze financial data with various methods. Also, it provides an opportunity for students to learn how to analyzing financial data with statistical software. The course starts with a review of financial statements and then focuses on various tools of financial statement analysis, including cash flows analysis, comparative analysis, horizontal analysis, vertical analysis, ratio analysis, and fundamental analysis based on financial statements. (Prerequisite: Accounting I)</p> <p>このコースは、財務諸表の読み方を学習することで企業の財務データに関する分析を行い、企業業績を評価する能力を育成するためにデザインされた、講義形式の授業である。また、統計ソフトウェアを利用し、財務データを解析することも紹介する。このコースでは、貸借対照表・損益計算書・利益計算書などの読み方から、財務諸表分析に関する手法まで解説する。分析手法については、キャッシュフロー分析、比較分析、水平分析、垂直分析、比率分析、財務諸表に基づくファンダメンタル分析が含まれる。（履修条件：Accounting Iを履修済であること）</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Accounting III	<p>This course introduces cost and management accounting topics to enable students to understand how accounting information is used to manage an organization. This course focuses on the factors that differentiate one company from another. This course will look at various functional areas within the firm, ranging from manufacturing to merchandising. Several topics will be discussed in this course such as Cost-Volume-Profit (CVP) analysis, Activity-Based Costing (ABC) method, Balanced Scorecard (BSC), absorption costing, variable costing, budgeting, etc. (Prerequisite: Accounting I)</p> <p>このコースは、管理会計の知識を学習することで、企業の経営管理のプロセスにどのように会計情報を活用できるのかを理解するための、講義形式の授業である。企業間の比較を行い、相違点を明らかにする。また、製造業や、販売業、サービス業などの企業の事例を取り上げ、様々な部門について分析を行う。このコースでは、損益分岐点分析(CVP)、活動基準原価計算(ABC)、バランススコアカード(BSC)、全品原価計算、直接原価計算や、予算など主要な手法を学習する。(履修条件: Accounting Iを履修済であること)</p>	
	Marketing II	<p>In the face of globalization and an ever-changing market landscape, the need for corporations to continuously stay relevant and competitive is essential. This course focuses on marketing products and services on a global arena where the pertinent areas of standardization, coordination and integration will be explored accordingly. A range of examples from services and products in the form of case study discussions will be undertaken. Students will also be exposed to the core issues surrounding global marketing. The course will be taught using both lectures and case studies.</p> <p>グローバル化と刻々と変化する市場の風景に直面し、企業は継続的に関係性と競争力を維持していかなければならない。このコースは、標準化、調整、統合の適切な分野が、それに応じて検討されるグローバル展開におけるマーケティング製品やサービスに焦点を当てる。ケーススタディにおいて、サービスや製品例を取り上げる。また、グローバルマーケティングを取り巻くコアな問題に焦点を当てる。コースは、講義とケーススタディにより構成される。</p>	
	Marketing III	<p>A brand essentially is one of the most valuable assets to a company. Brand management is an integral part of a firm's competitive strategy. The understanding of the different core aspects of brand and brand management is critical in ensuring customer loyalty and strong brand equity. This course examines the fundamentals of brands and brand management. Students will learn brand positioning, the building, maintaining and developing of brands as well as brand valuation and managing global brands. As the course will be conducted using the case study method, students will be given the opportunity to discuss and present their ideas and proposals of various industries.</p> <p>ブランドは、会社にとって本質的に最も価値のある資産の一つである。ブランド管理は、企業の競争戦略の不可欠な部分。ブランドとブランド管理の異なるコアな側面の理解は、顧客ロイヤルティと強力なブランド・エクイティを確保する上で重要である。このコースでは、ブランドとブランド管理の基礎を考察する。学生は、ブランドのポジショニング、構築、維持、発展、ブランド評価、グローバルブランドの管理を学修する。このコースは講義とケーススタディを用いて、学生は、様々な産業のアイデアや提案を議論し、発表する機会を与えられる。</p>	
	Entrepreneurship I	<p>The course is designed to enable students to understand (i) the dynamics of successfully starting a new business, and (ii) to understand the role of entrepreneurship in large corporations. It will involve studying the key challenges a start-up faces as well as analyzing case studies.</p> <p>この講義は、学生が (i) 新規事業を成功させるための要素、および (ii) 大企業における起業家の役割を理解することを可能にするように設計されている。講義内容には、ケーススタディの分析とともに、スタートアップが直面する重要な課題を研究することを含む。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Entrepreneurship II	<p>At this course, we will examine how to innovate a business and transform it from both customer view point and industry value chain view point. This course will cover the basics concept of SCM, Business Eco System, and system/innovative thinking, aiming the enhancement of the entrepreneurship capability of attendants.</p> <p>この講義では、ディスカッション、ケーススタディ形式も組み合わせ、既存の事業を変革あるいは革新したり、新たな事業を創造していくために重要となる方法論について学んでいく。その際に、顧客からの視点と、業界のバリューチェーンの双方の視点から事業を理解することを重視し、創造・変革について議論を行っていく。さらに、この講義では、サプライチェーン・マネジメント、ビジネスエコシステム、およびシステム思考、イノベティブ発想などの基本的概念についても触れ、受講生の起業家力の強化を目指す。</p>	集中
	Technology Management	<p>This course aims to graphs the landscape of Technology Management and asks the question, “How can corporations create value and capture it?” This course investigates strategic perspectives for aligning competitive strategies and core competencies associated with the use of technology and innovation.</p> <p>この講義では、ディスカッション、ケーススタディ形式も組み合わせ、技術経営（マネジメント・オブ・テクノロジー）の全体像を把握・理解することを目的に開講される。それは言い換えると「企業がどのように価値を創造をおこない、そこから生じる価値をどのように獲得していくべきか」という課題に対して、実務上の示唆を得ることを目的としているとも解釈できる。この講義では、技術経営とイノベーションに関連するコア・コンペテンスや競争戦略に関するトピックについても触れ、技術経営と戦略との接点を探っていく。</p>	
	Finance Seminar I	<p>This course focuses on practical application of basic concepts of valuation. Members will participate in the CFA Institute Global Investment Research Challenge Competition sponsored by the CFA Institute. The team will analyze the target company assigned by the CFA Institute. The valuation process includes scenario analysis, cash flow projection, estimation of required rate of return, estimation of growth rate, and estimation of beta. The analysis process includes the participation in IR meeting of the company. (Prerequisite: Finance I and II)</p> <p>このコースは、評価の基本的な概念の実用化に焦点を当てる。履修者はチームを構成し、CFA協会が主催する Research Challenge Competitionに参加する。このコンペにおいて、各チームはCFA協会が指定するターゲット企業を分析する。評価プロセスには、シナリオ分析、キャッシュフロー予測、必要な収益率の推定、成長率の推定、およびベータの推定が含まれる。分析プロセスには、当該企業のIRミーティングへの参加が含まれる。（履修条件：ファイナンス I および IIを履修済であること）</p>	集中
	Business Model Innovation	<p>This course is designed to acquaint students with the methodology of business model innovation and transformation. We will examine the superior business model characteristics from both strategic and organizational perspectives. Classes will be a mixture of lecture for theory/framework and case discussion with practical esamples.</p> <p>この講義は、既存企業において既に存在するビジネスモデルをどのように変革していくのか、あるいは新しいビジネスモデルをどう着想し、構築していくのかに関する方法論を、学生が理解できるように設計されている。履修者は、経営戦略の側面と、組織論に関する側面の双方のから、優れたビジネスモデルについて検証・考察を行うことになる。講義では、理論やフレームワークに関するレクチャーと、実務的な事例を取り上げた議論をバランスよく取り入れることで学習効果を高めること狙う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
Elective Courses (International Adaptability)	Cross Cultural Management I: Managing Across Borders	<p>The main goal of this course is to provide theoretical and practical examples on the global manager's environment, the cultural context of global management, and the formulation and implementation of strategy for international and global operations.</p> <p>この講義では、ディスカッション、ケーススタディ形式も組み合わせ、以下の3つの目的を達成することを主眼において設計されている。第一に、グローバルな舞台において活躍するビジネス・リーダーが理解しておくべきグローバルな事業環境に関して、理論的な事例ならびに実際の事例を提供していく。第二に、グローバル経営における文化的なコンテキストの重要性について理解を促進する。第三に、国際的あるいはグローバルな事業オペレーションを有効に行うための戦略構築、そしてその実行に関する方法論について学んでいく。</p>	
	Cross Cultural Management II: The Challenges of Globalization	<p>This course focuses on selected international business issues at the macro and micro levels. Topics covered include economic systems and development, regional economic integration, analyzing international opportunities, international trade theories and economics, foreign direct investment, and global human resources management.</p> <p>この講義では、ディスカッション、ケーススタディ形式も組み合わせ、マクロレベル、ならびにミクロレベルの双方の観点に基づき、国際ビジネスにおける重要課題に対して、焦点を当てた議論を行っていく。講義において取り上げる主たるトピックとしては、経済システムとその発展ダイナミズムにおける課題、地域経済の統合過程・状況に関する課題、国際的な事業機会の分析のための手法、国際貿易に関する理論や経済学的な視点での課題、海外直接投資の実際、グローバルな人的資源管理など、が挙げられる。</p>	
	Overseas Study Seminar I	<p>Overseas Study Seminar I is a custom-designed independent study to provide students who visit partner business schools abroad information and knowledge that are related to their research or business interests by attending multiple seminars at partner schools in either Asia, Europe or North America. Schools and the corresponding courses are determined based on consultation with the MBA-IB professor in charge of this program. Students are encouraged to attend as many courses as possible in order to maximize their learning experience (especially those who are only on exchange for a week). Students are expected to fulfill 15 hours to obtain a credit. The length of the exchange can be as short as a week or up to an entire semester. Upon completion of the program, students are expected to submit a report accordingly of which details will be given during consultation with the faculty in charge.</p> <p>Overseas Study Seminar Iは、アジア、ヨーロッパまたは北米の提携校で複数の講義に参加することにより、研究やビジネスの利益に関連するパートナービジネススクールの海外情報や知識を、訪問する学生に提供するためのカスタムデザインの独立したプログラムである。このプログラムを担当する本専攻（以下、「MBA-IB」という）の担当教員との協議に基づき、訪問校と対応する講義を決定する。学生は、学習体験を最大限にするために、できるだけ多くの講義を受講するよう奨励される（特に、1週間だけのエクステンジの場合）。MBA-IBにおける単位修得の最低要件として、現地での講義参加は15時間以上でなければならない。渡航期間は、1週間程度から、一学期を通じてまでに調整することができる。本プログラムを修了時には、MBA-IBの担当教員との協議の上、レポートの提出が求められる。提携校での講義参加時間数15時間毎に1単位を付与するものであるが、以降30時間、45時間、60時間ごとに同科目名のII～IVに対応する。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Overseas Study Seminar II	<p>Overseas Study Seminar II is a custom-designed independent study to provide students who visit partner business schools abroad information and knowledge that are related to their research or business interests by attending multiple seminars at partner schools in either Asia, Europe or North America. Schools and the corresponding courses are determined based on consultation with the MBA-IB professor in charge of this program. Students are encouraged to attend as many courses as possible in order to maximize their learning experience (especially those who are only on exchange for a week). Students are expected to fulfill 15 hours to obtain a credit. The length of the exchange can be as short as a week or up to an entire semester. Upon completion of the program, students are expected to submit a report accordingly of which details will be given during consultation with the faculty in charge.</p> <p>Overseas Study Seminar IIは、アジア、ヨーロッパまたは北米の提携校で複数の講義に参加することにより、研究やビジネスの利益に関連するパートナービジネススクールの海外情報や知識を、訪問する学生に提供するためのカスタムデザインの独立したプログラムである。このプログラムを担当する本専攻（以下、「MBA-IB」という）の担当教員との協議に基づき、訪問校と対応する講義を決定する。学生は、学習体験を最大限にするために、できるだけ多くの講義を受講するよう奨励される（特に、1週間だけのエクステンジの場合）。MBA-IBにおける単位修得の最低要件として、現地での講義参加は15時間以上でなければならない。渡航期間は、1週間程度から、一学期を通じてまでに調整することができる。本プログラムを修了時には、MBA-IBの担当教員との協議の上、レポートの提出が求められる。提携校での講義参加時間数15時間毎に1単位を付与するものであるが、以降30時間、45時間、60時間ごとに同科目名のII～IVに対応する。</p>	集中
	Overseas Study Seminar III	<p>Overseas Study Seminar III is a custom-designed independent study to provide students who visit partner business schools abroad information and knowledge that are related to their research or business interests by attending multiple seminars at partner schools in either Asia, Europe or North America. Schools and the corresponding courses are determined based on consultation with the MBA-IB professor in charge of this program. Students are encouraged to attend as many courses as possible in order to maximize their learning experience (especially those who are only on exchange for a week). Students are expected to fulfill 15 hours to obtain a credit. The length of the exchange can be as short as a week or up to an entire semester. Upon completion of the program, students are expected to submit a report accordingly of which details will be given during consultation with the faculty in charge.</p> <p>Overseas Study Seminar IIIは、アジア、ヨーロッパまたは北米の提携校で複数の講義に参加することにより、研究やビジネスの利益に関連するパートナービジネススクールの海外情報や知識を、訪問する学生に提供するためのカスタムデザインの独立したプログラムである。このプログラムを担当する本専攻（以下、「MBA-IB」という）の担当教員との協議に基づき、訪問校と対応する講義を決定する。学生は、学習体験を最大限にするために、できるだけ多くの講義を受講するよう奨励される（特に、1週間だけのエクステンジの場合）。MBA-IBにおける単位修得の最低要件として、現地での講義参加は15時間以上でなければならない。渡航期間は、1週間程度から、一学期を通じてまでに調整することができる。本プログラムを修了時には、MBA-IBの担当教員との協議の上、レポートの提出が求められる。提携校での講義参加時間数15時間毎に1単位を付与するものであるが、以降30時間、45時間、60時間ごとに同科目名のII～IVに対応する。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Overseas Study Seminar IV	<p>Overseas Study Seminar IV is a custom-designed independent study to provide students who visit partner business schools abroad information and knowledge that are related to their research or business interests by attending multiple seminars at partner schools in either Asia, Europe or North America. Schools and the corresponding courses are determined based on consultation with the MBA-IB professor in charge of this program. Students are encouraged to attend as many courses as possible in order to maximize their learning experience (especially those who are only on exchange for a week). Students are expected to fulfill 15 hours to obtain a credit. The length of the exchange can be as short as a week or up to an entire semester. Upon completion of the program, students are expected to submit a report accordingly of which details will be given during consultation with the faculty in charge.</p> <p>Overseas Study Seminar IVは、アジア、ヨーロッパまたは北米の提携校で複数の講義に参加することにより、研究やビジネスの利益に関連するパートナービジネススクールの海外情報や知識を、訪問する学生に提供するためのカスタムデザインの独立したプログラムである。このプログラムを担当する本専攻（以下、「MBA-IB」という）の担当教員との協議に基づき、訪問校と対応する講義を決定する。学生は、学習体験を最大限にするために、できるだけ多くの講義を受講するよう奨励される（特に、1週間だけのエクステンジの場合）。MBA-IBにおける単位修得の最低要件として、現地での講義参加は15時間以上でなければならない。渡航期間は、1週間程度から、一学期を通じてまでに調整することができる。本プログラムを修了時には、MBA-IBの担当教員との協議の上、レポートの提出が求められる。提携校での講義参加時間数15時間毎に1単位を付与するものであるが、以降30時間、45時間、60時間ごとに同科目名のII～IVに対応する。</p>	集中
	Global Management VII	<p>This course aims to introduce students to some of the approaches to the study of international political economy (IPE) and how to apply theories to important contemporary events. In particular, we will pay attention to economic diplomacy, development finance, trade and foreign direct investment of emerging economies as well as the relations of globalization This course is an advance course of the Global Management I: International Relations and Economics. This course aims to introduce students to some of the approaches to the study of international political economy (IPE) and how to apply theories to important contemporary events. In particular, we will pay attention to economic diplomacy, development finance, foreign direct investment of emerging economies as well as the relations of globalization and environmental issues. This course is open to 2nd year students who have completed the Global Management I.</p> <p>政治と経済は、現代においては社会の両輪にも例えられる。Global Management I: International Relations and Economicsでは、国際政治経済学 (IPE: International Political Economy) の理論、および貿易、金融、生産活動を学んだが、本コースでは、ディスカッション、ケーススタディ形式も組み合わせ、これらに加えて、経済外交、開発金融、新興国の海外直接投資、およびグローバル化と環境の問題について扱う。なお本コースは、Global Management Iを履修したことが履修条件となる。</p>	
Elective Courses (Applied Information)	Data Analysis I	<p>Data analysis is an indispensable tool for empirical analysis and data-oriented decision making in the fields of natural science, humanities, and social sciences. This class introduces basic concepts of descriptive statistical methods, linear regression for prediction and its residual analysis with statistical software R through a series of the group works on financial data analyses of all the listed companies in Japan.</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>経験や勘などからデータ中心科学への移行は、ビジネスに関わる意思決定を大きく変化させている。本講義では、Introductory Data Analysisで紹介したデータ分析の基礎を復習することから始め、回帰分析の基礎の取得を狙いとする。さらに、分析ソフトウェアとしてフリーソフトウェアRを初心者向けに紹介する。すなわち本コースでは、理論の取得だけでなく、自ら分析を行い、理解の深化に努める。具体的には、財務データを対象データとして、グループで分析を行い、プレゼンテーションを課す。また、個人レポートとして、自ら課題を設定し分析を行う。</p>	
	Introductory Data Analysis	<p>This course provides basic topics regarding quantitative methods, which include probability, probability distributions and descriptive statistics, sampling and estimation, hypothesis testing and so on. Students will learn how to summarize data and how to make appropriate decisions based on data.</p> <p>データ分析は、自然科学、人文科学、社会科学等の分野で、実証分析、データに基づいた意思決定等のために用いられている。本コースでは、データ分析の初心者を対象に、統計学基礎をデータの型から紹介する。具体的には、データの記述と要約、確率と確率分布、統計的推定、統計的仮説検定、単回帰である。これらのトピックについて知識の習得と、実問題に自ら適用できる応用力を得ることを目的とする。そのため、授業の後半に演習問題を課し、それを通じて、さらなる理解を得る。</p>	
	Business Simulation	<p>The main purpose is to encourage students to find various styles such as information gathering, data analysis to make more effective decisions on management through gaming simulation. The number of participants is limited, since this class will be offered in the Tokyo Satellite (PC room). Therefore the a priori submission (by email) is required in advance. The questionnaire items and more detail information are described in the syllabus.</p> <p>このコースは、情報収集、データ分析などのさまざまなスタイルにより、講義とシミュレーションを通じて、より効果的な経営判断を下すことを主な目的としている。このコースは東京サテライト(PCルーム)で開講されるため、参加者数を制限する。したがって、事前に電子メールによる申し出が必要となる。詳細はシラバスに掲載されている。</p>	
	Data Analysis II	<p>This course covers fundamentals on quantitative analysis, including a design of data collection, data analysis strategy, and summarization of the quantitative results. Some exercises are included to apply the statistical tools, such as design of experiments, regression analysis and so forth.</p> <p>本講義では、データ収集の設計、データ分析戦略、多変量解析による結果の要約など、定量分析の基礎について説明する。主たる手法として、コンジョイント分析、ならびに、主成分分析、クラスター分析を取り上げる。これらの手法群を紹介したのちに、グループワークとして、アンケート調査を行い、そのデータを分析し、グループプレゼンテーションを課す。調査からプレゼンテーションまで一連の流れの体験を通じて理論と実践の両方の側面からの理解を目指す。</p>	
	Data Analysis III	<p>This class is designed to enhance understanding of key techniques of Data Mining which are applied in various fields such as marketing research, medical information analysis etc. Another aim is to acquaint students with basic mathematical descriptions in order to enhance the understanding of professional articles.</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		<p>本コースでは、大量のデータからの知識発見プロセスKDDを概観したのちに、その1プロセスである、データマイニングについて紹介する。本領域において代表的手法である、アソシエーションルール、決定木等を例題と共に紹介し、その基礎を学ぶ。したがって、本コースでは数値データだけでなく、カテゴリカルデータも用いる分析となる。そのためデータの型と援用する手法の特徴の理解が必要となる。グループで設定した課題について、どのようなデータを収集してどの手法で分析するかを議論し、調査票を設計し、データの収集と分析を行う。グループワークと個人レポート作成を通じて、理論と実践の両方の側面からの理解を目指す。</p>	
	Operations Management II	<p>Decision analysis provides powerful tools for dealing with complex decisions that involve multiple objectives and/or uncertainty. In this course, we will learn a useful decision process to identify and overcome the challenges of decision making. We will introduce some fundamental concepts, models and methods for decision analysis in various situations such as decision with multiple objectives, decisions under uncertainty and decisions with different decision makers and different/conflict decision objectives, namely game problems. We will make practices to solve some real-world decision problems through group works.</p> <p>決定分析は、複数の目標または不確実性を伴う複雑な意思決定を取り扱うための強力なツールを提供する。このコースでは、意思決定における様々なチャレンジを特定して克服するための有用な決定分析のプロセス、モデルや方法などについて学習する。複数の目標を持つ意思決定、不確実性の下での意思決定や、異なる目標を持つ異なる意思決定者による意思決定などの状況における決定分析のための基本概念、モデルと実践的な方法を紹介する。現実的な意思決定問題を、グループワークによる解決する練習を行う。</p>	
	Operations Management III	<p>Risk analysis is defined as a systematic process to describe risk, i.e. to present an informative risk picture. Risk analysis is incorporated primarily in risk management and risk-based decision making. The objective of this course is to learn the fundamental concepts of risk analysis and a variety of models and methods to deal with risk identification, risk assessment and risk management problems. A risk filtering, ranking and management (RFRM) process will be introduced and applied to solve some practical risk management problems through group works.</p> <p>リスク分析は、リスクを記述するための体系的なプロセス、すなわち、リスクに関する有益な情報を提供するためのプロセスとして定義される。リスク分析は、主にリスクマネジメントとリスクに基づく意思決定に組み込まれている。このコースでは、リスク分析の基本的な概念、およびリスク特定、リスクアセスメント、リスクマネジメントに対処するためのモデルと方法を紹介する。リスクフィルタリング、ランキングおよびリスクマネジメントというプロセスを用いて、現実的なリスクマネジメント問題をグループワークによる解決する練習を行う。</p>	
	Operations Management IV	<p>In order to accomplish a project successfully, it is important to carry out systematized management processes, such as requirements definition, planning, executing tasks, and monitoring and control. This course provides the fundamental knowledge of project management. For instance, WBS(Work Breakdown Structure), Scheduling techniques, EVM(Earned Value Management), Cost Estimation and Contract, Risk Management, Quality Assurance and so on.</p> <p>プロジェクトを成功させるためには、要件定義、計画、作業の実施、監視とコントロールなどのシステム化された管理プロセスを適切に実行することが重要である。このコースでは、プロジェクトマネジメントの基本的な知識と方法を学習する。具体的には、WBS (Work Breakdown Structure) , スケジューリング, EVM (Earned Value Management) , 原価見積りと契約, リスクマネジメント, 品質保証等の技法を講義とグループワーク等を通じて学習する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Operations Management VI	<p>Understanding behaviors of social systems is one of key factors for success on business and our life. Diagraming techniques, for example, Flow chart, ER Diagram (Entity Relationship Diagram), State chart and UML (Unified Modeling Language) are useful to visualize/design our social systems. Additionally, natural languages, for example, Japanese, English, Spanish and other languages are useful when we will design social models. In this class we will learn text analysis, diagraming techniques, and systems design.</p> <p>社会システムの構造や働きを理解することは、仕事や人生において成功するために役立つ重要な要因の一つである。フローチャート、ER図（Entity Relationship Diagram）、状態遷移図、UML（Unified Modeling Language）などのダイアグラミング技法は、社会システムの可視化や設計に役立つ。さらに、日本語、英語、スペイン語といった自然言語は、私たちが社会システムをモデル化する時に役立つ。本授業では、テキスト（自然言語）解析と、ダイアグラミング技法を用いた社会システムのモデル化と、システム設計技術を学習する。</p>	
Elective Courses (Common Area)	Introduction to Corporate Social Responsibility	<p>The European Commission defined CSR as “the responsibility of enterprises for the impacts on society.” Corporate Social Responsibility stresses on both creating shared value (CSV) and a commitment to the triple bottom line (3BL) approach. In this course, students will be given an introduction to the concept of CSR and sustainable business. Various areas of CSR across the supply chain will be explored covering both social and environmental impacts as well as the employee and stakeholder perspectives. The class will be conducted using a mixed method of case studies and lectures.</p> <p>欧州委員会は、「社会への影響に対する企業の責任」としてCSR（Corporate Social Responsibility）を定義した。企業の社会的責任は、共通価値の創造（CSV）とトリプルボトムライン（3BL）アプローチへのコミットメントを強調している。このコースでは、CSRと持続可能なビジネスの概念を紹介する。サプライチェーン全体のCSRの様々な分野は、従業員とステークホルダーの視点だけでなく、社会的、環境への影響の両方が検討される。クラスは、ケーススタディと講義により構成される。</p>	
	MBA-IB Speaker Series	<p>The MBA-IB Speaker series aims to provide students with the opportunity to learn practical, real world issues and challenges as well as strategies from various industry leaders. Students are provided with a platform to discuss and share with the different speakers, developing not only their knowledge base but their soft skills at the same time as well. This course also aims to help build networks between students and the industries. The speaker series session also focuses on bringing in speakers from various industries as well as job scope. This will help enhance the learning and industry exposure for the MBA-IB students.</p> <p>MBA-IB Speaker Seriesでは、様々な業界のリーダーからの戦略だけでなく、実践的、現実世界の問題や課題を学ぶ機会を学生に提供することを目的としている。学生には、異なるスピーカーと議論し、共有するためのプラットフォームを提供し、彼らの知識ベースだけでなく、彼らのソフトスキルを同時に向上させることができる。このコースはまた、学生と産業間のネットワークの構築を支援することを目的としている。スピーカー・シリーズ・セッションでは、様々な業界や職務からのスピーカーを招聘する。これは、MBA-IBの学生のため、学習機会と業界連携を強化することに役立つ。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	International Conference Seminar I	<p>The main aim of this course is to gain experience in participating in an international academic conference. Students will have the opportunity to hear the most up-to-date research in the field of the conference. Students do not have to present in the conference as this course is only for conference attendance. Upon returning, students have to submit a written report (on all the sessions attended) and would have also completed 12.5 hours of conference session attendance. Students are expected to also reflect on the key learnings and see how they can be applied in their Business Projects, research topics of interest as well as in their daily jobs and classroom.</p> <p>このコースの主な目的は、国際学術会議に参加する経験を積むことにある。学生は、学会において、その分野で最も最新の研究を聴講する機会を得ることができる。このコースは学会に出席・聴講することが主目的であり、学生は学会発表をする必要はない。帰国後、学生は出席したすべてのセッションについて、書面によるレポートを提出するとともに、会議セッションの出席が合計12.5時間を満たしていることが条件となる。学生はまた、学会で得た知識を自身の“キー・ラーニング”に反映するとともに、ビジネスプロジェクト、興味のある研究テーマだけでなく、日常の仕事やクラスで貢献することが期待されている。</p>	集中
	International Conference Seminar II	<p>The main aim of this course is to gain experience in participating in an international academic conference. Students will have the opportunity to submit and present their paper at the conference. Unlike International Conference Seminar I, students who sign up for Seminar II will be presenting their research at the academic conference. Upon returning, students have to submit a written report (on all the sessions attended) and would have also completed 12.5 hours of conference session attendance. Students are expected to also reflect on the key learnings and see how they can be applied in their Business Projects, research topics of interest as well as in their daily jobs and classroom.</p> <p>このコースの主な目的は、国際学術会議に参加する経験を積むことにある。学生は、アカデミック・ペーパーを学会に提出し、発表する機会を得ることができる。International Conference Seminar Iと異なり、International Conference Seminar IIに登録する学生は、学会で研究発表を行う。帰国後、学生は出席したすべてのセッションについて、書面によるレポートを提出するとともに、会議セッションの出席が合計12.5時間を満たしていることが条件となる。学生はまた、学会で得た知識を自身の“キー・ラーニング”に反映するとともに、ビジネスプロジェクト、興味のある研究テーマだけでなく、日常の仕事やクラスで貢献することが期待されている。</p>	集中
	Case Study Practice	<p>The main aim of this seminar is to learn and practice the case-study method in-depth. This seminar is limited to a maximum of 4 four-student teams (16 students total), and priority is given to M2 students on a first-come first-serve basis.</p> <p>(9 Remy Magnier-Watanabe) Explanation of the case method Discussion on readings Case study presentations, feedback, and debriefing (7 Caroline Tan, 3 Takashi Hirai, 8 Aki Tonami, 12 Yi Zhu) Case study presentations, feedback, and debriefing</p> <p>このセミナーでは、ケーススタディの方法を綿密に学習し、実践することを主な目的とする。履修は、4名で構成される最大4つの学生チーム（合計16名）に制限されるが、履修の優先権は先着順でM2の学生に与えられる。</p> <p>(オムニバス方式/全5回)</p> <p>(9 MAGNIER USAGE MAGNIER-WATANABE REMY MARI/1回) ケースメソッドの説明、朗読の議論、ケーススタディのプレゼンテーション、フィードバック、および報告</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
		(7 CAROLINE TAN SUE LIN・3 平井孝志・8 礪波亜希・12 朱藝/各1回ずつ) ケーススタディのプレゼンテーション、フィードバック、および報告	
Seminar	Seminar I	<p>This is a group seminar. Seminar I consists of lectures given to introduce the basic skills needed for the Business Project, and of faculty introducing their research area. Seminar I consists of lectures given on three Saturdays in Spring B consisting of 1) faculty self-introductions and 2) alumni presentations of their Business Project experience. Students will be graded based on attendance and a report. Only regular MBA - IB faculty members are eligible to serve as Chief Advisors. Students are expected to think and assemble sufficient material to write a report about their intended Business Project. The report should identify 1) where the project lies within the four MBA - IB functional areas (Applied Information, Business Strategy, International Adaptability, Organizational Management), 2) the type of project (In - Company Project, Business Plan Development, Independent Research Report, Overseas Internship, or Japan Internship) and a brief description of its significance and purpose, and 3) learning from Seminar I.</p> <p>Seminar Iは、グループセミナーとして実施する。ビジネスプロジェクトに必要な基礎知識についての講義と、教員の研究領域の説明により構成される。通常はSpring Bの土曜3回にわたり実施され、1) 教員の自己紹介(研究領域の説明) および 2) 修了生のビジネスプロジェクトの経験についてのプレゼンテーションが行われる。成績は、学生が提出するレポートに基づき付与される。Seminar Iの終了後、Chief Advisorの決定プロセスに入っていくが、Chief Advisorを務めることができるのは、MBA-IBの専任教員のみである。学生は、自身の考えるビジネスプロジェクトについて、十分な材料を考慮し、レポートにまとめることが期待されている。レポートは、1) プロジェクトが4つの分野(応用情報、ビジネス戦略、国際適応性、組織管理) および、2) プロジェクトのタイプ(企業内プロジェクト、事業計画開発、独立研究型レポート、海外インターンシップ、国内インターンシップ) のどこに該当するのかを明記すると共に、3) Seminar Iで学習したことについての自分なりの考えをまとめなければならない。</p>	
	Seminar II	<p>Seminar II is conducted by the students' chief advisor, who will advise and help prepare students for their business project. The core focus is on narrowing down the theme of Business Project. The style of the seminars can include individual meetings, team workshops for readings, literature review, research methodology, and presentation rehearsal, all of which are intended to help students with their Preliminary and Interim Presentations and Reports. Seminars are a combination of group study and individual and team tutorials depending on how the chief advisor deems necessary and suitable.</p> <p>Seminar II は、学生がビジネスプロジェクトの準備をする中において、Chief Advisor による指導が行われる。この段階では、ビジネスプロジェクトのテーマを絞り込んでいくことが重要なポイントとなる。セミナーでは、個別のミーティング、チーム形式のワークショップ(輪読)、文献のレビュー、研究方法論の議論、および、プレゼンテーションのリハーサルを行うが、これらすべては、学生の Preliminary および Interim Report と Presentation をサポートするために実施される。セミナーは、Chief Advisor が必要かつ適切と判断する方法により、グループスタディや個人およびチームのチュートリアルを組み合わせで行う。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	Seminar III	<p>Seminar III is conducted by the students' chief advisor, who will advise and help prepare students for their business project. The core focus is on preparing for the upcoming preliminary presentation and report as well as the development of Business Project model and methodology. The style of the seminars can include individual meetings, team workshops for readings, literature review, research methodology, and presentation rehearsal, all of which are intended to help students with their Preliminary and Interim Presentations and Reports. Seminars are a combination of group study and individual and team tutorials depending on how the chief advisor deems necessary and suitable.</p> <p>Seminar III は、学生がビジネスプロジェクトの準備をする中において、Chief Advisor による指導が行われる。この段階では、ビジネスプロジェクトのモデルおよび方法論を発展させるとともに、3月に予定されている Preliminary Presentation およびレポートの準備をしていくことが重要なポイントとなる。セミナーでは、個別のミーティング、チーム形式のワークショップ（輪読）、文献のレビュー、研究方法論の議論、および、プレゼンテーションのリハーサルを行うが、これらすべては、学生の Preliminary および Interim Report と Presentation をサポートするために実施される。セミナーは、Chief Advisor が必要かつ適切と判断する方法により、グループスタディや個人およびチームのチュートリアルを組み合わせで行う。</p>	集中
	Seminar IV	<p>Seminar IV is conducted by the students' second advisor, who will advise and help prepare students for their business project. The core focus is on refining the Business Project model and methodology. The style of the seminars can include individual meetings, team workshops for readings, literature review, research methodology, and presentation rehearsal, all of which are intended to help students with their Interim and Final Presentations and Reports. Seminars are a combination of group study and individual and team tutorials depending on how the chief advisor deems necessary and suitable.</p> <p>Seminar IV は、学生がビジネスプロジェクトの準備をする中において、Chief Advisor による指導が行われる。この段階では、ビジネスプロジェクトのモデルおよび方法論の精練させることが重要なポイントとなる。セミナーでは、個別のミーティング、チーム形式のワークショップ（輪読）、文献のレビュー、研究方法論の議論、および、プレゼンテーションのリハーサルを行うが、これらすべては、学生の Interim および Final Report と Presentation をサポートするために実施される。セミナーは、Chief Advisor が必要かつ適切と判断する方法により、グループスタディや個人およびチームのチュートリアルを組み合わせで行う。</p>	集中
	Seminar V	<p>Seminar V is conducted by the students' chief advisor, who will advise and help prepare students for their business. The core focus is on refining the Business Project and prepare for the interim presentation. The style of the seminars can include individual meetings, team workshops for readings, literature review, research methodology, and presentation rehearsal, all of which are intended to help students with their Interim and Final Presentations and Reports. Seminars are a combination of group study and individual and team tutorials depending on how the chief advisor deems necessary and suitable.</p> <p>Seminar V は、学生がビジネスプロジェクトの準備をする中において、Chief Advisor による指導が行われる。この段階では、ビジネスプロジェクトを精練させ、Interim Presentation の準備を行うことが重要なポイントとなる。セミナーでは、個別のミーティング、チーム形式のワークショップ（輪読）、文献のレビュー、研究方法論の議論、および、プレゼンテーションのリハーサルを行うが、これらすべては、学生の Interim および Final Report と Presentation をサポートするために実施される。セミナーは、Chief Advisor が必要かつ適切と判断する方法により、グループスタディや個人およびチームのチュートリアルを組み合わせで行う。</p>	集中

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
Business Project	Business Project	<p>The Business Project is conducted in the student's final two terms, and is designed to integrate knowledge gained through lectures and seminars. The objective of the Business Project is to learn and apply practical business competencies, such as problem-solving and organizational management in actual business settings. Students at this stage would have completed one of the following:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) In - Company Project (ICP) 2) Business Plan Development (BPD) 3) Independent Research Report (IRR) 4) Overseas Internship (OI) 5) Japan Internship (JI) <p>Students are also required to present at the Final Presentation after they have passed the Interim Presentation and the Chief and Second Advisors have judged that requirements for all sections have been met. The presentataion time allocated is 20 minutes followed by a 10 min Q&A session.</p> <p>ビジネスプロジェクトは、最終2タームに渡り実施され、MBA-IBでの講義やセミナーを通じて得られた知識を総合するように設計されている。ビジネスプロジェクトの目的は、実際のビジネスにおいて必要となる、問題解決や組織管理などの実践的な能力を修得し、実際に活用することにある。この段階においては、次のいずれかのビジネスプロジェクトを完了していることが必要となる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 企業内プロジェクト (ICP) 2) 事業計画開発 (BPD) 3) 独立研究型レポート (IRR) 4) 海外インターンシップ (OI) 5) 国内インターンシップ (JI) <p>学生は、Interim Presentation に合格し、作成する Final Report のすべてのセクションが要件を満たしているか、Chief および Second Advisor が判断していることが、Final Presentation の実施要件となる。Final Presentataion の時間は20分間、その後に10分間の質疑応答を行う。</p>	集中